『渡邊海旭遺文集』

壺月全集

上卷

壺月全集刊行會

昭和七年二月撮影

故人の恩師ロイマン博士

在獨時代の故人

上下三千載、光華限りなく乾坤に盈ちて絢爛たる文化は東西遍く所に百花の芬芳を發き、縱横幾万里、德澤偏く羣萌を津潤して、甘露法の雨は到る所、信心の生靈を涵潤す。圓妙の至道、圓妙の極理、十方に通じ、三世を貫き、一切を包攝し、萬有を該羅す。大聖釋迦牟尼の真教、萬代に垂れし丈大なる哉。而して此至大絶妙の遺教を傳持宣揚するもの實に其が大藏經あり。是即ち八千餘巻、一億餘万語の一大叢書にして、その中宇宙の真諦を説き盡し、人生の歸趣を示し極め、百科の智識は悉く綜合融合して餘す所なく、修德信證を教ゆる要を究め、實を盡くしてあますなし。真に是人類智德の源泉にして、世界の一大宝庫たり。大藏の名ある洵に宜なりと云ふべし。此藏中の寸珠片璧も皆よく世を済ひ人を利するに足る。若全部の摩尼寶光を擧げて之を天下に公開し、その勝妙無上の大功德を、廣く世間に彰明せんか、即ち内には刻下沸騰混亂の惨状を呈する思想界の動亂を戡定して雄大の文化を現代に建設し、雄大堅實の人心を確立するに足り、外は以て世界に寛宏公明の大道を擴充して人道を増進し福祉を倍加せん。而して能く之が開擧宣布に當り得るもの

大正　年　月　日　　渡邊海旭用箋

原稿筆蹟　（大正新修大藏經刊行趣旨）（大正十二年四月）

絶筆。長逝三日前（一月廿三日）芝中學一校友の追悼會に寄せられたるもの。

病床よりの訓示。一月十七日芝中學生徒のために床上左の文を認めらる

（友人と食卓をかこめる故人）昭和六年三月十日於東京朝日新聞・中央箸を持てるが故人・順次右隣りへ荻野仲三郎氏
芝田徹心氏・柴田一能氏・高島米峯氏・近角常観氏・杉村廣太郎氏・有地紫芳氏・加藤咄堂氏・藤岡勝二氏

西光寺墓所

故人が平素居住せられし書齋（終焉の室）

凡例

渡邊海旭師は、昭和八年一月廿六日午前八時、自坊、東京市深川區御船藏前町西光寺に於て長逝せられた。越えて二月一日増上寺に於て本葬儀が營まれた頃、故人への離別を悼む人々より全集刊行を要望するの聲頻りに起り、玆に門下生等相議し、壺月全集刊行會を興し、直ちに同全集の刊行事務が着手された。

名聞のための營みを極度に排せられた故人に對し、又死後、全集が編まれる事を何等豫期せられなかつた故人に對し、突然斯樣な計劃を實行する事に就ては、刊行關係者として心情甚だ忸怩たるものあるを感ずるが、然し難生難値の人世、偶然にも同じ世に生れ合せた我等が、此の巨人の遺芳を蒐錄して後世に傳ふる事は、我等の光榮とする所であると共に、又必然の義務であると信じ、玆に此の全集の刊行を期する事となつたので、此の點故師に對し深く非禮を詫びると共に、江湖の諒恕を請ひ、併せて本全集の完璧を得るためその提撕協助を希ふ次第である。

此の上卷には故師が邦文唯一の著書たる『歐米の佛教』、及び淨土宗東京本校（宗教大學及大正大學の前身）卒業後渡歐迄、渡歐中、並に歸朝後現今に至る迄の三期に亘りものせられたる四十

目次

著述

研究論叢

六種の學術論文を輯錄した。晩年の故師は、大正十一年以降の大正新修大藏經その他數種の學的編纂の事業に當られた外學術論文としては殆んど發表されなかつた。唯晩年に於ける代表的講述とも云はるべき昭和七年八月高野山に於ける佛敎學協會の大會に「原始密敎の成立に就て」を、又同年五月日本宗敎學會大會に「守護童子經の研究」を發表せられたが、共に完全な筆錄を止めぬ事は遺憾である。尙飜譯論文或は幾分でも時論や講義風に亘るものは悉く之を下卷に讓つた。

本卷論文の掲載順は、執筆の年代を逐ふたが、同種類に屬するものは年代の如何に拘らず之を一所にまとめた。尙歐文著書並に論文も相當の量に達してゐるが、本全集には收めず、追て別の機會を俟つて刊行を企つる事とし、本卷の終りに目錄のみを掲げた。

本全集編纂に際し故師の遺墨等を提供貸與されたる方々に深謝の意を表すると共に、裝幀については故師と親交ありし結城素明畫伯がその名筆を揮はれ、特に上卷に對し丙午出版社高島米峰氏が『歐米の佛敎』を、又各雜誌社がその所載論文の轉載を快諾されたる事に對し、茲に厚く之を謝する次第である。

昭和八年四月

壺月全集刊行會

代表者識

歐米の佛敎

歐米の佛教序

大正二年の春、此稿丙午社佛教講義錄の一部として公刊せらるゝや、世界は猶花笑ひ鳥歌ひて昌平の和樂に鼓腹せり。假令、外交辭令の笑裡、時に甲兵を藏し、國際禮讓の紙脊、動もすれば火鐵を伏せしと雖、學界は悠々として自由の萬國交驩を娛み絃誦相應して共に文化人道の貢獻に力めたり。此小册子の若きも亦此當時樂事の片影を示す。然るに今再版の擧就るや、文華禮樂の人世は變して修羅鬪諍の魔鄕となり、屍山血海、前古比なきの慘禍を現じ、砲火毒煙、乾坤に充塡して、滿野鬼哭啾々の聲滿てり。此小著に名を列する碩學巨匠も憐むべし、此大亂に累せられて、或は流離困頓の悲に泣き、或は劍林刀樹の間に其生死だも知らず。白國の老匠、ヴレー、プサンは國破れて纔に身を以て英國に免れ、獨の天才、マツクスワレザーはハイデルベルグの講座を抛て、劍を執り起ち、或は其壯烈の陣歿を傳ふ。露の元老オルデンブルグ、俊才チエルバトスコイの如きも、革命の猛火、一たび露京に燃へてより鼎沸魚爛の渦中、杳として其消息を失す。此等の恨事、嗚呼何ぞ局らん。世界の學界は斯の如くして、今や全く交通を失ひ、友好を絕たれ、協同硏究の平和は、截然として一場の幻夢となりぬ。燈前舊稿を理め見れば、蕭條の秋空高く澄みて、陰風凄露、冷々として靜かに、片月獨り人間の興亡に閑せざるに似たり。

拙稿出て、已來五星霜、此間高島仁兄は屢促すに校訂再校を以てしぬ。稿者また竊に其志なきにあらず。希

教史としてはジョンストンの快著を見、日本佛教に就きても二三見るべき書出でたり。此等の業績新に之を當該下に挿入するを得ざるは實に讀者に對し學界に對して大慙大愧に堪へず。特に最後の一章を補續する能はざりしは、切實に遺憾となす所也。蓋しこの末章は本書より觀れば、直接主要の題目にあらずして、寧ろ研究結果の實際上、必然に發現したる傍系に屬すと雖、宗教研究の撮要にして、此信仰方面を度外に措くは、頗失當の擧に屬し、且つ戰時及戰後の世界思潮上特に注意を懈るべからざるもあれば也。望むらくは他日別に小冊を編して之を本稿の補遺となし、缺漏の罪を贖ふの時機の近きにあらんことを。

本書再刊は斯くの如くして殆ど未治半成の稿本を强て上梓したるもの、其完きを得ざるは論莫く、體を具へず、要を備へざるの重きは切に江湖の寛恕を請はざるを得ず。唯この不備の稿本を以てしてすら、泰西佛教研究の旺盛と深廣とは、略其一斑を了すべく、書を讀む邦人の一考を促す、必らず淺小ならざらんか。而して謂ふ、この萬國の協同聯合に就れる佛教の新研究は、漸次共自由寛容公明平和仁愛の教義を實際上に闡發し來り、單に講壇の翫索、學窓の嘆美に止まらずして、世界が迭相呑噬の戰禍に反省し、殘害殺戮の罪惡を中心に慚悔し來るとき、仁愛正義の光明坤輿を照灼して、世界平和の基礎となり、億兆和樂の源泉となりて、再たび人道文化の事業に協力し佛經に所謂『天下和順、日月淸明、風雨以時、災厲不起、國富民安、兵戈無用、崇德興仁、務修禮讓』の新天地の速に建設せらるる近きにあらんか。序に臨みて、謹で佛陀の照鑑を禱る。

くば前章後節、稍其文體を均齊にし、首尾一貫、聊か辭句を烹錬し、其冗を削り、繁を祛り、缺けたるを補ひ、短なるを續ぎ、紛雜を理め、蕪穢を刈り、又其資料を充實して、稿後雲の如く起れる新研究の網羅を試み、樸樕樗櫟、倖にして多少初學の資料に供するに至らんかと。而も稿者此間雜事の處理すべきもの蝟の如く集り、加ふるに生得の駑鈍を以てす。今唯四五の誤植を訂正するに止め、殆ど一字半句を刪補する能はずして、再び之を江湖に薦むるもの、厚顏寔に甚だしく、且つ慚愧自ら責むるもの酷だ切也。然るに强て之を剞劂に煩はして、靦然たる所以は、一に高島仁兄の指命に依賴する所あれば也。稿者はその三十年の同志の勸誘に固辭するの言なくして、亦之が爲に多少の自信を生じ得たるを自白せざるを得ず。卽別に內容を新にせず、閒花野草、束ねて之を吾が畏友の採擇に一任したり。

稿者が荒怠放漫の五年間、學藝の長流は戰禍の間、猶奔流駛注して熄まず雄觀の見るべき少からず。本書の研究題目の如きも、此潮流に乘じて、特に一脈の清波を揚げたり。其二三の例を擧げんか。西域佛敎の研究に於ては、レコツクの高昌古美術に關する大著、燉煌古文書に就きてのペリオ、シヤヴンヌ、ヘルンル等の偉大なる業績出て、露のオルデンブルグ等亦庬然たる快著を公にせり、パーリ佛典の研究は益進みて、長阿含の刊行其飜譯と共に完了し至難の論部カタヷツトーの如きも其英譯の公刊を見るに至りたり。佛敎史跡確定は英米の學者此間大に努力する所あり、新研究の特記すべきもの多く、華氏城・那爛陀等の故趾漸くにして彰明を得たり。印度美術史に關してはスミスの大著現はれ、支那古美術はシヤヴンヌの光彩陸離たる雄編あり、禹域佛

歐米の佛教 目次

大正七年十月二十一日

關西客中、大阪上宮中學校に於て

渡邊海旭識

歐米の佛敎

總説

一　三國佛教と歐米の佛教　歐米の佛敎と申すと、此講錄に出る日本唐天竺――卽三國傳來の善光寺如來とか三國傳通緣起とか云ふ、この三國の佛敎とは大分意義が違ふ、所謂三國の佛敎では、阿育大王の勅碑も出れば、五臺山の有難い事や、高野山本願寺といふ樣な大伽藍も出る、卽ち敎會史的若くは敎理史の佛敎で、一言で云へば傳道と信仰の佛敎である、然るに歐米の佛敎と來ると、なる程、一面では布哇には淨土宗や西本願寺が盛に活動して、立派な女學校や中學程度の敎育機關も具備されて居る、一歩米國に入ると桑港初め各地に佛敎會堂が見られる、此等は勿論日本人間の傳道であるとしても、歐洲では隨分熱心な佛敎信徒がある、アーナンダメッテーヤ（歡喜慈）や、ニヤーチロカ（智燈）などと、立派に法名を付けた碧眼の大入道が、剃髪染衣の御姿で納まりかへつて御座る、瑞伊の境、風光明媚なコモの湖の畔には、佛敎の修道院が出來る、ロンドンには學者や軍人などの立てた眞摯な佛敎會がある、プングスト博士の樣な、工場主で到る處釋尊の爲に氣焰を擧ぐる一種の傳道家もあれば、基敎徒の迫害中に厭くまでも、苦戰惡鬪を續けつゝある健げなライプチヒ佛敎會の同志もある、而して更に之を思想上から大觀すると、現時歐洲哲學に於ける佛敎の間接影響は、如何しても打算上除外することが

は、抑も大國民の估劵に關はるといふものだ、藝苑の神女を以て渇仰さるゝサラ、ベルナーは別としても、ディスチンやファーラー等の嬌名が、漸く藝壇の一隅に喋々さるゝ様になつた、吾國で思想上將た歴史上、吾國と最關係の深い佛敎の歐洲研究家の姓名丈でもせめては、一つや二つは記憶してもよからう、東洋學の爲に英國國會を動かした碩學リス、デギッヅに學者の威厳を尊び、于闐發掘の大探検家、マルコ、アウレロ、スタインに不屈堅忍の大精神を學ぶことは、少くとも敎育ある吾國紳士貴女たるべき人の必須的の、たしなみでなからうか、埃及博覽會が極めて小規模ながら一部識者に多大の隨喜を買つた今日、何故吾が國民はもつとアヂヤンタの壁畫や、于闐高昌の古經斷片に注意する様にならぬのだらう。

吾國は今や確に東洋の中心點になつた、此威厳からしても東洋の文藝研究丈でも、獨立の研究を行ふべき責任がある、然るに支那文藝や歴史の研究すら、少し複雜して來ると横文字の御厄介になる狀態である、一寸川岸が變つて回訖などゝなるとラドルフ、サーレマン、ミユーラー等の御世話にならねば寸歩も自ら致す能はざる憫れむべき狀態である、東洋の覇者世界の一等國は斯の如くして學問上の獨立全然存在せず、其實學藝の商品を歐米の問屋若くは仲買から仰ぐ薄資の小賣商人の觀がある、憫れむべき夫の哲學は勿論、多少は創意や發明の譽ある、醫學や理學諸科でも此奴隷的狀態は未だ全く解脫するに至らぬ、而して東洋學、特に佛敎學の方面には此憐れむべき狀態は實に一層悲慘なものである、パーリでも梵語でも、考古學でも歴史でも、吾國佛敎學の前途實に前途遼遠である、吾々國民、特に佛敎に關係を有し同情趣味を有する人々は、此現勢に對し、今や慷慨一番猛然奮起

出來なくなつて來た。さり乍らこれは尙一部分極めて局られた現象で、實際上敎會史として光輝を發するのは今後十年の未來を待たねばなるまい、卽歐洲の佛敎は、大學敎室の佛敎だ、專門家や研究家の書齋佛敎だ、くだけた處で社交家や藝術家のサロン佛敎位であらう、要之、歐洲の佛敎は批評と研究の佛敎である、此講義錄では此批評と研究の歷史と現狀とを撮みて、何處まで歐米の佛敎に對する調査が進みて居るかを大觀する積りである、其藝術や歷史や地理や敎理や、聖典に關してどの位重要貴重な資料の蒐集が出來、整理が出來たかを概見するのである、然し本講義錄は之と共にまた此研究の結果思想上に與へた影響や、實際仰信の勢力となつた實狀をも出來得る限り注意して、遁がさぬ事とする。

二　歐米の佛敎研究を講學する必要　必要でなければ何物も成立せぬといふ餘りに物質的な野暮な功利說(ユーテリタリアニズム)は、今は一寸古くなつたが、此三竏何合といふ高い米の世の中で、對岸の火災ならまだしも佛敎といふ樣な古い古いものゝ研究なぞはと直ぐ此講義錄は骨董扱にされて仕舞だらう、されても致方もないが、遠くオリンピックの競技に、縱令物にならぬまでも飛び出す程、頗る萬國的となつた吾國民は、何ぞと云ふと直ぐ西洋と來る、飛行術の談が出れば、直ぐツェツペリン伯、科學ではキューレ夫人やメチニコフ、思想界では流行のオイケン、ベルグソンは勿論、新しきに趨る文藝の方面にてはハウプトマンや、アンドレエフも既に古くなつたとあつて何でも强烈な刺擊と云ふ所か、オスカル、ワイルドも盛が過ぎそろ／＼フランツ、エデキンドあたりに來た樣だ、かゝる萬國的思潮の橫流する吾國で、今や確に世界的の一大學術となつて居る佛敎學(ブドロジー)の現狀如何を全然知らぬと有りて

ン大學の圖書館に收藏され、二三蒙古語聖典の出版すらあつた、而して一面盛に西藏研究を奬勵して、弘化二年といふ七昔、佛教因果譚の寶藏西藏譯の賢愚經は露人に依りて獨逸譯が出來、今に學者の參考になつて居る露人はかくの如くして喇嘛僧を懷柔し撫順して漸次之を自家藥籠中のものとし、寸を得て寸、尺を得て尺、遂に蒙古を今日の狀態に化了したのである、新政黨を組織せらるゝ公爵樣も吾國では必要でもあらう、而し永く蒙古に遊び佛教研究に同情を有し重要なる佛像佛畫の蒐集に努力した、ウクトムスキー公の如き遠大の眼識ある大官人を、せめて一人や二人は欲しいものである、而して此東方經營の自覺上、歐米の佛教研究は吾々に幾多の鞭撻を與へ前進を敎へて呉れる、此方面から見ると此講習は決して悠長至極のものでなく、寧ろ、政治家實業家經世家などいふ實世界の人々が確に一指を此寶鼎中に染むべき責あるものとなつて來る、昔しは碩學マクスミューラー印度研究の必要を英國の上流識者に呼號し其名著『印度は何を吾々に敎ゆるか』に滿腔の熱火を吐いた近時佛教聖典蒐集の功勞者セシル、ベンドールは其ケムブリッヂ大學教授就職に當り漸く印度學研究に冷淡となれる英國の上下を警策して、大々的の氣焰を擧げた、今や吾國の識者財產家所有る教育ある階級に向ふて歐米學者の佛教研究に向ふて眼を開けと呼號することは、印度の統治發展上マ博士ベン教授が獅子吼したると同じく、東方の經綸上、實に止むべからざる苦言として見て頂きたいものだ。

　國民が對外經綸の自覺と共に、世界人文の貢獻といふ大抱負は、次で起るべき問題であらう、此問題から見て、歐米の佛教を觀察することは、極めて重要な第一歩であらう、見よ、佛教と世界思潮とは今如何なる關係である

して自己の位置を顧るべき必要がある、古人は臥榻の下、他人の鼾睡を容さずと言つたが、今の日本は自己佛教學研究の臥床を、全く歐米人に明け渡して、雷の如き鼾聲を發せしめ、自己は薄寒い室の一隅に畏る〳〵命令を待つといふ憐れむべき狀態である、かく歷史から見ても、思想から論じても當然世界に闊步すべき位置にある吾國の佛教學は、今の所、光榮ある戰役で打勝つた露西亞よりも數等劣つて居る、近くは南條博士がケルヌ教授と合同公刊した妙法蓮華經の梵本は、實に露國學士院付屬の大乘佛典出版會から出たのではないか、南條老博士が吾國の東洋學微々たる勢力の中に、かく世界的事業をされたのは痛快である、然し法華の樣な至重至上の大乘聖典原本が、外國で第一に出版されたのは實に恥辱を感ぜざる譯に行くまいと思ふ、單に法華ばかりではない、露國が佛教研究の眞摯で且つ堅實なことは驚くべきものがある、吾々は之に對して、尙袖手傍觀すべきであらうか、此所で歐米佛教研究の講學は少くとも吾國民、吾々佛教徒に必らず一種の激勵を與へよう、吾國が思想の眞自由學問の獨立に向ふて最も適切で且つ手近な努力を鼓吹するだらう。

學問上の獨立と共に、歐米佛教研究の講學は確に東方經營に對する國民的の自覺を痛切に教示する、今の政客は三人寄れば、直に吾國の外交無能を攻擊する、蒙古に對する露人の辣腕を羨望する、然し露人の蒙古經營は、決して一朝一夕のことでない、其宗教言語風俗に關する根本研究は實に遠くして且つ至れるものがある、現今の蒙古に於ける露國の成功は、確に此根本研究が直接間接に其原因をなし其鼓舞をなしたに外ならぬ、吾々が尙生れぬ前に露人は早くも蒙獨字典や蒙古文法を製作し、『蒙古源流』の獨逸譯を公刊し、幾多の蒙古佛教聖典はカザ

する新曲を作つたことを得々と衒氣で友人に談す科白もある、佛教趣味が、今どの點まで進みつゝあるかは此一つで判らう、トルストイの原始基督教や無抵抗主義が佛教的であること、ベルグソン哲學の背景には朧氣ながら佛教主義が認めらるゝことは、識者は大抵認めて居る、而して『カントに復れ』といふ哲學界の呼號は、今や漸く『佛陀へ佛陀へ』との兆候すら見る、斯して實際信仰としての佛教の要求は、豫想の外に大きく、佛教に關する新刊書は英獨佛とも通俗ものが斷へず書店に出る、だからこの大勢に備ふる軍略として基督教家が佛教研究の盛なるは驚くべき程で、隨分酷烈な攻擊的批評の著作も、屢書物屋の店頭に現はれる、マックス、シュライバルの書いた小冊子『佛陀及婦人』は此一例とすべきものであつて、思ひ切つて佛教の婦人虐待を論じ、其文明價値を冷酷に批評して居る、基督教徒にありては實に思ひ付きの書物であらう、歐洲の大勢旣に此の如しとすれば、日本に於ける思想家文藝家として、世界的の貢獻をなさんとするには、佛教に關する研究や創作の發表が最も適切で、且つ有利な捷徑であらう、唯識論でも起信論でも充分に咀嚼し體得して、之を近世的に叙述することの出來る腕のある學者が、若し吾國にあつたとすれば、世界は其人を歡迎することが吾々が、オイケンやベルグソンを歡迎する已上の待遇を受け得られやう、去歲白玉樓中の人となつた故元良教授は、唯識論の研究に隨分苦心されて心理學上新しい飛躍を歐洲の學界に試むる壯圖があつたと聞いて居る、あゝ此壯圖、此壯圖に奮はんと欲するの士には乞ふ先づ歐米佛教の研究が那邊まで進步せるやを大觀する必要が切實に存するではないか。

籍を佛教に置く人佛教專門の學者にありては、此講習の必要は、唯目下頭燃を拂ふが如く迫り來つて居ると言

か、古き所でショウペンハウエルが印度思想を倩ひ、來りて、歐洲哲學史の新生面を開きたるは云ふまでもなく、藝術の方面に及びて、大詩聖ゲーテが印度名曲シヤクンタラーを嘆賞し、其一代の傑作ファウストの構造が、全然梵土戲曲の製作法を加味したることも人の知る所、ハイネの詩中に大史詩マハーブハーラタの譚を取るなど、印度思想が歐洲に浸染すると共に、佛教教義は此所に彼所に種々の影響を與へ、ショウペンハウエルに哲學的基礎を得た大樂聖リヒヤード、ワグネルは其樂界革命の大業を成就する傍ら、佛教の研究に力め、瑞西に『トリスタン』を起稿する際、キヨツペンの名著『佛陀の宗教』—安政四年版！—を耽讀した感想を其意中の人エーゼンドンク夫人マチルデに書き送つて居る、ワグネル晩年の大作に佛教色彩が著く映るのも偶然ではない、實際信仰の方面から見ると獨逸建國當時鐵血宰相ビスマークが才幹ある人として讃美重用した普國の高等官、テオドル、シユルツエは『未來の宗教』を書いて堂々基督教の凋落を論斷し、之に代るべきものとして、吠檀多の哲理と佛教の實行とを結合して新宗教を立つべきを大膽に告白した、これは今から四十年前の話であるが、此傾向は佛教研究の發達と共に益增大し來り、光琳の畫風がパリで新しき裝飾畫風を作りて所謂新藝術式（アール、ヌーボー）が一時歐洲を風靡したと同じく、東洋の思想は今や滔々たる潮勢を造り、歐洲の思想海に絕へず新しい渦や流を生じて居る、而して此潮勢の中其有力なるは確に佛教のそれであらう、これも流の一の藝術には新しい試として絕へず佛教から材料を取らうと力める、獨逸ヘツセン大公殿下が其宮園に佛像を鑄造安置されたのは、一時頑固連中の囂々たる議論さへ惹き起した、が、エデンキンドの戲曲を見ると、其登場の人物中、新文士といふ風の男が『嗟嘛喇嘛』と題

内容紹介をするのだが、これも必要で親切に行はれたら初學者に非常の便利となるが、內容に研究事項が甲と乙とで重複したり、單に叙述のみで批評を加へねば往々惑亂を生ぜぬとも限らず、且つ著作でなく而も之と同等若くは已上の價値も時には之ある原本出版といふ重要な功績を浼す恐もあるのみならず、叙述が平板に陷りて讀者が可成迷惑するから是も今は取ることが出來ぬ、依りて止むを得ず、大略左の様な內容分類的で研究結果を叙述し、各章下では其研究事項をなるべく年代的に陳列し、且つ出來得る限りは其代表的の人物の學歷や性格も此間に雜へ、重要なる著作の梗概をも解說して見る豫定である、塵事紛雜、常に書卷に親むことの出來ぬ私に、果して豫定通りの進行が出來得るかどうか、今から私に疑惧する次第ではあるが、交友二十年の同志米峰兄が奮闘し惡戰して成効し得た事業記念の祝賀に聊か微衷を表して、甚拙劣粗漏ではあらうが、一篇の祝賀(フェストシュリフト)文のつもりで此貧弱な講錄を起草し、出來得る丈は愚直に勉强して却後一年間、讀者諸賢に見へよう。

第一章　パーリ聖典の研究　附　錫蘭、緬甸、暹羅佛教

第二章　梵語佛教聖典の研究　附　尼波羅其他に於ける印度佛教

第三章　支那佛教の研究　附　日本及朝鮮佛教

第四章　西藏佛教の研究　附　蒙古及滿洲に於ける喇嘛教

第五章　印度學研究上の佛教

第六章　西域發掘の佛教

へば、他語の呶々を費さず充分だ。

三　歐米佛敎研究の分類

約一百年に亘りて研究された歐米佛敎の研究は、叙述上之が分類を行ふにつき頗る困難を感ずる、ずつと古い所でパリで法華經の佛譯が出れば、コロンボで佛敎大歷史の英譯が公表される、西藏の研究が盛に始まると共に、印度の發掘がどし〳〵進捗して、碑銘や刻文の調査が雨の如く報告される、近くは于闐の發掘が纔に終ると、直ぐ高昌の掘り出しものが世人を驚かすと云ふ風に、重要な事件は暮去朝來、連續して起り殆ど應接に遑なき觀がある、されば此等を一切編年史的に叙述するのも便利の一法であらう、然し之は隨分復雜な記事を生ずる、卽ち數年に亘る出版とか、發掘事業とかの記載は讀者に餘程倦厭を生ぜしめる、のみならず、此編年體はお寺の過去帳みた樣に趣味索然蠟を嚼むの憾が。兎角免れ難いものである、夫ならば列傳體はどうであらうか、これも面白い方法である、ファウスベル傳、ケルヌ傳、ビュルヌフ傳など敎訓に富み、趣味饒くして且つ碩學天才の功績を充分に贊揚することが出來る、斯道の元老リス、デギヅ老敎授を共美にして賢、淵博の學殖ありて而も縱橫の才幹に富む夫人カロリンと合傳することなぞは、隨分色彩に富むだ艶史的傳奇の筆も、揮へる人には隨分繡鸞刺鳳の靈腕が揮へよう、然し之には資料の蒐集に餘程の時間と精力とを要し、圖書館の貧しい吾國では到底面白いものも出來ないと諦めねばなるまい、最後に名著梗槪的に代表的の著作を擇び、チヨーマの『西藏經典解題』とか、ビュルヌーフの『印度佛敎史序論』とか、ケルヌの『佛敎槪論』とか、グリュンエーデルの『高昌發掘報告書』とか、ベンドールの『ケンブリヂ佛敎聖典目錄』とか、一通り大要を撮みて、

として方等部の諸經など精細に研究して或點に來ると全く其境界線が取れる、矧んや南北兩系と云ふ様な地理的の區分は一時の便宜で、要するに概觀的の區分法に過ぎぬ、卽現に北方佛教の中にて小乘有部の戒律が西藏にも日本にも現に行はれ、錫蘭佛教徒が尊重する律藏の注釋善見（サマンタパーサディ）論の如きも今漢譯藏經中に存在し小乘教義も絕へず學徒の間に研究される、而して南方の錫蘭には嘗て大乘教特に密教が盛に行はれた歷史さへある、故に一時は公認的のものとして取扱はれた此地理的區分も今は異論を唱へる學者が少くない、聖典語の區分もまた之と同じく四阿含や法句經の梵語原文の斷片が少からず中央亞細亞から發掘される今日、單に小乘教をパーリ佛教といふことは出來なくなつた又夫の大乘諸經典も其初めは一種の方言で記載されてあつたのを後代梵語に直したもので、其痕跡は法華にも華嚴にも偈頌の中に歷々として見へ、般若の如き全體正雅の梵語で書かれて居る、經文も其原始的の形態に於ては方言で書いてあつたといふ傳說さへある、されば大乘佛教を直に梵語佛教と稱することは其實不適當たるを免れぬ、然し今は大體の便宜上から小乘教を其聖典語から概觀的に之をパーリ佛教と看做して本章に其一般の研究大勢を叙述し、大乘教を之と同樣原本が多分梵語だから假に之を梵語佛教とし次の章に其聖典の研究に就き略述しようと思ふ。

二　パーリと梵語　印度文學の用語を二種に區別することが出來る、第一は雅語で之を Saṃskrit といふ、卽普通所謂梵語である、サムスクリツトといふ語は正しく造られたる準備せられたる等の意義を有し、高尙、完全、純粹、神聖なる言語といふことである、之に對して第二は俗語 Prakrit 原始、自然、普通、卑俗等を意味し卑

第壹章　パーリ聖典の研究　附　錫蘭、緬甸、暹羅佛教

一　佛教聖典の二大系統

通途佛教を教理上から分類すると大乘と小乘の二大教系となるが、その大乘佛教は現在吾國を初めとし西藏蒙古滿洲には猶强固の根據を有し、支那や朝鮮にも强弩の末勢ながら幾多の寺院を殘し、印度の尼波羅及其附近の諸小國にも昔時の俤だけは留めて居る、かく大乘佛教は北方の諸國に流通しつゝあるに對して、小乘佛教は南海の美はしき島の錫蘭より後印度の暹羅緬甸等南方に其教勢を張る、此地理的の關係から歐洲の佛教學者は普通に佛教を南北兩系に分ける、而して南方小乘教徒の尊奉する四阿含經とか法句經とか若くは本生經とか云ふものは悉くパーリ語で書いてある、之に反して北方大乘教徒所依の聖典、法華、般若、華嚴或は淨土、密教の經典は梵語――佛教梵語――で記されてある、故に聖典語の方面から見れば小乘教はパーリ佛教で大乘教は卽梵語佛教であると云へる。

然し若し精密に論ずるときは根本の大小兩乘の區分すら、起信論と倶舍論と云ふ樣な兩極の明確なるものは別

岸に位する大陸の國案陀羅(アンドハラ)或は羯陵伽(カリンガ)から經典が來たのに基くだらう、此說に依るとパーリ語は羯陵伽(カリンガ)地方の方言であつたことになる。然るにギンデイツシュ E. Windish は第十四萬國東洋學會に『パーリの言語的性質』と題する一大講演をなし前に略述したフランケやオルデンベルヒの說を縱横に評破し、種々の點から論證して、結局パーリはウツジヤイニーとかカリンガとか云ふ一地方に局つた純粹の方言ではない、其實一種の混成語である、卽摩竭陀の古方言を基礎として他の諸地方語の特點が加味され鹽梅されて大成したる一種の混成方言である、故に何れの方言にも共通の點を有し、各地何れの處に至りても自由に且つ容易に之を了解し得る便利がある、佛敎の傳道史から考へると斯の如き混成語は實際上頗る切要であつたので、恐く佛陀御自身に於て此摩竭陀方言の形式體系を借りて而も其發音や文法に著しく他方言の影響して出來た各地共通の便利な語を必要上御取りになつたとも思はれる、此便利上の混成語が時代と共に發達して完全な文學的の言語となつたのが卽パーリである、故に一見摩竭陀語とは全然差異するも細密に之を吟味するとパーリには幾多摩竭陀語の特點を明に殘留することを發見するギンデシツシュは斯の如く一面に於ては他の諸碩學が全然拋棄して顧みざりし摩哂陀(マヒンダ)開敎の錫蘭古傳說に重きを置くと共に他面には餘程細心の注意をパーリ語の性質に拂つて、穩健な論證を立てた。

パーリ語成立に關するギンデイシュ教授の說が果して最後の鐵案であるか否かは今之を確言することは出來ぬとし、假にフランケ氏やオルデンベルヒ博士の說く如く或る地方の一方言としても兎に角パーリは復雜な發達を閱して出來たもので決して單純なものでないこと丈は明了である、現に法句經(ダムマパダ)や經(スッタニパータ)集の樣な古代聖典のパー

俗なる民間語若くは方言のことになる、パーリは此第二の俗語の一種で順序、齋整等の元義から轉じて聖典語の意味に用ゆるが、但し此名は比較的近代の命名で古代の文書には勿論其名が見へぬ、而してパーリが源何處の方言なりしかに就きては學者間に頗る異論がある。

錫蘭佛敎徒の所傳に依ると佛陀は常に摩竭陀國語 Māgadhi を以て說法せられた、滅後に諸大弟子が此方言を傳々口授して終に之を筆錄するに至り玆に同島に傳はる聖典が成立したと說いて居る、若此所傳が正當なればパーリ語は正に摩竭陀國の古方言であることになる、成程佛陀は同時代若くは已前に出現した宗敎改革家其一例を云へばジャイナ敎祖のマハーギーラの如く確に方言俗語を利用して民間に傳道されたらう、然し單に摩竭陀方言のみを以て御說法があつたとするのは、當時の事情上から見て頗る疑ふべきのみならず、實際現在のパーリを印度戲曲や刻文などに見ゆる純粹の摩竭陀方言と比較すると著しく相違する點を認める、故にパーリが純然たる摩竭陀方言でないことは確である、然らば何處の方語なりしかと云ふに、フランケ Franke は刻文や古錢などから一の假定を立て、多分パーリは Mathurā（マツラー） 今の Muttra の南方より Vindya（ボンドフヤ） 山脈の西方に及びて其の根源を求むべく、Ujjayinī（ウツジャイニー） が此方言の中心なるべしと說いた、勿論之には歷史的の根據もあるので夫の錫蘭に佛敎を傳へた阿育王子摩哂陀（マヒンダ）は實にウツジャイニーに生れた人である、されば無論同地方の方言で三藏を傳持したに相違ないことになる、然るにオルデンベルヒ H. Oldenberg 氏は其律部公刊の序文に於て立論するには第一に夫の阿育王子が錫蘭開敎の話は恐くは架空の小說に過ぎぬのであつて、其實印度佛敎の錫蘭に傳はつたのは其最近の南

に最も適切であるから先此文を擧げて次で現在の經典註疏に付き表を作つて見よう。

問曰　何謂二三藏一、答曰、毘尼藏・修多羅藏・阿毘曇藏是名二三藏一、問曰、何謂二毘尼藏一、二波羅提木叉・二十三蹇陀波利婆羅、是名二毘尼藏一、問曰、何謂二修多羅藏一、答曰、梵網經爲レ初、四十四修多羅、悉入二長阿含一、初根、牟羅波利耶二百五十二修多羅悉入二中阿含一、烏伽多羅阿婆陀那爲レ初、七千七百六十二修多羅、悉入二僧述多一、折多波利耶陀那修多羅爲レ初、九千五百十七修多羅、悉入二鴦掘多羅一、法句喩・嗢陀那・伊諦佛多伽・尼波多・毘摩那・卑多・涕羅涕利伽陀・本生・尼涕娑・波致參毘陀・佛種姓經・若用レ藏者、破作二十四分一悉入二屈陀迦一此是名二修多羅藏一、問曰、何謂二阿毘曇藏一、答曰、法僧伽・毘崩伽・陀兜迦他・耶摩迦・鉢叉・逼伽羅坋那抵・迦他跋偷此是阿毘曇藏、

先づ律藏 Vinaya-piṭaka から現存聖典を見ると五大部分になつて居る、一、Pārājika（波羅夷）二、Pācittiya（波逸提）、三、Mahāvagga（大品）、四、Cullavagga（小品）、五、Parivāra で（眷屬）で僧尼の規律制禁、教會の法律條規を定めたる法典及施行細則である、次に經藏 Suttanta-piṭaka は前記善見律記載の如く五大部分に分れ、各部多數の經典を包含して居る、此等經典の數は善見律記載とは頗差異する、特に雜阿と增一とは著しく經數が減じて居るが、是は畢竟計算法の差から來たので、現存の一經を更に之を數經に分つたからである、長阿四十四の四は三の寫誤、中阿二百五十二の二は錯揷と見ると現藏の數と符合する、各阿含の首經は精密に合つて居る。

りを本生經（ジャータカ）の新しい部分や諸種の註疏歴史などと比較すると其語も文法も文體も著しく異なるのを認める、即原始的の形體に於ては素朴にして亂雜なりしものが次第に精錬せられ整理せられ彫琢されて完美のものに發達し、遂に立派な文學的言語、統一的な教會聖語となつたことを明かに示して居る、此點に於てはパーリはジャイナ聖語に比して頗る特色を有する、ジャイナ教も佛教と同じく方言を利用して經典を筆錄したのは同一であるが、佛教徒の如く方言を精錬し彫琢するの傾向甚だ發達せず、其語は著しく古代素朴の俤を留め、また方言も二種を使用して古代聖典は半摩竭陀語と稱する一種の語で書かれ、註疏や史傳の如きはマハーラシトユラ（今のマーラツタ地方）方言の一種を使用して居る、即ち聖語に佛教の如き統一がない。

此パーリ語の聖典は錫蘭佛教の聖史 Dīpavaṃsa（ディーパヴムサ） に依ると、耶蘇紀元前八十八年に即位した佛法興隆の英主無畏ワツタガーマニ（Abhaya-Vaṭṭagāmaṇi） 王の朝に摩訶毘訶羅（マハーキヘーラ）大寺院で結集筆錄されたもので、從來口授暗誦に依り傳へたる聖典が漸く記憶の遺漏や混亂を生じ來りたるを禦がんが爲であつた、其後東晉の時支那で覺賢や法顯が譯經事業に奮勵した時、恰も錫蘭には同島佛教中興の祖師として崇むべき偉人覺音 Buddhaghosa（ブツドハゴホーシヤ） 出現してパーリ語を以て浩瀚なる三藏の註疏を製作し、玆にパーリ聖典の大成を見たのである、下に一寸其內容を概觀しよう。

三、パーリ聖典　パリー聖典內容に就きては漢譯善見律毘婆沙の中に頗る重要な記載がある、此書は北齊時代の飜譯で且原本は前に一寸述べた如くパーリ律藏の註疏である、當時既に整然たる三藏が存在したことを證する

第三　雜阿含（僧述多）

Samyutta-Nikāya

品	相應		相應		計
一、Sagātha-vaggo 有偈品	一、Deva-samyutta	天——八一經。	七、Brāhmaṇa	婆羅門—二二經	271
	二、Devaputta-〃	天子——三〇〃。	八、Vangīsa	婆耆沙—一二〃	
	三、Kosala-〃	拘薩羅—二五〃。	九、Vana	林——一四〃	
	四、Māra-〃	魔——二五〃。	十、Yakkha	夜叉——一二〃	
	五、Bikkhunī-〃	比丘尼—一〇〃。	十一、Sakka	帝釋——二五〃	
	六、Brahma-〃	梵天——一五〃。			
二、Nidāna-vaggo 因緣品	一、Nidāna	因緣——九三經。	六、Lābhasakkāra	得好遇—四三經	286
	二、Abhisamaya	現觀——一一〃。	七、Rāhula	羅睺羅—二二〃	
	三、Dhātu	界——三九〃。	八、Lakkhaṇa	相——二一〃	
	四、Anamatagga	無始——二〇〃。	九、Opamma	譬喩——一二〃	
	五、Kassapa	迦葉——一三〃。	十、Bhikku	比丘——一二〃	
三、Khandha-vaggo 蘊品	一、Khandha	蘊——一五三經。	八、Nāga	龍——五〇〃	733
	二、Rādha	羅陀——四六〃。	九、Supanna	金翅——四六〃	
	三、Diṭṭhi	見——一一四〃。	十、Gandhabba	建達婆一一二〃	
	四、Okkantika	入——一〇〃。	十一、Valāha	雲——五七〃	
	五、Uppāda	生——一三〃。	十二、Vacchagotta	婆差種—五五〃	
	六、Kilesa	煩惱——一〇〃。	十三、Jhāna	禪定——五五〃	
	七、Sāliputta	舍利弗—一〇〃。			
四、Saḷāyatana-vaggo 六處品	一、Saḷāyatana	六處—二〇七經。	六、Moggalana	目連——一一經	391
	二、Vedanā	三受——二九〃。	七、Citta	心——一〇〃	
	三、Mātugāma	女性——三四〃。	八、Gāmani	村主——一三〃	
	四、Jambhukhādaka	閻浮車—一六〃。	九、Asankhata	無爲——四四〃	
	五、Sāmaṇḍaka	沙漫陀迦一六〃。	十、Avyākata	不可說—一一〃	
五、Mahā-vaggo 大品	一、Magga	道——一八〇經。	七、Iddhipāda	神足—一八六經	1208
	二、Bojjhanga	覺分—一八七〃。	八、Anuruddha	阿㝹樓陀二四〃	
	三、Satipaṭṭhāna	念處—一〇三〃。	九、Jhāna	禪——五四〃	
	四、Indriya	根——一八五〃。	十、Ānāpāna	安般——二〇〃	
	五、Sammappadhāna	正斷—五四〇〃。	十一、Sotāpatti	須陀洹—七四〃	
	六、Bala	力——一一〇〃。	十二、Sacca	四諦—一三一〃	

二千八百八十九經

第一長阿含 Digha-Nikāya
- 一 Sīlakhandha-vagga 梵蘊品——戒網經已下十三經 1—13
- 二 Mahāvagga 大　品——大本經已下十經 14—24
- 三 Pādhiyavagga 當學品——阿㝹炎經已下十一經 25—54

……三十四經

第二中阿含 Majjhima-Nikāya
- 一 Mūla-paṇṇāsa 根本五十經
  - 第一品 根本說 Mūlapariyāya 十經 1—10
  - 第二品 獅子吼 sīhanāda 十經11—20
  - 第三品 譬喩法 Opamadhamma 十經21—30
  - 第四品 大　雙 Mahāyamaka 十經31—40
  - 第五品 小　雙 Cūḷayamaka 十經41—50
- 二 Majjhima-paṇṇāsa 中(篇)五十經
  - 第六品 長　者 Gahapati 十經51—60
  - 第七品 比丘 Bikkhu 十經61—70
  - 第八品 出　家 Paribbājaka 十經71—80
  - 第九品 國　生 Rājā 十經81—90
  - 第十品 婆羅門 Brahmaṇa 十經91—100
- 三 Upari-paṇṇāsa 上(篇)五十經
  - 第十一品 天　示 Devadaha 十經101—110
  - 第十二品 不　生 Anupada 十經111—120
  - 第十三品 空 Suññata 十經121—130
  - 第十四品 分　別 Vibhanga 十二經131—142
  - 第十五品 六　處 Saḷāyatana 十二經143—152

一百五十二經

可成に面倒な表ではあるが、四阿含は原始佛敎の根本聖典でもあるから、何かの場合に參考にもならうかと、聊か手數をかけたまでだ。

四阿含の外に小部經藏 Khuddaka-Nikāya がある、前の四大部の經藏に對して之を小部と稱したのである、或派では之を第五の阿含とする、此小部藏の中には頗重要な聖典類を收め、聖典史の方からいふと寧ろ大部阿含よりも古い貴重のものさへある、善見律の記載には『破作十四分』卽分つと十四になるとあるが、其名は十二しか擧げてない現在のパーリ三藏には十五部ある其名目左の通り

一 Khuddaka-pātha 小誦 其名の示す如く、極めて短かい聖偈を集めた短句集で、纔に數紙に過ぎぬ、小經典である、三歸文を初とし初學者の誦すべき要文を輯錄してある。

二 Dhammapada 法句 是は佛敎要義の聖偈を種々の題目の下に類集したもの、佛敎學上極めて重要なる聖典で且最古經典である此吾々が日常實踐道德上にも切要なる格言集に就きては下に更に叙述しやう。

三 Udāna （嗢陀那） 感興語 五十偈の小經典で、釋尊が或は法喜禪悅の眞境に入り、若くは衆生濟度の大慈心が動くとき圖らずも發する感嘆の言語で、短きは僅々一行のものさへある「感興語」は此等の尊き天籟の妙語を集めたものだ。

四 Itivuttaka （伊帝佛多加） 如是語 一百二十の簡單なる教義要說を集めたもので、各要說は其初めに「如是世尊語」"Iti Vuttam Bhagavatā" と云ふ句を置いてあるから如是語と稱したのである。

第四　增一阿含

Anguttara-Nikāya

▲一から十一までは一集乃至十一集の義である。

一、	Eka-Nipāta	第一品乃至第八品　各十經。第九品　十七經。第十品　四十二經。第十一品　十經。第十二品　二十經。第十三品　七經。第十四品　八十經。第十五品　二十八經。第十六品・第十七品　各十經。第十八品　十七經。第十九品　二十五經。第二十品　二百六十二經……	六〇八
二、	Duka-Nipāta	第一品乃至第五品　各十經。第六品　十二經。第七品　十三經。第八品　十經。第九品　十一經。第十品　二十經。第十一品　十二經。第十二品　十一經。第十三品　十經。第十四品　十一經。第十五品　十七經。第十六品　十四經。第十七品　三十三經……	三一一
三、	Tika-Nipāta	第一品乃至第十五品　各十經。第十六品　十三經……	一六三
四、	Catukka-N.	第一品乃至第二十六品　各十經。第二十七品　十一經……	二七一
五、	Pañcaka-N.	第一品乃至第二十五品　各十經。第二十六品　二十一經……	二七一
六、	Chakka-N.	第一品乃至第三品　各十經。第四品・第五品　各十二經。第六品乃至第八品　各十經。第九品・第十品　第十一經。第十一品　十經。第十二品　八經……	一二四
七、	Sattaka-N.	第一品　十經。第二品　八經。第三品　十二經。第四品乃至第九品　各十經……	九〇
八、	Aṭṭhaka-N.	第一品乃至第九品　各十經……	九〇
九、	Navaka-N.	第一第二兩品　各十經。第三品　十一經。第四品・第五品　第十經。第六品　十一經。第七品乃至第九品　各十經……	一〇〇
十、	Dasaka-N.	第一品乃至第十品　各十經。第十一品　十二經。第十二品　十經。第十三品　十一經。第十四品　十一經。第十五品　十經。第十六品　十二經。第十七品、第十八品　各十一經。第十九乃至第二十二品　第十經……	二二〇
十一、	Ekadasa-N.	第一品及第十二品　各十一經。第三品　二十經……	四三

二千二百九十一經

▲各品ともに題名がある、色品だの、障品だの、多くは首經の内容から取りて付けたものだ、今簡略にする爲一切之を除きて唯數字を用ゐた。

次に論藏 Abhidhamma は七部ある、一 Dhammasaṅgaṇi（法聚論）二 Vibhaṅga（分別論）三 Dhātukathā（界說論）四 Puggalapaññatti（人施設論）五 Kathāvatthu（說事論）六 Yamaka（雙對論）七 Paṭṭhāna（發趣論）である、大體善見律の記載と合つて居る此等の論は佛教々義の系統的說明或は佛教心理、倫理、宇宙論及聖者階級の分解的の解說である。

パーリの聖典は已上擧げた律經論の三者に盡きて居るが尙此他に解釋歷史の類で准聖典の資格があるものがある、解釋の方面では覺音の書いた十九部の注疏、卽律藏に二部、四大阿含に各一部宛、小部經藏には十二部、論藏に一部といふ頗る浩瀚な典籍が備つて居る、此他に同尊者の著はした有名な佛教體系論の「淨道」Visuddhimagga も此處に添へて置くべき聖書であらう、史傳の方では夫の「大史」Mahāvaṃsa「島史」Dīpavaṃsa を兩大關として、佛牙史・覺音傳等、立派な史料に富むで居る、此外に尙典禮祭式に用ゆる讃歌式辭や、更に聖典と直接の關係ある文法及辭書、例せば夫の「名義明燈」Abhidhānapadīpikā の樣なものを數へたら、パーリ聖典文學は實に汗牛充棟の盛をなすといふてよからう、今此等豐富な資料が如何に歐米に於て研究されたかに就き、其概況を瞥見しよう。

四、パーリ研究　錫蘭島は中世に葡萄牙の支配を受け、次で和蘭人の手に遷り三轉して英國の所有となつた、葡國時代には本國から多數の基督教宣教師が來たが、元々當時葡國が宗教を掠國奪地の道具に利用した時代で、特に頑陋なイエソイツト僧徒だから無論殘忍酷薄の態度で錫蘭古來の宗教に臨み、隨分猛烈な手段を弄して、寺

五　Sutta-nipāta（尼波多）經集　七十一の小經を編纂したもので其語格文法より見るとパーリ經典中最も古代に屬する經典で至極貴重のものである。

六　Vimāna-vatthu（毘摩那）天宮事　天上の樂境を叙したもの。

七　Petta-vatthu（卑多）餓鬼事　前と對して地獄界の記載である。

八　Thera-gāthā 九 Therīgāthā（涕羅涕利伽陀）長老歌及長老尼歌　釋尊御在世中に生存した聖弟子の詩歌を集錄したもので、長老歌は諸大長老が感興詠嘆の歌を集め、長老尼歌は諸大尼の遺した頌讃を編輯したものである。

十　Jātaka　本生　釋尊が前世に於て種々の身を受け難行苦行の功を積みたる譚を集めたもので長短の譚が其數五百五十ある隨て此本生經は實に厖然たる大冊である、佛敎敎義上のみならず印度文學上非常に重要のものだ。

十一　Niddesa（尼涕娑）解釋　此書は第五に擧げた經集の一部を解釋したもので佛陀の高弟舍利弗尊者の作として傳へられて居る。

十二　Patisambhidāmagga（波致參毘陀）無障碍道　聖者の心理狀態の描寫。

十三　Apādana　譬喩　諸大羅漢の因緣を集錄したるもの。

十四　Buddhavamsa　佛種姓經　釋尊出世前に出現したる二十四佛の略傳。

十五　Cariyā-pitaka　行藏　釋尊が前世に種々の修行を積まれたるを韻文を以て略說したる小經典。

全部三卷となつて居る、當時此希有の史書が公開されたのは、學者社會には非常に珍奇の資料に相違なかつた、尤も其飜譯はパーリ原文から直に譯したものでなく錫蘭土語（シンハリーズ）から重譯したものだつた。此ウツバム刊行の摩訶槃沙古譯は今より二十年前、荻原雲來君が雜誌『佛教』の附錄として邦文に譯し初め、同氏外遊の後二三の人々が之を繼續して、兎に角全部を邦譯し了つた、今ではこれも一寸珍なものとなつた。

斯くパーリ語が次第に歐洲の學界に知らるゝ樣になつた時も時、獨逸では同國の梵語學史に不朽の名聲を殘したシユレーゲル (A. W. v. Schlegel) が、ボン大學で盛に言語學の爲に氣焔を揚ぐる最中だつた、其儕々たる門下の中、傑出した一俊才があつた、それは那威人のクリスチヤン、ラツセン (Christian Lassen) である、ラツセンは、ボンで印度學專攻中、師から其非常の才能を認められ、終に佛京パリに二年間留學を命ぜられた、此花の都、世界文藝の中心で、彼は一天才に會した此が即夫のビユルヌーフ (Eugèn Burnouf) で、此大天才が言語學界に於ける赫々の偉勳、特に佛教學上燦爛たる功績の如何に大なるかは、次章に之を說くことゝする、ラツセンが此人に會したのは、文藝上ゲーテとシルレルがワイマールの古城で相友として、不磨の傑作を殘したにも較べられやう、兩天才が協同の研究は頓に學界に生氣を與へた、此協同研究は何であらう、當時の學界では最初最新の業績で、即パーリ語の學術的研究の發表である、『パーリに就きての論』Essai sur le Pâli が即それだ、此論文の出たのは恰も『錫蘭神聖歷史集』完成の公表があつた時で、ラツセンは僅に二十七の青年、ビユルヌーフは一つ下の弟であつた、此破天荒の論文が發表せらるゝや、印度學の元老として崇められた英國のウヰルソン

院や佛像の破壞を行つた、隨つてパーリ聖典の硏究などは毫も行はれる筈はない、然し當時此聖語に就きての報告は絕無でもなかつたが取立てゝ此處に記するに足るべきものも見當らぬ、和蘭の權力の下にも此方面の硏究は一向發達する迄に至らなかつた、然るに英國が和蘭と兵を交ゆるに當り、一時此島を占領し一千八百二年（享保二年）平和條約の締結に至るまで、占領を繼續し、終に一千八百十五年に全島を其掌中に收め了つた、扨英國が此島の主人公となるや印度に於ける宗敎政策其儘を此處に適用し、漸次に佛敎徒懷柔主義を實行した、其結果に依るものか同島文武の英國官吏及傳道者の中に佛敎に關する趣味や同情が芽を出す樣になり、聖典や聖語に就ての知識が、少々づつ歐洲に知らるゝ事となつた、其一例としては、錫蘭判事長に同島會議長を兼職したアレキサンダー・ジョンストン（Alexander Johnston）が、同島新法典編成の準備として、先歷史宗敎風俗習慣等を硏究するの必要ありとなし、夫の聖史摩訶槃沙（マハーヷンサ）の英譯出版を計畫したるが如き頗注意に價するものといふてよからう、ジョンストン氏は此計畫を實行する爲に同島駐在の英國飜譯官に命じて、同史英譯の草稿を造らしめ、英國が同島占有後間もなく傳道に來た美以美派の宣敎師フォックス（W. B. Fox）と同島官吏ウッパム（Edward Upham）の二人がパーリの造詣深き故を以て、主として校訂に與らせ、其上土人の僧徒學者にも諮り、一千八百二十六年（吾が文化二年）該飜譯事業の大成を英國で公表し、千八百三十三年に至りウッパム氏が出版者として『錫蘭神聖歷史集』The Sacred and Historical Works of Ceylon と題して龍敦で公刊し、時の皇帝の天覽に供ふるの榮を得た、此神聖歷史集は前記摩訶槃沙の外に Rājāvali（ラージャーヷリ）や Rājāratnacari（ラージャーラトナチャリ）等の史書傳記類を收め、

き、大に錫蘭聖史を研究し、斷へず資料を蒐集し、其成績をベンガル亞細亞協會々報に報告し、着々歩武を進め、遂に夫のパーリ文摩訶槃沙に英譯を付して出版した、時は千八百三十七年（天保八年）、リス、デギヅ教授が之をパーリ研究開闢の大事業と極筆賛嘆を惜まぬも決して諛辭ではない。

ターナーの摩訶槃沙原英合糅の刊本は、同史全篇一百章九千百七十五頌の中前段三十八章に留め、之を第一卷とした、其餘章は第二卷已下に收める豫定であつたが、出來ずに仕舞つた（ウツパム刊行は八十八章まで譯してある）、此書には約九十頁に亘る細字の序論があつて、佛教歷史及錫蘭王統の年代考證につき極めて精細周密の研究が發表してあり且つパーリ三藏の內容をも概略記載してある、而して開卷の始めに、夫のウツパムの公刊した錫蘭土語底本の摩訶槃沙英譯の誤謬粗漏を忌憚なく指摘し、殆ど完膚なき迄に其過失を列擧してある、ターナーの譯一たび出でゝ錫蘭神聖歷史集は、骨董として書史學(ビブリヲグラフヰー)上に珍とせらるゝ外、憐れむべし全然學界から全く葬り去られた。

ターナーの摩訶槃沙(マハーヴンサ)出版後、パーリ研究に就きては種々の論文が英佛獨の學者に依りて發表されたが、これと云ふ程のものもなかつた、然し歐洲各大都の圖書館や博物館は今や孜々としてパーリの貝葉寫經を蒐集し、大英博物館や印度局の如き、漸次に錫蘭・緬甸・暹羅の諸國から豐富なる古經典を獲たが、此時スカンディナビヤ半島の一角にはラスク（Rask）や其弟子で出藍の譽があつた大學者ウェスターガールド（N. L. Westergaard）がコツペンハーゲン大學で盛に印度古學及言語學の爲に光彩を發揮した爲、珍奇な印度古書が大分同大學の書庫を

(H. H. Wilson) やプリンセプ (Prinsep) 等が、パーリ語起原に就きて種々の議論を闘はし、此語の重要なること、其聖典や歴史類の豐富なることなどが、彌益歐洲に知れ渡る樣になつた。

是より先、英國に於ては印度學の研究着々として其步を進め、特に考古學の方面に於ては、前に一寸名前を出したプリンセプが其卓拔異常の才能を揮ふて、盛に碑銘や古錢に前人未發の技量を示し、特に阿育王の勅碑が發見されて彼は此奇古の碑文解讀に尤も苦心を費し、別して其年代の研究に精力を集中した、然るに印度には古來歴史の考證に資すべき記錄が絕無の所から其煩悶は一方ならぬものだつた、此時恰も錫蘭に幾多貴重の歴史記錄を傳へて居る事が稍明了となつた故、プリンセプは如何にもして精確な史料を手に入れたいと努力した、勿論ウツバム公刊の神聖歴史集はあるが、粗漏杜撰の點が少からぬことと、年代の考證などを全然顧みぬ所より、之を學術的の資料に供するには到底不滿足を免れなかつた。幸にも此際パーリ語界の一偉才出で丶、大にプリンセプの事業を助け且パーリ研究の根基を築いた。此偉才は錫蘭統治の功に依りて後ウインタートン伯 (Earl of Winterton) に叙せられた人で、姓は Turnour（ターナー） 名は George（ジョージ）、一千七百九十九年錫蘭に生れ、二十歲にして同島の民政局（シギルサーボース）に入り、多年同島に職を奉じ、累進して同局顯要の地位を占め、頗功績ありしが、惜哉壽甚長からず、僅に四十四歲にして伊太利のネーブルスで客死した。

ターナーは印度歴史の研究上、錫蘭の史料が至貴至重のものたることを證明した最初の人だつた、彼はプリンセプの奬勵に促されて、大に其研究を助力し、非常に多忙な民政局の事務を執る傍に、學識ある同島の佛僧に就

嚴なる詩形に籠めて、古色蒼然たる中に生氣の潑溂として溢れむ計りなる四百二十三頌の聖詩輯錄が、パーリ聖典出版の劈頭第一に現はれたのは佛教徒が不思議の因緣として頗る感謝すべき所であらう、ファウスベエールは此聖典中でも最も古體古語で書いてある困難な聖詩を幾多の異本を集めて校訂し每紙に原文と羅甸語の譯文を對比して研究者の便に供し且つ浩瀚なるパーリ註疏を卷末に添へ別に聖詩韻脚の法と鄭寧な異本比照とパーリ索引とが付けてある、實に至れり盡せる出版と稱してよい、ターナーの摩訶槃沙で確實なパーリの知識を得た歐洲の學界は、ファウスベェールの法句經で其堅牢な基礎を見出し、研究の方針が初めて其趨く所を知るに至つた、而して一般の教育ある社會は大史で佛教歷史の來歷實に淺からざるを知りたると共に法句經で其深遠崇高の教理に始めて接することが出來た、此意味からすると法句經の公刊は單に言語學上不磨の傑作として贊嘆せらるゝのみならず、亦宗教史及思想史に於ても、少からざる功績であると云へる、ファウスベエールは此傑作を完成して、之を其師ウエスターガートに捧げ、引續き益聖典出版の爲に奮鬪努力した、其偉大な功業は次段に於て述べることとする。

法句經の出版と前後し、歐洲に於けるパーリ語研究は益盛大になつた、梵語の學者で苟くも佛教に趣味を有するものは、皆パーリ研究の門に走つた、佛國にはセナール (E. Senart) が出る、露國ではミナエフ (Minayeff) が文典の著作や聖典の出版に手をつける、獨逸ではクーン (E. Kuhn) が種々の業績を發表し、スピーゲル (F. Spiegel) の如きはパーリ逸書集 Anecdota Palica の編纂を計畫して、二三聖典の校訂を出した、又夫のファウ

賑はすことゝなり、就中パーリ寫本の豐富なることは殆ど英國と壘を摩する計りの勢であつた、此有力な研究材料は玆に偉大な使用者を得て、パーリ研究に俄然として一新機運を拓開することゝなつた、此研究家は誰であらう、一千八百二十二年北海浪荒き所に呱々の聲を擧げた、ヴィツゴー、ファウスボエール（Viggo Fausböll）である。

リス、デギヅ教授曰く、「ターナーの大出版は廣く學界に其眞價を認められたが、其死後誰も彼の大業を繼承するものがない、當時パーリ語の字書は無論ある筈もなく、文典とても言ふに足る樣のものもない、さりとて歐洲學者が此が爲態々錫蘭に出懸けるのも實に困難至極である、其故ターナーの書は、恰も荒凉たる未開拓の原野に屹立した寂寞の道標の樣に、來らむ才能ある開拓者を待つ計だつた、勿論此間多少の小論文の公表はあつたが、淺薄皮相、物の用に立つべくもなかつたが終に一千八百五十五年にファウスベエールの一パーリ原文の第一(エディチテ、)公刊(プリンセプス)があつた」——此第一公刊こそ實にパーリ研究界の新氣運を拓開したのだ。

ファウスベールは當時コツペンハーゲン大學文庫の司書であつて、ラスクやウエスターガールドの薫陶を受け、盛に印度古學を研究し、特にパーリの茫漠たる未開拓の原野に眼を注ぎ、大學文庫の藏帙を使用して、頗る苦辛を費したが、前にも言ふ通文典とては、纔に不完全極まるクローのパーリ字典あるのみだつた、ファウスベールは此困難の研究に堪へて、着々前進し、終に法句經(ダムマパダ)の公刊に成效した、此公刊はパーリ佛教聖典が歐洲否恐くは世界で活版となつて現はれた最初の者だつた、而して此佛教經典中、不朽の眞理と普遍の慈光とを、美はしくも亦

字典の完成したのは明治八年で、恰も露國でポエートリンクとロオトとが梵獨大辭典の刊行を完成した時だつた、パーリ研究は玆に至りて益旺盛を極め、律藏の出版も始まり、本生經大集も其第一卷が出た、玆に於てか、聖典の出版と研究の發表との爲に、是非とも大計畫で而して有力なる中央機關即一學會の組織が焦眉の急になつて來た、リス、デギヅ(Rhys Davids)教授が設立したパーリ聖典會 Pali Text Society は、此氣運に應じて明治十五年にロンドンに起つた、此中心機關は卽歐米に於けるパーリ研究全體の潮勢から見て、確に總結であり、一段落である、汪洋の勢を揚げ滂湲の美を呈し、東からも西からも、流れに流れ、走りに走る百千岐の大江細流は、玆にパーリ聖典會といふ一大海に朝宗湊會して、更に幾多の新しい波濤を卷き起し、無數の新潮流が續々として生じて來る。

玆で此學會の設立者で今現に宗教學者言語學者から非常の尊敬を受けつゝある、老教授の面目を一寸覗はう、リス、デギヅ教授は天保十四年英國コルチエスター (Colchester) に生れ、二十歲にしてブライトンの高等學校を出で、二十三歲で錫蘭に行き、法律上の業務に從事する傍ら、大にパーリ及佛教の研究を力めたことが凡そ十年間、明治九年マックスミューラー翁が、東方聖書大集の出版の計畫を發表した年に、英國に歸り、ロンドン大學でパーリ語及び佛教文學の講義を開き、次で皇立亞細亞協會(ロイヤル、エシヤテイツク、ソサイテイ)の書記に司書を兼職して、大に東洋學の爲に盡力した、現時はマンチユスター大學に教鞭を取り、鏗鏘として種々有益なる新著を公刊し、後進を指導して居る、パーリ聖典會は教授が歸英後間もなく計畫した事業で、勿論成立當時には資本のあつた譯でもなかつた故、

スペエールの門下にはトレンクネル（Trenckner）の如き俊才が出て、研究愈佳境に入る、而して此大勢は自ら錫蘭の佛教徒を刺撃し、其有爲高材の學僧は、奮然起ちてパーリ語の爲に世界の學界に貢獻することに努力した、其中で早世した曇摩藍摩（ダムマーラーマ）師 Dhammārama（一千八百七十二年寂）の如き、今尚歐洲學者に多大の尊敬を受けつゝある、パーリ語彙『名義明燈』Abhidhānappadīpikā の校訂出版者須菩提（スブウテイ）師（Subhūti）の如きは、所謂鐵中の錚々たるものであらう、居士の中にも斯道の研究に力を入れ、多大の便宜を歐洲學者に與へた人も少くはなかつた、ギジエーシムハ（Vijosimha）の如きは其代表的の人と云はれやう。

此の如く漸くにして爛漫の華を開き來つた、パーリの學苑中に今や從來の研究を綜合し、研究の基礎を確立せんとするの計畫が漸く圓熟して來た、夫は卽パーリ字典の編纂である、此至難の業に當りて東洋學の全く面目を革めた今日まで尙唯一のパーリ字典たる名譽を保ち、學界の至寶として後進の研究を利益して居るのは實にロバート、シーザー、チルダース（Robert Caeser Childers）の功勳である、彼が半生の心血を灑いだ Dictionary of the Pali Language『パーリ字典』は彼が功業を永く學界に留むる隆然不磨の記念碑だ。

チルダースは錫蘭總督ムカルテイ（Sir Charles M'Carty）（一千八百六十年より四年間其職にあつた）の秘書官として活動し、後英國に歸り印度局の副司書に任ぜられ、其晩年はロンドン大學の教授で終つた、纔に三十六才で死むだ彼の壽命は實に短かつたが、其事業は實に大きい、彼はパーリ字典編纂の大業を完成した外、尙聖典の出版をもした、それは後段に至りて述ぶることにする。

教』は二大雙璧とすることが出來やう、教授の講演は此の如く人氣に投じたる故か、大學講座の下には常に幾多の青俊を集めて、新進のパーリ學者が輩出する樣になり、妙齡の女流で講義に列するものも少くはなかつた、ボード (Marbel Bode) リツデイング (C. E. Lidding) 兩孃の如きは、此等閨秀パーリ學者の傑出したるものであらう、而して更に傑出したる淑女は卽ち今の教授夫人カロリン女史である、女史が結婚前後公刊した優秀な經文や論藏の飜譯及び忠實周到の索引類は鬚眉の碩學をして覺へず瞠若たらしむべき名篇である、夫人の學才は實に此の如く拔群であるが其貞淑婉順の美德も實に婦人の龜鑑と稱すべきである、現時パーリ聖典會が着實に進捗して、益良好の成績を擧げつゝあるは、實は夫人が內助の力與つて多きに居るに由るからで、今や夫人は老教授を助けて殆ど內外細大の實務を一身で處理しつゝある、而して其敏明精察の頭腦と親切で誠意の籠れる態度は、後進の士が常に感謝措く能はざる所、此講義錄の筆者も、教授と共に夫人から一方ならぬ研究上の便宜と幇助とを被むつた一人であることを玆に感謝する、教授と夫人は今や此の如く琴瑟相和し鸞鳳共に鳴きて最も美はしく貴い家庭を造つて居る、此點から見ると伯林大學の梵語教授リユウデルス博士が其講座の下から今の令閨を得て現時盛に中央亞細亞發見の古經斷片に睦じい比翼研究をやつて居るのと、同巧異曲と申してよからうか、筆者は此鸞鳳の共鳴が千代に八千代に長へに學界の祝賀を受けむことを玆に中心から至祝至禱する。

パーリ聖典會成立已後の研究狀況は便宜上之を（一）根本資料卽聖典の出版及飜譯（二）資料の整理運用卽教理及歷史的の述作（三）パーリ語學研究上の著作の三項に分けて重要のもの丈擧げて置く。

其苦心經營は非常のものだつたが、至誠の發する所は善く何物をも動かし、暹羅先帝の恩賜金が下付になり、同國の大官連も寄附をする、歐洲の學會や學者も奮ふて會員となるといふ風で、成立已來茲に三十年、浩瀚なるパーリ三藏の大部分は、今や其出版を了り、長阿含の一部分と論部の二三を餘すのみとなつた、而して同會の會報には佛教に關する非常に重要なる研究報告を收め、殆ど現代歐米佛教學者の大論文を網羅する外に、吾國の高楠順次郎、鈴木大拙其他諸家の論文も出て居る。

紳士の典型と言つたら、英人と相場が極まつてるさうだが、若しさうすれば、リス、デギヅ教授は英人中の英人、紳士中の紳士であらう、教授が崇高溫雅な人格と、寬厚謹嚴な性質、精勵敢爲の精神と而して後進に對する親切無私な指導は、一度其人に接して決して忘るゝことの出來ぬ所だ、佛陀及其教義に對する敬虔の情は、ロンドン佛教協會の會長として活動し、其東洋學に於ける深い眞摯なる同情は其邸宅に命名するに中世印度佛教學の淵源であつた大學の名『那爛陀』を以てし、其令息や令孃にはパーリ語を課して家庭に一種の新風味が存在するのでも判からう、パーリ聖典會が大成功を收めたのは實に學界必須の要求に基因しやう、然し教授の大人格が實は其主要の原因たるを忘れてはなるまい。

教授が熱心な盡力と圓滿高尙な人格とはパーリの普及に少からぬ功果を齎した、大學の傍、各所の學會で教授の講演は到る處に歡迎された、其有名なものは千八百八十一年にヒツパート講莚で述べた『印度佛教史の或點より說明する宗教の起原及發達』及同九十六年米國の宗教史講演會の第一回講師として紐育で廣長舌を揮ふた『佛

校訂出版し十年の後此最も困難な古語の經典の語彙を出版した——法句經と共に最古のパーリ語の佛を殘して居る此貴重の經文は僅に共 Atthaka(アッタカ) Vagga(ヴッガ) の一章丈が支那譯經史中最古に屬する呉の支謙の譯義足經に依りて遠く吾々に傳持された。

本生經大集の公刊と、共にパーリ語學界否佛教學界に忘るべからざる大事業は卽オルデンベルヒ教授（Hermann Oldenberg）の律藏本文全部の出版である、教授は安政元年漢堡(ハンブルグ)に生れ、ギョツテインゲンと伯林の兩大學に學び、燦爛たる成績で伯林を出て、直に同大學の講師より助教授に累進し、三十五歳で早く既にキール大學の正教授を贏ち得たが今や其母校のギョツチンゲン大學の講座に榮轉し、世界に於ける第一流の梵語學元老として現時恐く誰も其右に出づるものはあるまい、其パーリ研究に於ける功績は恐くリス、デギヅ教授と伯仲の間にあり蘭菊美を爭ふと賛してもよからう、教授はパーリ語界に於ける業績が、此の如く偉大不朽なるのみならず、梨倶吠陀研究に於ては殆ど世界第一人の名譽を占むべき碩學である。

オルデンベルヒ氏の律藏公刊は千八百七十九年に初まり、同年大品(マハーヴッガ)を出し翌年息をも繼かず小品(チユラヴッガ)を終り八十三年まで、浩然たる全部律藏の校訂を終へて了つた其精力の絕倫と頭腦の明敏なる實に驚嘆の外はない、此出版に就きては大英印度省が非常に保護を與へた外に、伯林の學士會も大に其事業を助けたが更に喫驚すべきは同氏は律藏公刊の初めに當りて夫の大史(マハーヴンサ)と姉妹史とも云ふべき極めて重要な佛教史嶋史(ディパヴンサ)（Dipavansa）に英譯を付して公刊した、是又佛教學上缺くべからざる至貴至重の資料の一つである、而して八十三年に律藏公刊が完

（一） 根本資料卽聖典の出版及飜譯

聖典出版中最も困難を極め且つ最も大部で少からぬ國際的の歴史を持つのは恐らくファウスベェール氏が其の校訂出版した本生經大集であらう、此苦心の出版につきては舊稿ファウスベェール小傳に其一端の消息を洩して置いた。

先生は其の一生の大業に從ひ、徐々に資料を蒐集し始めぬ。是卽本生經大集の出版也、大集公刊に先つ數年。四五の本生經抄を世に公にし、且つ其英譯をも出したりしが、一千八百七十七年に至りて、大集第一卷初めて世に出で、二十餘年の後、第七卷就りて、茲に此大事業完結したり。其勤勉不撓の精力と忍耐とに至りては、常人の企圖する能はざる所ならずや。抑先生が此大業を成就するにつきては、障碍困難一にあらざりき、ロンドン其他の貝葉謄本魯魚の訛誤甚多し、到底先生の意を滿たすに足らざりき。此時にあたりて、錫蘭古代の正本につきて精確なる音寫を送り、始終偉大の補助を與へたる一大學匠あり。錫蘭の高僧須菩提師卽是なり。德孤ならず必らず隣あるものといふべし。先生は此恩を記せむが爲に、大集の第一卷を此高僧に捧げたり。公刊の費用に就きてはウニーバー教授の大に同情を寄するあり普國學士院を動かして、每卷一千馬克の出版費を補助せしめ、丁國政府又大に之が爲に勵まされて、各卷二千クローネの下附を許せり、而も此實大なる扶助は、五卷を超ゆるを得ずとの條件なりしを以て、第六第七兩卷の世に出づるに及びて、先生の苦心は實に非常なりき。然もプングスト博士が、フランクフルト新聞誌上の一大論文は大に學界の輿論を喚起し、優に此困難を解除し得て、丁普の兩國再扶助を續け、一千八百九十七年、全部の刊行完く終を告げ。學界の至寶は茲に成りぬ。

フウスベェール氏は此本生經出版の大事業中、一千八百八十四年にスツタニパータ (Sutta-Nipāta) の本文を

雜含の次は一千八百八十五年に第一卷の發刊があつた增一阿含で二卷まで新敎僧侶で且つ著名な當時の言語學者モリス（Richard Morris）の事業であつたが、此英國言語學の泰斗は增一の校訂を完了せず、折角書きかけたパーリ及其從屬の言語に就きての一書の脫稿もせずに、一千八百九十四年六十二歲で上天した、然しモリスは英語に就きての功績に讓らぬ名譽をパーリ語界に擔ふて居る、パーリ聖典會の成立と同時に行藏（チャリヤピタカ）及佛種姓經（ブッダヴンサ）を公刊したのは彼だつた、困難な論部の人施設論 Puggala Paññati を見事に校訂し了りたのも彼だつた（一千八百八十三年）新敎僧モリスの增一阿含出版の事業を繼續して完成したのは不思議にも舊敎の學僧ハーディ師（Edmund Hardy）であつた、ハーデーは頗敬虔な信仰を有した人で、其主義と信仰との爲に、同僚七人と共に瑞西フライブルグ大學敎授の榮位を、弊履の如く抛つた人である辭職後はウィルツブルヒに隱退して專らパーリの硏究に力め、淸白純潔な戒行を持ちて敬虔眞摯な一生を終へた、其三萬ばかりの遺產は遺言に依りてミュンヘン大學に保管せられパーリ語硏究生の學資に充てられて居る、增一全部が校正を終つたのは一千九百年、其後師は大史（マハーヴンサ）異本の比較硏究や、パーリ新字典編纂の資料整理や、佛敎に關する通俗書の著作などにて學者からも一般の社會からも頗尊敬を博し、パーリ硏究の前途極めて重要の人として期待されたが、惜しい哉晩年病弱に傾き一千九百四年五十四才で莊嚴な臨終をした、筆者は師がウィルツブルヒの寓を訪ひて萬卷の藏書中先代羅馬法王ピウスの雄大な寫眞額の下で半日を消したのを今や圖らず回想して、其敬虔眞摯淸白の一生を欽仰するの情益ゝ深きものがある、增一に次ぎてはフアウスベエールが高弟で拔群の才幹を有したトレンクネル（V. Trenckner）の中阿含の校

成した時に長老偈（Thera-gāthā）の刊本を出した。

オルデンベルヒが律藏全部の出版の前其或部分は多少出版されぬでもなかつた獨逸ではスピーゲルが行事式辭（Kammavâca）を單行として出版し（一八四一）ボエトリンク（Boehtlingk）も其一部を出し（一八四四）ディクソン（Dickson）も之を一千八百七十五年に英國亞細亞協會雜誌に公表した、又波羅提木叉戒本 Pātimokkha は露國でミナエフが一千八百六十九年に出版し、英國では前記のディクソンが同七十五年に亞細亞協會雜誌豫報で發表した。

經藏卽四阿含の校訂出版中では、雜阿含の公刊がパーリ聖典出版界の事業として、一千八百八十四年に着手になつたのが初めてゞ、校訂者はパリの國民圖書館の司書、佛教の非常に熱心の研究家レオン・フエーヤ（Léon Feer）であつた、尤此前にチルダースは長含中の大涅槃經の單行本をロンドンで出し（一千八百七十八年）グラムロー（P. Grimlot）はパリで長阿含中から重要の七經を撰び Sept Suttas Palis, tirés du Digha Nikāya と題して出版し（一千八百七十六年）ピツシエル（Pischel）は獨逸のシエムニツツで中含の阿攝和經を校訂した（一千八百八十年）然し阿含全體としての出版計畫はフエーヤが其初めである、此人は一千八百三十年に生れ、一千九百十年に死むだが篤學の學者で、華麗なパリに居て而も純粹の佛人であり乍ら社交を全く避けて佛教を研究しパーリ語の外、西藏語にも精通し、多くの名論文や好著を殘した、雜含の公刊は頗る長日月を要し十四年の後漸く全部完成し、フエーヤの死後リス、デギヅ夫人が之に周到精密の索引一卷を付して長く學者の珍器となつた、

ねばならぬ。少くともグネラトネ居士が盡した位のことは是非ともパーリ聖典會に對して盡すべき當然の責があらう。

論藏の次は小部經藏(クッダカニカーヤ)の公刊に就き一言しよう。此十五部の聖典中法句經(ダムマパダ)・本生經(ジャータカ)・經集(スッタニパータ)等重要の出版に關しては、既に敍述してあるから、玆には便宜上公刊順の表だけ出して說述を略する。

一	小誦	チルダース	Childers	校訂	一八七〇	公刊
一四 一五	佛種姓經 行藏	モリス	Morris	同	一八八二	同
八	長老歌	オルデンベルヒ	Oldenderg	同	一八八三	同
九	長老尼歌	ピッシエル	Pischel	同	同	同
三	感興語	スタインタール	Steinthal	同	一八八五	同
六	天宮事	グネラトネ	Guneratne	同	一八八六	同
七	餓鬼事	ミナエーフ	Minajeff	同	一八八九	同
四	如是語	ギンデイッシュ	Windisch	同	一八九〇	同

餘の三部卽ち十一の解釋(ニッデーサ)・十二の無障碍道(パッチサムビターマッガ)と十三の譬喩(アパダーナ)とは之に關する論文抄譯が英佛諸學會の會報に載つて居る。

次には三藏の註疏類の公刊で、錫蘭の祖師覺者(ブッダガオシャ) Buddhagho'sa や護法(ダムマパーラ) Dhammapāla の書いた註疏類は、

訂出版、一千八百八十七年に其第一卷が出たが同氏の早世の爲に跡はリス、デギヅ翁門下のチアルマーズ（Robert Chalmers） が之を引受けて全部五卷の校訂を完成した、トレンクネルは中阿含校訂出版の外に那先比丘經原文 Milindapanha の出版をした、この歷史的に趣味ある經典につきては後段に一寸述べる考である、四阿含最後に出たのは長阿含でこれはリス、デギヅ翁が親く手を下し門下のカーペンター（J. E. Carpenter） と共に一千八百八十九年に第一卷を出し數年の後第二卷が公刊されたが其三分の一はまだ出版とならぬ。

四阿含は此の如く僅に長阿含の一部分を除きて餘は悉くパーリ聖典會で校訂出版を終えた。

論藏は前に擧げた通り七部あるが、此中公刊の順序から云ふと前記のモリス氏が第一着に第四の人施設論を出し（一千八百八十三年）次で第一の法聚論が瑞西ベルン大學のミューラー敎授（Ed. Müller）に由りて校訂出版された（一千八百八十五年）。此人は印度古代方語研究に少からぬ功績のある學者でパーリ文典の好著もある。此出版の後論藏の研究は暫く絕へたが、七年後（千八百八十三年）に至り、錫蘭の篤信家で我が釋興然律師の滯在中、頗る優遇を與へた居士グネラトネ（Guneratne） が第三の界說論を歐洲の學界に出した。居士は尙他の公刊もしてパーリ研究家に少からぬ恩惠を貽して居る。其後一千八百九十五年にテイロル（A. C. Taylor）が第五の說事論を出版したが何れもパーリ聖典會の事業である。右の如く七論の中にてまだ第二の分別論、第六の雙對論最後の發趣論は誰も手を着けるものがない、これは論藏の研究が經律に比して頗困難なるに原因する、複雜細微の法相や名目は到底淺薄な佛敎學の知識では容易に動くものでない。玆に於て吾國の佛敎家は大に奮起せ

其抄譯を出し、公刊の計畫もあつたが、惜い哉天此人に壽を借さずに終つた。あとはリス、デギヅ老先生が引受けて遠からずハーバート大學から出ることであらう。組織宗學の清淨道論に對して、今一つは護教宗學に屬すべき、極めて趣味ある一書がある。それは支那の古譯さへある那先比丘經即 Milindapañha である、此書は其哲學的の內容が貴重なるのみならず、東西文化の潮勢上頗る面白き書である。即夫の亞歷山大王が印度侵入の後、紀元前百三十年より百年頃まで、希臘印度王國に君臨し古錢も今殘つて其佛を留めて居る歷史上の Menandros（即佛教書のみりんだ王）と、佛教の碩學那伽犀那 Nāgasena との辯難解答を輯錄したもので、此希臘王は博學雄辯當時天下に敵なかりしが、遂に那伽犀那即支那經典の那先比丘に說服されて、佛教に歸入し、仁政と武威とで大に國人を悅服せしめ、死後は佛陀と同樣の尊敬を受けたことになつて居るが、此大王メナンドロスの信佛はガルベ教授が論じた如く、多分歷史上の事實で、那先比丘經に現はるゝ、學德蓋世の大德と智勇絕倫の英主との問答が縱令梁武と達磨との問對の樣に、小說的の寄託であるとしても、同經は少くとも此大王信佛の歷史的事實を背景とし中核として居ることは爭ふべからざる一事實で、佛教聖典中最も異彩に富むだものと云ふてよからう。而して同經は其構造が此の如く珍異な計りでなく、其文體がパーリ散文の典型と云はるゝ程、典雅壯麗に出來て居る。此重要な書は前にも一寸述べた通りトレンクネル氏の校訂出版が出て英獨の飜譯もある。

本文出版に就きては、略此位に止め以下聖典飜譯に關し一言しよう。

此事業に就きては先づ第一にマツクスミユーラーの大業である東方聖書大集 Sacred Books of the East や選

恰も大乘聖典で龍樹や無著や世親の釋論が重要の位置にあると同じである。而も大乘經典の註釋は原文の存在するもの僅に十の一二、支那及西藏譯を合せても眞に一部分の註疏のみしか傳はつて居らぬ。然るにパーリの註疏は經律論及小部經藏の全體に亘りて、十九部の厖然たる古書が現に今日に殘つて居る。即律藏に二部、四阿含に各一部宛、小部經藏に十部、論藏に三部ある。此中律藏の註疏である善見論 Samanta-pāsādikā (詳くは善見律毘婆沙) は漢譯が不思議にも傳はつた。此等註釋書の中、長阿含の釋論『吉祥悅意論』Sumangala-vilāsinī や論藏法聚論の註疏『豐義論』Attha-sālinī 餓鬼事の註疏『眞諦燈論』Paramattha-dīpanī 其他はパーリ聖典會で出版し、法句經や本生經の註疏は前にも述べた如く、本文と合綵して公刊された。然し此佛教學上重要の資料にはまだ〲研究の餘地が頗る廣い。

註疏の外には藏外の書で歷史及教理上極めて重要なるものが可成に多い。前に擧げた大史や島史の外に、佛牙史 Dāṭhāvaṃsa 菩提樹史 Mahābodhivaṃsa 佛塔史 Thūpa vaṃsa 等は貴重な教會史料。聖書史 Gandhavaṃsa. 大教史 Sāsanavaṃsa は立派な文學史料。對法集要 Abhidhammattha-Saṃgaha. 妙法集要 Saddhamma-saṃgaha の如きは教理要論で、何れもパーリ聖典會の出版がある。教理に關する著書は頗る多いが其中二つ丈は是非とも茲に述べて置く必要がある。卽一つは覺音尊者作の清淨道論 Visuddhimagga である。此系統的教義の說述書は恰も大乘論に於ける起信論位の位置にある重要のものである。然し印度錫蘭緬甸の刊本は出たが、まだ歐洲に於ての批評的の公刊がない。死むだハーバートのワーレン (Henry C. Warren) 氏は此名著の研究家で、

に佛教聖書の中に『佛陀の論語』Dialogues of Buddha と名づけて長含の諸經を順次に英譯し、目下今第三卷まで出て居る。又中阿含の獨逸譯者として有名なノイマン氏も長含の飜譯を企て一卷だけ出た。恐く中阿含の如く立派に完成するだらう。扨其中阿含は今申した如く、ドクトルノイマン（K. E. Neumann）の全部一百五十二經の極めて完美な獨逸譯が三卷ある。此大業は一千八百九十六年から六年間かゝつた。此人はパーリ學者として令名あるのみならず、亦熱心な佛教信徒で現に墺國ギエンナに學者の尊敬を受けつゝある。尚中阿含の部分の飜譯としては左の通り

△リス、デギヅ　英譯――第二漏盡經。第六願經。第十六心穢經（東方聖書集第十一）
△レオン、フエーヤ佛譯――第五十六優波利經（千八百八十七年、佛國亞細亞協會々報）
△リス、デギヅ夫人　英譯――第四十三大拘絺羅經（一千八百九十四年、英國皇立亞細亞協會々報）
△リユプトン　英譯――第八十二賴吒惒羅經（所出前と同じ）
△チヤルマーズ　英譯――第八十四摩偷羅王（所出前同斷）。第百二十三未曾有法經（一千八百）

雜阿含經にはまだ全部の譯がない、且つ其部分も歐洲語に飜譯されたのはワーレン氏の著書を除き甚だ少ない、有名なウインデイシユ教授の傑作『佛と魔（ブッダウンドマーラ）』の中に此阿含の一部魔品を獨譯したのなどが特に目に付く。其他フエーヤやハーデー諸氏の極めて少部分の抄譯があるが、取り立てゝ玆に擧ぐるまでもなからう、最後の增一阿含は米國費府（フヰラデルフヰア）のエドモンヅ氏 A. S. Edmunds が極めて小部分を譯した外には英譯には見るべきものはない。然

羅の先帝陛下が內帑を下賜して特にマックス、ミューラーを御依賴になり計畫された佛教聖典集 Sacred Books of the Buddhists や現時獨逸の熱心な佛教徒が出版を續けつゝある獨逸パーリ聖典會に感謝を表せねばならぬ。また此事業につき過去に於ては功勞少からず、將來に於ては確に此方面に大活動をなすべき米國ハーバード及コロンビヤ兩大學の出版部にも敬意を表すべきであらう。

例に依り律藏から始めると律の重要なる部分はオルデンベルヒとリス、デギヅの兩元老が、東方聖書集の中に英譯を出した（同集第十三、十七及第二十の三卷）卽戒本・大品・小品の英譯で他の戒本釋卽 Suttavibhanga と戒品補遺の Parivara は其儘である。此英譯は今に學佛者の羅針盤で第一卷の序文の如きは、現に學界を裨益する。尙律に就きては皇立亞細亞協會會報其他に一部分の英譯散見すれど、玆に特に擧げるまでもあるまい。

經藏卽四阿含の中で長阿含は前記の如くグラムローが其重要の七經原文の刊本にて其中の六經に牧師ゴオジヤリー（Sannel Gogerly）の英譯と、一分ビユルヌーフの佛譯を添へてある。卽左の通り

第一　梵網經（英譯）。第二　沙門果經（一分佛譯あり）。第五　大緣方便經（佛譯）。第二十　大會經（英譯）。第三十一　善生經卽六方禮經（英譯）。第三十二　阿吒那智經（英譯）。

七經中大涅槃經丈は譯してないがこれはリス、デギヅ翁が東方聖書集の第十一に『佛教經典』と題し、中含の諸經と共に之を英譯し、他に同含第十三の三明經と第十七の大善現經とを譯し加へてある。此他同翁は夫人と共

チルダース　第一の小誦原文出版に英譯を附す（前記參照）……………………一千八百七十年

ストロング氏　Strong: The Udāna; or Solemn Utterances of Buddha…（第三感興語英譯）｛一千八百八十九年
一千九百二年再版

ノイマン氏　: Die Lieder d. Mönche u. Nonnen……………（長老及長老尼偈獨譯）……一千八百九十年

リス、デギツ夫妻　: psalms of the Early Buddhists……………（同上英譯）……一千九百九年及十二年

ムーア氏 J. Moor　: The Sayings of Buddha……………………………（如是語英譯）……一千九百年

論藏は其研究頗困難の爲か、今の所唯二つしか飜譯がない、卽ち法聚論(ダムツサンガニー)をリス、デギツ夫人が一千九百年にBuddhist Psychological Ethics（佛敎心理的倫理學）として巾幗の身の感心にも英譯し、頗重要な序論が付けてある。其他は卽一千九百十年に出た獨逸人の佛僧智燈比丘が獨譯した人施設論(プツカラパムニヤテイー)で、Das Buch der Charaktere（性格の書）と題してある。論藏は此の如くしてまだ飜傳の餘地が頗る廣い。

藏外の重要なる聖典の中、大史(マワーヴンサ)はタルナーの譯が一部分である爲に、スマンガラ僧正が三十七章已下の錫蘭土語本と英譯とを同地の學者Ratuwantudawa(ラツワンツウダワ)と協力し哥倫坡(コロンバ)で一千九百二年に出版したが、今はガイゲル敎授（Geiger）及ボード女史（Bode）共譯の立派な全部の英譯本が去年出版になつた此他は夫の有名な那先比丘經卽『ミリンダ王の問』であるが、これはリス、デギツ翁が東方聖書集の第三十五六兩卷に英譯を出し、今印度に居る筆者の同窓ドクトル、シユラーダー（Shrader）が千九百五年に批判的の獨逸譯を公表して此史劇的の哲學書は今や、歐洲讀書界の渴を醫するオルデンベルヒ敎授の島史(ディイパヴムサ)の英譯に就きては旣に一言したが、之に次ぐ

し獨逸では最近智燈比丘 Nyanatiloka（ニャーナチロカ）が第一品より順次に精確な獨譯を出し、確か第三品まで出た。

次に小部經藏であるが此中法句經（ダムマパタ）は前記フアウスボエールの羅甸譯已來マックスミューラーの英譯が一千八百七十年に米國で "Path of Virtue"（德の道）の名で出で、次で同氏は東方聖書集第十卷の第一部に之を訂正した英譯を出したが、多少の誤譯もあつた。其後一千九百二年に米國でエドムンヅ氏の改譯が出た、題號は『信仰の聖歌』Hymns of the Faith としてある。此他フェルナンデユー Fernand Hû の佛譯もありノイマン氏の獨逸譯『眞理の路』Der Wahrheitpfad もありマックスミューラーの英譯を基礎とした伊譯も露譯其他の譯もあるが一々煩を避けて擧げぬ。フアウスベエール英譯の經集（スッタニパタ）は東方聖書第十卷の第二部としてマックスミューラーの法句經と合卷で出た。本生經はリス、デギヅ翁が佛本生譚 Buddhist Birth Stories として一千八百八十年に五百四十七の譚の中、第一より四十まで英譯し、且つ本生譚に關しエソップ譚其他の民間譚との歷史的及比較的の精密な研究が添へてある。全體の飜譯は梵語學の泰斗カウエル（E. B. Cowell）が監修し、第一卷はチャルマーズ（一千八百九十五年）第二卷はラウス（Rouse）（同年）第三卷はフランシス（Francis）とネール（Neil）（一千八百九十七年）第四卷はラウス（一千九百一年）第五卷はフランシス（千九百五年）第六卷はカウエルとラウスの合譯（一千九百七年）で玆に全部五百四十七の本生大集は完全の英譯を見た。律藏及中阿含の飜譯と鼎立して此本生大集の英譯はパーリ飜譯の三大事業の一としてよからう。

他の小部經藏の飜譯に就きては玆に譯者と出版の年だけ出して置く。

を屈してよからう。此歴史方面の開拓者と同時に出たパーリ研究の熱心家ウエスレー派の傳道監督ゴォジヤリー(Gogerly) 師は教理の方面で少くとも最初に數へらるべき人であらう。師は聖典飜譯(前を見よ)の外に幾多の名論文を殘した。此の人の下に働いたハーデー師 (Robert Spence Hardy) は錫蘭に於ける傳道上の功績多大であるが、師はパーリ佛教に就き二の名著を殘した第一は千八百五十年に出した東方僧院生活 Eastern Monachism で佛教僧侶の得度戒行儀式其他の僧院制度につき二十五章に別ち詳細の記述をした。此中佛傳及聖典に關しても言及した。第二は卽三年後に出した佛教提要 Manual of Buddhism で此書には佛教の教義に就き頗る重要の記述がある、此二書は直接ゴォジヤリーの感化を受けて出來たものだ。ハーデー師は佛教提要を出すに當り、其賣行を慮り出版の危險を公言したが、然し七年の後第二版が出て、今では兎に角パーリ佛教には缺くべからざる書物となつた。此次に紹介すべきは恐くアルキス (J. Alwis) の佛教論 Buddhism である、講演の筆錄ではあるが、今に價あるものである、雜誌に出たのが單行本として公刊となつた。次にはオルデンベルヒの佛陀、其生涯其教理其僧團 Buddha, sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde で初版は千八百八十一年に出て、爾來九十年に第二版、九十七年に第三版を出し、今や第五版に達した。第一版の公刊の翌年出たホーイ (William Hoey) の英譯も亦三版を重ねた。此丈でも此書の價値は充分に分らう。パーリ佛教の原材を巧妙に且つ周到に運用整理して獨特の秀麗な文章と精確の理路とで最も美く纒めてある。唯此書に惜む所は基督教の偏見がちらちら見ゆることであるが大體に於てパーリ佛教の傑作として上乘のものであるは學壇の定論である。幸にも三並良君の忠實

史料例せばグレー氏（James Gray）の覺音傳（Buddhago'suppatti）の樣なものゝ英譯も少くないが、今煩を畏れて此位にして置かう。哲學書對法集要の英譯 Compendium of Philosophy は近刊でもあるし且つリス、デギヅ夫人と緬甸（びるま）の學者アウン氏（S. Z. Aung）の共譯と云ふので重要な書であるは勿論、譯者の取合も一寸面白いから一つ付け加へて置く。

既上略述した聖典の出版及其飜譯の事業を概括すると、聖典原文は今や殆ど其全分の公刊を終らむとし、飜譯もリス、デギヅ、オルデンベルヒ、カウエル、ノイマン等の奮勉に依り、既に英獨の譯本を得たるもの尠からず、今や此事業は駸々として進捗しつゝある、其狀勢盛唐時代漢譯の隆昌なるにも比すべきであらう、唐代は無論奉詔譯（ぶぜうやく）の官業、今は民間學者や學會の事業だが、其飜傳の盛大と勇猛精進の努力とは確に相匹敵しよう、吾國の佛教徒や學者は確に緊褌一番の要がある。今や次に此譯經に依りて得た、研究の成績を一瞥しよう。

（二）　資料の整理運用——教理及歷史的の述作

歐洲に於ける佛教に關する著作に、パーリ聖典を度外視したものは殆どない。古ひ所でビュルヌーフ佛教史序論でも、亦新しい方ではケルヌの佛教提要（マニアルヲブブトヒヂム）でも何れも大部分パーリに觸れて居る。此點から見ると、茲に歐洲に於ける殆ど全部の佛教書を網羅せねばならぬ事となるが、併し今は直接パーリ佛教に關係の深い著作丈を擧げて、梵語佛典の材料を併用したのは、次章に出す方がよからうかと思ふ。

パーリ聖典を基礎として、佛教の教史に一道の光明を投げた最初の人は、先づ夫の大史の出版者タルナーに指

ワーレンは此知識上の勝景を翫賞し、厭まで其妙趣眞味を解得し、且つ人をして此奇勝を味はしむることに努力した。『飜傳の佛敎』は實に體讀色讀の溢れ出たものだ。獨逸語でワーレンの傑作に比すべきはノイマンの Buddhistische Anthologie（佛敎想華集は一千八百八十年）であらう。

次でリス、デギヅ翁の諸傑作は此項下に是非とも之を列せねばなるまい。小冊子ではあるが一千八百七十八年に初版をロンドンで出し、今や訂正に訂正を重ねて二十版已上にも及むで居る佛敎（Buddhism）は獨逸譯（プンクスト氏此の譯の出たのは十七版の後だつた）と和蘭譯（スティヒテル）も出た程の好著で、吾國にも一譯ある（初譯は二十有餘年前に出たが譯者を忘れた、最近の譯は赤沼智善氏が出した）。極めて普通に書いてあるが、確實な參考書である。千八百八十一年の Lectures on the origin and growth of Religion, as illustrated bysome points in the History of Indian Buddhism（印度佛敎史の或點より說明せる宗敎の起原及發達に就きての講演）はパーリの資料を充分に運用した立派な大講演で、夫のハツクスレー氏も此講演を大分材料にして千八百九十三年の大講演をやつた次でアメリカ宗敎史講演會での佛敎詳くは Buddhism: its history and literature で一般敎史とパーリ文學の一般を親切に講義してあり、今尚學徒の利益になる好著である、稍新しいのは千九百三年に『國民の譚叢書』中に出した佛敎印度 Buddhist India で通俗の書ではあるが、學術的にも價値頗る大に且つ其資料の精選した點に於ては其比を見ぬ傑作であらう。最近ロンドンで出た原始佛敎 Early Buddhism は廉價で而も良好な小冊子で初學者には特に最も妙だ。要するにリス、デギヅ翁は深遠該博の學殖と精透卓拔の識力を具有して

明暢なる邦譯が一昨々年の暮に出たから（京橋中橋梁江堂）、讀書家は强て獨英の書を贖ふの勞なく、此好著を翫味するの便がある。オルデンベルヒの好著に對して今一はワーレン氏（Henry Warren）の飜傳の佛教（Buddhism in Translations）で、此書は實は飜譯の項下に記すべき性質のものだが糸統組織は自家の頭腦に出て居るから、夫の經釋の文句の外自家の言論甚少なる往生要集を惠心作とする軌轍で、著述の方に廻はした。ワーレンは米人篤學の士、晩年は半身不隨で且つ脚部は全然用をなさゞる不具者であり乍ら、偉大の貢獻を佛教の研究界に致し、種々の貴重なる名篇の外、大版五百二十頁の大冊『飜傳の佛教』（一千八百九十六年版）は今に其不屈の精神と偉大な努力とを吾々に遺す。此書は全部を佛陀・有情・業果・禪定涅槃・教團の五章に分ち、一百二節の細目が設けてある。各項は悉く經律論の要文で、私筆は僅に各章の序文と脚註のみである。實に忠實精核の良書と稱してよい。纂譯の經論は四阿含、律の大小品、本生經、法句經釋、那先比丘經、淨道論等に亘り、就中雜含は十二文、淨道論は二十二文を譯し此等は何れも他に飜譯がないから、非常に貴重のものである。其他本生經大序の英譯も頗參考となるべきものだ。吾々は此勞力多き書を讀みて、癈疾の學者が熱心に佛教研究の中、其塵世の苦痛を忘れた有樣を想像すると、實に景仰の情に堪へぬのである。ワーレン曰く

佛教の研究に於て我が實驗したる法悅の大部分は、其獨特の奇趣を有するに由れり。我は之を知識上の勝景 intellectual landscape と呼ばむ。惣ての思想立論の方法、其假定の立案さへも、吾が平素の見る所のものと全然差異し、泰西の思想形式に全然相當らざるものあり。

たから略しく置く。最近の書で佛教に同情を以て書いて居るのは、獨逸の青年學者ダルケ（Dahlke）の諸著作で、中には英譯のあるのもある。一寸見てもよからう。基督教の學者が書いた佛教に關する諸書は今甚だ少くはない。ダルマン（Dahlmann）ジルベルナーゲル（Silbernagel）ハックマン（Hackmann）などの著作は、此例に供すべきものである。此等は佛教徒が見て以て他山の石となすの外、學術的の研究として、餘りに宗派的根性の偏屈の書である。

特殊の研究、例せば佛教哲理の方で言へば涅槃に就てとか、婆羅門哲學及ジャイナ教との關係とか、若聖典學の方ならば本生經の研究とか、教會史の方ならば佛陀涅槃の年代とかに就きては、諸學者の有益な論文が英獨佛米露の諸學會の會報に散見し、特にパーリ聖典會誌には、種々重要な材料が載せてあるが、餘り專門的になるから大體之を略することゝし、其の中代表的のもの例せばウエスターガールド（Westergaard）の Über der ältesten Zeitraum der Indischen Geschichte（ステンツラー氏丁抹語よりの獨逸譯、印度史最古の年代に就き、一千八百六十二年）の如きは佛陀涅槃の年代を定めた傑作だ。佛陀非實在說で一時學界を騷がしたセナール（Senart）の Essai sur la Légende du Buddha（佛陀の小說に就きての論、亞細亞協會雜誌に出てたのを單行本として再版までである名著）の如きは一寸記憶して置いてもよからう。尙此等歐洲人のパーリ研究に就き、漢譯藏經の側から一新方面を拓開したのは吾國人で、多少は國家文運の爲に傲るに足ると思ふから特に玆に添へて置く。それは高楠順次郎と姉崎正治の兩君である。高楠氏は後にも記述するが、パーリ佛教文學講本の好著がある外に、善見律

而も明白平易に深い理窟や複雜な歷史文學などを叙述する材幹を有して居るが、此通俗にして學者の態度と威嚴とを失せず、立言精確引證該博で毫も衒學の腐儒臭なき所に多大の尊敬を拂はねばなるまい。翁の著を出しただから序と申しては失禮だが最近に英國の『家庭大學叢書（ホームユニヴァーシティ）』の中にある翁の夫人カロリン女史の『佛教』を一つ紹介して置く。讀者は五十錢銀貨一つで此最近研究を網羅した閨秀佛學者の名著を座右に具ふることが出來る。

通俗講義に通俗書を紹介するのに不都合もあるまいから、今少し通俗の好著を出して如何に佛教研究が歐米の普通知識となりつゝあるかを證しよう。前にも申した通り、基督舊教（カソリック）の學僧エドモンド、ハーデー師はパーリの造詣侮るべからざるものがあつたが、流石は坊さん丈に通俗の好著も乏しくない。小冊子ではあるが一千八百九十年の Buddhismus nach älteren Pāli-Werken（古パーリ著作に依りての佛教）や、一千九百二年の阿育大王傳（『性格描寫の世界史叢書』中）や、千九百三年ギョツシエン叢書で出した『佛陀』やなどは何れも獨逸語の讀者に歡迎さるべきものだ。獨逸語の通俗書としては更に故ピツシエル教授の『佛陀の一生及教義』（『自然と　神界から叢書』一百〇九號）を薦めたい。是も頗る上乘の書だ。

尙パーリ佛教研究の勃興已來種々の書物が出た。例せば博識の名ありし伯林のバスチアン（Bastian）の Der Buddhismus in s. Psychologie（心理學上の佛教、一千八百八十二年）や、サンチレーヤ（Barthelemy Saint-Hilair）の Le Bouddha et sa Religion（佛陀及其宗教一千八百六十二年此書はパーリ研究の外ホヂソンやビユルヌーフの業績を湊合した書で英譯もある）などは一寸有名なものだが、今は稍陳腐に屬して學人の顧眄を去つ

ーフ（一千八百二十七年）ミナエフ（一千八百七十四年）の文典が出版された。此間ギエンナの碩學ミユーラー (F. Müller) が一千八百六十七年から三年間に亘りて、パーリ語の知識に貢獻 Beiträge z. Kenntnis d. Pāli Sprache を三卷の大册子で公表し、ミユンヘンのクーン (Kuhn) は之に劣らずパーリ文典に貢獻 Beiträge z. Pāli Grammatik（一千八百七十五年）を書いた。墺國及獨逸に於けるパーリ研究の盛大は、此研究に於ては先輩の位置あるスカンデイナビア半島の青俊學者を動かし、トルプ (Torp) はクリスチヤニアで梵語とパーリの語尾變化に關する一大論文を發表し（一千八百八十一年）、ロンドンに來て居たフアウスベエール門下のトレンクネルはパーリ雜纂 Pāli Miscellany を世に問ひ（一千八百七十九年）パーリ語學の研究は益盛大を致し、オルデンベルヒ・ウエーバー・ヤコビ・ピツシエル・ゴオルドシユミツド等一流の學者が種々言語上の論文を各學會の會報に出して、當時漸く歐洲に盛大となつたジヤイナ聖語との關係なども學苑の花を咲かせた。此如くして遂にフランクフルテル (Frankfurter) の Pāli Handbook（パーリ必携一千八百八十二年）やミユーラー (E. Müller) の A simplified Grammar of the Pāli Language（簡易パーリ語文典、一千八百八十四年）や、ずつと新しく緬甸蘭貢（ラングーン）パプテスト大學教授テイルベ (Tilbe) のパーリ文法の樣な簡易で而も完全な良文法が現はれ、誰でも容易にパーリを學習することが出來る樣になつたが、此際フアウスベエールの高足で現に同翁の衣鉢を襲ぎコツペンハーゲン大學教授であるアンテルゼン (Andersen) のパーリ讀本や我が高楠順次郎氏のパーリ佛教文學講本の樣な精密親切な辭彙を添へた讀本が出て學習者には一層の便利を與へ、また最近吾國には立花俊道君のパーリ

卽 Samantapāsādikā（サマンタパーサーディカー）の古い漢譯が藏經中に現存することを發見した功績がある。姉崎氏は四阿含の漢巴對照に力め、日本亞細亞協會々報の三十五卷に其成績 The four Buddhist Āgamas in Chinese（支那の四佛教阿含）を發表した。尙多少は整理を要する點もあるが、實に苦心の大作と稱してよい。經集（スッタニパータ）中の義足經（アッタパータ）を漢本と對校した杯は就中最も有益な研究だ。

尙パーリ佛教研究に關する原文出版著書及論文の書目はホプキンス(Hopkins)の好著 Religion of India（印度宗教一千八百九十六年版)の佛教の註に大抵は擧げてあり、エドモンヅ(Edmunds)がパーリ聖典會報(千九百二年）に掲載した A Buddhist Bibliography（佛教書史）は更に完全に網羅に力め一昨年ライプチヒで出たウインテルニツ（Winternitz）の Geschichte der Indischen Litteratur（印度文學史）の第二卷佛教文學の項下には、最新の結果を該羅した。本講は固より一班に過ぎぬのだから篤學の士は更に已上の書に依られたなら完全精密の所を知ることが出來やう。

（三）　パーリ語研究上の著作

パーリ語學の研究に就きては其一班の潮勢を略述してあるから、今は唯重要な書目を擧げる位にして此項を終らう。

パーリ語の最古い文典は千八百二十四年吾が文政七年に出來たウエズレー派の錫蘭傳道者クロオ(Clough)の A Compendious Pali Grammar, with a Copious Vocabulary in the same Language. である。次でビルユルヌ

らぬ尊敬をパーリ學界に有して居られる。

五　錫蘭緬甸暹羅佛教の研究　此章を終る前にパーリ佛教流行の地、即錫蘭緬甸暹羅に於ける歐米人の佛教研究は是非とも玆に添へる必要がある。三國の中で尤も研究の行屆いて居るのは勿論パーリ佛教の根原地でもある所から、どうしても錫蘭である。

錫蘭に就きての歐人の著作は隨分古代から存在する、珍らしい爲再版された、一千七百年代にヱネチヤで出版された西班牙の僧ヴズ（Vaz）の傳道史（A'Apostolo di Ceylan）を初め、一層古い所では十九年間も錫蘭に俘虜となりてカンディに禁錮されたノツクス（Robert Knox）の An historical relation of the Island Clylon in the Fast-Indies（東印度に於ける錫蘭島の歷史的關係、一千六百八十一年版）などは、娛樂用としても其傳奇的の冐險譚が頗る面白い。此等の古書中にも無論佛教に關する記事少からず。特にノツクスの書には、四百年前の僧院の生活や信徒の有樣などが畫の如くに描寫してあるので、教會史の資料としては實に屈強のものである。錫蘭が英領に歸してからは纏まつた歷史書類の著作が頗る多い。パーシヴル（R. Percival）ナイトン（Knighton）ファーゴツソン（Ferguson）テンネツト（Tennet）等の著書は此等の代表的著作であらう。此中ナイトンは古代史に重きを置きて精確の史料を用ゐ、テンネツトは基督教傳道史を主として之に佛教及婆羅門教の狀勢を交へ說く。其他獨逸文の書ではサラシン（Sarasin）ランソネツト（Ransonnet）等が全島人種學土俗學研究の好著中民間佛教に關して叙述したるをも一瞥し置くべく、概括的に諸家の說を纂述したるラツセンが『印度考古學』

文典（鶏聲堂發行）が就り、歐米パーリ研究の粋を拔き精を選むである。而して此等パーリ語學の發展に伴ひて其中心點となつて居るのは、前に一言したチルダースのパーリの辭典たること勿論である。然し此外にパーリ語學の淵源とも云ふべき、パーリ古文典の研究が現在の隆盛を産み出したことに注意せねばなるまい。今少しく此點につき一言し本項を終はらう。

パーリ文典の淵源は言ふまでもなく迦旃延(Kaccāyana)のパーリ文典で此文典の重要なることは最初ターナーが其大史の序文に於て詳細に説述し次でアルギス（Alwis）の論文が出（一千百六十三年）クーノの抄出がハーレにて公表され（同六十九年）米國ではメーソン（Mason）が英語の註解を加へて出したが、不完全のものだつた。遂にセナールが佛國で原文に佛譯を付けて第一篇だけ出版したが全部はまだ出版にならぬ。大體此文典は梵語で言ふと夫の波膩尼(Pāṇini)仙人の大文典にも相當すべき重大のものであるが今は餘り研究する人がない。蓋し餘り煩雜細瑣の爲だらう。其他の文法書で名義鬘 Nāma Mālā は須菩提師 Subhūti 氏が刊行し（一千八百七十三年）パーリ韻文の作法を示した韻原論 Vuttodaya は大佐フライエル（G. E Fryer）が英譯を添へて出版し（一千八百七十七年）、またミナエフが獨逸語の序文を付けて露國の一學會報で公表した。其他も種々パーリ語で書いた古文法書の出版があるが今は略し、一つ最重要なパーリ語の古字彙を擧げる。それは Abhidhānappa-dīpikā（名義明燈）で、千八百六十五年に須菩提長老の英語と錫蘭土語の解釋を付けた立派の出版である。此出版は歐洲の學界に非常の便益を與へ、夫のチルダースのパーリ字典も此書に負ふことが頗る多い、隨て同師は今でも少か

Singhalesen 1900 である。

古い方でウツパム (Upham) が集めた錫蘭古佛畫集の樣なるもの丶外、佛像佛畫の專門研究は考古學の一部として前に述べたギクラマシンハ等の報告已外まだ出來て居らぬ、儀式や祭事などを詳細に叙述したものも一寸見當らぬ。一般錫蘭佛敎の著書としては先に擧げたスペンス、ハーデイの著書を除けば今の所先づ、コプレストン (Copleston) の佛敎 (Buddhism) が最もよいだらう。

緬甸は現時南方佛敎活動の源泉である。敎典の出版も盛なれば研究も隆昌だ。パーリ語の學習も頗る整頓進歩しつ丶ある。ロンドンあたりに氣焔を擧げつ丶ある佛敎傳導も實は其策源地が緬甸にある。綠眼朱髯の袈裟かけた歐人の比丘僧等は大抵緬甸で得度した。此の如き形勢であるから、現時緬甸に關する記述は決して少くはない。特に『佛敎』といふ年四回の英文雜誌がラングーンで出て、是に緬甸の佛敎に關する重要なる論文が公表され、同國の美術も此雜誌で世界に紹介される所から現代歐米の讀書界には同國の佛敎事情が比較的によく了つて居る。

歐人の緬甸に關する古い著作も亦頗る多ひ。軍事別して英國が緬甸征服に就きての書は可なりにある。一般の歷史としてはユール大佐 (Yule: Narrative of the Mission to Ava in 1855) 牧師メーソン (Mason: Burma, its people and natural production 1862) ファイチュ (Fytche: Burma, Past and Present 1878) フォーブス (Forbs: British Burma & its People 1878) フェーヤ少將 (Phayre: History of Burma 1883) 英國緬甸公報 (British Burma Gazettee 1873—80) 等が其本據とすべきもので、此他に印度史家として著名なホイラー (Wh-

の第四卷錫蘭に關する項下も確に此下に數ふべきであらう。一般錫蘭に關する史書は先づ此位にし、已下各方面の研究に亘りて佛教に關係ある諸好著を紹介しよう。

先づ考古學の方面を見ると、英國が錫蘭占領後、鋭意古跡の發掘古碑銘の蒐集等に盡力し容易ならぬ力と財とを費し、其成績發表の公報として Archaeological Survey of Ceylon『錫蘭考古學踏査』を公刊した。此中見るに足るべきは同島の古都にして吾が奈良にも比すべき佛教古跡アヌラダプラ（Anuradapura）の調査報告で、數卷に亘り精細な記事がある。此他古碑銘古佛像等の發見に就きても佛教史上重要の資料が、十分あるが、就中錫蘭秘密佛教の遺物は、支那撰述の史書に同島密教隆盛の時代ありしことを記述するを確實に證明する。即金剛智や不空三藏時代に秘密佛教が錫蘭に隆盛であつた事が大日如來其他の像が發掘されたので立派に證明出來る此等の研究に就ては錫蘭學者ギケレマシヌハ（Don Martion de Zilva Wickremasingha）氏が種々重要な報告を前記の學報に出し歐洲の學會にも公表した、同氏はまた古碑銘の解説を『考古學踏査』の別冊として Epigraphia Zeylanica『錫蘭古碑銘』と題して一千九百七年已後出版して居る。

言語學即錫蘭の土語研究の方面も頗る歐洲學者の注意を惹いて居る。これは土語の文學に大史や島史等の史書飜譯の外、教理教史に關する幾多の優秀なる典籍を有し、純文學に於ても棄つべからざる色彩あるものがあるからである。此等言語上の研究に就きては歐洲學者の外に土人の研究家も少くはないが、此等を大成して系統的に纒めた傑作は伯林大學教授ガイゲル（Wilhelm Geiger）の『錫蘭人の文學及言語』Litteratur und Sprache der

ン（John Leiden）が緬甸の言語文學に關し不朽の著作がある。

緬甸はまた優秀な佛像佛畫の豐富なので有名だ。緬甸の聖像には雄勁とか崇高とか云ふ趣は少いが平和で溫雅で優美の點は確に各國佛教美術界に一頭地を拔いて居る。世界的の大佛像として有名なペグー市外の岩石を利用せる大涅槃像は身長實に百八十二尺に亘り其大に於ては世界無比と云はれるニスベツト（John Nisbet）が『英國配下の緬甸』Burma underd British Rule 1901 の中に記載したマンダレーにあるパーリ聖典を刻した——中に夫の那先比丘經もある——七百三十三枚の廣大な大理石碑や同地中央大塔に保存する金銀板に鐫刻した、聖典註疏なども是又世界一品としてよいと思はれる。凡そ此等の緬甸美術に就きては別に成書はないが英國や印度の諸學會の會報に屢有益有趣な研究報告が發表されて居る。

緬甸は古代建國の時より印度摩奴の法典卽同國ではダマタツト（Damathat）（Dharmaśāstra の轉訛だ）を共國法の大本とした。隨て此方面に關する歐人の研究報告も少くない。

緬甸佛教の歷史は佛教史の方で聊繩張外だから玆には略することゝするも已上擧げた歐人研究の一端を巧に咀嚼して之に支那所傳を參酌して同國佛教史の梗概を示したものが手近にあるから一つ紹介して置く。それは去年一月の『宗教界』と同三月號に連載した椎尾辨匡氏の『緬甸佛教に就いて』である。邦人の同國佛教に就きての記述は今の所之が一番完全なものだ。

暹羅は現近唯一の佛教國教の王國である。王家が佛教の保護も頗る厚い。先帝チユランロンコロン陛下が登極

eeler）やハンター（Hanter）の印度史中にも此國に就き詳細の記述を見。獨文の書ではバスチアン（Bastian）の『東亞國民』の第二卷及び前に擧げたラッセンの『印度考古學』の第四卷に此國に就きての說述があつて多少は參考になる。

然し同國佛敎に就き必らず見逃すことの出來ぬのは恐く下の二書であらう。第一は伊國の神父サンゲルマノ（Sangermano）の記錄で、此傳道者は一千七百年代の終りに緬甸に來りて熱烈に基督敎を傳道しアバやラングーンで頗効を收めて歸國した。記錄は一分は在緬の傳道中に成り一分は歸國後の筆だが同師の登天後百年を過ぎてラングーンの法官たりしジャーディン（John Jardine）が之を『百年前の緬甸帝國』The Burmese Empire a hundren years age. と題をつけて一千八百九十三年英國で出版した。此書中には緬甸の歷史法制經濟宗敎等を叙述し、佛敎に就きても相當に當時の佛を認むべきものがある。次は加特力敎の傳道者でアヴの僧正即緬甸の開敎總監として活動したビガンデット（P. Bigandet）の『瞿曇の傳或は譚』The Life, or Legend of Gautama 1866. で章を二十章に分ち之に各章に亘りて詳細なる註脚を添へて緬甸佛敎に傳ふる佛陀傳を精細に叙し阿育の奉佛緬甸の開敎につき親切に調べ且涅槃論につきては特に七編の論文を加へてある。緬甸佛敎を知るには此書は實に缺くべからざる寶典といふてよい。

此他緬甸の文學言語につきては醫學士ブチヤナン（Francis Buchanan）や博士フオルヒハムマー（Forchhammer）の著書が今に言語學者の重寶となり、蘇國の詩人で大小說家ウオーター、スコットの親友なりしレイデ

第貳章　梵語佛教聖典の研究

附尼波羅其他に於ける印度佛教

一　梵語佛教聖典　前章に申述べた通り、現存大乘佛教聖典の原本は悉く梵語で書いてある。詳言すると佛教特有の一種の梵語で書いてある。然し是は大體の話で其實法華とか楞伽とか般若とか華嚴とかいふ大乘經典のみが梵語で書かれてあるのではない。現に高昌や于闐の廢趾から發掘される古寫經を檢すると、中に梵語で書いた小乘經典の斷片が可なりに多數に發見される。伯林の故ピッシェル教授が、純粹の梵語である所の雜阿含經や法句經の斷片を報告した外に、現に筆者も中阿含や雜阿含など同種の斷片を多數に證定した。然し此等は最近發見の斷片で、無論完本ではない。最近スタイン博士が燉煌の千佛石巖から、大英博物館に持ち歸つた約一萬に餘る古寫經の中には、多數の梵本があるのだから、其中には或る完本の小乘經典が有在するかも知れぬが、今の所、完本の梵語佛教聖典といふと、先づ大乘聖書が主なるのだ。

一方パーリ語の聖典に對し、全然聖語を別にした梵語聖書があるからには、玆で勢何れが古いか、語を換ると何れが原始的であるかといふ問題が起る。此問題は聖典史上極めて重大の疑問で、且教理史の方面にも、甚だ深い關係を有し、夫の大乘非佛說なども、此疑問の解決次第で黑白の定まる一案件である。問題の重要なる此の如しであるが、今の所其答案としてはかくあるべしといふ假定說(ヒポテーゼ)の外、未だ確實の證據で決定(シュレッス)を與へるまでには立至つて居らぬ。然し大體の所は略見當が付かぬでもない。

二十五年の紀念に勅刊となつた暹字のパーリ藏經の如きは、世界の學界が今に感謝を表しつゝある。今帝ワジラジット陛下の佛教式の卽位大禮もまだ人の記憶に新しい。同國は此の如く今や佛教國として列强環視の間に異彩を放つて居るが、其佛法に關する歐人の著書は錫蘭や緬甸に比して甚だ少ない。

同國の歷史國狀を記述した旅行記や雜書は前の二國同樣可なりにある。ボーリング（Bowring: Mission to the Kingdom of Siam in 1855. 1857）グレアヌ（Grehan: Le Royaume de S. 1878）ボツク（Im Reich d. weissen Elephanten, 1885 獨譯）、ロスニー（Rosny, Ethnographie du S. 1885）コンラデー（Conrady: Geschehte d. Siamesen 1885.）等が重なもので、前にも出したバスチアン・ラツセンの大著中にも此國に關し重要の記述がある。言語及文學に就きては暹佛や暹英の辭書類文法書も少からず。コンラデーの諸著書の如きは言語學者の每に重要視する所である。暹羅先帝がまだ皇儲たるとき六年間宮廷の女官として怪腕を弄した女傑レオノーウエンズ（Harriet Leonowens）の回想錄の如きは古くはあるが、宮廷の事情や佛教の狀態につき捨つべからざる記事がある。或は天下の奇書と稱してもよからう。

然し佛教に關する成書としては唯一つアラバスターの書いた『法輪』Alabaster's The Wheel of the Law で題號に『近代佛教徒に由り暹羅の根源より說明せられたる佛教』と添へてある如く、三部に分れ第一は暹羅國務大臣で且つ佛教徒たる某氏との對話に基きて實際信仰を語り、第二は暹羅の佛教書に依りて教理概要を論じ、第三は佛足石等の研究を公表してある。

横無盡に婆羅門の大學者輩を說破した如く、刹帝利族の大哲人として婆羅門族を威服するには其崇高なる教理の內容と共に、また醇正雅な梵語の形式を要したことは當時の事情上、想像するに難くはない。これは印度の學者で佛教經典に通じたラーセンドララーラミトラ博士なども論じて居る。現今でも羅甸語が羅馬法王の宮廷では儀式語となり羅馬教會の通語（リンガフランカ）である如く、梵語は印度の教育ある階級の儀式語であり公語である。梵語を話さぬ人は、英國あたりで羅甸の素養なきを無教育者の標準とすると均しく印度では甚だしく輕侮される。而かも此の有樣は現代のみではない。古い古い吠陀の時代の昔からそうだ。此の狀勢中一代の人心を支配し千古の師表と仰がるゝ佛陀が全く梵語を話さぬとはどうも信じられぬ。ルーテルは羅甸語の耶蘇教々典を通俗の獨逸語に直して通俗語を教會語とした。然しルーテルは充分に羅甸語の知識ある學僧ではなかつたか。大小の差こそあれ、佛陀が通俗語の御說教が傳道上主であつたとて、其根基に當時教育の大本なる梵語の御素養が勿論缺けて居らなかつたことは、御傳記の中にも其影を認め得られる。

世尊は一面確に梵語で教理を御說明あつたらしい。故に教育ある婆羅門族の比丘等は無教育の共同學同信の僧侶の文法も正しからず、發音も醇雅ならざる俗語で聖典を讀誦することがどうも氣にくはぬ。其の一面は律の中に消息を傳へる。卽ち一婆羅門種の年少學者が新に佛門に入り、僧侶の讀誦する經文が文法や發音の過誤だらけなるに嫌氣を生じ之を世尊に申し上げた。すると世尊は一般比丘は已來文法發音に注意せねばならぬと訓誡されて、此等の學習を規定されたとある。是は恐く當時教團內の實狀であつた樣だ。實際右の如くでありとすれば、

此問題を定める前に、釋尊の御在世當時に溯り、世尊は夫の錫蘭佛教徒が確信する如く、摩竭陀國の俗語のみで御說法であつたか。當時印度の官話ともいふべき此俗語已外に一切梵語を御使用にはならなかつたか。といふことを定めてかゝらねばならぬ。現在のパーリ經典が無論釋尊の御直說其儘の速記錄ではないと共に、假令世尊が梵語を御話になつたとて、現在の梵語經典は其當時のまゝの敎場筆記同樣であるとすら常識上到底信じられぬことである。されば釋尊が梵語を御使用になつたことが見當が付いても、それが直に現在梵語經典の歷史的價値に左程の有利な證據を與へるものでない。然し梵語聖典の成立を論斷するには此事は頗强大の基礎になる。佛敎の敎會話は單に俗語のみではない、雅語も同等の資格があるといふ有力な理由になる。梵語を其聖語に定めた一派の敎徒の力强い心理的根基を說明するに都合がよいことゝなる。

釋尊の敎團は四姓同く釋氏と稱するといふ平等主義で、無學文盲の旃陀羅（せんだら・チャンダーラ）の劣種が修養次第堂々として阿羅漢の聖位を履むで、智識も門閥も最高に屬する婆羅門の學者と雁行するといふ有樣だ。且つ其の敎化は萬機普益を主として慈雨普く一切を霑すといふ御考であつた故、勿論俗語が公式の敎會語であつたには相違ない。然し舍利弗（シャーリプトラ）や目連（マハームトカラーナ）の樣な新進氣銳な哲學者、迦葉兄弟の如き門閥ある貴族に對し、之を攝化するに當りては、彼等敎育と門地を誇りとする婆羅門には、單に世尊人格の御力のみでは善巧方便が充分でない。必らずや深遠なる學問の方面から、解析窮理の御論議があつたと思はれる。而してこれは梵語でなくては權威もなく體面も保てない。世尊は夫のウパニシヤツドに出る韋提希（ヸデーハ）國の大王ジヤナカ（Janaka）が世界の本體精神の本元に就き、縱

此記事の正確なのは現に尼波羅で發見されて、十數年前パーリで出版になつた本行經の異本 Mahāvastu 卽『大事』は經題の最後に『聖大衆部中の世第一說部の誦傳する大事因緣』 Ārya-mahāsāṃghikānāṃ Lokottaravādināṃ pāṭena 'Srī-Mahāvastvavadānaṃ とあるので明に證明される。而して此大事は全部アバブランシヤ語の佛が躍然として居る。此他現時樺皮に書いた西域發見の法句經の異本がパーリと全く差異した方言で記してあることなども面白いことゝ言はねばならぬ。

斯の如く佛陀滅後、佛敎聖典は種々の言語で傳へられた。其中梵語を取つた一切有部は于闐國に盛であつた歷史がある故、同地から梵語の阿含諸部や法句經の斷片が發見されるのは寧ろ當然と思はれる。上座部が方言で傳へた聖典は今立派にパーリに書き直されて前章略述通の三藏の完備したものが殘つた。そこで彌今章に取扱ふべき梵語聖典の御話をする順序になつた。

現在の梵語聖典は其成立から見ると便宜上左記三種類に區別することが出來る。

1、一種方言の色彩を帶びた異體の梵語で書いたもの
2、方言の原書を梵語に直したもの、若くは之を敷衍したもの
3、梵語で書いたもの
　一　多少精錬を缺いた古典梵語で書いたもの
　二　純雅な文學的の梵語で書いたもの

此等の多數―殆ど全體―は大乘聖典で其成立の年代に就きては極めて古代に屬するものもあれば最も新しい著

佛在世から梵語で佛經を誦傳するを欲した一派の佛弟子のあつたことも想像するに難くはない。

佛陀の滅後に此等の事情から教派の分裂が避くべからざる結果として初まつた。黄金の寶杖が十八段に折れたといふ豫言は的中して、異部宗輪論等に記載せらるゝ各教派が七花八裂の勢で分岐した。此分裂は勿論教理上に其主因があるのだが、教團内に於ける種族の關係も考へねばならず。隨て其使用の言語の上からも考察する要がある。此分裂した諸教派の根本と云はるゝ四部即大徳・龍象・邊鄙・多聞（一切有・正量・大衆・上座を四つの代表的の教派とする）はワシリエーフの考へた通り各其經律論誦傳の言語が定つて居つて、序ての如く、梵語・アパブランシヤ・プラークリツト・パイシヤーチであつたやうだ。（梵語の外は何れも俗語方言で或は之を總括して、ブラクリツト中に入れる。パイシヤーチ即必遮舍語は其名の示す如く魔鬼語で最も劣等の方言である）。勿論此假定は大體論でアパブランシヤ・ペイシヤーチの如き言語は言語學史上一二の實際が殘存するのみてパーリや梵語のやうに豐富の文學があるものでない。隨つて正量大衆の諸部が果して現在殘存しつゝある此等の方言と同一のものを使用したか否かも固より疑問であるが兎に角諸部が種々の言語を用ゐて同一の聖典を種々に誦傳したことは、釋尊の御傳を書いた六十卷の本行集經の終に左の記事があるのでも明了であらう。

あるひと問ふ。曰く。何むが此經を名くべき。答て曰く。摩訶僧伽師は名けて大事と爲す薩婆多師は此尼を名けて大莊嚴となす迦葉維師は名けて佛生因緣となす。曇無徳師は名けて釋迦牟尼佛本行となす。尼妙塞師は名けて毘尼藏本とす。

とするのも無理でない。然し此大問題は、外面歷史的の研究と共に、內面教理發展の考察も必要であるから、此處ではあまり繩張の外に出ず先此位の所で切り上げるが、兎に角梵語聖典の成立は前記佛陀御在世時代からあつた一部學者派の傾向と共に又印度佛教が其存立と發展との上に、婆羅門教を攝化し統合して教權の威嚴を保持する點から、如何しても取らねばならぬ必要の手段として出來たものと推斷される。之に反して錫蘭に行つた上座派の佛教は勿論野蠻蒙昧な嶋國當時惡鬼の領分であると信ぜられた程の文學宗教と云ふ程のものもなかつた荒蕪の開教地である爲め印度俗語の聖典で大威張で推通すことが出來たのだ。而して此地勢的文化を主因として分れたパーリ及梵語の聖書には之に附隨して其他教統攝の能力や同化の適應性や進取改善の發展性などに、自然差異が出來て來た。これは佛教々理史の方で種々面白い實例もある。充分に取調も學者間に屆いて居ることだ。

だが玆で一つ斷つて置く必要のあるのは現在のパーリ經典と梵語聖書との新舊だ。これは往々世の學者が過信する樣に、單にパーリを純粹なもの古いものとする譯には行かぬ。勿論梵語の中にも祕密聖典などにはずつと新しく晚唐宋初の誦出と思はるゝのがないでもないが。パーリの本生經中には之よりも新らしい部分がある。又屢此稿に出た夫の那先比丘經の如きはパーリ本は支那譯—此原本が何語であつたかはまだ分らぬが—に比べると頗る新しい後手の加筆があることが判る。此の如くであるから梵本皆新しからずパーリ悉く舊からず、畢竟はパーリも梵語も現在の外形の上だけでは其新古に付、何れに軍配を擧げるといふことには行き兼ねるといふことになる。

作も含まれる。而して其最古のもの﹅成立は何時頃だらうといふ問題は單に聖典史上の繩張のみじやない。實は印度佛教史最難關の一つで何れは其方面で御話もあらうが、夫の阿育大帝の勅碑には長含や增一や若くは『經集』『如是語』の中に現在する經文の名が見へ、同大帝の崩後久しからずして出來たバルフート佛塔の門墻には『知五尼迦耶者』Pañcanikāyika 卽四阿含及小部經藏の傳持者といふ名さへ刻された。卽印度佛教史に見へる第一結集の當時から初期の間は小乘聖典のみで大乘聖典の阿彌陀經とか法華とか云ふものは一向痕跡さへ見へぬ。されば勢四阿含などが所謂原始佛教の聖書で法華などはずつと後代に屬し、所謂第四結集の迦膩色迦王時代にても出來たかといふ假定が先づ普通の考で、常識上成程と思れぬでもない。然し一體阿育大帝の宮廷宗教は錫蘭開教其他の事情から考へると上座派に傾いたもので、云はゞ上座派は佛教各派中公認の國教の樣なものであつた樣だ。獨逸が新教を國教として國家の大典禮は此派の儀式で行はれ嚴重な詔勅などに此派の名が出る。隨て此派が萬般便宜の地にあるのは勿論だが、然し有力な舊教々會や其他の基督教諸派も同時に皇帝の保護を受けて人民化導に活動しつゝある。大帝當時も之と同じく特に上座派を優遇して其勅碑に該派誦傳の經文を刻したとて其同時に勢力ありし他の諸教派の誦傳の經文―同じ四阿含でも大分教理的內容の相違する―が存在せぬとは無論云へぬ。而して此他派誦傳の經文中には四阿含の外に小部經藏若くは雜藏中に方語で書いた華嚴大般若經の如きものが存在したらしい想像が出來ぬでもない。また梵語で誦傳された經典も當時少からず存在したとも思はれる。されば假令現在の法華や觀經は其儘の形で存在せぬとしても之が骨子たる大乘聖典の萠芽は四阿含已外に同時に存在した

恰も鎌倉足利時代の僧徒が假名文字や候や御の字入りの和式漢文（例の蔭涼軒日錄や甚しいのは了譽上人の選擇決疑抄直牒などが是だ）若くは歐洲中世一部僧侶の書いた羅甸語に比すべきもので正格醇雅のものでなく變則雜體の似梵語であつたのだらう。勿論此中には初め正體のものが傳誦の際展轉して混雜訛錯に陷つたのもあらう。教育や門地に非常の懸隔のある雜多の人々を包容した佛教々會にはこれは實に免れ難い現象と想像される。ウパニシヤツドなどが婆羅門種の水入らず傳誦した爲兎に角統一ある正體の梵語で殘つて居るのに比して、佛教文學は其傳誦の人に首陀もあれば毘舍もある、旃陀羅などいふ賤族もあつた爲に、玆で勢ひ原文の文法や語法に錯誤の出來るのは仕方がない。

第二種――方言の原書を梵語に直したもの若くは之を敷衍したもの――これは現存の大般若梵本や法華・華嚴・無量壽・悲華などの散文の部分である。これは前の偈頌の部分に比べるとずつと後代に屬する。

第三種は純雅の正體梵語で書いたもので、此中には最後代に屬するものが多數を占める。第一類は古典梵語で多少、精錬を缺いた點はあるが兎に角正格の梵語で書いてある聖書で、最古い所では金剛經や彌陀經、心經、稻蘚經といふ様なもの、中古では大乘莊嚴寶王經、瑜伽論菩薩地の如きものが其例になる、第二類文學的の梵語佛典中には一方には哲學的の著作や註疏類稱友の倶舍釋、月稱の中論釋、法稱の金剛針論の如きものがあり他方には純粹な文學的藝術品と見るべき馬鳴の佛所行讃聖天の本生鬘、寂天の菩提行經等が列べられる。

梵語佛教聖典は此の如くであるから其種類が頗雜多でパーリの様に整然純一のものでない。今此等の聖典が如

談が大分傍道に入たから此所から元へ戻るとして前に擧げた梵語聖典の種類を一寸實例に照らして說明する。

第一種――一種方言の色彩を帶びた異體梵語で書いたもの―は佛教梵語聖典中で最も古代に屬する者である。嚴密な梵語學者は之を梵語と認めぬ。矢張り夫のアパブランシャ語の一種とする。それは其文法に異例多く、長短聲の流通、單複數男女性の如き極めて重要なる區別が自由に轉換流用され且往々に吠陀時代の古文法やパーリに類した語尾變化なども交錯するので、普通梵文の知識丈では到底之を快讀することは出來ぬ。アパブランシャ抔いふ輕蔑の惡稱も此點から見ると無理でもない。然し佛教研究家は流石にそんな慘酷な名は使用せず。之を通途伽陀語 Gāthā Language 若くは伽陀方言 Gāthā Dialect の名稱を與へる。伽陀は佛教語の偈頌のことで詩體の文を指す。古代の大乘聖典は重に此詩體で書いてある故、其語に假に如斯名を冠せたに過ぎぬ。此伽陀語も決して一種のものでない。最古のものと最新のものとの間に幾段かの階段があつて精密にいふと時代分けにでもせねばなるまいが一般の研究はまた其處までは進むで居らぬ。兎に角大乘聖書中偈頌は可成の部分を占めるが此部分の原文は十に八九伽陀語で今に尙多數殘存して居るが散文體の伽陀聖書は實に乏しい。

實例に照らすと法華、無量壽、大莊嚴、悲華、十地、行願品等の聖典原文中其偈頌の部分は卽此伽陀語である。日本に傳はつた梵文中普賢行願贊は實に最もよい此語の標本である。散文體の聖典で此語で書いてあるのは、今の所唯一つの佛本行集經原文位のものである。

抑此の如き珍妙な梵語（伽陀語）は或る時代或る地方に存在して實際上使用されたかと云ふと恐くそうでなく、

天の賦せる最高級の知識能力を具へ、圓滿の鍛煉を加へ、不屈不撓の勢力を有してホッヂソン氏は公職に奉じ、到る處聲譽を揚げざるなし。而して勞作の成績は、偉大完美の學者として將又印度に於ける學術の最成功せる開拓者として頭等位に彼を置きぬ。

此の印度學術の開拓は氏が副公使より正公使に榮轉して尼波羅にあること前後二十餘年間の活動で、其中佛教の研究に於ては眞に新生面を開拓したのだ。氏は尼波羅に入るや直に佛教の研究に着手し佛僧等と交遊して教義を問ひ且つ聖典の蒐集に力め一千八百二十六年『亞細亞研究(アジャティックレサーチェス)』の第四卷に『尼波羅及西藏の國語文學宗教撮記』"Notices of the Language, Literature and Religion of Nepal and Tibet" を其報告として佛教の梵語聖典につき其豐富の現存を世界に公表した。此名篇は直に歐洲學界に大反響を起し、當時學界の天才たる佛國のビユルヌーフの如きは非常に之を讚嘆して『佛教史序論』中辭を極めて氏が功業を頌した。パーリ聖典のみが佛教だと思ひて之にさへ驚嘆して居た歐洲學界に尨然たる佛教梵語の聖典があるのが知れたのだから其反響の大なるものも尤なことだ。かくてホツヂソン氏は全力を集めて聖典の蒐集に力め其目錄の發表と共に『尼波羅佛教經典を基とせる佛教略論』Sketch of Buddhism, derived from the Buddha Scriptures of Nepal. を書き、引續き他の佛教に關する重要なる論文を主として『印度亞細亞協會雜誌』に公表したが、一千八百七十四年に此等が纒まり Essays on the Language, Literature and Religion of Nepal and Tibet (尼波羅西藏の言語文學宗教論) として出版された。氏が集めた梵語聖典は全體で實に三百八十一部の新古の寫經で此中勿論多くの復本もあつたが、

何にして蒐集せられ又如何にして研究せられたかを左に略述することにする。

二　梵語佛典の發見と蒐集　梵語の佛教經典即大乘聖書の歐洲に知られたのは實にホツヂソン（Brian Houghton Hodgson）の功である。大乘經典原文の研究に於ては此の絶大の精力と驚くべき該博の學識を具へた偉人に永久の感謝を捧ぐべき義務がある。ホツヂソンは一千八百年英國 Cheshire の Presbury に生れ、十八歳雄志を懷きて一管の筆を力に印度に航し東印度會社に入り甲谷他到着後フオート、ヰリアム高等學院に在學して一年間東洋外交官として必需の訓練を受けたが、其成績非凡拔群の爲、二年の後は早くも波斯クマヲンの外交官補に任ぜられ、次で尼波羅首府カツマンドウの副駐在公使に榮轉し益々卓拔の外交的技倆を發揮し外務省波斯局書記長代理尼波羅遞信管理等重要なる官職に累進して功績を擧げ一千八百三十三年終に尼波羅駐剳公使となつた。其後十年間此職にあり英國が印度經營の最も危險で且つ困難なる中に立ち大に本國の爲に畫策努力する所あり非常に功勞があつた。一千八百四十八年退職の後は雪山の勝地ダーヂリンに隱棲を卜して其精緻周到の頭腦を科學文學の方面に向け動物學の研究は特に一頭地を拔き幾多不朽の名篇を殘し言語學人類學に於ても今に學者の珍重する豐富の貢獻をしたが其の本領たる政治的の論策報告の如きは印度貿易の擴張に兵制の改革に民刑法の制定に光彩陸離として、遠大周到の大經綸を立てゝ居る。ホツヂソンは斯の如く外交家學者文士として内外の尊敬を一身に集め、且つ此間尚國事を忘れず、一千八百五十八年の印度内亂鎮定の如き氏の力與つて大なるものがあつたが終に九十四歳の高齢で終つた。ラーヂエンドララーラミトラ博士が左の如く讃美したのも尤だ。

此梵語聖典の新發見卽第一回の聖典蒐集は、歐洲の學壇に大反響を與へて夫のビュルヌーフの傑作、『佛教史序論』が出る、法華經の佛譯が新刊される。佛教研究の勇士は此處でパーリ聖典研究の外に新しい豐穰の收獲を期すべき他の原野に奮ふて進軍した。此研究成績の一般は次段に述べることゝし、更に進みて第二回尼波羅聖典蒐集の顚末を略述する。

ホツヂソンの尼波羅公使辭任の後約三十年、公使館付の醫官として赴任した軍醫正（サージエントメイジョァ）ダニエル、ライト氏 (Dr. Daniel Wright) は當時ケムブリツヂ大學の教授たりし令兄ウヰリアム、ライト氏が、同僚たりし梵學界の泰斗カウエル教授から相談を受け、同大學の爲に尼波羅の聖典蒐集を依賴したのを快諾して、醫務の餘課大に蒐集に當り、一千八百七十三年の春より同七十六年の夏に亘り三年有餘心力を費して集めた佛教及婆羅門教の古寫本類八百五十部に達した。實に大成功と云はねばならぬ。此中佛教聖書は三百二十五部の多數に上り。其種類の豐富なると復本の多き優秀なる古寫經の夥しきは第一回蒐集に比して確に數等の上にある。卽ち夫の荻原雲來君が證定整理した千二百年前の瑜伽論菩薩地原文の如きは珍中の珍で、八千頌般若の如きは八部、孔雀王經、隨求陀羅尼等を含める五大護秘經の如きは新古合して十部までも、復本がある。此珍奇豐富の典籍を珍藏するケンブリツヂ大學は實に羨むべき至りである。此珍籍奇書の總目錄は梵語佛典には少からぬ功勞のある故ケンブリツヂ大學教授ベンドウル (Cecil Bendall) が一書を著した。Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge 1883.（ケンブリツヂ大學圖書館藏佛教梵語寫本目錄）卽是れだ。此書は目錄と

氏は此貴重の蒐集、當時では世界無二の珍品を左の如くに處分した。

▲ベンガル亞細亞協會文庫**百四十四部**　▲ロンドン皇立亞細亞協會文庫**八十五部**　▲印度局文庫**三十部**　▲オックスフォード。ボトレーアン文庫**七部**　▲パリ亞細亞協會及ビュルヌーフ氏へ**百七十四部**。

氏が新學問の普及の爲に偏く珍本を世界に分與した公正の精神は實に立派なものだ。特にビュルヌーフ氏の天才を認めて惜氣もなく多數の珍本を贈與した度量は見上げたものだ。印度にある百四十四部の梵典につきては印度人の碩學博士ラージエーンドラ・ラーラ・ミトラ（Rājendralāla Mitra）が詳細周到な解題を作り『尼波羅梵語佛教文學』The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal. Calcutta 1882 と題し今に學者座右必須の隨一の書である。英國皇立亞細亞協會の分はCowell（カウエル）とEggeling（エッグリング）が一千八百七十六年の同會々報に精巧な古寫經の寫眞版を添へて解題目錄を出したビュルヌーフが寄贈を受けた分及び佛蘭西亞細亞協會のを合せて百七十餘部は今パリの國民圖書館（ビブリオテークナチョナル）に珍藏せられ、パーリ及婆羅門教聖書の古寫本類と共にキャバトン（A. Cabaton.）が總目錄を公刊した。Catalogue Sommaire des Manuscrits Sanscrits et Palis 1907 がそれだ。

ホッデソンが獲た三百八十部の寫經中には貝葉本あり紙本もあつて貝葉本中には七八百年以前の古寫經も少くはない。佛國に贈つた分は多くは紙本であつたが、皇立亞細亞協會には多數の貝葉本を藏し四十華嚴や般若や祕密儀軌中には立派に七八百年前の奥書のある古經が少くない。印度にあるものは多くは紙本だが中に八千頌般若や孔雀王經の如きは古代の貝葉本で七百年前のものである。

であらう。喜ぶべきことである。而して之と共に歐洲に於ける此方面の研究に精細の注意を拂ふべきことが益切要を感ずる。

尼波羅梵語佛教聖典の蒐集と共もに忘るべからざるは夫のマックスミユーラー翁（Max Müller）が日本所傳梵語佛典の蒐集である。馬博士はビユルヌーフ門下の俊才として言語及佛教學の大家であつたこと、宗教學上忘るべからざる功績のある偉人たることは今尙學徒の記憶に鮮なる所であるが、今より三十四年前明治十三年南條文雄老師が故笠原研壽師と共に渡英して馬翁門下の人となり日本梵學界に新機運を開いた當時南條老師は石川舜台翁の依賴に依り日本所傳の梵文を訂正して日本に返送することを馬翁に懇願した。馬翁は是より大乘佛教の古國たる日本に尙梵文の存在すべきを思ひ特に南條笠原兩師の入門で至大の便宜を得たので法隆寺高貴寺其他の古刹に依賴し且つ故岩倉公等の盡力を借りて幾多の日本所傳梵文をオックスフォードのボドレーヤン文庫に收むることが出來た。此中法隆寺貝葉の如きは當時に於ては世界最古の梵書で、ホッヂソン、ライト等の集めた最古の寫經に比して一層古代のものたることが研究された。此時集まつた梵本は慈雲尊者及門下の苦心寫傳のものが多く、今の高貴寺攸人戒心和上や今泉雄作氏などは其書寫發送に就き非常に盡力したものだ。今英國に嚴存する此等の資料は彌陀經・金剛經・心經・行願贊其他の諸陀羅尼で、馬翁及南條笠原兩師はこの研究の爲に世界に其功業を認められた。

日本梵文の次に一つ添へて置くのは西域發見の古梵書で、時代に於ては尼波羅の寫經は勿論、法隆寺貝葉已上

して今に重要の價がある計でなく、尼波羅年代の推定、古梵字の研究等に就き現に學徒の指南として不朽の傑作である。

前後兩回の大蒐集で云はゞ尼波羅聖典獲得の遠征軍は一段落を告げたが。此後尚第三四回の小規模ながら周到の回收戰があつた。それは、前記ベンドウル氏の同國に於ける學術探檢と、日本にも來た、佛國のレギ（S. Lévi）教授の聖典搜索である。前者は一千八百九十四年に尼波羅に入り主として同國王室付屬のダルバール文庫（Dur=bar Library）で研究し極めて古代に屬する珍書の斷片を得た外五百部程の寫經を手に入れ、十地經や行願贊の斷片などは一千二三百年前の書體で非常に奇重のもの亦梵語で書いた律文の如きも世界唯一の珍品と云はれて居る。一八九八年に再度の尼波羅探險を企て九十部の古書を得た。ベンドウル第一回旅行の後二三年後搜索に來たレギ氏は字象學や歷史上の珍本や斷片は手に入れなかつたが、世に全く知れなかつた無着菩薩の大乘莊嚴論の原本を發見した。此他印度に居た英國の官吏や學者が時々尼波羅の寫經を手に入れ、大分民間にも散つて居る。

日東文運の進步と共に吾國にも尼波羅梵經が將來されることになつた。第一に來たのは河口慧海師が集めた五十餘部の經文で重に紙本である。第二回は京都大學の榊亮三郎氏が印度旅行の際獲た八十餘部の寫經で、中には八千頌般若の貝葉古寫經もある。第三回は今年新に到着した高楠順次郎氏蒐集の百餘部の梵本で種類も頗る豐富に且つ楞伽、本生鬘の如きは十二三世紀の古經で、まだ學界に知られぬ逸書も一二部はある。來年は第四回の河口師蒐集の分が將來されるさうだから、吾國の大學もケンブリツヂやパリに遜色なき佛敎聖典を藏するに至ること

甚だ煩雜に亘る樣だが、他日多少の參考にもならうから、玆に現存の梵語聖典で之に相當する漢譯のあるものを左に擧げる。

一般若部　△Śatasāhasrikā-Prajñāpāramitā（十萬頌卽大般若初分）△Pañcaviṃśatisāhasrikā-P.（二萬五千頌大品般若）△Aṣṭasāhasrikā-P.（八千頌卽小品般若）△Suvikrāntavikrāmi-P.（勝天王般若）△Saptaśatikā-P.（文珠般若）△Adhyardhaśatikā-P.（理趣般若）△Vajracchedikā-P.（金剛般若）△Prajñāpāramitāhṛdaya（般若心經）○此中理趣分だけは斷片で一本しか世界にないが、他は皆完本で何れも多數の復本がある。但し勝天王と文珠般若は其本至りて稀だ。

二華嚴部　△Daśabhūmīśvara（十地品）△Gaṇḍavyūha（行願品卽四十華嚴）△Bhadracaripraṇidhāna（普賢行願贊――行願品の結頌なるも別行す）

三方廣諸部　△Saddharmapuṇḍarīka（法華經）△Sukhāvatīvyūha（阿彌陀經）△Laṅkāvatara（楞伽經）△Karuṇapuṇḍarīka（悲華經）△Suvarṇaprabhāsa（金光明經）△Samādhirāja（月燈三昧經）△Lalitavistara（方廣莊嚴經）△Divyāvadāna　此聖典は約四十の譬喩因緣を集めた一大叢書で此十四の經典は十中の八九まで律部や方等部中に之に相當する漢譯が存在する。△Avadanaśataka（撰集百緣經）△Mahāvastu（佛本行集經異本）

四寶積部　△Rāṣṭrapālaparipṛccha（護國尊者所問經）△Kāśyapaparivarta（大迦葉會）△Sukhāvatīvyūha（無量壽會卽大無量壽經）

五秘密部　△Aparimitāyur-dhāraṇī（無量壽決定光明王陀羅尼）△Ārya-Tārābhattarikāyā nāmāṣṭottara Śatakā（讃揚聖德多羅菩薩一百八名經）△Bhūti dāmara tantra（金剛手菩薩降伏一切部多大敎王經）△Dhvajāgrakeyūrī dhāraṇī（無能勝幡王如來莊嚴陀羅尼）△Ekaviṃśati Stotra（聖救度佛母二十一種禮讚經）△Grahāmātṛkā（聖曜母陀羅尼經）△Heva=

の珍品が少くない。今まで明了になつて居るのはペドロブスキー・バワー・スタイン・第一回及第二回の蒐集品ペリヲ・レ、コツク等の獲得品で多くは斷片である。完全なものは纔に樺皮の孔雀王經、紙本金剛經、稻薛經位で理趣分や入諸佛境界經や法華なども比較的に殘存の紙數が多い方、法句經や四阿含などは僅か計りの斷片しかまだ判つて居らぬ。スタイン博士の第三回燉煌石崛の古書には完本の梵書も澤山ある樣だから、之が發表になるとホツデソンの梵語佛典發見當時と同樣亦學界に一大反響が起り梵語佛典の研究に大革命が來ると思はれる。

ホツデソン・ライト・ベンドール・レギの蒐集の尼波羅所傳の聖典、馬博士が日本から取寄せた古書、また近時中央亞細亞から發掘された幾多の逸書は、如何に研究され、如何に出版され其結果として如何なる新機運を佛教の研究に生じたか、之を述べる前に、一寸處理して置く一事がある。夫は一體現存の梵語聖典は如何なるものであるかといふ疑問の說明である。

三　現存の梵語聖典　日本所傳の梵經は其數纔に彌陀經・金剛經・心經・行願贊の四部に局り、他は陀羅尼計りである。西域發掘の經典は今の所完本極めて乏しく十の八九殆ど斷片零墨である。故に現存梵語聖典と云へば自然多數の完本を傳ふる尼波羅梵經を指すことになる。

尼波羅梵語佛典は前記の如く其種類が非常に多いが、重要の經典は大抵之に相當する漢譯が一切經中に見出される。然し經論の疏釋で全く漢土に傳はらぬものも殘りて居る。秘密聖典は種類最も豐富、漢譯の存在せぬものも頗る多數である。論理・醫學・星學・文法學の書物は全く支那に知られぬものが少くない。

那未飜のものが可成に多數だ。時輪儀軌 Kālacakra-tantra の如き、大黑儀軌經 Mahākaladantra の如き卷帙廣大のものも少くない。字彙類は漢譯としては僅に法集名數經限りであるが、西藏人の纂集した飜譯名義大集 Mahāvyutpatti は立派な梵語字彙として今に學者の珍重するもの。支那撰述の「梵語雜名」や「梵唐千字文」の樣な斷片的な貧弱なものでない。

四　梵語聖典の出版及び飜譯　前項に略述した如くブリアン、ホートン、ホッヂソンは實に梵語佛教研究の開祖で、梵語佛典の世界學壇に知られたのは一に氏の力であるが、氏は尙最初の梵語聖典飜譯者としての名譽をも擔ふ。氏が論集中文政十一年に公表して學界を驚した一大雄篇『尼波羅佛教聖典に基ける佛教略論』の典據文證を集記した『梵語原文典據の引證』Quotations from Original Sanskrit Authories は證義約九十文に上り、其多數は無論二三行の短文ではあるが小品般若、最勝名義經、其他に亙り顯密の諸經から要文を抄譯して居る。此年氏は亦金剛針論の英譯を完成して英國公立亞細亞協會に送つた。此論は佛教の見地から婆羅門教の種姓（ケーストシステム）主義卽四姓の差別を猛烈に粉碎して四民平等主義を發揮したもので其論法の銳利なる一切經中多く其比を見ない。且つ吠陀其他の婆羅門文學に出る典據や姓名が擧げてあるので梵文學史上には餘程面白い書だ（支那譯は此論の作者を法稱論師（ドハルマキールチ）としてあるが梵文には馬鳴作となつて居る、多分これは支那所傳の方が正當らしい）。ホッヂソンが此論の英譯は實に梵語佛典歐語譯の嚆矢である。此譯出てから數年の後、天保八年同氏が佛國に贈致した百七十餘部の佛教梵書に依りて言語學界不世出の偉人ユウジエン、ピュルヌーフ（Eugène Burnouf）が新研究を開始し

jraḍākinījalaśaṃ ara-tantra (大悲空智金剛大教王儀軌經) △Kāraṇḍavyūha (大乘莊嚴寶王經) △Mahāmāyūrī-vidyā-r=ajñī (佛母大孔雀王經) △Mahāmegha-sūtra (大雲請雨經) △Mahāpratisarā-dhāraṇī (大隨求陀羅尼) △Mahāpratyaṅgira-dhāraṇī (大白傘蓋陀羅尼經) △Mahāsahasrapramardanī (守護大千國土經) △Mahā-śītavatī (大寒林聖難拏陀羅尼) △Mantrānusāriṇī (大護明大陀羅尼經) △Mārīci-dhāraṇī (摩利支天陀羅尼經) △Nāmasaṃgīti (文殊所説最勝名義經) △Parṇaśavarī-dhāraṇī (鉢蘭賒嚩囉大陀羅尼) △Tathāgataguhyaka (一切如來金剛三業最上秘密大教王經) △Uṣṇīṣavid-yā-dhāraṇī (一切如來烏瑟膩沙最勝總持經) △Vajravidāraṇā-dhāraṇī (壞相金剛陀羅尼經) △Vasudhāradhāraṇī (持世陀羅尼經)。○此他漢譯と同名同種のもので纂集法の差異する陀羅尼集經 Dhāraṇī-saṃgraha の如き大集がある。此中には支那譯の千轉陀羅尼や六字呪王經等が含まれてある。○此項下を『新佛教』第九卷第二頁已下と御參照願ひたい。

六梵土賢聖著作　△Buddhacarita (馬鳴、佛所行讚) △Madhyamaka-kārikā (龍樹、中論本頌) △Bodhisattvabhūmi (無著、瑜珈師地論中菩薩地) △Sūtrālaṃkāra (無著、大乘莊嚴論) △Śikṣāsamuccaya (寂天、大乘集菩薩學論) △Bodhi-caryāvatāra (同著菩提行經) △Vajrasūci (法稱、金剛針論) △Dharmasaṃgraha. (法數名集經異本)

漢譯はなくて重要なる論疏は二三ある稱友の倶舍釋 Yaśomitra's Abhidharmakośavyākhyā 法稱の中觀頌釋 Dharmakīrti's Mulamadhyamakavṛtti 訶梨跋陀羅の大品般若釋 Haribhadra's Abhisamayālaṃkāra の如きは學者の研究が完成すると佛教學上に新資料を給供することゝなるだらう。記述類としては聖勇菩薩 Ārya 'Sūra の本生鬘 Jātakamālā――同名の漢譯があるが内容は全然差異し、且漢本はある異種の二書が錯誤して一つになつて居る様に見へる――などは單に文學としても非常に富膽優麗の傑作である。秘密部中後代に屬する儀軌類には支

ユーラーやセナールの様な一騎當千の士雲の如く集り、研究は續々として高等學院から出た。ホツヂソンが特に其蒐集した珍奇の佛教聖典を遠く佛國に寄せたのも實に氏が英名を敬慕して其運用効果の偉大を豫期したからで、氏はまた此珍貴の資料を充分有益に運用し雄大な新研究の基礎を開拓しホツヂソンの熱望を豫期已上に滿足したが、惜哉壽命は僅か人間の定命を超ゆる二歲、前記の如く嘉永五年（一千八百五十二年）五月二十八日に幾多の傑作を殘して登仙した。此傑作中には前記の二大著書は勿論、現に印度韋紐派の最大神聖の經典である、卷帙廣大な薄伽梵布羅那の校訂出版及飜譯、ゼンドアベスタ及ヤスナ、ベンジダード等に關する浩瀚なる著作印度波斯の言語及文法に就きての諸作等著書は眞に等身所ではなく其が何れも、萬古不磨の名篇であつた。氏が詳傳は弟子のバートレミー、サンチリヤの『ユウジエン、ビユルヌーフ彼の著作彼の書簡』Eugèn B. ses travauxet sa corr-espondance 1892. ベルガー、『ユウジエン、ビユルヌーフ』Berger: Eugèn B. 1983. モール『東洋研究史の二十七年』Mohl: Vingt sept ans d'histoire des études orientales の第一卷に載せてある。

ビエルヌーフがパリで盛夏の太陽の樣に光焰を放ちつゝある間に、獨逸、露國若くは英國にもウエーバー、ラツセン、ミロノフ、ワシリエーフ、キヨソペンカウエル、マクスミユーラー等の俊傑連が舒々に頭を擡げて來て、梵文學の上から佛教を研究すると共に支那西藏の資料から新しい成果を學界に貢ぐ樣になつた。これがビユルヌーフ及其門下の研究と相待ちて梵語聖典研究の浩濤大波は澎湃として學海に壯觀を呈して來た。今其概要を左に記する。

夫の有名な『印度佛教史序論』Introduction àl'histoire d. Bouddhisme indien が八年の後弘化二年に出た。これは佛傳佛教教理の卓拔な研究と共に般若・楞伽・華嚴・金光明・法華其他諸大乘經の內容が撮むで書いてある。世界未知の豐富な資料は實に此大天才の頭腦と手腕で充分に料理され按排されて玆に梵語佛教研究の基礎は歐洲に立派に築かれた。妙法蓮華經の佛譯 Lotus de la bonne loi も此時代に出來た。此飜譯はビユルヌーフの生前に不幸公刊を見ることが出來ず。死むだ年、卽嘉永五年に門弟のモール（Mohl）が出版を終了して師の志を成した。ホツヂソンの金剛針論英譯はあるが勿論達意的のもので意味が通ずる程度を主として至極自由の譯だから、批評的言語學的の嚴重な意味からいふと此法華の佛譯が梵語佛典歐語譯一番鎗の功名となる譯だ。

玆で一寸ユウジエン、ビユルヌーフの生涯を窺はう。此人は享和元年（一千八百一年）パリで生れた。父は當時有名な言語學者、ルイ、ビユルヌーフで佛蘭西高等學院教授にパリ大學々監を兼ねた大學者であつた。幼時より出藍の譽があつたユウジエンは、早く東方言語學に精力を傾け、波斯語研究の傍梵語に精通しパーリ語の新研究を開拓し古代の楔形文字の解讀、波斯聖典ゼントアヹスタ及其註疏類、ヤスナの研究に就ては前人未發の議論發見をなし眞に此方面に一新世紀を劃した。氏は此の如く波斯語の方面で萬世不朽の功業が存在すると共に梵語の方面に於ても偉大の貢獻をなし富羅那（フラーナ）文學の研究は特に光彩陸離として現代まで輝いた。氏の天才は此の如くであつた故天保三年、シエジーの後を承けて高等師範の教官から佛蘭西高等學院の教授に榮轉した間に、世界學界の視聽を聳動し內外の碩學大家が氏に對する驚嘆と尊敬とは非常なものだつた。門下の俊秀はマツクス、ミ

於ては確に新天地を開きヤコビ、ロイマン等の名家を出し、此等濟々たる俊才と共同研究の論文は『印度研究』、『印度白描』、『印度探求』等に發表して一時東洋學の覇權を獨逸に握るの勢凄まじく當時英國牛津に梨俱吠陀の公刊『東方聖書大集』の發行、宗教學比較言語學の新研究等で盛名一世を壓したマックス、ミューラーと恰も東西兩大關の格で相對峙し兩者門下生の間には隨分思ひ切つた論戰も時々火花を散らし、學界に活氣を添へた。ウエーバーは此の如くして獨逸梵學界の中興で現在獨逸諸大學の梵學者は半ば氏の門下から出て居るが梵語佛教聖典の研究としては僅に金剛針論の校訂飜譯あるのみで、マックス、ミューラーが幾多の佛教梵書を刊行したのに比すると聊か寂寞の感がある。馬翁門下には南條文雄老師や高楠順次郎氏が吾國に其學統を傳へて牛津の佛教梵語研究の種は吾國に美しい花を咲かせつゝある。之に反してウエーバーは姉崎正治氏などが明治三十四年に其登仙の前一寸講莚に列した位で、直系の梵語學統は吾國に傳らぬ。然し氏が秘藏の高弟であるストラスブルグのロイマン博士の下には金剛針論で少かに存した一條の清流が、漸く大江の偉觀を呈して、佛教梵語の研究が汪洋の壯觀を極むる趣がある、隨つて伯林學統はストラスブルグを通じて常磐井新法主や荻原雲來氏等に依り吾國に榮へて茲に梵語の獨逸派と英國派は日東で結合される喜を見るだらう。馬翁門下やロイマン座下の研究成績は次に說くことにする。

　ウエーバー對馬翁の關係は種々の點から見て趣味があるから一寸記したが、ウエーバーの金剛針論公刊後、梵語佛典の研究につきては唯今記した馬博士の活動までは大した公刊や飜譯も出て居らぬ。唯印度で Satyavrata

大天才ビュルヌーフの死後ホツヂソン蒐集の經卷に就きて研究を公表したものは七年の後安政五年に印度に起つた。それはラーゼンドララーラ、ミトラ（Rajendralála Mitra）であつた、佛傳方廣大莊嚴經 Lalitavistara の校訂出版を企て第一輯を嘉永元年初めて梨俱吠陀を公刊した、印度古典出版叢書『印度文庫』（ビブリオテカインディカ）に出した（此の大莊嚴經出版は漸く明治十年に完成した）。ミトラは印度甲谷他（カルカッタ）に生れ孟加拉亞細亞會協（ベンガルアシャテックソサイテー）の司書から累進して終に同會々頭の榮位に上り世界の東洋學會から尊敬一身に集めた偉大な學者で且非常の能文家佛教の研究には前記ホツジソン蒐集梵典の解題を初め、佛陀伽耶（フッダガヤ）の研究其の他考古學上幾多の好著を殘し、宗教及哲學の方面にも瑜伽哲學本經の出版飜譯を初めとして大なる貢獻をなし、明治二十一年六十八歳で死むだが、前記佛典の外頗る老境に及び明治二十年から翌年にかけて小品卽八千頌般若原文 Aṣṭasāhasrikā Prajñapāramitā の校訂公刊を同じく『印度文庫』で出した。ミトラの大莊嚴經第一輯が現はれてから二年、當時漸く天晴の武者振を東洋學の陣頭に伯林から見せた、アルプレヒト、ウエーバー（Albrecht Weber）が前記金剛針論の原文を校訂して之に精確な獨譯と註とを加へて伯林學士院の報告として出した。（一千八百六十年）。ウエーバーは馬博士の誕生に後るゝ二年文政八年ブレスラウ大學經濟學教授ヱネデイトの子として生れ、同地ボン及伯林大學で言語學を專攻し業を了へて後伯林大學留學生として英佛に遊びウイルソン、ビュルヌーフ、レナウ、モール等の諸大家に親炙し伯林に復命したのが二十四歳で直に大學に講師として入つた天才の早熟驚くべきものだかくて氏は着々業績を發表し安政三年正教授に任じ幾多の俊才を門下に育成し夜殊吠陀（ヤジユールベーダ）の大出版其他の大著作を公にし特にジヤイナ教研究に

は豐麗富膽で文藝家としても優に一代を睥睨するに足る大手腕が、與つて大に力があつたらう。當時氏と對立した伯林大學のウェーバーは其深奧の討究と絕大の精力に於ては馬翁と難兄難弟の好敵手、伯林の夜殊吠陀出版は必らずしも英國の梨倶吠陀校訂に讓るまい。然し趣味の廣潤なると文藻の雄麗なると、新學術を普及せしむる手腕の快利なるとは、馬氏はウ氏に對し確に一頭地を拔いて居る。ウ氏も實際方面には一隻の青眼を有し特に宗教政策に就きては隨分熱烈の議論もしたがそれは寧ろ一部新教に局つたことで到底馬翁の博大な眼識で宗教の全體を觀照し自由討究及寛容主義の新基礎を開いたのには比すべくもない。これは『東方聖書全集』と『印度研究』とを對比すれば直ぐ判る。後者の深くして專門的な學究主義なのと、前者の博くて寧ろ啓蒙的應用主義なのは頗る面白い對照だ。馬翁が廣開包容（エキソテリック）を主とした大乘佛教聖典に晚年全力を傾注して此方面で偉大な相續者を作り、ウエーバーが、研究中心を內秘（エソテリック）、自守の風が嚴重に行はるゝジャイナ教經典に取つて此方面で衣鉢を傳ふる二三の大學者を遺したのも兩學者の學風から見て至極趣味がある。ウ氏は其嚴肅勁烈の性質から交友は極局られたものだつたが馬翁は嚴肅な學界にも花やかなサロンにも又は下層の社會にさへ其溫顏を現はした。馬翁の自傳たる『古き長き時よりこのかた』Auld Lang Syne を見ると此點が如何にも趣味深く味はれる。近日米國の慈善事業に關する一書を見たが其中不思議にも方角ちがひの馬翁の名が出て、翁が其家に時々來た乞食に關する逸話が引いてあつた。馬翁もウ博士も共に獨逸人ではあるが、紳士を仕上げる牛津と學者を育成する伯林との特色が自ら兩碩學に現はれて居るのが至極興味がある。

Samasrami(サマスラミー) が大乘莊嚴寶王經 Guṇakraṇḍavyūha の刊本を公表したことが一寸目に付く。此聖書は西藏佛教最重要の秘典として尊敬するもので觀音の功德と夫の唵摩尼(オムマニ)、鉢特迷(ハツドメ)吽(フーウ)の六字大神咒の偉力を極力勸說したものだ。漢譯藏經中の宋代の此經譯本は佛學者が殆ど其名さへ知らぬ樣だが西藏佛教の研究には重要此上もない聖典であるから一寸注意して置く。サマスラミーの校本は極めて貧弱なものだが梵漢對照には間に合はぬこともない。

かくて一千八百七十年代――明治三年から十年間――には支那西藏の方面にはフーコー、チョーマ、ビール等が盛に幾多の好著を出したにも關らず、佛教梵語の側には格別の校訂出版や飜譯は出なかつた。然し八十年代の初頭より九十年に亙りて英國に於ける馬博士やカウエル教授の活動、露國ではミロノーフの着實な研究、佛國ではセナールの大事業が着々進むで來たので佛教梵語界は大に發展の機運に向ふ樣になつた。

マツクス、ミユーラーは獨逸デツサウの詩家として知られたウキリヘルム、ミユーラーの子で文政六年極月六日呱々の聲を擧げ中學を出た後ライプチヒと伯林で梵語を修めパリに留學して大ビユルヌーフの門下で專心梨俱吠陀を研究し次で英國に渡り東印度會社の依賴を受けて梨俱吠陀全集の公刊を完了して盛名を學者間に擧げ來り牛津(オツクスフオード)大學の助教授(デユピティブロフエツサー)より進みて正教授となり明治三十三年十月二十八日登仙するまで其職にありて或は四十九卷の『東部聖書大集』Sacred Books of the East 公刊を企てゝ成就し、言語學宗教學等に幾多の雄篇を出して、學界に新研究の機運を開き、一時世界は此明星を仰ぎて牛津(オツクスフオード)を新學問の中心とする觀があつた。是固より馬翁が絕世の學識と精力及其崇高の人格に依ること勿論ではあるが一つには氏が趣味は如何にも廣く、其文藻

南條師の大著『英釋明藏目錄』が世界の學壇を驚かした快擧あるをやだ。

單に有名なテームズの短艇競艚で牛津と常陸太刀山の好取組を見せて呉れる計でなく學術の研究にも好箇の競爭者の劍橋には、牛津の馬翁に對して夫のカウエル（Edward Byles Cowell）が教鞭を取つて居つて體面を維持した。カウエルは馬翁よりか四歳の弟であつたが、牛津を出てから早く印度に航し三十歳のときに甲谷他、政廳梵語、大學の教官となり、二年の後同大學の總理に榮轉し、明治三年英國に歸り劍橋梵語教授に任ぜられ明治三十六年に逝いた。カウエルは印度哲學及戲曲の研究に深く特に印度方言には特色ある手腕を揮つた。詩聖カーリダーサの戲曲、『ギクラマとウルワシー』や各種のウパニシヤツト公刊クスマンジヤリや『一切見集』の樣な非常に頭腦を要する哲學書の校訂は氏が異常の技倆を學界に示して居るが、明治六年早くも佛教梵書研究の必要に着眼して尼波羅駐在の軍醫ライト氏に梵書の蒐集を依頼して前記の如く多數の古寫經をケムブリツデ大學に收め更に明治十七年にベンドール氏を大學基金でカートマンドに特派して一層豐富な蒐集に成功し、劍橋の圖書館は此點では確に牛津に一頭地を拔くことになつた。カウエルは此の如く鋭意に尼波羅佛教梵書の蒐集に力め劍橋をして此點で殆ど世界第一の名を得せしめたが、亦決して自ら此珍貴の資料を運用するに怠らなかつた。此努力は明治二十一年劍橋大學出版部から佛教因緣談大叢書 Divyā vadāna が出たので現はれた。本書は七百餘頁の極めて細字の校刊本で、約四十の經典を收めて居る、（前を見よ、）。カウエルは門下のネール（R. A. Neil）と共に此大事業に苦心し、劍橋所藏の珍本は勿論パリ、ペーターースルグよりも藏本を借れ入れて至難の校訂を終へた。カウ

明治十二年南條・笠原の兩師が東本願寺の留學生として馬翁門下の秘藏弟子となつた。梵語佛教聖典の研究は茲で一轉機を作つた。兩師は實に馬翁から梵學新研究の門戸に導かれた。然し事實上兩師の渡英は大に馬翁を刺撃し、二青年の護法篤學の熱情は暗々の中に馬翁に大なる進路を指した。馬翁が『牛津逸書集』(アンネ・ドータ・ラクツニエンシア)の中に公刊した、大無量壽・阿彌陀・金剛般若・心經等は實に此の結果に外ならぬ。

前に一寸書き殘したが馬翁は南條師の渡英前横濱に於ける一宣教師ヴラウン氏から『梵語千字文』を手に入れて日本に必らず佛教梵書があると考へた矢先であつたから南條師等の入門は實に渡りに船の喜びであつた。其處で前記の如く熱心に日本梵書の蒐集を續け、明治十四年に金剛經原文 Vajrachedikā Prajñāparpmtā を『牛津逸書』の第一輯の一卷として出した。此聖典は高貴寺傳來の古經に基きて伎人戒心師等の寫したものを底本とし之に支那で得た西藏所傳の二種の版本を校合して公刊したもので、最も貴重の出版であつた。二年の後明治十六年、南條師等が夢寐にだも其公刊を忘れなかつた、大無量壽經及阿彌陀經 Larger and Smaller Sukhāvatīvy-uha が『逸書』の第一輯の第二卷で馬翁南條共同の校訂で學界に現はれ、翌年續いて同叢書中に心經及尊勝陀羅尼原文が師弟合名の美しい情誼を見せて出て、且つ、印度字像學(バレヲグラフヰー)の大家たるビューラー博士が梵字々體の考證を付け其翌年には笠原研壽師苦心の遺稿、法數名集經 Dharmasaṃgraha の原文が、馬翁及少壯西藏學者として前途を囑望された、ウエンツエル氏の共同で同『逸書』中に美事に同師の學才を後昆に傳へた。かくて牛津に於ては馬翁及南條師の力で佛教梵語の研究は殆んど學壇の霸權を收めた傾があつた。矧むや此の間に後章細說すべき

フーコー（Foucoux）やフエーヤ（Feer）の様に偉大な西藏學者が早くから絶へず珍貴の佛教資料を學壇に供給した佛國は決してセナール一人に梵語佛教の研究を任して置かず此等の西藏學者も進むで梵書の方面に手を延ばして來た。卽フーコーは其專門の西藏譯大莊嚴經譯本の確實を證定せむが爲に、梵本の佛譯を企て、英國で法數名集經が出版になつた前一年、之をギメー博物館報に公表した。（Annals du Musée Guimet Tome VI Paris 1884.）。フエーヤも此時代に撰集百緣經梵文 Avadānaśataka の佛譯を計畫して次の十年の始、明治二十四年に刊行になつた。

東方經營の關係からシーフネルやシユミツト・ワシリエーフの如き支那蒙古西藏學者が早く佛教研究を鼓吹した露西亞には、其音樂や、戲曲に一種深痛な趣があると同じ佛教に就き深奥眞摯な研究をする學者が今に少くないが、教授ミナエーフ（I. P. Minaeff）は此時代で中老のオルテンベルグや青年學者チエルバトスコイに先だちて、確に代表的の人物である。此人の名著に『佛教論』 Буддизмъ （明治二十年彼得堡版）があるが全篇を二部の論述篇と材料篇に分ち其材料篇の中に頗る重要な三種の佛教梵書を收めた。其第一は卽飜譯名義大集（Mahāvyutpatti）で西藏で編纂した貴重な梵漢藏蒙の四語字彙でミナエーフは唯梵語の部分だけを出版した。此書は佛教研究家座右に缺くべからざる必需の書だが、ミナエーフの刊本が絶版となり且つ索引のないので不便な爲め、記者の同窓、博士ミロノーフ（Mironow）が索引付けて、ペータースブルグで校正再版し、日本では現に荻原雲來氏が雜誌『宗教界』の附錄として每號三四頁づゝ原書の漢文を加へ且鄭寧に是正して添付し、今や其

エルは、後に馬鳴佛所行讃 Buddhacarita 公刊を『牛津逸書』の中で出版し、(明治二十六年)、また同書の英譯を東方聖書集最後の卷に公にした(明治二十七年)。カウエルは此外に其得意の方言研究から大にパーリ語聖典の飜傳に盡力したが、これは前に既に述べた。

カウエルの功業を叙すると玆で劍橋の俊傑として一寸セシル、ベンドウル (Cecil Bendall) の業績を擧げる必要が出來た。此人が尼波羅に於ける聖典蒐集の功勞は前にも略記し、また其後期に於ける立派な仕事は別に之を記載するが、此の時既に秘密經典の研究に着眼し明治十三年早く大雲請雨經原本 Megha-sūtra を皇立亞細亞協會雜誌に校刊し、同く二十一年に秘密儀軌說話 Tantrākhyāna を同誌に發表して秘教の特色を示した。

英國に於ける佛教梵書の研究に對して此時代獨逸では一向に振はない。然し佛國と露國には確に英國に對峙するに足る研究者が出た。

ビユルヌーフの死後、佛國には其衣鉢を傳ふる學者が輩出したが、エミール、セナール (Emil Senart) は其中の傑出したものだ。セナールが大業は夫の本行集經の異本たる『大事』Mahāvastu の校訂出版で厖然たる六百三十頁の第一卷が明治十五年に校訂出板となり、第二卷が五百餘頁で九年の後第三卷がこれも同じく五百餘頁の大冊、次ぎて八年後の明治三十年に完結を告げた。此人が有名な佛陀大陽說を主張して佛國風の奇警の研究振を見せた『佛陀傳論』は『大事』第一卷發行と共に出で、此多年の苦心の間に育王碑文に就きての研究も大に學壇を賑はした。

帖を作つた。近時氏は職を高弟のスパイエル（Speyer）に讓り、隱退したが、先頃吾が南條師と共同校刊の法華原文が出た。これは後に更に述べる。

轉じて印度を見ると此時期にはラージエンドララーラ、ミトラの大莊嚴經の英譯が一部分現はれ（明治十四年から同十七年に至る）。また佛教詩聖クシェメンドラ（Kṣemendra）の書いた佛德讃嘆の叙事詩 Avadāna kalpulata の梵藏對校の出版を『印度文庫』の中で發表した（明治二十一年至同二十九年）。

已上極めて粗雜に千八百八十年已來十年間の經過を述べたか、次に明治二十三年卽西曆一千八百九十年から同千九百年まで十年間の概觀をする。

此十年間には梵語佛典研究史上頗重大なる事業が起つた。それは此期の半に露國學士院付屬の事業として成立した大乘佛教書出版會である。同會は廣く、未刊の梵語佛書を校訂出版して佛教文庫と稱する一大叢書を作る計畫で、世界の梵語學者に檄を飛ばして贊同を求めたが、梵佛書研究の機運に投じたものか大に學者社會の歡迎を受け劍橋のベンドウルは此叢書の第一卷として大乘集菩薩學論 Śikśā-Samucchaya の原文第一册を劈頭に出し（明治三十年）、一千九百年代に入り重要なる大乘梵書の出版が續々此叢書中に公にされる。實に此佛教文庫は梵語佛典の研究に於ては夫のパーリ聖典出版會と相並ぶべき最も感謝すべき事業である。而も佛教文庫がパーリ聖典出版會の私設事業なるに比し嚴然たる露西亞帝國の國家事業たるに至りては、同國が遠大なる東方經營の雄圖が玆にも窺はれて、吾國識者の奮起を促したい、少くとも東洋學特に佛教聖典學や言語學に於ては吾國が世界の

半に達した。京都の榊教授は更に藏文を添へて眞言宗の一雜誌に少々宛公刊しつゝある。第二は佛教梵語小字典(y-u-xe-biji-ias)で前者の撮要である。第三は即妙吉祥眞實名經 Nāmasaṅgīti(漢藏中に四譯ある)の校刊で、此書は後代密教の研究には缺くべからざる資料、且つ佛名稱揚の爲多數の單語が載せてあるから特に學佛者に便宜を與へる。尼波羅及西藏では此經頗重要の位置にあり、註疏類も少からず存在する。ミナエーフは又其後寂天論師作菩提行經原文(Bodhicaryāvatāra)を校刊した(明治二十三年)。此大乘佛教の理想修行を爛絢の文字で歌ふた詩篇は佛教文藝品として實に貴重なものだ。此人がパーリ語研究に於ける功績も梵語方面に劣らず非常に偉大であつたがそれは既に前に述べた。

ウェーバーが佛典研究は少かに金剛針論限で獨逸には四五の論文がある外此時代に梵語方面の佛教學者はなかつたが、ウ博士の高弟ケルヌ(Hendric Kern)(天保四年生)が和蘭のライデン大學に立派な佛教學の根據を築き上げた。ケルヌは、印度天文學に關する困難な原文を校訂し瓜哇の古詩を研究した外に名曲サクンタラーの蘭譯もあり、師が監修の『印度研究』の中にも幾多の名論文を貢賦したが、佛教に關しては一時殆ど世界的の名著の名を博した『印度佛教史』(Geschie de nis van het Buddhisme in Indië)二卷を明治十四年から三年に亘りて發表したが、其名著の點から直に獨逸譯も佛譯も出た。ケルヌは尚研究を進め、遂に『東方聖書大集』の第二十一卷として妙法蓮華經の英譯を公表した。其後本生鬘原文 Jātakamālā を米國で校正して出し(明治二十四年)。佛教學者として學者の尊敬を受け、其古稀の祝賀の爲め各國の學者が學術的の祝賀文を集めて、ケルヌ記念

は全篇の完譯が二種まであるが、梵本は長き已前から僅か十四章までしか殘存せず。甘露難陀（Amṛtananda）といふ尼波羅の學僧が補足したが無論この補足の部分は西藏や漢土の譯を參照したものでもないから、原文の俤は全然ない。此年からジャイナ教や古文字の研究で有名な博士ヘルンル（A. F. R. Hoernle）が西域發見の樺皮に書いた五十餘枚の梵經を寫眞版で全部公刊し、之に羅馬字の音譯と英譯とを添て出し初めた。此珍貴の資料は、バワアー（Bower）大尉がカシュガル地方の發掘で、得たもので、ブラフミー古梵字で書いた紀元五世紀頃の逸品である。此の梵經中には占察藥法等が記してあり、占法には骰子を使用して吉凶を判斷する餘程奇妙な事が說いてある。此等は惜い哉漢譯のない經典だが、中に唯一つ孔雀王經 Mahāmāyūrīvidyārājñī の初の部分がある。古體の梵字而も樺皮に書いてあるもので實に面白い。

同九十四年マックス、ミューラーが無量壽經・阿彌陀經・金剛經・般若心經を英譯し、カウエルの佛所行讃英譯は、支那佛教研究の下に更に述ぶべき高楠順次郎氏の觀無量壽經英譯と合卷となり『東方聖典書大集』最後の卷第四十九卷に收められこの大乘佛教聖典で大集も芽出度終了した。

同九十五年。ケルヌ翁の高弟で現に其の衣鉢を襲ぎ、ライデン大學教授たるスパイエル（J. S. Speyer）が其師の校刊した本生鬘の英譯を出した。佛國ではブロネー（G. de Blonay）が『佛教女神多羅の歷史に就きての資料』Materiaux p. s. à l'histoire de la déesse bouddhique Tārā を公表した。此の書中には多羅菩薩に關する諸讃、讃揚多羅菩薩一百八名經、聖救度佛母二十一種禮讃經、其の他二三の梵讃文を纂集したもので、密教研究

アデンスを以つて任ずる自覺が强烈に起つて來ねばなるまいと思ふ。

露國の佛教文庫に對し印度にも同樣の計畫が起つた。西藏學者で佛教研究に努力した、サラット、チャンドラ、ダース (Sarat Chandra Dās) が明治二十六年に立てた印度佛教聖典及人類學會 Buddhist Text and anthropological Society of India がこれだ。此會は會報を出し聖典を出版し一時盛に活動したが今は一向振はぬ樣だ。會報中には大乘佛教特に西藏佛教に關する貴重珍奇の資料の頗る參考に資すべきものが多い。出版の方は Candra（チャンドラ、）Sāstri（シャーストリ）や Vidyabhuṣāna（ヴィディヤブウシャナ）等の印度學者が校訂したもので、出たのは左の通り。

△Mādhyamikāvṛtti（月稱論師作、龍樹中觀疏釋）△Suvarṇaprabhāsa（金光明經―一部分）
△Laṅkāvatāra（楞伽經―僅に初めの部分）△Samādhirāja（月燈三昧經―半部）
△Karuṇapuṇḍarīka（悲華經）△Bodhicaryāvatāra（ミナエーフ、氏刊本再版）

此等刊本の多くは校訂亂雜粗笨、到底嚴密な學術用に使ふことは出來ぬ。金光明經の如き特に甚しく、二三箇所に脫文や倒置などさへある。『印度文庫』は此期中に十萬頌般若梵本を出し初めたがまだ容易には完了せぬ。

此期中に出た原文出版と飜譯とを略年代順に左に錄する。

千八百九十二年（明治二十五年）佛國の支那學者アルレー (C. de Harlez) が金剛般若經の佛譯をパリで公にした。

同九十三年前にカウエルの略傳下に記した如く佛所行讃（ブッダチャリタ）の出版があつた。此佛教大詩人馬鳴の名作は漢藏中に

中集菩薩論公刊につきて左の記事がある。

　僕曾て獨國ストラスブルヒに在り、此時氏はケムブリッヂ大學梵語講師として斯學の研究に身を委ねたり、一九〇一年に龍動なる皇立亞細亞協會雜誌に氏が曾て尼波羅にて發見せし Śikṣāsamuccaya の中の炙身塗炭等苦行に關する引文を揭げ古代宗派に就き論ぜしことあり、僕偶此を讀み漢譯に對照し異點を指摘し氏に送り、且同書は北宋の代法護等に由りて漢に譯せられ、題して大乘集菩薩學論（縮藏暑三）と云ふものなることを知り、此事を氏に通ず、これ僕が氏と相知の始なり、當時氏は該梵文を彼得堡大學の計畫になれる佛敎叢書（ビブリオテカブッドイカ）の劈頭として出版に從事しつゝありしなり、此書は表題の詮するが如く菩薩所應學の要文を諸の經論より援引し六波羅蜜を精髓とし此に連絡せる諸の要義を說く、事旣に佛敎の要義に關し所引の文又專門の典語を以て充さる是門外人の大に解釋に苦む所也………氏亦門外に在て此難文を出版せんとす其苦勞は察するに餘あり、氏は熱心に本文の研究に力め、所引の經論にしてケムブリヂ書庫に蒐攝せる梵筴は一々出所を探り、原文を對校し加之疑はしき所或は不明の點ある每に同本の西藏譯を參考し……尙不審の件は一々書を僕に致して漢譯に對照せんことを依賴し來れり、僕書來る每に同本の漢譯と所引經論の原文を英譯し、一葦帶水を隔てたる彼地に送るを例とせり、論中所引の文は百九種の諸種に涉り、現今發見せられざる經論も固より多く其中に引用せられありて、佛敎を根本的に研究せむとするものゝ一大寶典なり、此書の出版は一八九七年に着手し、一九〇二年に竣る、これ實に氏が一生の大業也。

　同く九十八年にベンドウル氏の最親友で梵語及西藏語の造詣深く、大乘佛敎の熱心な研究家白耳義ガン大學のヴレープサン（Louis de la Vallee Poussin）が『佛敎論』Boudohisme を公にし、其中に資料として二種の梵本を添へた。一は秘密敎書最上業燈 Ādikarmapradīpa で、他は薩提行經釋 Bodhicaryāvatāraṭīkā だ。共に漢

上には隨分重要の出版である。

九十六年には別にこれといふ程のものもないが、九十七年にはセナールの本行集經異本原文の出版も光榮に終を告げ、露國では之より十數年前（一千八百八十四年）に佛教因緣說話集賢劫譬喩經 Bhadrakalpāvadāna（漢譯はない）を校刊し、立派な論文を添へて學壇を驚かし、此當時は旣に露國學士院の有力者として事實上『佛教文庫』の主幹であつた、露國のォルデンブルグ (Sarg d'Oldenburg) が西域發見の斷片を研究する傍ら五大護秘經 Pañcarakṣā の研究を初め、其一部の孔雀王經の校刊を出した。付けてある論文が露語の爲、汎く學界には行き渡らぬが、立派な出版である。此年また前記の如く大乘集菩薩學論の梵文が第一卷を『佛教文庫』で出した。校刊者ベンドウル (C. Bendall) は安政三年に生れ、學者としては實に短命とも云ふべき五十一歳で死むだ。此人は前後兩回の尼波羅旅行で、聖典蒐集の功勞非常に大なるのみならず、熱心精銳の佛教研究家で、業績も前に述べた如く大雲經校刊ケンブリツヂ大學所藏佛教梵書目錄で其一班を了すべく、量に於ても決しく少くはないが、其中一生の傑作とも云ふべきは、此大乘集菩薩學論だ。此書は全部殆ど大乘經典の引文で出來て居り、一寸『往生要集』の樣な編述法を取つた。引いた經典の種類は約一百餘種の多數に上り、中には三四頁に亘る長引文もあるので、佛教聖典史研究家には最も貴重の一書である。此書は此年第一冊が出で、六年の後漸く全部四冊が完結したが、出版に就きてはベン氏が其の序文に極筆稱賛の辭を呈した如く、實に記者の親友荻原雲來君の力與つて大であつた。ベンドウル氏が死後、荻原君は其略傳と業績の一斑を『哲學雜誌』(二百三十二號) に寄せたが、其

に苦心の如何に深かつたかは俄然として世を驚かし、苟も教育ある吾國の人士は何れも感嘆隨喜して衷心の感謝を老師に捧ぐるに至つた。公刊顛末及高楠教授の義氣でケルヌ氏との交渉其他の件は近刊の新聞雜誌に見へて居るから玆には略するが、唯ケルヌ氏は南條師の如き梵漢に通ずる眞摯忠實の佛教碩學が、多年の研究資料で助力せぬとすると或は氏は同經の英譯丈で梵本の出版は或は非常に困難に陷りはせなかつたかと云ふこと丈は特に讀者に考へて戴きたい。

佛教文庫の此期間に於ける偉大なる世界的の貢獻梵語佛典研究界に對する殊勳に至りては、已上の略述で大抵は解るが、此外に此期中尚注意すべき二三の出版がある。

其一は獨逸に於けるハイデルベルグ教授レフマン (S. Lefmann) 氏の方廣大莊嚴經 (Lalitavistara) の出版で、千九百二年に四百五十頁の頗美本の原文出版が公にされ、其後數年の後索引と校異が現はれた。十數年前に印度で出た、ラージエンド、フラーラ、ミトラの校本と比較すると、勿論幾多の改善した苦心は確に認められる。然し又印度版に劣つた點も多少はある。望蜀の情から云ふと未だ以て完美な校本とするに足らぬ。其二は卽佛國に於けるシルヴン、レギ (Sylvan Lévi) 教授の無著大莊嚴論 (Mahayānasūtrālamkara) の校刊で、レギ氏は此世界唯一の珍本を其尼波羅旅行で幸にも發見し、氏が深奧なる漢譯藏經を讀む力で、健氣にも漢本を對校して一千九百七年に原本の精美な刊本を世に問ひ續ひて流麗な佛譯で大に學界を驚した。

印度に於ても泰西の活潑な佛教研究が影響してチャンドラダースの様な熱心な研究家が、種々の研究論文を公

譯はないが、重要の大乘書だ。

一千九百年から現在までは概觀すると先目に付くのは『佛教文庫』が益々其活動を熾盛にして種々重要の梵語聖典が出たことだ。ハノイ極東佛蘭西學院長フヰノー(L. Finot)は千九百一年に護國尊者所問經(寶積經第十八會) Rāṣṭrapālaparipṛcchā を校刊し、翌年にスパイエル教授の撰集百緣經梵文 Avadānaśataka の校本公刊が初まり、其次の年にはヴレープサン教授の龍樹中觀本頌に月稱の釋論の付いた中論釋義 Madhyamakavṛtti の大出版が開始され、息をも續がずどし〳〵刊本が出で、百緣經は千九百年に芽出度終結し、百頁餘の精微を極めた研究論文が添付されて、學壇に出版者の蘊蓄を披瀝した。中論釋義は最近第六卷が出たが、まだ完結にはならぬ、『佛教文庫』は此の如く孜々として梵語佛典界に貢獻して居るが、其餘力を擧げて西藏原文の出版をも計畫し、此期中因明論の珍書 Nyāyabindu と其釋論がチエルバトスコイ (Stcherbatskoy) の手で現はれる、西藏佛像圖彙が出る、プサン教授は月稱の入中觀論 (Madhyamakāvatāra) の西藏譯を公にするといふ風であつたが、梵語の方では記者の同窓ミロノフ (Mironow) が飜譯名義大集の校訂出版を成就し詳察便利な索引を付けて、ミナエーフの刊本絕版の爲非常に困難を極めた學界の渴望を醫した。而して文庫最近の成績としては妙法蓮華經梵文 (Saddharmapuṇḍarīka) 校刊の完成だ。

妙法蓮華經の公刊は、吾國の南條師と和蘭のケルヌ氏との共同研究の結果で、千九百八年第一册が世に出で、昨年に至りて完結し、最近之が爲に盛大な祝賀會を催されて、久しき間隱れて居つた南條老師の功業の如何に大

を幸にも先輩土川善澂師の厚意で慈雲尊者手寫六本校合の珍本を手に入れる幸運などがあつた爲、之を尼波羅西藏の寫經や刊本と對校して漸くに公刊を終ることが出來た。

五　梵語佛教の研究　梵語佛教卽大乘佛教の系統的若くは歴史的の研究は、前既に申述べた通、ホツヂソンの公表した論文が恰も新大陸の發見の如く、未見未聞の廣大な寶藏を世に示して、學界の賞賛と驚愕の中に茲に新研究の端緒が開かれた。然るに機運の熟したるものか、同氏の蒐集した豐富な新材料は大天才ビュルヌーフの快手腕で充分に料理し咀嚼されて、時代を作つた大著『印度佛教史緒論』が新研究創業の大功績を學壇に立てた。此書中には大天才が卓拔の識見、炬に似たる眼光で教理と歴史に充分價値のある説述評論を遺したが、特に大乘諸聖典の解題は非常の苦心と該羅无碍の好頭腦とを遺憾なく發揮した。今でこそ此書に對し批議を加ふるの餘地が少からず存するなれ。當時新研究の劈頭に此丈の傑作を完作したビュルヌーフの偉材は實以て驚嘆の外はない。此書出でゝ已來佛教に關する著作は悉く範を茲に仰ぎ、斯學のアウソリテイとして今に其價を維持しつゝある。其一例として擧ぐれば氏の同窓クリスチヤン、ラツセンの印度學藝綜合の大傑作『印度古學』（インディッシェ、アルテルツームスクンデ）の第二卷佛教史に關する部分の如きが卽それだ。ビュルヌーフ出でゝ後、露獨の學者間に西藏及支那の佛教が漸次研究せらるゝに從ひ、此方面の名著で後章に記述されるべきキョツペンの『佛陀の宗教』やワシリエープの『佛教論』の如きも何れもピエルヌーフに負ふ所が甚だ多い。然し此大學匠の後に起ちて歴史的に大乘佛教の研究を概括したのは實にケルヌの『印度佛教史』である。此書は前にも略述した如く、和蘭語の公刊後間もなくヤコピ

表したがハラプラサードシャーストリ (Haraprasād śāstri) 氏が、尼波羅に於ける數度の佛教聖典探求は、是非とも此項を終るに望みて記せねばなるまいと思ふ。氏は同國首都カーツマンドの有名なダールバール文庫にありて熱心に研究し其目錄をも造つた。氏が梵書探求は主として珍異唯一のものを得るにある其一例として、氏は印度佛教聖典會から菩提行經疏 Bodhicariyāvatārapañjika を學界に問ふたのでも解かる。

今一つ此頃の最後に加へて置きたいのはストラスブルグに於ける佛典研究の成績だ。大澤・小金井・高橋・弘田・故下山等の赤門醫家の元老株や、西京の荒木・足立・松浦・藤波等の俊傑を育成して、優に吾醫學界の母校として見らるゝ、此美しい獨逸の新領土の大學アルゲントラトムの學林は牛津大學が日本と梵學上父子の密着な關係があると同一の親緣を不思議にも有する。千八百九十七年に須摩提女經梵本 Sumagadhāvadāna の研究が就つて、其公刊豫報と共に獨譯を出しドクトルの榮位を得られた常盤井新法主に續きて、荻原雲來氏が千九百五年に瑜伽論菩薩地 Bodhisattva bhūmi の古梵本をケンブリツヂ大學圖書館藏本中に發見して、偉大な貢獻を學界に捧げ、其篤實精到の研究で梵本の貝葉錯落參差たるを漢譯の力を藉りて整理し二通の立派なローマ字音寫本を造り其公刊を豫告した。師のロイマン先生は勿論故ベンドウル教授や現に佛教學の泰斗たるスパイエル・ブザン諸教授又リス、デギヅ老先生などが荻原氏を重ずる故なきにあらずだ。記者もまた常盤井荻原兩先輩の驥尾に付して無賴不似の弟として、此學苑を騒した。學苑の母ロイマン先生の慈愛と先輩の指導で、日本所傳四梵本の中、故笠原師が出版の素志あり乍ら遺稿離散して誰も手を看けなかつた、普賢行願贊 Bhadracaripranidhāna の梵本

文甚多く、且前にも記した如く聖典の批評的出版もあり、特に後者は佛教因明の大家で此方面では恐く世界唯一の學者であらう。然し纏つた系統的の著書はない。

此點では白耳義の碩學プサン（Poussin）教授が、今では確にケルヌの壘を摩して居る。此人の業績一般は、一寸前にも略述した通、其著『佛教論』は大乘教の要義を述べ　特に秘密教及後代大乘空宗の教義に就きては、其研究頗る深い。

氏はまた明治四十一年佛京パリの天主公教學院で講義をした原稿を整理して『佛教論』Bouddhisme を公刊したが、特に『教義史に就きての管見』Opinions sur l'Histoire de la Dogmatique と銘が打つてある。菊判四百頁の小冊子だが、看板の通内容は最新の研究を網羅して、挿繪なども珍奇なものを惜氣もなく入れてある。序論とも六章。序論には佛教研究の趣味、佛教史の原材、其性質及主線を叙し、第一章は釋尊の教義、第二章は佛教純正哲學の系統、第三章は佛教の哲學と宗教、此章下に佛身論（ブードロジー）を論じ彌陀信仰に論及する。第四章は未來佛の思想を評隲し、第五章は佛教及印度超自然派の關係を述べて、秘密佛教を說き著者得意の技倆を示す。多少の過誤もあり、また偏見もあるが、近時の大乘佛教書としては先々上乘のものとしてよからう。

獨逸に於ては現時一人の卓絕した大乘佛教の專門家を有する。それは一昨年ハイデルベルグ大學の教授になつたマックス、ワレザー（Max Walleser）である。此人は夫の大哲學史家クノー、フイッシャーの高弟で哲學者としても相應の地位を占め得る力量があるが、『自我の問題』（ダス、プロレーム、デア、イヒ）の大論文で大學を出でゝ後、佛教の研究に志

ー氏の獨譯Der Buddhismus und seine Geschichte in Indien: eine Darstellung der Lehren und Geschichte der buddhistischen Kirche 1882—1884 が世に出でゝ今に學者机右の好參考書となり稍遲れてヒュー氏の佛譯がギメー博物館年報中に出た Histoire du Bouddhisme dans l'Inde. der Traduite du Néerlandais, par Gédéon Huet 1901—1902。其價値の如何に精確なるかはこれで知れる。此書は四編に分れ第一編は佛陀及其傳記を論じ、第二編は達磨を記述し、大乘教の精要を撮み、第三編に僧伽を叙して教會の條規戒律の概要を示し第四編は佛教教會史にして教史にして教史を三期に分ち、第一期を育王に結び、第二期は迦膩色迦王を以て終り、第三期は中世大乘教徒の末期を以て筆を收む。此篇は特にケルヌの力を入れたので、大乘教の歷史的著作として頗る參考に供すべきものが多い。ケルヌは此傑作を著して後鋭意に大乘佛教の研究に思を潜め幾多有益の論文を發表する傍、資料の蒐集と整理とに怠らず、明治三十一年『印度亞黎安講究百科叢書』の中に『印度佛教史撮要』Manual of Indian Buddhism を書いて、其成績發表とした。此書は資料の豐富充實した點と各方面の新研究を巧に安排して適確公正の斷案を下した事に於て、恐く近代絕好名著の一としても決して誣言ではない。加之、簡明にして好く要を撮み、卷帙甚大ならずして內容の潤澤なるのに而も其價が比較的低廉にして且英文を選むだ點なぞ、吾國の佛學家に便宜を與ふること決して尠少でない。篤志家には是非此好著の一讀を薦めたい。

ケルヌに對して立つべき梵語佛教の專門學者は世界に甚だ少い。僅に露國のォルデンブルグ (Sarg d'Oldenburg) や其門下の俊傑チェルバトスコイ (Stcherbatskoy) ある位である。二氏は共に大乘佛教に關して必讀の論

Williams.) の『佛敎』Buddhism 1890. 中にも大乘敎に就きて記述評論する所少からず特に婆羅門敎と佛敎との關係を調べるには棄つべからざる大著といふてよい。但し此人は其該博の學殖あるに係らず、頗る基督敎的僻見ある學者だから餘程注意して讀ねばならぬ。

一般宗敎史特に印度宗敎史中佛敎に關する部分も恐く序に茲に附加して置くのが便利であらう。一般宗敎史ではサウセー (C. de la Saussaye) オーレリ (C. v. Orelli) を兩大關として其親切な書目引證を感謝してよからう。印度宗敎史ではバルト (A. Barth) とホプキンス (E. W. Hopkins) の二書が雙璧である。前者は少し古いが今に安心して使用が出來る。二書ともに何れも鄭寧に佛敎研究の參考書を示し且つ其書の可否をも多少評定して敎義概要を示してある。怱忙の際一覽には至極よい。

一寸古い方へ話が向いたが、再び最近研究の有樣に立戻り現時歐洲で此方面の研究は佛國が最も有望の樣だ。パーリのレギ敎授佛蘭西學院のフキノー氏等は時々苦心の論文を發表して學界を驚しつゝある。西域考古學の隆盛と共に伯林のリユーダース・ミユーラー等の大將株を初め此方面新進氣鋭の士は大乘敎に就き是非とも一般の知識を備ふる必要から、獨逸でも今は梵語佛敎の氣勢が揚りかけ研究成績が漸次伯林大學から出る樣になつた。

吾國の學者が此泰西の學潮中に起ちて大乘敎系統的研究の爲面目を保持したのは今の所遺憾ながら唯鈴木大拙居士の『大乘佛敎綱要』Outlines of Mahāyāna Buddhism 1907 あるのみだ。此書の原材は主として漢譯聖典に取つてあるが、一面歐洲に於ける大乘敎研究の誤謬や僻見を匡正して研究の新進路を示した點に棄つべからざ

し、梵語の傍ら西藏語に通じ且つ漢譯をも讀み得る技倆を具へ、新進學者として雄然世界を睥睨しつゝある。氏は佛教哲學の全系を說述論評するの計畫あり、『史的發達に於ける佛教哲學』Buddhistische Philosophie in ihrer geschichtlichen Entwickelung と題する大著を公にせんとし其第一部として一千九百四年に『古佛教の哲學的基礎』Die Philosophische Grundlage des ältesten Buddhismus を書き、次で第二部大乘哲學史の完成の爲に今や盛に資料を集め、其一部分の龍樹中論研究の豫備として漢本及西藏本の中論釋を獨譯して世に問ふた。氏がケール中學教頭から一躍して名譽あるハイデルベルグ大學教授の椅子を占め得たのも實は此拔群の業績と、驚くべき該博な言語學の實力に基因する。而して更に氏が佛教研究界に重要の地位を占めつゝある一つの理由は其西藏語の素養深きと共に確實な哲學的訓練のあるので、此點は印度學者中、夫のウパニシヤット研究の師宗ドイセンを除けば恐らく唯一の人であらう。

ドイセンの名が出たから、序に其傑作『哲學一般史』(アルゲマイネ、ゲシヒテ、デル、フィロソフキ)の中佛教に關する記述に就き一言する。惜ゐ哉、此碩學は其哲學史上の叙述單に小乘教に止まりウパニシヤット特に吠檀多とは思想上大關係ある大乘哲理の評論は殆ど絕無に近い。印度學の開拓家として特に梵文哲學の研究者として偉大の功績あるコールブルーク (H. T. Colebrooke) が論集中、また有名な印度學の泰斗ウヰルソン (H. H. Wilson) の論文にも大乘佛教につき論及して居るが、是等は今は唯歷史的の著書として重ずべきのみだ。印度の宗教文學につき有益の著書少からず、特に近世印度教に就きては今は宗教學者の指南に仰ぐ故牛津大學教授モニエル、ウイリアムズ (Sir Monier

尼波羅著名の堂塔伽藍及佛像の畫を挿み、同國王公貴嬪の寫眞なども入れてあり、歌謡其他の飜譯もあり、自家の集めた、佛經古寫經の書目も添へてある。此書の出た翌年レォン、フエーヤが『佛國亞細亞協會々報』(ジュルナル、アシアティク)に尼波羅史に就きての論文、Notices l'histoire du Nepal を發表した。次で一千八百八十年にオールドフキールド(H. A. Oldfield) の『歴史的及叙事的の尼波羅集記』Sketches from Nepal, historical and descriptive が詳細な說述と豐富の材料で少からず讀書家の滿足を買ふた。此書は上下二卷の大册で同國佛敎の概要を叙し且つ名所古跡堂塔等に就きて詳細の記述をした。尼波羅に二回まで學術的の旅行をなしたベンダウル敎授も一千八百八十六年版の『尼波羅及北印度に於ける文學及考古學探究旅行記』Journey of Literary and Archaeological Researches in Nepal and Notthern India がある。此他同氏は尼波羅に關し幾多の論文を發表し、單に古寫經のみならず、碑銘及古錢等にまで亘りて詳細の研究を公にしたが、其中『孟加拉、亞細亞協會雜誌』に書いた『尼波羅及附近諸國史』History of Nepal and surrounding contries は西曆一千年より一千六百年間の事蹟を考證し前哲未見の新資料も多い。レギ氏が苦心の大作『尼波羅』(ルネパール)は「印度一王國の歷史研究」(エテウド、イストリク、ダン、ロワヤンム、インドウ)と題號に註して三卷ある(明治三十八年第一卷出で同四十二年全部完成)。凡尼波羅に就きては此書が今では最新最善最詳のものだ。

前項に擧げたミトラ博士の『尼波羅佛敎文學の序論』ベンドウル敎授の『ケムブリッチ佛敎梵書目錄』の緒言中には、尼波羅の歷史及同國佛敎の概要に付き極めて有益な記事がある、既に略述した事だが、更に茲に記して置く。

る價値がある。佛教學語其他梵語の部分には大に訂正を要することも更に梵本聖典の資料を加へて大増補を行ふべきことも著者が既に計畫のあることだから、再版の際には更に一層有益の寶典となるだらう。

六　尼波羅の探檢研究　印度で今佛教の行はれて居るのは尼波羅及其附近のブータン及シキムであるが、後の二國は西藏の感化を受けて喇嘛教徒である。故にこれは西藏佛教の下に設くことゝし、此章下では尼波羅佛教につき西人研究の一般を一寸紹介して置く。

大乘聖典の原本を傳へた唯一の國、英國政府の保護の下にはあれど兎に角獨立國として主權を認められて居る此雪山々麓の古王國に就きては、吾が寛政五年此國に入つた大佐カークパトリフク（Kirkpatrick）の『尼波羅王國事情』An Account of the Kingdom of Nepal が歐人が同國に關する記述の最初のものであらう。此書は文化八年ロンドンで出版になつた。十年ばかり後に世に現はれたのはブカナン、ハミルトン Buchanan-Hamilton の著書で、題名はカークパトリツク大佐の作と同一である。此後にホツヂソンが出で、同國に關する諸方面の報告書を發表した事は前に述べた通、其『尼波羅及西藏の言語文學宗教論』は今に斯學の南針である。ラツセンは此集の材料とジュリアンが佛譯した慈恩傳等に基き『印度古學』の第三卷に簡單な尼波羅史を書き（千八百五十三年）、其の後同國に駐在した軍醫ライト（Daniel Wright）が、尼波羅國人の手に就ける『大統瓔珞』Vaṃśāvali を英譯して、一千八百八十七年にケムブリツヂ大學から『尼波羅史』History of Nepal の名で出した。此書は同國闢開已來當時の王シュリ、スレンドラ、ギクラム、サーハ Śri Surendra Vikram Sāh 迄の編年史で、書中

徒が、吾等の儀式書中プルギアルスと呼ぶ法服を被着せるを目擊したるならむ。僧徒の行列恰も吾々と異らず。讃唄の風も吾等聖教會に於けるグレゴリアン式讃唄に甚しく相類す。他の此種の類似は是惡魔の手に依りて彼等支那人の間に流傳したるものにして、妄に神聖の事物を濫模し上帝に歸すべき當然の榮譽を奪へるもの也

これはアクバル大帝時代印度に入り、次で支那に來た葡萄牙のイエスイツト僧ベネディクト、ゴエズ（Benedict Goës）の旅行記の一節だ。惡魔摸倣說など頗る振つたものだが、然し今日の二十世紀に矢張かゝる頑迷を抱くものが、教界に全くなくはない樣だ。否教界のみではない。歐洲文明已外の文明は如何に善美のものと雖、破壞すべしなどいふ畏ろしい黃禍論者も何處かに御座るではないか。明に入りて神宗の時利瑪竇を筆頭に湯若望・龍華民・龐廸我・陽瑪諾・南懷仁の面々、何れもイエスイツト教會の錚々たる宣教師で天文曆數醫學等の新知識を支那に齎らして時の政府から重用され、傍ら傳道に努力した。書いたものゝ中には佛教に對する攻擊も多少ある。然し眞面目の研究は前のゴエズの惡魔論一流の筆法で先々なかつた。

明滅びて清―十九世紀に入りて、支那の開放と共に英米からは有爲の新教宣教師が渡る。佛露からは才幹ある外交官が來て、此等が支那文物の研究を眞面目に開始した。同時に梵語及パーリ佛教討究の隆興が影響して支那佛教に就きて稍整頓した知識が歐洲學者間に普及することゝなつた。卽ち宗教や哲學の方面ではレツグ・アルレー・ビール・アイテル・エドキンス・ドーグラス・グロオト・ワシエーフ等が盛に研究を初め、孔孟老莊の學說や佛教の教理に就き幾多の著書をなし亦此等三教の聖典をも釋譯した。一般の歷史特に支那と外國との關係に就

第三章　支那佛教の研究　附日本及朝鮮佛教

一　支那佛教研究概觀　西人が支那に入り込むだのは可成に古ひ。基督教其他の宗教と佛教との接觸も例の大秦景教碑（ネストリアン、モニュメント）や『佛祖統記』等に記載された摩尼教（マニケーズム）の本山大雲光明寺の建立などの史實で誰でも知つて居るが、敦煌石室の遺書や高昌廢趾の壁畫等で今や一層此事實を現證することになつた。然し此時代唐から宋に亘りては景教碑中多少佛教に對する貶黜の文句が遺つてる位で、他に西人の佛教記事は先絶無である。元の勃興と共にマルコ、ポーロが世祖に事へ十有餘年も支那に滯在し有名の旅行記を草し現に史學者の珍材として重ぜらるゝ其中に佛教諸國の事情に就き見るべきもの少くない。當時亦基督教の宣教師も續々支那に入りて見聞の事實を筆記したものもあるが、此等はユール大佐が纏めて其名著『契丹（即支那）及其處への道』Cathay and the Way thither の中に英譯し親切の註を施してある。此等宣教師連が佛教に關する記事例せば佛像殿堂僧侶の生活等に就きては隨分奇妙な記事がある。就中左の如きは頗る抱腹絶倒に値するもので歷史的に興味が甚深い。

基督教徒が支那（Cathay）に存在することが確實に信ぜられしは、是回教報告家が單に虛言したりしに基く。是彼等が或る皮相の表示に依りて招ける誤謬に過ぎず。何となれば彼等回教徒は一切の偶像に對して決して敬禮を施すことなし、故に支那殿堂中の多數の偶像を見たるとき、之を吾等が聖母（マリヤ）若くは聖徒の或者と異るにあらずとなし、此國の宗教は全然基督教と同一のものと誤想するに至れる也。彼等は定めて燈明や蠟燭の聖壇に安ぜらるゝを見たるなるべく、亦異教僧

蹂躙に委して、邦人にはまだ世界的の一の支那佛教史さへなき現狀は何とも憤慨すべきではあるが、然し幸にも第一の直接方面には南條文雄老師の大著作があり、第二の間接討究に對しては我が高楠順次郎君苦心の飜譯があつて、邦人の面目を稍世界に維持しつゝある。或點から云ふと、政府としては拙劣無能の外交官などに勳章をやるよりも、此列國對支の學壇に立ちて不磨の功勞を立てた二學匠に、何とか旌表の道を講ずるのが義務ではなからうか。今や支那問題は列强の視線集中の焦點となつた。此際邦人が支那文明特に佛教の研究は東方經營上實に要中の要である。而も今尙民間の學者は勿論政府も之を對岸の火災視するのは何たる淺薄な思考であらう。ビール氏は一介の武辨ではなかつたか。而も其名著は今に史家の好資料となつて居る。ドウグラス氏は一領事であつたが、其著作は尙學者も裨益しつゝある。吾國の支那問題研究家はもつと眞面目にもつと深牢の考で學術的に腰を据へてかゝらぬと百年河淸を待つと、一般、永久に碧眼兒の後塵を拜せねばなるまい。

已下支那佛教研究の二方面に就きて概略代表的の人物と著作とを擧げる。

二　支那佛教の直接研究　時代から云ふと歷史研究の方が純粹な佛教々理の研究よりは先に業績の發表があつた。卽ち文化年間に東洋學者クラプロオト（Klaproth）が早く法顯三藏の佛國記に眼を着け、天保七年には此書はアベル、レミユーザに佛譯されてパリで出版となつた、ジユリアンの慈恩傳佛譯も安政五年といふ古い昔に完成して居る。此間教理教史の研究も宣教師や官吏等に依りて着々行はれ其結果は香港の『支那評論（チャイナ、レビュー）』廣東で發行せられた『支那寶庫（チャイニーズ、レポヂトリ）』や上海の『上海學曆（シャンハイ、アルマナシク）』等の雜誌に公表された。然し支那宗教特に佛教に就きての纒

きての史料取調べにはジユリアン・シヤヷンヌ・ブレツトシユナイデル・ヷンペリー・レミユーザ・ユール等、美術史方面はにヒルト氏の一派、言語學はシヨツト・ジヤイルス・ワイリー・モリソン・ウイリアムズ等が雲興潮湧の勢で各方面から所謂中國の文物を批判し解部した爲、玆に支那學（Sinology）といふ一の科語さへ出來た。而して此等の研究中其佛教に直接關係あるものは勿論、史學考古言語學等の部面に於ても研究上自然佛教に關鎖を有し、全く之を離れては到底滿足の成績を擧ぐることが出來ぬ故、玆に勢支那佛教研究の盛運を捉がして、パーリ及梵語佛教の研究と對峙して一つの分科の様になつた。

此分科に就きては大體二つに分けて見たら便利だらうと思ふ。第一は直接討究で純粹に佛教々義史及聖典に關する著作、第二は其間接の方で主として歴史及地理の資料から佛教に觸れて來る研究である。金剛經や阿彌陀經の英佛譯とか、支那譯藏經の內容紹介とかが第一に屬し、法顯傳や西域の批判や飜譯が第二になる。代表的の學者を擧げたら、ビールやエドキンスが第一、シヤワンヌ・ジユリアン等が第二の立派な典型である。

吾國の學佛者から見たら第一の方面には餘り之に重きを置く必要は勿論ない。――間佛教に關する警拔無遠慮の批評や、其歴史的發展觀に就き多少取るべき點を除いたら殆ど無價値のものすらある。第二は之に反して邦人の爲に非常の參考となるべきものが多く、今尙學者座右の至珍たるべき好著も少くはない。第一には學者的態度の書は甚だ少なく、多くは宣教師流の著書であるが第二は其性質大柢學術的である。

同文同種唇齒輔車と何かと云へば言ひ出したがる此支那の佛教につきてもパーリ及梵語同様、矢張り赤髯連の

有益便利の小册子は明治三年香港で初版が出で、當時の佛教研究を網羅したが、十五年の後校訂大增補の再版があつて更に佛教學各方面の新研究を綜合大成し、パーリ・暹羅・錫蘭・緬甸・西藏・蒙古・日本語等の相當佛教語を挿み精密な索引を付して一層便利の寶典となつた。吾國でも高桑駒吉氏等が更に索引を加へて復版したから今では吾國の學佛者は低廉な價で此良書を手に入れることが出來る。エドキンス・アイテル等業績の發表の後支那佛教は益々學者の注意を促し特にパーリ三藏の出版、尼波羅梵經の發見、西藏經典の知識等が、支那譯藏經研究の必要に就き强大の刺戟を學界に與へ來り、英國の印度局はいち早くも漢藏獲得の運動を開始し、支那政府に對し一切經の購入若くは寄附を懇請したが當時支那と列强との外交上頗困難の事情ありし爲、この交渉は不幸にも調はずして仕舞つた際、明治五年吾が岩倉具視公が特命使節として歐米諸國を歷訪する序に英國で快く此懇請を引き受け、翌年歸朝の後直に黃檗版の一切經全藏を英國に寄贈した。此寄贈が歐洲に於ける支那佛教研究の强大の基礎となつた。而して其無限の研究資料を使役して幾多の好著を公にし支那佛教學の爲に少からぬ貢獻をしたのはサミユルビール（Samuel Beal）其人である。ビール（一千八百二十五年生同八十八年死）はケムブリツヂ大學を卒へて後海軍布教師（ネーヴル、チャプレン）として支那に來り、支那語及其宗教に就き大に研究し學界に其名を知られたが、歸英の後直ちにロンドン大學の教授に任ぜられ、在職中種々支那佛教に關する著作飜譯を公にして、歐人支那佛教研究の泰斗と仰がるゝに至つた。

ビールの著書中佛教々理史、及經典の敍述評論で有名なものは『支那佛教經典連鎖』Catena of Buddhist Scr

つた著書は英國の宣教師で支那學者の博士ジョセフ、エドキンス（Dr. Joseph Edkins）（約瑟、艾廸謹）の諸書であらう。同氏が最初に出したのは『支那人の宗教事情』The religious condition of Chinese で安政六年に公刊となつたが、明治の初年に再版が出た。此書は支那宗教事情を概説し如何に漢民を基督教に改宗せしむべきかに就き所見を叙してある。同氏は次て『支那の佛教』Religion in China を書き、ミローネ（Milloné）の佛譯も現はれて歐洲宗教學家の稱賛を博した。次て明治十三年に『支那佛教』Chinese Buddhism, a volume of sketches hist. descript. and critical を著し基督教的見地から縱橫に佛教を批評した。五年の後更に『支那佛教劄記』Notice of the Chinese Buddhism 1885 を公にした。尚此人には支那語學及歷史考古學に關しても少からぬ著書論文があり、また漢文で書いた『釋教正謬』の如き通俗な小册子がありて手嚴しく佛教を攻撃し特に歷史的方面から難詰を加へ、支那讀書子を大に動かした。此小册子に對して日本では明治の初年に知恩院の故養鸕徹定上人が杞憂道人の名で反駁を草し『釋教正謬初破』と『再破』とを造りて之に當つた。教理の部分は兎に角、歷史の部面では隨分盲ら蛇の罵倒などもあつて今見ると少からぬ歷史趣味がある。エドキンスと同時代に香港に居た英國官吏で漢學者のアイテル（E. J. Eitel）も共言語歷史に關する種々の著作の外佛教に就き研究したものが少くない。香港で講演した『佛教三講錄』Three Lectures on Buddhism 1781. 次て出た『佛教論』Buddhism: its historical, theoretical and popular aspects 1873. 等で此の人の深い造詣が解るが、氏が現時まで尙學人の記憶を去らぬのは共名著『支那佛教必携』Hand book of Chinese Buddhism で實に立派な梵漢字典である。此

此の一大著作の主要な點は『至元法寶勘同錄』の經文梵語題目に依り傍ら歐西の研究に照らし經律論の梵題を出來得る限り精確に定めた事、支那歷代の法寶目錄に依りて譯經の時代を明記したこと、譯經家の列傳を年代順に撮略列記したことなぞ、佛敎研究上に貴重の資料を供給した。現時進步せる佛敎學より見るときは勿論幾多の訂正すべき點もあるも、其權威と價値は今尙學界に九鼎大呂の重をなしつゝある。

エドキンス・ビール等の佛敎研究と共に英國の官吏及宣敎師中には亦孔老の哲學を研究する人も少くなく其中、ドーグラス (Sir R. Douglas) (天保九年生) 及レッグ J. Legge (文政元年生、明治三十年歿) 二氏の如きは特に傑出せる學者であつた。二氏が孔子老莊典籍及學說の飜譯叙述中、佛敎に關するものもあるが、次項に述ぶべき後者の法顯傳英譯を除けば此の項下では、此の人の三敎平心論英譯 A fair and dispassionate discussion of the three doctrines accepted in China 1892 一つ擧げて置く。

英國已外支那研究に於て異彩を放つて居るのは佛國で特に歷史方面ではレミューザ・ジュリアン・シャヴンヌ等の巨匠が偉大な功勳を支那學の陣頭に立てた。此等の人々の中に宗敎哲學に一隻眼を有した有爲の漢學者アルレー (Ch. de Harlez) は老莊諸家の哲學及倫理學に關し幾多の論文があるが金剛經の佛譯は氏が哲學的の思索から見て擧げるが適當であらう。氏が試みた梵漢辭書 Vocabulaire bouddhirque Sancrit-shinois 1887. も勞力多き作である。レギ敎授 (Lévi) も歷史的考證に付き種々の好論文あり、梵語聖典と漢譯藏經の比較に就きても侮るべからざる技倆を示しつゝある。

iptures from the Chinese 1871『佛教三藏論』The Buddhist Tripitaka 1876.『支那佛教文學』On Buddist Literature in China 1882.『支那佛教論』Buddhism in China. 1884. の四書で、第一は佛教々典の抄譯を集め第二は明藏卽ち岩倉公が印度に寄附した經藏の解題第三は第二を敷衍說述したるもの、第四は小冊子で通俗用のものではあるが概略支那佛教の要を摘み、特に律藏の硏究に多少見るべきものあり、結論には支那民族の精神文明につき大に佛教の効果を認め之に對する基督教傳導の有望を說く。ビールは尙英國及支那の學會々報に種々經論の英譯を出し彌陀經・四十二章經・起信論其他を紹介したが今は一向學者は顧みぬ。唯『東方聖書大集』の第十九卷佛所行讃英譯 Fo-sho-hiang-tsang-king は宗教學者の好材料となり、シユルツエの獨譯もある (Schutze; Buddhas Leben und Wirken. Reclam n. 100.)。第二方面の歷史硏究に於ても亦ビールは非常に勤勉努力して多大の業績を殘した。それは次項に說くことにする。

ビールの佛教三藏や佛教文學は實は甚だ不完全を免れず。少からぬ誤謬さへあつた、學界は玆に於て更に精確に一層周到なる學術用の漢譯藏經解題の現はるゝを切望して止まなかつた。此希望に應じて起ち、今に至るまで尙學界の支那藏經に言及するものに對して唯一の權威を維持しつゝあるのは實に我が南條文雄老師の英譯明藏目錄 Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka, the sacred Canon of the Buddhists in China and Japan の大著作である。此書明治十六年一たび出でゝ後、日月出でゝ爝火亦用をなさゞる如く、世界の學者皆之を仰ぎて誰もビールの目錄を顧みるものがなくなつた。

最後に獨逸に於ける支那佛教の研究を一寸窺ふ。同國では言語學者としてのショット（Schott）考古學者美術學家としてのヒルト（Hirth）が支那學に雷名ある外、佛教方面の學者は一向なかつたが、今や少くとも三人の有望な支那佛教研究家を有することになつた。第一は前に一寸名を出したハイデルベルグ大學教授のワレザーで漢本龍樹中論の獨逸譯で充分其手腕を認められた。或點から見るとワレザーよりも數等上にあるかと思はれるのは伯林人類學考古學博物館のミユーラー博士 Dr. F. W. K. Müller で此人が西域發掘の側で學界の大達者であり特に回鶻語に於て殆ど學界の覇權を握つてるがまた支那語の造詣深く回鶻佛經斷片を漢譯藏經中に檢出する倆技は一寸他人に眞似の出來ぬ所だ。代表的の著作としては回鶻語金光明經と其漢本との比較だが學界は何れも此の新研究に瞠目の體だ、ミユーラーと同じく常に伯林の學士會誌に業績を公表するのは博士フランケ（Dr. O. Franke）である。支那史學に就きては有益な報告もあり未來ある學者である。

ビールやレツグやドーグラスで一時支那學の全權を握つた英國には今や大なる後繼者がない。燉煌石窟遺書が山の如く同國に藏せられる際實に惜い。日本ではどうか、最も容易な此方面丈でも世界學壇の牛耳を取りたいものではないか。南條高楠兩氏の功業で甘ずる樣では到底駄目だ。

最後に同胞が聖典飜譯の事業を擧げて置く。高楠順次郎教授が『東方聖書大集』の結尾に英國で出版した觀無量壽經英譯と鈴木大拙居士譯の馬鳴大乘起信論英譯 Aśvaghoṣa's Discourse on the Awakening of Faith in the Mahāyāna. 1900. が米國で出たのが先雙擘であらうか。玉耶經や四十二章經などの英譯もあるが略して置く。數

和蘭の碩學グロオト (J. J. M. de Groot) の支那研究は主として典禮儀式の方面から大に諸宗教を研究し『支那宗教系統其古代の形體發展歷史及び現代の事情』 The religions System of China, its ancient forms, evolution, history and preseat aspect を書いたが五卷の大冊で明治二十五年から十六年間に亘つた一大出版である。此中少からず佛教の事も出る。氏は尙『支那に於ける宗派主義と宗教的迫害』 Sectarianism and religious peersc-ution in China 1903 の一卷を書いたが佛道二教の交渉につき宗教史上面白い材料を歐洲に與へた。其佛文『支那大乘教法典』 Le Code du Mahāyāna in Chine 1893. の中に梵網菩薩戒經全部の原文と英譯とを出したなどは全く出色の業績と稱してよい。他に佛教儀式特に葬儀に關する論文もある。

露國に於ける支那學者としては彼得堡大學支那學教官であつたワシリエーフ(W. Wassilieff)を第一に推すべく其傑作『佛教其教義史及文學』 Der Buddhismus, seine Dognengeschichte und Literatur が萬延元年に出たが五年の後コム(G. A. la Comme) の佛譯が出た。著者は北京露國公使館付の職員として外交事務の傍ら支那學を極め傍西藏語に通曉した。其爲氏の著書は尙學者に重ぜられて居る。此書中には重要なる漢譯大乘諸經の解題と其附錄に馬鳴・龍樹・天親諸傳を譯し、また『異部宗輪論』の漢梵對照しての批評的飜譯が添加してある抔現時でも頗參考に資すべき點がある。ワシリエーフは更に『東方の宗教、孔子教佛教、及道教』 Die Religion des Ostens, Konfucianismus, Buddhismus und Taoismns 1873 を公にしたが、あまり人の見ぬ書だ。現在に於ては此人に次ぐべき漢學者は露國にないでもないが、史學か孔孟學の方面で佛學學の側ではあまり面白い書物も見へない。

大な師表として今や識者の賞讃と尊敬を受けつゝある。吾國民もフキヒテの爲に記念號を發行するもよし、ヹルヂあたりにまで追遠の情を表するのも誠に世界的で結構と申すべきではあるが、少々脚下にも眼を着けて西域や法顯傳の世界的資格位の所は多少とも知識があつて欲しい。又玄奘義淨法顯の名丈でも、せめて東洋指導の抱負ある國民たる以上少くとも記憶なりとする樣に願たいものだ。其處へ行くと流石に西人は見上げたものだ。佛人アルベル、レミューザは文化年間既に支那研究を初め法顯傳の重要なることを論じて、譯本を刊行し、ジュリアンは嘉永年間早く西域記や慈恩傳の佛譯を公表した。此の如くして法顯傳の如きは前後四譯まで出でワツタースの註疏を加へたら五種の歐洲出版がある。西域記もジュリアン已後ビールワツタースの釋義とも三本ある。此項下では主として此等の研究を略述する。

　歐洲の古い支那學者としては玆に少くとも兩名を擧げることが出來る、一は天明八年パリに生れたアベル、レミューザ (Abel Remusat) 次は少し前の同じく三年にベルリンで呱々の聲を擧げたクラプロオト (Heinrich Kstaproth) である。前者は早く漢學に通じ『支那語及文學に就きての論文』Essai sur la lang et la litterature Chinoises (文化八年版) を初めとして種々支那に關する著作をなし、尙蒙古韃靼に關する有益の書も出來た。佛蘭西高等學院教授として令名あり、學界の敬重を受けたか天保三年に死むだ、年僅に四十五歲。其佛教に關する著書『佛教史』Histoire du Bouddhisme は遺稿として死後三年目の天保七年に刊行されたが、此史中に法顯傳卽佛國記に就きての詳細な記事があり、同時に此書の佛譯も刊行された。歐洲學者の佛僧旅行記を公表したのは

年前早世した篤信の居士大原嘉吉氏は大乘聖典の英譯を以て己れの任となし、『反省雜誌』に種々の經文を譯し維摩經の英譯もある。天此人に年を假さなかつたのは實に惜い。

最近歐洲人の飜譯には金剛經新英譯があり、亦佛教の新約聖書として法華經、阿彌陀經、及起信論の二經一論を合譯した外人がある。一寸考が面白い。

三　歷史的資料の研究　支那佛教歷史的資料の研究は單に佛教學支那學のみならず一般東洋學特に東洋史上實に重大の意義がある。そは東洋の古國印度に於ては宗教哲學文藝科學に於ては世界無比な豐富なる文書を有するにも闕らず、歷史的の典籍は不思議にも絕無に近い。また西域の諸國は其興廢が非常に激烈の爲と民族移動の絕へざるに基因し、是又史料の徵すべきがない。幸にも支那には大古已來完全な史料を具備して其中には往々外國の事を交へ記し、特に佛教高僧の書き遺した印度西域及南海諸島の旅行記は、今の所此歷史の暗黑を照破すべき唯一の燈明である。咫尺東西を辨ずることの出來ぬ東洋史海の大霧中僅に法顯傳・西域記・寄歸傳等が南針となつて漸く研究の航路が取れる。若し漢史諸書の外國傳がなく法顯玄奘義淨等の記錄が存在せぬとすると、印度や西域の史實は到底我々には解らずに仕舞つたらう。現に印度の史蹟が次第に發見されて、三千年二千年の古代の事跡が明確に知られ、于闐や高昌其他の西域古國の發掘が續々成功して驚くべき大貢獻を學界になしつゝあるのも是皆實に西域記や法顯傳の恩惠である。此點から見ると西域記寄歸傳等は單に佛教の寶典たるのみならず、單に支那東洋學の最大珍書たるのみならず。實に世界學藝の大傑作である。玄奘や義淨は玆に於てか世界史上の偉

Mémoires sur la Contrées Occidentales 1858. 年であつた。當時漢字音譯の印度西域の國名や人名を梵語に復寫することの苦心は實に察するに餘りある。此苦心の結果としてジユリアンは其後文久元年に梵語の漢字音譯を定むる法則に就き一書を著はした Méthode pour déchiffrer et transcrire les Noms Sanscrits qui se rencontrent aarns les libres Chinois 1861. (漢書中に現はるゝ梵語名詞を解讀し及び音譯する方法)が即是で此苦心の書は今でも頗る參考となる珍書だ。

ジユリアンの二大飜譯が出て已來印度史及印度地理の研究は一大革新が起り夫のカンニンガムの古代印度地誌の樣な好著も出來たが、一般の研究が進むに從ひ其中に訂正を要する點も少からぬのでビールの新譯が現はれた。即西域記の方は明治十七年に Si-yu-ki; the Records of the Western Kingdoms として、慈恩傳の方は同二十一年に The Life of Hiuen Thsang としてジユリアン佛譯の得難き渴望を補ふた。西域記の方は明治三十九年に再版が出でたが、此新譯には其序論に法顯及元魏の時代印度に入つた宋雲及惠生の Sung-yun & Hwei Sang 旅行の一般を記し、且つ法顯傳と宋雲の旅行記(洛陽伽藍記に載せてある)と全譯があげてある。

ビールの譯は餘程ジユリアンの誤謬を訂正した點がある。然しこれにもリス、デギヅ先生が『玄奘の旅行と傳記に就きて唯一の英譯は、故ビール氏の手に依りて就りしも、誤謬極めて多し』と評した通り、之を訂正するの必要があつた。而して之に應じて起たのはワツタース氏 Thomas Watters で(天保十年生明治三十四年卒)氏は朝鮮、廣東、福洲等に英國領事として、三十二年間勤續し、母國のために盡す所多かりしが、此恪勤の間氏は、

レミューザが實に初めである。クラプオトは其生涯極めて英雄的で頗る變化に富む伯林名家の子と生れて東洋語學を修めて支那研究を志し露國に入りて大學の助手として働き其異常の才能を認められ文化二年にゴロオキン伯が支那特派使たるに從ひカウカサス蒙古を經て支那に入らむとせしが果さなかつた。後佛國に來りパリで大學教授となつて天保六年に死むだ。此人は著書等身に餘り、支那の歷史文學語學は勿論滿洲語にまで亘り、カウカサスの地理風俗政治狀態に就きても種々の大著がある。佛教に就きては格別の著はないが、歷史資料を論じて來ると、支那學普及の點から、勢之をレミューザと並べ說かねばなるまい。

此二大學者の後に佛國に偉大な支那學者が出た。卽オルレアンのジュリアン(Stanilas Aiguan Julien)で寬政十二年に生れ、パリ國民文庫圖書監より進みて帝國學院(コレージ、イムペリアル)の總長となつた學者で、其支那語の研究は實に熱心なもので、マックス、ミューラーが學者の模範と贊美した如く、壯年節を屈して支那語學の困難を忍耐し、佛教史學の大作は皆五十巳後に就つた。氏はレミューザに比すると頗る長命で、七十四歲で終つた。其支那に關する業績には飜譯大部分を占め戲曲、諸子、佛經に亘り、老子道德經佛譯 Libre de la Voie et de la Vertu などもある。其博涉以て知るべしだ。然し茲に述べむとするのは實に此人の苦心の大作卽ち慈恩傳と西域記の佛譯だ。

慈恩傳――詳くは十卷の大慈恩寺三藏法師傳卽玄奘三藏の傳記はジュリアンが二十年の苦心の結果嘉永六年に Histoire de la Vie de Hiouen Thsang (玄奘一生の歷史)の名で、學界に一大珍寶を賚らした。玄奘が春秋寒暑、一十七年、耳目見聞百三十國といふ印度西域の大旅行實錄西域記の佛譯が次で現はれたのは六年の後安政五

と云ふてよからう。

佛國にに於てはジユリアンの後一大漢學者が出て今に歐洲に於ける支那學の元老として牛耳を握つて居る、それは夫のシヤワンヌ（Edoward Chavannes）其人だ、此人の支那學特に歴史方面の造詣深きことは、現時學界の公認する所、幾多重要の論文が發表されたが、佛教史料に關しては第一に義淨三藏の大唐西域求法高僧傳の佛譯。Mémoire Composé a l'époque de la Grande Dynastie Tang sur les Religieux Eminents qui allerent chercher la Loi dans les Pay d'Occident 1894. と御鄭寧に題號直譯してあるが、此書は三藏が歸途南海の室利佛逝（スマトラ島のハレンバン）にありて述作し、遙に之を故郷の道友に寄せたるものにて、六十人の求法高僧の小傳を集めたもので多くは求法殉教の壯烈な事蹟であるが其中に種々重要な史料も含まれて居る。佛譯は頗精確で、特に其脚註の地理的考證に見るべきものが多い。同氏は更にビールの英譯した宋雲及惠生の旅行記を佛譯しハノイ佛國極東學院學報に公表した（Voyage de Song Yun dans l' Udyāna et le Gandhāra 518—528p. c. 明治三十六年版）。レキ教授と共同研究の悟空傳佛譯 L'Itinéraire d'Ou-kong は之より先明治二十八年に佛國亞細亞協會の雜誌で公にされた。此悟空傳は藏經祕密部に收められた十力經に附けてあるので、大唐貞元新譯十地等經記が卽それだ。法顯、宋雲、玄奘、義淨の旅行記已外當時に於ては此簡短な紀行は實に貴重な者であつた（今では此外にペリオが燉煌石室で發見した慧超の天竺行傳が殘缺なから大部分ある）。吾國の學者が從來餘り批判せぬ悟空傳の如きに迄も研究の點を進め鄭寧な評註を加へて譯本を出したシヤワンヌの勵精は實に驚く外はない。

支那の哲學宗教の研究に思を潜め孔老の哲學に就き著書もあり、十六羅漢に關する考證等もあるが其傑著は西域記の考證釋義『玄奘に就きて』On Yuan Chwang で、非常に骨の折れた著述である。此書は氏が死後四年目に遺書としてリス、デギヅ先生と西藏學者のパッシェル氏が充分に校合して出版した。歐人の西域記研究は今の所此書が上乘であるが、然し猶大に訂正すべき餘地が殘つて居る。而して此餘地を耕作整理して精確完全な西域記歐語譯を世界に與ふべきは實に吾國人の責任だ。

ジュリアンと殆ど同時に獨逸にも一の偉大な支那學者が現はれた。今猶此人に亞ぐべき漢學の碩學はまだ同國に出でぬ。この大學者はヰリヘルム、ショット（文化四年—明治二十一年）であるが、此人が支那語や文學に關する著書は頗多數に上り回鶻(ウイグル)語にも貴重な書を著した。佛教に就きても『支那佛教文學』Zur Litteiatur d. Chinesischen Buddhismus 1874. があるが大したこともないから、回鶻語の項下で、また此人に付き述べることにして、法顯傳の研究に急がう。

法顯傳卽ち佛國記 Fâ-hien's Fô-kue-ki に就きての研究は前述の如くレミューザが早く手を着けたが其後ビールが明治二年に英譯を試み（これを後に西域記譯の序論に訂正して付けた）。次で支那語學者のジャイルス H. A. Giles が同十年に再び英譯し、二年の後ワツタースが『支那評論(チァイナレビュー)』に二年に亘りて評註を出し、最後にレツグ氏が明治十九年に牛津で最後で最完全な英譯を公表し、これで法顯傳研究は一先片附いた態になつた。レツグ氏は四書の英譯の外、夫の景教碑に就きての立派な研究もあり。英國の漢學者としてはジュリアンに匹敵する人

だ。

高楠氏の大著を一段落として歴史方面の好著は其後大したものもない。而し支那對西域の史的論文にはフランケの様な立派なものもあるがこれは、其章下で紹介する。美術や刻文の方面から佛教研究に關係あるもの例せばビールの佛陀伽耶漢碑の研究やヒルトの支那美術に於ける外國影響などのも玆處で纏めて論ずべきだが、餘りに專門に亘るから此位とし、通商貿易の關係特に古代支那と歐洲との關係を叙した卽今擧げたヒルト Fr. Hirth の China and the Roman Orient 1885『支那及羅馬東洋』は佛敎に關することは少ないが、此人が第一流の支那學者であるのと此書が史家の間に名高いから序でに擧げる。

四　日本及朝鮮佛敎の研究。　極古い所でケムプエル（Kaempfer）やジーボルド（Siebold）の名著で吾國の事情が徐々として歐西に知られ、國運の勃興と共に續々熱心な日本研究家が輩出し英文日本亞細亞協會々誌や獨逸日本自然人類學協會々報などに各方面に亘りて種々な研究論文が雲の如くに出で歷史制度文藝美術風俗習慣等に關し叙述評論しまた單行本の著書も夥く發行された。勿論此著作の中には抱腹絶倒、例の滑稽歌劇『ミカド』の筆法で行つたのも少くない、此等幾多の日本に關する書冊は日清戰爭までを一纏めにして和蘭のウェンクステルン（Wenckstern）が大日本帝國書史 Bibliography of Japanese Empire 1859—93 を書いた。然し日清戰爭を經て日露戰役已後は吾國に關する著書論交が一層多く實に汗牛充棟の有樣、今や日清役後大正の劈頭に至るまでの一大書史の必要は學界の希望となつた。

同氏は尙西域發掘の支那古文書に就き大に貢獻したが、それは次の章に於て述べる。

義淨の求法高僧傳のことは前に述べたが、此飜經界の偉人には更に一層重要な著述がある、卽南海寄歸內法傳、普通寄歸傳と稱するのがそれだ。此の書は三藏が印度及南海諸州に於て實地研究したる戒律行持の實狀を詳記したもので一切有部を基として諸部戒法實行の異同を比較し、律部の講究には實に無二の珍書である、正法律の主唱者、葛城慈雲律師が特に此書を愛讀し解纜抄を製作して之を註解したのも故あることだ。而して寄歸傳はこの戒律行持の實驗記事の間に印度の宗教文藝に關する事實、名王高德碩學の偉績等を雜記し頗る歷史的の史料に富む歐人もジユリアンが此の書を用ゐて其梵漢音譯に關する好著を完了し、マツクスミユーラーは其極めて重要なることを公言したが、何分にも事佛教戒律に關し專門的の知識を要する所から、僅にワシリエーフの一部分の露譯、ビールの概要記載がある外全體の完譯がなかつた。而して此事業は恰も吾國學者の手を煩はすを待つものゝ如く、故笠原研壽師が約半部の英譯を作りて英國を去るとき之を師のマツクスミユーラーに交附し、藤島了隱師には三十二章と三十四章との佛譯を出した。而し何れも部分のものだつたが、其完譯の名譽は遂に高楠順次郎氏に歸した同氏は明治二十九年牛津(オツクスフオート)で六十餘頁の貴重な研究序文を添へ要意周到な英譯を公表し、學界は玆に完美な寄歸傳の譯本を得た。

高楠氏は此偉大の功績を擧げた後に世親傳の英譯や有部宗諸論藏金七十論の研究等に就き、絶へず有益な論文を學界に出し、支那佛教研究に於て今や一方の雄鎭として世界學者に敬重されつゝある、吾國の爲賀すべきこと

邦人の日本佛教の紹介は藤島了隱師が明治二十二年パリで出した Le Bouddhisme Japonaise『日本佛教』が今でも歐人のアウソリティになる。同師は此他に二三の重要な論文を發表した。南條文雄師の英文十二宗綱要は日本で發刊の共刊本甚だ貧弱ではあるが、內容は藤島師のと相對して歐人佛教研究家に多大の便益を與へる。黑田眞洞師の『大乘佛教大意』Outlines of Mahāyāna は市俄古宗教大會の際に施本用に拵らへたもので、片々たる小册子ながら、歐洲學者は非常に之を重要視し、英文の飜刻もあり獨逸文の譯本もある。新井日薩師遺著『日蓮宗大意』及『曹洞宗修證義』の英譯も之に次ぎて序に一瞥し、鈴木大拙居士や忽滑谷快天師の禪學に關する諸著作も玆に擧げ姉崎正治氏が目下ハーバードに於ける日本佛教史講演も最後に一寸記して置かねばなるまい。

朝鮮に就きては外交家や傳道家の書いた紀行類は可成にある。グリフキス (Griffis) の『隱遁國民、朝鮮』やオツペルト (Oppert) の『嚴鎻の國土』などは誰でも知つての名著だが、ロツス (Ross) の『朝鮮史』は明治二十一年に英京で出版になつて居る。政治外交の外、文化風俗習慣につき重の材料は『朝鮮評論』の中に大分收られて今に參考になる。語學の方面にはゲール (Gale) アンダーウード (Underwood) プツチロ (Putzillo) ハルバート (Hulbert) 等の文典辭彙類があり今でも邦人の御役に立つが、佛國傳道家が明治二十四年香港で編纂した『羅韓字彙』Vocabul arium latino-coreanum を見ると、如何にも其傳道に强固の素養があるのが見へ、ダレー (Dallet) の『朝鮮教會史』Hstoire de l'Eglise de Corea (二卷、明治七年版) に於ては、其教會の今日ある、決して偶然ならざるを知り、佛教家の奮起を促したい。然し同國の佛教々理教會史に就きては

此等西人の研究中チャンバーレンやレォン、ド、ロスニーの日本史料の研究、古事記や日本紀に關して周到詳密の批評的研究やアストン、フローレンツの文藝につきての討究に力めて邦人にも一寸眞似の出來ない立派な日本文學史（アストンのは英文、フロォレンツは獨文で出した）を完成したことなどは吾國人に大に奮起を促したいものだ。而して此等歴史文藝の研究には勢佛教を度外視することは出來ず、觀光採風の旅行記中にも佛教に關し記載する所もないではないがロスニー（Leon d Rosny）やグリフイス（Griffis）リード（Reed）諸家の日本宗教史は佛教に就き詳細に記述した就中ロスニーとリードは吾國の新佛教、眞宗其他に付きて大に注意した。文藝の方面から內面的に國民精神を了解し、佛教を紹介したのは夫のラフカデオハーン卽瘤寺に佛教式に葬式をした小泉八雲氏。藝術では故の敬德阿闍梨の弟子となつた、日本美術の恩人フユノロサ氏が頗る佛教を研究した。最近基督教宣教師中にも日本佛教の研究家頗る多く現にハイデルベルグの教授たるハーゼ（Hase）氏や、去歲登天したロイド氏の如きは共巨擘と稱してよい。ハーゼ氏は獨文の日本佛教史がある簡單に要を撮むだ者だ、ロイド氏には種々の著作もあるが晩年親鸞上人に關する研究を初めて、正信偈の譯書なども ある。コーツ氏も今現に佛教を研め特に法然上人を中心として研究の點を進めつゝある。然し歐人の日本佛教の研究は今の所、梵語やパーリに比しては勿論支那佛教に比しても未だ皮相たるを免れぬ。これは梵語や支那佛典さへ研究すれば日本佛教は梵漢傳來のものだから大した價値もあるまいと高を括るにも歸しようが、兎に角淨土諸教や日蓮宗等の特色たる佛教に就きては今一層研究の熱が增さねばなるまい。

露の字彙を編纂したのは決して偶然でない。彼得堡や莫斯科の彼等の所謂基督正教の中心に佛教寺院を立てゝ現に蒙古の喇嘛僧を招致し佛典の修學をさせて居るのは決して偶然でない。其結果は現今の强固の基礎を蒙古に得ることになつて來たのだ。露國が蒙古研究に全力を盡すと同時に西藏及其歷史言語の研究は遠い昔から西人の間に行はれた。英國の西藏に於ける權威も彼等が多年に亘る不屈眞摯の研究を見ると其因りて來る所實に淵源あることが解る。今の所、西人西藏研究の文獻は實に一大書史を編するに足る盛をなしつゝある。

西藏の佛教は其經典の量に於て、內容に於て決して支那佛教に讓るものでない。其研究の進步したる點。飜譯の精確精美なる點、皆支那經典よりも一等地を拔く。吾國佛教の教義上諸暗點が西藏譯經の指示によりて明答を得るのが澤山ある。支那未飜の史書や註解書の貴重なもの、文法辭彙の珍奇なものが西藏一切經中に多數に包含されて居る。然るに吾國の佛學者は一向西藏に重を置かず、西藏語學者なぞは指を屈するに過ぎぬ。之に反して西洋では可成に古くから西藏佛教の研究が行はれ、不完全ながらも一切經の解題抔も存在し、西藏語聖典の校刊も屢出で、佛に英に獨に露に白に到る處立派な西藏學者が居る。而して基督教傳道家の如きも萬難を排して西藏布教の爲に努力し苦辛十年二十年傳道の餘暇に著はした西藏文法や西藏辭彙も出來て居る。佛教家は世界の如き西藏研究の活勢に對し尙唵摩尼鉢特迷吽（オンマニパツドメーフーム）の六甲秘咒が何の經文にあるかすら知らずに遊むで居られるかどうか。

邦人特に佛教家は學術研究の上にも、實際活動の上にも受動的にも活動的にも、此の如くして、如何しても西藏研究を切實に要求される時代になつた。此講義錄の三十頁は實に此要求の幾分を充す爲で、固より徒らに西人

まだ西人の研究が至らぬ様だ。今や吾國の治下にありて各宗が競ふて開教に從事しつゝある此鶏林の完全なる佛教史は、是非とも邦人が纏めて之を世界に報告したいものだ。高麗藏勅鑄の如き立派な聖典出版の事業は、一寸文明諸國にも例のない宗教史上の偉蹟ではないか。長白山の神聖雄偉はカーベンディシュの健筆で西洋に喧傳したが、海印寺の經藏の祕密はまだ歐人にもあまり知られて居らぬ。

第四章　西藏佛教の研究　附蒙古及滿洲佛教

一　西藏研究の切要　西藏といふと大正の今日でも、多少教育あるものすら全然吾々と沒交渉な一種の魔術國で、其經典とか宗教とかいふものは唯奇怪不思議の骨董品の如く考へるが、先普通の様だ。だから西藏佛教研究などゝ切出すと道樂も道樂、餘程飛離れた道樂として嘲笑される位のものだらう。政治家連中で西藏に於ける英露權力の消長がどうのかうのと大分通を利かす側でも、扨改めて其宗教や歷史はと來ると、一向見當が付かぬと云ふ有樣だ。然し西藏研究はそんなに對岸の火災視して置いてよいものだらうか。單に實利一點張と云ふ見地から論じても、蒙古や滿洲に邦人の根基を固めるには如何しても喇嘛僧を使ふのが怜悧の道だ。蒙古の民情風俗に深い研究をして、其機微を察するには如何しても、其宗教と歷史に充分の知識がなくてはならぬ。然るに蒙古滿洲の文化は西藏宗教卽喇嘛教を除いては了解することが出來ぬ。滿蒙人に於ける西藏文明は歐人が羅甸文明に負ふてるよりもつと深い關係に立つ。遠大の露國が明治の前に早くも『蒙古源流』を獨譯したり。蒙獨文法や蒙獨

熱心な護法の聖王となり、遂に其大臣端美三菩提（Thumi-Sambhota）等の印度留學となり、西藏文字の新製となり、大乘聖典の飜譯となり、主都拉薩大寺院の建立となり、佛教の興隆と共に、西藏特異の文明が雪山の眞中に爛焖の花を開いた。第三十五主乞嘌雙提贊（Khri-rong-de-tsan）（源流、持蘇隴徳燦）は英武四方に振ひ雲南四川を略し進で長安迄侵入した。此王は印度の諸高僧を請聘して盛に飜經傳教の業をなし、佛教中興の王として崇められた。此應招の高僧中、蓮華生上師（Padmasambhava）は秘密佛教の碩徳にして印度密法を西藏に傳へ且つ同國古代の宗教ボン宗の神明鬼神を降伏して佛教外護の善神とした。上師が西藏に於ける奇蹟と其攝受の善巧は弘法大師と軌轍を一にする觀がある。上師と共に來た那爛陀大學出の俊才高僧例せば善護尊者（Śāntarakṣita）等は上師と共に佛教を弘め僧團を組織し喇嘛（Lāma 上人の義）の名が初めて出來た三十八代俠巴瞻 Ral-pachan 王は印度の學僧を聘して盛に飜經事業を起し現存の譯經は大抵此王の時に就つた。然し王は不幸にも弑害に遇ひ、王弟朗達爾瑪（Landharma）が即位するに及び、寺觀經典を燒き僧徒を追ひ一時佛教地を掃つたが、惡王の治世二年にして一僧に殺され、其後佛教の勃興と共に迦濕彌羅の耆宿阿底沙（Atīśa）六十の高齢を以て西藏に入り秘教の爲に弊害を釀して大に頽廢したる僧風を革新して、所謂喇嘛教の改革をなした。元が興るに及び太祖、世祖ともに大に喇嘛教の用ゆるに足るを知り高僧を優遇して帝師とし同教を公然國教の地位に置き之を以て蒙古統治の實を收めた。喇嘛の隆盛は元代が其頂點である。隨て諸種の弊害が起つたのも實に此時だ。明に入りで元の喇嘛教優遇の政策を續けたが、喇嘛僧の腐敗横暴は益甚しかつた、此時萬暦年間に同教のルーテルと呼はるゝ大師

の研究を臚列して、他家の財寶を數へる愚を學ぶのではない。要は之を努力前進の興奮劑として、日本にも一のチョーマ出で、一のシュラギントヴイト現はれ、ロツクヒルやフエーヤやフーコー・シユミツド・フート・ウエンツエル・チヤンドラダース等が雲興潮湧、世界の舞臺に活躍して欲しいからだ。嗚呼能海寛君は旣に此目的の爲に往いて歸らぬ西藏學の犧牲となつた。纔に寺本河口の諸師で、吾國の斯學を代表する現狀ではなんとも淋しいではないか。

二　西藏佛教と其聖典　研究の一般を說述する前に、西藏佛教の概觀と其經典は如何なるものかを見て置く必要がある。西藏佛教史は後に出す西人の研究には隨分と詳細なのもあるが、漢書にも其一般を知るべき書に乏しくない。極略の所は藏中に存する『彰所彰知論』の中に述べられ、『蒙古源流』は大分小說的の色彩が加はりて詳密に、『西藏記』『聖武記』『衞藏圖識』等、多少の記事がある。此等藏人所傳に依ると、佛教の渡來は六朝時代に溯り西藏第廿五の王給陀朶嘌思顏贊 Lha Tho-thori-Ñyan-tsan（西曆四六三生）の時にしてあるが、實際歷史上では第三十主雙思甘普（或は弄瓚甘布、『蒙古源流』の特勒德蘇隆贊 Srong-bstan-sgampo）が佛教の開祖である。此王は西藏古今を通じての最大英主で、同時の名君唐太宗すらも其威武に對して如何ともする能はず媾和を締結し、宗室の女を公主として雙贊王に配した。之が彼の文成公主である。雙贊は一方尼波羅にも其威風を示し、同國光冑王（西域記に出る）の女、ブルクチー（Bhruti）を納れて第二の妃とした。かくて梵漢兩國の嬋娟を兩手の花の榮華に厭いた西藏王は決して單に五欲にのみ耽る暗主に陷らず、賢くも其兩夫人から佛教を聞き、

ふ。嘗て帝を鏡て曰く陛下の尊富見世を保有するに過ぎず、人生能く幾時ぞ、當に此秘密大喜樂禪定を受くべしと。是に於て廣く女子を聚めて淫戲す。帝の諸弟寵臣皆前にありて相狎る。男女裸處す、處る所を號して皆郎兀該といふ、漢に事々無碍といふがごとし、群僧禁中に入り醜穢外に聞ゆ。…………

崇喀巴の喇嘛教革新は此の如くして實に止むを得ぬのである。然し此時革新した德行派、現時噠嚹を戴いて勢力ある德行派卽黃帽宗の現狀はどうだ。其の頽落の悲慘、醜陋の以ての外なるは敢て言ふを要せぬ。第二の阿底沙、第二の崇喀巴は今や喇嘛教の爲に切要になつて居る。

教義――西藏佛敎の教義は瑜伽もあり中觀もあり、秘密敎もあり、淨土思想もある、經典の上から見れば大體としては支那佛敎の所傳と差異せぬが、然し成立したる喇嘛教には少くとも三つの特點が際立て目に着く。第一は秘密敎の特異發達で一方明王・諸天・鬼神（特に茶吉尼（ダキニ））等の忿怒尊の崇拜が盛なると共に、他面に於ては理智不二・眞俗一如・陰陽一道の表徵崇拜――印度の勢力教（シャクチズム）の影響も加はりて――が極端に發達し夫の那羅那哩和合の樂を表する男女抱合卽所謂陰陽佛が曼荼羅も鑄像にも鼻に付く程無遠慮に澤山あることだ。前者は勿論西藏固有のボン敎の惡魔降伏其善神攝受といふことをも示し、後者の肉感的神秘主義は喇嘛教の大膽な所でまた最も忌むべき點だ。第二には觀音崇拜を中心にした轉生化身說で西藏開敎の聖王雙賛思其梵漢の兩妃は勿論智臣端美三菩提からして名王賢臣高僧苟くも宗敎文化に功績あるものは皆佛菩薩の化身である。就中、雙賛思王は十一面觀音の化身で觀音は特に西藏國を愛護し玉ふ本尊、されば代々の噠喇法王は何れも大慈大悲の轉生化身で觀音が

崇喀巴（ツテンガパ）(Tsonkapa) 出現し、阿底沙の教義に基きて、大に之に改善を施し當時の頽廢腐敗したる僧風を一洗して一派を開いた。其甥の法位を繼けるものが即初代の達賴喇嘛で此派は次第に西藏及蒙古に勢力を扶植し第五代の法主那顏盧瓚（ナガンロアン）(Nagwan-lo-zang) に至りて政教兩權を統一して法王兼國王となつた。其後清朝となり康熙の征服に遇つたが實權は依然法王に委し駐藏大臣を置いて淸國の領域たるを示すのみで、民國革命已後も其儘になつて居るが、然し英國の西藏協約も近く出來たことだから同國の運命は向後どうなるか分らぬ。

已上は極略の教史大要だが、其教派を云ふと今十八派あるがワツデルは三種に分ける。第一が舊派即普通紅帽派といふので蓮華生上師已來の秘密教が主で且西藏舊來のボン教が大分混じて居る之に七派ある。第二は準革新派之に本末十派ある此中にはサスキス派やジヨナン派の樣な元朝に大勢力を占め今一部の權威を持つ宗派もある。第三は崇喀巴の革新派一名黃帽派と呼ぶもので或は德行派（ケルグパ）とも稱する。現時喇嘛教の正宗として最强大に且最勢力あるものだ。此等諸派の異同は詳論の暇もないが、要する所は舊派は秘密佛教を主とし、新派は之に戒律を加へて其迷信の甚しきに陷つたのを矯正したまでだ。第一の代表的祖師は蓮華生上師第二は舍迦般底答（キクキパンチタフ）、第三は阿底沙及崇喀巴である。西藏秘密佛教が極端に走りた例は非常に醜穢のもので一寸手近の『元明史略』を見ても

（元文宗十三年）十二月平章政事哈麻妹婿禿魯帖木兒等と陰かに西蕃（チベツト）の僧を帝に進め、房中運氣の術を行ふ、演蝶兒の法（大喜樂の法）と號す。……………伽加璘を國師とし、西蕃の僧を司徒とし、各良家の女三四を取りて之に奉じ、之を供養とい

藏では佛教の渡來が文學の創始で文字も文法も實に佛教の爲に出來、佛教々典が唯一無二の文學である。隨て其梵語を逐字的に忠實に直譯することの出來たのも尤だ。されば聖典研究には今や西藏經は無二の資料である梵語原文の錯誤、支那譯の不明何れも西藏譯で優に解決することが出來る。

西藏經典は二大部に分れた厖然たる一大叢書で漢譯一切經に對し蕃藏卽西藏一切經と稱する。二大部は甘殊 Kanjur 及丹殊 Tanjur で、前者は經律第二は論釋雜著を含む。今便宜上左に一表を設ける。

一「甘殊 正藏 七大部分に分れ、一百函になつて居る。其大要は左の通り

1 **律部** Dulva (Vinaya) 十三函、各函多きは一百餘少きも十數卷を包含し全體六百餘卷、本邦所傳律部の全體を該羅し尙他に重要なる律疏をも收める。

2 **般若部** Ser-chin (Prajñāpāramita) 二十一函。數百卷に別れる。漢譯大般若の全體を入れ、尙漢譯未存の各種小部般若も加はりて居る。

3 **華嚴部** Phal-chen (Avatamsaka) 六函。二千二百葉の大部。四十五品に分れる。漢譯の華嚴の三十九品と品目に開合の異があるが內容は一致する。ざつと左表の通り

藏本	漢本
1—3	1—3
4—5	4
6—9	5
10—11	6
12—23	7—18
24	22
25	19
26	20
27	21
28—31	23—26
32	36
33—41	27—35
42	37
43	38
44—45	39
45	39

物心兩界の統治者といふことになる。法王神權論、其神聖無過說の基礎は此の如くして羅馬教よりも遙に强固だ。此信仰は蓋西藏佛教の特色で、日本でも上宮太子を初め奉り各宗祖師の化身論があり、親鸞上人と玉日姬の小說は一寸雙贊思王と其の兩妃の化身論に類似してるが、西藏程現實的確でない。此の信仰から西藏の强大な僧侶政治も起り現に多大の勢力も存するのだ。第三はこれも觀音を本尊とした易行稱念の實行で唵摩尼鉢特迷吽（オムマニパッドメーフーム） Oṃ·maṇi·pad·me·hūṃ. の六字神咒を現當二世の爲めに連りに稱念する。甚しきは風車や獨樂の樣な一種の廻轉機を作り神咒數萬を印刷した紙を中に納め、一度轉廻すると何萬遍だなど云ふ極端なことまでして居る。今の喇嘛教僧俗の實際信仰は此六字咒で之を說いた正依の聖典は大乘莊嚴寶王經 Karaṇḍavyūha 漢譯は一向人の知らぬ經典だが西藏では最尊無比の神聖な經典だ。此他喇嘛教の頗る儀式的なことなども特點の一つになるが概略此位にする。

喇嘛教の聖典卽西藏經文は今では佛教硏究上其價値が時に支那經典已上に出づるとさへ學界では評判して居る。分量も支那經典に比し多く性質から見ても支那譯藏經の有せざる幾多の資料を包含する。

西藏經典の特點として尤も優秀な所は其飜譯が忠實適確であるといふことだ。蓋し支那には佛教渡來已前立派な文明が存在し諸子百家の典籍も乏しからず、支那文學は嚴然として既に世界的の資格を具備して居た。故に佛經の飜譯は其巧妙なるもの程、勢、俗文學の掣肘拘束を受けどうしても潤飾刪定の必要があつて其結果は義飜意譯に陷る。玄奘は此弊を矯めんが爲に隨分苦心したが、矢張漢文としては忠實の直譯を得るのは實に困難だ。西

帝大のは正藏丈だ。曹洞宗でも近頃一藏を有するに至つたが、完本か否かはまだ報告がない。

已上で西藏佛敎及其文學の一般は略見當が付いたらうから、これから右に關する西人研究の概要を略述する。

三　西人の西藏研究概念　西人の西藏研究は便宜上先づ四部に分けて見たらよからうか。勿論或る研究家では何れにも關係のあるものもある、亦實際上劃然と分けて見られぬのも多いが、兎に角、第一は探檢の記行類、第二は古代地理歷史の資料研究、第三は言語の研究書類、第四は宗敎に關する記述評論で、實例に照らすと第一はジエスイツト傳道師ウツク（Huc）の『韃靼、支那西藏紀行』第二はバツシエル（Bushel）が『西藏に於ける唐碑攷證』第三はチヤンドラダースの『藏英大字典』最後はキヨツペンの傑作『佛敎論』の如きものだ。第一の中にも無論宗敎のことを記述し、第四にも地理歷史人情風俗の記載が多少は交り、互に雜錯はするが內容の重なる方に從ひて先づ已上の如くに分けて叙述しよう。

第一の探檢の紀行類は基督宣敎師の熱誠な傳道を先陣として英露佛の軍人外交家及探檢者が續々としてこの世界の大秘密國に入り親く目擊實視した探檢記錄で、地理的の記述が其中心となる。最も早いのは西曆千六百年代に溯り、二十世紀に來り益重要な著書が現はれた。第二には今の所殆ど指を屈する程しか研究はないが然し此少數の研究中に頗る苦心の傑作もあり珍貴の資料もある。第三の言語研究は東洋學界の最熱烈忠實な殉職者チヨーマが一たび前世紀の初に基礎を開いて已來今や着々進步發達し良好精美な辭書も出來、各國に西藏學者が輩出すると共に第四の研究は層々根本的となり且つ梵語聖典との比較研究の如きは現在に於て苟くも佛敎聖典の講究に

4 **寶積部** Kon-tsega (Ratnakūṭ) 六函、漢譯二百卷の大寶積經と其品目は多少前後するも全部一致す。第一函（第一會至第五會）。第二函（第六會至第十會）第三函（第十一會、卽菩薩藏會）第四函（第十二會至第十五會）。第五函（第十六會至第三十一會）。第六函（第三十二會至四十四會）。

5 **經集** Mdō (Sūtra) 三十函あり。二百七十餘部の經典を收む。賢劫經に始まり。パーリより飜譯せる小乘諸經を以て終る。

6 **大般涅槃部** Myang-hdas (Mahāparinirvāṇa) 二函。漢譯に比して後分が特に詳密の樣だ。

7 **秘密部** Gyut (Tantra) 二十二函、二百八十九部の秘密聖典此中に收めらる。

二　丹殊（タンジュール）は三部に分る。一、讃歌一函。二、秘密儀軌八十七函。三、論釋類百三十六函だ。

一、讃歌集 Bstod-tsogs (Stotra) 五十八部の諸佛菩薩祖師の禮讃を集めたものだ。

二、秘密儀軌集 主として後代密部の諸經及儀軌類を收め、其數二千六百に上る。

三、論釋集 この集が、西藏經典中研究上尤も貴重な部分で、諸大乘經の疏釋の中には支那未渡の珍書に富み、因明諸書は勿論、作詩法、修辭學、文法、辭彙、書信集の如きものも存じ、音樂、算數、醫學天文の諸書にも乏しからず、佛像造立の法などさへある。眞に天下の一大寶庫である。

此西藏々經は明淸の時代に支那や西藏で出版となり、現に三四の板本がある。英佛露の諸大圖書館は早くから此蕃藏版本を手に入れ獨逸では北淸事件の當時に數部を得、中には全部の立派な寫本さへある。我國にも帝室、東京大學及東本願寺の大學に現在する。帝室の分は申上げず、谷大の藏本は完本で、且他に種々の寫本さへある。

纒めて千六百六十七年に其書入の大著『支那』の中で報告した。ジェスイット教の傳道家に次ぎて熱烈な意氣を以て西藏に布教を試みたのは實にカプチン派の僧徒であつた。四名の獻身的の同派傳道者は千七百八年に尼波羅を根據として西藏に入り大に布教に力めたが、此中に二十年間苦辛を西藏の天地に嘗め、傳道費の缺乏したとき異教徒の補助を仰ぐを斥けて、西藏官憲の保護を辭したデラ、ペンナ(Della Penna)の意氣と精神は大に佛教青年の龜鑑とすべき所であらう。ペンナの遺著は印度佛教聖典及人類學協會の會報に出た(A short Account of the great Kingdom of Tibet in 1729 A. D. J. B. T. A. S. V.)。ペンナの傳道と共にジェスイット派からも有爲の材幹俊才を選抜して、西藏に向はせた。其代表者は實にデシデリ(Ippolito Desideri)でペンナと同時に西藏首府に駐在したが、兩派の間に多少面白からぬ軋轢もあつた。此人は伊語で『西藏』Il Tibet を書いた。此の如くして西藏に於ける羅馬教の開教はカプチン、ジエスイット二派の衝突の爲に遂に裁斷を法王廳に仰ぎ、其結果カプチン派が新に開教を引き受けデラ、ペンナはベリガツチ(Cassino Beligatti)等の俊材を引率して尼波羅を經て再び西藏に入つた。かくてベリガツチは頗る趣味ある記錄を殘したが、稍成効に近いた傳道も遂に西藏僧徒の反抗に逢ひ折角苦心して築き上た教會は全然破壞され、信徒は死を以て改宗を逼られ、傳教者は纔に身を以て免るゝ悲慘の狀になつた。デラ、ペンナは此苦辛屈辱中最後まで其職務を盡して尼波羅に退きて身を終つた。此後西藏に入り拉薩で教長の厚遇を受けたのは蘭人ファン、ド、プツテ(Samuel von de Putte)で、此人の一生は頗る傳奇的の色彩に富む。和蘭一艦長の子として單身西藏に入り、大に大喇嘛の知遇を得て、西藏使節として

指を染むるものが必らず盡さねばならぬ必須條件の一つになつて來た。而して此第四の研究の項下には（一）教史及教理に關する一般的の著書、（二）聖典の解題、（三）聖典の飜譯及校訂出版につき略代表的の傑作を網羅して見よう。

四　西藏探檢紀行　西藏に入つた最初の歐人は恐らく東洋に於ける大傳道家で且大旅行家のオドリツク（Friar Odoric）であらう。此人は西暦千三百二十八年に支那から西藏に入り首都拉薩（ラッサ）に到着した記錄を殘した。西藏喇嘛教長のことを『偶像教の法王（パアプスト）』と呼むで居る。支那書史の記載を別としたら之が外人の西藏に關する最初の記事であらう。マルコ、ボーロの書中にも西藏に關する記載が少々あるが同人は足西藏の地を踏まぬのだからオドリツク程の權威がない。此大傳道家の後二百餘年を歷てモーゴル帝國の驍將回教の猛烈な征服者で同時に立派な歷史家の譽を止めたミルザ、ハイダル（Mirza Haidar）の史書（Tarikhi-i-Rashidi）（ダリキ　ラシデイ）が千五百四十六年（天文十五）に著はされた。此書は此驍將の征戰錄で千五百二十七年劍を取りて起ちて已來連りに諸地に半月旗の威風を颺げ小西藏卽ラダツクを屠りて其僧徒を鏖にしカシユミールを略し遂に西藏本部に侵入し首都ラツサから八驛の手前で引還した。地理其他當時の記事としては實に重要だ。此後千六百年代に入りジエスイツト教の傳道者アントニオ、デ、アンドラダ（Antonio de Andrada）（Novo Descubrimento de grao catayo ou dos Regno de Tibet 1626）や、引續いてヨハンネス、グリユーベル（Johannes Griiber）アルベルト、ド、ドルギル（Albert de Dorvill）等が入藏した。後二者は頗的確の記錄を殘し、之を同教の學僧サルヘル（Atharasius Kircher）が

此後西藏探檢で學者の認めて居るのはジェスイット派の宣教師ウック（Huc）とガベー（Gabet）の大旅行である。此兩僧は其探檢の期間は支那、韃靼、及西藏を通じて纔に一千八百四十四年から六年まで足かけ三年の短日月ではあつたが高僧ウックが頭腦の非凡と觀察の周到明確なるは卓然群を拔く。探檢記は千八百五十年パリで出たが（Souvenirs d'un voyage dan la Tartarie, le Thibet et la Chine pendant les années 1844 à 1846.)。間もなくハズリツト（Hazlitt）の英譯が現はれた。兩僧探檢の後、米人のロツクヒル（W. W. Rockhill）と露國のプルチエワルスキー將軍（Gen. N. M. Prchevalski）との二人が東西兩大關の格で、今に名聲を馳せつゝある。前者は博學多識支語學西藏語の素養深く學者としては探檢家中の第一流に位する。支那に滯在して西藏に旅行する二回『喇嘛の國土』The Land of Lama や『一千八百九十一年と同二年に於ける蒙古・及西藏の旅行日錄』Diary of a Journey through Mongolia and Tibet in 1891 & 1892 等の傑作を殘したが、考古學及宗教の方面にも非常に偉大な貢獻をした。それは次項に述べる。プルチエワルスキー將軍は中央亞細亞及西藏の探檢四回に及び、地理學的の功績は實に不朽のものがある。南山山脈とアルチンタツグの連絡あるを實地に證明したのも其一つである。旅行記探檢錄其他報告類は可成にあるが獨文の『西藏旅行』Reisen in Tibet 1884. が普通廣く讀まれる。將軍は大佐時代の千八百八十一年から二年に亘りて無事拉薩を訪ふた。此二大探檢家と前後して漸次英國の西藏に對する政策猛烈となりモントゴメリー大佐（Montgomery）ヲルカー將軍（Walker）バワアー（Bower）ウエルビー（Welby）デーシー（Deasy）等の諸大尉が何れも英國から派遣されて中央亞細亞西藏を

同國の官服で揚々として北京宮廷に其使命を完うし、歸藏の後、崇高の性行から神明の如くに尊ばれた人だ。プツテの時代英國は恰も印度に其鵬翼を伸しワーレン、ヘステイングが辣腕を揮て其部下を西藏に派遣したが、此選に當つた第一人は卽一千七百七十四年に札什倫布(タシロンポー)に着したボーグル(George Bogle)であつた。此人は稀に見る材幹と機敏な觀察力とを有し西藏と印度との外交的關係を圓滿ならしめ通商上頗る利する所があつた。此人の後任としてターナー(Samuel Turner)一千八百八十三年ブータンから西藏に入り多年同地に留りて大に盡す所ありしが、ヘステイングの死と共に西藏印度の外交的關係は中斷し、折角の雄圖も一時中止された。ボーグルの入藏探檢は後に記するマンニンクの入藏實歷と共にマルカムが後に纒めて一書にした(Markham: Narratives of the Mission of G. Bogle to Tibet, and of the Journey of T. Manning to Lhassa 1879.)。ターナーは自分で其西藏に於ける大喇嘛會見實記を著した(Account of an Interview with Teshoo Lama 1783,『亞細亞(エシアテイク)討究(レサーチ)』第一卷所載)。此際恰も西藏は尼波羅ゴルカ兵士の爲に侵入を受け、札什倫布は一時尼波羅人の手に落ちたが間もなく淸國兵は尼波羅の占領軍を驅逐して、益西藏の主權を固くし、同國を閉鎖し特に印度方面との關係を全然遮斷した。此等の事情の爲歐人の西藏訪問は一時斷へたが一千八百十一年に至り前に一寸名を出したマンニング(Thomas Manning)が醫家として特に支那人治療の名義で入藏を許された。此人は文人チヤーレス、ラムの親友、廣東で支那語を研究した溫厚篤實の士、英人で西藏の首都拉薩に首尾よく入込むだのは此が初めてゞある。同時に西藏北境を探檢した印度政廳のムーアクロフト(Moorcroft)も一寸有名で其記行もある。

ルギウス (Georgius) の『西藏語彙』 Alphabetum tibetanum が現はれたが、固より不完全を免れぬ。十九世紀に入り千八百二十六年に印度で舊教僧(逸名)の出した藏英字書が之に次ぐ、然し學術的の價値はない。然るに茲に西藏學は一獻身的の篤學者が出た爲に科學的の基礎が出來た。此人は卽ち匈牙利人のチョーマ・ド、ケレシ (Alexander Choma de Körösi) である。チョーマは一千七百九十八年匈國ジーベンブルグの一軍人の家に生れ、十八歲獨逸に學びてギョッチンゲン大學に學むだが、自己の祖國匈牙利は支那史書の回鶻族なりとの學說を聞き、其祖先根元の地を亞細亞高地に探究せむとするの決心をなし孜々東洋語學を專攻し一千八百二十年の元旦にアルメニヤ人に服裝を變じてブカレストよりバグダットに出發した。此時此有爲の青年には一人の援護者もなく囊底には金錢甚乏しく孤影蕭然たるものであつた。然し千辛萬苦に屈せぬ此青年は米國の一隊商に請ふてコルシヤンよりボツクカラに進み二年の後漸くカブールに到着し印度のラホールからカシユミールに入るを許され茲に前記ムーアクロフトの同情を得てゲヲルギウスの『西藏語彙』を借覽し之に依りて西藏語を修め千八百二十四年漸くにしてラダツクの一村落に達し此處で喇嘛僧に從ひて大に佛教文學を研究し次で同三十一年まで西部を遍歷し其秋印度のシムラに出たが、粗衣垢面鬚髮長く垂れて大古の人の如く、唯書卷是親むで居つた。其翌年甲谷他で東洋學諸名士の非常な歡迎と賞讃を受け特にウイルソン教授やプリンセプの如き碩學が中心の尊敬を捧げて此篤學の偉人を遇した爲、チョーマも其知遇に感じ茲に止まる約十年其間蘊蓄を傾けて著作したのが有名な三十四年に出た『西藏文法』 Grammar of the Tibetan Language と其翌年公にした『藏英字彙』 Dictionary, Tibetan and

探檢し何れも貴重の記錄報告を殘した。佛のデスゴオダン（Desgodins）ボンワロオ（Bonvalot）等も立派な旅行記を著し、露のコズロフ（Kozloff）シビコフ（Tsybikoff）等も夫々名著あり。チヤンドラダース（Candra Dās）ナイン、シヌグ其他印度政廳の爲に働いた印度人も頗る多くの貢獻を西藏探檢史上に捧げた。就中チヤンドラダースは諸方面に亘りて著書報告を爲し、佛教學上にも功勞少からざる碩學だ。近代に入り英國の從軍僧サンドバーグ（Sandberg）亞細亞の大旅行家スベン、ヘディン（Sven Hedin）等の有益の探檢報告も出て佛國ではローネー（Launay）の『西藏傳道史』Histoire de la Mission du Tibet 1903 の樣な特殊の書まで出て、之にワツデル（L. A. Waddel）や最近大に西藏事件で名聲を擧げたヤングハスバント氏（F. Younghusband）の名著を加へ、其の他の雜著報告類を網羅したら西藏探檢錄は優に一大書史（ビブリオグラフイ）を要求するに價しよう。ザントバークの著『西藏遠征』Expedition of Tibet, 1905 には此等探檢家の功績を集記しワツデルの『喇嘛教』とホルディツチ（Holdich）の『秘密西藏（テイベツト・ゼ・ミステリアス）』の卷尾には此等文獻の重要なるものは大抵該羅してある。

西人は此の如くに宗教政治の諸方面から非常の努力で西藏秘密の鋊谷を開き着々其闇黑な山河を學術的に闡明しつゝある。而も秘密はまだ〳〵奥があり、闇黑の千山萬水其區域尚甚廣漠だ。玆に於てか日本にも一のスベン、ヘディンがなくてならぬ。求法と傳道の精神で起つ、一の佛教的のデラ、ペンナが是非欲しくなる。

五　西藏語學の研究　前項に撮記した通り羅馬教僧徒の西藏傳道熱は可成に早くから現はれて、カプチン派やイエスイツト教會の活動となつたが、其爲存外早く基督教學僧の間に西藏語の研究が開始され寶曆十二年にゲオ

後師は稿本を訂正し藏英字典に改め Tibetan-English Dictionary として千八百八十一年に漸く出版になつた。師はまた簡易な西藏文法を著はし(八十三年)、今に學徒に便益を與へる。此前後にラウフェル(Laufer) シーフネル (Schiefner) サンドベルグ (Sandberg) 等の西藏語學に關する諸作出で、レノーの企てた辭書はデスゴオタンが一千八百九十四年に整理を初め五年の後同九十九年に香港で完成し千有餘頁の藏拉佛大字典 Dictinaire thibétaine-latin-français parles missionaires cathoriques du Thibet が是だ。基督敎傳道家の熱心實に感ずべしだ。此大辭典に對して遜色なき藏英字典は西藏學に於て學界の木鐸を以て推さるゝ印度人チャンドラ、ダース (Sarat Candra Das) の苦心の作で厖然たる大冊一千三百餘頁、他の辭書に比し卓絕した點は實に佛敎哲學の學語が豐富で其典據が的確、その梵語との對譯が允當なるに存する。現今の所では此最近千九百二年に出來た此書が、西藏辭書の上乘で、之を以て同時にチョーマに初まつた研究が一段落を告げたとも看做される。然し第二段の開展一層完全な藏梵或は梵漢藏佛敎字彙の編成は實に之からだ。而してこれは誰の責任だらう。いざ先づ方向を轉じて西藏研究の他の方面を見、佛敎研究が何處まで行くかを調べよう。

六　西藏古史料の研究　佛敎研究に入る前に一寸西藏の地理及び歷史に關する資料につき西人の硏究を一瞥する。何れも佛敎研究に關係のあるものだが方面が特別になるから、初めに片附けて置く方が便宜であらう。

西藏史及地理の研究につきて賢くも支那の資料に着眼した西洋の學者が二人ある。一は前に記したロックヒルで『衞藏圖識』を本とし、大淸一統志・西域同文誌・西招圖略・聖武記・西藏考古錄・西藏碑文等を考證して支

English で此二書は實に歐洲西藏研究の根底である。チョーマは翌年に『亞細亞討究(アシャテイク レサルチ)』の第二十卷に四種の重要な西藏佛敎に關する論文を發表し其造詣の深遠なる頗る學界を驚した。卽ち1、蕃藏律部解題。2、釋尊傳記3、蕃藏甘殊六大部解題。4、蕃藏丹殊撮要で、第二を除き第一、三、四を合せると卽ち西藏一切經全體の解題となる。其博涉の勞と精力の大は眞に驚くべきものだ。かくてチョーマは一千八百四十二年に再び西藏に入り拉薩を訪問して法王に謁する目的を以て出發したが途ダーヂリンで熱病を得て、四月六日鬼籍に入つた。大馬翁が、此人に『古代宗敎及言語の研究の爲英雄的に熱誠專攻した』といふ讃辭を捧げたのも尤だ。傳記はミトラやラルトンの著書の序文にも見へ、またヅカ (Duca) の別傳 (Life and Travels of Alex. C. d. Körös 1884) もある。

此後西藏語は大に發達して諸國に學者が出初めたが最も早いのは露國のシュミツト (Schmidt) でチョーマ文法の出た後六年、彼得堡で獨逸文の『西藏文法』Grammatik d. tibetishen Sprache 1839 を著し、次でまた藏獨字書が千八百四十一年に出で、佛國では西藏佛敎學に少からぬ功勞のあるフーコー (Foucaux) の同五十八年著西藏文法 Grmmaire de la langue tibétaine 之に次ぐ、此前凡六年佛國の加特力敎傳道家蕃佛字彙編纂の計畫ありレノー (Renau) が主任で初めたが出來ずに居た。然るに獨逸のモラビアン派の傳道家ヤシュケ (H. A. Jäs-chke) が此缺陷を補ひて頗る立派の字典を編纂した、此人は其同僚ライヘルト (T. Reichelt) 等と多年西藏國境にありて傳道に力め五十六年に字典編纂を發起し先千八百七十一年より六年に亘り其稿本藏獨字典を自筆の石板に刷つて篤學者のみに頒つた。Handwörterbuch d. tibetis chen Sprache がそれだが其苦心實に思ふべしだ。其

西藏佛教研究に就き、先づ一般的の成書を擧げると、探檢記中にも多少の記事がありウツクや其他の紀行に頗る參考となるべきものもあるが、纏つた著作として矢張チョーマが開拓者で、其西藏一切經の解題や傑作『西藏文法』に附錄としてある西藏佛教年表の如きは教史教理の研究の根本資料である。チョーマの後西藏佛教につき好著を出したのは伯林フリードリヒ中學の教官キョツペン（C. F. Koeppen）で一千八百十九年『佛陀の宗教』Die Religion des Buddhas 上下二卷を公表したが、其の下卷は卽喇嘛の教政と其教會を記述評論したもので今に價値の滅ぜぬ名著である。此書の後少し遲れて六十三年に現はれた前記シュラギントワイトの『西藏の宗教』The Buddhism in Tibet は精確の資料に依り教史教理教式の大要を叙し特に二十枚の立派な西藏佛畫が石版で參考に添へてある。西藏佛教研究には必須の書。佛譯もある。（Le Bouddhisme au Tibet. Traduit de l'anglais, par L. de Mill oué 1881）。此時代に佛國ではフーコーやフエーヤが盛に西藏研究を發表し、種々重要の論文飜譯を學壇に捧げフーコーは後段記するが如く千八百四十八年といふに方廣大莊嚴經蕃文の出版さへ完了した。露國では少し先きに有名な西藏蒙古の碩學シュミット（I. J. Schmidt）（千七百七十九年生千八百四十七年死）が獨逸から歸化して彼得堡大學教官となり大に西藏研究の爲に活動し前記の如く頗る早く西藏文法や辭書を作り亦佛教學の爲にも賢愚經蕃文及獨譯の發表などがありて其功績著しく蒙古學に於ても優に開拓者の譽を博すべき人だがこれは後に說く。露國に於ける獨逸生の西藏學者は此人の外に尙シーフネル（F. Aton von Schiefner）（千八百十七年生、同七十九年歿）を擧げ得る。此學者の西藏研究につき吾々に殘した恩惠は頗る多いが就中西藏大

那の古地圖や地誌に依りて西藏地理を論じた Tibet. A Geographical, Ethnographical, and Historical Sketch, derived from Chinese Sources 1891 J. R. A. S. が即ち是で實に立派な研究だ。之より先きバッシエル (S. W. Bushell) は西藏古代を研究せむが爲に支那史書に資料を仰ぎて一論文を成した、(The Early History of Tibet from Chinese sources)。此人は西藏に於ける唐肅宗時代の支那碑文の研究を公表して當時西藏と支那との關係を歐洲に紹介した。西藏の古書から史料を發表したのは獨逸バヽリヤのエミール、シユラキントヴイト (Emil Schlagintweit) だ（千八百三十五年生）。此人は四人の兄弟があるが何れも大學者で、長兄は眼科の大家で、之が爲貴族に列せられ、第二は地理學の泰斗と仰がれ第三のヘルマンとエミールが印度學者として尊ばれ、第四はバヾリア參謀本部內の大尉として軍功ありまた西班牙のモロツコ遠征にも從軍し著書もある。五人揃ふて此の如くなるは實に珍らしいことだ。エミールが西藏佛教研究に就き重大の位置に立つは後段に述べるが西藏諸王の系譜につき重要の飜譯考證をした、それは西藏の古書『王統明鏡』の獨逸譯で『西藏諸王』Die Könige von Tibet 1886 と題し、鄭寧な考證をなし原文も添へてある。此人は西歲古碑文の解讀にも苦心し、一二の論文も出た。然し此方面の卓絕の技倆は新進の西藏學者フランケ (O. Francke) で、古碑文研究の外に西部西藏史 History of Western Tibet などもある、長篇ではないが造詣は確に深い。

七　西藏宗教の研究　西藏宗教といへば喇嘛教であるが此外に前にも申した通りに固有の宗教ボン宗 Bon-po がある。此宗教を研究した人はあまり澤山にもないが此項の終りに一寸書く。

れて見た方がよい。獨人シューレマン（G. Schulemann）が最近の著『噠嚹喇嘛史』Geschichte d. Dalailamas 1911. は此項の最後を飾るべき書で支那資料に依つた最近代の西藏敎會史だ。

次に經典研究に遷る。旣に述べた通、チョーマが初て西藏一切經の解題を英文で公表し之を亞細亞研究に掲げて大に學界の賛譽驚愕を博したが、西藏學の發展と共に校正增補を要する點が漸く見へて來たのと一つには其再版の必要もあつたので終に、レオンフエーヤ（讀者諸君がパーリ研究で御存知の）が之を佛譯して大に校訂を施すことを企て、千八百八十一年にギメー博物館報の第二卷として此勞力非常なる美濃判四百五十頁の大目錄を出した。之が有名の Analyse du Kandjour 甘殊解說で、丹殊（續藏）に就きても勿論全部の解剖を施し親切に其內容を指示してある。之より先、チョーマの解題の出た後十數年、シュミツトが千八百四十五年に『甘殊指示』Index des Kandjur を作り僅少の部數を石版印刷に付して頒布した。丹殊の解題につきては獨逸のフート（Huth）千八百九十五年其部分の論釋集だけを學士院會報に出した（Verzeichniss der in tibet. Tanjur, Abteilung Do.）續藏全體でないので實に惜しい。佛國ではコルデイヤ（P. Cordier）が最近パリ國民圖書館の西藏書目錄を作成し先づ第二卷を出したが、卽之が丹殊索引 Index du Batan hgyur 1909 である。日本でも今寺本婉雅師が甘丹兩殊の目錄作成中だとのことだが。必要なのは漢藏經典の對比で、二十世紀に於ける學術的な『法寶勘同總錄』は是非とも現はれねばならぬ。

西藏經典の出版者として第一の名譽を負ふべきはシュミツトで其賢愚經の原文及獨譯（Dsanlun. Der Weise

喇嘛多羅那陀（ターラーナータ） Tāranātha の藏文印度佛教史原文を出版して其獨譯と合せて刊行したのは今に學界を裨益して居る。然し此等の碩學には一般的の纏つた著書はない。英國の使命を受けて北京より西藏に入り拔群の學才と雄文とを以て歐人を驚かした、サラット、チャントラダース (Sarat Candra Dās) は種々西藏の古史料就中サスクヤ。ミララスバ。崇喀巴。蓮華生上師等に關する傳記を研究し、之を印度佛教聖典出版會の會報に公表したが一般的の著としては『雪の國に於ける印度學僧』Indian Pandis in the Land of Snow 1893 で此の小冊子の中には古代西藏に於ける印度高僧の活動を叙し一般教史として頗る興味ありまた有益だ、而して最後で恐く現在に於ける最完全と稱し得べき一般的著書は軍醫正ワッデル (L. A. Waddel) の『西藏佛教或喇嘛教』The Buddhism of Tibet or Lamaism 1895 で六百頁の大冊子歷史・教義・僧侶・建築・神話・儀式・魔術・祭式・民俗教の八段二十一章に分ち出來得る限り詳密に西藏佛教の精要を括りてある。此書は同氏がシキム滯在中に西藏諸派の喇嘛と交際して得た資料が大部分を占め頗る信賴するに足る。此人は前項名丈一寸出したが西藏にある四年間、拉薩にも入り拉薩及其秘密 (Lhassa and its Mysteries 1905) の快著もある、また種々の論文も皇立亞細亞協會雜誌に載つたワッデルと共に記すべきはグリュンウエーデル (Grurwedel) が露國のウクトムスキー公 (E. Uchtomskij) 蒐集の西藏佛像（千九百年のパリ大博覽會に特別展覽を許した）に就きての解說『西藏及蒙古の佛教神話』Mythlogie des Buddhisms in Tibet u. Mongolei 1900 である、此書も一般教史教理に就き的確簡明の研究を出してある。然し其目的が佛像佛畫の研究が主であるから後段に出るパンダルの西藏佛像圖彙などの部分に入

獨逸に於てはライプチヒで篤學の青年西藏學者ウェンツェル、(H. Wenzel) が其學位論文として龍樹勸誡王偈の西藏譯を提出し Suhṛllekha. Brief des Nāgārjuna an König Udayāna (寄友書、龍樹が優陀延王に與ふる文) の題號で學界に名聲を博した。他に種々有益の論文もある。此人は後オックスフォードに遊びて學術上功勞あり。馬翁其他の先輩から有望な西藏學者として囑望せられたが、惜哉、明治二十八年纔に四十で死むだ。ウェンツェルと匹敵すべく學界に少からぬ貢獻をした伯林の西藏學者講師フート (G. Huth) も明治三十九年四十九歳で早世した人で早く西藏律文捨墮法の原文と獨逸譯とを公表し (Die tibetische Version d. Naiḥsargika-prāyaścittika-dharmas. 千八百九十一年)。其後有名の大作蕃文蒙古佛教史の藏文及獨逸譯 (Jigs-med nam-mkha: Geschichte d. Buddhismus in d. Mongolei) を千八百九十三年に公刊を初め三年の後九十六年に二卷の大冊が出た。フートは資産が豐であつたが永く妻を娶らず夜は概ね華かな伯林のカッフェーで消したが、死むだのも突然の腦溢血でカッフェーの大理石の卓子に凭れ其儘になつた。記者は此人とは二三回酒杯を共にしたこともある。フートの大冊現はれた前後露國にはチェルヴトスコイの樣な活潑な西藏學者出で、因明書正理一滴 Nyāyabindu 及其注疏 Ṭīkā の西藏語本を千九百年已降『佛教文庫』に公刊し、尚八千頌般若釋現觀莊嚴論 Abhisamayālaṃkāra-prajñāpāramitopadeśa-śāstra の梵蕃對校の刊本藏文のアマラ梵語辭彙 Amarakoṣa の校正本等を同文庫に公表せんとし、新進氣鋭天下を睥睨し。ガンのプサン教授は之に對抗して正理一滴の西藏本と釋を印度で出版し(千九百七年『印度文庫』)、尚月稱(チャンドラキールチ)論師の中觀論釋 Madhyamakāvatāra の西藏譯を同文庫に出しつゝある。プサ

u. der Thor) は千八百四十三年に彼得堡で出版された。此經は譬喩因緣趣味津々たるもので、其資料吾國でも說教などに多く使用される。フーコーの方廣大莊嚴經西藏原文と其佛譯 (Rgya-tcher-Rol-pa 1847—48) は次で現はれ、フエーヤは甘殊より拔きたる十一種の經典を佛譯した何れも轉法輪經の如き小部の經文である。(一八六四—七一年)。此後ロツクヒルは蕃文出曜經卽法句經 Udānavaga の英譯を公刊し(一八八三)。翌年西藏佛傳 The Life of Buddha を出したが、之は漢譯衆許摩訶帝經の蕃本を本としたのだ。此佛傳には尙異部宗輪論の譯や、蕃本から譯した西藏及于闐國史が添へてあるから、研究上重要のものとして今尙學者は之を尊重する。ロツクヒル同時に印度に於ける西藏學者も種々重要の聖典を校刊した。卽プラタパチヤンドラ、ゴオシヤ Pratap=acandra Ghosha は十萬頌般若の西藏原文を『印度文庫(ビブリオテカ、インディカ)』の中に出し(千八百八十八年至九十七年)。第二章記載の如くチヤンドラダースは同文庫に阿波陀那劫波羅多(アワダーナカルパラタ)の梵藏兩文を出版し、索引まで製作した(千八百八十九年至九十四年)。而して印度の西藏學研究の榮譽として、最後に記すべきは、夫の多羅那陀の印度佛教史と比肩して立つべき西藏大喇嘛スンパ、カンポー、エーセ、パルジヨル (Sumpa-khanpo-yese-pal-jor) の『佛教大史』Pag'sam'jon'zang の出版で、榮譽は『藏英大字典』の著者に歸する。此書は印度佛教史、西藏教會史の二大編に分れ、前編は印度佛教史を詳敍し、後編は西藏開教已來西曆一千七百四十五年に至る。蓋し西藏史書として最貴重なるものゝ、一つである、校刊者サラツト、チヤンドラダースは之に鄭寧にも英文の內容指示、及人名及地名の索引約二百頁を付けたから、西藏語に不便を感ずるものも容易に珍貴な史料を得ることが出來る。

健陀羅式佛教美術に於て功勞少からぬフーシエー（Foucher）も明治三十年にホツヂソンの蒐集した尼波羅西藏佛畫の目錄を作成して略解を施し（Catalogue des peintures népâlaises et tibétaines）アツカン（J. Hackin）は宗教學研究上豐富の參考品で聲譽高きパリのギメー博物館西藏部の報告書として最近明治四十三年に『西藏畫像記要』Notes d'iconographie tibétaine を書いた小冊子だが重要だ。此人は翌年にバコー（J. Bacot）の集めた佛像類に依り更に『西藏美術』（L'art tibétaine）を書した百頁に滿たざるものであるが此種の試としては確に新しい。グリユンウエーデルの好著『西藏及蒙古に於ける佛教神話』は前にも略記したが、各國佛教現狀の序論に次ぎ第一章は印度に於ける佛教萬尊の發達、第二章は聖者にして印度賢聖。西藏古佛教聖者。蒙古の改化者及黃教祖師の三項に分ち第三章は神靈で、之を守護佛神・佛陀・菩薩・女神・護法善神の五項に彙類し各項珍貴の畫像を出して解釋し特に歷史的批評の頗る見るに足るものがある。寺院及び特別の畫像につきても種々の論文が歐洲諸學會の雜誌に現はれ今一々之を列記する暇もないが。喇嘛教歷史に重大の關係あるクンブム大寺に就きてフイルヒネル（W. Filchner）の踏査研究 Das Kloster Kumbum 千九百六年版は詳細の寺圖其他三十餘の畫が挿むである。頗精細のものだ。

西藏佛教に就きての著書及研究の現狀は已上で略大要を盡したが、此項を終るに當り一つ書き添へたいものがある。それは西藏の古教ボン宗（Bon-po）に就きての研究だ。

此極めて特別の古宗教佛教渡來後之と混合して一種の俗信を形成したボン宗に就きてはシーフネルが千八百八

ン教授は此他にも西藏經典の造詣極めて深遠なることを示し、其梵語の力量と相待ちて虎に翅を添へた觀がある。英國では今トォマス (F. W. Thomas) や、バーネツト (L. D. Barnett) 等が西藏研究を以て鳴り。最近獨逸では永く西藏に布教したモラビアン派の傳道家フランケ (A. H. Francke) が前にも一寸記した如く頗活動し、青年の新進の學者としては西藏文のカーリダーサの敍情詩『雲の使』の本文批評 (千九百七年) や西藏文法語彙作詩法に付き意見 (千九百八年) を公にしたベツク (H. Beckh) のやうな人もあるが、今各國學者が囑目して一敵國の觀をなすは前章に記した敎授ワレザーである。氏は三年前 (明治四十四年) に月稱中觀論釋の全編を獨譯して世に問ふた。此の如くして西藏聖典の原文出版は年と共に益進歩する狀況だ。

聖典の飜譯出版と共に一寸書き加へて置きたいのは西藏美術剋實して云へば西藏佛像佛畫の研究即圖像學Ico=nography である。喇嘛教の如く佛像の千差萬別非常に種類に富む宗教では研究上之が必須の一分科となつて來る。之には先第一に北京に長く滯在し一時淸國教育の機務に參したパンダル (E. Pander) が伯林博物館で出した『西藏佛像圖彙』Das Pantheon des Tschangtscha Hutuktu, ein Beitrage zur Iconographie des Lamaismus 明治二十三年版)。此書は題名にも見ゆる如く西藏サスクヤ派の大喇嘛章嘉呼圖克圖(チャンチャフツクツ)が纂集した諸佛菩薩諸天鬼神三百の佛像圖彙に依り西藏原圖を模刻して精細の獨逸語の解釋を加へたもの支那語の飜名も添へてある。但し圖が何れも模寫なので拙劣の點もあるから其後此珍書をオルデンブルグ敎授が原圖其儘を原本通紅色刷の石版とし『佛敎文庫』で出し露文の說明を添へた。此方はパンダルに比し格別のことはないが圖は、負に鮮明優秀である。

ミットは恐く地下に微笑して居たらう。シュミットは此傑作の外に『蒙古文法』（千八百三十一年成）と『蒙獨字書』（同三十五年）とを著はし、尙蒙古の民俗宗敎に就き種々の論文を發表した。シュミットの後露國に於てはゴルスツンスキー（Golstunskij）ルードネフ（Roudnef）コワレヴスキー（Kowalewskij）ミリヲランスキー（Miliolanskij）等の精美な蒙獨若くは蒙獨佛の字書文法等出で蒙古語の研究は頗る進步した。芬蘭土に於てもラムステツド（G. J. Ramstedt）の如き蒙古學者ありて盛に蒙古語史を專攻し、佛國にはスリエ（G. Soulié）の樣な文法家も出た。語學の方は先此位にする。

一般蒙古史は波斯人ラシート、エルヂン（Raschid-eldin）の古記其他アラビヤ人の筆になる珍奇な史料ある爲大に西人の研究熱を高め、ドオソン（d'Ohsson）のラシードの佛譯證義を初めハムマー（Hammar）ホアルト（Howohrt）ブロヅシエー（Blochet）等が此等史料を綜合したる蒙古史出で、ホアルトの如きは稍繁冗の嫌あるも厖然たる大册四卷の蒙古史を完成して居る。此等波斯・阿拉比耶の歷史資料は佛敎の方面には餘り重きを置かず蒙古諸部に於ける回敎の勃興に力を入れてあるが、蒙古政治史としては缺くべからざる重要のものだ。

蒙古佛敎に關する著作は多くは西藏佛敎と合して書いてある爲、特別のものは甚乏しい、前に擧げたフートの『蒙古佛敎史』が唯一の典據だが此他に尙アルレー（Harlez）の東方韃靼人の宗敎 La Religion des Tartales orientaux 1887 の中佛敎に關する部分などが代表のものとならう。其他はラトロフ（Radloff）等の旅行記等から佛敎に關する點を抄出する外はない。

十年に露國で此教の聖書ボン經典『十萬白龍』Üb. d. Bompo-sūtra: ” das weisse Nāga-hunderttausend” に就き論ずる所あり、本文大要も紹介したが、其後ラウフエル (B. Laufer) が此珍書の小本を出版し獨逸譯と字彙とを付けてシーフネルの業を大成した。(Klu bum bsduspai snin po. Ein verkürzte version des Werke von den 100.000 Nāgas: ein Beitrag z. Kenntniss d. tibet. Volksreligion 1898) 此『十萬白龍』は寺本婉雅師が原本から邦譯したさうだが、記者はまだ之をシーフネルやラウフエルと對校するの機會がない。ラウフエルは今の所歐人中唯一のボン宗學者で『十萬白龍』の外に尙ほボン教の懺悔文に就きても論文を書いた(千九百年)。印度の佛典出版會の會報中にはチヤンドラダース其他のボン教に關する研究論文多く、珍らしき同教の神像なども出て居る。

此他西藏文字や音樂や醫學に就きてもチヤンドラダース、ラウフエル H. Laufer 等の研究があるが、今は略して置く。

八　蒙古及滿洲の佛教　西人の滿蒙研究は隨分古い。隨て語學の如きも邦人が想像已上に進步して居る。蒙古の方はシユミツトが最早く研究を開始し、文政十二年に『蒙古源流』の蒙古本を校正して之に獨逸語の譯を加へ、東蒙古及其王家の歷史 Geschichte d. Ost-Mongolen u. ihres Fürstenhauses と題し、之を時のザー、ニコラス第一世に奉つた。卷首の上表は特に莊嚴の文字を撰み、露國が蒙古の羈絆を脫し壓抑を離れて隆々の勢威あるを頌し其記念として此書を獻ずるとしてある。此書出で、七十五年現時露國の蒙古に於ける優勝の位置を見ばシユ

タン（Bhutan）他はシキム（Sikhim）とラダーク（Ladák）である。ブータンに就きてはターナーのブータン使命報告 Reports of Missions to Bhutan 1865 があるがペムバートン（Pemberton）の旅行記や前記キョツペンの『佛教論』にも多少記事がある。喇嘛が宗教のみならず政治の全權を握つて居る。十年前の記載に依るに十四萬五千の人々に對して五千の喇嘛がある、其勢力以て知るべしだ。シキムは紅教卽西藏舊教極勢の地で蓮華生上師の信仰盛に頗異彩を放ちつゝある『喇嘛教』の著書ワツデルは此地に來り特に『シキムに於ける喇嘛教』（Lamaism in Sikhim 1893 を甲谷他で公刊した。ラダークは阿育大王宣教の古地として信ぜられてあるが、今は全部喇嘛教でシキムと同じく紅帽派の勢力强く、喇嘛僧の數甚多くして十五萬八千の人々に對し僧徒一萬二千を算する、此國の歷史其他に就きてはカンニンガム將軍（Canningham）が早く一書を著した（Ladák, phys=ical, statistical and historical 1854）。其後マークス（K. Marx）が孟買亞細亞協會々報に『ラダーク史』History of Ladákh 1891 を書いた。極めて特殊の研究だが歐人が細に入り微に亘りて行く所まで研究する精神は此一つでも解らう。

第五章　印度學研究上の佛教

一　印度學研究上佛教の位置　印度學（インドロジー）Indology と云へば古代印度の研究を總括した一般の學語で埃及學（エジプトロジー）、亞斯利亞學（アツシリアロジー）若くは此等を包含したセミチツク學（セミトロジー）に對し、梵語學・哲學・宗教・藝術・政治法律・古物學・歷史・地

滿洲語學に就きても歐人の研究深く既にメーレンドルフ（Möllendorff）サハロフ（Sacharow）シュミツト（P. Schmidt）イワノフスキー（Iwanowskij）等の文法があるが多くは露人だ。字書も佛のアムヨー（Amyot）が滿漢字典によりて編した『韃靼滿佛字典』（千七百九十年版）が初めでワシリエーフの滿露字典（千八百六十六年）。サハロフの『滿露大字彙』（同七十五年版）。等であるが、獨逸では少し前に滿洲語學者ガブレンツ（H. G. Gablenz）が滿洲語の詩經書經四卷を獨譯し之に滿獨字彙を付けて出した（同六十四年）。此人は滿洲語の遼史をも譯した。之に對してアルレーの滿洲語金史佛譯（Histoire de l'empire de Kin ou empire d'Or 1887）が一寸珍らしい。一般語學の方は此の如く盛大であるが、之れと共に四十二章經や金剛經の樣な小部の滿語聖典は時々學界に現はれた。然し大部のものは梵語西藏の聖典研究があれば自然重複となるのであまり校刊などは出ない。旅行記類は古い所では有名なワシリエーフの滿洲に關する露語の滿洲記事（一千八百五十五年）。新しいのはアネー（Anert）の佛文滿洲紀行（一千九百五年彼得堡板）等である。此等には佛教に關する記事少からず。喇嘛教及其寺院の現狀を叙すること詳細だ。

蒙古滿洲の佛教に關しては略前述で筆を收め、其古宗教卽薩滿教 Shamanism に就きては宗教學者の注意を惹いた事を一言する。佛教の隆昌と共に此教は俗信として民間に殘存し、今尚其迷信的勢力を維持しつゝある。此教に就きての成書も少くないが今は省略する。

九　印度に於ける喇嘛教國の研究　印度に於けるヒマラヤ山間の小國にして喇嘛教國が三つある。一つはブー

や白樂天等に現はれた佛教思想を度外視し、厖然たる其文學を繼子扱にする不合理と共に、印度に於ても馬鳴や寂天の文藝を度外視する譯には行かぬ。天台や清涼の雄大な哲學が明道や陽明の學說と對峙して支那哲學史上の精華たると同樣、佛教對婆羅門哲學は種々の點より見て印度思想史の最大偉觀であるのだ。古い所で龍樹・天親、中古で法稱・月稱等は吠檀多派の商羯羅(シャンカラ)や僧佉のガウダパダに對して一步も讓らぬ大論師である。されば此方面の研究は尙餘地のある所で、歐人の手が未だ屆かぬものである。而して之は實に吾々の責任だ。然し是は特別の問題として尙論ずべき必要もあるから他に讓りて此位にして置かう。

哲學文學に反して古物學や歷史地理の方面では佛教が確に印度學の中心點となる。印度は人も知る如く、歷史書が不思議にも皆無の國だ。支那が二十四代の記錄が整然として嚴存するに較べると、印度は貧弱も貧弱、丸で史書と云ふべきものが一部も存せぬ、此間古代に於ては栴陀羅笈多(チャンドラグプタ)より佛教大帝阿育に至る孔雀王朝の史料と中世では支那の巡禮僧法顯玄奘等の紀行が歷史の中心の材料となる。古物學もまた阿育時代の勅碑や佛塔などが研究の中核となり、中古には各地の佛教碑文佛像等が研究の重要問題となる。古代地理は勿論、玄奘の紀行が霧海の南針として、主要な研究は無論佛陀の聖蹟聖地に止めを刺す。而して此等資料に依りて出來た印度文明史や藝術史は勿論佛教を離れては到底寸步も解らぬものになる。

二　印度學研究の大勢　千六百五十一年―慶安四年といふに和蘭の僧アブラハム、ロオガー(Abraham Ro=ger)が印度に傳道して婆羅門教義文學の一班を歐洲に紹介して已來、續いてハンクスレーデン(E. Hanxleden)

理其他の印度古學の研究で、その古昔の知識や道德や鑑賞は勿論社會風俗習慣儀式等を專攻するもの、其範圍は隨分廣く、隨て其分科も精密に彙類したら一寸簡單には列擧するのが困難であらう。此章は佛教が此印度學の研究上如何なる位置を占めつゝあるかを觀、諸分科の專攻上何れの點に佛教研究が最も多く關係を有するかを講究し、西人が專攻の熱心に且周到なのを一瞥しようと思ふ。

語學・文學及哲學の方面に於ては所謂正統派(オルソドックス)の印度學者から見たら、佛教の地位は特別の場合の外は概して餘り高くない。吠陀の古梵語や史詩戯曲等の古典梵語(クラシック)に對しては佛教文學は纔に方言として取扱はれるまでだ。哲學上から見るとウパニシャツドの直系として印度知識の正宗を以て任ずる吠檀多派(ヴェーダンタ)を目安に置いたら、同教の大學匠摩陀婆(マダバ)阿闍梨(アーチャリヤ)がその印度の教系的哲學史『一切見集(サルヴ、ダルシャナ、サムグラハ)』の中に諸教の淺深を按排し佛教を極端の物質論異端の最極路迦耶(ローカヤ)外道の次に置いたのでも分る。印度哲學の大家獨逸のドイセン博士なども其深遠なウパニシヤツドの吠檀多の研究上此見地から佛教哲學に對して頗る冷淡の態度で餘り重きを置いて居らぬ、これは同教授の傑作『一般哲學史』を見ても解る。印度哲學の專攻者が佛教に對する態度は先づかうだ。隨て此點では今までは餘り大なる研究はない。

然し此印度古文學や哲學上佛教の劣等なる位置は固より婆羅門教の正宗文學を標準とし、其哲學を基礎に置いた見地からなので、恰も支那で四書五經孔孟の學說を正宗として、佛經及其哲理を見たと同じことである。所謂正統派の漢學者にはそれで通るとしても勿論公正の話ではないのだ。支那で文藝上六朝は勿論、復古時代の王維

の歸途千八百二年佛國に行き、玆にパリに梵語の種を播きてシエズイ（A. L. Chézy）を經てビユルヌーフの名花を開き。獨逸ではフリードリヒ、シユレーゲルがパリで梵語を傳へて歸り其弟ウキリアム、シユレーゲル又佛國に來りて斯學を修め玆にラツセン・ウエーバー等大梵學家の源泉をなした。其後梵語學の發展は前に略述した通りであるが、古物學の方面はジエームス、プリンセプ（James Prinsep）が開拓者として育王の碑文に手を着け其困難な奇古の文字を解讀したのを手始に、フアーゴツソン、カンニンガム、等の偉大な古物學研究家現はれ次でバアジエツス、フリート、グリアーソンビユーラー、等の俊材輩出して印度古物學の研究頗る進步すると共に碑銘學 Epigraphie や古錢學 Numismatic の如き特殊の研究も大に進みて名家踵を接して出で、印度にもムケルジー、バンダルカルの如き學者ありて其業績往々にして歐人を壓倒し、印度古學に就き種々の貢獻をなした。而して佛蹟の研究もフユーラース・ミツス等が或は佛陀降誕の聖地を發見し若くは涅槃の靈蹟を確定して着々として古歷史の暗點を照破しつゝある。而し此等碑銘建築古錢佛像等の研究が大成して歷史の編成となり、年代表（クロノロジー）の作成となり、新研究は益進みて未發の寶庫を開き未開拓の原野を開墾しつゝある、今此等の研究を大別すると

一、一般資料研究——鐫銘・塔廟・建築・古錢・古趾・像畫等（古物學方面）

二、特殊的綜合研究——歷史・地理・藝術史・年代學・字象學等（歷史學方面）

となる今順次に此二類につきて代表的の學者と傑作とを列擧しよう。

やパウリノ (Fra Paulino) 等の加特力教傳道家印度の諸海岸を訪ひ梵書を譯し印度に關する種々の書を著はして歐洲の學者文士の間に少からず印度趣味を鼓吹したが、英國の東印度會社が一度印度に强固の地步を占めてワアレンヘスティングが辛辣無比の快腕を揮ひ其一躍してベンガル總督の榮位を贏ち得るに至り大に婆羅門僧を督勵して主として印度古代法律の典籍を飜譯せしめた。總督の梵學奬勵に激せられて起ち自ら梵典研究に當つた英人はウヰルキンス (Charles Wilkins) で西曆十八世紀の終りに教訓譚集ヒトパデーシヤや哲學書薄伽梵歌を英譯した。之が歐人梵語飜傳の初である。其後事實に於て印度學創業者の譽を負ふべき、ウヰリアム、ジヨンス(一千七百四十六年生同九十四年死)現はれ其深奧なる波斯語の素養より轉じて盛に梵語を修めベンガル亞細亞協會を創立して斯學の牙營を以て居り、カリダーサの名曲『シヤクンタラー』の英譯を出版したが(千七百八十九年)、間もなく獨逸譯が出でゝ、文豪ヘルデルやゲーテが非常に此印度大詩人を賛嘆し、ゲーテの如きは其傑作『フアウスト』に印度戲曲の樣式を應用するまでに歡迎した。ジヨンスは尙摩拏大法典をも出版して英譯を出し、また其精透の研究で梵語と希臘羅甸語及歐洲諸國語との親緣關係を說明し、又印度と希臘羅馬の神話の連絡を確示した。此人の後にコールブルーク (Thomas Colebrooke) (千七百六十五年生、千八百三十七年歿)、絕大の頭腦と博綜の學殖とで印度學の基礎を固め特に困難な印度哲學を歐洲に紹介し著書論文等身に餘り印度の古書古寫本類を盛に蒐集し今に印度學者の感謝を受けつゝある(此偉人の傳はカウエル氏が同氏論集の第三卷として同氏令息の集錄したのを出版した)。英のハミルトン (Alexander Hamilton) 恰も當時印度に入り、梵語を修めて本國へ

三、小岩壁勅語……………… 一、バイラート Bairāt　二、ルプナート Rupnāt　三、サハスラーム Sahasrām　四、シツダープラ Siddhāpura　四處

四、バブラ Bhabra 勅令……… 摩竭陀國の僧徒に對し發せられたる詔勅…………………… 一處

五、岩洞三種の勅語………… バラーバル Barābar の岩洞に刻したる勅語極めて簡易なり………………… 一處

六、テーライ Terai の圓柱勅碑… 一、ルンミンデイ Lummideí　二、ニグリーヴ Niglīva ………………… 一處

七、圓柱刻鐫の七章の勅碑…… 一、デルヒ、トフナ Delhi-tohna　二、同ミーラト D. Mírāth.　三、アラハバツド Allahabad　四、ラウリヤーアララーシ Lauriyā-Arasāj　五、同、ナンダンガル L.-Nandangarh　六、ラームプルワー Rāmpurwa　七、サーンチイ Sānchi　七處

八、付屬圓柱勅碑……………… 前記アラハバツドとサーンチに付刻する園林僧舍の寄附文なり………… 二處

已上六、七、八は圓柱の刻文、一、二、三四は岩石を磨して刻鐫したるもの所謂磨崖刻文である第五は岩洞内部の銘文だ。此等勅令中第一は特に重要で一、生活の清淨。二、人類及び動物に對する安慰の設備。三、五年大會の開催。四、孝順の實行。五、孝順法の觀察使任命。六、政務の敏活。七、教法實行の不備に就きての勸誡。八、敎處の巡幸。九、眞正の儀式。十、眞正の榮譽。十一、眞正の慈善。十二、宗敎の寛容。十三、眞正の勝利。十四、勅鐫緣由で之を一貫して孝順の法 Dharma を骨子とし、仁愛平和の大道を說き、佛陀戒律の振興を敎へ中に幾多の史的事實を含蓄する。卽第十四の勅令の如きはトレミー、アンチヲクス・アンチゴーヌス・マガス・アレキサンデル等の同時の王名を列ねて世界的の平和と正義とを說き、第二勅令にも少からぬ歷史的重要の資料がある。

て最も重要のものは古碑銘で史書の全く存在せぬ印度に於ては之が實に第一の史料となるのだ。扨此碑銘中最も古代に屬するものは阿育王の勅碑で其解讀は印度古物學の研究中比較的早く着手になつた。次は古建築學上の塔廟や巖崛殿堂の講究でサーンチとかパルフートとかの古塔廟、大菩提道場やアジャンタ洞窟の調査である。續ては古代地理から古趾の確定像畫古錢等の研究に遷るが、先づ初めに育王勅碑から一瞥して行かう。

三　一般的資料の研究　古物學の方面から歴史や年代學や將又字象學藝術史等の根本資料となるべきものにし

（一）　阿育勅碑の研究

印度帝國統一の大鐵輪王として、佛教宣布のコンスタンチン大帝として古代印度文化の中心點である阿育大帝は、佛經に依ると世界に八萬四千の寶塔を建立したとあるが、此譚の眞僞は別として兎に角大帝の勅碑は今現に發見せられたるものが全體二十箇所、北は雪山々麓のカールシ勅碑よりして南端マイソールに於けるラシッダープラ碑東は古國摩竭陀の諸碑北西は遙に健陀羅に至りてマンセーラー・ジャーバーヅガルヒの兩碑を數へ印度全體を包括して大帝の勢威に服したるを證する。勅銘は全體で十三四章あるが之を表にすれば

一、十四章の勅令を刻鐫したる岩壁…………
　一、シャーバーヅガルヒ Shābāzgarhi　二、マンセーラー Mansērā
　三、カールシー Kalsī　四、ソーパーラー Sopārā
　五、ギルナール Girnār　六、ダウリ Dauli　七、ジヤウガタ Jaugada
　（七處）

二、羯隣伽勅語…………前記、ダウリとジヤウガダの勅碑に付加した、國境勅命及郡州郡勅令を鐫る。一二處

に服し旁大に古物學を專攻し名著少らず、特に『印度古物學測定（アーキヲロジカール、サーウヰー、オフ、インヂヤ）』を創始したるが如きは印度學の殊勳と稱すべきであらう、中將には此他種々の名著あり、就中玄奘の西域記に基きて書いた『印度古代地誌』は今に學徒の參考となりブヒルサ、大菩提諸大塔の研究其の他も佛教史上無二の資料である、中將は此の如く偉大の功勳を印度學上に殘し千八百九十三年七十九の高齢で塵界を去つた。カンニンガム研究發表後四年佛國のセナールが佛國亞細亞協會々報に育王刻文の新研究を六年に亘りて發表し、澳の碩學ビューラーは之に續きて獨逸亞細亞協會々報に數回勅碑に就きて新説を出した（ZDMG. 1883, 1886, 1887, 1894）斯て育王碑銘の諸文には疑義尚多く今に説明の困難な點も殘つて居るがハーディ・スミス等の碩學が漸次に難點を説明し誤謬を訂正して次第に明確を加へて來る。

阿育大帝及其勅碑に就きて簡にして要を得た書はスミス（V. Smith）の『印度の佛教皇帝阿育』Aśoka, the Buddhist Emperor（千九百一年版）だ。此の書は阿育に關し現今に於ける最善の書である。是に對して翌年出た、ハーディ師の獨逸『阿育王』König Aśoka は第一章にも一寸記載したが良好の書である然し此書育王及其時代の文化宗教其影響に就きては精透の雄篇であるが、勅碑銘に關してはスミスの作に比して殆ど言ふに足らぬ。日本では故藤井宣正氏の印度佛教史、近くは森鷗外、大村西崖兩氏合著の『阿育王事蹟』で大要は解らう。

（二）佛教古塔廟精舍の研究

阿育大帝の時代より中古に及び、佛教の塔廟精舍の現に殘存するものが印度各地に少くない。卽夫のサーンチ

羯隣伽勅碑は國境及州郡の官憲に訓諭した勅令で、人民を皇帝の子として愛撫し、不正不義の行爲なく、嫉妬、粗暴死法拘泥、怠惰等の惡癖は牧民者の成效を不可能ならしむるものとして、極力之を戒勗したる如き、萬古の至言といふべきである。圓柱七章の詔勅も、磨崖十四章と大同小異、之を一種の聖典として見るも決して不可はない。

此印度史上極めて重要な勅碑に就きては、前記の如くプリンセプが苦心慘憺幾年の困難を忍び、古錢に於ける希臘印度同文の文字などより、漸次解讀の端緒を得更にパーリの方面よりターナーの助力を得て漸く解讀したのが夫のデルヒ、ミーラトの圓柱勅碑で、此破天荒の研究は千八百三十七年ベンガル亞細亞協會の會報で公表された。一體この圓柱勅碑はモンゴールの皇帝フキルツシヤー（Firuz Shah）が其文字の奇妙な所から婆羅門僧を會して之を讀ましめたこともあつたが、誰も之を讀むものなく、中に狡猾な奴は之を一種の豫言として皇帝に種々訣言を進めた佞僧もあつて、歐人の間にも不思議なもの〻一になつて居つたのだ。プリンセプはデルヒ圓柱の解讀已外進みて他の磨崖や圓柱の刻文を讀み之を『亞細亞攻究（アシヤテイツク、レサーチエス）』やベンガル亞細亞協會の會報に發表し、學界は玆に貴重な史料を得た。プリンセプが此等考古學古錢學其他に關する論文は千八百五十八年ロンドンで二卷に纏まりて出た（Essays on Indian Antiquities, Histories, Numismatic and Paleography)。此珍貴の研究に續き、中將カンニンガム（Canningham）が印度刻文集成（Corpus inscriptionum indicum）の第一卷として、育王刻文を著はしプリンセプの解讀を訂正し三十枚の原文模寫其他の石版を添へて千八百七十七年に甲谷他で出版した。中將は英國詩家アラン・カンニンガムの子として千八百六十一年ウエストミンスターに生れ印度に於て軍職

してある。此等貴重の塔門玉垣等の石柱は今や其大部分甲谷他博物館に秘藏され、本處には僅に小部分の斷片及び礎石のみ殘りて其位置を示しつゝあるのみだ。

サーンチ佛塔はビルサに殘存する多數塔群の最大な者で、千八百十八年已來英國の駐在武官や學者の注意する所となりテーロア大佐（Col. Taylor）フエル大尉（Cap-Fell）エルド博士（Dr. Yeld）などの報告があるが、千八百二十二年マドツク氏（H. Maddock）氏が印度政廳より諸塔發掘の許可を得同年の冬ジョンストン大尉（Cap. Johnston）を監督とし最大の塔の礎石を發いたが、元々此計畫は塔中の寶玉を得るのが目的であつた爲、頗る不注意極まる發掘をなし、爲に塔門や玉垣の貴重なる彫刻や銘文を無殘にも破損したことが少からず、破壞のみで毫も發見といふものがなく、其儘に終つた。其後千八百五十一年カンニンガムがまだ佐官の頃メーセー大尉（Cap. F. C. Maisey）と協力して學術的に忠實な發掘を開始し世界の學界は茲に初めて最古の印度美術に接することが出來た。カンニンガムは此研究報告數回に亘りてベンガル亞細亞協會雜誌で發表したが、千八百五十四年に此等の研究を纒めて『ビルサの諸佛塔』The Bhilsa Topes と名づけ、ロンドンで刊行した。此書發刊後十二年古物學家として、有名なフアーゴツソン（J. Fergusson）がカンニンガム將軍とサーンチ發掘に與つたメーセー大尉の同塔彫刻圖樣の描寫とに依りて其大著『樹龍崇拜』Tree and Serpent Worship を著はし、大冊の前半を全くサーンチ古佛塔の解說に費した。此書は千八百七十三年再版になつたが其精巧なる古佛塔の門柱玉垣の彫刻圖が今に學者の參考になる。――此書が目的の樹龍崇拜の宗敎學の方には重用されず全く佛塔研究の珍書と

やアマラーヴチの大塔の如きは實に育王時代の佛を傳へ其門柱及玉垣に彫刻せる佛傳及佛教崇奉の有樣は古代の印度歴史や風俗を說明すべき好箇の資料である。又美術史に於ても其雄麗富贍の意匠刻法が實に無價の珍寶として、特異の光彩を放つて居る。

此等古代佛塔の印度に殘存するのは、其數決して僅少ではないが、最も古代に屬し古建築學若くは美術史上に優秀のものとして至大の價値を有する代表的の古塔は先づ左の三塔だ。

一、ブハルフート Bharhut（或バラーハツト Barāhat）ベナーレスの西南百六十哩アラハーバードの西南に位す。

二、サーンチイ Sānchî——ナルマダ河の南岸、Bhilsā の西南、Bhopal 首都の東北二十哩にあり、

三、アマラーヴチイ Amarāvatî——樂陀羅の古國。クリシュナ河南岸に存す、

已上三塔の外に有名なものは夫の佛陀伽耶の大塔であるが、之は其玉垣が古代に屬する丈、大塔は頗る新しいもので且つ建築に兩三回修繕が加はつたのだから、其古物學や美術史の價値は夐に下位になる。然し中世已後の佛教建築としては有名のもので之に關する研究もあるから最後に之を叙述することにする。

ブハルフート古塔に就きてはカンニンガム將軍が一千八百七十三年之を學界に紹介し、翌年其發掘に從事し、同七十九年に其大著『ブハルフートの佛塔』The Stupa of Bharhut を龍敦で出版した。此古塔は其塔門及玉垣に極めて富贍な彫刻を施し、佛傳天龍鬼神等の圖樣は宗教史上非常に價あり、特に十數面の本生經圖は佛教文學上甚貴重なものだ。將軍の大著には、此等彫刻の圖樣を悉く寫眞版として附圖となし、別に鄭寧な刻文の考證を

を發表し。古物學者として前記二大家を凌駕するに足るべきバーヂェス（James Burgess）は千八百八十七年と同八年の二回に亘り、此塔に關する苦心の研究論文二篇を『南印度考古學實測』に公にした。かくて此大塔は今や佛教史家や印度藝術の專門家に對し前の二大佛塔と鼎足の位置をなし必らず見逃すべからざる名物となつた。

三大佛塔の外印度には古塔頗る多く、特に南印度に其數の少からざることであるが、此他に倘巖石を鑿開して造つた洞穴殿堂もまた可成に存在し、バーヂェツス、フアーゴツソン・リー、（Alex Rea.）リツテル（Ritter）インドラジー（Indraji）などが各種々の報告や論文を出して居る。然し今は且く之を措き、直に中古の佛陀伽耶大塔研究を一瞥しよう。此大塔は今世界佛教徒崇敬の中心となり、其卓絕せる壯麗な建築は常に吾々が憧憬の對象ともなるが、阿育時代の遺物は唯其玉垣の一部で、大塔は西暦紀元五世紀の建築に就り、其後荒廢したのを十四世紀緬甸の佛教信徒が之を修繕して莊嚴を復したが、回教時代に入りて又々非常に破壞された。英國政府が印度の全權を握るに及び、大修繕を加へ今は兎に角舊觀を見る樣になつた。此塔の研究は印度の碩學ラージェンドラーラ、ミトラが千八百七十八年に『佛陀伽耶』Buddhagayā, the Hermitage of Śākyamuni を著はして、大塔の重要を學界に報告し、次でカンニンガム將軍が『大菩提卽佛陀伽耶に於ける佛教大殿堂』Mahābodhi, or the Great Buddhist Temple at Buddhagaya 1892 を著はし、三十餘葉の寫眞附圖を添へて、美濃判一百頁の大冊を世に問ふた。此書には大塔に彫刻した佛像や刻文等を精細に研究してあるが其中に宋代漢僧が印度に入り聖蹟を拜して金襴袈裟を佛座に獻じた銘や、佛蓋供養の刻文などもある。前記支那佛教學者ビールは此等、支那の刻

なつた抔は餘程妙だ。ファーゴッソンは千八百八年に生れ、始め印度藍の製造家として大なる工場を有したが、印度考古學專攻の爲に其工場を讓與し、孜々として斯學の爲に少からぬ貢獻をした。前記の外、千八百四十三年『印度巖洞諸寺』Rockcut Temples of India を著はし、亦三卷の大冊『古建築學史』A History of Architecture 1865—67. 及び印度學者の重ずる『印度及東方建築史』His. of Indian and Eastern Architectures 1876 等の著あり。猶佛敎古建築につきて種々重要な論文や報告もある。カンニンガム將軍と對比して古物學の元勳として仰ぐべき大家だが七十八歲の天壽を完了して死んだ。ファーゴッソンの後、前記メーセー大尉も『サーンチ及其遺跡』Sānchi and its Remain 1892 を書いた。

アムマラワチー佛塔は玄奘三藏が案陀羅旅行の當時、既に大部分、荒廢に歸して居つた。千七百九十七年にマツケンジー大佐(Col. C. Mackenzie)之に注意し、後長期の間滯在して其描寫に力め、特に玉垣の諸彫刻には精細の苦心を拂ひて圖樣を縮寫した。當時土地の印度貴族の心なき移轉や古材料の惡用の爲に、一方ならず破壞せられ、マツケンジーが之を救ふてマドラスと甲谷他に送つたものは眞の一部分に過ぎなかつた。其後千八百四十五年にエリオツト氏(Sir W. Elliot)の發掘に依りて、彫刻の大部分は今やマドラス博物館に珍藏されて居る。此佛塔はサーンチ同樣、紀元前二世紀の建築だが其塔門玉垣の彫刻の美は寧ろ遙に之に過ぎ、豐麗秀澤今に古代印度の文化を語る。此塔研究の榮譽はサーンチと同くファーゴッソンの手に歸し前記の大作『樹龍崇拜』の後半は此塔の說述である。其後シーウエル(Sewell)が千八百七十七年に『印度古學(インディアン、アンティクラリー)』の第十卷に自家の報告

て論述したが其確實明晰此珍畫の眞相を世界に傳へ、解說宜しきを得たるは實はバージエス博士及グリフツス氏(G. A Griffiths) 兩學者の功勞に歸する。後者は千八百七十二年已來、印度古學・皇立亞細亞協會々報・西印度考古學實測・ベンガル亞細亞協會々報等に盛に此洞殿壁畫に就きての研究論文を公表し、九十六年に此等の報告論文を基礎とし二卷の『アジヤンター佛敎巖洞寺に於ける繪畫』The Paintings in the Buddhist Cave-temple of Ajantā を著し、研究を大成した。該壁畫に就きては、今の所此書が最完美の作だ。前者は千八百七十八年に此大巖洞と同型の壁畫を有する小巖洞寺バーグ (Bāgh) を合敍して Note on the Buddha Rock-temples of Ajantā, their paintings and Sculptures, and on the Paintings of the Bāgh cave &c. を西印度考古學實測の第九卷で出した、グリフイスと必らず併せ讀むべきアジヤンターに關する絕好指針である。ミトラ博士其他が洞穴壁畫の部分的特殊の研究に就きては今之を略する。

アジヤンター巖洞は開鑿せる洞室の數約一百餘房に達し、各室皆壁畫があつて、佛傳本生佛敎史、天龍夜叉等の宗敎的の圖像に交て宮廷軍旅其他の風俗畫も可成に描かれ、其種類も隨分多い。描寫は極めて古代のものと稍近代に屬するものとの別はあるが、筆力何れも溫雅秀麗で意巧亦頗る巧妙を極め、グリフイスが之を中世イタリヤの敎會畫に比し極力其美を稱譽して措かぬのも實に尤だ。特に珍とすべきは外國人や其風俗畫が少からず描寫されたことで、波斯人印度宮廷に來聘の圖、バクトリヤ人家庭風俗の畫の如き實に面白い。尼波羅に傳はつた古代印度の貝葉經文には其第一葉に多くは佛像が書いてあるが、此等を集めたフーシエーの『印度佛像圖像學研

文につき論文を書いた。

（三）印度古畫

育王時代より印度は彫刻に於ては其技倆希臘と匹敵すべき浮彫を有するにも關らず、繪畫に於ては一向に其發達なく、禪月や龍眠若くは晁殿司、雪舟の樣な名を傳ふべき佛敎畫家がなかつた。然し佛敎畫としては一つ珍奇なものがある、それは有名なアジャンタ洞寺の壁畫である。壁に畫を描くことは佛陀在世より其風があつたことは律の中に生死輪の畫を作る意匠があるのでも解る。然し古畫としてはアジャンタ計りで他はずつと新しい具葉寫經に現はれる細小の佛畫位のものだ。然し此洞寺の壁畫は近時發見される西域洞窟の壁畫、若しくは吾國の古佛畫と比較して佛敎美術の發展を見るべき珍貴の資料であるは論ずるまでもない。アジャンタはデッカンとクハーンテツシュの境界線に當るインデイヤードリー丘の、小市街の西北にある巖崛を開鑿して造つた一大殿堂で、英人がマーラツタ人の權力を全然破碎し去つた夫のアーラーヰの大戰の際、其驚くべき存在が世に知られ數年の後一千八百十八年にマドラス軍隊のモルガン大佐（Morgan）初めて之を訪ひて報告書を出し、アレキサンダー少尉バード博士グリスレー大佐ラルフ少尉等引續き內部に入りて、其驚嘆すべき壁畫を歐洲に紹介し、漸く其價値を印度古物學者に知られたが、唯一般の好奇心を博得するに止まりて、學術的の研究に於ては、殆ど言ふに足らなかつた。然るにフアーゴツソンが前記『印度の巖洞諸寺』の中に、此洞殿の詳密正確の記載をなし、學術的の基礎を置き、其後ギル大佐（Gill）バウダージー博士（Bhau Daji）等の論文もありウキルソンも亦之に關し

顔面、衣服の褶襞等著く希臘の影響を受け、一寸見ると佛陀だか基督だか分らぬ像も隨分にある。佛坐や塔門の横ものゝ意匠や人物も全然希臘式で、パルテノンあたりの彫刻と殆ど分つことの出來ぬものもあり。希臘神像アトランタ（地神）がそのまゝに使用されたのさへ見られる。而し此健陀羅式の印度美術が、日本に渡來して初期の日本美術史に異彩を放つなど文明の世界的流動が如何にも面白い。

（五）佛教古跡の研究

古塔や巖洞寺院古佛像の研究は次で佛教古跡の確定となつた。而して之に最も力を與へたのは第三章に擧げた法顯玄弉等の紀行で、特に西域記の印度地理に關する貴重の記錄は實に印度古代地誌に新なる進路を與へ、カンニンガムの傑作『古代印度地理』Ancient Geography of India 1871. が出來た。此後歐洲や印度の學者は着々佛跡や佛教歷史上の古地を證定して有益の報告が諸學會の會報に載ることになつた。一二の實例を擧げるとフユーラー（Führer）が佛誕生地迦毘羅城發見の如き、スミス涅槃の靈地拘戸那城の古趾を確定し阿育王都華氏城の舊跡を發見したるが如き、或は又ブロツホが吠舍利國や那爛陀の舊蹟を調査したる等、研究は着々として進むで居るが、然しまだ確定し得ぬ場所も澤山ある。

西人が佛教古蹟の研究につきては、ビールやワツタースの西域記の飜譯考證に出來る丈は文獻を擧げてあるが、尚近時此等西人の研究書目を網羅して佛教地誌の小書史を編むだのは堀謙德君の『解說西域記』の卷末にある書目表である。詳細に書目や典據を知りたい讀者は願くばそれを一瞥して堀君博渉の勞を謝してよい。

究』Stude sur l'iconogrophie bouddhique de l'Inde は第一部を千九百年に出し第二部を同九百五年に出版した。これはアジャンターに比べると時代はずつと新しい資料だが、序に玆に付けて置く。

（四）史佛像の研究

印度の古佛像研究も古物學上重要の一科である。大體印度佛像には大別二大系統があつて、純印度式と希臘の影響を受けた健陀羅地方を中心とする型、即所謂健陀羅式の二系統になる。前者に就きても少からぬ論文がスミス・クリヤーソン其他の學者に依りて學壇を賑はしたが、後者は特に重要だ、スミス（Smith）、コール（Cole）、アボツト（Abbot）・グロオス（Growse）・クルチウス（Curtius）・ライトネル（Leitner）・ワツデル（Waddel）等の英獨學者が現に研究に從事し、諸方面から資料を學界に貢獻したが、之を綜合して一大傑作を出したのは實に佛のフーシエー（A. Foucher）で、其一千九百五年に出した『健陀羅の希臘佛教美術』L'art Grécobouddhique du Gandhâra 大判六百三十頁の大冊子だが、甲谷他、ラホール其他の博物館、英佛獨の蒐集珍材三百の寫眞圖を挿み歷史・地理・及資料に闘する序論に次ぎて第一部を、佛塔・僧房・伽藍の三章に分け第二部を先、印度美術の要素として發展の時代を分ち、已下の四章を成佛前、成道、說法利生、入涅槃に分ちて各章に相應する幾多の材料を列擧し、比較評論を試みた。其苦心と巧妙なる叙述の技倆材料の按排は實に驚嘆すべきものだ。例せば涅槃章の如き像を集むる七、葬儀茶毘分布舍利十餘圖を加へてある。

この健陀羅佛教美術は西曆紀元百年を其初期となし、漸次發展し、紀元四世紀に至りて極盛に達した。佛像の

學』Indian Coins 1897 で五枚の古錢圖が歷史的に彙類せられ解說周到必讀の書だ。佛敎王迦膩色迦時代の古錢などは頗る珍で、其後錢面に佛塔法輪卍字佛像などの圖があるのが中々に面白い。

四　特殊的綜合の研究　古物學の各方面から集めた資料を綜合して出來たのは先第一に印度史であるが最近代の綜合研究が現はれる前に、早く印度古學の資料の綜合的著作を試みた人がある。それは夫のラッセンで其四卷の大著『印度古學』Indische Alterthumskunde は千八百四十七年に第一版を出し六十六年に更に校訂增補して第二版が出た。これは印度學研究初期の惣括りで印度の地理一般歷史學藝宗敎商業其他諸學科の歷史概觀は此大著で百科全書的に大成された。其後一般史の方面に於てはエリオット（Elliot）の八卷の印度史が先驅として出で（一八六七年至七七）次でエルフインストン（Ephinston）（一八七四年）の回敎時代の詳しい歷史就りハンター(Hunter)の印度帝國（一八八二）之に續き、印度人ダット（R. Ch. Dutt）の古代印度文明史の樣な優秀の書も出板になり今はハンターやヘルンルの袖珍本の簡易な印度史さへ出た。而して特殊の時代若くは地方の歷史としてはバンダルカルのデツカン史、及孔雀王朝より笈多王朝滅亡に至るの史、スミスの『印度古代史』（一九〇四）を代表的のものとするがスミスのは特に最新の研究で印度史中最良書の一である。此他トオマスやガルベなどの著を擧げ、更にマクリンドルの集めた希臘史料やアルビルニーの阿拉比亞史料等に就き佛敎と相關する所を精密に列擧したら數限りもあるまい。歷史に次ぎては年代表の作成で之れも十種ばかりあるが代表的の者はカンニンガム、フアゴツソン、エーヤー（Aiyer）の諸著だがダツフ夫人（M. Duff）が一千百九十九年に出した年

（六）碑銘、古錢の研究

育王碑文は佛教史料否印度史の最古で最も貴重なものであるが此他に尙幾多の刻文が存する。卽佛舍利寶瓶に鐫つた銘文や、瓦石金銅に刻むだ經文や、石碑の建寺緣起等、一々之を擧げたら餘り專門的にもなり到底此講義錄の盡し得べきものでもないから此方面の名家の名だけでも列擧する位にしよう。

印度碑銘學の大に發展したのは千八百七十年以降でパーチエスを初めフリート（Fleet）やフルチエ（E. Hultzsch）等の熱心な研究家出でフリート笈多王朝の刻文を蒐集して之を一卷としカンニンガムの『阿育勅銘』に次ぎて『印度刻文集』に之を發表し（千八百八十八年）同年またバーヂエスに依りて『印度刻文集』Epigraphia Indica が出フルチエとフユラーが編輯を繼承して今は十餘卷に達した、此中佛教碑文も少くない。此他キールホルン（Kielhorn）ゴールドシユミツト（Goldschmidt）ミユーラー（E. Müller）等の獨逸學者が印度政廳に聘せられて大に此方面の技倆を揮ひ、前のフルチエやビユーラーが南印度の諸州から種々重要の報告をなし、英人にもリー（Rea）シーウエル（Sewell）がマドラス州の刻文を專攻しライス（Rice）がマイソールのを研究し、印度人ではバンダルカル（Bandarkar）やインドラジ（Indraji）なども頗有益な碑銘の英譯考證を試みた。古錢學 Numismatic も古物學中非常に趣味あり且適確の史料たるべきもので。プリンセプが一たび此方面を開拓して已來トーマス（Thomas）エリオツト（Elliot）ビユーラー（Bühler）等の學者が各時代に亘りて珍貴の古錢を蒐集考證したが此等の研究を大成整理して一書をなしたのはラプソン（Rapson）の效績だ。其書は『印度古錢

アン言語學及古物學綱要 Grundriss d. Indo-Arischen Philologie & Altertumskunde と稱し各國の專門大家執筆して斯學重要の良指針數卷を得たが編纂者が千八百九十八年旅行中不幸な慘死をした已來キールホルンが共纂修に當り同教授が歿後今は伯林のリューデルスとギョッチンゲンのワッケルナーゲルが引受けて最近韋紐派及濕婆敎に關する一卷が出た。

五　特殊の地方研究（補遺）印度古學中特殊の地方研究中補遺として是非とも加へて置きたいのが二つある。一つは印度內地の迦濕彌羅國研究と、他はずつと海を隔てた南洋の瓜哇の佛敎だ。前者は佛敎の故國として有名なるのみならず十二世紀に出來た同國の史書 Rājataraṅgiṇī（ラージャタランギニ）がある爲に、大に歐人の研究熱を惹きスタインは特に精力を費して此書を英譯し（一九〇〇）二卷の大冊とし、詳細の史的及地理的の序論を添へてダット氏の舊譯を改善した。然し此史書は佛敎に關しては極めて僅少の史料のみに過ぎぬ。同氏は又迦濕密羅地理に就き詳細の論文も出した。瓜哇は大乘佛敎が一時盛に行はれ特に秘密敎が勢力のあつたことは現時發掘の佛敎や彫刻に徵しても之を知ることが出來る。研究の最古い所は英國南方經營の功勞者ラツフルス（Raffles）の『瓜哇史』で此中には四十餘葉の銅版畫を挿み其多くは密敎の佛像である。同島有名の古殿堂ボロブヅールは其彫刻がサーンチやバルフートと匹敵するに足るべき中世佛敎の美術で、之に就きては、プライテ（Pleyte）が有名な Die Buddha-Legende in d. Scupt. d. Temples v. Bôrô-Budur 1901 を書いて其彫刻から佛傳を說明したが、フーシエーも又此殿堂彫刻につき論じ、獨英の學者中に研究を發表したものも少くない。最近に至り和蘭學者の瓜哇美術

代表は最新しく且つ先々完全のものと云へよう (Chronology of India from the earliest time to the 16. Cent.) 佛教史研究家は机右必讀の書である。古代地理に就きては前記カンニンガムの著已來綜合的の大作はまだない。隨て完全な印度佛教地理は今や學界の渇望して居る所だ。碑銘の研究から成立した印度古字象學 Paleography は佛教と特に關係が深いことは碑銘錢文の外佛教の古寫經が其研究の基礎になつて居るからだ。ビューラーの著『印度字象學』Indische Paleograhie 1896 は此方面に於て唯一無二の良書である。此他科學や法制若くは音樂史等の研究もあるが佛教に大した交渉もないから之を略して美術につき一言しよう。印度美術は前にも申述べた通、其優秀なものは佛塔や佛像や佛畫であるから隨て印度美術史の大半は佛教美術である。之には最近出たハーヴェル (E. B. Havell) の『印度彫刻及繪畫』Indian Sculpture and Paintings 1908 があり。尙古い所で獨佛諸學者の著書も、二三あるが、矢張不朽の價値は今の所グリユンウエーデル (Grünwedel) の『印度佛教美術』Buddhistische Kunst in Indien に指を屈する。此書原作は千八百九十一年に成り同三年に校訂の第二板が出で、千九百一年にギツボン女史 (A. C. Gibbon) が英譯しバーヂエス校閲增補を加へて立派な書になつた、日本繪畫と印度美術との比較に就ては天狗を伽樓羅の變形などゝいふ見當違ひの議論も白璧の微瑕で一寸はあるが、概して良好の指針たるは學者の是認する所だ。

ラツセンが初期の印度古學を總括したと同じく近代斯學の泰斗を以て推され聲名一時歐洲を壓したヴイエンナ大學のビューラーは印度學全體―言語文學宗敎、古物學の各方面を該羅した叢書を編まむとし之をインド、アリ

奇觀が印度支那の各驛に出來た。グリユンヱーデルが高昌で得た壁畫を見ると一高僧が獅子坐に登りて說法する會下に或は碧眼の僧あり黑膚の比丘あり赭顏白皙種々な和尙が經文を開きて熱心に聽法する樣が書いてある。これは實に西域地方が古來如何に幾多の人種を集め幾多の言語が玆に落ち合つたかを示す面白い證據であらう。

此佛教極盛の地、一時異彩ある文化を形くつた西域諸國は、回教の侵入から人爲的の破壞を受くると共に、天變地異の不幸な慘害の爲に河流や土地の狀勢が全く變化して到底繁華な都や賑な市街驛亭を見ることが不可能になつた。古昔の莊麗な大寺院佛塔は悉く沙土の中に埋沒し、其殷盛な王國は一望漠々人烟絕へたる大沙漠の中に僅に殘壘廢趾古昔の榮華を語るのみである。西域は實に東洋のポンペイだ。否其光榮ある歷史を顧みて現在荒寥の狀を見るとポンベイ已上の悲壯な一大光景ではないか。此壯大凄慘な景は詩人には絕好の題目であらう。然し學術の進步は到底永く荒殘廢滅に委して置かぬ。于闐の發掘が始まりて牛頭山の精舍や其華麗な舊觀が沙土の中から現はれる、高昌の調査が開始されて其雄麗な壁畫や稀有の遺書がどし〳〵歐洲の博物館に別樣の光彩を發揚する。燉煌では石室の中から思ひ設けぬ千年の古書が萬を數へて出て來ると云ふ風で、其發見された古經逸書壁畫刻文寶器佛像等は悉く豐富な新學術の資料となり、伯林にも巴里にも倫敦にも彼得堡にも各方面の學者が競ふて此新資料の研究に努力することゝなり、玆に西域古學或は東方土耳其斯坦古學 Osturkestanische Altertums-kunde が成立した。

印度學が一時學界研究の中心たりし如く、セミチツク學が嘗ては流行の寵兒たりし如く、吠陀や史詩の討究、

研究は俄然として勃興し去歳死なれたスパイエル氏は勿論其同僚門下が盛に同島考古學の論文を發表し、秘密佛教に關する珍貴の資料も少からず存する。其中ブランデスの考古學研究 Archaeologische onderzoek op Java en Madura 1909 やカツツ (J. Kats) の瓜哇古文 (Sang hyang Kamahāyānikan 1911) の出版及釋義は秘密教研究上多大の價を有する。此古文は秘密供養法で中には大日經疏に出る阿利沙偈の梵文なども存在する。

第六章　西域發掘の佛教

一　西域古學の成立　一寸支那の譯經史を瞥見すれば、五十餘國と云はれた西域即中央亞細亞の諸古國がどの位佛教の傳播に重要であつたかゞ、多言を費さずに解る。世高でも法護でも曇無讖でも羅什でも佛教を漢土に傳へた飜經の高僧は何れも、西域に重大の關係を有する人だ。また玄奘の西域記其他に就きて見ても、西域諸國佛教隆盛の狀態は、高昌でも于闐でも龜茲でも到る處、金碧煌燿の莊嚴な殿堂、講學修道の大衆が雲集した記事で今に其盛時を偲ばせる。而して此地方は其地理的の關係と他面には支那對諸蕃の政治的位置から晉漢六朝より唐を經て宋元に迨び支那印度西藏及遠くは波斯阿拉比耶其他の西方諸國との交通の交互(クロイツプンクト)點となり、諸國文化の潮流が湊會する一の溜りとなり宗教文藝の東西より交通する一大驛亭(ステーション)となりて、當時最勢力のあつた佛教は勿論摩尼教景教等も茲に來り猶太教さへ之に交りて一種複雜の文化を形くり、其言語も梵語支那語西藏語突厥諸國語波斯語の外に固有の西域諸邦の言語を加へ、民族も隨つて此等諸國の人民を網羅し極めて異彩を放つた賑やかな

とが分つた。ランが于闐で古經を得た前後一枚二枚の斷片は土人が歐人の旅行家に賣與したが、露國カシユガルの總領事ペトロヴスキー（Petrowsky）が之を觀て其散逸を恐れ努力して土人より古經斷片を買收して之を彼得堡に送つた。之が卽夫の『ペトロヴスキー蒐集』と稱するものだ。ランの獲た法句經斷片は同氏が悲慘の末期前に早く故鄕に送つた爲巴里に安着してセナールの研究出でバワー大尉の樺皮經は印度に送られてヘルンル氏が取調べた。之より英國に於てはカシユガル駐在の英國政府代表者マカートネー（Macartney）の盡力で露國と同く大に中央亞細亞古物の蒐集に奮勵し其極甲谷他に於てヘルンルが資料整理の任を帶び千八百九十五年より七年に至り于闐其他より種々の古經斷片が可成りに來たが、此中尤も笑ふべきは僞造の古版書である。狡猾な土人が無茶苦茶の僞字を作り之を古紙に押して巧に古物と僞り一時歐洲學者を悩した一事だ。ヘルンルなどが眞面目に之を研究して種々な解釋を付けたのが餘程面白い。然し之は下に記するスタイン氏于闐に旅行の時犯人が自白したので大笑になつた。千八百九十七年に至り、スタイン（M. A. Stein）が親く于闐に入りて眞正の學術的蒐集を行はんとしビユーラー、ヘルンル等と計り旅裝を整へて千八百九十九年印度を發して西域に入り千九百年より翌年に亘り于闐の故地を發掘して、非常に大規模の發掘をなし佛像佛畫古經斷片古錢等より古代の家具樂器や革鞋等に至るまで山の如き珍貴の資料を得て歸り其優秀の品を撰びて之を獨逸漢堡に於ける第十三回萬國東洋學會に陳列し大に學界の驚嘆を博した。之より先千八百九十九年羅馬に於ける萬國東洋學會に於て露國の委員ラドロフの熱心なる主張に依りて中央亞細亞學術的發掘の必要と其研究の中心機關を設置するの議あり本部を彼得堡に置

楔形や象形文字の研鑽に次ぎて、今や此新學問は世界學壇の新問題となつた。而も其豐富な資料と研究事項が多方面に亘る事は最も趣味の存する所で、今後東洋學の十年は恐く西域古學を中心として此研究に學界の努力が專注するだらう。而して此研究の結果として持ち來さるべき賜は偏く東洋學術諸般の方面に均霑することであらうが、就中佛教史と佛教聖典史は之が爲に多大の啓發を得、或は現在學界の斷案定說を全然顚覆する樣な結果にもなるかもしれぬ。已下此研究の概要に付き一言する。

二　西域古學研究の經過　此研究の經過を略述する前に順序として西人が西域に關する歷史若くは地理研究の一般を敍すべきであるが、今は紙數も殆ど盡きたから一切之を節略して直に新研究の經過を述べる。

千八百八十年已前に西域地方を旅行した歐人は隨分ある。ブレツトシユナイデルの樣に中世西域研究に就き傑作を殘した學者もあるが、西域古學の資料を歐洲の學界に提供したのは英國の騎兵大尉で西藏にも入つたバワー氏(Bower)だ。大尉は千八百九十一年庫車(クッチャール)に於て樺皮の經文を得た。之が西域に於ける古經發見の濫觴だ。此樺皮經は主として秘密部の經典に屬し孔雀王經及び藥法呪法占察の方法を說いたもので全く漢譯のないものが大部分を占める。文字は極めて古く、其當時まで世界最古の寫經としてあつた吾國法隆寺の貝葉も此樺皮經の前には顏色なきに至つた。大尉より少し早く中央亞細亞に入りて學術的探檢に從事し西藏に入りて無殘なる土民の手に懸りて慘殺された佛人デュトレエイルド、ラン(Dutreuil de Rhin)は西藏に入る前年—一八九二に于闐で同じく樺皮の經文を得た、バワー大尉樺皮經は梵文であつたが、此の人の法盧文(カーロスティ)でそれが法句經の斷片であるこ

師の探檢もあつた、西域研究は此の如くして今各方面に亙りて隨分廣く發掘があつたが珍貴の資料が提供された點から見ると、其大なるものは先三つになる、卽一は于闐を中心としたスタインの發掘。二は高昌に於ける獨逸の學術遠征。三は卽燉煌のスタイン及ペリオが古典籍の發見だ、今此等の資料につき各國に於ける研究の一般を略述する。

三　西域古學研究の成績　先づ三大發掘に於ける總體の報告から初める。英佛獨三國の代表者中でスタインが最も燦爛たる報告をして居る。同氏が前後の大成功の記錄としては、

1、支那土耳機斯坦に於ける古物學及び地理學的發掘探檢豫報 Preliminary Report of a Journey of Archaeological and topographical exploration in Chinese Turkestan London 1901
2、于闐沙磧埋沒の廢趾 Sand-buried Ruins of Khotan 1930 翌年再版
3、古于闐 Ancient Khotan Oxford 1907 美濃判大册二卷
4、契丹砂漠の諸廢趾 Ruins of Desert Kathay 1912 二卷

第一は發掘の豫報で大成功で歸英の後直に書いたもの、第二は一般讀者の爲に通俗に此學術的大旅行の顚末を記したもの、第三は卽于闐探檢の學術的報告で上卷六百頁大旅行の經過と于闐其他西域古國に關する詳細の歷史地理の考證を試み別に西藏支那其他の發掘文書につきてはシヤワンヌ、バツシエル等の專門家が夫々筆を執り、下卷は總て附圖で地圖佛像佛畫寫經古文書器具等の寫眞圖一百二十、中には精巧の彩色刷も多い。第四は卽ち燉

くの案纏りて世界の東洋學者が大に此研究が注意を向けし際であつたからスタインの陳列と說明は豫言者が現れて天啓が下つた樣の勢で學界の歡迎を得た。千九百二年に至りて獨逸のグリユンヴエーデル及レ、コツク（Dr. v. Lecoq）の二氏はツルフン卽高昌の故地に至りて視察したるの結果、伯林に歸りて文部省の許可を得皇帝は東亞學術遠征の總裁として巨額の資金を下附し千九百四年より千九百六年まで絕へず發掘を繼續し多大の古經佛像を得廣大なる壁畫は原壁を巧に分割して其まゝ之を伯林に持ち去つた、大體此高昌の故地は露國で初めて注意し千八百九十七年已來クレメンツ博士（Dr. Kremenz）が其發掘を志したが果さずして遂に其功績が獨人の手に歸する樣になつた。此後スタインは一千九百六年より同八年に亘る中央亞細亞の大發掘を試み、足跡西域諸古國に遍く特に此回は燉煌を中心として大に資料を集め同地の千佛嶇の石壁中に於て秘藏せられた、古經幀幅幢幡に畫かれた佛畫其他二十四の大匣を得た。これ今千佛嶇を守る王道士からスタインが種々交涉して僅に五百ルーピーで手に入れたので、此二十四匣の經文は何れも完本で梵語あり支那語あり回鶻語あり西藏語あり寫本刊本、卷き經貝葉折本綴本等の各種を合せ其數實に萬餘に上る、伯林の高昌所獲の奇書に比して其數一層豐富である。スタインが此大成効の後千九百九年に英國に歸つた時に佛國のペリオ（Paul Pelliot）が千佛嶇に來て王道士を問ひスタインに讓與を肯ぜなかつた分の石壁中の支那古書約九千卷を買得て佛國に歸つた。此支那書中には佛教聖典大多數を占むるも其一部は漢代に溯る貴重の寫本あり。史籍其他も乏くないとの事だ。ペリオは又龜茲國の故趾庫車（クツチャル）を訪ふて發掘したが此處には大した獲物もなかつた。龜茲遺蹟は露國からも獨逸からもまた日本の大谷光瑞

經は學界の名物だがヘルンルが其解讀を試みた。同氏が甲谷他に於て千八百九十三年より同七年に亘りて此珍材の解讀英譯考證を出し原本五十六葉を玻璃版に印刷して之に添付した。ランの發見した樺皮法句經の斷片は恐く現在寫經中最古のもので西曆紀元の初世期に溯り得べき逸品文字は佉盧文字 Kharoṣṭhī で此字は遠く紀元前五世紀印度の西北方に行はれ紀元初世紀健陀羅に入りて流行し次で西域地方に傳はつたものだ。樺皮の體裁もバワアー寫經が貝葉經を模して細長く樺皮を裁製したのと異なり兩邊を絲にて縫綴して幅廣の紙の樣にしてある。此法句經斷片は大部分パリに送られ、セナールが之を研究して佛國亞細亞會報(ジュナール、アシアチク)に解讀を出し(一八九八)。一部彼得堡に到着した分はオルデンブルグが苦心の研究を公にした。ベトロヴスキーの蒐集斷片及露國が西域各地で集めた力は梵語はオルデンブルグ回鶻語はオドルフが研究して『佛教文庫』中に最近同國語の佛典を考證して出したが、尙佛經已外に古代シリア語卽 Estangelo(エスタンゲロ) で書いた摩尼教古聖典の斷片はサーレマン (Salemann) が種々有益の研究を出して居る。面白いのは漢文佛經の裏面を利用して摩尼經典が書いてあるので、記者はサーレマン氏に之が涅槃經漢譯斷片であるのを注意したことがある。これには色々の說明が出來るが此佛典古本の裏面利用は于闐や龜玆のみでない。高昌にも其例が多く全然差異した回鶻語佛經を書いたのも可成にある已上は三大發掘前の蒐集資料の研究を一言したが、スタイン第一回の于闐發掘資料に就きては支那語文書はシヤワンヌ、西藏はバーネツトとフランケ、猶太波斯語は Margoliuth(マルゴ、リアス) 古錢はラプソンが調べてスタインの大著の附錄としたが梵語はヘルンルが引受け、其中金剛經の如きは恰ど全部ある逸品だ。其他は記者が同氏の依頼を受けて證定したのだが

煌大成功の記念で一の旅行記に過ぎず學術的の報告書ではないが、上下兩卷とも五百餘頁、精細な地圖の外に實に三百三十葉の寫眞版と十三葉の原色版を付けてある、此等の寫眞版は遠大な山岳の風景、凄慘な沙漠、廢寺古城、人民、古寫經佛畫等に亘りて眞に皆な珍貴の資料でないのはない。此書は此寫眞丈でも非常な苦心で千古の傑作だのに其兩卷千頁の記事は如何にスタイン氏が偉大の人材たるかを充分に示して、普通の讀物としても趣味多く訓戒に富み利益ある近來の一大名著である。獨逸の探檢は其規模の廣大、設備方法の完美、資力の豐富の爲蒐集品も饒多にして古文寫經等の部分的研究には世界を驚かすに足る業績も少くはない、然し全部纏つた報告はまだ出ない。古物學及古美術の方面にはグリユーデルの立派の報告がある。

イデイクチリリ及其附近の古物學的研究報告 Bericht über archäolog. Arbeiten in Idikutschari und Umgebung in Winter 1902—1903. München 1906.

此書には三十餘圖の玻璃版と百六十餘の地圖木版等とを論述中に挿み、佛教美術史上實に貴重の著作である。

ペリオは其支那書の目錄を發表し、探檢の概略報告はあるがスタインの樣な完美した報告はまだ出ない。

已下蒐集資料の報告につきて極めて概略の叙述をする。三大發掘の前ペトロヴスキーが蒐集した古寫經斷片及び其他の探檢家が時々獲たる資料は梵語の分はオルデンブルグ、土耳古語や回鶻語の分はラドルフが研究してぼつぼつ露國古物學會東洋部會々報抔に出した一例としてオルデンブルグが千八百九十七年より翌年に亘り同會報に西域發見の古經數種を研究した（中に孔雀王經の斷片もある）のを代表としたらよからう。バワー大尉の樺皮

大般若理趣分・瑜伽論、金剛般若等七八十葉に上つて居る。而してこれはスタインとペトロヴスキーの蒐集丈であるが、獨逸の高昌發掘にもペリオの燉煌探檢にも此種の經典は多數に存在する。恐く此國語譯及著作の聖典は支那西域の一切經に匹敵すべき尨然たる容量を有したのであらう。此破天荒の新研究即此死語と漢譯との非常に苦痛多かりし比較や、檢出の困難であつた事情其解讀方法等は『新佛教』第九卷四號（明治四十一年四月）に拙稿があるから詳細は其に讓る。此グリユンウエーデルとレコツクが蒐集した一博物館を形成するに足るべき高昌發見の珍材は殆ど無盡だが、此中シリア語回訖語に就きてはミユーラー教授が擔當し千九百四年に摩尼教の亡滅した聖典原文の斷片を考證して學界の賞贊を博し伯林大學はこの爲氏に名譽教授を與へたが爾來氏は露國のラドロフに對して大に回訖語の研究に力め蒐集中から金光明經や大白傘蓋陀羅尼・方廣大莊嚴經・普門品・尊勝陀羅尼等の漢回對譯討究を試み勞力非常なる考證を添へて其回訖研究集 Uigurica 二卷まで出したが尚續いて出すであらう。印度塞種語或は Tocharish に就きては伯林の少壯ドクトルジーク（Sieg）とジーグリング（Siegling）が研究し、梵語は故ピツシエル教授が雜阿含や法句經の斷片調査を出し、門下のステーネル（Stöner）氏も金光明經刊本斷片や法身經を證定し、ピツシエルの後繼者として今伯林大學に名譽高きリユウダース博士（Lüders）も最近馬鳴作の佛教劇三種を發見して印度文學史上實に感謝すべき業蹟を殘した。此他高昌發掘の功勞者として大にカイザーの寵遇を被り伯林大學からドクトルの學位を贈られたレコツクは摩尼教經典につき二三の大作を發表して居るが佛教研究にはさして緣が深くもないから詳細は略する。而して今や伯林では其の蒐集の珍品に毫も他

ざつと左表の通り、珍なのは小乘經の梵本が可成にあることだ。

一、小乘經（四阿含及律）（I）長阿含　1、阿吒那智經。　2、大合集經。　3、隨勇尊者經。（II）中阿含　4、優波利經。（III）雜阿含　5、月喩經。　6、慈心經。　7、新歳經、（IV）小部經藏。　8、法句經數葉。　（V）律二葉

二、大乘經（I）般若　1、大品般若十數葉。　2、金剛般若。　（II）方廣諸經　3、衆腋。　4、大涅槃。　5、城喩。　6、法華（數葉）。7、入諸佛境界（三十葉）。　8、鸚鵡長者。　9、金光明。　（III）大集　10、月藏分。　11、寶幢。　12、日藏分。　13、賢護分。（IV）秘密　14、無量門陀羅尼。　15、大白傘蓋呪。（V）讃歌　16、摩咥利勢多一百五十讃佛偈。　17、同四百偈讃佛偈

此は記者が引受けた丈だが其豐富先からうだ。此梵語の外に西域語がある、此古語は西域諸國の亡滅と共に久しく絶滅して今は唯奇妙なブラーフミー梵字で書いた斷片が殘つて居る丈だ。此既滅の國語は自ら二種類に分れる。伯林のミューラー博士は第一を月支國語即印度塞種の語第二を康居國語即 Soghdian 語だと論斷した。稍大早計だが先正當だらう。第一種は其資料極めて僅少だが第二種は于闐を中心として佛教諸國で公然聖文學語として流行した古語で其材料は頗る豐富だ。此絶滅の不思議な語を解讀して之を梵本支那西藏の異譯と對校し其北方アリアン語なるを語學及史上から論斷したのは實に記者の恩師ロイマン先生が中央亞細亞古學上の殊勳である。而して此解讀の祕鍵は實に支那譯藏經で、千年不可解の謎語は此奇語の斷片に相當した漢譯が發見されたので、漸く解明の途が開いた。今では兎も角言語は勿論文法も分り語彙さへ先生の力で出來た。而して此奇語で書いた聖典は頗る多く記者が在獨中證定した丈でも。僧伽吒經十數葉・觀藥王藥上二菩薩・維摩・首楞嚴・智炬陀羅尼・

第七章　歐米に於ける佛教の感化

第六章までは泰西に於ける佛教の學術的研究若くは美術的の鑑賞の一般を略叙したので、之れで本講の目的は一先づ濟むだのだが、此等の研究や鑑賞を基礎とし源泉として築き上られ流れ出た實際的の感化が、宗教としての眞價であるのだから、此章下でショーペンハウエルに端を發しシュルツエやプングストに發展した智識上に與へた影響、延ひてはニイチエやトルストイや若くはリス、デギヅ夫人が佛教心理から其の親緣を指示したベルグソン哲學の關係なぞを論じ、またワグネルの歌劇に雄渾崇嚴溫雅の味を持たせたトリスタンに於ける涅槃論の藝術化、バルシフアルの大慈悲同情の崇高偉大な情趣に觸れたり、エトウヰレアーノドの詩に觀て『亞細亞の光』が藝術の新天地を開いた跡を味ひ而して獨逸や英國に於ける極めて眞面目な持律の碧眼比丘や、官吏軍人紳商等が研究と渴仰との團體なるロンドンの佛教會、若くは迫害と惡鬪し困苦と猛戰して佛教信仰の確立に力むるライプチヒの傳道會、此等實際信仰上の感勢を叙して、歐洲の大地此處に彼處に佛陀崇敬の靈火燃え上り、達磨歸依の信泉濆出して漸くにして思想上信仰上鑑賞上多大の影響を及ぼし來り燎原の劫火となり、汪洋の大海とならむとするの現狀を略叙する豫定であつたが、拙講既に指定を超過する三十頁、先月臥病の爲起稿も殊の外遲引して頗る讀者に御迷惑をかけても居ることだから今回はこれにて一先此の講を綵らせて頂く。（畢）

人の指だに觸るゝを許さずミューラー・グリュンウエーデル・リューダースを三大元師として其の旗下に集る一騎當千の俊才連が孜々として各方面の研究に奮勉し絶へず業蹟を伯林學士會々報に發表しつゝある。燉煌發見の古書につきスタインの得た萬卷に餘る珍籍奇書は最近漸くにして大英博物館の一室に祕襲の手配が濟むだ位で目錄さへまだ出來ぬが、此珍書の內容が一たび發表されると學界は恐く大革新を見るだらう。ペリオの集めた逸書類の支那文書はペリオ自身目錄を作り羅振玉氏其中で重要のものを校訂したが其中旣に慧超傳は藤田劍峯氏が箋釋して曠語の奇書を世に出した。其他レギは此の梵語聖典の研究に當り（千九百十一年）印度塞種語の聖典にも精通の調査報告をした（同年）。ゴーチヲ（Gauthiot）は同年ロイマン先生の所謂北アリアン語文字及數目の研究を發表し（同年）。尙ほメーボン（Maybon）は燉煌美術につき一冊小冊を書いた（L'art bouddhiquedu Turkessan orienl: la Mission Peilliot 1906—1910）。此等諸研究家の外コノフ（Konow）フーシエー・ボイヤー（Boyer）等新進の研究家の業績も少からず、ヘルンルにもバワー古寫經研究の外幾多重要の研究論文も出て居るが大體此位にして此章は擱筆する。

附記。中央亞細亞研究につきては在獨中二三の論文を『新佛敎』に掲げてもらい、（古于闐及其珍貴の古佛。八卷二、一八一已下新發見の西域古聖典。九卷、四、二九二已下。新發見の阿含諸經の梵文。十卷一八一已下）また斷片研究の中涅槃や、般若、毋兒論師讚佛偈等を選みて之を『宗敎界』に報告して置いた。

研究論叢

西藏佛敎一斑

（明治二八、一、二五、淨土宗學友會會報）

緒言

難哉皇國現代の佛敎や。之を理論の點より見れば。千重の疑關隆然として途を塞ぎ。之を實際の邊より推せば。萬尋の嶮山峻乎として前に横る。大乘を佛說にあらずと談じ。眞如を婆羅摩の轉化なりと論ず。是の如きは是其疑の大なるものにあらずや。世界の敎徒を糾合して雄を基督敎に爭ひ。南北の大法を統一して覇權を日本佛敎に歸す。此の如きは是其嶮の最嶮なるものにあらずや。而して此疑や博く世界佛敎の聖典を比挍して。細に其同異を驗し。密に其興廢を稽ふるにあらずんば。固より其明晰なるを望むべからず。此嶮や。洽く彼此の敎理を曉らめ。相互の敎勢を審にし。方めて其功を收むべきなり。比較研究の吾敎に緊要なる。何ぞ吾人後學の萬吻を勞せむや。今や文華章然。百科の學に其精を極め。萬邦交通して玉帛相慶す。然れども佛理研覈は。未だ其美を極むるに及ばず。世界の敎徒は各相割據して楚と越との如し。是何の致す所ぞ。要するに比較研究の完からざるに歸せずんばあらず。炳眼を佛典に注ぎ。靈腕を敎界に揮はんとするの士。毎に玆に深慨す。夫西藏は南北佛敎の中間に國して浩瀚の大藏尚今に存す。中觀瑜伽の深旨。密乘淨敎の幽趣。依て以て窺ふを得可し。則ち皇國佛敎徒は。特に意を此に注ぐ可く。比較研究の價値。また確に此に存せずんばあらず。予大にこれに感あり。聊要

一味清淨の法水、源を摩竭陀の苑中に發し。天下悉く其澤に沾ひ、宇內皆共恵に頼る。上下數千載。縱橫幾萬里。世界五億の生靈を濟ふて。率ゐて安樂の境に至らしめ。今に至て芙岳天に聳ゆるの地。黃河地に漲るの所。民人蕩々として功德の利に浴し。安南や緬甸や蒙古や暹羅や。南は錫蘭椰樹の綠天地より。北は尼波羅積雪の銀乾坤に至るまで。法雨津々として群生を潤益す。大雄の盛德夫偉なる哉。今は且く法水の西藏に及べるの跡を考へ。其波瀾の起伏を察し。流行の通塞を觀んと欲す」

西藏佛敎の歷史。今便に隨て假に是を三期に分つ。其第一期は紀元前二百年より紀元七百二十八年に至る。是を敎法傳播の時代とす。第二期は七百二十八年より。一千三百五十年に至る。是を敎法變遷興廢の時代とす。第三期は一千三百五十年。大改革家札克巴の出世を以て期を開き。敎法改革、宗敎政治の時代とす。敎理の點より見れば。第一期は敎理方に完全するの時にして。定案の時代なり。第二期は敎理漸く熟して分裂を生ず。反對の時代なり。第三期は此反對と融合して新に完全の敎義を畫定す。方に綜合の時代なり。終に當て少く基督敎に付きて記する所あらんとす」

（一）第一期――佛敎傳播の時代

左には崑崙の連峰。嵯峨として萬古の翠を籠め。右には雪藏の重巒。崔嵬として千秋の雪積み。大湖は鏡を磨して到る所に散在し。長江は碧を凝して往く所に環流す。氣候甚溫ならずと雖。牛羊以て育。地甚だ肥へずと

を摘んで其一端を研めんと欲す。抑も異邦の人西藏佛敎を學ぶや甚だ難し。故に先歐洲支那の典籍に本き其一般を了し。次で宜く原本に就きて。其奧に達すべし。而して其一般を了すべきの書。英にはホッヂソン、ハーデー、タルナゥル、ウイルソン。等の著。獨にはシュミット、ヴシルエヴ等の著あり。特に匈加利人クソマ・デ・キヨエロョエス。等の諸著は。必ず之を讀まざる可からず。支那著作の「蒙古源流」等の書。また次で欠くべからざるものたり。然れども予貧寠。固より典籍に乏しく。加之倉卒の間參照完たからず。唯獨儒エミール・シュラギントヴィト氏の「西藏佛敎」を本とし。傍ら二三の參考書によりて。次の四章の下に。西藏佛敎の一斑を覩んと欲す。據る所の「西藏佛敎」は西曆一千八百六十三年。獨國ライプチヒに於て出版し。嘗て獨帝維廉一世の天覽を經。記事精確。今に宗敎學者の珍とする所なり。予編述の意。固より廣く大方諸兄の叱正を得て。己を益せんとするの微衷のみ。豈敢て自ら世に公にするに存せんや。讀者希くば諒焉」。

第一、敎史
第二、敎義
第三、敎式
第四、敎制

第一章　敎　史

王達賴囉嘛（Dalai Lama）は。觀音の化身にして本師阿彌陀の法王子なるを確信す。吾國の淨敎徒は三たび意を此に注ぎ來るを要す」

西藏の聖史家スサンナング・スセットセン（Ssanang Ssetsen）記するあり。曰く紀元三百年。王トトリ・ニキアン・トサン。（Thothori Nyan tsan）西藏を治め。夙に天下の昌榮を圖る。遇五人の異客。忽然として來り王に說て曰く。王若し四寶を用ひば。卽其望を完うするを得んと。蓋し此四寶は。嘗て紀元三百三十年。一の寶函中に藏めて。天より或地に降りたるものなり。其四寶とは。一に合掌したる掌形。二に小佛塔。三に唵摩尼鉢特迷吽 Om mani Padme pum の銘ある寶珠。四に聖典ザマトグ（「建立せる器」の義にて、今現に西藏大藏中に存す）是也。王喜んで此言を納れ。大に五客を禮し。遂に國家を平定して。一百九十年の壽を保ちたりと。此話實に荒誕なるに似たりと雖も。當時佛敎の漸く光輝を發し來りたるは、實に覆ふべからざるの證とす。泰西の或學者は。此五異人を以て支那の僧侶なりと云ふ」

スサンナング・スセットセンは、已上の事實を以て。佛敎傳播の初めとす。然れども通常の史家は。其後三百年、王スロングスタン・ガムポ（Srongstan Gampo）の世を擧て。其初なりとなす。是蓋し王の功勳至大至高なるを以て。然く定めたるものゝみ。尙皇國佛敎の入りしは。旣に繼體の朝に存せしと雖も。欽明の世を以て其傳來を論じ。支那秦の時早く沙門尸利房等の至るありしも。摩騰法蘭の西來を取りて。傳法の嚆矢となすに類す、抑西藏にスロングスタンあるは。猶皇國に上宮太子あるが如し。大敎の宣傳。一として王の力ならざるはな

雖。米麥以て食するに足る。西藏の地何ぞ夫佳ならずとせむや。然れども昔時佛教の未だ此地に至らざるや。民安心立命の要あるを知らず。其祭る所。日月雷雨の神にあらずんば。木石禽獸の靈なり。其依る所のものは。驅魅役鬼の妖巫にあらざれば。鍊金方術の魔僧なり。耳敢て慈悲の法音を聞かず。身空く罔兩魑魅を敬し。目遂に智慧の聖訓を見ず。頑徒らに牛鬼蛇神を拜禮す。救度何れの時ぞ。闇々たる長夜。絕て惠日の光なく。津濟何れの邊ぞ滔々たる毒流。永慈舟の來るなし。佛教傳播前の西藏は。實に此の如きの狀態なり。其宗教と稱すべきは。夫の自然崇拜 Physiolatry。若くは偶像崇拜 Idolatry なりき」

史家地理學者の言ふ所に從へば。紀元前一百三十七年の早きに當り。閃々たる佛教の光は。漸く西藏を照して。當に其昏盲の闇を滅せんと欲す。古史茫漠考證具らず。其傳教の祖師誰たるを知る能はざれども。此時旣にカイラ（Kailas）山脈の阪路に。寺觀の存在したりしを稱す。見るべし。西藏は支那未だ白鳥の闕に入らざるの前。龍樹方に印度に獅吼するの時。早く旣に大乘の此に來りたるを」

機至らず。法何ぞ弘まらむ。先に佛教の西藏に入りたるや。人其道德の高尙なるを喜ばず。何ぞ其教理の微妙なるに感ぜむ。陽春白雪。遂に鄙人の耳に適せざるの憾なきにあらず。爾來數百年。教門存するとも亡きが如く。カイラ山畔の寺觀も。空く寒烟荒草の中に堙滅するに至れり。然れども今や時漸く熟し。一縷明滅の法燈。焉に粲然の光を發せんとす。西藏佛教徒は曰く。是實に觀音大士愛護の至す所なりと。蓋し西藏の人は其國を以て。觀音有緣の地なりとし。世々有德の國王及偉大なる師祖は。皆大士の應現なりと信ず。今に至りて其國の法

スロングスタン王の功績は。サムブホタの補佐に依りたるもの實に多しと雖。終始王を贊けて。佛教の興隆に盡せしものは。實に其二妃の功に出づ。此二妃は一はドルジヤン（Dorjan）と云ふ。支那の皇女也。他をドルカル（Dolkar）と云ふ尼波羅の公主なり。唐史に記するあり「貞觀十五年、以宗女嫁吐番、弄讃大喜、遣子弟入國學」、と。當時西藏の隆盛なる是を以て知るべきなり。而して二妃の弄讃に嫁するや。各其國より靈像聖經を賚らし來り。全力を盡して佛教の傳播を勉め。學林を設け殿堂を建て。大に人民を愛撫せり。是に於て文華章然として起り。印度より支那より僧徒風を望んで來附し。一時崑崙以西に燦爛極美の春を現したり。今に至て西藏の人尚二妃の德を思ひ。僧侶は之を護符の中に崇め。俗人は朝夕供養して福德を願求すと云ふ。聖典摩尼、カムブムに曰く

「爾の時阿彌陀佛、深禪定に入り、古の眼より青色の光を舒べて、處女ドルマ（Dorma）（二妃を惣稱せる名にて、梵語多羅（Tara）救度の義に當る）を現し、以て有情の心を覺せしむ」

と。此中所謂「執蓮華」は。實に弄讃王の本地なりとなせり。事跡豈太だ上宮太子の傳に類せずや。此に掲ぐる二圖（本書略之）は右は文珠の像にして。左はドルジヤンの眞なり。其三眼あるは西藏にシエスラブ（Shesrab）と稱し智慧の義を表す。（二妃の事に關しては、義淨の「求法高僧傳」の卷首玄照傳記する所あり參照せよ）

（二）第二期――教法興廢の時代

し。其不朽の盛業は。西藏人の常に忘るゝ能はざる所。嘖々の名聲長へに後世に傳へ。世の西藏佛教を見るものをして。遂に之を佛教傳播の嚆矢となさしむるに至りたり」

王は紀元六百十七年に生れ。同く九十八年を以て殂す。唐史に所謂弄讃なるもの是也。史に曰く「吐番在吐谷渾西南、自古未通中國、唐初國勢寖强、其王稱替普、替普弄讃有勇略、四隣畏之」と。以て其絶世の明主たるを想見するに足る。佛教上に於ける功業は。之を月支の阿育に比するも。敢て遜色あらざる也。其一生の偉業は。聖典マニ・カムブム（Mani Kambum）之を詳にす。今其顯著なるものを擧げば。王は紀元六百三十二年。大臣ツミ・サムブォタ（Thumi Sambhota）に十六人の屬僚を付し。印度に使して聖經を求め。梵文を研究せしめたり。西藏の教書其行路の狀を記するを見るに。或は鬼魅に逢ひ或は盜賊に犯され。疾風暴雨・猛獸毒蛇具に艱辛を嘗め、方めて經を賫し本國に歸ることを說く。其狀宛も一部の「西遊記」を讀むが如し。依て想ふ。スロングスタンの時代は方に唐大宗の貞觀年中に當り。サムブホタの入竺。實に玄奘の渡天と世を同ふす。法門の興隆自ら時ある乎。サムブホタ國に歸るや。印度デヴナーガリ（Devanágari）の原字を本として西藏文字を創製し。之に依て梵本を飜傳せり。王此に於て厚く其功を賞し。佛陀の佛誡に則りて國內の陋習を洗滌し。嚴に諸の非法を禁じたり。

西藏の僧は說くサムブホタは文殊菩薩（曼珠師利（Manj'sri）西藏にジャムジャング（Jamjang）と云ふ）の化身なりと。以て其聰明の大臣たるを知る可き也）

る所に依れば。舊來西藏弘通の敎法は。重に支那所傳にして無着の瑜伽宗に係る。三伐婆等の印度師は。概ね中論を宗とするものなりと。此の如く一方には瑜伽宗ありて。舊來の正宗なりと誇り。他方には新に入れる中論ありて。其說の盡せるを論ず。兩宗の衝突實に此に於て免るべからず。屢論戰を張りて互に其雄を競へり。而して王は兩宗の論爭。延て民心を乖離するに至らむことを慮り。令を發して二者を朝庭に會し。最後の論戰を決せしめたり。此論爭に於て瑜伽は遂に中論に敵するを得ず、其派の僧侶。多は去て印度に走りたり。玆に於て中論獨り西藏の敎權を握り。王はサムヰエ(Samye)にビマ(Bina)の大殿を建て。大に中論の諸經論を飜せしめたり」

二、破壞時代

チスロング殂して後數代。紀元八世期に至り。王ラングダルマ(Langdharma)出で。佛敎を廢滅せむと計り。殿堂を毀ち。僧伽を追ひ佛像を壞り經典を燒く。慘毒實に支那三武の災に比すべきあり。王の暴惡此の如し。終に民心睽離し國家衰弊し。紀元九百年國民の弑する所となれり。其子位を續き。又暗弱にして崇敎の心なし。六十四年間酒色の裡に位を終れりと云ふ」

三、復興時代

ラングダルマの孫ビラムグル・トサン(Bilangur Tsan)。大に前王の非を過め八大寺院を再建し。八十年間平和の治をなして殂せり。此より佛敎また大に興り。前代難を避けて印度に遁れたるの僧侶。續々西藏に歸り來

櫻花盛開して萬朶の芳を吐くに譬ふ。其芳蕾春風に笑て。潮紅呈媚唯だ榮に向ふの時は。則ち前項の第一期なり。既にして花方に開く。此に於てか或は和氣麗日。或は妬雨嫉風。忽にして榮へ忽にして衰ふ。西藏佛教傳播已后の史は實に此榮枯變化の態を示すものなり。是を今說かんとするを第二期となす」

一、隆盛時代

スロングスタン王殂して後數十年。佛教洽く西藏に布くと雖も。續くに明主なく。教勢國運漸く萎靡せんと欲す。此時に當り王チスロング・デ・トサン（Thisrong de Tsan）出でゝ。大に教法を赫揚す。此を第二期の初めとす」

此王は紀元七百二十八年に生れ。同八十六年に殂す。計るに其治世は。方に唐玄宗の天寶年間に當る。西藏佛教に確然たる基礎を與へ。僧制を定め信條を嚴にし。之を一般の國教としたるは實に王の功なり」

チスロング王は。夙に佛教の國家に鴻益あるを洞察し。之に賴て民人の康福を圖らんとし。卽位の始。高德サンタ・ラクシタ（Santa Rakshita）を印度より西藏に引き。其推薦に依りて。カフヰリスタンより遙に偉大なる碩學鉢曇摩三伐婆（Padma Sambhava）（蓮花城、西藏にウルゲン（Urgen）はパドマジユングネ（Padoma Jungne）と云ふ、カフヰリスタンは西域記所謂烏仗那（Vgyana）國なり）を迎へて師となせり。三伐婆は密咒に精通し儀軌に暗熟す。後世西藏人の崇めて大祖師となす所なり。王の佛法を護る此の如くなるを以て。印度の僧侶續々踵を次で西藏に入り。爲に舊來支那所傳の教義を壓倒するに至れり。西藏の高德プトン（Puton）記す

に際して。頓に光輝を發したるものは。實に祕密敎なりき。聖典は續々飜傳せられ。名師は踵を次で來る。加之其種々の祕法は。大に民人の歸仰する所となり。遂に舊來西藏唯一の正宗たる。中論と比肩して立つに至り。一は法身の有なるを論じ。他は理性の空なるを談じ。對壘角逐して各其雄を鬪はす。密敎は念誦修法を重むじて。儀典の嚴なるを尊び。中論は具性觀理を要として。唯慧の明なるを期す。密は事を以て理を詮せむとし。中は理を以て事を攝せむとす。空と有との論なり。理論と實際の衝突なり。主觀と客觀の牴牾なり。敎理上西藏は。當時此の如き大爭鬪ありき。夫れ大衝着の後。必ずや大融合來らざるべからず。大缺裂の生ずる。次で又大和會を來すべきなり。知るべし西藏は敎理上此時方に一大偉人を要したることを。而して首を回らして。他方を顧みれば。敎法の旺盛は。自ら一種の惡風を釀し。戒律緩くして宣敎漸く漫に。僧徒唯安逸を事として榮華に耽り。密法に付託して。徒に奇幻の術を衒ふ。淸淨の法規荒蕪に歸し。純潔の信仰汚穢に已まんとす。嗚乎此の腐敗を洗滌し。腫疽を拔除するもの果して誰ぞ。知れ西藏は道義上亦確に一大偉人を要したることを。而して此偉人は遂に時に乘じて來れり。之を大聖ツソンクハパ（Tsonkhapa）（支那之を札克巴又は宗喀巴と呼ぶ）となす」

札克巴は西曆一千三百五十五年。（皇國後小松帝御宇、支那明大宗永樂年間）シヤムヱのアムドに生る。此處に今クムブムの大寺嚴然として立ち。永く大聖不朽の功勳を留む。入寂は西曆一千四百五十年。卽支那明憲宗の成化十一年。皇國後土御門帝の文明七年に當る」

札克巴、其豐富の學識、絕代の材幹を以て。ボドヒ・ムル（Bodhi-mur）タルニム・ムル（Tarnim-mur）アル

り。反動の勢力。熾然として大火の原野を燎くが如きものありき。之を復興時代の始めとす」

西藏僧の其國に歸るや。宣敎の効果實に偉大なりき。而して之と共に又印度僧の來りて敎を布くあり。內外相應して隆然たる西藏佛敎の復興をなせり。是れ紀元九百七十年。卽ち支那にありては宋大祖開寶年間。皇國にありては慈惠既に天台座主と成りて。佛敎の最も盛なる時なり。而して此復興に際して最も有力なりしもの印度僧バンデタ・アチシヤ（Pandita Atisha）及其弟子ブロムストン（Bromston）等とす。種々の大乘經及秘密儀軌の類は。大抵當時の飜傳に出で。有名なる密經迦羅斫迦羅。亦此時を以て現れたり。之より已後。十一、十二、十三の三世紀間。續々梵經の飜譯ありて。高僧碩學亦多く出世あり。「佛祖通載」擧る所の元の諸帝師は。概ね西藏僧ならざるはなく。元史に赫々の名ある。帝師拔思發の如き。其最なるものなりとす」。

是の如くして第二期は過ぎぬ。或は香雲堆をなし滿幅の美を現し。或は落英繽紛。風に摧け雨に悩むで悲慘の景となり。一衰一盛相連絡して。將に第三期の果實を結ぶあらんとす」

（三）　第三期——敎法改革及宗敎政治の時代

一、敎法改革の時代

アチシヤ寂してより三百年。殿堂空を摩して聳へ。讃唄地を搖して起り。極目爛絢。眞に敎法旺盛の觀をなすと雖。輝々たる光景の裡。自ら一種の危機伏在し。一大衝突、一大崩壞。俄然として至らんとす。蓋し敎法復興

三年死）を鼻祖となす、始て達頼喇嘛の尊號なる。ギャエルヴ・リンポチエ（Gyelva Rinpoche）の稱を受く。蓋し「貴陛下」の意なり。一千四百四十六年に至り此人タシルンポ（Tashilumpo）の大寺を建てゝ。またパンチェンリンポチエ（Panchen Rinpoche）の尊號を得たり。此より代々タルルンポに住するものは。皆此尊號を續く。之を班禪喇嘛と云ふ。蓋し「大師寶」の義なり。這般二喇嘛は東西に並立して教權を握り。漸く教法を以て國事に關渉するの傾向を生じ。第五の達頼喇嘛ヌガンクヴング・ロブザング・ギャアムトソ（Ngagvang Lobzang Gyantso）の世に至り。附近の蒙古人を使嗾して。時の西藏王を伐たしめ。一千六百四十年即明思宗禎十四年。終に西藏の政府を顚覆して。教權と共に政權を掌握し。全然宗教政治を形成して。東洋の羅馬法王となり。東西の西藏。及其附近を擧げて。悉く喇嘛の命に服從せしめたり。後淸朝勃興するに及び康熙帝の雄略の爲。淸の版圖たるに至りしも。尙依然として其尊嚴を保持し。蒙古滿洲各地の佛徒。咸く其教令を順奉すと云ふ」

已上三項。略して西藏佛教史の一班を記す。今將に筆を轉じて。少く西藏の基督教に付き。記する所あらん。是蓋し佛家は。己れが教門の變遷興廢を知るを要とすると共に。又他教との關係に付き。深く考ふる所なくんばある可からざるを以て也」

（四）西藏に於ける基督教

歐人は西藏の口碑に「大聖札克巴は、西方より來れる長鼻の人と友たりし」と云ふを證とし。且其制度典禮の

タネリケ（Altanerike）ラムリム（Lamrim）等の書を著し。密乘中論の衝突を融會し。ガルタン等の地に大寺を建立し。大に僧風の頽亂を矯正し。嚴に教會を設けて。當時の積弊を刷新せり。西藏佛教史上絶大の偉勳は。實に此人ならずして誰れぞ。哲學界に韓圖ありて。實驗理論の兩派を調和したる功を知るものは。又札克巴の密乘中觀を和會したるの技量を思へ。道德界に蘇克剌底ありて。道義の頽落を救ひ其基礎を定めたるを知るものは。また札克巴の西藏道義の改革を成したるを觀ぜざる可からず。泰西の學者毎に讃して。「喇嘛教の路惕（ルーテル）」となす。宜哉」

札克巴の大業は此の如くして成れり。今に至りて西藏の人。旦暮其德を慕ふて崇敬至らざるなく。其示寂の日は。大祭を修し嚴儀を行ふこと年々怠たらず」

二、宗教政治

札克巴既にガルタン（Galtan）の大寺を建てゝ。其長となり。四方の僧徒。皆其教令を仰ぐ。稱して喇嘛（Lama）と言ふ。蓋し首長の義なり。札克巴寂して後。法統相續てガルタンに住し。權勢比ぶものなし。宗教政治の端緒。此に於て漸く現ず。然るに幾ならずして。此權勢は去て達賴、班禪の二喇嘛に移るに至りたり」

達賴班禪の二喇嘛は。或人又札克巴の法統を續けるものなりとなす。是西藏の傳説に「此二喇嘛は、札克巴の此の世を化せむが爲に、其二大弟子を使はして、循環轉生せしむるものなり」と言ふに依る。然れども其實は然らず。達賴喇嘛はラッサ府に一寺を建てたるゲヅム・グルブ（Gedum Grub）（西曆千三百八十九年生、同七十

の狀。錯雜纒絡の態。豈丹青を得て及ぶ所ならむや。西藏の佛教を觀る。また之に類するあり。其教義は大小兩乘相間錯し。密教之を色彩し。淨門之を潤色す。深遠高妙のもの。秘密幽奥のもの。緯となり經となり。蓮華菩薩笑を帶て坐し。金剛力士怒を露して立ち、梵呪祈禳の法。占運十星の技。點綴間雜して。光怪陸離得て端倪すべからず。此間一管の筆。明晰其大綱を述べんとす。恰も夫の秋林の奇。毫を着け難きに似たるなからむや。今は唯一株の古松を繡錯參差の中に拔き。一樹の丹楓を綺綰羅織の裡に擇びて。秋景至奇の存する所を示すに過ぎざるのみ。一隅を擧げて三端を察するの士。之に依て全般の風景を知らむかな」

今西藏の教義を述るに當り。之を三項に分つ。第一聖典を擧げ。第二教義を明し。第三宗派を示す。唯憾む所は。獵涉甚だ淺に。其大綱を撮る能はざるを。且歐人の書。固佛乘に精ならず。觀察する所。頗る支吾なきにあらず。西藏の原本に就くに非ざれば。到底其眞を識る能はざるを。大方希くは諒焉。

一　聖典

大聖逝きてより千百年。法水源流に溯て。其醇を窺ふべきもの。唯黄卷朱軸存するのみ。これ教義を説くに先ちて。聖典を擧ぐる所以也」

西藏の法寶。大別してカンジュル（Kanjur）及タンジュル（Tanjur）の二大藏とす。カンジュルは、「訓誡を譯したるもの」の義。タンジュルは「教義を譯したるもの」の意なり。二者飜傳の時代は。其舊きはスロングス

頗羅馬教に類するあるを論じ。謂く。西藏佛教は基督教の影響を受けたるもの也と。由來歐人徒らに自家の善を誇る。言皆信ずべけんや。此の如きは皇國佛教の外教に似たる多きを將て。忽ち是外教より脫化せりと言ふと何ぞ異ならむ」

西藏に初めて基督教の入りたるは。西曆一千六百十四年にして。卽明の天啓三年の時なり。此際來れるものはジェスイット派の僧。教父アントニヲ・デ・アンドラダ (Pater de Andrada) とす。次で一千六百六十一年（淸聖祖康熙元年）。同派僧アルベルト・ドルヴイレ (Albert Dorville) 來り一千七百年また同派僧至りたり。一千七百四十四年（淸世宗雍正三年）フランシスカン派の僧。ホラシヲ・デ・ラ・ペンナ (Horatio de La Penna) 五人の徒を率ゐて西藏に布教し。西藏語を以て「耶蘇教問答」を出版せり。此人の已後歐人續々西藏に入り。牧師にして西藏の佛學に精きもの。往々之あり。基督教徒の膽實に愛すべきかな。然れども其西藏に布教せし結果は。唯人民の反對を受るに留まりて。偉大なる感化之なきが如し」

第二章　教義

秋日輕鞋を踏て。勝を郊外に探るものあり。忽ち見る前面一簇の茂林あるを。眼を放てば。紅葉綠樹燦然として錦を織り。赤紫青黃、綺綰繡錯す。丹楓は翠松と枝を交へ。古檜は老杉と葉を重ね。樅栗の福なる。羅蔓の紅なる。參差羅織して其奇名狀すべからず。此に於てか興會頓に來り。毫を咀んで其眞を寫さんと欲す。濃淡疎密

巻）及ウィルソンの著（"Analysis of the Kahgyur" ベンガル亞細亞協會雜誌第一巻）等。之を詳にす。惜らくは吾人未だ之を見るを得ず。大方諸君。願くは獵渉の勞に吝なるなからむことを」

二藏編纂の年代は。未だ精確ならず。然れども十七世期に至て完全したりし如し。一千七百二十八年即清高宗乾隆十三年に至り。ラーサ府の管理者ミヴング（Mivang）之を板行し。支那の紙を用ひて印刷に付せり。魯國聖彼堡の文庫。其他英佛獨の博物館に各其一本を藏すと云ふ」

二　教義

總論

大聖札克巴。其大著ラムリム（Lamrim）中に。三乘の教（梵語 Triyâna 西藏語 Thegpasum）を説く。曰く「下根のものは、唯佛陀ありと信じ、三界流轉の理を疑はず、種々の功德を積て、善道に生ずることを求むべし、其中根のものは、一切法皆無常なりと觀じ、世界悉く苦なりと了して、解脱の法を求むべし、若其上根のものにありては、一切の諸法咸く唯識なりと知り、法の無自性なるを悟る可し」と。第一は人乘なり。第二は小乘なり。第三は大乘なり。人乘の如きは今且らく措く。其小乘と大乘は。實に今研究せんと欲する緊要の主眼たり」

クソマの著に曰く「有部宗 Vaibhashika 經部宗 Sautrantika 瑜伽宗 Yogacharya 中論宗 Madhyamika の四宗は、西藏學者の常に尊崇する所なり、然れども是の如き諸教理の研究は、唯尠少の人に止り。其名を知つて其

タン王の時に成り。其新きものは。十三世期西藏に入れる。印度僧等の手に成れり。事既に第一章に出す」

カンジュルは部數凡て一百八。皆如來の聖訓を輯む。分て七部とす。

一、ヅルヴ　Dulva　律　藏
二、シェルチン　Schelchin　論　藏
三、パルチェン　Palchen　佛會藏
四、コントセグ　Kontseg　寶頂藏
五、ド　Do　經　藏
六、ミャアグダス　Myagdas　解脫藏
七、ギュウト　Gyut　祕密藏

細別此の如しと雖。普通第一のヅルヴ、第二のシェルチン。及第五のドに第三已下を總括して。之を三藏スデ・スノッド・グスム (Sde snod gsum) と稱す」

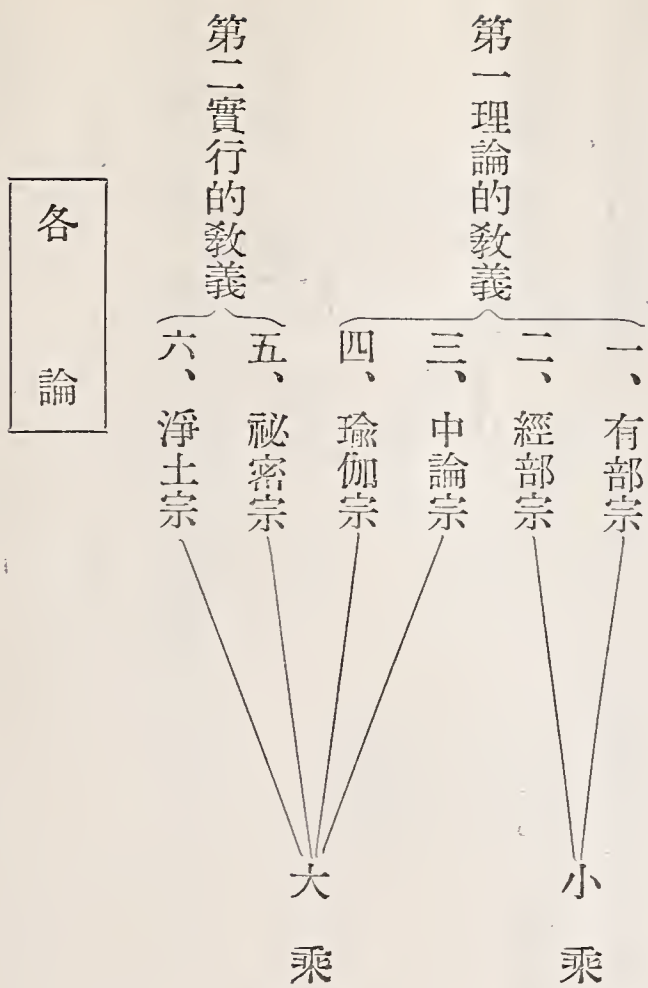
次にタンジュルは、其部數凡て二百五十五。大別してド及ギュウドの二部とす。此中には啻に如來自說のみならず。歷代帝王祖師居士の註疏著作を收め。因明聲明等の書又此中にあり。

二大藏精細の目錄は。歐人夙に之を調査し。クソマ・デ・キョエロヨエスの二論文（"Analysis of the Tibetan work editled Kahgyur" and "Abstra t of the content of the Betan-hgyur." ベンガル亞細亞研究會報第二十

の說、三乘の談。毫も皇國所傳の小乘と異る所なし。故に繁を恐れて記することを略す。唯シユラギントワイト記する所を見るに。經部は三千界に多佛出世するを許す事を言ふ。此他經部と有部の差異。見るべき所なし。彼の涅槃の意義、有爲の法體、因果の法則の如き。此項下にありて比較研究を要すべきもの多しと雖。充分の材料を集むる能はざりしを以て。之を異日に讓る」

漢	梵	西藏
小乘教學語一斑		
輪迴	Samsara（サムサラ）	Khorba（コオルバ）
涅槃	Nirvāṇa（涅槃那）	Nyagdas（ニヤグダス）
聲聞	Śrāvaka（スラーヷカ）	Nanthos（ナントス）
緣覺	Pratyeka Buddha（プラチエカブドハ）	Rags Sandschei（ラングスザンドチエイ）
菩薩	Boddhisattva（菩提薩埵）	Byangenle sendpa（ビアングエンブセムドパ）
四諦	Āryanisatya（アールヤニサチヤア）	Phangpai dempazui（プハングパイデムバズイ）
十二因緣	Nidana（尼陀那）	Temdrel chungugi（テンドレルチユングキ）

實を了せざるもの、比々皆是なり。通常の僧侶は秘呪を念じ密軌を行じ、或は經を誦して戒を持するのみ」と。而して俗間信徒宗教上の行業は。密法に依りて現在の安寧を祈り。往生極樂を以て。安心立命の地となすに過ぎず。吾人爲に於て思ふ。西藏の佛教は。恰も皇國の倶舍唯識等を。唯教理の上の鑽仰に留め、其實際上精神の修養に至りては。實に念佛持咒等に歸すると等しきを。故に今便に隨ふて。左の二項の下に西藏佛教の全系を分類し。次を追て。其教義の一端を說かんとす。

各論

（一）小乘教（Hînayâna）

小乘兩宗の綱要は。共に三界の苦を觀じ。六道の輪廻を脫して無爲の涅槃に入るにあり。四諦の相、十二因緣

三性 ｛一、パリカルピタ (Parikalpita) ……（西藏 Kuntag）——遍計所執性
二、パラタントラ (Paratantra) ……（西藏 Zhan Vang）——依他起性
三、パリニシユパンナ (Parinishpanna) ……（西藏 Yontag）——圓成實性

二諦 ｛一、サムヴリチサチャア (Sanbritisatya) ……（西藏 Kundzele hidempa）——俗諦
二、波羅末陀サチヤア (Paramārtasatya) ……（西藏 Dondampidempa）——眞諦

初めに三性を述べむ。第一に遍計所執性とは。妄想より生ぜる錯誤なり、即ち法に實ありと執して。自性空なりと了する能はざらしむるものを言ふ。此種に屬すべきものは。一切唯妄想の所現にして無體なるの法なり。是皆諸法の相に謬見あるより生じたるものとす。其謬見大別二種となる。第一は無なるものを有なりとす。第二は思想上假有なるの法を實在なりと計す。「一切の外境に封着するが如し」

第二依他起性とは。因果の連結に依りて依存するものなり。是れ衆生の謬見を起す基本なり。此種に屬するものは。識、根、心所等の諸法にして。唯相續によりて各其體を有するものなり。故にパラタントラ「他に依るもの」と名く」

第三に圓成實性は。不變不明の眞有也。之を「聖道の鏡」と名け。「至善」と呼び「絶待」と稱す。此種に屬すべきものは。唯明々了々として眞理を照見するの心のみ。即ち無我を了し空を證したるの心のみ。若人此心を證得せむと欲せば。一切の諸法唯妄想の所現なりと觀ぜよ。何んとなれば諸法は因緣寄托して依他の性なるが故な

(二) 大乘教 (Mahāyāna) (西藏 Thegpa chenpoi)

〔第一〕 中論宗 (Madhyamika) (西藏 Bumpa)

大乘中論は。尊者那伽曷樹那 (Nāgârjuna) (西藏 Lunglub 龍樹) 佛意を探りて開し所也。傳て云ふ。其所依の經は。三昧王經 (Samādhirāja) 華嚴經 (Buddhavatamsaka) 及寶積經 (Ratnakūta) 等なり。傳へて言ふ。此等は皆龍樹の龍宮より賚し來れる所なりと」

中論の大綱は。一切法の皆空〔梵、舜若多 (Sūnyatā) 西藏 (Tongpanyid)〕なるを說くにあり。之を般若波羅蜜多 (Prajñā Pāramitā) (西藏 Palchin) と名く。「彼岸に達する最上智」の義なり」

空を論ずるに。別相と總相とあり。別相を以て空と云ひ理と云ふときは。本來常住の法體を指すなり。卽ち一々の諸法。皆空の義あり。正見正思此理を開顯したる者。之を佛と云ふ。若其惣相より云ふときは。空は絕對普遍にして。因果已外に超脫し。一切諸法含有せずと云ふことなし。大聖世尊此言を以て。上の義を結ぶ。曰く「諸法は自性 (Novonid) を有せず、故に始あるなく、又終りあるなし、無始より已來、諸法は寂靜 (Zodmanas zhiba) にして、涅槃に安住せり」と。所謂「諸法寂靜」なるもの。實に空の義を說示して餘蘊なし」

已上は是中論所說の大綱なり。今更に進んで。其細目を見んと欲す。

第一、中論は三性二諦を立てゝ。諸法の空なるを說く。其名稱左の如し。

觀することを要す。蓋し空を觀ずるに當りては、無想に住し、無念に安し、觀ずると雖も其所緣の境に封着するを許さず。若し一念の動くあらば、是れ菩提を碍るが故なり。

第四、成　果

人若し空を觀じて其心退墮せざれば、漸次智慧を發して諸法を通達し、菩提の諸位を歷て、遂に大覺の位を證するに至るべし。而して其菩提の高位なる者は。威力廣大にして。廣く他方の世界に往昔し佛の說法を聞き。其使命を通じ、或は八相を示現し衆生を濟度し、或は永く佛陀と成らずして化益に從ふものあり。亦佛は小乘の如く無餘に入りて滅智するものにあらず。三身を具して長に衆生を救ふ。三身とは一に應心 (Nirmankaya) (西藏 Prulpaiku)。二に報身 (Sambhogakâya) (西藏 Longchod dzopai Ku)。三に法身 (Dharmakâya) (西藏 Chosku) 是なり。

〔第貳〕 瑜伽宗 (Yogâcharga) (西藏 Najor chodpa)

瑜伽宗は聖者阿僧伽 (Aryâsanga) (西藏 Chaga thogmed 無著) の創めて唱へし所なり。無著已前、聖者難陀 (Nanda) (西藏 Garo) 鬱多羅犀那 (Vtarasêna) (西藏 Dampai de) 等の諸師出で丶、瑜伽の旨を說きたりと雖も、其完成は實に無著にありとす。其所依の經は密嚴經 (Ghandavyûha) 摩訶三昧耶經 (Mahâ-Samaya) 等なり。

瑜伽宗の大綱は、三界唯識 (西藏 Semtsamo) なりとするにあり。其一切空を觀じ六度を修し、入聖得果する

り。豈堅實常恒の我法此間に存すべきならむや。此の如く觀じ來れば。理として無我の正見に達し。空理の妙有圓滿なるを體達するを得べし」

次に二諦を述べむ。此二諦は漢土に於て弘明集中二十三家の義。其芳を爭ふが如く。西藏に於ても判釋亦千頭萬緒なり。然れども要之俗諦は假名として存するもの。眞諦は眞實に有なるものなりと言ふは。諸家其轍を一にする所なり。俗諦は妄想錯誤の根本となり。眞諦は聖者慧を以て之を證す。一は因緣生なり。他は自存にして因緣を超絕す」

二諦を解するに。中論は瑜伽師と其趣を異にす。瑜伽師は眞諦の中一分依他起性ありと說き。中論は唯是圓成實に局るとす」

此項下、精に我邦所傳の唯識三論二宗を比較して、同異を甄別すべけれども、閑なきを以て、且く大方專門家の指導するに讓る。

第二、中論は三界の生死を斷ずるの理。大に小乘に異る

小乘諸教は、三界の生死實に苦なり。故に之を解脫して涅槃に入らんことを勸む。中論は三界は其體虛妄不實なり。實苦の厭ふべきなし。唯虛妄なるが故に。空理を觀じて其迷を排ふに過ぎず」

第三、菩提を證得するの道

三界の流轉を離れ菩提の妙果に入らんとす。必らず嚴に六度を修行せざるべからず。而して常に一切空の理を

けたるが故に、其極瑜伽宗の勢威を摧きて、國内の教權を握り、現に達賴喇嘛は、此宗を以て唯一の正宗となすに至れり。

布賴僧伽タンジュル中の聖頌の大半、及カンジュル中の諸聖經を以て其正依とす。聖經の重要なるもの左の如し。

般若波羅蜜多經	Parjnâpâramita
無盡意菩薩會經	Akshayamatinirdesa
三昧弘道顯定意經	Anavataptapariprichchhâ
三昧地王經	Samâdhirâja
海龍王所問經	Sagaraparipirichchbâ
大莊嚴法門經	Manjusrivikridîta
寶積經	Ratnakûtâ
法集經	Dharmasangîti

今略して此派の大綱を述べむ。此派樞要の定説は二諦の不一不異なるを論ずるにあり。曰く「眞俗の二者、同なり異なりとなすべからず、若同なりとせば俗諦旣に遠離す、眞諦亦何ぞ遠離せさらむや、若し異なりとせば、俗諦にあるもの何くんぞ眞諦を證するを得むや、夫れ無我を了せば、俗諦所作假有のもの、實に眞諦常住非所作

の順序等、大抵中論の說く所と異ならず。唯特點とすべきは、阿賴耶（Ālaya）（西藏 Tsang 又 Nyingpo）を說きて、空理の妙有なるを說くにあり。

阿賴耶は一切法の根本にして、無始已來洽く一切の法に存在す。「恰も月の明靜なる水中にあるが如く、湛然として諸法の中にあり」是の識甚だ純淨の性を失して、有界に彷徨し生死循環す。是をして原始の純淨に復せしめんとせば、宜く極明の惠を以て、三界皆唯識なるを觀ずべし、此の如きときは、一切法を常實とするの我想自ら去り、無明法爾として滅す。而して其本元の淸淨に歸し、三界の生死昨夢の如きを知らん」

無著等の諸瑜伽師は、絢爛の美を以て其教義を開闡しき、是に於て一時龍樹所立の中論宗を壓し、之を知て寂然として聞ゆるなからしめたり。然るに紀元七世期に至り、中論を再興して再たび龍樹の教義を揚るものあり。之を布剌僧伽中論宗となす。此宗之を中論の下に說くべきなりしと雖、今歷史的の順序に隨て、之を瑜伽宗の次に置く。

〔第參〕　布賴僧伽中論宗（Prasanga madhyamika）（西藏 Thal Gyurva）

此宗は佛陀波利多（Buddha pālita）の立る所也。此宗其初めはスヴタントラ中論宗（Svatantra Madhamika）等の攻擊を受けたりしも、遂に大乘諸派に超絕して、獨り威を敎海に擅にするに至れり。是れ八世紀及九世紀の間に出でたる、戰茶羅結利帝（Chan drakirti）（西藏 Dava Dagpa）等諸學者の、經を疏し論を釋して宗義を開顯せしの功に由る。而して紀元十世期佛敎再興の時に乘じて、印度僧の續々西藏に入るや、主として又此宗を助

〔第四〕 祕密宗（Tantriyâna）（西藏 Snags Kyithegpa）

歐人は密教を呼ぶに、瑜伽宗（Yogâcharya）の稱を以てす。是密教は觀法を主とするが故に、無著所立の宗名を以て之を冠らしめたるならむ。皇國又往々密教を呼て瑜伽宗と云ふ。又其觀法を主とするに名るか。蓋し瑜伽（Yoga）は思惟の義、阿闍梨（Acharya）は師の義なり。二語を合して深く觀法を修するの人を指す。古代印度の外道に亦禪定を主とせる瑜伽派あり。事、友人荻原氏の「佛教已前の印度諸宗教」に精し。

密教の西藏に傳はりしは、紀元十世紀、聖典迦羅斫迦羅（Kalâchakra）（西藏 Duskyikhorlo 時輪の義）の出現を以其初めとす。西藏の傳に曰く、此聖典は淨土サムブハラ（Sambhara）（西藏 Dejung 幸福源の義）に於て終結せるものなりと、今現にカンジユルの祕密藏中に存す。十四世紀十六世紀の間幾多の註疏出て、此聖典を解釋せり。其中最も著しきものは。プトン Puton、クツエツプ Khetup、パドモ・カルポ（Padmo karpo）の手に成れるものなり。密教の正依とする所。主に此聖典にあり。

今左の四項の下に。略して密教の大旨を記せん。

一、密教の至要なる定說は、最勝第一の佛陀を建るにあり。此を阿提佛陀（Âdi Buddha）と言ふ。西藏語チヨギ・タングボイ・サングキエ（Chogi dangpoi sangye）と稱す。

此第一最勝の佛を、密部に於ては伐闍羅陀羅（Vajra dhara）（西藏 Dorjechang 或 Dorjedzin 金剛持）及伐闍羅薩埵（Vajrasattva）（西藏 Dorjes-empe 金剛有情）、と稱す。伐闍羅陀羅は「最勝佛」「最上勝者」「一切祕

のものと一なるを知らむ、而して俗諦の上既に眞諦あれば、諸法自ら常住にして解脱に安住す」と。卽ち眞理は「一にして同（西藏 Ngova chig）、而も上異の義（西藏 Togpa niji）」を有す。

此派また佛敎に二道あることを說く。一は宇宙最高の國スクハヴチー（Skhavati）に生じ。形あるもの身を以て完全の快樂を受くることを觀む。他は完全圓滿の解脫。卽涅槃を證することを敎ゆ。前者は種々の善根を種へて其國に生じ、後者は智慧の圓滿によりて此境に達す。

此派は八異或は十一異を述べて、以て餘の大小諸派と別つ、今西藏の學者ジヤム・ヤング・シヤドバの記す所より、其至要なる二二を列ねて、以て一般を窺はむ。

一、緊要なる敎義は、有と共に無を非するにあり。自存絕待の眞諦ありと許さず。また緣生相對の俗諦ありど許すなし、此れ二邊に偏せざらしむが爲めなり。有なるものはなしと言はず。無なるものは有なりと說かず。此れ中道を取るなり。故に語あり、曰く「有の邊を拒むが故に、無の邊隨て亦非ず」と。」

二、阿賴耶は絕待の有なり。之を相對の有となすものは非なり。

三、阿羅漢は眞の涅槃を得たるものにあらず。羅漢と雖も疑を起して墮獄するなきにあらず。全く過なきものにあらざるなり。

四、佛陀に二種の涅槃あり。一は有餘涅槃、是れ應身の佛證する所なり。二は無餘涅槃、是れ佛肉身を捨るとき現ず。卽法身の佛證する所なり。此說大に疑し。

此の如く無量無邊の佛、皆其淨土の身を有し、人佛を化作し法王子を現出す。而して現在劫中の四佛、既に出で、未來の一佛將に現ぜんとす。此五佛の本地は特に此土に有緣なるが故に、之を五禪定佛と總稱す。金剛薩埵は此五佛を統攝して、最上の位を占むるものなり。故に金剛埵薩及阿彌陀は、西藏密教の諸儀式を行ふに當りて、每に崇敬する所、民人の賴て以て安心立命の地とする所なり。

五禪定佛、人佛、法王子の名稱左の如し。ウヰリアムスは之を「五重の三位卽一」と呼べり。

五禪定佛	五摩奴史佛	五法王子
毘盧舍那 (Vairochâna)	拘留孫佛 (Kurukuchandra)	普賢 Samantabhadra 三曼多跋陀羅
阿閦鞞 (Akṣobya)	拘那含牟尼佛(Kanaka muni)	金剛子 Vajrapâṇi 跋日羅波膩
寶生 (Ratna sambhava)	迦葉波佛 (Kāśyapa)	寶手 Ratnapâṇi 羅怛那波膩
阿彌陀 (Amitâbha)	釋迦牟尼佛 (Śākyamuni)	蓮花子 Padma pâṇi 鉢特摩波膩
不空成就 (Amogha siddhi)	彌勒佛 (Maitreya)	(?) Vispa pâṇi 毘濕波波膩

五禪定佛は密部の五佛なる明なり。五法王子の說は密軌に未だ檢せず。計るに佛、金、寶、蓮、業、五部を代表せる菩薩なるが如し。金剛手寶手蓮花手の名は密軌中數之を見れども、毘濕波波膩の名は未だ之を見ず。寶印の梵語は母捺羅 (Mudra) 或は毘瑟地 Visti (拳) なれば。密軌中の寶印手にもあらざるべし、密軌に精

密主」「諸如來都統」等の名あり。一切の諸魔を降伏して佛法の流通を妨げしめす。有情の惱害をなさしめざるは、實に此佛の力用なり。伐闍羅薩埵は「最上智」「上首」「五禪那佛統領」等の異名を有す。此兩金剛は非一非異の身にして、或時は一躰として阿提佛陀と云ひ。或時は二身を現して薩埵問を發して陀羅之を答ふる等、往往密經に見る所也。今兩者相互の關係を推考するに、陀羅は高く佛地の上にありて、下劣の人間と其關係大に隔絶す。縱使降魔度生を本誓となすと雖、人の祈願に應じて惠を垂るゝ事、最も難き所なり。故に別に金剛薩埵を現して此用に應ずるなり。此れは次に說く所の、五禪那佛の下に至りて、自ら明ならむ」

伐闍羅薩埵は前に云ふ如く「五禪那佛の統領」なり。今少く所謂「五禪那佛」に付き其一班を述べん。五禪那佛（Pantcha dhyâni Buddha）は、或は之をアヌパーダカ（Anupâdaka）（西藏 Brdzus te skyespa）と稱す。是れ人間に出現して說法する摩奴史佛陀（Manushi buddha）（人佛）の本地として。淨土に住するものなり。即ち本身は淨土にありて、其化身は人間を度す。例せば禪那佛の一なる阿彌陀は、淨土にありと雖、其摩奴史佛は旣に世に出でゝ、大に人間を濟度せしが如し。三千年前の釋尊は、方に禪那佛彌陀の跡を垂れて此世を度したるに外ならず。而して禪那佛は人佛を現して人を救ふのみならず。又其禪定の力に依りて、法王子禪那菩薩（Dhyâni Boddhisattva）を現出し。其現したる人佛入滅の後、后佛出世するに至るまで、度生濟世の事を掌らしむ。阿彌陀の法王子は、阿婆嚕紇帝濕伐羅（Avalokitesvara）（或鉢曇摩鉢尼 Padmapâni　西藏 Chenresi 觀世音或執蓮華）なるが如し。

と云ふ。」

四、觀を修し戒を持ち咒を持すること至誠なれば、悉地 Siddhi（西藏 Dngos grule）を成滿して、微妙不思議の力を得。病を除き災を攘ひ、壽を延へ福を致す、世間利益、惡魔を伏し佛天の呵護を得、疑を斷じ正見を開く出世の功德、兩ら完からん。然れども其至大なる利益は、生死輪廻を離れて阿彌陀佛の淨刹に往生するにあり。西藏人の念誦する目的、方に此にあり。

五、密教に關係ある諸天善神極めて多し、今略して其名のみを揭げむ。

五大明王（Kunga gyalpo）

一、ビハル（Bihar）

二、チョイチョング（Choichong）

三、ダルハ（Dalha）

四、トクチョイ（Tokchoi）

五、ルヴング（Luvang）

四大天王（Gyalchen Zhi）

龍　王（Klu）

執金剛神（Chakna dorje）

なる人の指導を乞ふ。

二、觀法を修するに、心を一境に留めしむ。此所觀の境を立るは、中論の無念無相にして觀所觀を別たざるに反す。修觀の順序は左の如し、曰く其の初極明の心を以て境に對する。是毘婆舍那（Vipasyana）（西藏 Zhinel-hagthong）なり。次て其心安靜なるに至る、是三摩鉢底（Sâmpati）（西藏 Vipasyana）なり。是に四級あり。第一に觀漸く明なるに至れば、諸法の眞理を洞見し、隱伏せる聖力祕密立に現前す。之を見道（西藏 Thonglam）と云ふ。修煉功を積て第二の頂 Mūrdhan（西藏 Tsemo）。第三の忍 Kshanti（西藏 Zogpa）に入り。終に第四の世第一法 Lokattaradharma に達す。

三、日常の行法は陀羅尼 Dhârani（西藏 Zung）を誦するにあり。陀羅尼は神祕の語或は文句なり。此陀羅尼は其數甚多し。或は長なるあり或は短なるあり。其最も短なるは單一語なるものあり。金剛薩埵の陀羅尼は、唵伐闍羅、瞿魯、鉢曇摩、悉地、吽（Oṃ vajva guru padma siddhi huṃ）或は唵、噁、吽 Oṃ aha huṃ なり。觀音の陀羅尼は唵、摩尼、鉢曇迷、吽（Oṃ mani padme huṃ）執金剛神は唵、跋斫羅、鉢尼、吽（Oṃ vajra pani huṃ）の如し。此皆無量の功德あるものなり」

唯陀羅尼を誦して利益あることは、一切法は空にして名躰不離なるに由る。法本無實名を設けて假に存するを以て也。故に叉手指を屈伸連結して、物形を模するも祕密の益を得べし。之母陀羅 Mudrâ（西藏 Chakja）と云ふ。此印契亦修法に隨ひて種々の別あり。陀羅尼及印契の用法を廣說するもの、之を儀軌 Tantra（西藏 Gyut）

異ならされは今略す。無量光佛 Am'tábha（西藏 Odpapagmed）或は無量壽佛 Amitayus（西藏 Tsepagmed）。是處にありて說法し、常に一切衆生を拔濟す。此國に生れんと欲せば、諸善功德を修し、諸佛の名號を唱へ、特に阿彌陀佛の寶號を念ずべし。

西藏淨敎の一般此の如し。要之、往生極樂の旨、顯密を通じて甚廣しと雖も、本願深重の妙旨に至りては、未だ知る所なきが如し、佛願の廣大を說き、淨敎の醇なるを敎へ、以て西藏を導くべきもの、吾學友會（淨土宗學本校）の諸兄にあらずして誰ぞ。

玆に揭ぐる繪圖（本書省略）は。西藏グナリ・コルレャムより得たるものにして、右部は阿彌陀佛の像、左部は金剛薩埵の像なり。金剛薩埵は周圍諸天明王ありて待し、彌陀佛は輪王七寶を以て莊れる蓮臺に座す。左右に二の脇侍あり。

三　宗　派

已上敎理の一般を說けり。將に略して西藏現在の宗派を述べむとす。

西藏宗派の起源は、大改革家札克巴よりす。此人僧風を嚴にし敎義を一にし、黃衣を着して舊來の紅衣を着するの僧と特にせり。これより諸派競ひ起りて、互に門戸を張りて別立するに至りぬ。今現に九派存す。

一、ニキイグマパ派（Nygmapas）最古代の一派にして、グナリコルシャム・ラダック等の僧多く之に屬す。

梵　天（Tsangpa）

迦利帝母（Lhamo）

餤　王（Shinje）

其他火天福神等、枚擧するに遑あらず。此等天神を總稱して。ドラグシェド（Dragshed）と云ふ。

〔第五〕　淨土宗

西藏の彌陀佛に因緣深重なる。前屢說きたる如し。中論は二道を立てゝ西方を敎へ、密敎は禪那佛を說きて彌陀を此土に尤も緣あるものとなす。西藏現に淨土の一宗を別立せずと雖も、敎理上より見れば、確に之を別立して論ずべきものたるや明なり。故に今之を別開して、其一般を見んと欲す。

西藏の聖典中、淨土を說くもの實に尠少にあらず。其最も重なる者は。マニカムブム（Manikambum）及オドバグメド・キヰシング・コド（Odpagmed Kyim Shing Kod）（阿彌陀佛國建立）等とす。」

極樂は形ありと雖も無爲涅槃の國なり。聖者言へるあり「此世界は煩惱ある故に、有形に於て苦を思ふ。極樂は煩惱なし。形ありと雖も形あるを覺せず。猶病あるの人は、肺肝腸胃に痛を生じて、其有を苦とすれども、健全なるものは肺肝腸胃あるも、之を覺せず」と。說得て妙なりと云ふべし。

極樂は梵にスクハヷチー（Sukhavati）と云ふ。西藏（Devathan）デヷチャンと唱ふ。至幸の義なり。聖典に曰く「淨國榮光あるのみ」と。其國の莊嚴功德の相は、マニカムブム之を說く甚だ詳なり。事毫も觀經等の所說と

教義一章。項を分つもの四、支條相依りて略教林の粹を描かんことを期せり。然ども凡筆惡畫。固より丹青の法に適はず。布置多くは宜きを失す。文辭雅ならず參照精を欠き、粗笨滅裂、毫も見るに足るべきなく。疑訝すべきもの、研究すべき所、愈出でゝ筆路益澁晦す。脊上の慚汗。何ぞ啻衣を濡すのみならんや。唯希くは世、教界の風光を賞して其幽趣を解するの士、幸に此一幅の惡畫に依りて。崑崙雪嶺の間、一大勝景の横るを知り。親く西藏の原本に就きて委曲の觀察をなし、以て予を誨ゆる所あらば、則其幸何ぞ獨り予が蒙を開くのみに留まらんや。眞に佛門全躰の度なりと言ふべし。嗚呼瑜伽中觀の旨、華嚴般若の經、嚴然として彼に存じ。淨教や密乘や。窺ふべく研むべきもの。實に歷然たり。檢討百端せば、何ぞ千重の疑關を打破して、萬古の妙義を闡發するの快なからむや。昔クソマ・デ・キョエロョエス渺たる一異教徒の身を以て、單軀西藏に入り。苦學十年發明する所甚だ多く、其雄篇大作。後代に傳へて不磨の光輝あるを見る。堂々たる皇國の佛教徒、此の昭明の世に生れ、此教乘研究の急たるに當り、豈に遂に一碧眼の外教徒に及ぶ能はずとせんや。嗚呼眞に及ぶ能はずとせんや。

第三章　教式

前章既に教義の一斑を說けり。今更に進んで其實行上の作業、即教式に付きて略述するあらんとす。蓋し諸宗

往古傳來の支那の法式を守り、大藏中に存せざる一種の祕密儀軌を有せり。

二、ウルギェンパ派（Urgenpa）鉢曇摩三伐婆の徒衆之に屬す。又最古なるものゝ一なり。尼波羅に境せる諸部此宗を奉ず、主として彌陀及其祖師を唱念す。

三、カダンパ派（Kadanpa）ブロムストンの所立にして、唯戒法を持す。慧を顧みず。

四、サクャアパ派（Sakyapa）其祖師教義未詳、已上三宗共に紅衣を着す。

五、ガルダンパ派（Galdanpa）此名はラッサ府のガルダン大寺より起りたるものにして。札克巴の建立せし所なり。一に其遺教を奉ず。此派は黃衣を着し、門徒西藏に多し。

六、カルギャユトパ派（Kargyutpa）唯經のみを正なりとし、律論を顧みず。紅衣を着す。

七、カルマパ派（Karmapa）印度の施設論部（Karmika）に等し。

八、ブリクングパ派（Brikungpa）東西藏のブリクング寺を本山とするが故に此名あり。札克巴の一派にして黃衣を着す。

九、ブルグパ派（Brugpa）此派は祕密教なり。東西藏のセラに、天より降れる金剛杵あり。之を其教の本尊とす。紅衣を着す。

已上九宗の外に。ボンパ（Bonpa）なる一宗あり。之れ古より佛教を奉ぜざる者の一團なり。今は其教義に頗る佛教混入し、自ら佛教の一派たるが如き觀をなす。

pa）或は阿彌陀一定せずと雖も、通常は三十五懺悔佛（Tung Shakchi Sangye Songa）を禮拜するを多しとす。此懺悔の法は中論宗所依の寶積經及摩訶三昧耶經之を詳にす。陀羅尼を誦し經を誦するに。ラブサル（Rabsal）ズンヅク（Zunduk）等の名あり。此功德を以て諸の祈願をなすを。モンラム（Monlam）と云ふ。

西藏人は經咒を寫して、小塔中に藏め。之に轉軸を設けて、廻轉に便ならしめ、日夜之を轉ず。此れ其功德讀誦すると等しと信ずるが故なり。此の建轉塔をコォルテン Chorten と云ふ。信者は間斷なく之を轉ずること水車の如く、日々勤行の大部實に此廻轉にあり。故に寺院に至れば、幾多のコォルテンを備ふ。舊記に依るに。ラダックの一寺院は、三十萬のコォルテン存せしと云ふ。以て其數の大なるを知る可し。

二、月々の勤行

月々四回の聖日あり。上弦、下弦、新月、滿月の時これなり。或地には下弦を除きて三回となす。此日には肉食を禁じ殺生を設さず、但し基督敎の如く職業を休むことなし。僧は終日寺にありて。チュイソル（Tuisol）の式を修す。「灌沐祈願」の義にして。罪を洗滌し去るの意なり。

此式には釋尊の像を正面に飾り、其前に鏡を設けて佛像を映せしめ、水瓶より水を鏡面に流す。鏡の下に盤ありて此水を承く、懺悔を修する人は、此水を以て其身を洗ふなり。

三、年中の敎式

二月一日は新年を迎へて、僧俗共に佛陀に感謝の式を擧ぐ、

教各固有の教式あり。概するに複雜記し易からざるを常とす。時に西藏佛教の如き、祕密其實行上の大部を占るものにありては、教式隨て錯綜微密。若し追一辨し來れば、是日も足らざらむ。故に今大躰を左の三項に括て、聊か其梗概を見む已耳。

第一、通常教式

第二、特殊教式

第三、殿堂及其付屬物

第一、通常教式

是項下は。西藏佛教者が、通常行ふ所の教式を列擧す。

一、日々の勤行

日々の勤行は、三回之を行ふ。其行業は佛前に香燈餅菓を供へ、幢幡を揭げ幔幕を張り、種々の讚歌を以て佛德を嘆し、又音樂を奏して讚歌を助く。或は經文を誦し、或は陀羅尼を念じ、或は懺悔を修す。日に隨て不同なり。

懺悔は西藏にソビョオン (Sobyong) と云ふ。諸佛の名號を念じて己れが罪を懺するなり。聖典に曰く「若人佛名を稱せば、其過去生に犯せる罪を淨むるを得べし」と。懺悔に念ずるの佛は、或は釋迦牟尼 (Sakya-Thub-

人之に當る。天神の數は十餘の多きに居り、惡魔人間、亦之に準して其數頗る多く、或は輕辯花言、惡魔の人を誘ふ所あり。或は左顧右眄、人善惡の岐に惑ふ所あり。或は電擊雷驅、天神の魔を伏する所あり。服裝概ね燦爛。假面多くは奇異。鐘鼓箇鑼、嘈々として之に伴ひ。頗る奇觀を呈す。特に天神の魔を伏するの所に至れば、失石亂墜、銃聲轟き劍光閃き、縱橫驅逐して快甚し。而して時に惡魔却つて天神を倒し、假面落ち僧頭露れて、一場の哄笑を來す事往々是ありと言ふ。此演劇は年內大祭の時に際して執行す。

第二　特殊の法式

特殊の法式は。時の如何に論なく、特別の祈願あるときは、之を行ふものにして、其種類極めて多し。寺院建立の時は、ビル明王を念じて鎭寺の法を修し。悉地を成就せむが爲には、特に祕密の大法を設け。運命調適。星宿供養の爲に、寶馬の法（Lungta）あり。惡魔消除の爲には、タリスマン・チヤンクポ（Talisman changpo）の式あり。或は祕密の形象プフルブ Phurbu を造り、一切の障を除き、又は天神の加被を乞はんか爲にツングダム・カントサイ（Thungdam kantsai）を行ひ。福神ドザムブトラ（Dzambhala）を念じて富を祈るヤンググ（Yangug）の法あり。藥師如來（Manla）を祈りて病を療するの法あり。葬式（Shid）には地神摩喉羅迦（Ma-hôraga）を請して地を淨め、文珠菩薩所傳の葬法を修行し、冠婚出生、各皆嚴儀ありて複雜微妙。一々記載せば十年を盡して尙足らざらむ。故に今左に護摩の法を揭げて、之を諸儀式の代表となさん。

四月十五日は釋尊入胎の日にして、禮拜を行ず。
七月十五日は穀物收穫の日なり。田を祭り祈禱を行ひ、盛大の法式あり。
同二十五日は札克巴入滅の忌日なれば、大法會を執行す。
此他年内にて執行すべき嚴儀は、第一に斷食式第二に宗教演劇なり。
斷食式は西藏にニュンゲ（Nyunge）と云ふ。年内必二回あり。觀音菩薩報恩の爲に修す。菩薩は實に世界の守護者にして、二佛の中間に衆生を濟度するが故なり。此法式は四日間にして、俗人は午後より身を淨め念珠を持して入るを許さる。僧侶は漸次に飲食を減し、經を誦し戒を受け訓誡を聞き、第四日に至て全く飲食を遏め、無言にして觀音の呪を念ずるのみ、第五日の日出に至り、長老の許を受けて初めて檀越の供養を受く。其詳細の事シュラギントヴイト記する所ありと雖、今繁を恐れて省く。
宗教演劇は西藏語にタムビンシ（Tambinshi）と云ふ。「訓誡の幸福」てふ義なり。蓋し愚蒙教理を解する能はざるものの爲に、且く演戲によりて、勸善懲惡の道を了せしむるの法なり。アラカンの地亦此法あり。歐洲にありても、中世のミステルェス（Mystères）モオリテス（Molatités）の如きは、皆宗教演劇にして、教理を歌舞の中に寓したるものなり。
此戲曲の役割は、天神、惡魔、及人にして、脚色は惡魔人を誘惑して諸惡を行ぜしめんとするを、天神之を救ひて惡魔を退治するにあり。事レュラキンヴイト記す所甚詳也。天神は大抵高僧之に扮し。惡魔及人は平僧及俗

修す。燔爐三角形にして黒色なり。修法の僧黒色の衣を着す。爐底火大の種字「藍」(Ram)を書す。

已上は護摩供の略說なり。密軌に精なる人。幸に彼此を校量せられんことを。

爲に燔爐の圖を揭く。(本書略之)

上端に立てる人は。是修法の僧なり。此圖西藏のシキムより得る所に係る。

是他占星術、卜筮法あり。半は支那傳來にして。十干十二支八卦等を用ひ。頗る複雜を極む。其吉凶禍福の計算表等。珍奇のもの多しと雖も。今所要にあらざれは。是を他日に讓る。

第三　殿堂及其付屬物

西藏の殿堂は。佛房佛殿の二に分る。僧房は西藏にゴムパ(Gompa)と云ふ。寂靜處の義也。建築法は甚だ高くして壯麗なり。其屋上には幡を飜し尖塔を設く。其屋材は或は木竹を以てし。或は土石を適用す。周圍には花園ありて、花卉香を吐き、樹木森然として頗る淸閑なり。其最も多きものは柳樹にして。到る所の僧房悉く之を見ざるなし。而して凡そ僧房あれば、必ず佛殿ありて、其主要なる部分を占むるなり。

佛殿は西藏にルハクハング(Lhakhang)と云ふ。其外觀大に他の佛教諸國の風と異なり。他國にありては佛殿概ね美麗を極め、特に緬甸の如きは其彫刻の美、人をして恍然たらしむるものありと雖、西藏に於ては之を見

梵語護摩（Homâ）西藏チンスレグ（Chinsreg）或はスレクパ（Sregpa）と云ふ。燔祭の義なり。此れ災を攘ひ福を求め、罪を淨むるが爲に修するものなり。

護摩の爐は、其祈願に隨ひて方なるあり。圓なるあり。其色又一定せず。之に木或は綿を燃し。其祈願に應じて定まれる供物を燔き、香油を注ぎ秘咒を誦す。其本尊は火神メルハ明王（Melhagyalpo）を常とす。秘咒は概ね薩縛、阿祇尼、達羅、藍、藍（Sarva agne dzala ram ram）と誦す。護魔の法。大別するに四種あり」（不空の譯なる「金剛頂瑜伽護摩儀軌」にて五種に分てり。息災、增益、降伏、鉤召、及敬愛也、前四種は今說くところと殆んど同じ。讀者乞參照焉）

第一、ズヒバイチンスレグ（Zhibai chinsreg）平和燔祭。是疫病兵亂等の災を伏し。罪障を滅する爲に修す。死あるときは必之を行して。生前の罪業を淨盡するなり。燔爐は方形に。上部は白色下部は赤色なり。爐底に「藍」（Lam）字あり。地大の表なり。修法の僧は其衣の色。燔爐と同じきものを被る」

第二、ギャアスパイチンスレグ（Gyaspai chisreg）豐富燔祭。是收穫の饒。財產の多を願ふとき修す。燔爐黃色。形弓の如し。其底空大の表字「琰」（Yam）を書す。僧被る所の衣又黃色なり」

第三、ヴンギ・チンスレグ（Vangichinsreg）威力燔祭。是權勢を增し戰陣の勝を祈るとき修す。爐圓くして赤色なり。修法の僧衣又爐色の如し。爐底水大の種字「鑁」（Bam）を書す。

第四、ドラグポ・チンスレグ（Dragpochinsreg）威怒燔祭。是れ惡鬼邪神を責罰して。非時死を脫する爲めに

占星術を掌るの神なり。

第四章　教　制

一區佳勝の古園あり。往て之を訪ふや。必ず先園の由來を討ねて盛衰の跡を弔し。次で眼を放つて縱に泉石花樹の秀を賞觀す。而して後一々の樹木を撫して其配合の序あるを知り。箇々の泉石に吟して其布置の法あるを察す。大觀此の如くして了れば去りて園主を叩ゐて、審に栽培の術、洒掃の要を問ふ。是遊覽家の常に爲すの法なり。西藏の教園に遊ぶ。亦何ぞ此の如くならざらむや。第一章は其由來を討ね、盛衰を以稽ふべし。第二章は中論の泉、瑜伽の石、放眼之を賞し。密教の樹、淨教の花。集眸之を翫ふ。第三章に至るや、方式を論じ儀典を明す。尙夫樹木泉石の配合布置を見るが如き已耳。西藏教園の大觀此の如くして了れり。今將に其主人を叩ゐて園を護るの法を問はんとす。所謂教園の主人なるもの。葢し僧侶にあらずして何ぞ。而して其栽培洒掃の法は、此を其教則僧制に比すべきにあらずや。第四章教制の說く所此にあり。

（一）西藏教制の起原

第一章に述べしが如く、紀元八世紀チスロング・デ・トサン王出でゝ大に佛教を赫揚し、僧侶の法規を定めたり。是を西藏教制の起原とす。札克巴の著ボドヒ ムルに曰く「此王は僧侶に確然たる憲章を與へて、其階級を分

るを得ず。唯其庬然として大に、嚴然として偉なるものあるを見ん已耳。

佛殿は方形に造り、北方は靑く南方は黃に、西方は赤く東方は白く塗るを常とす。而れとも時としては四方唯白壁のなるみあり。內部に入れば、三柱ありて堂内を界し、柱上に樂器を懸け幾多の小袖像を畫く。中央には佛像あり。前に壇を設けて五色の扇を供へ、種々の供物を安す。正面に一面の鏡を備へ。左右に美麗なる絹扇を垂る。佛壇の下高坐あり、其前には孔雀の羽をもて莊れるもの舍利塔、金剛杵、寶鈴を置き。兩傍には經藏ありて聖經を集め、コルテンありて輪轉に便にし。無數の佛像、神像、其間に羅列す。左右の壁には釋尊一代の事蹟、天神降魔の事等を記す。莊嚴大抵殿堂と異ならず。

殿堂の付屬物として主要なるものは、コルテン（Chorten）及摩尼（Mani）なり。コルテン其字廻轉塔と同じけれども、今は印度の卒都婆と同じく、佛牙佛齒經卷を藏し。又興隆佛法の爲めに立るものなり。其高さ普通八尺より十五尺に至る。然れども時として四十尺の高さに達するあり。石造を常とす」

摩尼は元寶珠の義なりしも、西藏にては諸願を滿足する爲に建る一種の石壁の名とす。此壁は概ね幅六尺高四尺のものを法とすれど、時としては非常に長きあり。カンニングハムはレーよりインダス河に達する、二千二百尺の摩尼あるを記せり。其表面には種々の咒、佛號聖者の名等を刻す。

玆に掲ぐる者（本書略之）は十一面觀音、及びチョイチョシ明王の像なり。菩薩は西藏の守護者にして、明王は

次に大寺院に住するものあり。此又喇嘛と云ふ。蓋し喇嘛の語、始は首長にのみ用ゐしが。今は一般の僧侶に尊稱として之を呼ぶに至れり。此の如き大寺に住するものをクハンポス (Khanpos) と名く。其貴きものはクナリ・コルシャムのツォルリング寺、ラダックのユル寺等に住するものなり。此クハンポス住寺の年限は三年乃至六年にして。達頼喇嘛の任命する所なり。

寺院に住職する能はざる平僧の中にて上なるものブドザド (Budzad) と云ふ。法會修行の際讃歌音樂を管理するものなり。次でゲブコイ (Gebkoi) あり訓誡教諭を掌る。此他一般の僧侶は惣してゲンエム (Genyen) と云ふ。又女僧ありゲムエムマ (Genyen-ma) と稱す。又山間に隱遁して行を修する僧あり」

已上の外に一種特別の階級あり。異樣の服を着し妻を娶ることを許され、卜筮占星等の事を專務とす。之をトシクハン (Tsikhan) 占星者チヤクハン (Chakhan) 告運者と呼び、尊稱してチョイチョング (Choichong) と稱す。是チョイチョング明王は占星卜筮の神なるを以て此名起れり。此等の僧は種々の幻術を行ひ、火を噴き刀を呑む等の技を善くす。其上首はラッサ府のガルマキキア寺に住し。チョイチョング明王の應化なりと尊ばる。

(三) 僧律

西藏僧侶は他の佛教諸國の如く、二百五十戒を持す。戒本は輯めてカンジユル中の律藏に存す。英儒ハーデ、佛儒ビユルノフの著に其詳細の說明あり。然れど其最も重き禁誡は、女犯及畜財にして、札克巴已來堅く此法規

てり」と。然れども現代に傳はれる種々の僧制に至りては、概ね札克巴の制定に係れり。彼の僧長政治の如きも、亦實に源を此に發したるものなり。事既に「教史」に說きたるを以て今略す。

（二）僧侶の階級

西藏の僧侶の元首に位して權勢比なきもの、之を達賴喇嘛（Dalai lama）とす。達賴は蒙古の尊號にして大海の義なり。其德の廣大なるに取る。喇嘛は首長の義なり。此喇嘛は單に宗教上の首長なるのみならず、又西藏政治上の主權者なり。達賴喇嘛の次ぎ勢力あるは班禪喇嘛（Panchen Lama）也。班禪は師の義なり。之に次で宗教上尊崇を受くるものは達磨喇嘛（Darma Lama）とす。是札克巴の法統を續けるものなり。西藏人は達賴喇嘛は代々觀音の化身にして、班禪喇嘛は彌陀の化身なりとなせり。達賴喇嘛を選擧するの方法は、其初めは高德相集り種々の方法を以て小兒を相し、其非凡の才德ありと認むるや、之を法嗣となすなり。其詳密の方法はフック（Huc）の日錄に載せ、又タルナウルの紀行に出で、洽く人の知る所。カーラキル「英雄崇拜論」の初めにも之を引用したり。然るに十八世紀の終に至り、其方法は西藏貴族に就きて三人の小兒を選み、之を北京宮廷の金瓶內に納れ、抽籤を以て法位の相續者を決す。タイムス新聞一千八百八十八年七月十五日の紙上に「西藏の大喇嘛は如何して選ばるゝや」の說あり。甚詳細なり。ウキリアムスの「佛教及婆羅門教」之を引く。知らむと欲せば往て見よ。

を使役して畊耘し、之より大なる收入あり。又或寺にありては神符佛像を賣るあり。甚しきに至りては、羊毛麝香等を販賣して收入を圖るものあり。僧侶の腐敗も此に至て極れりと言ふべし。

(六) 飲食衣服

食物は乞食するに隨ひ、何種と雖も之を妨げず。然れども肉を食するを禁ず。喫煙は公然之を許し、酒は飲むを得ず。但し藥用と稱して往々之を用ゆ。通常の飲食は、米牛乳茶を專らとす。俗人は祭日の外肉食を許す。或地に於ては俗人と雖魚肉を禁ずる所あり。

衣服は印度傳來の正服の外、種々の服を具ふ。此れ地寒くして、單衣以て身を防ぐに足らざれば也」

一、帽及頭巾。帽巾は二重の帛より成り、中間に秘密呪を書せるものを入る。甚大にして頭を覆ひ、兩邊は垂れて耳を隱す。蓋し高地の寒氣を防ぐが爲なり。熱時及雨時には、藁稈帽の大なるを被る。其の形は支那の笠に類す。又一種の冠あり六角にして寶玉を以て莊るものあり。之をナゾングズハ (Nathongzha) と云ふ。頗る羅馬教僧正の戴く冠に類す。ブータン及シキムの地は、一切帽を被らずして頭を露す。

二、內衣及裙は殆ど支那と異ならず。股引は厚帛を以て造る。其製西洋の「サルマタ」に似たり。

三、法衣は西藏にてヤゴイ (Yagoi) と云ふ。上衣の義なり。僧侶の正服にして羊毛又は布帛等より成り、長さ一丈乃至二丈に至り、幅は二尺乃至三尺に至る。左肩を覆ひ右腋の下を過ぎて右肩を露し著す。

を守り、犯すものあるときは嚴罰に處せらる。而るに高貴の僧にありては、公然結婚して人怪まざるもの往々之あり。夫の法主達賴喇嘛の如きも、婚姻を許さるゝものなり。然れども法主の權は子孫に傳ふることを得ず。又畜財の禁に至りても、之を守るものは唯平僧に過ぎず。大寺は土地牛馬珍寶を所藏し、幾多の錢庫を有することゝ今は通常となれり。

（四）特權及度僧

僧侶は租稅を免ぜられ公役に服することなし。常に社會の上流を占む。

西藏に於て人其長子を僧とするの風あり。古代は度僧の法一定したりしも今や其法規なく唯紛々として、日一日圓顱の增加するを見る已耳。然れども或地に在りては、僧たらんと欲するものは、必らず數百金を法主に出すの制あり。

（五）僧侶の收入

僧侶の收入は乞食、供養及修法の三よりす。乞食は槪ね穀物收穫の時に於てす。此時に至れば僧侶群をなして村落田園の間に出入す。供養は大祭執行のとき、信徒の捧る所なり。修法は冠婚のとき、葬儀のとき、病氣のとき、俗人の依賴に應じて種々の祭典をなし、以て謝儀を受くるなり。此他大寺にありては田あるか故に、平僧

して其多きを知るべきのみ。
西西藏に於ては、ラタックの人口十五萬八千。而して僧侶一萬二千人なり。人民三十人に付て僧一人の比例とす。スプチーにありては、人口一千四百十四。之に對して僧百九十三人あり。人民七人而して僧一人あり。以て其多きを知るべきなり。是今より四十年前の計算に係る。
此他西藏領のシキム・ブータンの如き、僧非常に多し。而して其爲す所何事ぞ。高尚の教義は之を高閣に束ねて、徒に卜筮幻術の雜技に走り、懶惰昏沈、唯安逸を求めて弘教の策を講ぜず。法規潰廢、教運否塞して、敢て之を顧みるなし。今に當りて第二の札克巴を出すなくんば。西藏の佛教は遂に亡びん哉。噫。

寒燈幾夜。揭げ盡して此稿旣に成る。卽修文訂字、壁上の亞細亞全圖を指點して、西藏の地理を觀察す。撿して崑崙を過ぎ、滿淸の本部に入るや。遼陽城の邊、山海關の畔、劍光嚴霜の白きに和し、炮火大雪の皚々たるに映し。意氣自ら毫快なるものあり。依て想ふ。今や皇國振古の壯圖を立てゝ、絕世の快事を演ず。男子此間一身を筆墨に勞し、膝を抱いて孤燈に對す。迂愚寧ろ慚死せざらむやと。旣にして復謂ふ。沙門自ら沙門の法あり。何ぞ他の攻城野戰の武勳を羨まん。刀刃を揮て、百戰敵を鏖するは武夫なり。砲彈を排して、雙手平和を策定する。方に沙門の業に屬す。北京の堅城重圍の中に陷り、滿淸の朝廷降を吾軍門に乞ふの曉に至り。十八省四百餘州の黎民をして、明に吾皇の至仁を了せしめ、吾國の大義を認めしめ、永く區々睚眦の怨を消して、長に東亞平

四、靴は漉毛より成り。紅白の二種あり。靑錄を以て之を莊る。底は二重にして或は革を以て造る。頗る美麗にして且つ實用に適す。

（七）僧侶の法具

一、念珠。西藏語にテングパ（Thengpa）と云ふ。念誦に必要なる具なり。其數一百八顆大藏カンジユルの部數を表す。俗人の用ゐるものは。三十乃至四十顆を常とす。其珠は木石を普通とし、貴きものは聖僧の骨、及種々の寶石を以て造る。此れに針、耳鑷、小金剛杵、釘拔等ありて付屬せり。

二、護箱。西藏語にカニユ（Ganu）と云ふ。其形無花果葉に造るを常とすれども、或は方あり圓あり。中に佛像聖者の像、或は女神ドルジヤンの像を藏む。此箱を西藏僧は幾多連結して頸に懸け、惡魔を防ぎ功德を增長するか爲とす。

三、金剛杵乃至鈴。金剛杵は西藏語ドルジエ（Dorjie）と云ふ。密法を修するに缺くべからざるものなり。鈴は西藏にドリルブ（Drilbu）と云ふ。秘咒を誦し讃歌を唱ふるとき振ふものなり」（護箱及金剛杵、鈴の圖はウイリアムス氏の「佛敎及婆羅門敎」に出づ、就て見よ）

已上七頃略して敎制の大體を括る。終に臨んで西藏僧徒を擧げんとす。

東西藏に於ては、博士キヤムベルの表に依れば。ラツヰ府十二大寺のみにて。一萬八千五百人あり。其他は推

西藏佛教の二大本尊

（明治三〇、一佛教第一二二號）

去臘本誌（佛教）の卷首、揭ぐるに「西藏佛教二大思聖」の圖を以てす、彼は西藏教史を研究するに於て實に必要なる資料なり、今や其教理鑽仰上、聊か賦與する所あらむが爲に、更に二面の圖（本書略之）を挿む、是を「西藏佛教の二大本尊」とす、解を試みむとするに先西藏國佛教の如何なるものなるやを討尋するの要あり次で二大本尊が教中如何なる位置を占むるやを研め來らば卷首畫の解を則粗其責を塞ぐに足らむか。

一　西藏の佛教

西藏の佛教、唯其梗概のみを知了せむとするも尙且數十頁の紙幅を費すを要す、況や其詳密委曲なるものに於てをや、今は所謂「二大本尊」が關鎖ある所を示さむが爲に少かに其一滴を說くに止まるのみ、筆路の晦澁と、敍述の錯雜は偏へに讀者の海容を乞はむとす。

西藏佛教の一斑を了せむとするは先同國佛教の全體を彙類するより善きはなし、而も此彙類や頗る難しとなす所、何となれば、西藏佛教は一瞥するに錯綜紛雜、其縮綺繡錯の態は恰も一簇の秋林を望むが如し、紅葉綠樹、紛々纒絡、天下丹靑の大手腕あるにあらずむば、實に之を寫出せむこと最も難しとなす所也、支那將來の教相は

安の基礎を開くもの。是沙門か不朽の功德を樹立するの地ならずや。此功德や至大也。又何ぞ獨眼龍、樺將軍をして、獨り其名を擅にせしめんや。而して這般、大業の着歩は、實に西藏佛教を知るより善きはなし。蓋滿清の朝廷崇奉する所は、西藏教にあり。其强大の藩鎭。蒙古滿洲の諸部落。悉く達賴喇嘛を以て教主と仰がざるなく、延て直隷、山西、陝西、甘肅、四川の各省に及むで、其勢力洵に隆然たるものあり。乃ち深く西藏の教義を曉め、教勢を察し、諸喇嘛と交通し。共に大教を赫揚し、以て民心を撫さは、東亞平和の功、朞月の間にして成るべきのみ。其得る所。何ぞ啻に佛教々理の研究。佛教徒の大連合にのみ止まらんや。嗚呼眞に今は西藏佛教を研むべきの時なる哉。而して這般の心事。之を訴ふべきもの。唯吾が學友會（淨土宗學本校）の諸兄ありて存す。是予が不遜を顧みず、此拙稿を起したる所以なり。諸兄希くば益其靈腕を磨し其炳眼を大にし、以て健全に多忙なる新春を迎へむことを。明治二十七年臘八。筆を宗學本校の樓上。北窗風寒き處に絕す。

者大に共雄を西藏に爭ひ一盛一衰の跡は史乘之を載す、而して夫の西藏の大藏經なる「カージュル」「タンジュール」の兩藏中二宗の經論、頗る多し。

西藏兩藏の目錄は Choma: "Analysis of the Tibetan work Intitled kabgyur" "Abstract of the Content fo the Bstangyur" (Asiatic Research, Bengal Vol. XX) Wilson! "Analysis of the kabgyur" (Journal of the Asiatic society, Bengal. Vol. I.) にあり、亦支那所譯の經文と西藏の經文との存否を對照したるは藏中の「至元勘同法寶總錄」なり。

而して此等の四宗が僧徒の間に大に研究せられて盛威旺昌なりしと共に、一方には西方淨土の說及び密法ありて上下の歸嚮を受けぬ前者は有名なる西曆紀元の六世紀雙贊思甘普の時、既に西方淨土の莊嚴及彌陀觀音の爭を說ける Mauikhandum の著あり、極樂に關する經文續々に飜傳せられ中論亦二道を設けて西方往生を勸說せり、而して密法は、雙贊王の前既に夫の Gunakalandarguha の尼波羅國より來りしあり、次で各種の密教印度より入り、紀元七世紀蓮華生上師其他の諸哲佛教の興隆に連れて踵を接ぎ印度より來り、各種の密軌を飜傳し夫の時輪（Kalachakra）の誦出を見るに至り大に密教の隆盛を來せり、札克巴已前の西藏佛教は粗上の如し、卽ち一方には有部經部の小乘二宗及法相、三論の大乘二宗ありて主として學者の間に研究せられ大乘教は特に盛にし、他には西方淨土の說及密教ありて上下普く行はれて實行上に至大の勢力を占めたる也。

（2） 宗喀巴已後の佛教

印度流傳の性理と尼波羅より來れるもの、自國發達の教義と會し、或は古盛むにして今亡びたるあり、或は今旺昌を極めて古へ之なきものあり、大乘あり小乘あり、密あり淨あり、數多の宗派、碁布星列以て一大西藏佛教の全系を形成す、卽ち其眞正の彙類は一は教理の方面より横に之を分ち、他は歴史の方面より竪に之を論ずるにあらずんば到底其十全を期すべきにあらず、西儒の著書シュラギンドヴイド・キョッペン・チョーマ等往々其教理を論ずるありと雖も精細の彙類を設けたるものは未だ之あらず卽亦古人の教に從ふも今亦賴るべきなきの憾あり止むなくば左の計畫に從ひて其一斑を窺はむか。

西藏教史を研めて忘るべからざるの一大偉人は大聖札克巴（或は宗喀巴といふ）Jsonkhapa なり、彼は西藏佛教の大改革者として高く萬丈の光彩を教史の上に放つ、西儒往々彼を呼ぶに「西藏佛教の路愓（ルーテル）」を以てす、彼は實に實行方面に於て膏盲に入れる大腐敗を洗滌して新鮮の活力を與へたると共に、亦教理史上に興起せる大衝突、大撞着を融會調和して高遠なる教義を樹立せり、彼は教義上教制上實に忘るべからざるの偉人たる也、予今や便によりて試に大體の分類を札克巴已前及已後の二時期に分たむと欲す。

（1）札克巴已前の佛教

チョーマ（Choma）曰く「毘婆沙宗（Vaibhashilca）經部宗（Sautrantika）瑜伽宗（Yogachara）中論宗（Madhyamika）の四宗は毎に西藏學者の尊崇する所なり。

と、札克巴以前は此四宗西藏佛教に重きをなし、特に瑜伽中論（三論及法相）の二宗は甚だ盛大を極めて、兩

二　二大本尊——金剛薩埵、及阿彌陀

（1）二者の西藏佛教中に於ける位置

金剛薩埵は密教中の上首たり、阿彌陀は西方淨土の教主たるを以て、札克巴已前の佛教にありては二者信仰の兩大本尊たりしや固より言ふを要せざれども、玆に特に論ずる所以のものは二者は西藏及尼波羅の佛教に於ては特色の一として數へらるゝものにして、就中西藏にありては彌陀佛の信仰自ら他國と異なるものあるを以て特に之を論ずるの要あり、讀者は玆に於て、西藏の佛教が札克巴已後如何なる變化を閲し、且舊來の中論瑜伽等の宗が後來全く他の本邦支那に見るを得ざる一種の教理に其盛大を讓りたるを見るならむ、是則阿提佛陀の信仰及五禪那佛の說なり、二者を說き來らば、二佛の西藏佛教に於ける位置は更に明なるに至らむ。

（2）阿提佛陀（Adi Buddha）

阿提佛陀とは何ぞや、蓋し最勝第一の佛の謂なり西藏語に Chogi dangpoi sangye といふ、之を存在より見れば獨一自存のもの、之を時間より見れば無始を窮め無終に亘り、之を空間よりすれば無限無際にして十方に遍滿す、因緣を離れて因緣の本源たり、無相に卽して有相の大因なり、用や至大萬有皆其所造に出で、功や至高萬物悉其力に依る、湯々乎として得て名くべからず、名くべからざる所卽無量の名あり或は佛陀と云ひ、薩婆若と云ひ、普賢といひ、智頂といひ、勝者といひ、無勝者といひ、法王といふ、迦蘭陀毘諭訶の文に曰く『彼三德あ

已前略述せし如く、西藏に於ては、瑜伽中論の二大乘宗旺昌を極めしと雖就中、中論は其勢威遂に瑜伽宗を壓して、西藏の教權を掌握するに至りしが、一方には密教の勃々たる勢力を以て上下に津久し、念誦修法の條典を重ずるもの、見性觀理、慧解を尊ぶもの、事を主とすると、理を主とすると兩々相待して大衝突を生ずべきの秋に際せり、教理上此衝突を調して新に一宗をなしたるものは夫の大聖宗喀巴なり、彼は西暦千三百五十五年シャムエのアムドに生れ、同四百五十年を以て寂せり。

彼は密乘と中觀との衝突を融會せむが爲に Bodbimur, Tarnimmur, Aetaverike, Lamlim 等の大著を出し、博大の識豐富の學遂に一新宗を開きて、舊來の佛教を融合するの大快事を演じたり、而して其教式の方面に於ても大に戒律を嚴にし、教令を出し、僧風を矯正し、積弊を一洗して以て刷新の偉功を奏せり、此より、先づ舊來の佛徒と紅黄二衣の別を生じ、門下に達頼、班禪の二喇嘛を出して宗教政治の基を造り所謂喇嘛教の制度をも生じ以て現時存在する九派の細分を生ずるに及べり。

九派の事は友人能海君シュラギンドワイドより「反省雜誌」に投じたることあり就て見るべし予亦「西藏佛教一斑」中に之を記載せり。

西藏の佛教は大抵已前の所說を以て其梗槪を了すべきか、今更に進むで本題に入り以て「二大本尊」の關鎖ある所を論ぜむ。

推考するに陀羅は高遠絶妙、其關係下劣の人と大に隔絶す故に度生濟世、惠を垂れ恩を與ふるには自ら別に中間の身を現ぜざる可からず、是事は下項に說く五禪那佛の條下に至らば自ら明なるに至らむ。

卷首に揭ぐる金剛薩埵の圖（本書略之）は有名なる「西藏佛敎」の著者エミール・シュラギンド・ヴイトが其兄と共に西藏のクナリマルシヤムより獲て刊行したるものにして原圖の八分の一を實寫したるもの、薩埵手に寶鈴寶杵を取り、前後左右に、五佛十六尊及四金剛、歌嘆嬉舞の天女を列ねて、寶蓮華上に住するの圖を寫せり、蓋し薩埵が諸佛の總體、法界主宰なるを示せるの圖なり。

（3）**五禪那佛（Pancha Dhyani Buddha）**

五禪那佛とは阿提佛陀が路迦三惹那那 Lokasanfanana（世間退立）の深禪定に入り、其本具の五智を開發して發生せる五佛を指す、那摩僧祇底（尼波羅の密經の名）に曰く『彼五體五智五見を具有す、五佛の首なり、等者あることなし』と、亦曰く「彼一切佛の能造者、一切諸佛の母なり』と、其五佛とは阿提佛所具、法界體性等の五智より發したる毘盧遮那、寶生、不空、阿彌陀、阿閦の五佛にして本身は淨土に住し、各摩奴史佛（人佛）を化作して娑婆世界に下し、以て衆生を度す、而して此等の禪那佛は各其禪那の力によりて法王子たる禪那菩薩（Dhyani Bodhisattva）を化現し、前佛（卽摩奴史佛）涅槃して後の人佛出でざるの間、衆生を覆護して度生の事を主らしむ、例せば三千年前の釋迦牟尼は實に禪那佛彌陀の現じたる人佛にして、其禪那菩薩は卽ち觀音なるが如し、今五禪那佛、五人佛、五禪那菩薩の圖を作りて以て追次說明するの繁に代ゑむ。

るもの也、大頂也、一切色也、之に於て彼顯現す、彼自存の大覺者無上者大自在者なり』と、又曰く『彼自存自在者、圓滿無限の全相なり、四肢なく諸情なし、一切其模型也、而して彼模型あらず、彼一切法の形也、而して彼は卽無形也』と。

是等の證文は Hodgson; Essay s on Tibet and Nepal の證文を見るべし、大方閑あらば參照を乞ふ。他の濕婆餒淨富蘭那其他に倘適切の證文あれども、迦蘭陀毘喩訶は西藏にも存する最古の經故特に之を引けり。阿提佛陀は此の如きもの也、故に歐洲の學者は之れが宗義に有神的佛敎（Theiste Buddhism）の名を與へ（ウヰリアムス・エドキンス・ビール・リス・デヰッヅ等）クラーク氏は其「十大宗敎論」中一神的の傾向佛敎に存すと云へり、凡そ此等の敎理上の硏究及び、此觀念が發達せし歷程（ウヰリアム氏リスデヰド等の論ずる如き）如何は今論ずるに暇なければ且く略し唯阿提佛陀なるものが、法界の全體を名け、萬有の實體を指したるものにして眞言の大日（Mabaoailochana）に髣髴たるが如きは大に讀者の注意を乞はむと欲する所其同異及歷史的の關係の如きは、大に密家諸大方の一粲を仰がむと欲する所なり。

西藏の密敎に於ては此阿提佛陀を伐闍羅陀羅（Vajradhara）（西藏語 Dorfechang 金剛持）或は伐闍羅薩埵（Vajrasattva）（西藏語 Dorfesempa 金剛有情といふ、陀羅は「最勝佛」「最上勝者」「一切秘密主」「諸如來都統」「無始無終者」等の異名を有す、此兩金剛は其名二を分つと雖、非一非異の身にして、或時は一體として阿提佛陀と呼び、或は二身を現して、薩埵問を發して陀羅之に答ふるが如き往々密經に見ゆる所也、今兩者の關係を

の降生佛敎を護り、衆生を濟ふものなりとす、故に西藏に於ては彌陀觀音の崇拜甚だ盛むに、夫六字の咒、唵摩尼鉢特迷呼の聲は至る所聞かれざるなしといふ、以て其信仰の深きを知るに足らむ。

卷首の圖は「西藏佛敎」の著者が、前圖と同くクナリマルシヤムに獲たるもの、彌陀輪王七寶を以て莊嚴せる寶坐に坐し左右に二脇士ありて立つ圖亦全形八分の一を縮寫せり。

已上の略說を以て讀者は卷首圖の粗如何なるものなるやを了せむなり、若盡さむと欲さばシユラキンド・ヴイトの「西藏佛敎」ホツヂソンの「尼波羅及西藏に關する論集」ロツクヒルの「西藏佛傳」ライトの「尼波羅史」等を討究せられむことを。

一月上九夜、江東塵寰、俗客漸く去り氣少く暢ふる時、燈前漫に舊稿の記憶に存するものを亂書す、暗中、摸索するの感特に甚し、閑なく書なき所、固より止むを得ざる也、天下の大惡筆、字體疾風の亂麻を捲く如きもの、剞劂に上りて整然として讀者の前に現るるを得る、蓋し倖の甚しき者矣。

五禪那佛	五摩奴史佛	五禪那菩薩
毘盧遮那	拘留孫	普賢
阿閦鞞	拘那含牟尼	金剛手
寶生	迦葉波	寶手（虛空藏）
阿彌陀	釋迦牟尼	蓮花手（觀音）
不空成就	彌勒	淨手

ウヰリアムス氏は、之を五重の三位一體と呼べり、阿提佛陀の世界創造の事其他之に關して多趣なる事頗る多きも今は拙稿の他に讓りて之に言はず。

ライト「尼波羅史」五禪定佛、五人佛、五菩薩の圖を擧ぐ見るべし。

（4）阿彌陀佛

西藏には無量義佛を Jsepagmed といひ、無量光佛を Odpagmad と譯す、通途、後者を以て稱す、前に說く如く釋尊の本地とするが故に崇敬最も重く加之、西藏は觀世音の殊に恩を垂れて護るの地となすが故に彌陀觀音に對する崇拜は一層其深きを見る、前號にも粗記したる如く、夫西藏の君斯坦丁とも稱すべき雙贊思甘普王は實に觀音の化身にして其妃文成公主亦彌陀の青色光明より化現して西藏に佛教を興隆したるもの也、との說は、夫の摩尼カンプム之を說く甚だ詳也、而して夫大聖札克巴の如き、亦觀音の化身にして、代々の達賴喇嘛も亦觀音

べきにあらざれば唯茲に諸學者の一致する說を擧げて、精細の考究を多日に期せむとす、曰く此大史詩最初の構造は摩奴法典製作の後一世紀卽ち紀元前五世紀にあり、其後二世紀或は三世紀を經て現在の詩形となりしものといふ、卽ち其韋紐天の化身の談、及び佛教徒を惡鬼となし無神論者となし、百方之れが罵詈に關する談を挿入したりしが如きは大抵後期の構成に出づといふ。

予が見たる佛典の中にて「羅摩衍那」に關し記する所あるは新譯の大毘婆沙論なり同論の第四十卷に曰く——

復次爲顯契經義無量故、非如外典文多義少、或全無義、如羅摩衍那書、有一萬二千頌、唯明二事、一明羅伐拏刧私多去、二明羅摩將私多歸、佛經不爾、若文若義無量無邊（縮收二、八十五紙）

其他に尙一二箇處ありしと覺へたり、婆沙は有名なる迦膩色迦大王の時代に五百應眞の結集したるものにして、王の治世は西曆紀元の初年より凡そ四十年に至るの間なりとすれば羅摩衍那完成已後なるは明かなれども、其頌數を見れば殆んど現今の頌數の半のみ、固よりこの大史詩は現時種々の異本あれば、古昔に於ても、種々の異本ありたるべきは推度せらるべき所なれども、頌數のかく差異せるは頗る一考を要すべきこと也、謂ふに羅摩衍那はその所謂紀元前の完成後にても多少偈頌の增加を見たるなるべく、二千年間に幾多の頌數に變化を生じたるに非ざるか、そはともあれ、當時印度に同史詩の如何に廣く宣傳せしやは右の論文を以ても推察せらるゝことなるべし。

（付言）羅摩衍那の迦膩色迦已前戰荼羅笈多王朝に盛に行はれし事は、同王のとき希臘より使節に來れるメ

佛典中に出づる「羅摩衍那」及び其人物

大乘經典結集問題の一新材料として

（明治二九、八、佛教―第一一七號）

印度は古來より長篇の文學多しと稱す、二大史詩あり此中に立ちて燦然として異彩を放つ、一をマハーブハーラタと云ふ其頌二十二萬、蓋し世界の最第一の長詩也、第二を羅摩衍那と稱す、頌は二萬四千、此二者は夫の希臘のイリヤツド・ヲデッセーと兩雙の名珠、實に世界史詩の首魁を以て居る。

二史詩の說くところによりて、印度古代の習慣風俗宗教の信念等明晰に至りしや、洵に尠少にあらず、英人ホイラーは此二詩を基礎として其大著五卷印度史の第一第二を完了したり、今後者に付きて「蒐錄」の中少く記する所あり、今之を好機とし便に隨つて、此史詩の少く佛典に出でたるの箇所を擧げむ、是佛教歷史に關し頗る重要なる事實なるべしと謂ふ、但し予が涉獵するの佛典極めて淺し、故に其材の完からざるは固より責を辭せざる所、「討議」欄內を汙して、敎を大方に乞ふ切に之が爲に座す。

今佛典中此大史詩に關する文、及其人物を出す文を擧げ且少く考察を述ぶるに先ちて、諸大史詩著作の時代に付き一言せむと欲す、これ後來擧げべき所の文につき大なる關係を有すれば也。

羅摩衍那の年代に付きて精細の觀念を得んには、ヴエーベル、ウイルソン、マツクス・ミユーラー等の梵語文學史を精讀し、次でコールブルーク等諸學者の說を參照とせざるべからず、然れども今は固より斯る閑暇を有す

よ）罵れり、而してジャヴリ自身は、尼耶々學派の所説に精曉し一種の自由思想家として、佛徒を代表するものとなす、其他には夫の大夜叉王羅伐拏はまた婆羅門迫害者として多少佛教的傾向を有し、羅伐那部下の羅刹衆は佛徒を代表したるものなりと西儒の唱道するを見る、但し羅伐拏の佛教的傾向を有すと云ふは頗る疑ふべきことにして、彼は佛教に反する犧牲を行ひ且梵天をも禮拜したる事實、史詩中に存す、羅刹衆は犧牲の排斥者たるの故を以て圍陀の不信者たるの故を以て多少の佛教徒たるの資格は存せるも、未だ史詩の中明確なる記載あるにあらず、唯或は佛徒を暗示したるかの疑に留まるのみ、この他、夫の羅伐拏の宮中受樂の樣、世尊の狀に類するを以て佛教王の不道德を諷せしものと云ひ、大羅刹、クンバカルナが長時極睡眠の受樂を以て佛教の涅槃を刺りたりとなすが如きは、みな推考の説なる故、是非は檢討百端の上に非ざれば斷言するを得ずと雖、兎に角羅摩衍那の記者が無神論者現世論者を以て佛徒も見、佛徒を以て不信者を代表すべきものとなし、所有る不德義の行爲は都て佛教の影響なりとなすを詮示し、以て自已が信奉する教理を暗々裡に確固にせむと試みたるは、則ち動かすべからざる事實なりとす。

然るに玆に尤も怪訝に堪へざるは羅摩衍那の中に於て兇暴無道、他妻の掠奪者、道義の破壞者、所有る暴惡の結晶して成りたる夫の大夜叉羅伐拏が大乘佛經中にありて主要なる對告者の地位を占め居ること是也、乞ふ先づ左の菩提流支譯の入楞伽經の文を見んことを。

（一）　爾時婆伽婆、遙望觀察、摩羅耶山、楞伽城、光顏舒悅、如動金山、熙怡微笑、而作是言……彼亦應彼摩

ガスゼニスの之を聞き歸りて希臘に傳へ、其後紀元一世紀の頃羅馬トラジヤン帝の頃ある希臘人の記者は印度人はホーマーを摸擬して大詩を造れりと記せるにても明かに知らるゝ也。蓋し私多とヘレン妃との事蹟酷た相類する所あればなり、（ウキリアムス「印度の賢」を讀め）

已下佛典のこの大史詩中に出づる著名の人物に付き、記する所を檢討せむ、これに先ち予は讀者と共に、此大史詩が如何に佛教に付きて觀察するかを見るを便とすと考ふ。

第一に論ずべきは羅摩衍那の宗教觀なり、讀者も既に知る如く、羅摩衍那は梵語聖典の二大分類卽ち神託と人說の中、第二の第三項信仰論 Bhakti-'sastra の中イトイハーサス卽ち史詩としてマハーブハーラタと共に含蓄せらるゝ所にして、卷中の主人公羅摩は實に敬虔なる印度君子の模型として現はれたるもの也、而して夫のトリムリチー卽三神卽一の談、及韋紐の陀沙阿跋陀羅卽十化身の說等重要なる宗教觀念は大抵此史詩に於て其發達を認むべし、故に羅摩衍那は文學として光輝奕々たるのみならず、一種の宗教經典として至大の價値あるものなり、卽ち羅摩衍那は印度婆羅門教正統派の一種の神聖史傳なり。

是の如く、則ち其佛教に對する考察は自ら知るべきものあり、而して史詩中明かに佛徒を罵り且その標本を示せる所は僅に一箇所に過ぎずそは史詩の第二品アヨドフヤ犍度に於て羅摩が因明學者にして且高位の婆羅門なるジヤヴリの無神論快樂說、現世主義を唱道するを聞き、大に之を詰責して「佛徒は偷盜たるが如し、彼等の後には斷見外道卽ち無神論者あり」と（右ホイラーの抄錄より譯す、『印度の賢』中には韻文の譯あり、閑あらば見

已上出す所の文によりて讀者は定めて怪訝の念に勝へざるなるべし、蓋し楞伽經は、法相所依六經の隨一にして、其所說の深遠奧妙なるは學佛者の旣に知る所、而して此經が、羅摩衍那詩中の大惡魔を所被の機として、對告衆の重なるものとして、而も其宮殿楞伽城中に於て說かむとは寧ろ千古の怪事ならずや、（引文〔一〕）而して彼の兇暴毒惡、他妻を奸し他妃を奪ひ百般の害惡天人の怨憎を受けたる大夜叉が、楞伽會上に於ては如來の轉法輪を請し、且甚深の法門を聞きて「分別心の過を見、分別心の中に住せざる」底の大力用を得（引文〔二〕）及〔三〕）其終大慧等の諸大薩埵と歡喜奉行して退く（引文〔四〕）に至りては、實に奇怪訝の極と云ふべき也、然らば羅摩衍那に於ける羅婆那と楞伽に於ける羅婆那とは同名異體なるかと云ふに、其名の同じきのみならず、其所居の宮殿、も同じく、且大史詩中、毎に羅婆那の猛惡の相を寫すに用ゆる十頭、可畏の形は、また楞伽の文中に於て歷々として說出せられ（引文〔三〕）、また大史詩の中に於て、羅伐那が其幾多の妻妾を置き、捕へ來りし美人私多を幽閉したる、阿輸迦園（Asoka 卽無憂園）は、楞迦會上に於ては、光明現し、化佛出で、菩薩出現する精舍たらんとす、二者相較し來れば大詩史中の大惡魔と、大乘經中の善夜叉と同一體なることは殆んど疑ふべからざる事實なるが如し、而して密部の中に宋法賢譯の囉縛拏說救療小兒疾病經あり、夜叉王の神咒を說くを擧ぐ、此經に於ては、別に材料に資すべきものあるなし。

已上擧げ來るの事實に付きて生じ來るべき佛敎史上重要なる問題は實に楞伽經と羅摩衍那との編纂の前後何れなりやといふ事是也、一方より見れば史詩中に於て醜惡を極めたる魔王、印度人多數の蛇蝎よりも尙甚だ厭惡する

羅耶山、楞伽城中、爲羅婆那夜叉王上首説於此法。（第一請佛品）

（二）爾時羅婆那楞伽王、以都吒迦種々妙聲、歌嘆如來諸功德已、等（同上）

（三）爾時羅婆那十頭羅殺楞伽王、見分別心過、而不住於分別心中、以過古世善根力故、如實覺知一切諸論。等（此下に於て佛大に夜叉王と種々の法門を問答す）（同上）

（四）佛説此妙經、聖者大惠士、菩薩摩訶薩、羅婆那大王叔迦婆羅那、甕甘等羅叉……大歡喜奉行。（第十、總品偈）

また實叉難陀譯の大乘入楞伽經は流支譯の請佛品と云ふを羅婆那王勸請品と譯せり、同經中にて予が現在の材料となるべきものは左の一文なり、他は大抵流支譯と同じければ故に引かず。

（五）一一佛前、咸有羅婆那王、并其眷屬、楞伽大城、阿輸迦園、如是莊嚴、等無有異、（第一品）

求那跋陀羅譯の楞伽阿跋多羅寶經は、其譯頗欠略し、品數固より、流文、難陀の譯よりも少く隨つて流支難陀の第一品を欠く、故に羅婆那に關する事蹟は同經中に於てはまた之を檢せず。

英人ホツヂソンの蒐集したる尼波羅古佛典の中、同國那婆達磨即九法の一として尊崇せらるゝ楞伽阿跋多羅（Lanka vatara）を印度人ラーゼンドラーラ、ミートラの抄錄したるものを見るに Ravana came to pay his respect to the great personage（ラヴナ偉大の人にその尊敬をなさむがために來りぬ）の文あり其他楞伽城等の事を出す、詳細は、同氏著の「尼波羅梵語佛教文學」を見よ、而して、此の梵經は支那譯、楞伽經の原本たり。

「佛典中に出づる羅摩衍那及其人物」を補ひ、且つ大方の諸君に質す

(明治二九、一一、佛教第百二十號)

百十七號の紙上に「神雄救愛妃」の圖解を試みたるに因みて『佛典中に出づる羅摩衍那及其人物』なる一文を草し、教を江湖に乞ひぬ、後幾くならずして學友荻原雲來君より馬鳴の佛所行讃の中羅摩衍那に關する文あることを教示せられぬ。依て玆に謹で同君の好意を謝し、且予が獵涉の甚粗雜なりしの罪を補ふ。

1、佛所行讃五分舍利品二十八藏七、七七、羅摩爲私多、殺害諸鬼國。2、佛本行經七八王分舍利品三十一藏七、四二昔者華上子、號曰十頭神、堅固著色欲、緣喪沒身命。3、ビール氏英譯佛所行讃 Beat's Fo-sho-Pen-Tsan-King 東方聖書集、第十九、三三〇 Rama for Sita's sake killed all the demon Spirits.

1、は八王舍利を分つ時或る王の種々の例を引きて貪瞋痴の爲にさへ昔は多く生命を棄てしためしあるを、今無貪無瞋無痴の佛世尊のために爭で身命を捨てゝ其の遺骨を爭はざらむやとの言をなすを記す、今はそれが一例也、同所の文には夫の摩訶婆羅多に出づる般那婆(pandavas)の緣をも擧げあり。2、同讃の異譯なる本緣經の文は委細に夜叉王が私多の美貌に迷ふて其の身を失へることを記す、華上子は羅婆那の母を Pushpot katá と云へば其の子なりといふ事を示す十頭神は先の拙稿に楞枷の文其他を引きしが如く、夫の夜叉王の特徵たる Dasa

大惡魔を將り來りて特に之を神聖なる經典の對告衆となし、所被の機根となすの至愚なる大乘結集者あるべき筈もなければ楞伽は無論大史詩已前少くとも大史詩が其完全なる形を取りて婆沙にまで記載せられたるより已前に結集せられたるは明なるが如く、之を婆羅門徒が佛教を誹謗せむとの目的より史詩を造れりとの事實に徵すれば益此推測を正確ならしむるが如き觀ありと雖、亦退て一方を考ふれば或は楞伽夜叉の談は古昔より印度に存し、大乘經編纂者と婆羅門詩人と地方を異にし互に相知らず、一は之を醜惡のものとして詩材にとり、他は之を正法外護の鬼神として對告衆となしたるかの疑存し、且つ少く穿つに似、叉酷た穩かならざる考察と雖、大乘經編纂者の一種の狡智もて、特に婆教詩人の選べる醜惡の詩材を經典中に入れて其經典の古きを示せしにはあらざるかの觀なきにもあらず、故に該問題に關して、斷案を下すは佝予の能くする所にあらず、而して上の問題にして明なるを得ば、彼佛教歷史中に於て最も難しといふ、大乘經結集論の如き少くとも其一部を決するに足り、其他佛教史中重要なる問題に資する實に尠少にあらざるべきを信ず世の佛教史家諸大方願くば予に教ゆるに吝なる勿らむことを。

此夏、ホイラー氏抄譯の羅摩衍那抄錄を濫讀し、且つウヰリアムス著『印度の賢』中擧ろ所の摘譯を讀みて、楞伽及び婆沙の文に想倒し、結びて一團の疑となりて此篇をなし椎尾兄の乞ふに任せて匆々筆に從ひて漫書す、固より成說と云ふにあらず、唯我が疑ひを解けば足る、文字の醜陋と說述の頗滅裂なるに至りては大方の涵恕を乞はむとす。

十五日曉　壺月記

婆羅門哲學一滴

（明治二九、一一淨土教報　第二六九――二七一號）

小序

宗教學の講究は今や浩洋放肆の勢を以て學界の一大潮流をなし、歐米各國の諸大學悉く競ふて比較宗教、宗教歷史を討究して止まず。就中印度の諸哲學に至りては梵學の進捗に伴隨して今や大に學者の尊重する所となり、吠陀に優波尼沙土に光彩燦爛として千古無價の寶珠を現代に呈露せり。學界の大勢今や實に此の如し。宗教家たるもの此間に立ちて何ぞ這般の討究に怠ることを得むや。特に佛教徒にありては印度學に對するの責任他教徒に比して一層の重きものあるを見る也。見よ眞諦はその起信等大乘極致の論を譯するの次、僧佉の金七十論を譯するを忘れざりしにあらずや。また思へ般若等の聖經婆沙唯識等の大小乘論を譯して鐵硯穿たむと欲する遍學三藏は夫の吠世師の十句義を譯したるに非ずや。古德の微志思ひ來れば、印度學の必要の如きは辨ずるを待たざる套問題なるべき也。教報紙上教學欄を設くるの始めにあたりて、特に先づ此學を講じ、聊江湖に資せむとする蓋故ある也

總說

nana, Dasakantha 十頭なるを以て云へるなり。3、のビールの英譯は漢譯の佛所行讃をそのまゝ譯して他奇あるにあらねど愼重を要する爲に擧げつ。其後、不空の孔雀王經を閲す、佛法守護の諸夜叉將を擧ぐる中、實に羅婆那の名あり、卽ち玆に同經の三譯を對比して聊疑ふ所を、廣く江湖に問ふ。

1、孔雀王咒經中僧伽婆羅譯、成七、四九、羅婆那夜叉、住羅摩他國。2、孔雀咒王經中義淨譯、成七、六一曷羅婆那神、住在曷摩底。3、孔雀王經中不空譯、閏六、囉嚩拏夜叉、羅摩他國住。

羅婆那の名は明に羅摩衍那中の夜叉王を指せしが如し、唯玆に淺學解する能はざるは其所住の地なり、孔雀王經中、他名を以て充てあれば羅婆那の住居に局り獨架空の地名を設けたるには非ざるが如し、而して玆に少く注意すべきは、同經には楞枷會上に此夜叉王の住處とせる獅子州の摩羅耶山には別に分那柯なる夜叉將ありて住することと是也、是或は孔雀王經中の羅婆那は史詩中のものと同一ならざるもの感を生ぜさるにあらず、この疑は夫の羅摩底の位置明なるを得ば、自ら明瞭となるべきことなりと信ず、願くば印度の古典に精通せらるゝ博雅の君子解明に吝なる勿らむことを、且添て希ふ所は江湖の佛典に眼を注ぎ玉はむ人、若藏中其他に於て、羅摩衍那及其重要なる三人物に關する事蹟に付若檢出せらるゝの時あらば、『佛教』紙上に於て高教を玉はむことを。拙稿を補ふに付、且質し且懇禱す。

偈は實に第一部曼荼羅の讃文なり。旣にして神漸くに多く其供儀方式亦大に複雜を極む。是に於てか此等の儀式を明かにし其用を甄別するの要生ず。これ第二の婆羅末那の次で生ぜし所以なり。然れども人智は決して唯だ複雜なる祭祀典禮、及祈禱禮拜を以て甘んずべきにあらず。「我」とは何者ぞ、我何處より來りしか何處へ去るか、我と物との關係如何、我存在する世界は如何、如何に予は此の宇宙の神祕的歷史卽天地の剖判を解明せんか、是自然なるか神造れるか、將分子より來れるか、是等許多の大問題は雜然分頭百岐し來りて思辨また思辨を費し、考察更に考察を勞す。この考察の結果として現われたるもの則是第三部に位する優波尼沙土也。三者出興の次第旣に前の如し。則第一も第二も多少哲學的の要素を包み殊に第一者は幽玄深奧の偈頌、後來優波尼沙土發達の基をなせしもの往々之を見ると雖(梨倶吠陀の第十曼荼羅の如き其著名なるもの也)其哲理的觀念の縱橫溢出するは實に第三の優波尼沙土にあり。是實に婆羅門諸哲學の起源なり。

3　**優波尼沙土**　巳上の如きを以て現時婆羅門敎徒の吠陀を學ぶに二門あり。一を作業門(羯磨犍度)と云ひ、他を智惠門(惹那犍度)といふ。前者は主に儀式祭祀禮拜供養の作業により事の上より吠陀を研むるもの卽ち前の第一と第二とを學べば足れり。若夫神智の幽玄を觀察し祕密の奧義を思辨せむと欲せば必らず智惠門によりて吠陀を研めざるべからず此研究の方面專ら優波尼沙土に於てす。

優波尼沙土は其義或る一說によるに近座の義也。卽ち大聖者の側に座して眞理を研むるの義也。其製作の代尤も舊きは西曆紀元前の六世紀に存す。其數甚だ多し。現今吾人に知られたるものゝみにても尙一百五十餘種の多

（一）婆羅門哲學の起源

1　**婆羅門の聖典**　婆羅門哲學を陳述するにあたりて先知らざるべからざるものはその聖典なり。聖典の根本なるもの之を吠陀といふ。蓋し神智の義なり。婆羅門神學者は曰く是常一獨存の大梵より吾人に示現せられたるものなりと。此中其尤も古きもの西曆紀元前一千年に溯るものあり漢土飜譯の經論中には韋陀皮陀毘陀等と書するもの是也（三藏法數名義集等を見よ）この吠陀に四種あり所謂四韋陀論といふもの也。第一を梨俱吠陀といふ、歌詞以て諸神を讃美するもの也。第二を夜殊吠陀といふ黑白の二大部に分れて祭祀を明にす。第三を娑磨吠陀といふ儀式を書するもの也。第四は則阿闥婆吠陀にして咒文を記す。而して此等各左の三大部分に分る。

一、曼荼羅……偈頌を以て成る祈禱、贊文

二、婆羅末那……長行を以て成る儀式、禮典

三、優波尼沙土……長行式偈頌の秘讀、密義

2　**聖典發達の次第**　印度古代の民俗始め天地の壯觀に驚異し、水火の勢力實に盛なるに怖畏し、謂らく宇宙に諸神ありて以て是等の壯觀と此等の勢力とを現出する也と遂に火を崇めて火神阿隋尼となし、大雨沛然として至り霹靂震動するもの之を因陀羅神の勢力に歸し、暴風之れ樓陀羅の神のなす所となし日を崇めて神蘇黎耶とし月を蘇摩神と尊ひ風神を婆庾と號し、種々の贊歌を以て其威德を詠嘆し、諸の供養を以て其怒を慰む。是等の贊

卓然として今に異彩を放つ印度の哲學にして寧ろ其特點なからむや。既に特點なかるべからず。則其諸派を擧ぐるに先ちて少く是を論ずるの要ある也。借問す其特點とは何ぞ。今惣じて之を言ふ。汎神教的の性莫是也。蓋し汎神教とは學語にパンシエズムといふ。此語は固希臘のパン（全體）デヲス（神）の二語に教義の義あるイズムの一語を添加して成りたるものにして、宇宙の全體卽神なり。宇宙神より發して神に歸し、生滅變化する萬法は皆一大本源の相狀に他ならずと計するの教に名けたり。

婆羅門哲學者の間に三語の重要なる金文あり、「エカム、エヴ、アドヰムーヤム」といふ。蓋「唯有一無二」の義也。則天地萬物悉く大梵一神の變現にして、大梵の外には物なく心なきの義也。凡そ此の如き教義は、夫の魂麗奇幻なる吠陀の聖頌の中に閃々として屢其光芒を呈露し、婆羅末那（ブラフマーナ）の諸聖典より進むで優波尼沙土の頌文に至りて、其所說の大成を見、以て夫の六大哲學根本の觀念を形成するに至れり。今先づ利倶吠陀（リックベータ）の第十聖頌の偈を擧げむ。

太初無無亦無有　　爾時無空亦無氣　　何者含此芽宇宙　　於何等藏此所藏　　是開發於深水淵　　爾時無死

無不死　　無日無夜無光暗　　唯恒存者靜呼吸　　無他上下唯彼存」　　隱覆幽闇暗初來　　次水一切皆渾沌

於此太一包于無　　轉內彼起自發力　　發生熾盛引出用　　第一於心欲意成　　最初種子發生種　　是賢深

諦觀察言　　結實有實無妙繩

是吠陀の聖頌が天地剖判、萬物生起の神祕を說破したる所也。其宇宙の顯象を取りて悉く太一、恒存者より發

きに上る也。而して其中尤も著明なるものは、

梨倶吠陀に屬するアイタレヤ、

夜殊吠陀に屬するタイツテイリーヤ、ブリハドアーランヤカ、

娑磨吠陀に屬するケナチユハンドギヤ、

阿闥婆吠陀に屬するカトハ、プラスマナ、ムンダカ、マーントカ

等となす。此等の少分は東方聖書集中にマツクスミユーラー氏の英譯あり。夫の獨の「シヨツペンハワー」は實に優波尼沙土に依りて其哲學の基礎をなし、平時之を愛讀して此卷實に吾老後無二の友なりと云へりとか、以て優波尼沙土が如何に深く且理を盡したるものなるかの一證となすに足らむ。

右聊講學の資料にせむが爲に或る希望を以て稿す。文字力めて簡易通俗を期するが爲に往々塈明を缺くの恨なしとせず。且特に讀者に告げむとするは「總說」の一段は學友荻原雲來君の「佛敎已前の印度宗敎」(學友會々報第一號)を參照せられむことを希望すること是れなり。蓋同君の筆最も細かに此一段を說述せられたるものなるを以て。

(二)　婆羅門哲學特點

4　**惣じて特點を論ず**　李花は淡白柳は青々、春蘭秋菊、皆自ら其特殊の長處を有して各其秀を擢んつ、是則特點也。獨國の學風は重に綜合的理想的を以て勝り、學派の研究は主として實驗分解を尊ぶ。振古已來思想界に

條とする所也。維廉博士の「印度知識」及「印度教」の兩書を參酌して其箇條を列擧せむ。

一、過去際及未來際を盡して靈の常恒なること、

靈とは大別するに二あり。第一は最勝普通の靈にして卽ち上に云へる大梵なり。勝我婆羅阿答摩（パラマートマン）と名づく。第二は卽ち一切衆生箇々差別の靈にして之を命我隨婆阿答摩（ジーヴートマン）と云ふ。學派によりては勝我卽命我と立つるあり。或は二者差別せりと論ずるの別あれども、其無始無終の常恒存在を許すに至りては諸派何れも異なるなし。

二、宇宙は物によりて開發す、物は常恒不變なること、

諸派の中物は唯だ勝我の變現なる故（前の吠陀の頌文にても知れ）勝我無始無終なれば其變現も無始無終と本に從へて物の常恒不變を論ずるあり。或は旣に實無と實有とを對する已上は實無の法（卽物）は勝我の外にありて、顯象界組織の物質は勝我と共に常恒不變と論ずるの異ありと雖、その顯象世界の成立に物質の必要を認めその永存を許すは諸派皆然らざるなし。

三、靈は其自身純粹智を有し念を具するものと雖、之に結合せる肉體を受けて、五根の外境と對するとき方めて思考智覺の作用ありて其活動を完ふすること、

靈は物と結合するによりて其作用を完ふすることを說く諸派皆同じ。

四、靈と物との結合は繫縛の根原也。苦痛の始めなること、

生し來りたるを說き、生滅變化の顯象は太一の上に起る實無の爲めに幻化せしことを論じ口を極めて太一の實有を說くの狀、辭句に汪洋たり。方に是、向來吠檀多、數論師等の諸大哲學が依りて以て根本基礎となせし所、吠陀一部の凡神教的觀念は略是にて其一班を了すべきか。

優波尼沙土の時代に至りては、此觀念更に一層明晰を加へ來り萬有卽神の教義は益其發達をなしぬ。伊沙優波尼沙土の偈に曰く、

於此宇宙存在者　一切開發於大主　猶如衣裳卷繞身　唯太一者常存在　不動而動速於心　假令諸天欲到達　彼遠超絕諸根心　彼靜而勝他速飛　彼如息支一切生　動而不動遠而近　彼存于此世界中　諸能見他衆生類　觀彼等卽是彼者　則能見彼普遍性　是故汝等深觀念　於衆生勿生輕侮

是豈偉大なる汎神教的の觀念にあらずや。大主と萬物一にして二なり。卽ち遠なるが如くして近也。彼萬物となり、萬物卽彼也。卽ち靜にして亦動也。其性は湛然而も其用は早きこと心よりも速なり。此の如き根本の實性、之れを大梵（マハーブラフマ）といふ。大主といひ恒存者といひ、太一といひ實有といふ、皆其異名なり。婆羅門哲學の諸派は要するに此實性に付きて說明の方法に各種あるにより其諸派を分ちしに外ならず。

5　**諸派の共通點**　既に惣じて一般の特點を說けり。進むで更に婆羅門諸哲學に該通する諸點を擧げむとす。此該通の諸點換言せば婆羅門教者一般の信仰箇條は源、麻奴の法典に出で（此法典の事は金七十論等にも出づ、印度古代の神聖なる法律書也「東方聖書集」の中にその英譯あり、）現時に至るまで猶敬虔思辨の印度人の金科玉

る宗派を形成したりしは夫の麻奴の法典編纂の後なるべしといふ。其名稱は左の如し。

一、尼　耶　々（ニヤーヤ）　喬荅摩(ゴウタマ)所立

二、吠世史迦（ヴァイシェスヒカ）　迦那陀(カナダ)所立

三、僧　佉（サンクヤ）　迦毘羅(カピラ)所立

四、瑜　伽（ヨーガ）　波怛邪利(パタンジャリ)所立

五、彌　曼　沙（ミーマーンサー）　邪以彌尼(ジャイミニ)所立

六、吠　檀　多（ヴェーダーンタ）　毘耶遮(ヴァイアヤ)所立

各論

已下各論に入り初に上に擧げたる六派哲學の概要を論じ、次で之に關係を有する自餘の學派を述べて以て此稿を結ばむと欲す。

第一、六派哲學

7、**六派哲學所依の典籍**　前既に述べたる如く六派の哲學は吠陀を其聖典とし特に優波尼沙土を其教義の根元とするは勿論なりと雖、各派此他に各一の要文集を有し、極めて簡短なる文を以て其教義を錄す。之を稱して修多羅(スートラ)と呼ぶ。之に許多の注釋ありて卷帙甚浩瀚なり。若六派哲學の精粹を採らむと欲せば必らず、此等の典籍を研究せざるべからず。各種の修多羅は大概英譯あり。其注解書の著名なるものも亦英譯若くは獨譯存す。

靈と肉體と結合す。卽智覺あり活動あり、善惡の諸行玆に於て生じ、行生じて必其果を引かざるを得ず。故に繫縛あり苦痛あり。

五、所作善惡の業果は其熟するや賞罰の果を受けざるべからず。然れども此賞罰は永久的のものにあらずして一時的のものたること。

是善惡の業に從ひて輪廻を受くることを信ずるの謂なり。旣に輪廻なる故に或る宗敎の天堂地獄の如く永久に苦痛快樂を受くべきものにあらず、其罪報福業自ら限あり。

六、無限肉體の連續する靈の輪廻は世界罪惡の眞相なり。

靈は其功過に隨ひ上中下の形に輪廻して種々の肉體を受く、而して其解脫の方に進むや四種の階級を經て終に最勝者と冥合するに至る。

已上六條はこれ婆羅門諸哲學に該通する一般の信條なり。諸哲學の本體論、宇宙論、人生論、宗敎論、蓋し玆に盡く。

（三）婆羅門哲學の區分

6　**六派哲學**、婆羅門哲學の中其尤も大なるもの六あり。古來より稱して殺達梨遮那（シヤツドダルシヤ十六見）と云ひ、本は殺奢沙多羅（シヤツドシヤスタラ六論）と云ふ。此名稱は古典に屢見ゆる所なるも、其劃然た

問題の正準を得べき方便器具なるの謂也。此題目の下に於て論理を構成すべき智識と及び其方式とを論ず。

12、**第一題目**　四量及五支作法、眞正明確の智識を得むとするには必らず四種の證に依らざるべからず。即ち

一、現　量（プラチィアクスハ）純ら五官より得る知識

二、比　量（アヌマーナ）即推度の智識

三、比々量（ウパマーナ）即比較の智識

四、聖教量（シヤブダ）吠陀の聖文等より得る智識にして眞正の證據

已上の中第二の比量即ち推度の方則を論ずるに五支の作法あり。梵にパンチヤ、アヴヤヴスと稱す。第一、宗（ブラテジュナー）即論理上の命題也。第二、因（ヘート）計計第三、喩（ウダーハラナ）論理學上の大前提に當る。第四、合（ウパナヤ）小前提に當る。第五、結（ニガマナ）は論理の斷案に當る。其實例左の如し、

（一）丘には火あるべし…………………………（宗）

（二）烟あるが故に……………………………（因）

（三）諸烟あるものは火あり猶竈の如し………（喩）

（四）此丘には烟あり…………………………（合）

（五）故に此丘には火あり……………………（結）

見るべし印度は早く三千年の昔に於て既に這般精妙なる論理の方式ありたるを、其文化豈驚くへきにあらず

各種の修多羅はパランタイン氏大抵之を英譯し吠檀多派の修多羅及其シヤンカラの注は「東方聖書集」の一部を形成す。また數論の偈頌及長行の英譯ありて之に梵文を挿めるものあり、蓋し漢譯金七十論の原文なり。

8、**六派研究の次第**　六派哲學を研究せんとするもの先づ其端緒を尼耶々學派に聞く、是婆羅門學者一般の風なり。蓋し此の如きは歷史上尼耶々の最も古きが爲めにあらず。尼耶々は主として思想の法則を論し、學術研究に要する論理を說く甚だ詳なるを以て先之を學ぶ也。故に尼耶々哲學の使用する學語は廣く他の學派に用ゐらる。乃ち印度哲學を窺はむとするもの必らず當に此關門より入らざるを得ざる也。他の學派亦此の如く時代の前後に依らず。純ら教義の淺深によりて研究の次第を立つ。

1　尼耶々學派

9、**尼耶々の名義**　「尼耶々」とは「問題に進行する」の義を含む。義譯して正理と飜ず。蓋事物を分解的に講究するの義なり。此の如きを以て夫の僧伽哲學即ち數論師が事物を綜合的に考察すると方に相對す。

10、**哲學の大綱**　惣じて云へば此哲學は論理因明を論ずるを主眼とするが如くなれども、是其一面に過ぎず。其全組織は實に人智の全客觀及主觀に哲學的考究の正則を供給し、且理論の進行法及び思想の方則を精論するにあり。

11、**論理一般**（尼耶々の十六題目）尼耶々哲學は其第一の修多羅の中に於て十六の題目を詳論し以て論理の精粹を極書す。今次を追て之を說かむ。第一題目は「プラマーナ」と稱す。プラマーナは卽問題の義にして、卽ち

むるに存す。其順序各一題目をなす。曰く第一サムシャヤ即所論の點に付きて起る疑を云ふ。次にプラジョジャナ之を論ぜむと欲する意志也。次で引例を要す。即ドリシュタンタにして立論の資料を備ふ。是に於て立論成就す。梵にシツダハーンタと云ふ。敵者是に至て五支の論法を以て辨難し來る故に次でタルカ即反論の拒絶あり。是よりニルナヤ即眞の確定に達する也。已上は純ら答辨の側に付きて論じたるもの、難者の側に於ては第一に反對（ヴーダ）次で單爭（ジャルパ）續きて重難（ギタンダ）に到達し、更に過の理（ヘツヴーブハーサ）を曉らめ進て遁辭の技（チュハラ）をも研め、次で立者の側に復りてジャーチ即充實の答を論じ、敵者全く伏して辨論終局に至るもの名けてニグラハスートハーナと稱す。此十四題目實に辨論の宏範なり。一切の婆羅門哲學者は此論法及辨論術を應用して盛んに其敎義を諍論す。

15、**純正哲學及宗敎論**　尼耶々哲學の開祖喬荅摩（ゴウタマ）、此十六題目を數へ終りて後、不合理非論理の迷見は苦痛の根元なること論をし、夫第二題目の主題を詳論して其純正哲學を說けり。曰く此迷見物に善惡無記の過を生じ、過より用を起し、用よりして無數の果を生じ生死輪廻絕ゆることとなし。此哲學の大目的は主として夫迷見を治し循環する輪廻を破り。以て夫の究竟滅を得るに存す。尼耶々の宗敎論は此根本迷見の退治に於て存せり。

や。モニエル、ウキリヤムス氏曰く、アリストテレスが立てたる三段論法簡潔は簡潔なりと雖、其立論の充實完全にして巧妙なる修辭的狀態をなすは實に尼耶々論理の最も利ある所なりと、言實に允當なりと云ふべし。後來夫陳那の入正理論も亦此尼耶々派の所說を發揮して其精華を撮みたるもの也。而して其論式も內典中に擧ぐる五支論式（無著、慈氏等の）と全く吻合するものなり、因明を研むるもの若精査し去らば其快味實に大なるものあらむ。

尼耶々と佛教因明との比較に付きては畏友林彥明君の「學友會報」第一號に物せられし「因明の新故」說得て精妙を盡す。故に比較の詳論は一に君の稿を見んを切望す。

猶進んで因の前陳及後陳に於ける關係を論ずるに必要なる通、能通者、所通者の三を論ずべきなれども今は專ら此派のみに全力を注ぐの時にあらざれば之を他日に讓らむとす。

13 **第二題目** 今や十六題目中の第二に入らむとす。是卽プラメヤなり。卽問題の主旨たるものにして、換言せば正智を得べき要題なり此等に十二あり。

一、我（阿苔摩(アートマン)）、二、身（舍利羅(シャリーラ)）三、根（因埵利耶(インテリヤ)）四、境（アルトハ）五、覺（フツヒ）六、心（摩那）七、用（ブラウッチー）八、過（ドシヤア）九、輪廻（プレティア、グワーヴ）十、果（プハラ）十一、苦（ブフクファ）十二、滅（アパパルガ）

14、**他の十四題目** は議論を行ふに當りて起るべき順序を論したるものにて、其意辨論をして快利敏捷ならし

むと欲す、形や無數、性や無量、嗚呼是古代自然崇拜、或は擬人敎に於ける神明の概觀にあらずや、而して此等多種多様の神明恰も一百八の英雄、梁山泊裡に集合せるが如き、大オリムプスの場中に於て綠樹蒼々たるの間、彩紅を點綴して、森嚴崇高、威風の凛々たるの中に、幽婉嫺雅の趣を添へ、怒號奔騰せる大潮流裡に朶々の落花を散布するものあり、之を女神とす、扈三娘が黒旋風、花和尙の間に美妙の調和を保ちて、姿態横逸なるが如し、淸艶の感や津々然として特に深きものあり、ホメロスに於ける、ハラ、アテネ等の李姉桃妹芳を競ふは措て論せず、方尖石碑の上にも、楔形文字の中にもベルテス、クフナフ、其他嬌然たる名のアムモン、アツスル等の森嚴なる名號中に散布するを見るなり、而して此女神崇拜の風は各國大抵存ざせるは之なしと雖、而も印度の如く、奇仄に發達して一宗派を形成し、光怪陸離、特種の異彩を宗教史の上に放射するものは、其例蓋し尠少なりとなす、印度の女神崇拜名けて、之をシヤークテズム(Saktism)といふ。

シヤクーテズムは梵語のシヤークテより得來れるの名なり、シヤークテ(Sakti)は力の義なり、力(Force)を以て神とし崇むるの義なり、此力を以て神とするもの、後女神を以て之が代表とし之に適歸するに至り轉じて遂に女神崇拜の一流を呼ぶにシヤークテズムの名を以てするに至れり、名義の解釋略此の如し、進むで其發達し來るの跡を討査せば如上の略說、更に一層の明晰を加ふるを知らむか。

一元を以て萬物の大原を說かむとす、而も其一原と呼ぶものは必ずや唯一なり、絕待なり、純淨なり、常住なり、乃ち之を擧げて萬物の歷々差別、相待、穢惡、無常なるを說かむとす、東西の哲士多くは此難關に於て窮し

女性崇拜教(Saktism)及其祕密佛教との關係(圖解に因みて)

(明治三〇、三三佛教、一二四號)

第一經緯子、山田孟買領事の寄贈に係る、印度古堂殿石壁に彫刻したる、女神突伽(Durga)の大阿修羅摩泗沙(Mahishasura)を誅伐するの圖を寄す、乃ち約に依りて圖解を爲すに因みて此篇を作る、蓋説述の順序已むを得ざればなり、而して予が特に此研究の門戸を開きたるものは事の甚だ密教に關鎖する所甚多きを以て也、俗氣杳冥塵事紛絮たるの間、圖書甚乏し、其説の精ならざるは更に江湖識者の指教を仰がむと欲するの意已耳。

The whole world is embodied in the woman, One Should be a woman one's self. woman are gods. woman are vitality.

Kumali Tantra.

(Trans. by M. Williams).

眼を放つて古代各國の諸宗教を觀ずるは、實に壯觀中の壯觀、偉觀中の偉觀なり、其瑰麗異彩の趣、雄渾壯大の處、何物か敢てよく之に當らむや、是實に絕妙の大詩篇なり、最美の大演技なり、見よ雲に駕し風を御し、羽衣蹁躚、飄々乎として玄虚の間を行くものを、雷霆を馳り、紫電を閃かし、山を摧き海を飜へし、怒號叫喚、猛然として去るものを、戟を振へば日月光なく、刀を弄せば山川震動するものを、光燄千里を照らす者、身邊虹霓を吐出するもの、大なるものは大須彌に踞して巨手地軸を傾けんと欲し、小なるものは木葉に棹して虫介と戰は

物質を假定し來らざる可からざるの止むべからざるに陷れる也、而して這般の觀念は吠陀の他處に於ては明かに提婆（Dyaus）（天）とプリチギー Pritivi（地）の結合によりて精神の出來せりと說くに至り天に命ずるに父の名を以てし、地には母の稱を與ふるに至れり、既にして婆羅摩那、優波尼沙土出づるに及び、又先の吠陀第十聖頌の意を擴張し太一、自己の一體を分ちて、第二者を生ずるを設けり、而して隱約の間此一半を男と呼び、一半を女と呼べり、之より摩拏の天地剖判論に至り、半男半女の說、漸く明晰を加へ、尋て殺達羅沙の經典出づるに及びては、僧伽の「阿荅摩」と「ブラクリテー」とを對する、吠檀多の「梵」と「摩耶」とを對する、其說明の詞句は、梵語の擅絢なる句を以て、皆一半を男性とし他半を女性となせり、下りて各種の富蘭那、連りに出で、吠陀教より、哲學諸派、哲學諸派よりして後代婆羅門教に移り、梵天、自在、毘紐の三身說盛に抽象的の「梵」や「阿荅摩」や、悉く具體的三面六臂、蓮華を手にし、三叉戟を取り、白鷺を驅り、青牛に騎り、金翅鳥に駕して、以て天地の創造住持破壞を主るの神となり了るに至るや、先の抽象的の「摩耶」や「ブラクリチー」や悉く、婉容麗姿の女神と化し、或は溫良或は狂暴、以て民人に賞罰を與ふるの女性的神明となり、檀特羅の諸儀軌出づるに及びては全く女神崇拜の一派をなして、自在天を崇拜する徒特に其昌なるを極めたり、讀者は此に於て、略印度に於ける女神崇拜が如何に發達し來れるかの歷程を見たるならむ、之を埃及アッシリアの女神が其主位に位するもの大抵、「地」の擬人なるに比較討究し來らば其趣味更に深きものあらむ。

今や更に進むで、少くシヤークテズム如何なるものなるやを說き以て卷首畫（本書略之）中の女神が如何なる

且困す、其推思攻究得來りたるの結果、二元的の非難に陷るもの、比々として大抵然らざるなし、婆羅門教は實に宇宙獨一不變の本體あるを認むるものなり、"Ekam eka adviyam" (唯有一無二) 是豈金科玉條となす所の至句にあらずや、而も婆教は此「唯有一無二」を以て宇宙の開發、天地の剖判を如何に說きたるか、東洋學者が特に最古最美の例として每に引證する、力荷吠陀 Rig-veda の第十聖頌の頌に曰く、

太初無無又無有　爾時無空亦無氣
何者含此芽宇宙　於何等藏此所藏
是開發于深水淵」　爾時無死無不死
無日無夜無光暗　唯恒存者靜呼吸
無他上下唯彼存」　隱蔽幽闇暗初來
次水一切皆渾沌　於此太一包于無
轉內彼起自發力　發生熾盛引出用
第一於心欲意成　最初種子發生性
是賢深締觀察言　結實有實無妙索　(拙譯)

太一實有の本體、實無幻化の萬象と結合するや、其第一必要の條件は卽ち欲意なり、是一切萬法に於ける最初種子なり、本體と幻化とを結合なるの妙絹索なり、大觀評し來れば非物質精靈の一元を說き下して、漸く第二の

を掲ぐ）而して其牛頭の大阿修羅、摩咽沙を降伏するときは、能殺手頭精者（Mahishamardini）の名に於て此大阿修羅の誅伐を完す、巻首の圖一方に突伽虎に乘じ、十手弓箭刀劍を揮ひ以て大惡魔に逼る、惡魔之を邀へて、巨大なる雙角を擧げ、手に大なる鐵揮を收りて、且退き且拒ぐ、周圍に、天衆阿修羅衆、相錯雜して交戰方に酣なるの狀、隱々として見つべし、其彫刻の精、神人の圖樣、巧妙を極むるものは、蓋し印度美術唯一の長技なる彫刻の卓絕を顯して餘蘊なし。

今や益進むで、突伽の現時に於ける信仰及其祭典の模樣を略說せむとするの順序に至れども、更に一層の留意を要する問題あるを以て今は且く前黑白二身の談と共に之も他日に期し、將に此緊急の問題に移らんとす。そは、前に云へる女性崇拜と及佛敎に於ける祕密部との關係此なり、上來千百の縷陳は實に唯此問題の門戶を開き端緒を覓め、資料を供給したりしの準備に過ぎざる也。

特に此門戶を開き、端緒を覓むと云ふ、固より堂奧に達し、經緯をなせりとして僣するにはあらざるなり、乞ふ少く左の二項に於て少く指導を大方に仰ぐ所あらむか。

1　シヤークチズムと祕密佛敎との修法の類似。

2　シヤークチズムの女神と密教中の諸尊との類似。

予は先づ此問題を解するに先ち、更に從ひ二項を合せて第一に尼波羅所得の祕密佛敎に付きて類似の點を求めて、其關係を明にし、第二に皇朝の祕密教に付きて疑義を呈する所あらむとす。

ものなるやを討査するに臨めり、讀者よ、乞ふ少く倦を忍びて清眸を貸與せむことを、蓋印度教に至りて崇拜する神の大なる者三あり、即ち婆羅摩、尸婆及毘紐なり、此三神各其配偶を有す、婆羅摩尼、摩訶濕婆哩、毘紐那尼、と稱す、而して夫焰摩に對する焰彌の如き、羅摩に對する私多の如き、上吠陀聖典中の諸神より、下りて史詩中の崇拜を受くる諸神雄に至るまで悉く元配を有す、而してシヤンクチ教徒は此等女神を散して却て其夫神を高閣に束ぬるを主義とす。嗚呼何ぞ其嬶天下の大に行はるゝの甚しきや、女尊男卑主義の一派歐米の人をして之を見せしめなば、必らすや拍手、直ちに其教徒とならむ哉、而して已上數多の女神ある中、其最も盛に崇拜せらるゝは毘紐拏と及尸婆との妻にありとす。

此兩親は其身に許多の黑白兩身則其性に溫和と暴惡との兩性を有す、故に其要亦黑白の二身を具し、許多の溫和嬌艷の美姿と可怖暴惡の醜貌とを現す、其一例を擧ぐれば、毘紐拏白身の元配洛輸彌（Lakshmi）は甚だ溫和なれども、尸婆黑身の后、迦利（Kali）が暴惡大破壞の神なるが如し、而も此中尸婆に屬する女神は頗る多く、一に之に枚擧する甚だ煩を覺る所なり、卷首畫の突伽（Durga）は實に此尸婆黑身の后として暴惡大に威怒を具し、甚可怖畏の女神なる也。

突伽の事を悉說せしはチヤンデー、マハートミヤー、タネトラ（Chrndi-Mahatmiya-Tantra）にありとす、今ダウソン其他の引く所によりて、略其神の如何なるものなるやを記せむ、曰く突伽は、黃身美麗の女神にして黃虎に騎り、十手種々の兵器を持ちて、怖畏すべきの狀をなすと（マルチン氏の「東方印度」其各地より獲たる圖

や瞭けし。

而して更に驚くべきものあり、曰くシャークチズムに於ては五摩字の法を行ひ、悉地成滿の事を說く、則魚肉を食ひ、酒を飲み婬欲を行し、印を結ぶこと是也、（Maithura 媾合。Matsya 魚。Mansa 肉。Mudra 印契。Madya 酒）腐敗隤亂卑猥此に至る甚怪むべく驚くべからずや、而して尼波羅の祕密教徒は其九部大乘經極祕の經文、多他蘗多虞㗚耶迦の品目概略に於て、

第五品　初發心者の行すべき祕密禮拜の法を明す、其圓滿に達する方便中其母と姉妹と娘とを問はず、獸的媾接を行じて以て悉地圓滿に達すとす。

第十五品　此品中或祕密の行を圓滿するに當りて一種卑猥の行を瓊達羅の女となすべきを說く。

(See R. Mitra's Nepaiese Buddhist Sansk. Literature p. 264)

何ぞ其一致するの甚しきや、予は此事實を以て婆羅門教の佛教と混じたる一例として太だ重要なるものなりと信ずるに躊躇せず。

乞ふ更に進むで本邦密教とシャークチズムとの如何なる點の類似せるかを硏めしめよ。

一　種字、密字の特に尊ぶものは種字也、窣堵婆上の佉迦羅婆阿は言ふを要せず、金胎全部、種子を以て諸尊を詮顯し阿字觀を始め種字を以て密觀を修し、悉地の圓滿を致すとなすもの經軌至る所に說く所也、而して此種字卽ち梵語の Bija は實にシャークチズムの最も重ずる所なり、其例はウキリアムスの「婆羅門教及印度教」の

大方諸彥の旣に知らるゝ如く、尼波羅佛教の祕密部に於ては世界の本體、阿提佛陀の分別意志より、萬象生じたるを論じ、此分別意志を、智、卽般若となせり、而して此阿提佛陀心內の慧力を、已外に抽象し去りて其と同等の格位を有せしめ陽に對する陰の如く、父に對する母の如く、梵に對する摩耶の如くし、自在者伊濕伐羅を女聲にして伊濕伐哩の號を與へ、薄伽梵男性に對して、女性の薄伽婆底を之に名け以て諸法の母とせり、之則所謂「阿提達磨」なり、證あり曰く。

一　噫、般若天女、爾は一切佛の母なり、諸菩薩の祖母也、一切有情の曾祖母なり（ブジヤカンダ）

二　一切空なりし時、般若天女烏U字にて空中に顯る、般若は一切佛菩薩の母にして、其心に達磨住する也（ブハドラカルバタ）

三　南無般若天女、世界の所世物は彼より願欲の形に於て殊勝に獲得せられぬ彼（女性）滿月の如く美に、阿提佛陀の母也、他佛の妻也、無朽なる金剛の如し（サードハナマーラ）

（See Hodgson's essey pp. 85—88）

讀むで此に到らば、其根本觀念の甚しく、吠陀の太一心中の意欲を後世發達して、陰性のものとなしたると酷似したるの感湧然として胸間に湧かむ、而して夫の、大日、阿閦、寶生、彌陀、釋迦の五佛に、金剛界自在者、盧舍那、摩莫鷄、般達羅、多羅の五神女を配當して之をシヤークテと呼ぶが如き其印度のシヤークテより來りたるの跡、洵に歷然たり、ウキリアムスの之を、女性崇拜教より轉化したるを明言したる所や誣言にあらざるなる

手及我全體を護らしめよ、守護せよ、噫、大明妃跋陀羅迦利！　(Brahmanism & Hindnism)

（一）篇中、ヅルカの對譯に突伽の二字を用ゐたるは、學友獨有老兄の指示によりて慈恩傳を撿し、阿耶穆佉國 Hayamukha の條下より得たるに依れり。

（二）篇中、白黒二性の下天神と、明妃の名を列擧して一に密經中に存するものと對比する心算ありしも閑なくして果さず、異日必らず之を果さむ。

（三）一片の圖解、已れの好む所に奔せて、不料、冗贅の筆を勞せし罪を謝す（六日稿後、壺月生記）

一九七頁に出づ、喑字は尸婆を顯し烏字は毘紐を、藺は火を紇林は日を顯すが如し、此蓋し烏婆尼沙士の中唵字を解して阿、烏、摩の三字を種々の物に配當し、遂に之を彼の三位一體の、梵天、自在、毘紐に表したるより起りたるもの也。

二　印契、（母陀羅）密教の印契を尊ぶこと知る所の如し、シャークチズム亦之を尙び、修法一に之に依る。

三　神名の一致、密部の多羅菩薩、孔雀佛母、辯才天其他の佛母、明妃等シャークチズムの女神に一致するもの甚多し。

已上三項中、第三は特に精査すべきの所とす、而して、夫の般若を女神となしたることの如き、亦多少本邦佛經中に其痕跡を認めざるにあらず、卽ち多少の關係なるや亦瞭として明なる所なりとなすなり。

已上は固より、研究せむと欲すも、單の針路に過ぎず、其廣漠たる蒼溟中に遺珠を拾ふの快は未だ至らざる也、螺堂の奥に進みて神祕を摘發するは未だ遙に遠し、唯思ふ此種の研究は、佛教教史、特に大乘の發達を論じ、密部の沿革を論斷するに於て必要缺くべからざるものなりと、宗教學に志厚き士、特に密教門下にありて、瑜伽の學明なるの阿闍梨衆、願くば少く少か進まむと欲する針路に充分の指導を與ふるに吝なる勿れ、終に臨みてシャークチズムの咒一首を譯し（英譯なり）て以て結末を告げむとす。

　唵王に歸命す、莎訶、一切事をして嚴ならしめよ、我に反する一切事をして死せしめよ、一切事をして好からしめよ、婆羅摩尼、摩訶濕伐哩、高摩利、因陀羅尼、遮絞茶、婆羅鼻、毘紐那尼をして、我頸口頸首、心腰

徒は、訖利瑟那を以て、基督に一致せしむるが如し、而して佛教は此間、更に涵養包含の大を以て稱せらるゝものなり。

世尊の初めて小乘を宣說するや、既に古來吠陀中の諸神、帝釋（インドラ）、梵王、日月兩天、龍神、阿修羅、等を驅り來りて以て其法莚を莊嚴したり、大乘の宣傳に及ぶや其網羅更に大なるを加へ、密部の誦出に至りては其該攝包含又一層の大を益し、彼此の涉入益甚しく、吠陀時代の日、月、風、火等の諸天を問はず、優波尼沙土より下りて、富蘭那中の諸神、檀特羅中の諸女神に至るまで、悉く摩訶毘盧遮那の表德を顯示するものとなすに至り、其底止する所なきや却て此等諸神の崇拜を以て直に密教の本旨なりとなすに及び、多神的傾向と、複雜なる儀式供養を重ずるの風を養ひ來り、其極全く婆教の儀式を以て婆教の神を崇拜するに終り、佛教の本旨那邊にあるやを疑はしむる觀なきにあらず、予は去歲「尼波羅佛教梗概」を本誌に出して略此旨を暗示せり、今や瓜哇國の古像二片を讀者に介するに當り、更に此事實をして明かならしめんことを期す。

卷首に揭ぐる菩薩の像（本書略之）は五十年前、在瓜哇島英國副都督、ラツフエル氏が同島古物蒐集の際、スリンガサリより得たるもの、他の象頭人身の像亦同處より得たるものにして、餘の諸佛像及諸天の像と共に今英國博物館に珍藏するもの、圖は考古學上最も正確と稱せらる、同氏の著「瓜哇島史」の附圖より取れり、第一の像は上部、デヴナガリの梵文を刻す、字體頗る轉訛して讀み難し、第二は明に、伽那沙の像なり、前者は密部の一尊なること、一見して知るべし、後者は婆羅門教重要の神にして、佛婆兩教の混化を論證するに頗る重要のものた

婆羅門教佛教混合の一例(瓜哇國古像の圖解)

(明治三一、五、佛教第一三八號)

佛教發達の狀を察するに何れの國にありても、一宗教が他宗教の關係を受けざるものは罕に、彼此涉入し甲乙互に相補足して其發達を完うす、是宗教史を攻究するもの丶特に注視すべき事項なりとす、而して此の彼此相涉入するの極は、立教の當時水火論を異にし、枘鑿相容れざりしものすら、遂に相融會して一團となり、甚しきは最初邪神惡魔として厭忌したるもの、教中主要の神明として崇拜を受けるが若き奇觀なきにあらず、而して此事實は極端なる排他主義の一神教にありてすら猶多少其痕跡あるを認むる所、況むや包含の廣、涵養の大を以て稱する凡神主義の諸宗教に於てをや、故に其彼此涉入の痕は一方より見れば取長補短の進涉を意味す、然れども他方より見れば其竄入の極、自教の純潔を潰して腐敗に陷るの患あり、此邊より見れば、混淆雜亂の退却を意味する也。

印度の宗教は概して偉大なる凡神主義也、包含の大、涵養の廣きは固より其所、隨つて其彼此の涉入、甲乙の交錯は頗る甚しきものあり、マニアー、ウキリアムス曰く「印度の宗教は大觀するに壯大なる家屋に各種異様の增築添設をなしたるの概あり、畫棟新梁、門扉牖牖、各種の様式雜厠間雜して、一見其何物たるを了するに惑はしむ」と、眞に然るなり、一例を擧げむか、韋紐天派は、佛陀を以て韋紐天十化身の一となし、近來の婆羅門教

や、其途次瓜哇を訪へり、法顯傳に記する所の耶婆提と云ふもの卽是也、當時異學大に行はれ、佛教見るに至らざりしと稱す、（「法顯傳」を見よ、レツギー氏英譯 'Travels of Ha-Hien" 參照）旣にして印度には紀元九世紀の終に有名のシヤンカラ阿闍梨出でゝ佛教徒を迫害するの事あり、佛徒は東方亞細亞及附近の島嶼に其難を避けたり、而して其一部亦瓜哇に來り、婆教との交錯一層を加へ、有名なるボロ、ボドホの大殿、ブラフマバナムの殿堂等建築せられ、顯密の諸像彫刻せられたり、（ラツフエルの「瓜哇史」の二及付圖を見よ）去歲發行の「大菩提會雜誌」に曰く、

瓜哇のブラムバナム（Brambanam）に於ける殿堂の遺跡は、古代のメンタング、カムラン（Mentang Kamulan）及び舊侯國の都府の面積及其重要を證すに足る、該處には一箇の中央建築物を圍繞する小殿堂其數非常に多し故に其地を呼びて「千堂」と云ふ、而して現今殘存の數に於ても、尙二百三百の間にあり、而るに此集合教堂の最も奇異なるは、中央の大屋は疑もなく婆羅門敎のものにして、印度カリの堂より持來りたらんかと思はるゝヅルガの偶像を有し、而して其の周圍にも亦許多の婆羅門敎の偶像を見出すに、其圍繞せる小殿堂の中には多くの佛像を發見することこれなり、此等の佛像は、毫も婆羅門教と混合せざる純粹佛徒の建築物なるボロ、ボドホ（Bro Bodho）の大塔に於て見る佛像と毫も異ならず、此の如き二宗教の甚だ著しく混合したるものは實に瓜哇の神聖なる建築物の多數を占む、惟ふに數百年間、明かに此の二の信仰は相並んで存在し兩宗教者は互に一致して親睦に生活し、恐らくは各自互に其禮拜を間雜して行ひたりしならん（拙譯）

り、故に今少しく第二に付きて筆を勞するあらしめよ。

然れども此事の前に少く瓜哇國教法の歷史概略を論ずるの要あり、是佛教と婆教との混合の跡を察するに附きて頗る有益の業に屬するを以て也。

瓜哇島が蒙昧野蠻の狀態より進みて、文學あり、工藝あり。音樂あるの文化に進みしは、實に古代に於ける印度征服者の功に依る、是其國名が、固、梵語の耶婆（Yava）即大麥より來りしを以ても知るべし、是蓋し印度人が同島國の耕作に利なるより名けたるの名ならむか、而して印度人が同島に來住せしは夫大詩史摩訶婆羅多製作の後に存し、デヴナガリの梵文用ゐられ、暹羅に佛教傳はりし後に存せしや明けし、是同島人が其歷史を說くに當りて、史詩中の神雄アルジユナを其祖先に崇め、文字の發明を以て同島の祖仙の或者大夜叉の死屍、左手に梵字、右手に暹羅文字を持ちたるもの漂着せしより作れりといふに徵して知るべき也、ラッフェル氏の「瓜哇史」にはアルジュナより出でたりと稱するいと長き系圖を揭ぐ、是同島の歷史を形成する所にして其時代を、彼の婆羅門教のカリユガ等の年時に當て、其間頗る長く神怪の事甚多し、而して此傳說より推すに、最初に來れる印度人はトリトレスタ（Tritresta）にして凡そ耶蘇紀元の二世紀或は三世紀にあり。其後に來りし人は或は佛教を奉じ或は婆教を奉じたるものなる也、去歲發行の「甲谷他大學雜誌」に曰く、「紀元五世紀の早き已に印度人の瓜哇に殖民するあり、八世紀の終に至りて同島の主權を握れり」と、以て當時印度人が瓜哇に於ける關係の如何を見るに足る、婆羅門教と佛教との涉入は實に此間に於てせられしならむ。晋の時法顯三藏の西域各地に周遊せし

（七）金剛薩埵説頻那夜迦天成就儀軌經　法賢譯

毘那夜迦が象首肥滿の神にして大自在天の子として、戰那波底と兄弟たるが如き、烏摩天后を母とするが如き、其一齒の缺損せる緣の如き藏中の經文と、婆羅門教の說く所と毫も異ならざれば今一々故らに擧げず、（考證の委細は三好文學士の「佛教史林」に出せる「大聖歡喜天考」を一覽せよ、ダウソン其他と佛經とを對照せる故、頗る有益なり）、而して本邦所傳の聖天は大抵雙身のものを取る、善無畏、不空、憬瑟、含光等の經軌は其男女抱合四足四手の甚奇異なる像を說く、然れども、金剛智の譯は單身四手の像を說き、法賢譯の經文には、單身六臂を說き、雙身四臂を說き、其他修法に從ひ十二臂四足、八臂六足、四面八臂、二臂三目、等の異なる像を說く（マルチン氏著の「東方印度」の中に亦各種の聖天像を擧ぐ）。卷首に擧ぐるの像（本書略之）は金剛智及法賢譯中に存する、單身四臂の像にして、蛟を絡腋となし歡喜團を執りて食し、羂索、鉞斧を執れるものなり、圖に付きて經文を檢せば發明する所あらむ、ダウソン、ウキリアムス（「婆羅門教及印度教」其他）、マルチン等に擧ぐる所と追次對照して其一致を辨ずる如きの煩は今略せむ。

讀者は此に於て佛教と婆羅門教との混淆が頗る甚しきものあるを知らむ、而して此混淆が單に瓜哇にのみ止まらず、本邦に於ても亦頗る其交錯の大なるもののあるを知らずや、而して、釋尊の時代には嘗て名さへなき一種の神明、牟尼說法の後幾百年を經て起りし鬼神談卽ち聖天出生談の如きが、佛法として尊崇せられ、現に藏中の祕密經典として、其爲に幾多巍然たる殿堂の眞言宗に存するを見ば、其驚駭果して如何ならんか、而して此の如き

以て其渉入、交錯の甚しきを見るに足らむ、而して其後回敎來りて權勢を得て同島の國敎となり、舊來の諸佛諸神の像を破壞したりとは雖、其遺物は尙多少存するありて、後來英政府の搜索探究する所となり、貴重なる資料舊來の信仰を推すに充分なるもの存す、ラッフエルの大著「瓜哇島史」は實に此點に於て唯一の依憑たるなり。

象頭人身の神像は實に此信仰の一般を了するに足るべきの具なり、看客は之を如何なるものと思ふか、驚く勿れ、是實に本邦人が尊重恭敬して種々の祈請をなす、密家の祕神大聖歡喜天なり、婆羅門敎徒は之を伽那沙といふ或は伽曩波底と稱す、彼等が障礙を排除するの神として、吉祥を求め、祈願の初め、書卷の表紙、必ず之を恭敬して、祈願を滿足せんと欲す、毘那夜迦は其別名也（ウヰリアムス氏の「梵英字彙」ダウソン氏の「印度古典字彙」を見よ）、種々の異名あり、象面と云ひ、長耳といひ、大腹といふが如し、而して亦雙身（Dvi-deha）の名あり、本邦經典中に此俄曩沙、卽ち俄那鉢底の事を說きたるは、

（一）大聖歡喜雙身大自在天毘那夜迦王歸依念誦供養法　善無畏譯
（二）大聖歡喜雙身毘那夜迦天形像品儀軌　憬瑟
（三）毘那夜迦俄那鉢底瑜伽悉地品祕要　含光
（四）佛說金色伽那鉢底陀羅尼經　金剛智譯
（五）大聖天歡喜雙身毗那夜迦法　不空譯
（六）雙身毗那夜迦使者法　留支譯

拉摩教の分派及其發達

（明治三二、七、佛教一五二號）

佛教々理及歴史の討究は、漸く西藏佛教の研究を促進し來りぬ。鏘々たる鐵錫を雪藏の皚々たるに振ひて、拉薩の寶殿に祕經を探らんと欲するの壯漢、前後相次ぎて起てり。甘單兩殊の大藏初めて吾國に入り、チョーマ、ヤシュケー等の西藏字典、學者の玩索するもの、亦將に多きを加えんとす。百重千重堅鎖せし、鐵塔、祕鍵を打開して粲々たる光明を教理史の上に望み、糾紛纏絡、敗絮亂糸の如き教理上の葛藤、裁然として利刄の一揮を待つの快を見んこと、謂ふ當に遠きにあらざるべし。西藏佛教の討究、豈之を閑事に付し去りて可ならんや。玆に於て喇嘛教分派の一斑を講究して、其發達の狀態如何を知るは現時最も切要の事に屬す。而して同教分派の詳細を記せるもの、吾國甚だ其書に乏し。一斑世人の之に付きて少しく知る所は、黃赤二派の別と彼大聖崇喀巴の名のみ。其稍詳なるもの、シュラキントヴイトに擧ぐる所の十派の名義の如き、或は之を抄譯增補せしものを見ると雖、尚派々の關係、教義の如何に付きては實に隔靴搔痒の憾なくんばあらず。纂譯叙述する所のもの、實に此の如き歎ある人と共に、聊か西藏佛教の研究に相資せんと欲するの微意のみ。匆卒亂書、文意を盡さず、參照精を缺くが如き、希くは幸に之を恕せよ。

事は決して單に聖天一尊にのみ止らざる也、謂ふて之に至りて現時の密敎を見る、彼佛敎の發達せしものか、抑も亦淆亂腐敗に陷りしものか。

て方に佛教渡來の時と定むるが如し。此と同例にて西藏の佛教史に於ては、雙贊思甘普（Sron Tsan Gampo）の唐大宗と和親を結びたる結果、貞觀十六年文成公主を其妃となせしの時を以て、方に同國に佛教渡來したるの時となす。公主は其西藏に入るに際し、佛像經卷を西藏に將來して大に佛教を同國に弘む。支那の僧徒之に從ひて亦公主の傳道を助くるものあり。王乃ち譯主端美三波羅を印度に遣はして聖典を求めしめ、拉薩其他に精舍を建立し、印度僧の入藏するもの踵を次ぎて多きを加ふ。恰も吾國推古朝の興佛と彷彿其趣を同じうするものあり。而して其舊來存在せしボン教（Bon-po）と新に入りし佛教とは兩々相對峙して融合するに至らず。佛教の如き唯譯經寺に急にして、義の異同を問はざりし如きも全く推古朝と同じきものあるなり。五代を經て吃哩雙提贊（Thi Sron Detsan）（蒙古源流云特蘇隴德燦）あり。蓮花生上師（Guru Padma Sanbhava）善海大師（Santa Rakshita）加摩羅尸羅（Kamalashila）等を印度より請して盛に佛教を興す。上師は那爛陀大學の上首にして瑜伽祕密乘に精通す。其傳記頗る神怪不測の事多し。上師密乘を以て、大にボン教の牛鬼蛇神を崇拜し、巫蠱魔術を行ふものと融合せしめ、而して之に雜ふるに中論の理を以てす。上下玆に於て翕然とし其化に從ひ、サムエ其他の大寺院東西に建立せられ、僧徒漸く多し。乃ち僧侶を統率する者を置き稱して拉摩（Lama）といふ。梵語鬱多羅（Uttasa）と同義にして上者の義なり。拉摩教（Lamaism）玆に於て成立す。ボン教に對して稱して內道（Nimma）といふ。王の時代は吾國の聖武朝に比すべきか、王の後三代倈巴贍（Ralpachen）王あり。此時印度僧濕連多羅菩提（Surendrabodhi）等、盛に龍樹提波世親の論疏を譯し佛光益赫曜し來りしが、其弟朗爾瑪（Lan

一　西藏佛教史の概觀（拉摩教宗派の發達）

拉摩教の歷史は講究の便宜上左の三期に區分して其概要を一瞥するを利なりとす。

1　原始的拉摩教の時代（西曆六四〇年弄贊甘普の時佛教支那より入りしに初めて、八九九年朗達爾瑪王の佛教迫害に終る）

2　革新的摩教の時代（西曆九〇〇年朗達爾瑪王の死よりして佛教の恢復に初りて、一〇一五大聖アチシャの入藏宗教革新に及び諸派の繁興を以て終ゆ。此間凡六百年餘）

3　近世拉摩教の時代（西曆一四〇〇年大聖崇喀巴、甘丹大寺を立て、ガダンパ宗の中興となりしに初り、一六四〇年其法資法王政治を完成したりしを經て現時に及ぶ）

（一）西藏の所傳に依れば紀元三百七十一年給陀朶嘌思顏贊（Thothori Nyan tsan）の時佛教初めて至れりと、傳說する所を聞けば其年の某月、天より合掌手、小寶塔、寶珠、莊嚴寶王經の四寶を降して玆に佛教傳播の發端をなしたりと、元の帝師發合思巴の彰所知論にも、西蕃國中初有王曰呀乞利替普（Nyakri tsanpo）二十六代有王、各日給陀朶嘌思顏贊、是時佛教初至」と記せり。然れども是國中の小部分に、尼波羅、迦濕彌羅の邊より多少の佛教的信仰の傳はりしを言ひしまでに止まりて、其勢力の微々暗昧なる、未だ之を以て同國に佛教渡來したりとは云ふべからず。猶、吾國繼體帝の朝に佛教の信仰ありし痕跡なきにあらざりしも、欽明の十三年を以

新宗の勃興する此の如くなるを以て舊派亦大に振ふ所あり。恰も密乘の徒が南天の鐵塔を假托するが如く、蓮花生上師の祕經を岩窟の中に得たりと稱して、盛に舊宗を振ひ其派をなすもの亦多し。

此の如く第二期は一方には革新的の宗派創立せられ、他方には舊派の奮興するあり。而して此中間に幾多の折衷的の宗派ありて其教勢實に吾國鎌倉時代の佛教を見るが如き者あり。

(三) 元既に亡び明興るに及び、其政策としてサクヤ派の勢力を殺ぎ、以て西藏の力を弱めんとし、カダンパガルキュ派の寺院に與ふるにサクヤ派と同等の權力を以てし、サクヤ派の勢力漸く減退し、而して之と共に教界の腐敗漸く甚しきに際し、カダムパ派に一大偉人出で、之を中興し其勢力を増し、其極や法王政治の基礎を立てしものあり。之を大聖崇喀巴(Tson-kapa)とす。

崇喀巴は西暦一三五五年を以て生れ、大に當時拉摩教の頽廢せしを挽回しカダムパ派を中興し、之れに命ずるにゲルグパ(Ge-rug-pa)の名を以てし、教制を嚴にして教式を正しうし、教風大に擧り各宗派又之が爲に顏色なし、西藏全土大抵其教風に靡く、崇喀巴の後五世にして、羅木藏札木蘇(Lobzang Gyantso)大剌麻の衣鉢を襲く。此拉摩頗る才略あり、蒙古の兵を麾きて遂に西藏の王權を奪ふ。法王政治は之よりして始まり、ゲルン派は玆に於て全く西藏の全權力を握り、以て今の法王 Lozan Thibdan に及べり。

サクヤ派は一時ケルンパ派の爲に壓せられしも、其支派ノルパ(Norpa)ジョナンパ(Janapa)と共に本末三派隆盛を保ち、就中ジョナン派の如きは有名の聖歷史家救度主 Iaranatna を出せし已來、其勢力頗る隆然たる

Darma）之を弑して位に卽き、全力を擧げて提摩教の剪滅を圖り、寺院を毀ち僧徒を追ひ經卷を焚くに及び、一時拉摩教の勢力全く地を掃へり、第一期は此宗教迫害を以て終りとす。

（二） 朗達爾瑪、一拉摩の爲めに暗殺せられ（西暦九〇〇年）教徒の四散せるもの漸く集合し、迦濕彌羅其他の外國僧亦入藏して拉摩教の勢力復興を見るに至り、大聖阿底沙（Atisa）入藏の事あり、拉摩教は玆に大改新をなしたり。阿底沙、名定光吉祥智（Dipankara Sri-juana）といふ。ベンガル、ギクラマニブルの貴族に生る、稱して文殊の化身といふ。年六十西藏に入り、二十餘部の論疏を製して、拉摩教の革新を行ひ一新派を開く、稱してカダンパ（Kadampa）といふ。蓋し建立せし寺名に從ふなり。其高弟ブロムトン（Brom Ston）大に師が改革を助く。之と同時にマルバ（Marpa）印度は入り、阿底沙及び其師那爛陀大學教頭十ロ（Naro）の教を受けたりと稱してカルギユパ派（Kargyupa）を創立す。カルギユパとは師資相傳受學の義なり。此派、西暦一一四二年より一一六〇年の間に於て、デクンパ派（Eikunpa）カルマパ（Karmapa）上ヅクパ（Uppr Dukpa）の三派を生じ、本末四派となる、而して其三派の中間支派を分生するものあり、終に本支七派の別となれり、マルパの開宗の後幾くもなくしてサクヤ（Sakya）出で、亦新派を起し、稱してサクヤパ（Sakyapa）といふ此拉摩大に元の急必烈の歸仰を得て全拉摩の教長となり、サクヤパ宗の威勢、自餘の諸派を壓す。而して已上擧ぐる所、三派の革新的宗派の中、第一のガダンパ宗は純然たる革新的の宗旨なるも、サクヤ及カルギユの二派は之に比して半革新的の性を帶び、古派と新派との中間に位するものなり。

二　各宗派の異點

（1）ゲルン派（カダム派）

ゲルン派は今西藏の尤も勢力ある宗派にして、且つ同國の正宗たるものなれば是よりして筆を起さむ。

此派の最上主尊 Adi Buddha として崇敬する所は持金剛 Vajra dhara（大日）なり。慈氏菩薩を以て其顯示者として、聖資無著菩薩より傳々相承して大士阿底沙に至り、瀉瓶相承けて崇咯巴に及びゲルム派成る。然れども阿底沙が文珠の化身なるを以て、亦文珠よりして顯示を得、カルギユ派の祖師ナーロは阿底沙の師なるを以て其亦影響を受けたり。其教義を惣稱してラムリ（Lamrim）といふ。業門（Karmamarga）の義なり。主として戒律儀式に重きを置き、此派は金剛陪羅縛 Vajra bhairava（本邦密軌中に此尊の儀軌あり）を以て降伏の主尊とし、馬頭（Hayariva）及び大黑（Mahâ-Kalâ）を以て主護神となす。衣帽黄色を用ゆ。

（2）カルギユ派

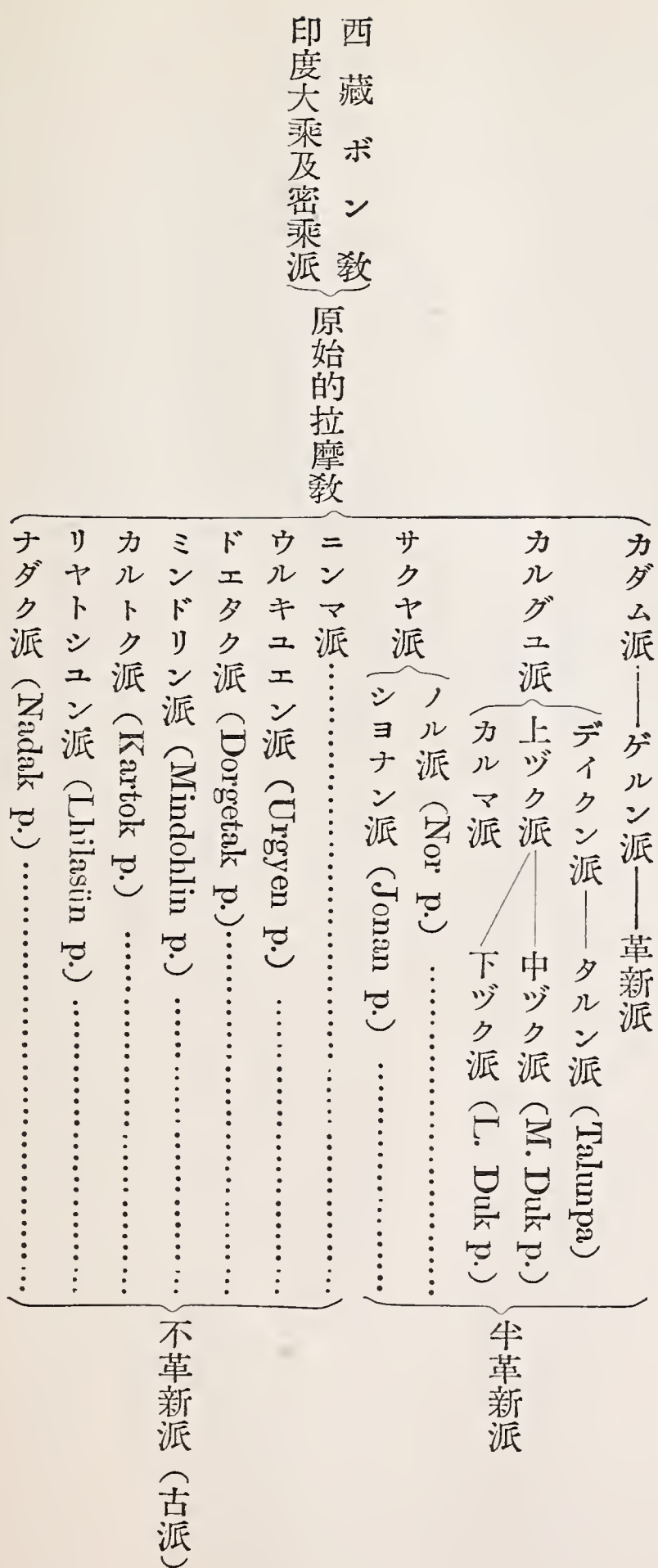
カルギユ派はゲルン派に亞ぐべき偉大なる宗派にして、紀元十一世紀の後半拉摩マルパ（Marpa）印度に入りて那爛陀の教頭ナーロ（Naro）の訓戒を受け歸りて此宗を開く。主尊は阿提佛陀金剛持にして、印度の高德チロ（Tiro）親しく顯示を受け、之をナーロに傳へ以てマルハに及べり。其教義は岩崛に靜坐し定寂に處して專ら祕察禪を修するが故に、大印（Mahâmudra）の一語を以て其宗の特長を表示す。其降伏の本尊を三波羅（Samv-

ものあり。

左に圖する所は拉摩教分派の系統を表す。即ち西藏佛教の宗派は本末通計十有九にして、自ら革新派（Refor-med）半革新派（Semi-Reformed）不革新派（Unreformed）の三大區分となる。小支派分出の年代及び其派祖の如きは今且く略す。

西藏ボン教
印度大乘及密乘派 } 原始的拉摩教

- 革新派
  - カダム派――ゲルン派――革新派
- 半革新派
  - カルグユ派
    - ディクン派――タルン派（Talumpa）
    - 上ヅク派――中ヅク派（M. Duk p.）
    - 上ヅク派――下ヅク派（L. Duk p.）
    - カルマ派
  - サクヤ派
    - ノル派（Nor p.）
    - ショナン派（Jonan p.）
- 不革新派（古派）
  - ニンマ派
  - ウルキユエン派（Urgyen p.）
  - ドエタク派（Dorgetak p.）
  - ミンドリン派（Mindohlin p.）
  - カルトク派（Kartok p.）
  - リヤトシユン派（Lhilasün p.）
  - ナダク派（Nadak p.）

（Schlagintweit 七四、Waddel 五五參照）

普賢行願讃の日本梵文に就て

（明治三五、一一、東洋哲學第九編第一一號）

正法律中興の大德として、德川時代の佛教々會史に赫々の盛名ある、飲光[一]尊者慈雲律師は、佛教文學史の方面に於ても、亦不朽の大業を遺したり。其梵學津梁一千卷の編纂は昭々として今に偉大なる功勳を證するにあらずや。此大業の一部として律師が苦心蒐集したる梵文聖典の梓行せらしもの、阿彌陀經、普賢行願贊、般若心經の三部あり。律師の滅後、門下知道金剛般若經の原本を獲て之を公刊せり。大藏中現存の諸陀羅尼及び漢字音譯の各種の讃文、並に名刹古寺に珍藏する零碎の聲明、神咒の古寫本及碑銘を除きては、吾邦[二]現存の佛教聖典原文は唯已上の四部あるのみ。

此等四部の中、金剛[三]般若經の原文は、西曆一千八百八十一年マックドス、ミューレル教授、牛津紀要第一卷アリアン編第一部に之を刊行し、次て南條文雄師は千八百八十三年同教授と共に、同紀要の同卷第二部に、大無量[四]壽經と共に阿彌陀經を出版し、般若[五]心經も同年兩博士に依りて同卷第三部として佛頂尊勝陀羅尼と共に世に公にせられたり。千八百九十四年に至り、ミューレル教授は其東方聖書集最後の[六]卷、佛教大乘經集中に、已上三經の英譯を出したり。然るに獨り普賢行願贊に至りては、其重要なること前三經に讓らずして、而も未だ之が研究の公にせられたるものあるを見ず。是予が毎に遺憾とする所なりき。

ara）となし、其主護神を黑衣主となす。衣帽黄を用ゆる前衣に同じ。

（3）サクヤ派

サクヤは一〇七一年西西藏に起る。其開祖サクヤは般底答にして諱を、コン、コン、チョク、ルグヤルボ（Kon-dkon-nchoyrgyal-po）といふ。最上の主尊阿提佛金鋼持、顯示を文珠師利に下し、文珠之を龍樹に傳へ、傳々して婆藪子（Vasu Putra）に至る。西藏の開祖は此人よりして敎を受けたり。此の派は龍樹所傳の華嚴經。及世親の眞諦論を特殊の聖典となし、自ら稱して果道（phala marga）と誇り、新舊兩派の調和を以て其特點となす。其降伏の主尊は金鋼怖畏者（Vajra Phurpa）にして、其禮拜は多くニマン派の用ふる所を取る故に、二者實際上に於ては全く區別すべからざるものあり。此派は東西藏に於て尙勢力旺昌なり。

（4）ニンマ派

ニンマ（Nin-ma）は古派の義にして、佛敎已前の儀式を保存し赤帽を着る一派にして、禁慾節食の如きは此派に於ては全く之を見るを得ず。此派は蓮花生上師を以て開祖とし、特に其猛惡可怖畏の形相ある種々の化身を崇拜す。其阿提佛陀は普賢にして、金鋼護埵祕說を開顯すとなす。其の諸小派に分裂せし所以は、祕密顯示（Terma）に多少の不同あるに依れり。卽ち蓮花生上師の祕密藏經の嚴穴古塔に發見するもの、甲乙其義を異にし、隨ひて各分裂對峙するに至れるなり。其教理と惣稱して大成就（Mahâutpanua）といふ。祕密の行を修して悉地の圓滿を得るの意に取れり。

佛果の大用を廣說し、後半は之が修因なる菩薩廣大無量の行願を細叙す。其主は卽大乘行願の理想的主尊たる普賢菩薩なり。其客は卽一乘妙智の模範的代表者たる文珠師利なり。二菩薩の間、大聰明の童子善哉を侍ひ來りて、五十三の善知識を歷參せしめ、以て種々の大乘行を開示し、最後普賢を訪ふて豁然開悟するに終る。普賢卽ち現前の大衆の爲に如來の功德海を稱讚して卷を閉づ。[三]般若三藏の別譯四十花嚴は、[四]普賢菩薩既に善哉の爲に如來の勝功德を稱讚し已りて、復十大願王を說きて、極樂世界に導歸するの一卷を加ふ。此一卷の結頌六十有二頌は、卽今論ぜむとする普賢行願贊なり。

既に然り、行願贊は華嚴經中に於て、聖道と淨土とを調和せる至要の偈文なり。法界緣起の深理、この深理上に建立せる崇高廣大の菩薩行、究竟して終に淨土往生の易行に結歸す。華嚴廣大の大地、十住や、十行や、十回向や、十地や、菩薩修行の階段、重巒連峯の勢をなして、起伏する洪濤の如し。無量の願智、百千の三昧を以て莊嚴せる大寶車は、縱橫此間を過ぎ來り、終に其轅を西方に向けぬ。其轍恰も起信論の筆を收むるに及びて、願生淨土を結勸せしと同じきを見る。禮敬諸佛、稱讚如來、廣修供養、懺悔業障、隨喜功德、請轉法輪、請佛住世、常隨佛學、恒順衆生の十大願、之を自行の方面としては、

願我臨欲命終時　盡除一切諸障礙　面見彼佛阿彌陀　卽得往生安樂刹　我既往生彼國已　現前成就此大願　一切圓滿盡無餘　利樂一切有情界（般若譯）

と願し、更に之を利他の方面より、一切有情に廻向しては、

今春已來、予はストラブルグにありて、大莊嚴經原文とパーリ律藏とを研習するの餘課、幸にも吾師ロイマン教授及び英國ケムブリツヂのベンドール教授の厚意によりて、此貴重なる日本梵文を尼波羅國所傳の梵夾と對校研究するの便を得たり。今や其調査略終を告げたるを以て玆に其公刊に先ち、聊か見る所を記し、以て諸賢の高教を乞はむとす。

(一) **十善法語付錄　慈雲和上傳。**
(二) Max Müller's Vajracchedikā 3—4 參照。
(三) Vajracchedikā, Anecdota Oxnoiensia, Ariyan Series vol. I.I. 1881.
(四) Sukhāvatī Vyūha witn two appendices, Anec. Ox. Aryan Series 1. 2. 1883.
(五) The Ancient Palm Leaves Containing the Prajñā-Pāramitā—Hṛdaya Sūtra &. the Uṣṇiṣa—Vijaya—Dhāraṇi. Anec. Ox. A. S. I. 1883.
(六) Sacred Books of the East Vol. XLIX Buddhist Mahāyāna Sūtras. 1894.

一　普賢行願贊內容——所詮の教義——

佛教々理及實際信仰上本贊研究の必要、華嚴大經が大乘佛教重要の聖典にして、其義趣の幽玄廣大、圓頓一乘の極致を窮め、佛教々系上、至高至深の一階を占むることは、固より玆に說くを要せず。[一]實叉難陀譯の八十華嚴に依るに、九會三十九品の最後、入法界品は、前半法界緣起、重々無盡の深理上に安立施設せる、莊嚴崇高なる

二　行願賛の外形——能詮の名句文——佛教語學研究上賛の重要

日本所傳の刊本梵文普賢行願賛は全頌六十有二、二百四十八句題して。

Bhadracari nāmārya Samantabhhara praṇidhāna

と云ふ、三重韻（Triṣṭubh）の詩形を以て成り、韻律[1]ドドハカ（Dodhaka）

—◡◡|—◡◡|—◡◡|—⏓

を用ゆ。其言語は所謂伽陀（Gatha）語を以てす。

大乘佛教文學が自ら二種の梵語より成れるは、人の既に知る所。其一は所謂古典梵語を使用し（勿論摩訶婆羅多の梵語が文法上幾多の特色を有する如く、亦佛教的の特色を有して）、他は大乘佛教に特有なる一種の地方的梵語を用ゆ。此梵語は其語よりすればパーリ及ジャイナ聖語の如く、甚く雅梵語と異ならずと雖、其文法上の變化よりせば、寧ろ俗梵語に近き觀あり。第一種に屬するものは、長行（散錄）を以て成れる經文の多分、少數の偈頌、及び後代に成れる讃頌とす。第二種は主として偈頌（詩錄）を以て成る。多數の佛敎聖典法華[2]、方等、淨土、華嚴諸大乘經の偈頌は此例たり。行願賛亦此に屬す。今左に予が校訂したる賛中より、二例を擧げて、如何に正雅なる梵語と相異なるかを示さん。

(一)　Yac ca Kṛtaṃ mayi pāpu bhaveyyā rāgatu dveṣatu moha-vaśena Kāyatu vāca manena tathā̆iva taṃ pratideśa-

我此普賢殊勝行　無邊勝福皆廻向　普願沈溺諸衆生　速往無量光佛刹〔般若譯〕

と結贊す。西方往生を勸說せる慇懃至れりと云ふべし。故に淨土諸宗の開祖法然[五]上人は、其立教開宗の典據として諸經を援引するに當り、華嚴經を以て淨土傍依の聖典として、高く之を標置せり。

華嚴教義に於ける淨土信仰の詳論は、自ら別に研究を要すべき一大問題也。今は唯行願贊が此研究上、甚だ、重要なるものなるを示さば、卽足れり。而して行願贊が、現今日本佛教の實際信仰上、其教式に少からざる勢力を有しつゝあることゝ、亦輕々に看過すべからず。

佛教各宗徒が通じて入道歸依の爲めに誦する、我昔所造諸惡業の懺悔文は、卽此贊の第八頌なり。台密兩家が晨昏課誦する懺悔、勸請、隨喜、回向の偈、亦此贊中に存す。而して其願生偈は淨土宗徒が、特に喜びて讃誦する所にあらずや。此贊文が日本佛教徒の實際信仰を今に維持しつゝある力も亦大ならずや。されば此贊原文の研究、豈忽緒に付して可ならむや。

（一）縮刷天帙一乃至四。
（二）清涼大疏第四、五周因果の釋に順ふ。
（三）縮天五・六。
（四）全く閱藏知津第一、本讚記述の文を借る。
（五）選擇本願念佛集」。

三　行願賛梵文の異本及び漢譯

（一）　尼波羅所傳梵本

普賢行願賛の同本、尼波羅所傳の梵本 Bhadracarī-praṇidhāna-rāja 普賢行願王偈は、英國ケムブリッヂ大學皇立亞細亞協會、パリ、聖彼得堡の兩大學各之が兩三本を藏す。予が日本梵文と對校したる本はベンドール(一)氏ケムブリッヂ大學文庫佛敎梵本目錄に記載する左の三寫本なり。

第一番號 Add. 899 紙折本　四十一貝の中十五貝より三十一貝に至る。

第二番號 Add. 1471 紙　十葉。

第三番號 Add. 1680 貝葉　六葉。

第一第二は直に原寫本に就きて對校するを得たり。第三は、ベンドール教授管督の下に於て特に寫出せられし、全卷の寫眞を得て校訂を終へたり。此他予は同教授が尼波羅の首府カーツマンドに於て親く寫得したる、同賛最古の貝葉四枚の寫眞をも使用せり。卽ち第十六頌の第一句より第二十五頌第四句の中に至るもの三葉、第二十九頌第二句より、第三十二頌第四句の中に至るもの是なり。露都大學藏の Kasan 刊行の同梵文、及び皇立亞(二)細亞協會及ケムブリッヂ大學文庫藏、健拏毘喩訶 Gaṇḍa-Vyūha 中に含有する同賛の原文は、借觀の約ありと雖、未だ之を手にするに至らず。

mi ahaṃ sarvaṃ 〔讃八〕

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身語意之所生、一切我今皆懺悔 〔般若譯〕

(二) Kāla-kriyaṃ ca ahaṃ karamāno āvaraṇaṃ vinivartiya sarvāṃ saṃmukha paśyiya taṃ Amitābhaṃ taṃ ca Sukhāvatikṣetra vrajeyam. 〔讃五七〕

願我臨欲命終時、盡除一切諸障碍、面見彼佛阿彌陀、卽得往生安樂刹 〔般若譯〕

佛教文學の研究上、此種方言の研究は、目下歐洲梵學界に於て、特に重要として努力する所、而も其鉤章棘句、漢譯の助を借るにあらずんば、解釋甚困難なる比々として然り。吾國佛教學者の務や、此點に於て實に大と云ふべし。而して幸にも我國に於て、此伽陀語の聖典現存し、[三]而も其最古の形式を保有して今に到れるは、梵學講究上尤も珍貴となすべきにあらずや。此讃の研究が佛教語學上に重要たるものたる、豈言を待むや。

(一) 此韻律は佛教外の印度古典にありては、其使用甚だ稀なり。故ステンツラー教授の調査に依れば、天文書 Bṛhads-ṃhita の中二十二頌、Bhartṛhari. 格言集中一、史詩 Naiṣadīya 及び Śiśupalābha の中、各一頌あるのみ。〔ZDMG 1890; Metrische Sammlungen aus Stenzler's Nachlass von Dr. Kühnau〕之に反して佛教文學に於ては、此韻律の使用甚盛なり。大莊嚴經、護國尊者所問經、花嚴賢首品、同十回向品の如き、此例となすべし。

(二) 華嚴諸品及法華の諸偈は、大乘集菩薩學論原本 Śikśasmuccaya edited by Prof. Bendall 1897—1902 に引く原文、及印度佛典出版會社の華嚴十回向品原本 Samādhirāja 方等經の一例としては大莊嚴注原文 Lalitavistara von Prof. Leimann 1902 淨土經は前顯大無量壽經の頌を見よ。

(三) 後段三の三を見よ。

ンシユヤパーカの書寫する所也。

其書法極めて謹嚴明晰、誤脱少なし、此本日本梵文第六頌の次に、左の三頌あり。

ratna-varebhi ca hāra-varebhir
divya-Vici……varebhiḥ
sarva-dhvajāgra-patāka-varebhiḥ
Pūjana teṣu jināna karomi

以最勝寶及華鬘　以最勝天……
以諸最勝上幢幡　我作供養諸勝者

yā ca anāvaraṇa-pratibhānair
buddha-sutair abhinirhṛta pūjā
tān ahu nirhari ekaṣanena
Sarva-jineṣu kṣaṇi kṣaṇi nityam.

諸有無礙明瞭智　佛子持用諸供養
願我運持一刹那　刹那刹那常諸佛

Saṃvṛti-satyam upāgami pūja

尼波羅梵本は三本ともに、其始に左の散躰の小序あり。

Atha khalu Samantabhadro bodhisattva Mahāsattva etān loka-dhātu-param-parān abhilāpyān abhilāpya, buddha-kṣetra-paraman rajaḥ-saman kalpān kalpa-prasarān abhidyotayamāno, bhūyasyā mātrayā gāthābhir gītena praṇidhānaṃ akārṣit.

爾時普賢菩薩摩訶薩、說如是多次第世界廣說已、照見如塵微妙佛刹諸劫數、以多量伽陀及歌讚、廣說此願。

〔拙譯〕

漢譯四十花嚴に於ては、此文短縮せられて單に爾時普賢菩薩摩訶薩、欲重宣此義、普觀十方、而說偈言の文あるのみ。

第一第二は頌數語句、日本梵文と一致す。唯頌文の列序の相異るのみ、二者共に寫誤頗る多く、其傳寫の年代詳かならず。而も其紙質字躰より推せば、近代のものたるは疑なし。ベンドール目錄にも標して近代寫傳と云ふ、但し第一は第二に比して大に古色を存す。

第三は讚文の終に尼波羅古寫經の常例たる、諸法從緣生の偈あり。次に左の奥書を見る。

Samvat [三]A CHA DA Bhādrapada śukra-paurṇa-māsyaḥ śukradine Upāsaka-Cinaiśisya pākasya pustako ayaṃ likhitamiti.

此本、紀元一百八十八年[四]（西歷一〇六八）婆陀羅波陀（八月至九月）白滿月の清淨日に於て、優婆塞チナイ

の文を見よ。

（六） 三頌皆拙譯なり、大方の是正を希望す。

（二） 頌 列 の 異

日本梵本尼波羅梵本に比し、其頌列の順序頗異なるものあり、今之を比較せむ。

已下羅馬數字は、日本梵文の頌を標し、伊太利數字は尼波羅梵本の頌を示す、Jは日本梵本、Nは尼波羅三本の惣符A、B、Cは順次に其第一、第二、第三を示し、Dはベン氏寫眞四葉の代字なり。

一、第一頌より第四頌に至る、日尼の四本、頌列の順序全く同じ。

J	I	II	III	IV
N	1	2	3	4

二、第五第六の兩頌は、日尼其後二句を轉置す。即尼第五頌の後二句は、日本第六頌の後兩句を以て成り。其第六頌後二句は日にありては第五の後兩句なり。尼第三本は第六頌の後更に三頌あり。

J	V a	b	VI a	b	0	0	0
CBA	5 a	IV b	6 a	V b	0	0	0
					6'	6''	6'''

三、第七頌より第十二頌に至る、日尼兩原本頌列全く同じ。

yā para mārtham upāgami satyaṃ
bāhu adhyātmika tān adhimuccye.
Sarva-jireṣu kṣaṇi kṣaṇi nityaṃ.
俗[五]諦所行諸供養　及諸眞諦所行者
衆多自性願勝解　　刹那刹那常諸佛

此本最後の二頌、六十一及二頌は日本梵文及尼波羅の兩本に比し、其順序全く前後す。ベンドール教授寫眞の四葉は字躰より推すに、其古き前者に比して一層なり。其頌の序列は尼波羅の三本と同じ、惜むらくは其全帙を見ざることを。

（一）Bendall's Catalogue of Buddist Sanskrit Mss. in the University Library of Cambridge 1883 pp. 14. 103. 167.

（二）Gaṇḍa-vyuha が華嚴行願品の原文なることは、Mitra の Nepalese Buddist Literature 1882 p. 90 已下の記述並引文、及前顯大乘集菩薩學論原本中に引く所の、諸文を漢譯と對照して明なり。予は其梵本中必ず漢譯行願賛の六十二偈を含有すべきを推し、ロイマン教授を經て、ベンドール教授に之が調査を乞ひ、其然たるを確めたり。同氏が本年七月二十八日吾師に宛てし書中の一節に、"The Bhadracari is contained in the gaṇḍavyuha."

（三）Bühler's siebzehn Tafeln zur indische Paläographie 1896 Taf. IX.

（四）ベンドール教授の Wright's History of Nepale に憑りし推算に順ふ。

（五）眞俗二諦の供養は、法財二供養の別稱なるが若し、善男子諸供養中法供養最（四十花嚴第四十、天六、七四）前後

六、第六十一、二の兩頌は日及尼第一第二、頌列相同じく尼の第三、獨り其順序を顚倒す。

J	AB	C
LXI	61	LXII
LXII	62	LXI

頌文の順序何れが正當なるやは、之を定むる實に至難の問題なり。今は須らく日本梵本頌列の順序が全く不空(三)の漢譯と一致するを以て、之を取らんと欲す。

(一) 前段を見よ。
(二) 後段參照。

(三) 日本梵文の特色

日本傳來の梵本は其公刊の年代明なりと雖、其原本の渡來何れの時にありしやを詳にせず。然れども之を漢譯に比較し、亦之を尼波羅の各本に對照するに、其語々句々の古意を傳ふる、其傳寫の比較的に誤脫少き、頗る信憑するの價あり。是に於てか予は慈雲が精確なる寫傳と出版とに感謝し、梵語學の研究至難なるの當時にありて、よく此の如き公刊を得たるを歎美せざるを得ざるなり。

J	VII	XII
N	7	21

四、第十三頌より第十七頌に至る、日尼兩梵本頌列頗る差異す。日本梵本第十三頌の前二句は尼本にありては第十七頌の後二句たり。而して尼は日の第十三の後二句を以て其第十三の前二句とし、日の第十四の前二句は其後二句を成す。已下遞次此の如くして第十七の前二句に至る。D亦尼の三本と同じ。

J	DN
XIII a b	13 XIII b XIV a
XIV a b	14 b XV a
XV a b	15 b XVI a
XVI a b	16 b XVII a
XVII a b	17 b XIII a

五、第十八頌より第六十頌に至る、日尼四本の頌列全く同じD亦相同じ。

J	XVIII……LX	
N	18……60	
D	18……25	29……23

本は多くは此規則に從へり。然に日本梵本にありては空點（アヌスワラ）を施して Oṁ と記すを常とす。

tān ahu vandami sarvi aśeṣāṁ（一の第三句）

taṁ sugatāṁ stavami ahu sarvāṁ（四の第四句）

の若し。是明に日本梵文が梵語歷史上より見て古躰を存すを示す所、梵學に指を染めたる人は必ず明に之を見む。尼の古寫本 c 及 d に於て往々日と同樣の寫傳あるに徵しても、日が甚だ優れたる寫本なるを證すべきにあらずや。ロイマン教授此點に於て大に日本梵本の優等なるを歎美せり。

四、當然法（ラフタチーヴ）三人稱單聲若くは多聲を書するに日は多く oyyā に作り尼は oyā を以てす。

yac ca kṛtaṁ mayi pāpu bhaveyyā（八の第一句）

yāvata niṣṭha nabhasya bhaveyyā（四六の第一句）

二者に於て伽陀語の純を傳ふるの度、何れが强きかを思考せば自ら日の尼よりも古躰を傳ふるの優なるを見べし。

五、更に日本梵文の正確なるを證する有力の左劵は、本贊の漢譯なり。試に左の一例に徵せよ。

（日） Peśala-pāramitāsv abhiyukto（十九の第一句）

（尼） ye khalu pāramitāsv abhiyukto（同）

二者韻律に於ても意義に於ても、何れを取るも通ぜざるにあらず。而も Pe と Ye とは梵字酷だ相似、kha

日本梵文はi及uの兩母音に就きて、其長短を混用するが如し。Bhadracari を Cari に寫し Pūjana, Pūrṇā, Viyūha を Pujana, Purṇa, Viyuha に作るが如し。其傳寫の誤れる尼波羅本の幇助に依りて、始めて炳明に至りしもの、亦之なきにあらず。續て、

tahiṁ Jina-maṇḍals sobha citimme

の句に到らば、誰か之を快讀し得むや。尼波羅本は此正文を傳へて Sobhiti ramye と寫す。是に於てか意義全く通ず。此の如きの例尚一二を數ふべし。若夫其小瑕疵を指摘せば、亦議すべきもの尠少にあらず。然りと雖、大躰に於て古代の形態を保存し、原作當時の彿を傳ふること、時に尼に優るものあり。乞ふ二三の例を左に摘示せしめよ。

一、尼波羅の新寫本（第一、第二）によりては、讃中所々に出づる十方の原語を daśa-disi に作る。日本梵文は古躰を傳へて daśa-d-diśi と寫す。是韻律上疑もなく日本梵本の書寫正しきを證し、尼の古寫本第三亦之を證す。

二、菩提樹王の梵語、日にありては badhi-drum'indra と寫され、尼にありては bodihdrumêndra に作る。韻律上に於ては何れを取るも妨げずと雖、日は寧ろパーリの書法に近く、伽陀語の純を傳へ、尼は雅梵語の合聲法に拘泥して古躰を失せし跡あるが如し。

三、aの語尾を有する多聲、男性、業轉聲（アキユサチーヴ）は、梵文典の正則に從へば、當に Oān と書すべく、尼波羅の諸寫

不空	般若
XIV	14
a	a
b	b
c	X
d	X
XV	15
a	cXIV
b	d
c	aXV
d	b
XVI	16
a	c
b	d
c	aXVI
d	X
XVII	17
a	c
b	d
c	aXVII
d	d

abcdは順次に一頌の四句を示す。Xは不空譯に存せざる句なり。

三、第十八頌より第四十五頌に至る兩譯其頌列を同うす。

四、第四十六頌已下、兩譯の頌其順序甚差異す。前譯の第四十六は後譯の第五十二をなし、順次に前譯第五十四は後譯の第六十頌に當る。而して後譯第四十六は前譯五十五と一致し、已下順次其第五十一は前譯にありて第六十頌に位す。

前譯	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
後譯	52	53	54	55	56	57	58	59	60	46	47	48	49	50	51

五、第六十一第六十二の兩頌兩譯の順次全く同じ。

但第六十一は後譯の文新譯と一致せず。大躰に就きて兩者を比較するに、後譯は前譯に比し語句甚流暢、文字亦煉熟し、意義明了なり。前譯は語々句々、頗る生硬難澁にして、意義通ずるに苦む所なきにあらず。而も力めて原文の語句を直譯し、其原語を飜譯する一字も忽緒にせざる苦心は、歴々之を見るべ

と sa と亦往々にして混じ易し。故に二者何れか寫誤ならざるべからず。之を判ずるものは卽漢譯なり般若は譯して曰く勤修清淨波羅蜜、不空は飜して妙波羅蜜常加行となす。而して尼の最古本ロ亦日の如く寫傳す。日の正當なる實に瞭然たるにあらずや。

(四) 漢　譯

本贊の漢譯二あり、共に盛唐時代の譯に成る。

一、普賢行願贊一卷（縮、閏十五、十七）不空三藏譯、天寶四至大曆六年（西曆七四六至七七一）

二、普賢廣大願王清淨偈―大方廣佛華嚴經普賢行願品
　第四十卷中所出（縮、天六、七六―七七）般若三藏貞元十一年（西曆七九五）十一月十八日譯已

兩譯頌數同じく六十二、其語句大躰に於て相合す、頌列の順序は甚だ差異す。

一、第一頌より第十三頌に至る兩譯の頌列全く同じ。

二、第十四頌より第十七頌に至る、兩譯甚だ頌列を異にす。後譯は第十四頌の後二句全く異文たり。而し其第十五前二句は前譯第十三の後二句を以て成り、其後二句は前譯第十五の前二句たり。第十六頌は前譯第十五の後二句を前二句に充て、第十六の第二句を後二句とす。但し第四句稍前譯に異なり、第十七頌前二句は前譯第十六の後二句を以て作り、前譯第十七の第一句と第四句とは其後兩句を成す。而して前譯第十七の第二第三兩句は後譯に於ては全く之を缺く。

れたり。同教授の厚意實に大と云ふべし。ベンドール教授は、終始同情を以てケムブリヂ大學及自家所藏の珍籍を貸與し、華嚴行願品原本に就きては、特に本賛搜索の勞を取られたり。本賛研究中、予は自由に荻原雲來氏の縮刷大藏及歐文の書籍を使用せり。同氏の言に由りて、大に得る所のもの亦之あり。而して今に使用する梵本刊本は、淨土宗第五教校長土川善澂師が一年有餘各地搜索して惠贈せられたるものに係る。是等諸先輩に對して、予が眞摯の感謝を捧ぐるは、予が窃に光榮とする所なり。予は筆を收むるに臨み、本賛中の一偈を誦して、永く諸先輩指導補翼の恩を記せむ。

Ye pi ca mitra mamaṃ-hita-Kāma
Bhadra-cariya nidarśayatārāḥ
tebhi samāgamu nityu bhabeyā
teṃs ca ahaṃ na nirāgayi jātu!

諸有善友益我者　爲我示現普賢行　其彼常得而聚會　於彼皆得無厭心（不空譯）

明治三十五年八月廿日

シュワルツワルド　トリベルク在ショーナハ村に於て

し。此點に於ては不空の譯、其後譯に優る所あり、乞ふ試に左の一例を見よ。

一　我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋痴
　　從身語意之所生　一切我今皆懺悔　（般若）

二　我曾所作衆罪業　皆由貪欲瞋恚痴
　　由身口意亦如是　我皆陳說於一切　（不空）

前に擧げし梵文と比較せば、兩譯の特色自ら明かならむ。

兩譯を日本梵本に比するに、不空の譯は第一頌より第六十二頌の終りに至るまで、首尾其順序全然符合す。其語句亦善く相合す。般若の譯は頌列の不空所譯に異なる如く、正に日本梵文と相違す。而して不空譯の讃後に見る所の速疾普賢行陀羅頌、亦日本梵本に於て之を見るを得。

曩謨、悉底哩也、地尾迦南、怛陀孽哆喃、唵、阿戌嚩羅、尾擬儞、莎嚩訶。

Namaḥ strya dhivikānāṃ tathāgatānāṃ Oṃ āśuyaravehadi svāhā.

已上は普賢行願日本梵文に就て研讃したる大要なり。頌列に就きては猶論ぜむと欲する所なきにあらず。健拏毘喩訶梵文を檢討せる後、更に之を世に問ふ榮を得むか。

吾師ロイマン教授は此研究に就き、其得意のプラクツト語よりして、重要なる教示を與へられしこと甚だ多し。亦予を英露の諸碩學に介し、貴重なる古寫本を借覽するを得せしめ、或は當に借覽を借べき約を得せしめら

掛錫中、天台山行滿 Prnidhārām (當作 dhāna)-Samudra (願海の梵語)

慈雲は此(二)手寫本を其高足慧友に傳へ、友は三十餘年の後、之を其門弟に授與し、傳へて高山寺に珍藏し、その二支院主證誠密護は之を行滿に贈りしこと、記文甚だ明なり。

此珍貴の寫本は、表裝淡青色の紋絹を以てし、表紙前面金紙を貼し、題して普賢行願賛梵本といふ。紙は鳥の子の稍薄質なるを用ゐ、横八、二仙迷、竪二七、五仙迷、一面一百〇四折、表裏通計二百〇八折の折本なり。行願賛梵文は其文下行し、毎折二句を書し、表面の全折を盡し、裏面の第二十七折に至りて止む。餘す所の七十餘折は本文の注解、語彙考證を記載し、之に添ゆるに彌陀佛異名、大日經中所出の梵讃等を以てす。本文の間には朱若くは黒を以て、縱横に注解音釋を挿記し、或は異本を對校し、或は漢譯を對照し、玄朱雜厠、細大の文字充塡して、紙上空白を餘さず、其精攻實に思ふべきものあり。付する所の本文語彙は博く藏中の音義神咒藏外の典籍を援引して、梵語の意義を明にす。其獵涉の勞寔に多とするに足る。此等の挿註語彙等、過半は慈雲の筆に出で、餘は慧友行滿等の補記する所に就る、字體よりして之を斷する甚だ難からず。

慈雲は此寫本を作るに當り、四種の異本を使用せり。第一折の挿記に曰く、

行願賛、餘得四本、一則高野山無量壽院本、其文下行、一則同山介〔＝蓮華〕三昧院、一則堺海雲堂、亦下行、々不拘句、一得之攝州小曾根邑海輪寺者、其文右行。

と此苦辛手寫の謄本は、實に律師が卓絶なる夫の行願賛の梓行を見るに至らしめたり。土川師は此珍本を贈る

拙稿「普賢行願賛の日本梵文に就て」の補遺

（明治三六、二、東洋哲學第一〇卷二號）

一　慈雲尊者手寫の行願賛梵本

北獨逸の巡遊を終りて後、餘は行願賛梵本の研究に就き最貴重なる材料の一を淨土宗第五教校長土川善澂師より得たり。是卽慈雲尊者手寫の行願賛梵本なり。表紙前部の裏面に記あり。

享和二年（西暦一八〇三）壬戌三月二十一日、慈雲（Ācarga）賜之、予生々世々、憶持護持云爾、慧友僧護記（印あり）

羅馬字は原文哲梵を以て記せしを示す、括弧は拙註なり、已下亦此の如し。

後部の裏面に記して曰く、

歲次天保五年（西暦一八三四）六月二日、以（於？）高山寺十無盡院、一交了、相承之了、再校了、Prajña-mitra-raxa 此云慧友護。

脊面本文の尾、語彙に次ぐに、左の奥書を以てす。

是行願賛梵本一卷者、慈雲大和上手書也、吉祥雲院密護、十無盡院證誠爾 Ācarya 法公、暗之、願海忽遇大王膳、抃歌踏舞、歡々喜々、家珍第一者也、維時安政丁巳（四年西暦一八五七）秋八月五日、淸瀧峰石雲庵

圓行は天長三年〔西暦八二六〕入唐し、承和六年（西暦八三九）歸朝し、其年十二月十九日請來目錄を上れり。慧雲禪師請來教法目錄の中に、

普賢讃梵語一卷（餘二、七七、裏）

と、是亦行願賛の梵本ならむか。慧運は承和十四年（西暦八四七）六月三十日歸朝上表したり。運は亦百法論唯識三十論の梵本をも請來したること其錄に見ゆ。此二梵本幸に今古刹に存せば、實に世界梵學界の至寶なり。圓行の入唐するや、長安青龍寺義眞に從ひて密教を傳習す。義眞は惠果の弟子法を同門の義操に嗣ぐ。行が請來する所の密經秘軌が多く不空所傳のものたるは言を要せず。乃ち知る其普賢行願賛の梵本も亦不空飜傳の原文たるべきこと、慈雲の用ゐたる四種の寫本は、此請來本を展轉傳寫したるものならむ。雲が手寫本及び其刊行本が、首尾全く不空の飜譯と一致する、實に之を證して餘あり。

三　行願賛最古の漢譯

余は前稿に於て行願賛に二の唐譯あるを述べたり。此二譯の外更に最古の一譯あり、縮藏華嚴部に收むる、文珠師利發願經是也。閱藏知津の一に「文珠師利發願經二紙餘、東晉迦維羅衛國沙門佛陀跋陀羅譯、大略如普賢行願偈、而是五言」と、飜譯の年代は東晉元凞二年〔西暦四二〇〕にあり。南條師の英譯明藏目錄一三三六亦此經の行願賛最古の譯にして其頌の完たからざるを記す清涼行願賛別行疏に、亦、

の次、書して曰く、此手寫本は慈雲が行願賛刊行の最初の原稿として見るを得べしと、蓋し過當の言にあらず。慈雲が梵學復興の爲に盡瘁し、其研究に非常の辛酸を重ねしは、此手寫本に於て、歴々之を覩るべし。乃此謄本は日本佛教文學史の上に於て優に至寶の一たるを得べし。左に本文附錄の語彙中より二三を抄出し、以て如何に其精探の苦、博渉の勞が巨大なりしかを示さんと欲す。

(二四) Abhinirhari 金界供養會、西右眞言、阿鞞彌珂利出現也、略出經云所出。

(四九) Kunitra Ku 是不好義、應音、究那羅此譯云惡人(下略)

(八四) Tatra 因明疏一曰、云此中(中略)明燈抄曰、凡西方法欲發言云怛怛羅、唐云此中。

梵學傳を失し、零碎なる聲明の外、一の字彙なく一の文典なき時、一語を檢出する尚容易ならず。此間精攻玆に到る、感嘆せざるべからずや。揷記語彙の中、間誤謬あるが若きは、寧ろ其研鑽の苦を證するに足るのみ。

二　行願賛の日本に渡來したる年代

行願賛梵本の我國に渡來したるは、遠く西曆九世紀の昔にあり。縮刷藏經餘二、四家請來錄の中圓行和尚の錄に記す。

普賢菩薩行願賛一卷梵漢兩語相對着本(餘二、七六、表)同錄復た記す。曰く、

梵字普賢菩薩行願賛一卷梵字漢字相對着本梵字悉曇一卷、右二部、雖先來、而爲用證本(餘二、七六、裏)

唐	晋
XIII a	0
XIII b	12
XIV a	12
XIV b	13
XV a	13
XV b	14
XVI a	14
XVI b	15
XVII	15
XVIII	15
XIX a	15
XIX b	

a b は一頌中の前二句及後二句なり。

3、唐第二十頌より第四十三頌に至る二十四頌は、其中稍異文なきにあらずと雖、順次に晋の第十六頌より第三十九頌に合す。

唐	晋
XX	16
⋮	⋮
XLIII	39

4、唐第四十四頌は晋の最後の頌也。唐第四十五頌より五十四頌に至る十頌は、晋譯之を存せず。唐の第五十五頌は晋の第四十頌たり。已下次を追ふて唐第五十八頌は、晋の第四十三頌を形成す。唐五十九頌已下は晋譯之を闕く。

自古及今、惣有三譯、初卽晋朝三藏佛陀跋陀羅、唐云覺賢、譯出一卷、五字成偈。

と云へり。

此經は頌數四十四〔南條師目録に四十三と記するは恐くは寫誤か〕不空の譯と對比するに左の異あり。

1、第一頌より第四頌に至る、二者多少の相異あるも、大體に於て相合す。不空譯の第五頌は、覺賢譯に於ては第六頌たり。その第六頌は晋譯之を缺く、唐譯第七頌は、晋にありては第五頌たり。唐譯第八頌より第十二頌に至る五頌は、晋にありては順次に第七頌より第十一頌たり。

晋	唐
1*	I
2	II
3	III
4*	IV
6	V
0	VI
5	VII
7	VIII
8	IX
9	X
10	XI
11	XII

＊は稍異なる頌なるを表す。

2、唐譯第十三頌の前二句は、晋之を缺き、唐の後二句と第十三の前二句とは、晋の第十二頌たり。已下遞次此の如くして第十六頌の前二句に至る。唐第十六頌の後二句と第十九の後二句とは、晋の十五頌なり。唐の十七、十八の兩頌は晋之を缺く。

華嚴の梵本寫本中最も古く、且つ最も貴重なるもの也。全篋貝葉を用ゐ、葉數二百八十九枚、[四]鈎體の梵字を以て書す。其書寫は尼波羅紀元二八六卽西曆一千百六十六年難陀（Nande）王の御宇に就る。

此梵本の含有する行願讃梵本は、前稿に擧ぐる所の尼波羅本第一第二と同本なり。其頌列同く之と一致す。但し其字句に至りては此梵本に依りて、日本梵本の優良なるを證するもの甚だ多し。

五　行願贊の西藏本

蒙古學者として著明なる Anton Schiefner は[五]「亞細亞雜纂」の第一號に、北京より聖彼得堡大學に送致したる圖書の要目を報じ、其中に記す。

第百二十三番　Ārya-Samantabhadra-carya-prṇaidhāna-rāja 梵語及西藏語十九葉。

此本今聖彼得堡大學に藏す。予は同大學教授にして露都大乘佛典出版會主幹なる d'Oldenburg 氏の厚意に依り、此書を見ることを得たり。

此本の公刊年代は知るに由なし、而も清朝に就りしは疑なし。原文は[六]Lanca 體の梵字を用ゐ、之に西藏字の音譯と藏譯とを付す。印刷極めて鮮明毫も誤脫過剩なく亦よく古體を存す。

此本頌列の順序は全く尼波羅本の如し、其小序あることも亦相同じ、第六頌の次に前稿三の一に記する尼第三本に見ゆる ratna-varebhi の一頌あり總て六十三頌を成す。此本に據りて尼波羅本に蠹蝕せる文字を補ふことを

晋	唐
44	XLIV
0	XLV
…………	…………
0	LIV
40	LV
41	LVI
42	LVII
43	LVIII
0	LIX
…………	…………
0	LXII

晋譯の如何なるやは、左の二偈を前稿二に擧ぐる「讃八」及び「讃五七」に比較せば、略其一般を知るに足るべし。

一、我以貪瞋痴　造一切惡行　身口意不善　悔過悉除滅　（偈七）

二、願我命終時　除滅諸障礙　面見阿彌陀　往生安樂國　（偈四二）

晋譯と唐譯との關係を研究するは、佛教聖典史上に極めて趣味あり、極めて有益なる問題なるべし。乞ふ他日を待ちて、卑見を開陳することを得むか。

四　四十華嚴梵本中に含有する普賢行願賛

余は龍敦皇立亞細亞協會長リスデヰド教授の厚意に依りて、四十華嚴の原文 Gaṇḍavyūha 健拏毘喩訶に含有する行願賛梵文をその日本梵本と對校するの幸を得たり。

此梵本は[三] Cowell 及 Eggeling 兩教授編纂の皇立亞細亞協會佛教梵典目錄に記する所の珍本にして現在四十

（七）至元勘同法寶惣錄六（結八、六六裏）

（八）Coma's Analysis of the Kahgyur and Bstangyur (Asiatic Researches vol. XX., I. 1836—1839). Feer. Annales du Musée Guiget. Tom. 11. (1881)

（九）Analysis of the Kangyur pp. 401—406.

（一〇）Mélanges Asiatique I. p. 421.

得たり卽此頌第二句は左の如し。

divya-vicitra-vitāna-varebhi 以最勝天雜色蓋。

(七)至元錄に據るに行願贊は西藏大藏中に闕くことを記し、(八)Csoma の西藏兩藏目錄亦行願贊の名なし。其飜傳の何れの時に就りしや未だ詳ならず。(九)西藏華嚴部 Phal-Chen 第四十五章 Bya-ng-po-spyod-pahi-smonlam 普賢行願品中に本贊存するや否やは、未だ檢討に及はず同好者の示教を仰ぐ。

此贊亦蒙古(一〇)譯あり、露都大學其刊本を藏す。本贊の廣く大乘佛敎徒の間に誦傳せられたる見るべき也。(明治三十五年十二月十五日南獨ストラスブルグ)

註

(一) 十善法語付錄慈雲律師傳を見よ。

(二) 大唐内典錄。三

(三) Cowell and Eggeling; Catalogue of Bud. Skt. Mss in the R. A. S. (J. R. A. S. 1875) p. 2.

(四) 此體は第十一世紀に於ける尼波羅寫經の特點として見る可きものなり。ベンダル氏の目錄（前稿三の註一に記す）p. 174. 及其表 112. に記載する Sādhana-mālā -tantra は此梵文と其書寫二年を後るゝのみ、之と對照する時、其字體、寫風甚だ類似し、同一年にあらざるやを疑はしむ、尼波羅紀元を西曆に換算することは Bendall 及び Wright に依れり。

(五) Mélanges Asiatique 1. 1852.p. 405: Bericht Über die neueste Büchersendung aus Peking von Anton Schiefner.

(六) Csoma's Tibetan Grammar Appendix p. 38

尼波羅の六本、西藏の一本及慈雲の手寫と刊本とを合せて都て九種の異本を對校せる同贊及之に關する研究は畏友高島圓兄の義俠と石川照勤師の寬大なる扶助に依りて釆澤氏及江湖諸賢の叱正を仰ぐの時、甚遠からずして至るべし。茲に此好機を利して石川高島兩氏に對し公に深謝の意を表す。

梵文普賢行願賛渡來年時に就きて釆澤義道君に答ふ

（明治四一、一〇、新佛敎第九卷第二號）

梵文行願賛渡來の年代に就きて、去る明治三十七年、拙稿行願賛討究の補遺として、他の數行と共に之を報告したり。文載せて東洋哲學第拾卷第二册八十七頁已下に出づ。予は此拙文中入唐四家請來錄中圓行和尙（縮藏餘二、七六紙右及左）、慧運禪師（同餘二、七七紙左）の兩請來錄に依りて、其渡來の年代を明にし、且史傳と梵漢對校との結果に照らして、邦傳の同賛梵文は、正に不空三藏所傳のものなるを斷定したり。蓋邦傳の梵文は、首尾悉く不空の譯に符合すれば也。乃ち傳來の系統は、

不空——慧果——義眞（慧運、圓行）……慈惠

なるを說き、この梵本を尼波羅本に對して南傳本と假稱し置き、邦傳文の價極めて大なることを明にしぬ。當時圓行の記載中、

梵字普賢行願賛一卷（梵字漢字相對着本）。梵字悉曇一卷。右二部雖。先來而爲證本。請來。

の文あるを見て、一度野山大師請來錄を披かむ意切なりしも、歐西の客遊此種の書を繙くの便乏しかりし爲果さずして今に及べり。然るに玆に幸にも釆澤氏の文を讀みて、積年の望を達し、且つ發明する所少なからざるものあり。感謝曷ぞ勝へむ。

多きこと六品、漢は全品三十九にして、蕃は四十五なり。今圖して兩本の同異を比せん。

漢	蕃
1—3	1—3
(4	4
	5
	9
	7
	8
5)	6
6	10
—	11
7—38	12—43
—	44.
39	45

圖に示すが如く蕃本に於ては、漢の世界成就品と華藏世界品の二品が廣開せられて六品となり其說明逘に精細なるが若し。或は此間漢本に存せざる他品あるや否やは、余未だ蕃本を手にするの機會なきを以て之れを斷定する能はず。亦た藏の第十一品と第四十四品とは、其品名漢に存せざる所。別品なりや或は又他品より別開せられたるやは、尚精細に研究を要する所なるも、要之、蕃本と漢本とが其原本を異にしたりしは瞭々として疑ふべきにあらず。而して西藏の史乘に見るが如く、當時幾多の漢僧西藏に滯錫したるを以て、蕃本の飜傳に際し、譯場に列し之を漢譯と對照し校合し、以て飜譯の完美を期せしが如きは、想像し難からざる所。至元錄の記載は謂ふに此の一面の事實を傳ふるものにあらざるなきを得んや。

西藏に於ては華嚴を稱して「佛會」Sans-ryas-phal-po-che といひ、之を略呼して單に「會」Phalchen と稱す。是梵語の佛陀阿瓦坦薩甘（ブドハアヴダムサカ） Buddhāvataṁsaka の正飜なり。西藏の書には此梵名佛字を略去し、但に阿瓦坦薩甘

華嚴經の梵名に就きて

（明治三六、六、宗粹雜誌）

華嚴大經の梵名は南條文雄氏の英譯[一]明藏目錄之を Avataṁsaka 阿瓦坦薩甘となし、吾國の佛教研究家、亦歐洲の學者に倣ふて此名を、襲用するを見る。此語亦嚴麗雜飾等の義あり。之を用ゆる頗る適當なるに似たりと雖、然れども余は考ふ。是現存漢譯華嚴の適當なる原名にあらで、其實は蕃譯華嚴の梵題を借り來りしに過ぎず。若し漢譯華嚴の梵名を正くせんと欲せば、宜く之を改めて Gaṇḍavyūha 儼拏驃訶となさゞるべからずと。

華嚴梵本は他の[二]大乘經に屢見るが如く、種々の名ありしことは事實なり。此事既に[三]淸凉の大疏中にも述べたり。而して漢譯と蕃譯とは其所傳の梵本、名題を異にせるが若し。

（一）西藏所傳梵本の題號　[四]至元錄の記する所に依るに、西藏華嚴部は漢本より譯せられたるものなりとす。然れども之をチョーマの蕃兩大藏目錄に稽ふるに、此記事は頗る取捨を要すべきを見る。チョーマの[五]叙述に依るに、蕃藏中にありては華嚴部は前藏 Kangyur の第三部に位し、[六]印度學師濕連怛羅菩提 Surendrabodhi 西藏譯主毘盧遮那洛佉怛 Vairocanabaxita の譯する所たり。此二飜經家は、西藏王乞巴俠瞻 Kairalpachen の朝、王命を奉じ、他の西梵蕃土の學僧と共に大に巴經飜傳に功あり。[七]王の治世は西曆八七八より同九〇一に至る。漢本八十華嚴の譯に後るゝもの約百八十年乃至二百年なり。而して藏譯の華嚴之を漢本に比するに、其品數漢よりも

の梵本中に於て之を見るべし。

現時華嚴梵本は唯二品を存する已耳。即ち第二十六の十地品と第三十九の入法界品のみ。此二者は共に尼波羅九大聖經の中にありて其數通の寫本亦ケムブリッヂ、パリ、ロンドン等に珍藏せらる。十地品は漢名の如く Daśabhuniśvava と稱し入法界品は呼で Gaṇḍavyuha といふ。是正に佛典註解家の所謂總則別名の釋例を適用すべきもの、最初各品を含める總名が轉じて共一品の爲に占有せられたるものなり。余は此梵本の大英皇立亞細亞協會藏貝葉、寫本及びケムブリッヂ大學藏の紙本に就きて、之を漢譯と對照するの次、其末葉に左の如き文あるを見たり。

Ārya-gaṇḍavyuhāt mahādharmaparyāyād yatha labdhah Sudhah Sudhana-Kalyāṇamitraparya-pacita-caryāikādaśah samâptah.（聖華嚴大法典よりして得たる義財智識・承事行第十一竟る）

此文は明かに現存の儼拏驃訶卽入法界品原本が元と大本儼拏驃訶卽華嚴の一部にして其題名は、要するに總卽別名に過ぎざるを證して餘りあり。而して行願品に此の如き名義を用ゆるは、四十華嚴の後に附する烏荼國王が（二）唐德宗帝に行願品梵本を獻ずる疏中に於ても之を見ることを得るなり。

大方廣佛華嚴經百千偈中所說、善財童子親近承事佛刹極微塵數善智識行中五十五聖者善智識入不思議解脫境界

普賢行願品

是を前の譯文と比するに廣略の異のみ。而してベンドール教授校訂の大乘集菩薩學論の原本 Siksanuccaya

と呼ぶ。此語は元梵動詞の "fan"「擴充する」より出で、之に ava の字冠を加へて「覆布する」「擴張する」の意を有し、名詞となりて後、華鬘、嚴飾等の意味にて梵語古典中に用ゐらる。西藏の譯家は實義に隨つて之を「集會」「聚合」の意を有する Phalpo-che を以て之に充てたり。蓋し梵土の風として聚合、集會を華鬘に譬ふるは美文の常例にして、藏中の本生を集めしものを本生鬘論と言ふが如き其適例なれば也。

至元錄は元西藏の喇嘛が漢僧と共に、元朝の命に依りて編纂したるもの、其記する所の經典の梵名が西藏所傳のものたるや論なく、隋つて之を直ちに漢本に適用するの結果は、其中に適と不適とを見るは免れ得ざる所にあらずや。華嚴の如きも此一例たり。卽西蕃の學僧は其所傳の梵名に從ひて直ちに之を[8]阿瓦坦甘となし、漢本別に之が梵名を有することを硏めず、終に華嚴の梵名に「佛會」の原語を用ゐるに至れる也。泰西の學者、此經を記するもの、例せば[9]ワシリエノフの如きも、專ら其材を西藏に取りたるを以て常に阿瓦坦薩甘の語を用ゐて、之を漢譯の華嚴に冠らしめたり。

(二) 漢本華嚴の梵名　漢本華嚴の梵名は健拏驃訶 Gaṇḍavyūha) を譯したるものなり。[10]清涼の大疏、明に之を記す。

摩訶佛略 Mahavaipulya 勃陀 Buddha 健拏 Gaṇḍa 驃訶 Vyūha 修多羅 Sūtra 此云大方廣佛雜華嚴飾經。今略雜飾二字已耳。

清涼は譯場に列し梵土の三藏と友交多し、其記載の信を措くに足るべきや論なし。而して此梵名は亦現存華嚴

（五） Choma's Analysis of Kangyur (Asiatic Researches Vol. XX pp. 401—406)

（六） 蕃名の對譯字は藏中彰所知彰論の用字を借る（藏、四、九、右）

（七） Schmidt's Geschicht der Ostmongolen und ihres bürsten Haus. ss. 49. Schlagintweit's Die König von Tibet s. 59

（八） （四）を見よ。

（九） Wassiljew : Buddhismus (Dutech. übersetz) s. 171.

（十） （三）を見よ

（十一） 天六、七十七左、

（十二） Bendall's Ciksasamuccaya. 2. 5. 8. 34. 36. 95. 101. 122. 149. 等之に相當する漢譯大乘集菩薩學論（暑三）

（十三） Kern : Buddhismus II s. 510.

中、儞拏驃訶の名を擧ぐる所、漢譯に於ては渾て之を華嚴と譯せるが如き、亦有力の證となすべきなり。

此の如く儞拏驃訶なる名が漢本華嚴の原名なるは疑ふ可らずと雖唯儞拏の字之を解する頗る難し。現今印度及歐洲の梵語字典中には儞拏には清涼の云ふが如き雜華の義なし、(三)ケルン氏の如きも之を解するに泡沫莊嚴の義を以てし、曰く如幻如夢の義を詮すと。然れども是一家の說に過ぎず、謂ふに佛敎梵語は其用法、通途印度古典の用法と異れるは佛敎古典研究家の之を知る所、乃ち此語の如きも通途所用の意義の外清涼所釋の如き意を有するにあらずや、余は未だ梵漢佛敎文學中、此語が雜華の意に於て用ゐられし文に接するを得ざれば明に然く斷言するを得ず、或は此語が現時用ゆる Gaṇḍa と全然語原を異にせるプラクリットより來りて輾轉時を經て偶々之と同形を呈したるにあらずや。是亦深く研究すべき所なりとす。大方の諸君子此等の點に付きて、指教に吝なるなくんば幸甚し。(明治三十六年四月八日ストラスブルグ)

× × ×

註

(一) 南條師英譯明藏目錄、三十三頁

(二) 華嚴の十回向品を金剛漢經 Vajradvaja と呼び、演の月光童子經を尼波羅にて三昧王經 Samādhirāja と稱す。
此他、部執により、宗派に從つて經名を異にするは印度の常例なり、

(三) 大疏第三(縮藏歲一、十七左)

(四) 至元法寶勘同總錄二(結八、五十左)

十三章干闐古代史 "The early history of Li-yul (Khotan)" pp. 230—240 となす、記述する所、大抵西域記の所傳を出でずと雖、上座大衆兩部傳來の年代、佛教興廢の事跡、其滅亡の時代等、錄して甚詳細なるものあり。干闐佛教の研究には、必らず參照に資すべきの書なり（此書本宗高等學院其一本を藏すと覺ゆ、就きて檢せられよ）

佛人にして著名なる漢學者なるレミュザ A. Remusat に『干闐市史』"Historirede la Ville de Khotan" Paris 1820 の著あり。漢已來の諸史中、干闐に關する記事を拔萃して、其政治的方面の沿革を敍述したるものなり。

（二）**歐洲に於ける干闐佛教研究の現狀**　干闐及其附近の古代佛教國、卽ち現時所謂中央亞細亞は、今や大に歐洲東洋學者の耳目を集中し來れり。蓋し既往十年の間該地方よりして、時々貴重なる歷史及言語學の資料を發掘し、經典記錄の斷片、古錢古壁畫等、歷々として同地古代の政態敎勢を示し、漢土載籍の記事を明確にするあり。例せば現時彼得堡及巴里の兩大學圖書館に藏する佉盧(カロスティ)文字を以て書せる法句經斷片の如き（樹皮經の古代西域地方に行はれしことは、僧傳、經錄之を記する所あり。佉盧字のことは悉曇字記などに見ゆ）Weber, Macartney, Bower 諸家の蒐集に係る各種秘密部經文の如き、同地を經て西藏の首都拉薩に入り、地理學上偉大の名をなしたる旅行家 Sven Hedin の討究したる事實の如き、去歲伯林に歸る佛教美術學者 Grunwedel の同地佛教古跡探檢の如き、一として佛教史家の注意すべき事項にあらざるはなし。三年前余は中央亞細亞發見の古經典公

二楞學人に寄す（于闐迦濕彌羅の佛教に關し）

（明治三七、四、宗粹雜誌第八一第四號）

于闐、迦濕彌羅兩國佛教の討究は、佛教學者に取りて甚だ緊要なる問題なるに關はらず、本邦未だ之に指を染めたるものあるを聞かず、二楞學人が「宗粹」第七卷の第十第十一に公表したる二文は、實に該問題の開拓者を以て目すべきもの、學界の爲甚懌ぶべしとなす。其搜索の勞や、眼識の明や、豈讀書界の感謝と賞讃とに價せずとせむや。今學人の敍述を讀みて、少しく自家が此問題に就き、聞見したる二三を列記し、遙に之を學人に寄す。駢拇贅疣、固より其譏を甘ずべしと雖、其間亦多少の資料を學人に供給するを得ば、幸何ぞ之に過ぎむ。

（一）于闐佛教研究の史料、漢土載籍の于闐に關する資料の外、唯一の材とも稱すべきものは、西藏所傳の各種于闐の記傳なり。西蕃兩大藏の中に、左の四部の書を現存す。

一、于闐記（續藏第九十卷）

二、于闐懸記（同）

三、僧伽伐達那 Sanghavardhana 羅漢懸記（同）

四、牛頭山 Gośrirga 懸記（正藏（カンジユール）、經集（ドー）第三十卷）

此四部所載の大要を合揉撮錄したるもの、之をロツクヒル（Rockhill）〔佛陀傳〕"History of Buddha" の第

2. Stein ; Sand-burid Cities of Khotan, London 1903.

前者は同氏が研究公表の序報として出したるもの、其蒐集になれる資料の重要なるものは、大抵此中に圖示したり。後者は寧ろ紀行的にして通俗の書なりと雖、資料の豐富、記事の精確なる、佛敎史家の机上一本を具ふ可き價あり。

歐洲に於ける于闐研究の現狀略上述の如し。二楞學人の討究は期せずして自ら現代泰西學界の一好問題と接觸したるなり。余が學人の論文に對して一樣ならざる興味と尊敬とを有するものは蓋是が爲也。

（三） 迦濕彌羅佛敎の史料　印度に記錄史傳の如きもののなきは、世の遍く知る所、唯一之あるは迦濕彌羅王朝の記錄のみ。卽ち有名なる Raja tarangini 是也。此書は西曆紀元十一世紀の頃、迦濕彌羅の學者カルハナ（Kalhana） の編述する所にして、同國歷朝の諸王を傳し、之に其時代に起れる事實を編纂す。筆者自在天外道に隷屬すと雖、佛敎に對しても亦頗る好意を有し、嘗て一大佛像の王のために破毀の難に遇はんとするを救ひたることあり。故に其記す所甚公平にして偏黨の痕なし。佛敎が同地に興廢を閱せる跡は、此書よりして亦之を窺ふを得べく、西域記と相照して發明する所多し。唯佛敎硏究者に取りて憾とすべきは、其主とする所政治上の方面にあるを以て、佛敎敎理の變遷沿革の如きは、毫も此書よりして得る所なきを。

此書原文は一千八百三十五年印度に於て刊行せられ、其批評的の新刊前記于闐探險の泰斗スタイン氏に依りて其第一卷を出せり。印度史其他の好著多き印度人チュンデル、ダット（Chunder Dutt）之を英譯す。題して

刊に付き非常の功ある博士 Hoernle に會して、喀什噶爾地方に古經と共に發見したる唐大曆時代の漢文の軍令狀、布告、出納簿の如きものを讀みし事ありき。此の如く今や古代西域地方の考古學及言語學の研究は漸く其步を進め來り。既に第十二回萬國東洋學會の際、此が爲に萬國中央亞細亞攷究會の成立を見、第十三の同會に其位置及役員を確定し、今や盛に各方面の研究に從ひつゝあり。而して此等攷究の中尤重要なるものはスタイン（Stein）氏が兩三年前成功したる、于闐古市の沙中に埋沒したる伽藍古塔の發見なり。余は去歲漢堡の第十三回萬國東洋學會に臨み、同氏の報告を聞き、亦其の發掘し來れる佛像經卷壁畫什具の類を見たり。其古文書古錢等より、唐宋時代于闐佛敎の隆盛なりしを知り、經文の中梵文、西藏文、佉盧文等雜れるを以て、同地が當時梵胡漢三地の佛僧來往の中心たりしを明にするに足る。而して當時同地に大乘佛敎盛に行はれて、其の勢の小乘敎を壓し居りし狀態は、何れの地より出づる聖像も、經典も多くは大乘の佛菩薩諸文、般若秘密諸部の經典にして、純然たる小乘的のものは甚だ稀なるより之を推し得べき也。彼の法句經の如きも、其の偈頌現存の南傳に比して頗る異なるものあるを見る。凡そ此等尙詳論を要するものありと雖、兎に角、于闐の古地が各種の方面より、今や盛に學術的の討究を經て、其佛敎史に關する事實は、之より益々明瞭なるに至る希望あるは、現時歐洲學界の實相なりとす。スタイン氏の于闐發掘に關する大要は左の二書に就きて之を見るべし。

1. Stein ; Preliminary report on a journey of archeological amp topographical exploration Chinese Turkestan, London 1901.

陳那及び其の出現時代

（明治三七、九 東洋哲學第二卷第九號）

「宗粹雜誌」八ノ一（明治三十七年一月京都發行）、林歸堂（彥明）氏の「陳那出現の年代及其學系」を掲ぐ。同氏今淨土宗の學務を總攬し、傍宗政の全局に參與し、教務繁雜を極む。而してこの有益の編あり。窃に其風懷を欣慕す、乃ち机邊四五の書を參酌して、此一編を草す。明治三十七年六月一日南獨ストラスブルヒ客寓中。

陳那は因明學海の南針、印度論理の革新者として、苟くも少しく印度哲學に指を染めたらむものは、其名を耳にせざるはなきに、其傳記に至りては皇漢の佛典、載する所甚乏しく、隨て其出現の年代の如き、之を定むるに頗困難を極む。是林氏の稿中にも既に述べたる所なり。其糢糊の間、尙多少陳那が形影を捕捉し得て、其事蹟を推知すべきもの、唯一の西藏喇嘛救度主 Tāranātha の印度佛教史あるのみ。此書はリービッヒ教授が評せる如く、史と呼ばむよりは寧ろ譚とすべきものにして、其中疑ふべきもの頗多く、悉く之に信憑して事を斷ぜむは、固より危險なるを免れずと雖、而も之が爲に其中に含蓄する史實をも擧げて、一切之を抛棄し去らむは、宛も砂礫を厭ふて黃金を遺却するの類のみ。蓋此書登載する所、往々にして和漢佛典の不備を補ひ、其不明なるを瞭にし、相互考證して史實を確定する之なきにあらざれば也。陳那の傳の如き幸にも特に其然るものあるを見る。

救度主記する所に依るに陳那 Diñnāga は南印度建志 Kāñcī（現時の Conjeveram）の師子面 Simhavaktra

『迦濕彌羅の諸王』Kings of Kalmira 2Vols. 1879—,87. 次でスタイン氏の新譯現る。『カルハナ迦濕彌羅諸王の記錄』"Kalhan's Chronicle of the Kings of Kashmir" 1900 2 Vols とす。スタイン氏は永く迦濕彌羅に滯在して、同地方の地理に精通し、親しく殘餘せる歷史的古跡を踏査し、亦父老の傳說に聞きて研究を重ねたるを以て、其飜譯の舊譯に比して精美なるは固より論なし。其序論考據には廣く希臘、亞刺比亞、印度、支那の古記を參酌して、同地の地理歷史を明にす。印度學者は此書亦宜く帳中の祕とすべきものなり。（ダットの古譯は高等學院の圖書館一本を備ふ）

支那所傳の材料にして、迦濕彌羅に關係あるものは、十力經に付せる悟空傳なり。（縮藏閏十五、七六右又貞元錄十八、宋僧傳三、スタイン諸王記錄第二、三五七頁參照すべし）此人は唐玄宗天寶九年罽賓に使し、西域各地を經て、乾陀羅に入りて出家し、迦濕彌羅を訪ふて滯在四歲、遍く五印の諸靈地を巡拜し、年六十に及び、四朝を經て四十餘年の後、德宗の貞元六年唐都に入れり。玄奘の記と大差を見とず雖、當時北天竺に薩婆多律の勢力ありしこと、大乘佛敎の之と共に行はれて阿彌陀婆挽（無量光寺）など稱する伽藍存在せしこと、此傳に依り之を知るべし。此傳の藏中に存在することは、邦人多く之を知らず、然るに佛蘭西の東洋學者レヴキ（Levi）シヤヷンヌ(Chavannes) 兩氏之を八年前に佛譯して L' Itinerairď Oukong. (Journal Asiatique 1895V.)『悟空の旅行記』といふ。西人の獵涉に力めて硏讚の深き邦人膚淺の學者をして慚死せしむるに足る（明治三十七年一月祖忌後二日夜ストラスブルク客寓）

るべきものとす。而して傳中陳那が文珠師利を信仰して其擁護を得たること、其集量論の述作ありしこと、皆之を漢傳に照らして符合するあるを見る。西藏所傳の信憑するに足るべきや論を俟たず。

陳那が世親と同時なりしことは、印度註釋家の間に、陳那は印度のシェーキスピーヤとして、其雄麗の詩篇はゲーテをして讃美措く能はざらしめし詩聖カーリダーサと同時なりしとの傳說あるに由りて、益々其正しきを知るに足る。カーリダーサ出現の年代に就きては、尙學者の間に確說なしと雖、フート、キールホルン、マクドネル等の硏究に依りて、之を西曆五世紀の前半より後半に跨る者と定むるを妥當なりとす。此時代は西域記の所謂超日王が烏闍衍に君臨して、勢威四隣を震盪し、武功は兇奴の印度侵入を擊退してラクヴンサに雄大なる詩材を供し、好文盛に文藝の士を朝に召して、後世學者として印度の文藝復興期の美稱を冠せしめたり。此等文藝の士中秀拔なるもの九名あり、或は醫を善くし、或は天文に通じ、或は文辭に長ず、カーリダーサ詩聖は實に其隨一なりき。世親論師亦此文運絢爛の時に出でゝ、王の尊敬を得、盛に佛敎を宣揚したり。當時佛敎の勢力が王侯の宮庭に及び居りしことは、カーリダーサの戲曲中にも之を見ることを得るなり。

陳那カーリダーサ同時の說は、源を西曆十五六世の頃盛にカーリダーサに註釋を施したるマリナータ（Mallinātha）に發す。彼曰く、陳那論師はカーリダーサが文學上の敵手にして、詩聖が「雲の使」Meghadūta の第十四頌は、行雲の雄大を形容するに寄托して、明に陳那を諷刺し、之を譏誚したるものなりと。其頌に曰く、

"Aṛre śṛngam harati pavanaḥ, kimsvid" ity unmukhabhiḥ Dṛṣṭōtsāhaśćakitaćakitam mugoha-sidohānga

の婆羅門族に生れ、年少外道の經書に通ず。長じて犢子部の學師龍授 Nāgadatta に從ひて出家し佛教を學ぶ。然るに其英邁俊逸の材は到底凡師の能く覊束し得る所にあらず。去りて世親 Vasuvandhu 論師に投じて大小兩乘を學習し、五百の經論に精通す。亦密呪に堪能なる一師に逢ひて秘法を研め、親く文珠師利を見ることを得たり。後陳那は烏荼（玄奘の Oḍa にして西藏には之を Odivisa といふ今の Orissa なり）深山の石崛中にありて禪定を苦修したり。居る數年、那爛陀に大論會あり。外道の論師雲集す。衆中極難勝 Sudupja と呼ぶ外道師あり。宏學雄辯、佛弟子一も之に當るものなし。終に陳那を延請して之と抗せしむ。陳那乃ち摩竭陀に至り、悉外道を伏して之を佛教に歸入せしめ、諸經の精要を說き、論藏を宣揚し、亦多くの因明論を製作したり。其著五百部に垂むとす。事了りて後再烏荼に歸り、散逸せる因明論を纂輯し、集量論 paramāṇasamuccaya を造らむとし、文珠の勸誡を得て之を結了し、造論益々力む。次で論師は南印度の各地を歷遊し、到る所外道を降伏し、癈滅せる佛教學林を復興し、烏荼歸錫の後、大臣賢護 Bhadrapālita を化して、佛教に入らしめ、寺堂の建築之に依りて甚盛なりき。陳那の盛德此の如く、門徒往く所に多かりしかど、常に十二頭陀を行じて一弟子だも從へず、烏荼山中の靜寂なる林間に寂然として滅を取れり。

已上は救度主陳那傳の撮要なり。此中極めて重要なる事實は、陳那が世親の門弟子たりしこと是也。此事實は林氏の稿中、陳那が其學說の上より見て、世親の系統を傳へ、二者立義の間には極めて親密の關鎖を有し、世親に次ぎて唯識宗の第二祖の地位にあるべきを論證したるを以て、之に由りて、西藏所傳の正當なるは直に證せら

きものあるを見る。蓋し印度史詩の纂述已來、一部婆羅門の徒は、大に力を美文に用ゐ、絢爛の辭雄大の想を以て愛（カーマ）を詠し、自然（ヂャガット）を歌ひ、文藝と感興との力に依りて、自在天（シーバ）の功德を讃嘆し、毘紐（ボシュヌ）の恩寵を稱揚して、之を民心の深きに印せむと試みぬ。カーリダーサの如きも、其信仰よりせば純然たる自在天の宗徒にして、戯曲の初には常に敬虔の辭を以て、讃美をこの神に捧げたり。斯く一面に藝術主義の甚熾なるに對し、佛教徒は主として力を論理思辨に費し、理を說く彌密、事を論ずる益精にして、其思辨の勢威は優に覇を梵土の思想界になしぬ。然れども此論理主義、此藝術を度外視し、感興を顧みざりし論理主義の弊は、其學徒らに煩鎖に流れ枯槁に陷り、同情を缺き實際に疎く、其極人心の奥府に信仰を樹立するの道を失したるが如き觀あり。吠檀多派の巨魁商羯羅一たび出でゝ其辣腕を佛徒に加ふるや、潰敗散壞して亦起つ能はず。次で回教徒の亂に逢ひて印度に一僧を止めざるに至りしもの、其主因や種々あるべしと雖、論理主義の毒に中りて、人心感化の要具、卽ち藝術を忘却したる罪亦其一を占めずんばあらず。吾國教育に當り、宗教を職とするもの、若し徒らに藝術を見る蛇蝎の如く、感興を律するに不道德を以てし、乾燥の項目と無味の規律とを以て、人心を陶冶せんとせば、其窮極する所、亦危からずや。

　論少しく岐路に入りぬ。再び復りて本題に入らむ。フートの一說に從へば「雲の使」はカーリダーサ晩年の作なりと。宛も陳那が年壯氣銳の筆を驅りて盛に諸論を作りし時に屬す。而してマリナータ寫す所の陳那が嚴肅主義の性格は、西藏の所傳を照らして甚一致する者あるが故に、頗る信を措くに足る註釋なるが如しと雖、此諷刺

nabhiḥ ; Sthānād asmāt surasa-niculād utpatōdaṅgamukhaḥkham Diṅnāgānāṃ pathi : parikaraṃ sthūla-hastāvalepān.

妖嬌たる仙娥、王顏を擧げて驚き訝り〔汝に問はむ〕、『疾風孤山の巖角を拂ひ去りしやとは抑何』、されど甘美馥郁たる蔓草（Nicula）生ゆる所より去りて、途に猛き巨象（Diṅnāga）の惡辣なる長鼻の殘害を避けて、悠然として北方の空に飛翔して行く。

精金を變じて頑鐵となせし拙譯は、唯意達するを主として、原文の妙味、語句の布置を全く殺了したるは言ふまでもなしと雖、カーリダーサが其雄麗瑰琦の辭と、詩材湊合の妙とを以て、流雲飛ぶが如きを活寫したるは、略之にても窺はるべきを信ず。マリナータは乃ち曰く、這はカーリダーサが其詩友ニチユラが陳那の冷酷なる批評に逢ひしを慰せむが爲に、特に二者の實名を詩中に點出し、詩友が詩趣の溫藉幽雅なる、其名の如く蔓草に似たると陳那が粗野無情の批評、巨象が長鼻を擧げて芳卉名花、往く所其殘害を逞うするに類するに對映せしめ、自己の詩を長風行雲の悠揚自在なるに比して、其修辭の過なきを表し、陳那を山巖の突兀たるに譬へて、其情趣なく、興味を會せず、枯燥石の如き、學究たるを罵れる也。人試みにカーリダーサの小品「四季の曲」、Ṛtusaṃhāra を讀みて、其幽艷に魅せられ、穠美に醉ふの深き、尙ワグネルがワルキユレ春夜の曲を聽くが如き思あらむもの、來りて吾が陳那に就きて其正理門論の一員を披け、必らずや其冷にして嚴、理致益々深くして、些の情味を許さゞる、宛もベクリンが「死せる島」に遊ぶが如き感あらむ。見來ればマリナータの註釋は甚趣味の深

得ざるに出でたるなりと云へり。陳那の因明改革が一時思想界を聳動して、正統因明派に大痛撃を與へたることは之を以て知るべき也。

陳那の事跡にして今に傳ふるもの略前に盡く。之に由りて漢傳に瞭ならざりし陳那の事蹟は朦朧の間にも、略推知し得べく、其印度の思想界に横行して、論理學上に偉大の影響を與へたることは、佛教已外の典籍に於て明に之を認むるを得べし。今や進みて史傳の許す限り、其年代を正確に算定し見む。

慈恩傳に據るに、玄奘が孤影飄然、唐を發して萬里入竺の途に上りしは、太宗の貞觀三年秋八月なりき。後三年にして始めて摩竭陀に入りて聖跡を巡禮して那爛陀の大學に入り、戒賢論師に謁して師弟の契を結びたり。本傳に曰く

仍差二十人。非老非少。閑解經律。威儀齋整者。將法師（玄奘）參正法藏。卽戒賢法師也。衆共尊重。不斥其名。號正法藏。於是隨衆入謁。旣見方事師資。務盡其敬。依彼儀式。膝行肘步。嗚足頂禮。問訊讚嘆訖。法藏令廣敷牀座。命法師及諸僧坐。坐訖問法師。從何處來。報曰。從支那國來。欲依師學瑜伽論。聞已啼泣。喚弟子佛陀跋陀羅卽法藏之姪也。年七十餘。博通經論。善於言談。法藏語曰。汝可說我三年前。病惱因緣。覺賢聞已。啼泣抆淚而說昔緣云……法師得親承斯記悲喜不能自勝更禮謝日若如所說。玄奘當盡力聽習。願尊慈悲攝受誨教。法藏又問。法師汝在途幾年。答三年

と戒賢の年齡は記する所なしと雖、其門人にして姪（甥と同義に用ゆ）なる覺賢が、當時七十なりしより推すに

寓意を釋したるは、獨りマリナータに止りて他の二註には全然其釋なきを以て、カーリダーサが眞に諷刺の意ありて陳那を譏誚したりしや否やは、尙疑雲の中に籠れり。故に歐洲の學者中マックスミューラーの如く之に頗る重きを置くものと、全く之を牽强附會の臆說として顧みざる者とあり。之を事實として信ぜむは、尙幾多の研究に待たざる可らず。然れども此註あるに由りて當時印度に陳那カーリダーサ同時の口碑傳はれるを推知し得べく、假令マリナータの註が全然牽强附會の臆說なりとするも、尙二者同時の口碑ありて後、案出せられたる說と見倣すを得べきが故に、陳那が年代を推知するに付き、重要なる一證たるを失はず。卽佛敎跡を印度に絕ちてより四五百年、支那其他の大乘佛敎國との交通絕へし時に當りて、殘存したる陳那の口碑が、其年代漢蕃の所傳と照して符合するが若きは洵に偶然にあらざれば也。

マリナータ註は或は棄つるを得む。其註の原く所の口碑は實に輕々に看過す可らず。

陳那が因明に於ける聲譽は獨り佛敎に於て大なりしのみならず、亦婆羅門哲學者の間にも其名を知られ、正統因明學派卽尼耶々派の一大勁敵として畏懼せられしが如し。「僧佉眞理月光」Sāmkha-tattva-Kaumudi 其他重要なる印度哲學書の著者として十二世紀にありしといふヴーチェスパチミシュラ Vācespatimiśra は、其「尼耶々付註顯正解」Nyaya-vārttikatātparyatika 中に陳那論師を、喬荼摩卽足目仙人の因明論を誤釋したる外道の論主として記載し、其誤釋は自派の作光論師 Upyotakara の駁擊する所となりたれど、後佛敎徒の法稱 Dharma-kīpti 法上 Dharmottara 等出て、之を救解したるを以て、今新たに釋を製して匡謬顯正の實を擧ぐるの止むを

世親（世親傳八十入滅）A、D、四二〇—五〇〇

此の算定は亦フート、キールホルン等がカーリダーサの年代を凡そ四〇〇—五〇〇となしたるに合す。西藏の所傳に依るに世親の晩年は西藏王ラートトリ＝ヤンツアン（Lhā thothori ġuyan-ġtsan）の時とす。此王の年代はチョーマ、シュラギントワイト、ロツクヒル等異說紛々として定むべからずと雖、『西藏の諸王』の表に四百六十一年誕生といへるが略正確の說たるが若し。世親の晩年は卽ち陳那が入道の時なるを以て、之より推しても亦上の算定が略誤なきものなるを知るべし。高楠順次郎氏が世親の年代に就きての考證も、亦陳那の年代を定むるに甚重要なるもの、その世親を四二〇—五〇〇となせしは、頗穩當の說たるを信ず。

附言

（一）ビール一たび陳那を誤りて「Jina」となせるより、之に習ふもの少からず、南條氏の英譯明藏目錄にも Jina に作れり。是が誤なるは固より論なし。玄奘は嘗て一度も ji 字を音譯するに陳字を以てせしことあらず。西域記の註に陳那飜授（麗本に依る、他本には童授となせり）とあり。こは陳那 Diṅnāga を Dina と見て譯したるにて、玄奘の自註にあらず。恐く後人の攙入ならむ。

（二）カーリダーサは錫蘭の詩人にして Kumāpadāra と同時にして、其友人なりしと云ふ。口碑錫蘭に存す。王は六世紀の前半に世を御せり。此口碑には他に種々信ずべからざる事項を含めるも、記して玆に附す。

少くとも八十歲已上なりしは明なり。而して戒賢は實に護法の弟子なりしことは人のよく知る所、其護法に推されて摩竭陀の孤山に外道を論服せしは年三十の時なりき。當時護法は猶戒賢が玄奘に於けると同一の地位にありて、那爛陀に耆宿たりしが故に、其年齡の頗る高かりしは論なし。護法は救度主記する所に從へば陳那と同國に生れて業を陳那の門に受けたり。其陳那を尊重して造論の中に屢々集量論を援き、亦觀所緣論に釋を造りしが如きは、世親が無著の諸論に註釋を施したると同じく、師德を尊重せしに出でたるや明けし。已上の所傳に由りて左の如き五師の直系法統を得べし。

世親――陳那――護法――戒賢――玄奘

此等五師は師資相承して唯識瑜伽の正宗を傳持光顯したり。而して玄奘の戒賢と會合したるは、其年代慈恩傳に記載せられ、陳那の著作はA、D、五五七より五六九の間、眞諦に依りて初めて漢譯せらたるが故に、二者を結合し、玄奘より逆算するときは略正確に近き陳那の年代を斷定し得べし。

玄奘の戒賢に會したる時（假に戒賢を八十とし）　A、D六三一

戒賢の外道降伏　A、D五八〇

護法（七十入滅とし）A、D、五一〇―五九〇

陳那（同く七十入滅とし）A、D、四六〇―五三〇

二楞學人の「婆沙結集の疑義」につきて

（明治三九、三、新佛教第七卷七號）

玄弉三藏は確に婆沙論が、迦膩色迦王の御宇に編纂せられしことを信じたり。西域記の記載の外、弉三藏は婆沙の譯了りたるとき、同論の卷末に特に二偈を添加して、其由來を明にせり。曰く、

佛涅槃後四百年。迦膩色迦王贍部。召集五百應眞士。迦濕彌羅釋三藏。其中對法毘婆沙。具獲本文今譯訖。

されどこの傳說の頗る疑はしきは、實に二楞學人の考へらるゝ通りにて、古來の俱舍學者の中にも、亦疑義を挿みし人なきにあらざりき。蓋し婆沙の文が明々白々この傳說をうち破り居れば也。同論第一百十四（收五、五八右）の文を讀め。

昔健馱羅國。迦膩色王。有一黃門。恆監內事。暫出城外。見有群牛。數盈五百。來入城內。問驅牛者。此是何牛。答言。此牛將去其種。於是。黃門則自思忖。我宿惡業。受不男身。今應以財救此牛難。遂償其價。悉令得脫。善業力故。令此黃門則復男身。……

這箇牛の去勢（カストラチョン）を救ふて自家の失根を回復したる奇譚は、また西域記第一屈支國の下に見ゆ。但此には黃門、彼には王弟が主人公となり居る異のみ。西域記の記載の方、種々の點に於て脚色巧を極め居れば、多分其源は健馱羅の譚より發したるものならむ。

（三）世親の傳の羅什に依りて譯せられしこと、漢錄の中に存するも、是謬ならむ。マックスミューラーは西藏の一說に依り、世親を玄奘の師となせしことあるも、其取るに足らざるや論なし。

（四）陳那著の集量論は漢譯なく、亦西藏兩藏の中に之を存せず。チャントラ、ダース氏は嗟嘲喇嘛の宮中之が一本を藏すと傳ふ。

本題研究に要する重要なる書目

（一）Tāranātha Geschicte des Buddhismus in Indian. Deutsch von A. schiefner 1869. p. p. 126—135, 160.
（二）西域記（縮刷藏經中）八、（收七、四十）十、（收七、五十四）其他
（三）慈恩傳（同上）三（陽二、十三—十四）其他
（四）Journal of the Buddhist text Society Vol IV 1896 part 3—4 p. p. 16—18
（五）Doff. Chronology of India 1899 p. p. 30 288 &c
（六）Huth: Die Zeit des Kālidāsa 1890
（七）Liebich: Das Datum Candragomin'sn. Kāli dāsas 1902
（八）Maxmüller: The six Systems of Indian philosophy 1899. p. p. 476—479
（九）〃: India, what can it teach us. p. p. 308—310. 346&c
（十）高楠順次郎　數論哲學史の暗點、哲學雜誌二〇三號十六頁——二十二頁
（十一）林彥明　陳那出現の年代及其學系、宗粹雜誌八の一、二十頁——二十五頁此他西藏及び印度文學哲學に關する諸種の雜著

二楞學人は論中世親傳を引きて、同傳の歐譯は未だ之あらざるが如く言はるれど、こは學人が兵馬倥偬の際、博く群籍を捜り、先輩に質すの暇なかりしためにて、實は今より四十六年前露のワッシルエーフはその（Der Buddhismus seine Dogmen, Geschichte und Literature petersburg 1860 の附錄の第一の二百三十五頁已下に之を獨譯したり。但し此譯は往々意味明ならざるあり安じて之に據ること稍難し。一昨年（一千九百〇四年）高楠順次郎氏は "Toung-pao" の中に其英譯を出し The Life of Vasubandhu といふ。西歐の學界は茲に初めて信憑すべき良好なる世親傳譯を得たり。

毘婆沙のことを云々するに付きて、因に高楠順次郎氏が去歲パーリ原文出版會々報に公表したる「有部論藏文學につきて」On the Abhidharma Literature of the Sarvastivadins を茲に紹介し置かむ。

こは約一百頁の大論文にて、藏中に存する有部論藏の全體を解題し初め六足に付きて博く之を蕃藏論部と比較し、次で其註疏及諸論に及びて其要旨を掲載し間有益なる評論を挿みて、一目有部論藏の何物たるやを了せしめたり。論藏智識の殆ど言ふに足らざる歐洲の學界にありては、此論眞に霧海の南斗、暗窖の明燈といふべし。吾が國の佛學者もまた此篇を座右に置きて、裨益する所極めて少からざるべし。其研究の勞實に大に謝すべきものあり。而も氏の謙德の美なる結文に "It would have been next to impossible for me to produce my paper, events present shape, had it not been for the valuable help of Mr. Ogihara……と書して他の美を掲ぐるに吝ならず。雅懷欽すべし。毘婆沙につきては、右論文の一百二十三頁已下。一百三十二頁に至りて記する所あり。

久しく北京にありて、歐洲東洋學者間に令名あり、其短命は一方ならず學界の嗟嘆を發せしめたるトーマス、ワッタースは遺著西域記の評釋卽 On Yuan Chwangs' travel in India London 1904 vol. 1 の二七二頁已下に、毘婆沙の結集を論じ、之が第一結集を模擬して揑造せる譚にして、阿難の位置に世友を置きたるに過ぎざると斷じ、且つ卷數丁付は明記しあらざれど "It relates a miracle which it says occurred formerly in the reign of that king (Kaniska). "p. 277. とて、明に前に引きたる文を指し、次で旣に此文ある已上は、論中の脇尊者や世友の記載が、悉く婆沙結集の相傳を否定する證左となることを詳論せり。其研究の精にして、眼識の凡ならざる、實に獵涉に懶に、攻究に力めず、漫に大家を以て居る、吾國の佛學者輩を愧死せしむるに足る。

二楞學人はワッタースと同一の觀察を毘婆沙の結集に行ひて、相傳の史的事實ならざるを看破せり。史眼儕輩に超ゆるものありといふべし。

然し玆に少しく注意すべきことは、前に引きたる迦膩色迦時代の黃門譚が、果して婆沙編纂の當時より本文として存在せしか。または佛沙ジャイナの原文古謄本に屢見るが如く、後手が本文の行間に書き込みたる例證を、其儘に本文と連ねて譯したるものなりやといふ問題にて、こは不幸にも舊婆沙の此部分が缺け居るために解決頗難し。然しこの無用に似たる注意は、玄奘三藏の毘婆娑相傳に關する確信に對して、兎に角なし置く必要あるべし。

婆沙には右迦王の名の外、猶迦悼彌羅史に關する譚二三あり。此等が果して史的の價あるや、又迦王と何等の關係あるやは今猶研究中にあり。されば是等よりして本問題を解決せんことは今能はず。

の謄本は皆佛敎聖典なり。故に吾人佛敎古學に志すの徒は、少しく詳細に之を叙するも繁なりとはせじ。

最古の樺皮謄本は于闐の古精舍殘趾より出でし、佉盧文字を以て記せる法句經の斷片也。此貴重なる文書は今パリ、及ペータースブルグに分藏す。セナール及びヲルデンブルグの兩老儒、之に付きて有益なる論文を公表したり。此文書は其字體よりして、紀元前一世紀より紀元後一世紀に跨るものなりと斷定せられたり。予は未だ親く現物を見るの機會に接せずと雖ヲルデンブルグ氏の精巧なる寫眞に依り、之を漢譯及パーリ原本に比較せしことあり。

之に次ぎては紀元四世紀に屬する Bower Mss. にして全部梵文を以て書す。カシユガールより發見せられしものにして枚數凡そ五十餘。種々の經軌を含む。多くは是醫方禁呪を說きしもの也。Dr. Rudolf Hoernle は此貴重なる寫經に付き、專心研究に從事し、終に全部を實物大に寫眞し、之に譯解註釋を施し、出版したり。蓋し學徒の尤感謝すべき業績の一たり。余は多年此中に含有する經軌を支那譯祕密經中に求めしも成功する能はざりき。而も幸にして此中に孔雀王經原文の一部が存在するを知り、更に之を皇立亞細亞協會及カルカツタ大學文庫の五大護祕軌中の孔雀王經と比較するを得て、佛敎文學史上稍祕敎發達の痕跡を認むるを得たり。此研究は遠からずして江湖に問ふの時あらむか。

于闐謄本卽 Masson Mss. は樺皮を日本半紙の如き、長方形に切り兩側を糸にて編みたるもの。Bower Mss. は是と趣を異にし、樺皮を貝葉の形に裁ち揃へて、一見貝葉經と異ならず。二者共に、其寫眞より見るも、古色

樺皮の古寫經

（明治三九、一一、新佛教第七卷第十一號）

設し松本文三郎氏が本誌（新佛教）第七卷八號六八三頁の抄評の如く「印度雜事」中印度人は古來未だ曾て木皮上に書したることなしと記せられしとせば、そは勿論、同氏が百忙の間、筆硯を驅るの致す所、偶然にも事の豐富なる記憶裡より逸し去りたるに過ぎじ。學徒多く文を草する中、誰か豈這般の小過失なからざらむ。

評者三穀坊氏が、其學ぶ所に篤くして、些事と雖、愼重に攻査するの忠なるは、學徒のため特に喜ばし。乃此機會を利用し、本問題に關して、玆に二三行の贅言を陳ずるを許されむことを、松三兩氏に請はむとす。

三穀坊氏の記する所、よく其の要を摘みたり。然も此問題に付き、確實にして充分なるを望まむとせば、必ず當に Bühler の印度字體學 Indische Palaeographie (Grundriss der Indo-arischen Philologie und der Tl.amskunde I. 11. Strassburg 1896) 第八十八頁已下の叙述を參照するを要すべし。

ビューレルは印度人書寫の材料として七種を擧げたり。曰く（一）樺皮（二）木綿（三）木葉（四）獸皮及羊皮紙（五）金屬（六）石（七）紙なり。

第一樺皮の最古の例としてビューレルは松本氏が貝葉の誤なりとせし Q. Curtius の記事を擧げたり。こは實に動かすべからざる事實ならむ。何となれば、樺皮の謄本の中には、現今最も古き寫經を含有すれば也。此最古

眞言祕經の起原及發達の實例（毘沙門天王經の本文批評）

（明治三九、五、哲學研究第二卷二三、一二三二號）

一、序

（一）吾國に於ける大乘佛教史研究に就きての缺點　近時吾國に於て大乘佛教史に關する好著の公刊せらるゝもの尠少なりとせず。種々有益なる論評、亦時に諸雜誌に散見す。研究の盛大寔に賀すべしと雖、然も二三の大作を除くときは、概して本文批評の方面を等閑に付する傾あるを免るゝ能はざるに似たり。卽夫の佛典解釋家が所謂所詮の義理詳言せば倫理的哲學的の內容方面の講究が、頗精を竅め微を闡きて見るべきもの少からざるに關らず、之と相待ちて最緊切肝要なるべき、能詮の教文——言語學的文學的形式方面の檢索に至りて、轉其蕭條索莫たるを憾まざを得ず。教史上の議論、斬新奇警、往々にして前人未拓の寰域に觸るゝありと雖、動もすれば其根基薄弱危脆にして、空想假構の弊に陷り、痛快なる斷案、犀利鐵を斷つが如きあるも、或は主觀的の獨斷に流れ了りて、客觀的の科學的證明に、毫も價あるを見るを得ざること、要するに實に此本文批評の切要を、看過遺却したるより來れる、大過失に歸せずむばあらず。

大乘教史に於ては、教理史と聖典史とは、兩者互に輔翼提携して、其獨立を完了すべきや勿論也。猶近時此地の哲學史家として雷名ある者にして、自ら純然たる思想發展の方面に重きを置く、ヴィンデルバンドの如き碩學

蒼然字體雄勁にして、眞に天下の至寶也。而して兩者共に貝葉寫經の最古なる者、卽尼波維ダルバール文庫の十地經、普賢行願贊、法隆寺の貝葉經に比して更に古し。樺皮經の佛教文學史上に於ける位置も夫重からずや。若夫婆羅門文學の後代に至りて樺皮に書せられたるものを覓めんか。歐洲及印度公私の圖書館、之を藏する必らずしも少からず、以て其珍となすに足らざる也。

樺皮經に關しては、漢譯藏經中其記載あり。有部毗奈耶第四十八に曰く、時紺容夫人、夜讀佛經、復須抄寫、告大臣曰、樺皮貝葉筆墨燈明、此要所須、便宜進入是は極めて重要なる一證也。密部經軌の中には、樺皮に神呪を書寫すべきことを記するもの多し。今煩しく其文を出すを要せず。

付記　オルデンブルグ、セナールの論文は學會年報の中にあるものなるが故に、之を得むこと稍難く、ホエルンルの著の價甚貴し。而も予は本邦の學徒に Rhys David の著 Buddhist India 19 3 London を購はむことを勸む。此書は廉にして、（五志位）其內容の價値希に見る所なり。前に擧げたる二贍本を縮寫して、p. 122, 及び p. 127 にあり。

得せむこと、或は知るべからずと雖、幸に新年の賀(フェストシュリフト)篇として、之を故山の先輩及知友の机前に捧ぐるの榮を許されんか、乃稿者の微志や徹せりと言ふべし。

二、毘沙門天

（三）印度古宗教史に於ける毘沙門天　古き、吠陀の時代に於ては、毘沙門天(ヴイシュラバナ)の名は異名の倶毗羅(クベーラ)と共に僅に（一）阿闥婆に於て之を見るのみ。（二）婆羅末那(ブラフマーナ)及び優波尼沙土(ウパニシャッド)の中には、往々其名に遭逅す。大史詩摩訶婆羅多(マハーブハラタ)の中に於ては、此神の名は其異名と共に在々所々に記述せられ、其神話の如きも頗詳細の叙述を見るに至れり。（三）即倶吠羅は北方を守護する鬼王にして、喜馬拉耶(ヒマラヤ)の山中、香醉(カンドハマーラ)の一峯に其城廓を構へ、其宮殿は莊嚴瑰琦、七珍萬寶を積み、其園囿池沼は艶美淸冽にして、百禽千樹を集む。夜叉羅刹等の魍魎魑魅を統領して、威勢赫々、福德魏々たりと云ふ。史詩羅摩衍那(ラーマーヤーナ)の中に現るゝ、楞伽島の大鬼王にして、同史詩の神雄羅摩(ラーマ)に對して、敵役を演ずる十頭羅刹羅縛拏(ラーバナ)が、毘沙門の少弟なること、又古く（四）摩訶婆羅多に出づる神話なり。佛世尊出世の當時、若くは其已前に成立したる、尼乾宗の徒、卽ヂヤイナ教徒が、正依の經典として尊崇する五經の隨一にして最古代に屬する（五）「薄伽婆帝(ブハーカバテイ)」經、其他の中にも毘沙門が、北方守護の天神として鬼神を統領することを記す。毘沙門天神話が、頗悠久の昔に源を發したること推斷するに難からず。

（四）毘沙門神話の起源（六）　碩儒ファウスブェール單に謂らく、印度は古代より金銀珠寶に富饒なる宇內に冠たり。

と、主として前哲の著書を稽へ、其用語を討究して、主として言語學的本文的の講究を力むる、ボイムケルの如き巨匠あると同轍なり。故に今本文批評に重きを置かざる大乘教理史を以て、直に之を一切價値なしと斷言すべきこと、天下何者か之より暴なるものあらむや。然りと雖、此兩者が其根底に於て、相輔け相待つべき所以のものあるを忘れて、毫も佛教教理の智識なくして、本文批評を盲行し、或は些許の本文批評の眼識を具せずして、教理史を横議せむと欲せば其危險や實に之に過ぐるなし。其此の如きものよりして生ずべき、論斷學說の價値が、學術上甚しく尠少なるべきや、蓋しまた言を要せざる也。

事頗る僭なるに似たりと雖、本篇は這般學界の缺陷に鑑みて、多少の貢獻を、來さんとする新學潮に捧げむと欲するもの。主として聖典史の側より純然たる客觀的討究の方法を用ゐ、以て聊か本文批評の方面より、大乘史論に着實なる資料を供給せんことを期したり。

（二）何故に特に毘沙門天王經を撰びたる乎　この目的の爲に玆に提供すべき資料は固より少なしとせず。夫の孔雀王經の如きは、特に其最も貴重なるものの一なり。然るに今特に毘沙門天王經を抜きし所以のものは第一此經は二紙餘の頗簡單なる小部にして、分章解說を施すに就き、大部の諸經に比して、大に便利あることと、第二は此經は最明かに祕密經の聖典的發達を示して、其歷程の明白なる、一目にして祕經の起原と發達とを了得すべき好標本なるに由るとは言へ、亦一つは時恰も新年に屬するを以て、此際、邦俗が七福神の隨一として常に相親しき毘沙門天の功德を叙せる經典は、新春の文壇に適當なるべしとの考ありしにも基けり。際物作者（ゲレーゲンハイト シユリフアストテーラ）の譏を博

（五）佛教に於ける毘沙門天　佛教に於ては、此神は聖天、不動、閻曼德迦の如き、後世に至りて佛教戸籍に編入せられし諸神と異にして、譜代の忠臣とも言ふべき、原始佛教時代よりの歸化神なり。佛教美術史に於て、最も古きプハルフートの塔は其の建築刻文より鑑定して、（一〇）阿育時代の建設に係れるは、動すべからざる學者の定論なるが、この塔の玉垣の石柱に（一一）倶吠羅の像を刻し、像上明かに其名を鐫銘するを見る。パーリ經典の中に於て、最古の者の一なる（一二）スッタニパータの中にも、亦毘沙門の名を擧げ四阿含の中亦所々に其名を擧ぐるを認む。古代の大乘諸經中（一三）、法華を初めとして此神の名存する、枚擧に暇あらず。下りて密部の諸經典に至りては、何れの儀式に於ても、何れの修法に於ても、此神は他の三人の同僚と共に、必要缺くべからざる守護神となり常に其名を經軌に列ね、其像を曼荼羅に置けり。實際教會史に於ても、此神が護軍獲得の信仰は、一時頗人心を支配したるを認む。一例を擧ぐれば唐時代（一四）に於ては、邊境の守護隊に此神像を奉祀せしめしが如き、其信仰の盛なりしを徵するに足る。吾國に於ては、佛教傳來の當時、既に四天王寺の譚あり。千古の忠臣楠廷尉の幼名を多聞丸と呼びしが如き、名匠の妙技にこの神像少からざる如き、如何に此神の信仰が、武を尙ぶ吾國民に深かりしかを知るに足らむ。今尙各地特に毘沙門を奉祭する祠堂少きにあらざるべし。（一五）西藏及蒙古に於ける多聞天の信仰熾なるは、玆に贅する要あらず。

三、毘沙門天に關する經典

其聲譽は古代に於て、廣く世界を羨殺せしめたりき。

何れの征服者と雖、印度無限の寶貨を目的として、遠征の志を發せざりしはあらず。隨て其國に特に毘沙門の如き富の神の存する、驚くに足らず。山間に生產する寶玉金銀の守護神存在するに至りしも驚奇するに足らざる也と。蓋しこの寶貨の生產する山なるものは、印度の北方を鎭する夫の大喜馬拉耶(ヒマラヤ)にあらずや。其嶮峻攀づべからず、崎嶇入るに難くして、萬古の祕を藏せるもの印度人がその樂土仙境を此山に求めたる所以にあらずや。(七)ラツセンの推斷まことに當れり。須彌の寶山、倶盧の樂邦、カイラーサの淨土、其源は皆此山に存せり。毘沙門がこの大寶山の一峯を占めて尊重せられ、次で北倶盧の守神となりしも、固より自然なりとす。凡そ古代に於ては未識の地に、寶貨の源泉を想像するは一種の心理的事實也。近くはマルコポーロの日本(ジツパンジー)、西班牙人の亞米利加大陸を想像したるが如き之を證すべし。想像に富み、詩味に饒なる印度人、何ぞこの心的機能を缺くべけむや。彼等は一面雲霧萬重、遠く人間と隔てゝ、玲瓏の雪光長へに天と相摩する大山嶽に、毘沙門の淨土を夢みつつ、他面には烟波萬里、渺々として限りなき所に、楞伽の大寶島を認めて、羅刹夜叉の輩該處に珍寶珠玉を愛護するとなし、以て佛教の(八)雲馬(ヷーラハッサ)、本生(ジャータカ)の如き趣味ある譚を產み、或は史詩羅摩衍那を出して、雄渾豐富美を百代に垂れ、(九)楞伽・同性等の諸大乘經、亦之に依りて、材を得て、玄旨妙理今尙章々たるを見る。而してこの楞伽寶島の大王、羅縛拏(ラーバナ)の如き毘々沙那(ギブフイシャナ)の如き、皆毘沙門と兄弟の親あり。山海相隔てゝ、共に福德の神なること蓋し趣味ある神話にあらずや。

(一八)雍熙二年（紀元九八五）にあるを以て、此六年間に同經の飜譯せられしことを以て滿足せざるべからず。亦其原本を何れの地方に得來りしやも明記なきを以て、知るべからずと雖、法賢は中印度の人なるを以て、恐らく原文も同地方のものなりしなるべし。其原文の梵語にしてパーリ若くは中央亞細亞地方の方言にあらざりしことは、經中に存する(一九)對譯字に照らして之を推知するを得べし。

(二〇)西藏々經の正藏(カンジユル)、祕密部(ギユイト)にも、又此經の存するを見る、但し經題漢本と相違し、稱して「出家及非出家に共通なる經」といふも、フェールの內容記載に依りて其漢本と同一のものたるや(二一)明瞭なり。飜譯の年代は、西曆八七八より九〇一年に跨る、支那譯の毘沙門天王經に先づ、約一百年の前にあり。

(八) 毘沙門天王經の內容　事少く煩鎖に亘るの恐ありと雖、後章に至りて本文の比較を試むるに就きて、各種の便利を得べきを以て、玆に先毘沙門天王經の內容を概說し置かむ。佛典解釋家が常に使用する、序・正・流通の經文三分法は、亦この經文にも適用することを得べし。第一の序分は世尊舍衛の給孤獨園に在しゝ時、毘沙門天王、百千無數の藥叉眷屬と共に、世尊に詣でゝ曰く、修道の僧俗男女、曠野林間にある時、藥叉に「有信佛言、者有少信之者、復有無數藥叉、不信佛言者」の三種類ありて第三類の藥叉は、常に行者を惱亂せんことを欲す、故に今一經を說きて、彼等道俗をして、吉祥安穩を得せしめんと。時に正信藥叉の衆あり。毘沙門に對して。該經を說かむことを懇請したるを以て、彼は如來の聽許を得て、此經を說くに至れり。(成十二、十七紙右十三行より左二行に至る)

（六）大藏中毘沙門に關する諸經　藏中の大小乘經、[一六]毘沙門の擁護功德を散說するもの甚多しと雖、特に此神を主として說述せるものは左の諸部に過ぎず。

一、毘沙門天王經　唐不空譯（縮藏閏十四、南條氏英譯明藏目錄九七四）
二、北方毘沙門天隨軍護法儀軌　同譯（縮、餘二、南條氏缺）
三、北方毘沙門天王隨軍護法眞言　同譯（同、餘四南條氏缺）
四、毘沙門儀軌　不空其他輯（同、南條氏缺）
五、摩訶吠室囉末那野提婆喝囉闍陀羅尼儀軌、唐般若斫佉羅譯（餘二、南條氏缺）
六、毘沙門天王經　宋法天譯（成十二、南條氏八四九）

已上六經共に祕密部に收められ、其內容は共に毘沙門に關する祕法を說示すること、經題の示すが如し。而して前の五經と最後の一經とは、其內容の上に於ても、外形の上に於ても、毫も聖典史的關係を有せざるを以て、茲には之を論評するを略し、唯第六の毘沙門天王經に就きて、其聖典史上に極めて重要なる一經典なるを證明せむ。

（七）毘沙門天王經の漢蕃兩譯　此經は宋の法賢三藏が、未だ其名を更めざる法天時代の飜譯に係れり。其年代は記錄の徵すべきなきを以て、正確に定むること難し。唯法天が河中の沙門法進に進められて、京師に入り、太宗の知遇を得て、始めて譯事を興したるは[一七]太平興國五年（紀元九八〇）にして、勅旨其名を法天と改めしは、

II				
11	世尊若有已下	一八B	18—2	必隷多衆の守護と咒文
12	世尊今我已下	同	2—8	大龍衆の名其守護と咒文
13	世尊若有已下	同	8—11	羯吒布咀嚢衆其守護と咒文
14	世尊我今已下	同	11—19	藥叉衆の名其守護及咒文
15	世尊若有已下	一九A	19—2	羅刹衆の名其守護及咒文

第三の流通分は他の大乘諸經に屢見る如き、同一の書式を以て、本經の功德を讃說して、實行を勸め、以て本經を結べり。曰く「爾時釋迦牟尼佛。於夜分中。告苾蒭言。如是此經。有大威力。能爲明護……諦聽諦聽。此經眞實有大威力。能爲明護。」と（成十二、第十九紙右二行より同八に行至る）

四、毘沙門天王經の原材

（九）本論の要旨　毘沙門天王經は實に、パーリ長阿含（ディーガ）、第三分の三十二品、アーダーナティヤ經[22]より起源せり。此一小南方聖典は、卽毘沙門天王經、一部の骨格を形成するものにして、其第一大段の全七節と、第二大段の大體は之に依りて成立し、更に大集經月藏分及孔雀王經より採りたる材料、之に纒絡交錯して、皮膚となり、筋肉となり、玆に初めて毘沙門天王經てふ、一祕經の體格を完うするに至りたる也。

此の如く毘沙門天王經の前身は、アーターナーティヤ經なるを以て、本經の中にも、又之を明かに自白せるを見る。本經の序分、天王の口を借りて曰く、「善哉世尊。我有阿吒囊胝經、能爲明護」と流通分に又宣說して曰

第二の正宗分卽本經の主腦は、大別として二大段となすことを得べし。第一大段は四天王威德の叙述にして、東南西北の四小節に分れ、之に北方世界の記事と、四天王の惣讃と、阿拏迦縛帝城の記事との三節を加へ、首尾七節を以て成れり、第二大段は四天王の神咒、及其眷屬諸軍將の名を列擧し、本經を誦持するものを守護すべきことを說き、若し此等鬼神にして惡意を以て修行者に接近せむか、嚴罰立地に至るべきを述べ、之に他の四鬼神族の守護と彼等違反者の罰法を交へ記し、全體八小節を以て成れり。已上概說したる內容の分解は、左の第一表の如し。

（第一表）

大段	小節	本文の分解（成十二）	記載の紙數 紙	記載の紙數 行	內容の摘要
I	1	東方世界已下	一七B	2—5	持國天王の歸佛
	2	南方世界已下	同	5—8	增長天王の歸佛
	3	西方世界已下	同	8—10	廣目天王の歸佛
	4	北方世界已下	同	11—12	毘沙門天王の歸佛
	5	復次北方已下	同	12—13	北俱盧州の叙述
	6	如是東方已下	同	13—15	四天王の惣讃
	7	復次乾闥婆世界已下	一八A	15—2	藥叉女及藥叉其宮殿池沼
	8	爾時毘沙門已下	一八A	2—9	乾闥婆の名其守護及咒文
	9	世尊若有已下	同	9—11	閉舍左衆の守護及咒文
	10	世尊復有已下	同	11—18	鳩槃荼衆の名其守護及咒文

五節に分れ、通計五十頌あり。頌體は概ね首路迦（シュローカ）を用ゐ、少しく不規則にして或散文に近く或首路迦を變作したるが如き、アールヤを交ゆ。內容を分解するに、左の第二表の如し。

（第二表）

節＼本文	內容の概括	形式　偈面	形式　偈數	計
1	七佛世尊の讃嘆	第一頌至第六頌	6	55
2	持國天王の德相及歸佛	第七頌至第十五頌	9	
3	增長天王の德相及歸佛	第十六頌至第二十三頌	1½	
4	廣目天王の德相及歸佛	第二十四頌至第三十二頌	9	
5	毘沙門天王の德相及歸佛	第三十二頌至第五十四頌	22½	

（二八）第二大段は散體を以て卽この明護（パリッタ）を誦持するものの受くべき特權を記載す。曰く此阿吒曩胝の明護を習學受持するものは、一切鬼神の惱害を受けざるべく、四天王に隷屬する鬼神にして若し此等の誦明者に惱亂の目的を以て接近せむか。彼等は鬼神の特權と威力とを失して、再び其大城に還歸して福樂を享受するを得ざるべく、其頭は枯葉の如くに縊られ、若くは破裂して七分となるべし。又恰も摩竭陀王に臣伏せざる群盜に似たる、四天王に屬せざる鬼神輩が、其暴威を誦經者に加へんとするときは、卽鬼神の諸大將軍等、直に之を執縛して極罰に付せむと。玆に於て同經は更に四偈半の詩を以て、所謂鬼神諸大將軍の名を列擧詠嘆し、復び前に同一の文を以て、鬼神の守護と違反者の治罰とを繰回して其記載を了れり。

く、「毘沙門天王、說此阿吒曩胝經已。禮世尊足。却住一面。」と。豈興味ある文字ならずや。西藏譯の毘沙門天王經は、其蕃題前に言ふ所の如しと雖梵語の題目は、之を"Aṭānāṭiyama"と標したり。見るべし、亦其源のパーリより出たるを證するを。

（十）**阿吒曩胝經內容**　此極めて祕密佛敎史に重要なる小乘經典は、南條氏[23]の英譯明藏目錄に對比表出する如く、漢譯長阿含の中には之を存ぜず。[24]僅に其四天王品の中に、多少の關係あるべきかと思はるる淡影を留むるに過ぎず。其他漢譯藏經の中、別譯として同經に相當するもの、亦存在せず。西藏[25]に於ては、其單行本の譯を、正藏經部の第三十帙に見るを得べく、且つ其パーリより飜傳せられしことの、特に記載せらるゝを見る。

今此經の內容を概括せむに、世尊[26]一夜靈鷲山に在しゝとき、四天王其眷屬を引率して、來詣し、四隅に其座を占む。此等引率せる鬼神等が、佛陀に對する態度は種々にして、或は佛を禮するあり。或は默して禮を施さゞるあり。時に毘沙門天王、世尊に白さく。大力及劣勢の鬼神等、或は歸佛正信のものあり。又頗る佛陀に反戾する不逞の徒あり。蓋彼等が世尊に反抗する所以は、世尊が五戒を制し給ひしに不滿なるに由れり。彼等不滿の惡鬼等、佛弟子が林間曠野、人なき所に於て修行するとき、常に之を惱亂せんと欲す。故に僧俗男女は阿吒曩胝の明護を受持するの必要あり。是を以て今世尊聽許を得てこの明護を說くを得むと。世尊默然として之を許し給ひしかば、彼卽詩體を以て、阿吒曩胝經を說き初めぬ。是卽パーリ阿吒經序分の大要なり。同經の正宗分は毘沙門天王經と體裁を一にし、又二大段より成立す。第一大段は、卽所謂[27]阿吒曩胝の明護にして全部渾て詩體より成立し、

（十二）阿吒經の大會經より出でたるを論證す　阿吒經は他の長含諸經に比して、其文辭比較的に綺飾に富む其詩體亦主として後代の布羅拏(プラーナ)文學、若くは佛教祕密文學に見るが如き、首路迦を用ひ、之に離れる極めて不規則なる少許のアールャ偈頌も、亦古代の佛教文學に於ては見るを得ること希なり。而して古代の諸經に存するトリシュツブの詩體は、却て毫も阿吒經に見るを得ず。故に古經を見るに慣れたる人にありて　、阿吒經が後代に屬するものなるを鑑定せむこと共困難ならず。然れども此の如き鑑定に屬する方法を以て、直に阿吒經の時代を定めむことは、時に弊あるを免るゝ能はざる所たり。其確に大會經より出でたるを證明せむことは、別に鄭寧なる本文批評に待たざるを得ず。

(一)阿吒經はその第七頌已下に於て、四天王の威德を叙するにつき左の一頌を、四回重復したり。

Puttā' pi tassa bahavo, *eka-nāma ti me Sut'ṃ, asīti dasa eko ca,* Inda-nāmā mahā-balā.

（彼に多子あり、我聞く同名なりと、九十一子、因陀羅と名けて大勢力あり）

此の八字四句の一頌は、要するに大會經第十節已下第十三節まで、各節に繰回されし、

Puttā pi tassa bahavo, Inda-nāmā mahā-balā,

（彼に多子あり、因陀羅と名けて、大勢力あり）

の二句に起源し、此半頌の前後兩句の間に、eka-nāmā 已下 eko ca に至る二句を插入したるに過ぎず。

(二)更に阿吒經第二大段に於ける、鬼神将軍の名を列擧せる、四頌半の詩は、大會經第十五節の一部分を擴大にし

次に流通分あり大體毘沙門天王經と同じ。曰く佛陀晨朝に比丘比丘尼を招集し給ひて告ぐるに、毘沙門所說の阿吒曩胝明護を以てし、之を習學誦持すべきを命じ、其大功德を讃說して經を結べり。

敍して玆に到る。後章に詳論すべき、阿、毘兩經の本文比較を待たずして、聰明なる讀者は、早く旣に二者の間に存する、極めて重要なる聖典史的關係を洞察看破せむ。

（十二）　阿吒曩胝經と大會經との關係　今や本文の比較研究に入るに當りて、玆に先づ解決せざる可らざる、一大問題に逢着したり。そは阿吒經と同じく長阿含の中に存する、大會經（マハーサマヤ）との關係是也。蓋し此兩經は恰も同一の題目を敍述し共に鬼神諸天の名を臚列して、其多神的の傾向、亦大に相似たり。大會經は四天王及其眷屬並に上界の諸天等の來會聽法するを歌ひ阿吒經は四天王の守護を說きて、其眷屬の佛所に來詣する所を敍述す。其內容の酷似、旣に此の如し。而して亦兩經の中に同一の詩句の存在するを見る。故に此兩經の間には、確に聖典史的關係之非ざる可らず、阿吒經は果して大會經より出でたるか。若くは反對に大會經を生みたるか。或は又兩經共に同一手に出でたるか。是實に先づ裁斷を要すべき、大葛藤にあらずや。

抑長阿含經はパーリ佛經中、最も古代に屬するものゝ一にして其一品[三〇]衆集經の如きは、遠く阿育王の勅碑に其名を見る。而も現時の長阿含全體は決して同一時代同一手の編纂にあらず今。論ぜむとする阿吒經の如きも、其の近代に屬するもの一にして、確に大會經を剪裁補綴して成立したるの跡歷然たり。何を以てか之を言ふ。次に論證する所、希くは其眞相を明にせむ。

名は、古き印度神話に出づる有名なる乾闥婆神にして、摩訶婆羅多(三五)に於ても、彼に關する譚頗多し。之が藥叉神として現はれしは、後代の佛教文學に於て之を見るのみ。又阿吒經の記者が大會經の文に添加したる神將の名の中 Dadhimukha, Mucilinda, Mani の如きは極めて古代に屬する龍王の名にして、藥叉の名にあらず。第一(三七)は尼乾宗の古經に見へ、摩訶婆羅多にも殘存し、孔雀王經の古代の部分にも現る丶龍名なり。(三八)第二第三又共に古代に於ては、龍王の名として有名なるもの。此等古代の龍名が、藥叉の名に轉じたるは、卽阿吒經が比較的後代に屬するを證する極めて有力なる左劵に非ずや。茲に於てか、斷言するを得べし。阿吒經は實に大會經を資料として製作せられたるもの也と。大會經に於ては、尙トリシュツブの偈を存し、其文體亦阿吒經に比して素朴なる所以を、論じて茲に到りて初めて明瞭となるべし。又夫の漢譯長阿含の中に、大會經を存して、阿吒經を缺く所以も、其說明を下すことを得べきにあらずや。

五、毘沙門天王經の本文批評

I 序分の研究

(十三) 阿毘兩經序分の比較　パーリの序分が頌布演せる筆致に比して、漢譯は極めて簡潔なりと雖、精細に兩者を比較するときは、其間に密着の關係あることは、既に此部分に於ても明かに認得することを得べし。パーリに於ては、佛靈鷲山にあり。漢にありては舍衞にある差の如きは、本文批評に於ては、甚しく重要たる事項に

たるものにして、詳言せば、此一部分の前後に、他の鬼神の名を取り來りて、補綴添加して、文を成したるに過ぎず。

(一) 大會經

Candano, Kāmaseṭṭho ca, Kinnughaṇḍu,
Nighaṇḍuca
Pānado, Opamañño ca,
Devasūto ca Mātali,
Cittaseno ca gandhabbo,
Nalarājā Janesabho

(二) 阿吒經

Indo, Somo, Varuṇo ca, Bhāradvājop ati
〔已下六句全く上欄と同文〕
Sātāgiro, Hemavato &c. &c.

那一面には句を割きて新句を挿み、他面には前後に新句を添加したる痕跡、判然して隱覆すべからず。

然れども玆に尚阿吒經が、大會經と同一手に出でしにあらずとの疑團あり。是尚少く他の有力なる證據を持ち來りて、之を消融するの要ある所以也。抑右に拔出せる大會經の文は、健闥婆族に屬する鬼神王を列擧したる者にして、同經の文實に明なり。然るに阿吒經は悉く之を藥叉神將の名となしたり。特に興味多きは、大會經の"Cittaseno ca gandhabbo," の句は「彩軍(チツタセーナ)なる乾婆と(ガンドハバ)」の意なるや甚明なるに、阿吒經は之を「彩軍(チツタセーナ)」及び「乾(ガンド)闥婆(ハバ)」との二藥叉神となしたることとなり。是實に阿、大兩經が同手に出でざる確證といふべし。抑「彩軍(チノトラセーナ)」なる

せり。然るに毘沙門天王經の正宗全體は、皆散體を以て記せられたり。這般の相違は、新經と古經との關係上、屢見るを得べきものにして。例せば古きパーリの大會經の大部分は、詩體を以て記述せらるゝと雖、遙に後代に屬する。法賢三藏譯の同本大三摩若經は、散體殆んど全部を占むるが如し。一切の場合に於ては、此事條規となすべきにあらざるも、詩體の散體よりも古きは、佛敎文學に於て概して然るを常とす。

今毘沙門天王經の正宗分の全體と、阿經とを比較するときは、左の第三表の如き結果を得。

（第三表）

毘沙經 大段	毘沙經 節	阿吒經 節	阿吒經 偈數	阿吒經 大段
I	—	1	1—6	I
	1	2	10—15	
	2	3	18—23	
	3	4	27—32	
	4	5	50—55	
	5	5	33—35	
	6	—	—	
	7	5	36—48	
II	8	—	—	II
	9	—	—	
	10	—	—	
	11	—	—	
	12	—	—	
	13	—	—	
	14		1—5a	
	15	—	—	

已下順次に第一大段より始めて、兩經の聖典史的關係の存する所を炳明ならしめむ。

（甲）第一大段

あらず。阿吒經は、四天王倶に來り、毘沙經は毘沙門獨到る。蓋し漢が毘沙門を主として編述せられしものとせば、此の如き變遷を見るは、寧ろ當然のみ。今左に兩經序分の一端を比較せむ。

（1）阿吒經

Atha kho cattaro mahārājano mahatiya ca yakkha-senāya……, rattiya, abhikkantavaṇṇā kevala-kappaṃ Gijjha-Kūṭaṃ pabbataṃ obhāsetvā, yena Bhagavā tena upasaṃkamiṃsu

（爾時、四大天王、多數の夜叉軍と共に……夜間に於て、端嚴の色相、同時に靈鷲山を照灼して、如來に詣でぬ）

（2）毘沙經

爾時毘沙門天王。與百千無數。藥叉眷屬。於初夜分倶來佛所。放大光明。照祇陀園。

次で漢の「世尊有諸聲聞苾芻苾芻尼」已下も、明かに其文をパーリに見ることを得べしと雖、此等の本文比較は、此部分が甚しく重要にもあらざるが爲に、茲には一端を示して他は省略することとなし、進みて直ちに本經の主腦なる正宗分の批評に入らむ。

II　正宗分

（十四）正宗分全體の概論　阿吒經は前既に略述したる如く、其正宗第一段の全部は、首尾渾て詩體より成立

が、密教の發展と共に、益其地位を鞏固にし其機能を偉大にし、特に夫の金剛手（ヴジュラパーニ）夜叉の如きは、後代祕密教の演技に於ては、最重要なる一立役者となりしにも關はらず。七佛の信仰が、殆ど見るべからざるに至りしもの、一に是に基因するのみ。(四〇)尼波羅に於ては、この原始的佛教要素と、後代の密教的要素とを調和するの思想ありて、賢劫の五佛、卽吾人の世界に出現したる拘那舍已下釋尊に至る五如來と、大日已下祕教の五佛との間に、本地垂跡の說を生ずるに至りしが、此思想は單に地方的たるに止まりて、一般の印度教界には些も其影響を與へざりしを以て、隨て支那にはこれを傳へずして止みき。

毘沙門天王經は最も後代の祕密經典に屬するもの。其纂述にあたりて、特に七佛讃嘆の部分に局り之を略去して、材料に資らざりし所以のもの、這般密教々理史の發達より觀て、痛快に其判定を下すことを得。

(十六) 第一節已下第四節までの研究　七佛讃嘆の後に、阿吒經に於ては次ぐに東南西北の四天王の記述を以てす。各方の天王ともに、其叙述の順序は、第一天王所領の方位の美辭的讃述、第二天王威德の相、第三天王及其眷屬の歸佛にして、第一と第二の少分を除けば餘は悉く同一の文辭を以て記載せらる。毘沙經に於ては、何れの方位に於ても、阿吒經第一の叙述は全く省略せられたり。其他はパーリと同じ、四方ともに其天王の名を除けば、同一の文辭を重復したるに過ぎず。故に其第一節を比較討究せば、餘の三節は別に之を重論するの要あるなし。今阿吒經と毘沙經との本文を比較するに左の如し。

（十五）何故に毘沙經は七佛讃嘆の偈を略去せしや　パーリの第一頌に相當する文は、漢本に於ては全く之を闕如せり。このパーリ九頌の中に於て、前六頌は第二表に表出するが如く、七佛の讃嘆にして、殘餘の三頌は持國天王(ドフリタラーストラ)が管領する東方國土を詩的に形容したるもの也。而して此處に毘經に於て七佛禮敬の文の省略せられしは、事偶然に出でしにはあらで、佛教々理史の側より觀察して、頗趣味ある意義を有せり。抑原始的の密教、詳かに言へば小乘教よりして漸く分岐して、未だ多くの年時を經過せざりし祕密教にありては、其經典中、七佛の禮敬は實に闕く可らざる重要重大の要素なりき。(三九)此時代に屬すべき眞言聖典を見るに、到る所として七佛の擁護威力を讃說せざるなく、七佛の神咒は經中の主腦といふべきものなりき。然るに密教漸く發達して、理想的佛陀の崇拜熾盛たるに及ぶや、七佛の有したる勢力は、漸次に減却衰頽するを免るゝ能はざりき。而してこの傾向は祕教の大發展と共に益其潮勢を高め來り、後遂に昔時の七佛は、信仰上殆ど無意義のものとなり了り、僅に經首に其名を列するか、或は曼荼羅の一隅に、當時の俤を殘留するに過ぎざるに至れり。是蓋し教理上、現身應佛の信仰が、報法二身の理想的佛陀の崇拜に轉化し、現實より理想に進み、道德的實存のものより、哲理的表示(ジムボール)の者に遷りし歷程を示すものにして、要之、小乘的要素が、大乘的要素の爲めに壓迫せられ排斥せられたるに外ならず。斯く一面に於て、大乘要素のために驅除せられつゝある小乘要素は、他面には亦非佛教的要素、卽婆羅門諸教の儀式、及び魔鬼崇拜の俗信の著しく强烈なる勢を以て流注し來るに遇ひ、爲に遂に其位置を保守することと能はずして、七佛崇拜の如きは殆ど其痕跡を祕經の中に斷たむとするに至りぬ。四天王及び其他原始的佛教の鬼神

遙に大離怖畏者を恭敬す。

Namo te purisâjañña!

Namo te purisuttama!

南無最上人　南無至上者。

Kusalena samikkhasi.

Amanussâ pi taṃ vandanti

善を以て爾は遍觀す。

非人等も亦彼を禮敬す。

Sutam nêtam abhiṃhaso

tasmâ evam vademase!

是嘗て未だ聞かざる所。

是故に我等をしてかく禮せしめよ。

Jinaṃ vandatha Gotamaṃ!

Jinaṃ vandāma Gotamaṃ,

勝者瞿曇を禮せよ。

觀彼非人而能禮敬。

是故我今稽首歸命。

（一）阿吒曩胝經

Yaṃ disaṃ abhipāleti, mahārājā yasassi so,
彼名稱ある大王、該方を管領す。
Gandhabbānaṃ adhipati Dhataraṭṭho ti nāmaso.
持國と名けし乾闥婆の主。
Ramati nacca-gītehi, gandhabbehi purakkhato.
乾闥婆衆に恭敬圍繞せられて、伎樂歌詠を以て樂む。
Puttā pi tassa bahavo, ekanāmā ti me sutaṃ
彼に諸子あり、我聞く同一名なりと。
asītiṃ-dasa-eka ca, Indanāmā mahā-balā
九十一人、因陀羅と名けて大勢力あり。
Te pi ca Buddhaṃ disvāna, Buddhaṃ Ādiccaband-
hunaṃ
彼等佛陀、日種の佛陀を見奉りて。
dūrato va namassanti, mahantaṃ vītasāradaṃ.

（一）毘沙門天王經

東方世界。有乾闥婆主。名曰。
持國。具大威德統領乾闥。
婆衆。恭敬圍繞。歌舞作唱。
而愛快樂。有九十一子。同名。
帝釋。有大勢力。
見佛世尊。
歸依頂禮尊重恭敬。

tuṇḍ-ikiro (?) pacitvāna, tato bhuñjati bhojanaṃ.

(彼等は播種せず、亦彼等は鋤犂を用ひず。

諸人耕さず煎ざる米を食す。

秕糠もなく、糟糩もなき、淸淨香美實の食を、

(四一)ツンディキーラ(?)に煎て、後享用す。)

兩者の思想の順序は全く同一なり。誰か漢本がパーリより來れるを疑ふことを得むや。

(十八) **第六節** 次に漢本の第六節は、全部パーリに存せざる文なり。其後代の攙入たるは論なし。今漢本に就きて、委曲に文脈を檢せむに、此一節は思想の順序、甚唐突にして、前後の文段と相副はず。具體者は一見以て其插入に屬するを認むべく、第七節を研究するに當りて、彌此事實の明白なるを曉るべき也。

(十九) **第七節** 本節に於ける「復次乾闥婆」なる一句は、明かに後手の插入にして、この一句と、前の第六節の全體を除去し第五節より直に連續して本文を見よ。其文脈終始整然として、一貫するを認むべく、パーリに記述の順序と、全然一致するを見るべし。

本節亦前節の例に從ひ、追次兩經の文を提擧し 、比較せば瞭に二經の關鎖する所を觀るべしと雖、引文の冗多なるは徒らに煩雜に過ぐる恐ある以て、二三兩經の關係上、興味ある變遷を見るに便なる諸點のみを擧げて、全文の比較は之を讀者の親く對較するに任せむとす。

勝者瞿曇を禮せむ。

Vijjācaraṇasampannaṃ Buddhaṃ vandāma Gotam-
aṃ !　　正徧知明行足無上寂靜。

明行足の佛陀瞿曇を禮せむと。

阿毘兩經、詳略の別ありと雖、其思想の順序、全然符合し、其文辭亦大抵同一なり。漢本がパーリを模型として、之を襲用して文をなしたるの痕跡は、甚だ明なり。

（十七）**第五節**　阿吒經に於ては、毘沙門所領の方位、卽北方の形容は、他の三方面に比して頗精細の叙述を試みたり。北倶廬州の美と富とを叙する、絢爛の詩句、頗見るに足る。阿吒經のこの部分は、漢本の第四節に於ては、他の三方と同軌に之を省略せしと雖、第五節に至りて、乃該部分の首部を採り來りて、其文を構成したり。事第二表に標示するが如し。勿論毘經にありては、其記述頗簡淨にして、單に一瞥すれば大に阿經と相異るが如きも、詳に兩文を對比するときは、其源流する所、實に瞭然たるものあるを見む。漢經に曰く（復次北方世界、……地無耕種、人不執作、飲食自然、色香具足」と、轉じてパーリを讀め。

Na te bījaṃ pavapanti. Napiniyanti nañgalaṃ.
Akaṭṭha-pākimaṃ sāliṃ paribhuñjanti manusā.
Akaṇaṃ athunaṃ suddhaṃ sugandhaṃ taṇḍu-phalaṃ,

廣四十由旬」と。阿殿の數を池の數となしたるが如きまたその變遷を見るべし。

（乙）第二大段

（二十）第二段の概論　第二大段は大集經より材料を採取し之に孔雀王經より得來りし資料を添加して構成せられたるもの也。但此中、第十四節は、阿吒・大集・孔雀王の三經、共に存する材料なるを以て、其何れより材を取りしかは、後詳に論ずべき至要の問題として殘略す。

かく第二大段の原材は、大集孔雀王等の諸大乘經にありと雖、第一大段と連關して大體の思想は之をパーリに得たるや勿論也。故に又文中パーリより得たる資料の交錯するを見るべし。一例を擧ぐれば、其全段八節の各所に重復せらるゝ「彼諸……若有惱害者。卽失威力。……頭破作七分。如阿梨樹枝。亦不住阿拏迦縛帝大城」の文の如き、實にパーリの“……pācaro va paduṭṭhacitto gacchantaṃ vā anugaccheyya, thitaṃ vā upatiṭṭheyya vā ……Nam eso, Mārisa amanusso lobheyya Ālakam-andāya nāma rāja-dhāniyā ratthuṃ vā, vāsaṃ vā! ……Api su naṃ, Mārisa, amanussā s attadhā pi'ssa maddhaṃ phaleyyum”

（天尊彼衆惡心を以て、行くに隨行し、立つに又側に立たむか、……豈復アーラカマンダと名づくる王城の殿舍に入ることを得むや。……天尊、又實に此等鬼衆は、其頭七分に破裂せむ）の文に淵源したるなり。

蓋し毘沙門天王經の編述者は、大體の思想を阿吒經に獲得して、玆に第二大段を組成するに及び同經の中に

毘沙經には夜叉女の名として、阿吒曩胝（Āṭānāṭā）倶曩吒（Kunāṭa）波里倶婆曩吒（Parikusināṭā）曩拏波里迦（Nāṭaparika）の四名を列擧す。而も實はパーリの原文に於ては此等の名は毘沙門所領の諸都城の名なり。本經を阿吒曩胝經と命名するもの又其第一の都府よりして取りたるもののみ。（一）

毘經の阿拏迦縛帝大城といふものは、阿經の Āḷakamanda の轉じたる者なり。此夜叉大城の名は、[四二]パーリ長阿含の大善見王經、及び大涅槃經に見へ、又漢譯佛本行集經の[四三]「其城本是夜叉宮殿、名阿羅迦槃陀」と記するもの是也。[四四]孔雀王經金光明經に於ても、又此名見ゆ。此語の譯義に就きては、本行集經の譯註には「曠野宮殿」の解あり。蓋し語源を "at"「彷徨する」「飄零する」の動詞より取りたり。[四五]チルダルスは又之を Alaka＋manda の二梵語に還元して、解を施せしと雖、何れも尙語義の不分明なるを免れず。然れども、其語が[四六]印度古文學に屢見ゆる、毘沙門の都府 Alaka と關係存するは見るに難からず。毘沙經に存する名、阿拏迦縛帝は「アラカー城を有するもの」の意にして、卽 Vant の女性接尾語 Vatī を Alaka に加へたるものなり。この接尾語はパーリの "Manda" 若くは漢譯の "Vanda" の轉じたるものなるや明なり（二）

パーリの "Navanavatio Ambara-amvaravatio……rahado Dharaṇī nāma, yato meghā pavassant"〔九十九のアムパラアムバラワティ（具諸衣宮殿）あり。……陀羅尼なる池あり、之より大雲雨を降す〕の句は、毘沙經「有九十九池。水甚深廣。名曰地池。泉源通流。亦能降雨。」の文の依りて來る所なり。文中地池とはパーリの Dharaṇī の語を直譯したるもの也。此語は亦漢譯長含の[四七]四天王品にも見ゆ。曰く「園城中間有池。名那隣尼縦

第四表

(1) 阿吒曩胝經	(2) 毘沙門天王經	(3) 孔雀王經	(4) 大集經月藏分
1 Indra	1 印捺經 (indra)	1	1
2 Soma	2 蘇 摩 (Soma)	2	2
3 Varuṇa	3 嚩嚕拏 (Varuṇa)		3
4 Bharadvāja	4 婆羅嚩惹 (Bharadvāja)	4	5
5 Prājāpati	5 鉢羅惹鉢帝 (Prajāpati)	5	4
—	6 伊舍那 (Iśana)	6	6
6 Candana	7 左難曩 (Candana)	7	8
7 Kāmaseṭṭha	8 迦摩室里瑟吒 (Kāmaśreṣṭha)	8	7
8 Kinnughaṇḍu	9 俱爾建駐 (Kinnughaṇḍu)	9	9
9 Nighaṇḍu	10 儞軍吒 (Nighaṇḍu)	10	10
10 Pāṇḍu	13 鉢羅拏那 (Pranḍa)	13	13
—	14 烏波半支迦 (Upapañcika)	14	14
11 Opamañña	—	|	|
12 Devasūta	—	|	|
13 Mātali	27 摩多隷 (Mātali)	32	|
14 Cittasena	24 唧怛羅細曩 (Citrasena)	27	31
—	5 禰里迦舍訖帝 (Dirghaśaktin)	31	34
15 Gandhabba	26 巘馱里舞 (Gandharva)	28	31
16 Nalarājan	22 曩囉囉祖 (Nararājan)	32	34
17 Jinesabha	23 吟那里娑婆 (Jinarṣabha)	23	47

は、北方藥叉神將の列名のみを存して、他の三方面の鬼族卽乾闥婆、龍、鳩槃茶の諸鬼將の名は固より、之を缺くを以て、四方面の記述を同一均整にする必要上、阿吒經に缺けたる部分は、之を補足充塡する爲に、他に適當の材料を求むるか、若くは諸經の中に散在する、此等諸鬼族の名を集め、或は自ら新名を案出するの一つに出でざる可らず。然るに恰も好し、大集經月藏分に於て、此等四方鬼族の列名あり。特に其北方列名は、實に阿吒經と同一の根源に出でたるを以て、玆に其材料を大集經に仰ぎたる也。而して又大集に存する藥叉神將の名は、孔雀王經に於ても同一の記載あるが故に、此部分は寧ろ編者が平生渴仰尊重する孔雀王經に取りたる者と推斷するを得べし。蓋し孔雀王經は昔時印度各地に於て尊信甚だ深く流布亦頗洽かりし祕經にして義淨[四八]は其譯本に於て明に之を記載せり。支那に於ける異譯の多きと、現時歐洲印度に存する同經古寫本の多數なるに徵しても、此事實を證すべきなり。編者が祕密聖典の編纂者として、材を特に同經に求めたるは、勢蓋し自然のみ。

（二一）　第十四節　第十四節は、北方毘沙門天王の眷屬、卽藥叉神將の列名にして、是阿經第二大段の偈に見ゆる所なり。今特に此節を自餘の諸節に先ちて論定するものは、此部分は祕密佛敎史に於て、最重要なる材料の一にして、之を論證して置くときは、第八節已下を研究するに付きても、各種の便利あるに由れり。

前項に豫め概論したる如く、本節は阿吒・大集・孔雀の三經共に同一の記載あり。故に毘經が其何れより材料を取りしやを、研究することは、今の急務となす所なり。故に先づ大體四經の列名を比較し、而る後、詳に其材料の根源する所を檢索して、斷案を下すの要あり。乞ふ試に左の第四表に就きて、[四九]四經列名の順序を一瞥せよ。

39 Manicara	12 摩尼左羅 (Manicara)	12	12
40 Digha	30 儞里伽 (Dirgha)	26	26
41 Atha	—	—	—
42 Seriyyaka	—	—	—
—	31 帝里頗隷 (Triphalin)	30	—
—	32 帝里建吒 (Trikanta)	31	—
通計 42	32	32	50の中

此表に就きて検するに、阿吒經と毘沙經とは、其列名の順序頗る相異なり、其全體の數亦甚しく差違あり。故に毘經が直接阿吒經より材を取らざることは甚明瞭なり、依りて更に、之を大集と孔雀の二經に比較せむに、左の第五表を得。

第五表

大集經	孔雀王經	毘沙門天經
1—6	1—6	1—6
8	7	7
7	8	8
9—16	9—16	9—16
21	17	17
——	18—19	18—19
23	20	20
26	21	21
22—23	22—23	22—23
31	27	24
34	31	25
47	38	26
——	32	27
——	24	28
——	——	29
26	26	30
——	29—30	31—32

18 Sātagiri	15 娑多儗利 ('Sātagiri)	15	28
19 Hemavata	16 呬摩嚩多 (Haimavata)	16	29
20 Puṇṇaka	17 布囉拏 (Pūrṇa)	17	15
—	18 佉儞囉 (Khadira)	18	16
—	19 俱尾吒 (Kovida)	19	21
21 Kartiya	—	—	—
22 Guḷa	—	—	—
23 Sīvaka	—	—	—
24 Mucilinḍa	—	—	—
25 Vesamitta	—	—	—
26 Yughandhara	—	—	—
27 Gopāla	24 虞波羅 (Gopāla)	20	23
28 Suppagedhe	—	—	—
29 Hiri	—	—	—
30 Neti	—	—	—
31 Mandiya	—	—	—
32 Pañcalacaṇḍa	28 半左羅巘拏 (Pancalaghanda)	24	—
33 Aḷāvaka	29 阿吒嚩俱 (Aṭāvaka)	21	26
34 Pajjunna	—	—	—
35 Sumana	29 蘇摩曩 (Sumana)	—	—
36 Sumukha	—	25	—
37 Dadhimukha	—	—	—
38 Maṇi	11 摩尼 (Maṇi)	11	11

孔雀王經中に存在するを見るべし。故に孔雀王經の編纂者が直接パーリの長含に材料を取りたるは疑なし。此等の事は次で公表すべき、孔雀王經研究の中に詳にすべきを以て、今之を略す。而して又同編述者が阿吒曩胝經をも見たることは、左の兩文を比較して明に之を知ることを得べし。

1　孔雀王經

nāgo vā nāgāputro vā nāgaduhita vā nāgamahāllako vā nāgamahāllikā vā nāgapārisado vā nāgapārisadā vā……na nāgasamitaye Sthānaṃ labhisyati…
.. Saptadhâsya sphuṭe Murdhā anjalisyeva mañjali,

〔若龍、龍婦、龍男、龍女、龍父母及明屬……若還本處。彼類不容入衆。……頭破作七分。如蘭香梢〕

（不空譯閏六、六八—六九）

2　阿吒曩胝經

hāgo va nāgī vā nāgaputtako vā nāgaputtikā vā nāgamahāmotto vā nāgaparisajjo vā nāgaparicaro vā
……naṃ eso labheyya nāgānaṃ Samitiṃ Gantum.
……Sattadhā pi' ssa muddhaṃ phāleyyuṃ

〔龍、龍婦、龍男、龍女、龍大臣、龍眷屬、龍隨從……豈又龍の集會に赴くことを得むや、……彼等の頭は、七分に破裂せむ〕

孔雀王經の記者は實は阿吒曩胝經よりして材料を取れる也。卽ち同經編述の時代には、阿吒經は大會經と同じく、長阿含の中に存在したるなり。旣に然りとせば、夫の藥叉の列名も、亦阿吒曩胝經に取りたるを推斷せんこと容易なり。

II　大集經と阿吒曩胝經

右の表に就きて、詳に三者を比較せむに、毘經が孔雀王經を原材としたるは斷固として疑ふべきにあらず。何となれば、この兩經は其名數共に全然相符合し、唯僅に兩經の廿四已下少く其順序を異にすると、毘經に "Sumana" ありて "Sumukha" なく、孔雀經は全く之と相反するの不同あるのみ。然れども是實に些々言ふに足らざるの相違のみ。特に "Sumukha" と "Sumana" とは、梵文に於て字面大に相類し、二者容易に混同を生じ易きをや。されば僧伽婆羅譯の孔雀王經には、修木珂[五〇]の對譯あるにも關はらず。其譯註は Sumana の直譯なる「善意」の字を挿むを見るにあらずや。大集經に至りては啻に其全體の數が既に甚しく相違するのみならず。其順序も又著しく異れり。毘經が之と關係の遠きことは、一目瞭々たり。固より玆に贅辯するの要を認めざる也。

（二十二）阿經大集經孔雀王經の關係　前項に論證したる如く、毘沙經は其夜叉神將の名を直接には阿吒經より採取せず、之を孔雀王經に取りたる痕跡、隱覆す可らず。而して又大集經に於ても、同一の鬼神の列名ある前表に、見る所の如し。是に於てか更に一の講究すべき難問題生ず。それは孔雀大集の兩大乘經は果して阿吒那吒經と關係ありや否やといふ問題にして、該問題の中には實に大孔二經は、直接阿吒經より發達したるものなりや、若くは阿吒經と同時、若くは已前に同源の大會經より各獨立に發展したりやとの二問題を含む。今この二箇の疑問を解決するに就きて、阿吒經と孔雀王經と大集經と阿吒經の二題に分ち、論證するを捷利とす。

I　阿吒曩胝經と孔雀王經

孔雀王經はパーリ長阿含の大會經とは聖典史的に親密の關係ありて、[五一]大會の偈文二首は梵語に直譯せられて、

又同經の毗[五五]樓勒叉天王護持品に、鳩槃茶大臣大將の諸名を列する中に曰く、

「次名藪目佉（Sumukha）次名陀提目佉（Dadhimukha）」

と是亦明かに阿吒經の列名三十六及三十七を其儘に轉用したるにあらずや。此二名は大集の藥叉表に於ては之を缺くも、玆には明かに二名の順序を違へず存在し、以て阿吒經より取りし痕跡を殘留せり。

故に曰く、大集經月藏分は阿吒經の後に成り、之に資料を仰ぎしこと甚明白也と。

III　孔雀王經と大集經

大孔兩經が直接に阿吒經に材料の供給を仰ぎしことは既に明なりと雖、尙更に一の論究を要すべきもの殘存す。曰く大集と孔雀王との關係是也。蓋し此兩經は、大體に於ては夜叉列名の順序を同くし、大集に缺けたる部分は、孔雀王に於ても亦之を缺くが如き其最も注意を要すべきもの也。故にこの兩經の間にも、必らず一種の關係存せざるを得ず。蓋し此問題は頗重大至難のものにして、別に一論文を價すべしと雖、今極略して玆に兩經の關係を判定し置かむとす。

大集月藏經と完本の孔雀王經とは其飜譯の年代に於て實に五十年の差あり。卽孔雀王經の三譯中、最初のものは梁[五六]武天監十五年（西曆五一六）にして、月藏[五七]は高齊の天統二年（西曆五六六）なり。この譯經の時代より見るときは、孔雀王經は寧ろ月藏の前に存在したるが如き觀なくんばあらず。且又月藏は孔雀王と其內容の一部略相類して、其說述の精細遙に之に過ぎ、その小乘的要素を消化融會して、純大乘的たらしめし所、また孔雀王が原始

大集經月藏分も亦直接に阿吒經より材を取りて、其第十二卷第十四品を形成したるものなり。左に論證する所、其事實を明にするに足らむ。

前項の第四表に於て、阿吒經の藥叉列名、第二十一より第二十六までは、全く大集經に於て之を缺きしを見む。然るに大集の他の部分(五一)に於ては、此の缺けたる列名の、順序を亂さずして存在するを見る。

「復有乾闥婆大臣大力軍將……次名奚摩跋多（Haimavata）次名質多斯那（Citrasena）次名那荼王（Nararaja）次名禪那離娑婆（Jinarsabha）次名尸婆迦（'Sivaka）次名目眞鄰陀（Mucilinda）次名毗濕婆密多羅（Viśvamitrat.)」

と、次で復乾闥婆三十三人の名を列擧して右と同一の重說したり。是疑もなく阿吒經の藥叉列名第十四已下を採りしものにて、其順序も粗相同じ、特に第二十三尸婆迦（シーヴカ）已下第二十五の毗濕婆密多（エザミツタ）に至る三名は、其順序を違へずして玆に存在するを見べし。是蓋し阿吒經が藥叉の名となしたるものを、更に乾闥婆の名に流用したること其跡隱匿すべからず。何となれば、右に現はれし藥叉の名を討究するときは、自ら大集の阿吒經より後代のものなるを證するを得べければ也。蓋し奚摩跋多、(五三)毗濕婆密多羅共に大會經に出づる古代の藥叉の名なり。尸婆迦亦パーリの雜阿含(五四)に見ゆる古藥叉の名にあらずや。阿吒經の編者は、パーリ諸經の中より此等諸藥叉の名を摘み來り、之を大會經の偈文に添加して、其第二大段の四頌半を組成したり。然るに大集の編者は、更に之を轉借して、乾闥婆の名に用ゐたるなり。

なることは推斷するに難からず。

　月藏分布閻浮提分及び[六〇]星宿攝受分に於て、諸鬼神諸星宿が諸國を分擔して守護することを說く。其鬼神及び國名頗饒多なり。此國名の中には、印度各地は勿論、亦支那波斯等を擧げ、西域地方の地名を列擧すること特に詳なり。其中龜茲(クツチャ)、勅勒、鄯善(アバシン)、沙勒(カシュガル)、干闐(コーテン)あり。此中龜茲は羅什が滯留修學したるを以て佛教史に有名なる所にして、羅什は此國が符堅の爲に滅ぼされし慘劇を目擊したり。時建元十八年（西、三八二）なりき[六一]。勅勒は突厥の一族にして、常に鄯善族と相競ひて、互に鬪爭したるもの、或は高車と稱す。一時其勇悍を以て鳴りしも、元魏已後の史乘復其名を見ず。蓋し突厥の爲に覆滅せられたるなり。[六二]鄯善或は蠕蠕と對譯す。其突厥の爲に屠られて、カウカサスに遁れしは西曆六世紀の初期にありとす。今月藏分に於て、此等諸國族の記載あるは、同經が成立せる時代を示す好證左にあらずや。卽同經は此等の諸國民が尙繁榮して互に雄を中央亞細亞に競ひし時に成りしを示すものにあらずや。此時代は少くとも羅什が龜茲にありし時の已前なりしことは勿論なりとす。而して此時代に於ては、孔雀王經は尙其原始的形體を有したる事前既に論じたるが如し。玆に於てか安全に斷言することを得べし。曰く大集月藏分は完本孔雀王經の編纂に先ちて少なくとも百年の前既に成立したりと。

　月藏分既に孔雀王經の前に存したりとせば、孔雀王經の記者が其藥叉神將の名を取るに當りて、叉大集を參酌したりと想像せむも誣妄なりとせず。兩經藥叉列名の順序が、多くの類似を有するもの、玆に於てか穩當たる解決を下すことを得べし。

的密經として未だ大小兩乘の中間に彷徨するに比して大に進歩せり。故に此點より見て大集の孔雀王より後なるを斷定すべきこと、能ふべきに似たりと雖、而も飜傳の時代のみに依りて、經文の新舊を論ぜむことは、頗る大早計と言はざるを得ず。矧むや兩者の差、僅に五十年のみなるに於てをや。又大乘經と祕密經は、其發達自ら別なり。故に大乘經理の整然具備して、教系の雄大なるとき、祕密教理の尙幼弱なるを見るも、怪むに足らざるにあらずや。故に已上の論辯のみに依りて兩經の關係を論ぜんとせば紕繆も亦甚し。

抑完本の孔雀王經は決して一時に成立したるものにあらず。ある時代を歷て、漸次に發達增長し、以て現存の形體を具備するに至りたるもの也。(九八)此事實は同經に含める內容が歷々として之を明示するのみならず、亦其新舊各種の譯本に徵して、之を證明することを得べし。但し此事の詳細は、拙稿孔雀王經研究の公刊を待ちて、更に大方の是正を仰ぐことゝなし、玆に一言以て之を概括せば同經の原始的形體とも稱すべきものは、實に帛尸利密、鳩摩羅什等の譯出したる、單に一卷の小經本に過ぎざりしなり。故に羅什時代に於ては、勿論現存の完本三卷の孔雀王經の存在せざりしや言を待たず。而して二の小部の短經が、現今の形體を取るに至りしは、羅什が其飜經を開始したる年、姚秦孔始二年より數へて、僧伽婆羅の譯時より凡そ三十年の前に溯り紀元四百年より紀元四百六十六年に至る約七十年間にありと看做すことを得べし。此間に於て種々の要素原始的の經文に附加し添補して、其增大を見、以て今日の形體を完うするに至れり。今論ぜむとする藥叉神將の列名は、正にこの添加せられし新部分に存せり。故にこの神將列名は羅什と同時若くはその已後に、印度地方に於て編入添補せられしもの

成したり。試に左の第六表の兩經對比圖を熟視せよ。

第六表

毘沙門經	大集經月藏分 梵語	大集經月藏分 對譯	序述叙頌
1欲麼親	Kāmavant	1樂欲	1 三人兄弟
2樂麼親	Ratimant	2著欲	
3歐麼親	Gītimant	3憘欲	
4麼羅麼親	Mālamant	10麼羅縵都	2 十一兄弟の中
5麼度麼多	Madhumant	11縵頭摩都	
6花醉	Puṣpamāda	3富師波曼多	3 三兄弟の中
8吉祥醉	Srīmāda	1尸利曼多	
7恒醉	Sādamāda	1薩陀曼都	4 三十二乾闥婆の中
9財醉	Dānamāda	3檀那曼多	
10難彌迦	Nandika	4難提迦	
11青蓮花	Utpala	5憂波羅	
12白蓮花	Padma	6波頭摩	
13半尼羅	Pancala	10般遮羅	
14俱枳羅聲	Kokilésvara	11拘枳羅蘇婆羅	
15凍母嚕	Yambul	12閻浮羅	
16五髻	Pancasmi	13般遮尸佉	
17妙色	Suraśmi	15蘇羅斯	
18金	Sauvarṇi	14婆跋尼	
19麼拏尾	Māravin	16摩羅毘	
20輸俱	——	——	
21密里賀沙波帝	——	——	
22野縛帝	——	——	
23惹誐覩誐帝	——	——	

圖に見るが如く、毘沙經は大集經の記載せる第一の乾闥婆三兄弟已下第四の三十三乾闥婆に至るまで、順次に之を取り、或は其全體を用ゐ、或は其一部分を摘みて、適宜に按排し更に二三の他名を添加して、其乾闥婆將の

已上の研究に依りて、毘沙經第十四節の原材は、左の順序を以て、發達し來りたるものなるを論定す。

大會經↓阿吒曩胝經↓大集經月藏分↓孔雀王經↓毘沙門天王經

（二十三）　第八節已下合論　前項の第十四節を除きて、第八節已下、第十五節に至る中、第八と第十と第十二は明かに大集月藏分に出づる乾闥婆、鳩槃茶、諸龍の名を襲用して適宜按排して成したるものなり。第九、第十一、第十三、第十五の四節は、四方守護の鬼族に交互して、四隅の守護神として、閉舍左、必隷多、羯吒富單那、羅刹の四鬼族を添加したるものなり。此例は他の祕密經に於ても、之を見るを得べく、其添加の痕跡甚分明なり。

第八、第十、第十二、三節の原材は左の如し。(六四)

第八節は大集經第五十二月藏分第十二提頭賴吒天王護持品第十一より來り。

第十節は　同經　同分　毘樓勒叉天王護持品第十二より來り。

第十二節は　同經　同分　毘樓博叉天王護持品第十三より來り。

已上三節の中、玆には唯八節を原材と比較するに留め、餘の二節は讀者に親しく兩經を對照せんことを乞ひて、以て紙幅を儉せむとす。

大集月藏分の第十二、第十一は其名の示す如く、東方天王が佛敎を保護することを詳說したるものにして、文中天王の一族及び其配下の乾闥婆の名を列す。此列名を毘沙門の編者は、便宜剪裁摘取して、以て其第八節を組

（二十五）總結　已上二本有餘の項目を累ねて論證したる所、之を總括せば左圖第七表の如し。

第七表

祕密教を奉ずるの徒は、祕教を以て法身の所說として、大乘の諸經典を見るや、之を顯教として貶黜する泥土の如し。況むや夫の小乘諸經に於てをや。然るに何ぞ知らむや、夫の祕密經典なるものも、之を本文批評の鏡下に照らして分析し、之を客觀討究の法廷へ訴へて、審理を仰ぐときは、其要素は遠くパーリの阿含より來り、其材料の多くは、之を大乘諸經に取れる歷々分明言を左右に托するの餘地なく、其宣告の嚴明なる、亦實に抗爭するの間隙あるを見ず。而して此の如きは、單にこの一小經のみに止らず、祕密宗徒の尤も崇敬する孔雀王經の如きも予が研鑽の結果、亦大略毘沙門天王經と同一の成績を得たり。他の諸祕典、金剛頂大日蘇悉地の如きも、苦攷精研せば、亦其源流する所を窺め得べきや決して空望にあらず。希くは他日更に大方の指教を待ちて、着々此

列名表を形成したるに過ぎず。大集に於ける赤蓮花（鉢頭摩）なるが名が、毘經に於て「白蓮」となり居るが如きは、襲用の際に生ぜし極めて僅少なる轉訛のみ。

流通分の比較研究は、之を前項「八」及「十」に叙述したる阿毘兩經の內容概說に讓りて、玆には省略す。

（二十四）毘沙門天王經編纂の時代　已上累項の論述に依りて、讀者は旣に毘沙門天王經編纂を粗推知し得べし。蓋し同經が西藏に飜傳せられし時代は、西曆八七八より九〇一にして之を一方の極限とし、僧伽婆羅譯の孔雀王經は紀元五一六に成りしを以て、之を他方の極限とせば、其間五一一より八七八に至る、三百六十五年間に、毘經の編纂せられしを概算し得べし。而して此極限の中、唐時代に於ては、祕經飜譯の盛なるが如く、竺僧及渡天の士、競ふて金剛乘の新譯を出し、毘沙門に關する諸經軏も亦少からず、飜傳せられしにも關はらず、此經が未だ譯場に上らざりしものは、以て當時尙印度に此經の存在せざりしを推知するに足る。故に更に其上方の極限を縮めて、當時密乘飜譯の泰斗不空三藏が印度より歸唐したる時、即唐天寶十五年（七四六）を以て極限とし、西藏の飜經に先づ五十年已前には、此經の梵本旣に成立せしものと假定して之を下方の極限とするときは、此經は凡そ七四六より八五五の間卽概算して八世紀の後半より、九世紀の前半に亘りて、成立したるものなること、粗推斷し得べし。

六、結

密乘の大典禮を組成するもの、其理抑茲にあり、蓋し此大涵養の精神は、法華にありても華嚴にありても、之を存せざるあらず。而も其明瞭顯露にして、實際的なるもの、獨り密教に於て完しとす。賢首の五教、天臺の五時、判教の妙、範を百代に垂ふと雖、十住心の該羅無碍なるに比するに、稍遜色あるもの、亦實に茲に基因せり。故に今、吾が毘沙門天王經が、小乘を採り、大乘を摘み、彼に一句を拔き、此の一偈を剪みて補綴添加、以て新經典を形成したりとも、密教の本旨に於て、毫も妨げあるなし。又何ぞ其剽竊と模擬とを以て、之を貶するの愚を學ぶべけむや。且夫法身の說法なるものは、常恒斷へずして永劫に亘り、機熟し緣圓なるとき、載ち獅々吼し、載ち雷震す。龍猛の當時、嘗つて人文の發展印度宗教の融合を必要とするに逢ひ、人性亦兩部の大教を翫味するに堪へたるを以て、南天の大鐵塔茲に打開して、諸部の祕典人間に現れぬ。是固より祕經出現の最大なりし一時を示すのみ。若し此一時に局りて、祕密經の出現了れりとなさば、其見の淺陋も憫むべき哉。鐵塔の打開已前と已後とを問はず、苟くも緣あらば東天にも、西天にも、幾基の小鐵塔開け、南海にも北海にも、幾城の龍宮現じたらむのみ。然らば、獨り吾が毘沙門天王經に於て、其誦出の年時晚きを傷むべけむや。其假托と僞作とを云々するが如きは、固より祕密教の妙用が常に活潑々地なるを知らざる徒のみ。

謂ふに今や人文の開發漸く東西兩思想の統攝を促し來り、人性またこの大融合の鼎味を味ひて、其求道の饑を飽かさんとす、知らず何の所にか空海の如く、不空の如く、龍猛の如き好漢ある、カントを收め、ダルギンを融しショツペンハウエルを會し、科學も哲學も、民主主義も帝國主義も、ニイチエもトルストイも、鎔鑄陶冶、以

等の研究を公表するを得むか。

然れども祕密宗を奉ずるの人、願くは此種の研究を目して、直に密乘を破壞する魔業と罵る勿れ。深廣なる兩部四曼の大乳海を攪動して、淨信を擾亂し、妙理を隱蔽するの邪正と誹ることを止めよ。抑また歷史的考證の末節に拘泥して、宗教的要求の深牢雄大なるのあるを忘却するの寃を責むるを恕せよ。五大三密の大敎、豈這般本文研究の爲に亡滅すべき、然く價なきものならむや。祕密佛教なるものは斷じて自由思想の爲めに轉覆殞亡の慘禍を被るべき、北歐某專制國の如きものにあらず。否本文批評の精、歷史的考證の確は、宏に祕教の妙旨を闡發し、其妙用の長に潑剌として新なるを證明し來らむのみ。聞け。金剛乘の確大にして深遠なるは、抑何に因るか。卽其統攝の廣、包含の大獨り卓然として群教に超絕するが爲ならずや。而して此雄大嵩高なる含包主義、涵養主義は、要之、其根底に奧妙なる具體的活動汎神論の基礎を有するに因れり。密教之を稱して法身說法と言ひ、高く標して之を顯權の諸教に分つ。法身說法とは何ぞや。實に全人文の大發展、一切人性の大進步の現象を宗教的に表說したるに過ぎず。故に苟くも此大發展の要素となり、材料とならむものは、塵沙の微、涓滴の小と雖、悉く是曼茶羅海會の諸尊ならざるなく、大陀羅尼の字句ならざるなく、摩訶毘盧沙那の表德ならざるなし。吠陀の諸天仙も、婆羅末那の修法儀式も、烏波尼沙土の玄旨哲理も、史詩の鬼神英雄も、ドラビダ人の妖術も、雪藏山族の蠻習も、灌頂も、護摩も、牛糞も、髑髏も、一切之を網羅し來りて、大祕密教の法壇を莊嚴し、金剛

4 SBE　Maxmüller Sacred Books of the East

5 Mbh　Mahābhārata edited by P. Candra Roy Calcutta 1882—94

6 Pts　Pāli-Text Society, London.

（一）Atharva-veda VIII 10. 5. 10. "Tasyāḥ Kubero Vaiśravaṇo. vatsa āsīdāmapātram pātram."

（二）Śatapatha XIII 4. 3. 10 (SBE. XLIV. p. 36), Ṣaḍviṃśa B. 5. 6., Śaṅkarāyāna Gṛhasūtra 1. 11. 6. (SBE. XXIX p. 32), Chāndogya III. 15. 2. (Deussens Übersetzung 110) etc.

（三）Mbh. Sabha X. 1 fg., Vana CXXII 1 fg, CLX 1 fg etc:

（四）Mbh. Vana CCXXIII 10 fg.

（五）Bhagavati Bombay 1882 IV, 1 fg., Weber Fragment der Bhagavati 18. 65. 211., Uttarādhyayana XXII 41 (SBE XLVII7).

（六）Fausböl: Mythology of Mbh. Appendex.

（七）Lassen: Indische Altertumsskunde 1. 612.

（八）Varahassa Jātaka Fausböll II (196) (127, Translation Frāncis, III 124, 高楠 XLV. 59, Andersens Pāli Reader 1901, 20—22)

（九）楞伽經は羅縛拏を楞伽島の王とし、大乘同性經は Vibhīṣaṇa（毘々沙那）を該島の王とし、之を對告衆の上首として、說法せられたり、藏中の兩經を見よ。

（一〇）手近なるものは Grünwedel: Buddhistische Kunst pp. 24, 165.

て一大曼陀羅を畫き、ゲーテや、シエークスピーヤや、ワグネルや、一切之を攝受して、法壇の金剛妙歌、微妙の讃偈として、ツアラトストラも、四福音も、高蘭も、擧て之を金剛祕咒の字輪とし、大陀羅尼の章句とし、軍艦も鐵砲も鐵道も電信も、悉く之を金剛羯磨の大法具とし、標幟として、玆に一大祕密經を誦出し、以て法身說法の大活用を實現すべきもの、今正に其秋にあらずや。芙蓉峯下、大鐵塔自ら存し、太平洋岸、那伽の寶宮亦嚴然たり。嗚呼誰か之を打開し、之を探得するものぞ。（明治三十九年一月十日ストラスブルグ）

本論の典據及附註

略符

1 Gp　Grimblot: Sept Suttas palis tirés du Digha-nikāya paris 1876 本稿に引く所の阿吒曩胝經の本文は、此本に取れり、蓋し長含の刊本は、暹羅皇帝の勅刊を除く外、未だ全部の公刊を見ず、パーリ出版會社の刊本は、唯其三分の二を出したるに過ぎず。故に本稿は此書に負ふ所頗多し。但此書出版稍古く、隨つて種々訂正を要するもの少なからず。編中亦時々私考を以て改訂し援引したり。

2 高楠　高楠順次郎氏巴利佛敎文學講本、東京明治三十三年、此書中大會經を其兩譯と對比したる所、其親切にして、讀者を利すること頗多し。本稿大會經を論ずる項下を讀む人、必らず此好著を座右に置きて、對比せむことを勸奬す。

3 南條　A catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist tripitaka by B. Nanjo, Oxford 1883

(二五) Annales du Musée Guimet 1881. 288 (Mdo XXX. 15.)

(二六) Gp. Pp. 321—323, Translation 332—333

(二七) Gp. pp. 323—327, Translation 333—336.

(二八) Gp. pp. 327—321, Trans. 336—337

(二九) PTS Digha II 1903 (Rhys David & Carpenter), Gp 230—296 (英譯を添ふ) 高楠 XXII—XXX 15—21, パーリ長含二分、二〇、漢本第二分一九。

(三〇) Smith Asoka 1901, 143 衆集經はパーリ第三分の三三、漢本二分二にあり。

(三一) Gp. pp. 324 325, 327.

(三二) 高楠 17, Gp. 284. 已下分節は總て高楠に依る、讀者の便を計りてなり。

(三三) Gp. 329—330

(三四) Gp. 285. 高楠 17—18 本稿、第二十一項の對譯表を見よ、茲には譯を省略す。

(三五) Citrasena: Mbh Sabha CCXI, 8. etc.

(三六) 本稿第二十一項第四表を見よ。

(三七) Bhagavati III. 7. 3. Mbh. Adi p. XXXV 5. Bower Mss I.Ib. 閏六、六七に捺地穆佉、成七、四六二駄地母珂成七、五七に達第目佉を音譯するもの是也。

(三八) Bower Mss I.IB, Mbh Adi XXXV 6 閏六、六七、其他の諸龍の表を見よ。

(三九) 孔雀王、大吉義神咒、灌頂等の諸經は此時代に屬す。原始的密教に就きては異日更に詳論するの時あるべし。

(四〇) この思想は尼波羅地方的特有の經文 Svayambhū Purāṇa に起原す。概要を知らんと欲せば Hodgson The Lan-

（一一）Cunningham: The Stupa of Bharhut 1879. Plate XII

（一二）Suttanipata 18. 14. 5. (SBEX Part II 64.)

（一三）法華、金光明、大集其他に四天王の護法を說きしこと、僂指に遑あらず。

（一四）不空傳（宋僧一、致四、七二右）を見よ。また西域記其他に於て、西域地方に此神の信仰盛なることを記す。于闐國成立の歷史の如き其最も著明なるものなり。

（一五）Nam-tos-ras. Grünwedel: Mythologie des Buddh. in Tibet u. Mongolei 1900, 98 其他を見よ。

（一六）金光明經四天王品（黃九二〇―二五、四九―五二）Suvarṇaprabhāsa Calcutta 1898. VII Caturmahārājo-parivata pp. 34―45 は尤詳に四天王の功德を說けり。其他大乘諸經、之に類する甚多し。

（一七）佛祖統記四十三（縮、致九、九七左）南條 N. 849

（一八）同上　（同上　九八左）南條 p. 45. 其他の 973―981 は恐くは誤算ならむか。

（一九）本稿中の第二十一項の第四表に就きて之を知るべし。

（二〇）Annales du Mus'ee Guimet 1881, 327. (Gyut XIV. 14)

（二一）Schlagintweit: Die Könige von Tibet 1866. 57. Schmidt: Geschidte der Ostmongolen und ihre Führsten 49.

（二二）Gp 327―337

（二三）南條 N. 545. p. 135 fg.

（二四）昃九、一〇五、左本稿第十九項本經の第七節を論ずる下を見よ。四天王品に於ける毘沙門宮殿の記述及び其池沼の記載は、特に注意を要す。

(五〇)「修木珂梁言善意」成七、五〇右。

(五一) 左に其一例を擧げ置くべし。

(一) 大會經(高楠 16, PTS Digha II 257)

Kumbhīro Rājagahiko
Vepullassa nivesanam
bhiyyo nam satasahassam
Yakkhānam Payirupasati

(二) 孔雀王經(London Ms)

Kumbhīras ca Rajagṛhe
Vaipul snin nivāsikah
bhūyah Śatasahasrena
Yakṣānam paryupāsyate

(五二) 大集月藏分第十二、第十一、(玄四、四〇―四一)

(五三) 高楠、16.

(五四) PTS Samyutta N. 12 11.

(五五) 大集經月藏分第十一、第十二、(玄四、四二右)

(五六) 歲周錄に依る(結三、一九右)南條は唯概數のみを擧ぐ。

(五七) 開元錄六(結四、五八左)南條 N63. 550—577 は概算のみ。

(五八) 孔雀王經に存する龍の名を研究するときは、容易に此判定を下すことを得、例せば Pūrṇ-abhadra の如きは、其初めの部分には之を龍となせり、是大史詩にも見ゆる古き龍名也、然るに後には之を夜叉の名として擧げあるを見る。此等の例尚多し。

(五九) 玄四、五十三已下五十八に至る。

guage, Litertaure and Religion of Nepal 1894—115. fg を見よ。

（四一）此二語頗解釋に苦む。上語は鳥啄の義、下語は鸚鵡の義なるも、之を以ては未だ、之を解すべからず。漢本長含に曰く「其土常有自然釜鑊。有摩尼珠。名曰焰光。置於鑊下。飯熟光滅。不假樵火。」（鬱單品曰第二昃九、九五右）と故に Twn li-kira 或は寶珠或は釜鑊の名ならむか。倚博識の君子の指敎を待つ。

（四二）Childers. Mahāparinibbāna Sutta 55（SBE XI. 100）大善見經 PTS Dīgha II（SBE XI 285 は全く大涅槃經と同文なり。但し漢解には此名見へず。

（四三）佛本行集經三十七（辰八、六五、右）又枳橘易土集（哲學館大學板）二七を見よ。

（四四）孔雀王經阿蘭盤多（僧伽婆羅成七、四八右）阿宅加代多（義淨、成七、六〇右）阿拏挽多（不空、閏六、七〇右）Arakavati（London Ms 98A. Calcutta Ms 128B）金光明經、阿尼曼陀（曇無讖）黄九、五二左、有財（義淨）黄九、三〇左、Adakavati（Calcutta Edition）p. 51.

（四五）Childers Pāli English D'ctionary p. 26.

（四六）Mbh. Adi LXXXV 9. Vana CLXI etc. カーリダーサは其諸大作に、喜びて此字を使用せり。

（四七）昃九、一〇五左。

（四八）然此經。有大神力。求者皆驗。五天之地。南海十州。及北方吐貨羅等。二十餘國。無問道俗。有小乘大乘者。皆共遵敬。讀誦求請。咸蒙福利。（義譯淨孔雀王經記）

（四九）表中の梵語はロンドンアジア協會藏の孔雀王經原文紙本、及びカルカッタ大學藏同本貝葉本（凡そ紀元十三世紀の筆）に依り、僧伽婆羅（成七、五〇左）、義淨（成七、六三右）、不空（閏六、七三右）の三譯を對照して成りたり、大集は玄四、四三左の文を取る。

菩提行經梵本につきて（大宮孝潤君に寄す）

（明治四〇、一、新佛教第八卷四號）

同じく普賢の行願を永劫に期し、法門の無盡群生の無邊等く學び、等く度せむと誓ふ同行の、倶會一處の曉、或は之を望まむも難からざるべく、龍華の三會、袂を連ねむことも、いかで之なしと言ふべきや。まして、其趣く所、稍異れど、共に佛敎聖語の學苑に遊びて、貝葉樺皮の斷片に、溫古の志を一にする吾等なるをや。煩はしき紹介などの俗儀を略して、直に此書を公にせむも、君に破顏の笑ありて、我に彈訶の責なきや疑もあらじ。

「新佛敎」が近時著く印度古學の方面に力を注ぎ來りしこと、洵に雨峯氏の歡喜せられしが如し。唯憾むところは、徒に杜撰の文字を臚列し、識者をして顰を發せしむる二三子の徒あることを。「新佛敎」の大海、深廣にして無涯なり。固よりかゝる紛々たる雜魚の來り游ぶを追はず。而も此間、眞摯の講究、君が「菩提行經及其原書」の如きありて、雲濤を鼓するの鯨鯢。風雲を驅る蛟龍、方めてよく「新佛敎」の大なる所以、深廣無涯なる所以を彰明するに足るべきか。明治三十九年に於ける「新佛敎」の中、若感謝に價するもの、研究方面に之ありとせば、その一は島地氏「菩提樹史」の雄篇にして、他の一は確に君が同誌結尾の殿として、美しく研究方面の最後をなしたる今回の大作ならむこと。眼睛ある學者、誰か許さゞらん。許し玉へ、君。君が研究の成就したるに、中心の祝賀と隨喜とを、公に前に捧ぐるを。

（六〇）同六十已下六十一に至る。

（六一）鳩摩羅什傳（梁傳二、致二、七已下）

（六二）（六三）元史譯文證補、明治三十五年飜刻（那珂通世）、二十四、九—十、Franke: Beiträge aus chinesischen Quellen zur Kenntniss der Türkvölker und Skythen Zentralasiens. Berlin 1904. 16f, 70, 42,

（六四）玄四、四〇左、同四二右、四二左、三左、四三左。

（六五）不空傳（致四、七二）

雜誌は何なりしか、記憶に存せず。多分「宗教界」などなるべきにや。烏兎匆々今や三閲年、ベン氏去歳登仙し、荻原氏一昨年歸朝し孤客獨り此地にありて、尙古經を讀む。今君の檢出が、圖らずも吾等と合したるに會して、歡喜と感慨と兩ながら頓に胸間に湧き來るを覺ゆ。

(二) 君は菩提行經梵文の第一第二兩品の梵題缺けるよし記せられしも、こはある寫本にのみ缺け居ることにてケムブリッヂ及びロンドンの寫本には明に其名を存せり。左に之を記して大作の萬一を補足せむ。

Bendalls. Catalogue of the Buddh. Skt. Mss. canbridge. p. o, cowell and Egglngis catalogue of Buddh. skt. Mss. in R. A. S. K. 13 を見よ。

I Bodhicittānus'emsā paricchedah.

II Padeśanā paricchedah.

第一品は漢譯と同じく、讚菩提心品なりと雖、第二品は諸惡懺悔品の意にして、全く漢本の品題と相違す。

(三) 君は Aśokavadānamālā を、恐く天尊說阿育譬喩經又は阿育王經ならむとの推定なれど、こは君が他面に疑を存し玉ひし如く、全く違へり。概書はベンドール氏目錄(百十頁)の記載に徵するに、其一部分に阿育王及優波毱多に關する記傳を含有す。こは或は漢傳と一致するカウエル出版の Divyāvadāna 中に存する Aśokāvadāna と同一のものたるべし。然るに他の部分には、明に菩提行經を含み、尙其他幾多の譬喩經を攝め、更に祕密部の經軌をも其中に收藏したり。要之、該書は後代の編纂に係る一種の佛教叢書に外ならず。

されどまたこれをも許し玉へや。島地氏の雄篇に對して、既に續貂以ニ狗尾ニの譏を招くを敢てしたること、君の大作に屬しても、此に少く面施面上に胡粉を亂抹するの狂に出づることを。記し來る所は、固より學徒尋常の茶飯、敢て剞劂を煩はして、愚を天下に露呈するまでもなきことゝはいへ。學人が一句一字の微と雖、力めて精確を期して研究の公正を心がけむこと、是學界の通規なるべし。則「新佛教」の一隅を借りて、之を同好學人の是正に仰ぐことゝしつ。

（一）菩提行經梵文を最初に公刊したるは實に露國の佛教學者ミナエーフ（Ninaev）氏也。刊本、載せて“Zakiski” の第四卷にあり。此人は夫の佛教學語彙 Mahāvyatpatti と共に、妙吉祥眞實名經の梵本 Namasangiti を公刊して、大に印度學者を裨益したる碩儒なり。君が擧げ玉ひし印度佛典出版會報第二卷に出でたる同經原文は、實はミナエーフ氏の刊本を再版したるに過ぎず。されば同經公刊の功は、ミ氏其先驅たる譽を荷ふべきに、君が大作中氏の名を逸したるは頗る惜むべしとす。

三十七年の秋なりき。予は荻原雲來氏とミナエーフの刊本を讀みて、共にその漢譯を檢出しぬ。當時荻原氏は恰も故ベンドール教授、大乘集菩薩學論出版に關し、同論中に存する、諸大乘經の要文を漢譯よりして、證義する任に當り居りしかば（同論の序三頁、二十九頁及本文附錄の各所を見よ）、此事を先づベン教授に報じ次でブサン教授にも通信したり。荻原氏歸朝の際、某所にて演じたる講話に歐洲印度にて出版せられし、大乘諸經典の名を列しある中、また菩提行經原文の名を列して、其漢譯あることをも添え記しありしと覺ゆ。講話の公刊せられし

已上筆に任せて駢拇贅疣の罪を重ねたり。禮に嫺はざるの辭、「愛語」に疎き失もあらむには、願くば「依義不依語」の宏訓により、「同時」の好幸に牛溲馬勃なほ些の用ゆべき所あるを採り玉へ。

歐洲の天、今や漸く佛日の光を仰ぐの機至りぬ。佛教講究の志あるもの、益多きを加うること、春草の日に彌蔓するよりも盛なるを見る。此際君が菩提行經英譯の出版は攝化の功洵に大なるべし。予ははるかに其公刊の速ならむことを禱り、萬衆と共に、君が飜傳の成功を謳歌せむ。寂天大士曰く、「不顧於自利。唯願生利他、有情最勝寶。希有何得生、種々意利他、不獨於自利。」和南。

（四）君はベンドール氏、大乘集菩薩學論の原文が、獨逸に於て出版せられしことを記し玉ひしも、予は之を寫誤若くは誤植たりと信ずるに躊躇せず。同君が露國アカデミーにて計畫したる「佛敎文庫」の第一卷として彼得堡より出でたるは、餘りに明なる事實なれば。

（五）寂天の出現年代に關してはベンドール氏よく要を摘みて考證したり（集學論序文第三頁已下參照）。氏は例の西藏史家多羅那他の記事に基き、之を護法菩薩時代の人と定めたり。謂ふにこは動すべからざる說なるべし。君が論末に、首肯する能はずとして、記し玉ひし假定は、前既に *Asokavadanamala* の性質如何を略述しぬれば、之に照らして、固より之を筆に上すさへ必要なきものとなり了りぬ。

（六）集菩薩學論と菩提行經との本文的關係につきては、ベンドール氏精透に之を研めたり。君閑あらむ時、更に同書の序文四頁及五頁を披き玉はずや。

（七）集菩薩學論菩提行經の姉妹論とも言ふべき、寂天のスートラサムチヤヤは其原文未だ發見せられざれば、今其漢譯の有無を云々せむこと、卵子を見て時夜を求むるよりも愚なれど、試に之を悃辨し置かむ。藏中の「寶要義論」「集諸法寶最上義論」（共に縮藏暑帙の三に收む）の二書は、其體裁內容、集菩薩學論に酷似す。其飜傳書も集學論と同く施護なり。特に後者は其題號の集諸法寶の四字が、梵題のスートラサムチヤヤに合し、著名の善寂また寂天と其名類せり。謂ふに此二論の中、一は必らずスートラサムチヤヤなるべきか。此問題は精密に集學論と二論との比較研究をなしたらむには、或はその解決を得る望なきにもあらざるべし。

所、而して此の如きは、天下斯學のために之を惡むや亦酷し。

拙稿の中往々平井氏の論文(「新佛教」七、十一、八一九已下)に對して愚評を挿み、其正誤を要求するの點少からず。予は此部分を豫め同氏に示して、世に問ふの順序に出づる能はざりしを悲む。蓋し東京哥倫坡、其間文書の往復、多數の日子を消し、愚稿送達に要する、煩勞亦少しとせず。依りて事の專なるに準じ、稿を島地氏に寄せ、以て之を平井氏に問ふを略したり。こは切に同氏の寛恕を乞はざるを得ず。謂ふに予が歸朝も今や漸く逼り來りぬ。船もし楞伽の島畔を過ぎらむとき、幸に氏が東道を煩はすを得て、一偈の師なる故善吉祥(スマンガラ)大和上の塔前に、香華を捧げむ際、或は親く今日の失儀を陳謝するの機あらむか。

「聖樹菩提史」には今猶二箇の攷究を要する餘地殘存するに似たり。第一は世尊成道の際坐し給ひし道樹は、果して何樹なりやといふ問題にして、島地氏は博綜の筆、群典を括りて、之を畢波羅と確定せられしも、未だ博く南北兩藏の要文に渉らざりし故か、平井氏の如きは、尚幾多の確説あるを待ちて初めて之を信ずべきことを言明したり。第二は畢波羅と阿說他に對する名義の解釋、及び其關係也。こは平井氏旣に多少の解說を施したるも、惜哉典據と解明に尚詳明を缺くものあり。乃此點も一層の攷究を要する空地として殘留す。

要之、「聖樹菩提史」が其周到詳密なる古物學的及歷史的の考證を以て、卓然今日の佛教論壇に雄視するに關はらず、其の古聖典學及び言語學の方面には、多少の補足を容るゝの餘地あり。前顯二箇の問題の如きも、畢竟この空洞より等流し來りたる結果に過ぎず。著者がカンニングハム、ラージエンドララーラ、ミトラ等、價頗貴く

聖菩提樹考

（明治四〇・三、新佛教第八巻三號）

予は玆に「聖樹菩提史」につきて、二三の冗語を添加するを許されむことを、此有益なる論文の著者島地大等氏に請はんとす。

蓋此文未だ結尾に達せず。前途密葉靑翠、繁枝布護、曜を吐き芳を飛ばすの美、謂ふに夫の菩提樹王と趣を一にすべき乎。乃ち其芬馥頴秀の大觀完きを告ぐるを待ちて、方めて其雄偉嚴麗を品評し、賞鑑すべき已耳。何の意ぞや、叙述未だ圓ならざるに、旣に漫に私言を弄し、論斷漸く央ばなるに、早く横に一鎗を論陣の間に挿むを敢てするか。其體を失し禮を缺くも亦深からずや。而も南楞の平井默堂氏其銳氣を驅りて、先づ一鞭を著け去るあり、其記する所稍語りて詳かならざるの憾なきにあらずと雖、著者の之を遇する極めて禮あり。許して之を其論稿の尾に附するに吝ならず。依りて謂ふ。蕪雜予が稿の如きも、亦著者が一眄を恵まるゝの僥倖なきを保せじと。便ち玆に著者を通じて、冗語を天下同好の士に公にせむとす。

但し予は此忠實なる攷究に對しては、極めて精密に典據を示し、充分に確證を捉らへて、之を著者萬一の幇助に供するを以て、事の宜きを得たる者なりと信ず。輕々に臆測に任せ、推斷に頼み、典據明ならず、考證盡す所なく、叙述甚しく確信を措くに足るなくして、漫に無用の文字を臚腁するが如きは、予が屑しとする能はざる

此樹名またよく此重要なる宗教的性質を表示せり。抑 Aśvattha は Aśva（馬）Stha（依止）の二語より成り、馬の依止する樹、馬の止住する處の意なり。字面の上にては、Stha が音便のため短縮せられて、ttha となりたる外、別に奇とすべき所なし。極めて通常明晰なる名に過ぎず。而も此平凡なる字面よく印度太古の宗教生活を示して目覩するが如き感あらしむ。蓋し印度人は、他の日耳曼民族と同じく、馬を神聖のものとして、之に一種の宗教的意味を有せしめしは、印度宗教史を讀むものゝ、珍となさゞる所、其國王が大儀式の一として卽位（ラージャスーヤ）其他重大なる事件の際、執行する馬の犧牲（アシブユバメーダ）、卽佛教聖典に見ゆる馬祠なる如きも、此事實の一として有名なる者也。而して此樹が此神聖なる動物の依止所住處として、名けらるゝ所以の者は、實にその宗教上に於ける、重要なる地位を示して餘あるにあらずや。若人一たび馬住樹の名聞かむとき、其心頭に湧起し來る聯想は何ぞや。或は鶴髪童顏の老婆羅門が、駿馬を蓊鬱たる綠樹の下に繫ぎて、ガーヤトリの聖句を頌する崇高の景もあるべく、或は金甲寶鎧、劒戟旌旆天日を遮蔽して、威武四隣を壓する雄王が、百馬をこの聖樹の下に宰して、祭壇の煙、直ちに因陀羅（インドラ）の宮を衝くが如き壯觀もあらむ。ラツセンは馬住は其葉の動搖すること、駿馬の行くに似たるあり。以て此名を得たり。卽ち後に擧ぐべき動搖樹（チャダフラ）と同意なりとの註を施せど、こは正意にあらざるに似たり。

何れにもせよ。此樹名が馬住の二字より來りて此他に意味あらざることは、梵學初歩の人と雖肯ずる所。平井氏の記したる「智識の樹」の意義は元來斷じて存せざる所也。同氏が證左として引く所の、Abhidhāna Sūci の文は、不幸にも半已上誤植せられ、且つ之が訂正に資すべき邦譯、添加しあらざれば、今隨意に之を推讀せむこと

して、坊間容易に得る能はざる幾多古物學の大著を抄出拔萃し、大藏の內外、凡そ事の菩提樹に關するものは、爬羅掊捨して好箇の歷史を編出したる勞は、誰か之を謝せざらむや。而も之に補足すべきもの尙存するあり。增添附加、或は多少の美を這箇の雄篇に致すを得るとせば、佛敎言語學及古聖典學に志すもの、誰か奮ふて著者のために資料の供給に力めざらむや。不敏予が如くして此一篇あるもの、實に是に由れり。敍述の便宜上予は先第二よりして筆を起さむとす。

阿說他（梵 Aśvattha 巴 Assattha）と畢波羅（梵 Pippala 巴 Pipphala）は一樹の異名たり。梅や松や牡丹や菊や、凡そ樹木花卉の詩歌に上り、賞鑑に價するものにして、許多の異名を有するは、本邦支那既に然りとす。況むや古來神聖を以て印度宗敎史に重要の地位を占むる、我菩提樹の如きものをや。余は寧ろ其異名の比較的少きを怪むのみ。今先づ尤も著しき此二名を解し、以て他の異名に亘りて數行の冗語を費さむ。

阿說他 Aśvattha は其名古く、梨倶吠陀の中に出で、阿闥婆（アタルヴ）の中にも、其記載少からず、此中重要なる箇所はボエートリンク及ロート編纂の梵獨大辭典（Böhtlingk und Roth: Sanskrit Wörterbuch I. 522）にも引用したり。現時印度哲學家が喜びて誦する、チュハーンドーギヤ優波尼沙土（八、五、三）の偈は、雄大崇高の辭を以て、此樹の偉觀を頌したるものなり。二年前なりき、姉崎嘲風氏の印度にあるや、此句を書して婆羅痆斯（ベナーレス）附近の壯觀を予に報ぜられしことを記す。此樹を以て祭祀の器物を造り、陽燧を製するが如き、普く印度宗敎史に指を染むもの丶知る所、其大古悠遠の時代よりして、崇敬せられしこと、また更に縷陳するの要あらじ。

次に畢波羅に遷らむ。此名は印度典籍に見ること、阿說他の如く古からざれど、阿闥婆の中旣に其名あり。史詩及プラーナの中には此名頻々として現はる。其意義の如何なるやは、今强て之が觧を試むるを要せず。凡そ禽獸艸木の名、悉く之を解したらんことは、何れの國語と雖も、到底不可能の事たり。Pippala の如き、確實の證左あるまでは、先其解釋を避け置くを可とす。

梵語の巴利に轉ずるとき、多くの場合に於て、二箇の子音、重る時、後の子音は帶氣（アスピラント）と變ずるを常とす。Pusspa>Puppha, Bhraṣṭa>Bhaṭṭha, Niṣka>Nikkha の如き其例乏しからず。是平井氏も熟知する所なるべし。菩提樹の名 Pi ppala Pipphala も其よき一例也。平井氏の稿中、三回まで梵語として Pipphala と記しあれど、予は固より此が誤植ならんことを希望す。同氏また Pipphala が Piya+phalati（!）の二語より來れることを記したり。是氏が新說なりや。古典に證據ある說なりや。予が淺學之を知るを得ずと雖、此字の原形は前に云ふが如く Pyppala なれば是より Phalati（能破能裂能熟の義なり能蔓の義は余之を知らず）の字を分解し得べきものならむや。亦 p.=piya（梵の priya 親愛なる愉悦なるの意）も如何にしてかく解せらるゝやは、此所同氏の文特に簡潔に過ぎて、其何を意味するすら解する能はざるを憾む。謂ふに是氏が攷學匆忙の際の起稿なるべければ、大に意を酌みて、之を讀まざるべからざるは勿論なれども、然も筆に「Pipphala も是より名づけられたるものなり。卽 Piyà phalati の義にして能破或は能蔓の意なり」のみにては、余は折角の起稿が、無意義に終らざるやを悲む。謂ふに氏が說、必らずや正確の典據あるべく、語原變遷上の科學的證明もあるべし。余はこの報を得

は、頗越權にして且危險なりと雖、假に百千步を讓りて、錫蘭の釋家が、Assa〔mūle〕Sabba-ññu-taññāṇam titthati etto 'ti assattho「此（アッサ）〔樹下〕に一切智智依止（サッバニユタニヤーナムラータティス）す故にアッサトと〔名く〕」となしたりとせよ。其牽强附會實に噴飯に堪ゑざるものあり。抑（若し平井氏の所引の文が同氏が文より考へて予が推讀と其意味に於て違はずとせば）彼釋家は assa と Titthati とを以て此樹名を解し、assa が明に asva なるを曲解して之を男性代名詞單數の持主格と見て此の釋を作れるに似たり。予は此の如き、滑稽に類する解釋が、果して梵學の研究盛に、一時はクマーラダーサ王の如き、梵文學の大詩聖さへ出でし、錫蘭に存するを怪むのみ。尤もこは予が推讀なれば、本文の意果して此の如くなるや否やは、更に右の全文を正誤し且之が邦譯を平井氏に乞ひたる後ならでは、判明すべきにあらず。されど若し錫蘭の釋家が、平井氏の文の示す如く全く本來の眞意義を知らず、之を「之に一切智々の依止せる樹」なる意味に解したりとせば、其誤謬たるや漢土の釋家が之を無憂樹となし若くは「阿舍婆者馬波陀脚」（枳橘易土集哲學館出版三二頁）と釋せしと、其過失に於て甚だ輕重あるを見ざる也。平井氏は此樹の梵語を知らざるにあらず。而して尙「智識の樹」の意とし菩提樹と同意義なりとなすは、予其說の甚詳かならずして其意の那點にあるやを知るに苦しむ。

平井氏は阿說他の條下に於て「此等は何れも釋尊成道後に名けたるものにして（！）道樹の本名にあらざるべし」と記したり。而も阿說他が、遠く世尊成道の前數百千年の前に存したること固より前に示したるが如し。予は此點に於て、平井氏に正誤を要求するの權利、充分に存するを認むるなり。

あるものは、次で之を出さむ。「聖樹菩提史」の一より三に至るまでは、今之を他人に頒ちて、机上に存せされば、記憶の逸する所、所引の文、或は重出の愚を演ずべきことなしとせず。著者及讀者願くば之を恕せよ。

パーリ三藏の中、明かに世尊の道樹を記載したるものは、長阿含經の第十五、大本行經 Mahāpadāna Sutta III. 30. に出づ。其文左の如し。

Bhagavā mārisa assatthassa mūle abhisambuddhah. Bhagavā mārisa Sāriputta-mogga llānā sāvaka-yugam aggaṃ bhadda yugaṃ (Dīgha edited by Rhys Davids & Carpenter 1903 II. p. 52) 聖者よ、薄伽梵阿說他樹下に於て正覺を成じ玉へり。聖者よ、薄伽梵舍利弗目連の兩至上聲聞雙賢者を〔有し玉へり〕。

文實に過古六佛の生地父母聖樹弟子等を敍し來りて、以て我牟尼尊に及べるなり。リス、デギッヅも記する如く、此文パーリ三藏中菩提樹に關して最古の記載にして、各種世尊の道樹に關する記事は、皆源を玆に取りたるが如し。

次ぎて重要なるは、佛種姓經（ブッダヴンサ）（善見律の譯字を借る）の文なり。此聖典は、四阿含に比して近代に屬するは勿論なれども、又證左として頗價あるものとす。

Ahaṃ assattha-mūlaṃhi

Patto Sambhodhim uttaraṃ

XXVI 206

たる後ならでは、此奇解に評語を下す能はざるなり。

動葉樹 Caladala 及び象食樹 Kumjarāśana の名は、阿摩羅僧訶の語彙（Amarasimha's Kośae II. 4. 20—21）に出づ。此は平井氏の擧ぐる所の如し。此語彙の著者は、佛教徒なるが故に此二異名も必らずや、聖典中より拾錄したるものなるべけれど、予が寡聞なる、未だ其名を檢出し得ず、婆羅門文學に於ては此等の名殆ど知られず、次ぎに目犍連の語彙には菩提樹の名として實は唯阿說他・畢波羅の二名を擧げあるのみ（目犍連子の「名義燈」Moggalāna's Abhidhānappadīpikā edited by Subhūti 1883 pp. 161, 273. 243 平井氏は、此書に他の二名を擧げあるが如くに記しあれども、實は此書の本分に出づるにあらずして一百六十一頁の脚註に出づる所、蓋出板者スプッフティイ師が、他の註解に依て記入する所のみ。且同氏は此書に二回まで（第一百六十一頁及二百七十三頁）擧げある重要なる阿說他を略せしも是寧ろ他の脚註の兩名よりも重大なるものにあらずや。乃玆に之を補足し置く。

阿摩羅倶舍に出でたる菩提樹の五名につきては、ラッセンの印度考古學の第一卷（Lassen's Indische Alterthumskunde Bd. I. 304. Anmerk. 1.）に之を略記し、尙無花果屬の諸樹を詳記したり。（同卷三〇一頁已下）予は著者に、此部分を一讀あらむことを薦む。

第一の問題に歸り來りて、玆に世尊の菩提樹は何樹なりしやを古聖典の證左よりして確定せむ。漢傳諸經の要文は、著者多く之を拾錄したれば、先パーリの三藏中尤も證左とするに足るべきものより始め、漢譯の聖典中要

鉢多は Aśvattha の Aś を略しある音譯にて、頌文の字數のために、略稱を使用したるに過ぎず。何となれば同經の遊行經に「阿遊波尼俱律樹下。初成正覺」の文あれば也（昃九、十三左、十四在、）。文中の阿遊波尼俱律は Aśvattha-nyagrodha の對譯にして、尼俱律は阿說他と同一屬の植物固より相類する所あるが故に、隣近的に付稱したるに過ぎず。此樹が迦葉如來の菩提樹なること、南北兩傳とも一致し、本經にも「迦葉如來坐尼拘樓樹下」（昃九二左）の文あれば、牟尼尊が更に此樹を道樹とし玉ふ理由なければ也。過去現在因果經には畢波羅（辰十、十六右）と記せり。こは現時の通稱に依れる也。大乘の諸經中には、所々に文あれど明確なるは如來不思議境界經の、

佛在摩竭提國菩提樹下成正覺其菩提樹名曰阿攝波。（天十一、一三右）

實大乘聖典中には之を代表者として他を略し、祕洋聖典中、尤も古代に屬し、且つ大小兩乘に於て一時共通に傳誦せられし、孔雀王經に左の文あり。余は幸にも此重要なる聖典の梵文を得れば、之を梵漢相對して出文せむ。

Aśvattha-mūle Muni-Śākya-puṅgavaḥ
Upetya bodhim Sanavāpya Gautamaḥ

……〔喬荅摩牟尼釋牛王、阿說他樹下に坐し玉ひ（無上）菩提を得玉ひて〕……（カルカッタ貝葉寫經百二十八葉表、ロンドン紙本九十七葉裏）釋迦牟尼佛。聖種喬荅摩。坐於菩提樹。證無上正覺（義淨譯、成七、五七左）。

僧伽婆羅も不空も何れも義淨と同じく、原文の Aśvattha-mūle を菩提樹下と譯せり。蓋し解し易く通じ易き

(Buddhaavṃsa edited by Morris 1882 p. 66)

我阿說他の樹の下に
至上の正覺得たりけり。

此文亦七佛の本行を叙したる中の一節なり。此他本生經の序文に於て、詳密なる佛傳あれど、南傳の菩提槃沙、北傳の大莊嚴經本行集經の如く、道樹の名を明記せず。

リス・デギッツは、道樹崇拜の根元を論じて、兩面より考察を下せり。卽一面には世尊道樹に坐して正覺を成じ玉ひといふ傳說は、事印度の修業者としてあり得べき自然のことなれば、信頼するに足るとなし。他面には阿說他樹が、古來より神聖の樹たるを以て、如來の滅後門下其師主の尊敎と、この古代の信仰とを結合して玆に菩提樹起れりとなす(「佛敎印度」二百三十一頁)。余は第一の考察を正當と信ず。蓋世尊坐道樹の事實を親く聞きし遺弟よりして、展轉相傳へて、阿育の時代に至り、夫のブハルフートの彫刻をも見、亦前記長阿含の記事をも見るに至りたるならむ。故に予は安じて世尊の道樹を畢波羅……阿說他と信ずるに躊躇せず。語を寄す平井氏。氏にして若し長含及佛陀槃沙の明文を讀みしならば、島地氏に對して更に幾多の確證を要求するは無用にあらざりしか。

パーリ長含に相當する漢譯の長含大本經にも亦左の文あり。

毘婆尸如來。徃詣婆羅樹。我今釋迦文。坐於鉢多樹。(昃九、二左)

き佛教寫經家が ś (ç) ṣ (sh) s 三者の混用にて s となりたるものとせよ。其殘存する所の形體は Svattha にあらずや。是パーリ及ジャイナ聖語の吉祥慶福 Svatthi, Sotthi と字面酷似し、此經文の原文が中央亞細亞地方に行はれし一種の經典語を示すが如し。而して此字は梵語の Svasti 若くは Svasty より來れるものなれば、譯者が其原意を忘れて元吉と譯したるものに似たり。此等の例覓め求むか、余は其四五を提示するに乏しからず。而も同經の原文、未だ發見せられざる中は之を斷言するの勇なし。唯自家が古寫經及梵文字體の經驗よりして、一說として大方の敎を乞ふに止め置かむとす。

支謙が貝多樹下因緣經の貝多も aśvattha の Aś を略せし音譯のみ、後代の貝多羅 pattra (紙、寫經用のターラ樹葉) とは、其字義を異にす。(明治三十九年十二月十三日稿)

(付言――平井氏の菩提槃沙中、擧ぐる所のスジヤータは漢譯美生の定譯なり。之を用ゆる方、人耳に親しからむか。エル語の同傳は、固よりパーリの原文に比して頗る新らし、伯林大學敎授ガイゲルの說に依れば、十六世紀の作なり。如かず、旣にパーリ出版會の公刊もあるパーリの原文に依らむには。元來エル語の書籍は、特別の研究を除く外、一般の印度學佛教聖典史等には、あまり重大の價値を認むる能はず。予は後來、同氏に必要あらざる限りは、寧ろパーリの純雅にして優等なる原文に依るを得策とすることを薦めんと欲す、是一。予は後、氏が後來起稿の際は、其典據を明示し、嚴重に南北の大藏內外の典籍を攷査し、且つ原文には親切に邦譯を添え、出版せられたる書籍は、明に其卷數紙員を明記し寫本は其葉號を記せむことを請はんと欲す、是二。

に從へる也。

次ぎに後代人師の作になれる、文學的著作の代表として、尼波羅所傳の七佛讃偈 Sapta-buddha-stotra を擧げ、此項を結ばむと欲す。此項、幸にウィルソンの英譯あり。余嘗て之をケムブリッヂ所藏の梵文に照らすによく其眞意を傳ふ。依りて之を揭げんとす。

"I adore Śākya-siṃha, the kinsman of the sun, worshipped by men and gods.........the unbounded wisdom acquired by him at the roof of the Aśvattha tree (Wilson's works II p. 6)

我敬禮す、日種の釋師。子夫人の所應供を……阿說他樹下に無限の智慧を得玉へり。

かく南北兩藏大小顯密の諸經に亘り（予は其代表者を出したるまでなれど）世尊の道樹は阿說他——畢波羅の證、相一致して差異せずとせば島地氏の確信は斷じて之を疑うことを得ず。

終結に際して一事の辯ずべきもの殘存せり。他なし漢譯最古の佛傳の一なる修行本起經下（辰十、三四左）及中本起經上（辰十、四八右）に菩提樹を元吉と飜じたることなり。こは著者も疑を挿み置かれしと覺ゆ。今試みに之を解せむに之も Aśvattha の轉訛なるべきにや。善勝道場元吉樹下（中本起經）の本文が、"Uttare bodhi-maṇḍe 'svattha mūle の如きものとし中有一樹……如天莊飾足則元吉（修行本起經）が atra Vṛkṣo divyālaṃ-kṛto śvattho nāma の如きものなりとせよ。此が傳寫せられて、西域に至り支那に來る間に、原文の略去點(ワバグラハ)は、屢佛敎古寫本に見るが如く消失して。Aśvattha-śvattha-svattha の順序にて轉化し、而して Ś（ç）は其例多

南北兩傳の本事經

（明治四〇、五、淨土教報第七四六、七號）

一　本事經の名義

1　**本事經の位置**　十二部經の名、廣く經律論に散在す。今必しも煩しく玆に列擧するの要を見ず。印度諸大論師の解釋に至りては、瑜伽（三十五及八十一、縮藏來二、一九左、五、三左）大智度（三十三、往二、七四右）成實（一、藏二、七右）大毘婆沙（百二十六、收六、四右）等大小乘諸論藏に見ゆ。支那釋家の注疏、之を援引して解を施したるものまた尠少にあらず。此等の論疏、その要を摘みて學徒に便せしもの、大明三藏法數（四十四、露二、九八左）を捷とす。本事經は實に此十二部經の隨一に位せり。

佛教の教義、歐西に知られ、南北佛典研究、漸く端を發くに及び、ハーデー、ビュルヌーフの如き、九部經若くは十二部經につき記述する所あり。ドクトル荻原雲來氏は嘗て此等泰西學者の研究と、梵漢內典の所說とを對比し、粹を酌み精を採りて、其字義を明にし、大に學徒を資せり。文載せて『新佛教』の第七卷第二號（?）に存せり。故に本事經につきて、詳密なる言語學的說明をなさむことは今彼に讓りて省略し　唯簡單に名義解釋につきての異說を叙述批判するに止めむとす。

2　**通途の解釋**　本事經の梵語は漢本之を伊帝曰多伽若くは一曰多伽、伊帝越多伽に作る。蓋し Itivrttak（イテイヴルッタカ）の

次には氏に氏が文の校正を在京先輩友人中にてパーリ梵語を解する人に、依賴せむことを勸む。此の如くせば氏が文の誤植を防ぐを得べし、是三。島地氏に對しても又一言せむ。氏が對譯字は通じ易きに從ひ、邦人をして讀み易きに便なるために適宜手に任せて充てたるものなる故、敢て責むるに足らざれども、一例を言へば護波羅の護字の如きは古來 Ho 或は Hu の對譯字として慣用したる所、氏の旣に知る所なり。Go, Gu 瞿・具字を用うるを當れとす。こは筆を洗ふの際、念頭に波起したるまゝ一言を添ゆるのみ。兩氏若し余が記する所に過あらば之を敎へよ。罪を負う所あらば豫め予が懺悔を容れむことを白し置かむ。

過ぎず。而して此定例九字の中、眼目とすべきは許說者の三字にあり。此字は所說者、被說者と意を同うし、具に言へば世尊所說(所語)者の義、語中の許字は、說字の受動格(パッシーブ)を示したるのみ。卽梵語 Ukta パーリの vutta の漢譯なりとす。今パーリの本事經中、含む所の諸經を見るに、各經何れも「如是薄伽梵所說義我今聽竟」"Ayam pi attho vutto Bhagavata iti me Sutan-ti" の定例結句を以て了れるを見る。文實に智論に言ふ所と大同なり。如是 iti 語 ukta 經の名、玆に依りて起る。卽ち智論は、他論と異に、パーリと同じく Ityuktaka を以て本事經(如是語經)の原語としたる也。

第二種は此定例の結句を有する經文の、藏中各所に散在したるものを、纂輯して一經を形成したるものにして、小乘、經律論及大乘諸聖典已外に別存す。論簡潔之を記して曰く

「二者三藏摩訶衍外。更有經。名一曰多迦」と。

智論は已上二種の外、更に有人の說として前記通途の解釋を擧げ、其例として淨飯王の因緣を引きたり。是卽本事(イティヴルツタカ)なり。

4 **異說の起源** 已上叙述する所に由りて、之を稽ふるに本事經の原語は諸部未だ分派せざりし原始佛敎時代にありては、育王碑語若くは同類の方言にて受傳せられしこと、後有部瑜伽成實の諸派は其聖典語として、梵語を採用するに及びて、之を Iti+Vattaka 如是(過去)の意に解し、上座師及中觀論師は Iti-vuttaka 若は Itiuktaka 如是(世尊所)語の義に取りたり。二者何れが原意に近きやは今之を評し去るの途なし。

音譯なり。枳橘易土集（四、東洋大學新版、六〇）概略諸種の音譯を列ね、且論師疏家の諸說を擧げ、最後に多少評隲する所あり。列擧する所固より盡したるにあらず。評する所悉く當らずと雖、亦好箇の參照を資するに足る。

抑通途本事の名を解する、毘婆沙の中に「諸經中宣說。前際見聞事。如說過去大王都。名有香茅。王有善見。過去有佛。名毘鉢尸」（收六、四）と解釋したるが如く、過去及佛在世に生起したる事件の記載にして、佛前身の因緣卽本生にあらざるものは、渾て之を本事と稱したり。瑜伽、及成實またこの解と同じ。唯其文に詳略の異あるのみ。

3　**大智度論の異說**　然るに大智度論の解に至りては、大に前顯諸論と異るものあり。卽此には本事と飜せずして如是語經の譯あるを見る。抑本論は成實と同じく、羅什三藏の飜傳なるに、彼には「伊帝曰多伽………秦言此事。過去如是」と飜じて、本論と全く其譯語を異にせり。若し本論、如是語經の原語が、彼と同一なりしならむには、一人の譯手、豈にこの相違を致すの理あらむや。卽知る本論と他論とは此字の原語、全く異り居りしことを。

大智度論は如是語經に二種あることを說きたり。第一は卽ち「一者結句言ニ我先許フモノレ說ニ者今已說キ竟ルト」と釋するもの是也。論文簡約に過ぎて、一見之を解する頗難しと雖、要するに第一種の如是語經はある經文の其結句に我先許說者今已說竟の九字を具有するもの。換言せば此九字が定例の結句として記載されて居る經文を稱すとの意に

uddāna ありて、章中所收經文の內容を概括せり。大要左記の如し。

第一集品 Ekanipāta。此品中には經文の主題として、一法を說けるものを集む。例せば曰く一法斷すべきものあり是貪なり。曰く、一結深よく衆生をして輪廻せしむ、曰く欲也と說くが如し。此の如き經、本品に通計二十七を數ふ。

第一跋渠……………………十經
第二跋渠……………………十經
第三跋渠……………………七經
……二十七經

第二集品 Duka-nipāta は二法を說ける諸經を收む。二根、二焦惱、二見、二眼の如し。通じて二十四經あり。

第一跋渠……………………十經
第二跋渠……………………十四經
……二十四經

第三集品 Tika nipāta は三法を開示したる諸經の類集なり。品の收むる所の經五十あり。五章の下に之を列ねたり。

第一跋渠……………………十經
第二跋渠……………………十經
第三跋渠……………………十經
第四跋渠……………………十經
第五跋渠……………………十經
……五十經

現在南藏及び漢譯に存する本事經卽如是語經は、實に龍樹時代に於て既に其存在を見たる第二種の一日多迦にして經中如是語の起結あるものを纂輯し、之を所說法相の數目に從ふて、彙類したるものなり。其內容の一般は之を次章に概說せむ。

原始時代 Iti 如是＋{ Iti＋uktaka 如是語——龍樹、上座師、羅什
　　　　　　　　　{ Iti＋vittaka 本事——無着、婆沙師、成實師、玄奘

二　南北兩本の概要

5　**南本**　現存パーリ三藏に於ては、修多羅藏中四阿含已外に、雜部の諸經を收めたる屈陀迦尼迦耶 Khuddaka-nikāya の第四卽本事經也。善見律毘婆沙に曰く、

法句喩。嘔陀那。伊諦佛多伽。尼波多。毘摩那…………悉入屈陀迦（律一、寒八、二左）。

順序全く現今に同じ。但し善見律譯出の當時には現存屈陀迦の第一に位する Khuddaka-pātho を缺くのみ。一千八百八十九年、ライプチヒ大學教授エルンスト、ギンディシュ（Ernst Windish）は、錫蘭寫本三種と、緬甸寫本四種を校合し、且達磨波羅の本事經釋 Aṭṭhakathā の寫本二種を用ひて、頗良好なる本經の刊本をパーリー佛典出版會より公表せり。本稿は實に此刊本に感謝する所多し。

パーリー本事經は全部四品よりなり。各品跋渠 Vaggo 卽章段を設けて諸經を收む。各章の終には、必らず攝頌

一法品
- 第一……十二經（一――一二）
- 第二……十二經（一三―二四）
- 第三……二十三經（二五―四七）
- 第四……十三經（四八―六〇）

……六十經

二法品
- 第一……十二經（一――一二）
- 第二……十二經（一三―二四）
- 第三……七二經（二五―三六）
- 第四……十四經（三六―五〇）

……五十經

三法品
- 第一……十三經（一――一三）
- 第二……十二經（一四―二五）
- 第三……三經（二六―二八）

……二十八經

三法品は其第三章に於て攝頌を缺き、且つ其經數他章に比し著く少く、餘の體裁と比して甚しく均整を失す。卽此部分に缺經あることは見るに難からざる也。抑も此缺損は奘師所傳の原本に於て、旣に之ありしか、將亦展轉寫傳飜刻して、今に至るの間に、脫落したるものなるや、之を判定するの證據なし。

大唐內典錄は、龍朔四年春正月（同錄第十の付記を見よ）の公表に係る。而して奘三藏は僅に旬餘を隔てゝ、同き二月五日滅度を示せり。同錄記して曰く、「有沙門玄奘。覲方遊國。還返帝京。二帝欽承。徵入宰闕。爲製敎序。布所譯經。官給豐華」（五、結二、八三左）と。本事經は此記事の後數紙を隔てゝ錄せらる。曰く「本事經

第四集品 Catukka-nipāta は跋渠を設けず、十三經を收む。

6 **北本** 漢譯の本事經は玄奘三藏の飜傳する所、小乘部に收む縮藏にありては辰帙の第六に存ぜり。南條文雄博士は英譯三藏目錄の第七百十四番に此經の經題を "Mūla-vastusūtra" とせられしも、こは勿論博士が校讐の際、偶爾に逸せられし小過誤に過ぎざるべし。蓋本事經の梵語が、伊帝曰多伽なることは、前既に概說したるが如く、佛教典籍に於て、其記載敢て乏きにあらず。佛教學者常に之を耳にする所なれば也。

玄奘永徽元年（西曆六五〇）九月十日、本經の飜譯に筆を起し、其十一月八日には早くも既に全部七卷の稿を脫し了れり（開元釋敎錄八）。其神速實に驚嘆すべきものあり。

本譯の原本が梵語にして、パーリ其他の方言にあらざりしことは、西域記慈恩傳の記載に照らし、此經が奘三藏が將來したる那爛陀寺所傳聖典の一なるべきに徵しても之を知るべく、且三藏は域記の中、往々梵語已外の諸方言に對して、其訛略を貶黜するの口氣あるに見ても之を推すに難からざるのみならず經中の對譯字亦明にその梵本なるを證せり。即拘瑟祉羅（Kauṣṭila 三、一）特補伽羅（Pudgala 一、五六、二、二其他）其證なり。此等の字もしパーリ其他の方言なりしならむには、Kotthila, Puggala にして、瑟字特字は全く其要を見ざるべきや必せり。

漢本編纂の體裁は、略パーリと同じ。其所收の各品、南本の如く若干の攝頌（ウッダーナ）ありて章段をなし、經を類彙す。概略左の如し。

巴	漢	巴	漢	巴	漢	巴	漢	巴	漢
跋渠貳		3	27	第一品	一法品	跋渠参		跋渠貳	
1	24	4	—	跋渠壹		1	5	1	39
2	—	5	26	1—3	13—15	2	—	2	16
3	20	6	22	4	18	3	12	3	30
4—5	II9-10	7	15	5	16	4	3	4	—
6	10	8—10	—	6	23	5	54	5	25
7—10	—	跋渠伍		7	47	6	51	6	24
跋渠参		1	25	8	11	7	48	7	19
1—4	—	2—5	—	9—10	35—36	第二品	二法品	8	21
5	14	6	4	跋渠貳		跋渠壹		9	29
6	—	7	—	1	37	1—2	1—2	10	20
7	12	8	10	2	40	3—4	9—10	11	23
8	—	9	II37	3	38	5—6	7—8	12	48
9	1	10	—	4—5	1—2	7	22	第三品	三法品
10	17	第四品	—	6	50	8	14	跋渠壹	
跋渠肆		1—13	—	7	49	9	13	1—9	—
1	16			8—9	9—10	10	—	10	11
2	—			10	4				

一部七卷」と。卽是現存の卷數と全く同じ。故に若し時代經過の間に、第七卷に於ける若干の部分脫失したりとするも、其逸せし所は、極めて僅少のものたるに過ぎざるべし。

三　南北兩經の比較

7　**比較概觀**　漢本は南經に比して、文辭概して豐富、說述亦頗に詳密を極む。其所說の法相に至りてもパーリ述ぶる所のものよりも複雜廣博なるを見る。

南傳の本事經が上座部所誦のものなることは固より玆に說くを要せず。漢本は其法相が多く發智倶舍の所說と類するより推し、且つ奘三藏が之を一切有宗所誦の諸論と共に將來し、之を小乘部に收めて飜傳したるに、照らすに、共有部に屬するものなること容易に推斷し得べし。

南本第一、及第二品に收むる所の諸經は大約漢本に於て之を檢出し得べし。但し此等兩本に存する修多羅は、或は文辭義理共に一致し、或は唯共記述の義のみ相合して、文辭の全く相異れるものあり。南本の第三品に攝する諸經は、唯その五分の一を漢本に於て見るを得るのみ。南の第四品は漢に於ては全く之を存せず。

8　**兩經全體の比較**　左に一表を設けて、南漢兩經收むる所の諸經、相一致するものを對比せむとす。

其聚量高廣　如毗補羅山
況無初後際　久流轉生死
所受諸骨身　其量而可測
受是大苦聚　由不見聖諦
故應修妙智　正觀四眞實
所謂苦聖諦　苦因及苦滅
絕滅苦々因　八支眞聖道
此補特伽羅　極七有流轉
定斷一切結　能盡諸苦邊

（一法品第三經頌）

3

若自能守護　限等六根門
飲食善知量　成就信精進
彼於現法中　身心多受樂
及無災無患　無惱無燒然
行住與坐臥　若覺若夢中
由彼二因緣　恒無罪無責

此故に妙智を以て、聖四眞實を正觀す。所謂苦と苦因と苦の超絕と、八支の聖眞道苦を滅するの大因是也。此補伽羅遲くとも七返（の生死）を經過したる後、諸苦の邊際を盡し、一切の結縛を斷盡すべし。

（一、三、四、）

3

苾芻眼耳鼻舌身及意此等の六門を善護し、飲食に於て善く量を知り、諸根を制御するものは、彼身の樂と心の樂とを享受す。如是人は身に於ても燒惱なく、心に於ても燒惱なく、日に於ても若くは夜に於ても常に安樂に住す。

（二、一、二、）

9　**本文の比較**　南北兩本の本文が如何に一致するやは、左に掲ぐる二三の實例に就きて、其一班を窺ふに足るべきか。パーリの原文は學者の參照に資せむ爲に、特に之を稿末に添付し置けり。

漢譯

1

吾從世尊。聞如是語苾芻當知。若諸有情。永斷一法。我證彼定。得不還果。云何一法。謂是於貪。所以者何。一切有情。由貪染故。數々還來。墮諸惡趣。受生死苦。若能永斷。如是一法。我證彼定。得不還果。不復還來。生此世間。是故我說。若諸有情。永斷一法。我證彼定。得不還果。爾時世尊。重攝此義。而說頌曰。

我觀諸有情　由貪之所染
還來墮惡趣　受生死輪廻
若能正了知　永斷此貪者
定得不還果　不來生此間

（一法品十三經）

2

一有情一劫　受身骨不爛

巴利

1

吾世尊より如是語を聞きぬ。應供より如是語を聞きぬ。苾芻衆よ、一法を斷せよ。云何が是一法。苾芻衆よ、貪の一法を斷せよ。我即言はむ。汝等不還果に確住したりと、世尊已上說き玉ひし義を、茲に次の如く說き玉ふ。

此貪に貪着し、諸有情惡趣に墮つ。明見者は此貪を正しく了知して、
之を斷滅す。
之を斷滅し了れば決して再たび此世界にに來生せず。

（一、一、一、一、）

2

一有情の一劫に於ける骨聚は、堆積山嶽に等しからむと大仙說き玉ひぬ。亦摩竭陀の山城に於ける、靈鷲山の北なる、大山毘補羅の如しとも示し玉へり。

巴				漢			
消極的（斷滅すべきもの）	Lobha	貪	1	1	貪	Labha	I 消極的（斷滅すべきもの）
	Dosa	瞋	2	2	瞋	Dvesa	
	Moha	痴	3	3	痴	Moha	
	Kodha	忿	4	4	覆	Bhraksa	
	Makkhasa	覆	5	5	惱	Vradāsa	
	Mana	慢	6	6	忿	Krcrha	
				7	恨	Upanaāha	
				8	嫉	Vradāsa	
				9	躭	Irsyā	
				10	慳	Samrakta	
				11	慢	M•na	
				12	害	Vihimsa	
				1	佛	Buddha	II 積極的（永念すべきもの）
				2	法	Dharma	
				3	聖衆	Sangha	
				4	戒	Sīla	
				5	施	Dana	
				6	天	Deva	
				7	休息	Upa'sāma	
				8	安般	Ānāpana	
				9	身	Kaya	
				10	死	mrtya	

漢の消極的方法の中、貪瞋痴を除きて、餘は俱舍に出づる十小煩惱地法 Upakle'sa の大部分を含む。積極的

居聚落空閑　衆中及部處
有智常積贊　當生善趣中
（二法品第二經）

4
吾從世尊。聞如是語。苾芻當知。根有三種。其性甚深。顯了甚深。其性難見。顯了難見。云何爲三。一者未知當知根。二者知根。三者具知根。云何未知當知根。(乃至廣說)。爾時世尊。重攝此義。而說頌曰。
（三法品第二十經）

（三、二、三、）

4
吾世尊から如是語を聞きぬ應供より如是語を聞きぬ。苾芻三根あり。云何が是三未知當知當知根。知根及具知根苾芻この三、是三根也。世尊已上說き玉ひし義を、茲に次の如く說き玉ふ。

已上本文の比較によりて、漢巴の兩經が略如何なるものなるや概見をするを得べし。第四例に擧げたる漢經叙述の頗詳密なるに對し、巴經の唯名義を列擧したるに止まるが如き、『以て自ら二十有特色の存する所を見るべし。

10　**教理の比較**　漢本はパーリに比して其所說の教理、著く複雜まして法相亦隨て多きを見る。其一例に徵せば、パーリに於ては、阿那含果を獲得するの必要條件として六種の煩惱を斷除すべきことを教へたり（第一品第一、一より六に至る）然るに漢譯に於ては十三種の煩惱を滅斷すべきことを說き（第一品第十三經已下）たるのみならず。此消極的方法の外に更に積極的の方法を開示し、佛法僧等の十種を常念すべきことを勸めたり。左の比較を一せよ。

三十七經長行）宛として、大乘家の口調を帶ぶるを見る。

11　**實際道德の比較**　パーリは、主として出世間の道德を開示し、出離生死、證得涅槃の大綱を提示す。漢經亦其大體に於て出世間的道德を說くことパーリと同じ。但し此には此外に大に世間的の道德を說くの詳密なるものあるを異とす。僧俗二衆の和合の必要を示しては頌して曰く。

出家與居家　展轉互相依　由力法二輪　速至涅槃路　出家依在俗　得如法資具　在俗依出家　獲微妙正法
二衆互相依　受人天快樂　度生老病死　至淸凉涅槃　（二、第二十七經）

その孝養父母を敎ゆるの切なるや、之を說示する二回を重ねたり。今其頌のみを擧げむ。此頌は時々之を誦して、敎會衆に敎ゆるに最適切なるを見る。故に煩を厭はずして一面特に傳道者の爲に敎材を供せんとす。

二補特伽羅　恩深重難報　所謂父及母　能生長世間　假使以兩肩　盡壽荷父母　常供養恭敬　猶未爲報恩
父母於世間　能生育敎導　慈心求利樂　如彼影隨形　若父母先無　信戒聞捨慧　子令其修習　名眞實報恩
恭敬給所須　唯現世安樂　令修信戒等　究竟證涅槃　（二、第三十四經）

諸有樂福人　應尊重父母　禮拜修供養　敬愛親近居　世間聰慧人　恭敬於父母　恒時修供養　常生歡喜心
父母於世間　恩深重難報　除無益制惡　授利勸修善　與妻室資財　慈心常覆護　是故修供養　無量福聚生
現得勝名聞　咸供養恭敬　死生天善趣　受妙樂無窮　欲得生天人　受五欲妙樂　猶如天帝釋　當供養父母
（二、第三十六經）

方法の中、第一より第六までは通途言ふ所の六念 Sadanusmrtaya にして、安般卽瑜伽論に所謂阿那波那 Ānā-pāna を念ずること（論二十七、來二、三〇左其他）身を念じ、死を念ずること、亦廣く大小乘諸經論に散說す。今玆に煩しく之を援引するを省ぶく。

漢本は亦阿那含果の區別を詳にし、中般 Antarā-parinirvāyin. 生般 Upapadya-parinirvāyin 有行般 Sābhisa-mskāra-parinihvaymu 無行般 Anabhisamskāra-parinirqāyin 上流 Unhvarota の名を列すること、有部の法相に異ならず（三、9）。また五下分結 Avarabhāgiya の名を擧ぐること數回に及べり（三7、8、9等）。是等の法相は、パーリ經に於ては全く之を見ず。

漢經は法相の敍述右に說示する如く、パーリに比し複雜なるのみならず。其理を說くの巧妙なるも、亦パーリに一等を超ゆる所あり生死の相續を明するや曰く、

如光明影閤　雖恒共乖違　然放二法中
未曾有間缺　生死亦如是　雖恒共乖違
然於二法中　未曾有間缺　無明根所生
愛水所滋潤　纔死生便續　中無間缺時

（第二、第四十六經頌）

財法二施、財法二祠の優劣を判するや曰く（譬如世間。從牛出乳。從乳出酪。酪出生酥。從此生酥出於熟酥。

の、乙にありては後に位し、甲の存する所、乙之を缺き甲或は增す所あるべく、乙或は失ふ所なしとせず。加ふるに、上座師はその教義大に有部と異なるものあり。其性質の實行的保守的なる亦有部が研究的進歩的なると正に相反せり。乃ち其所傳の經典が、自ら發達に差異を生ずるは固より怪むに足らざる也。哲學的討究に力めて、法相の按排解剖を喜ぶの有宗は、其傾向傳持の際自然に其聖典を變ぜしむべく、戒律的修道を主として議論思索を喜ばざる上座師焉くんぞ自ら其傾向を、所奉の經典に現はし來らざらむや。列經順序の差異は、要するにかゝる事情よりして、生じたるに過ぎず。讀者先此觀をなして、顧みて更に兩者を比較せよ。卽其間に存する妙味は、自ら津々たるものあるべき也。

13 **兩經の前後** 兩經が同一の根元より發し、其發展の際、教義其他の事情よりして、著しき變化を見、以て現存の形體を取るに至りしこと、前略陳するが如し。然るに、玆に尙解決を要すべき一問題横れり。卽南北兩本は孰れか古くして孰れか新なる、換言せば、孰が最原始時代の聖典に近きやといふ問題是也。

前項既に比較したる如く、漢本はパーリに比して、其文辭詳密に、其内容增大し、其法相複雜なるを見る。單に分章の體裁より見るも、漢は粗十二經を以て一章となすの法により、パーリは概して十經を以て一章を設けたり。故に通途古典鑑定に適用する通則に照らせば南本の北本より古きは固より言を待たず。

更に之を聖典史に顯れ居る事實に見むに、南本は西曆五世紀の終、卽善見律飜譯の當時既に儼然として其存在を證することを得るに、北本は玄奘已前、之と同類の雜經、卽法句經、本生經等飜傳せられ居るに係らず、此經

其勸誡の懇切至れるもの、之を佛門孝經中の第一節とせむも不當なりしとせじ。

要之、漢經はパーリが比丘の訓練即教團已内の制戒を以て主とするに對し、漢經は更に對外傳道的の教誡を加へ、在家俗衆の攝化を以て、其目的の一となしたるに似たり。

四　南北兩本の關係

12 **南北兩本の起原**　前概說したる如く、南北兩本は、其體裁內容に於て大同たるのみならず。亦其收むる所の經文の順序、時に同一なるを認む。卽漢本二法品の第一と、パーリ第二の集品の第一跋渠に於ける諸經は、其列次特に著く相類するを見る。其他、試に前揭げし所の比較につきて、精細に之を檢せば、彼此列經の順序、互に錯雜出入して、差異甚しき間、髣髴として自ら一線の兩者相類するものあるを暗示するを默會せむ。

此微細なる一種の類似は、果して何者をか吾人に教ゆるや。他なし。是明に兩本が同一の根源より出でゝ、現存の形體に發展したるを告ぐるに外ならず。那古代諸部、未だ分裂せざりし已前の經典は、一方梵語を以て有部に傳誦せられ、那爛陀の大學に學習せられて、玄奘の飜傳を見るに至り、他方はパーリ語を以て上座師に傳授せられ、西曆五世紀の上半、佛陀瞿沙の再譯を經て、其經名早く既に善見律の上に著はれ、展轉して緬甸暹羅の佛教徒間に講究せられ、以て今に迨べり。而して二派分岐の始より其傳誦の聖典用語を異にし、互に門戸を張りて相持し相讓らずとせば、時代悠遠の間、自ら相互の經文に差異の生じ來るは、自然の勢にして甲の前に存するも

き所也。且他品の諸經が一の除外例なく皆「如是從世尊語」Vuttam hetam Bhagavo'ā の起句と、頌前には前に出したる Etam-atthaṃ Bhagavā avoca, tatthataṃ iti Vuccati の定例句を有し。結句としては「如是世尊所語我今聽竟」Ayam-pi attho Utto Bhagavotā iti me sutan-ti の例句を具ふるに、第四品經文の多くは此本事經に重要なる特徵の例句を缺如す。是第四品は明に後代の攙入附加なるを證するものにあらずして何ぞや。卽ち後手が增含の四法を說けるものを拔き、且つ遍論の句を取りて、一品を形成したるを明に示すものにあらずや。乃パーリ豈必らずしも輕しく古きを尊信し得むや。

若し玄弉所飜の本事經が、弉師が缺本を譯する筈之なしと信じて、現時の本は、少く結末に脫經あるものと見做し得ば、漢經は其全體の分品に於ては、優にパーリよりは古きもの、少くとも後代添加の新品なきものなりとの斷案を下し得べきなり。

パーリに於ても亦漢本と同じき。經文編入の混亂あるを見る。卽第三品跋渠伍の九は、其內容よりして、當然第二品に攝すべきものなり。文に曰く Dve'mani bhikkhave Iāuāei" 苾芻此二種の施は云々と、誰か之か源第二品にありしものたるを疑ひ能はむや。漢經に於ては此經明に二法品に嚴存して其第三十七位を占めたり。パーリは玆に不思議にも、前に擧げたる漢經と同一の錯誤を演じたるなり。

由之觀之、現存のパーリ經は、必ずしも漢本より古代に屬すと言ふを得ず。其添加增補の痕あるや、相類し、其攝經の混亂、亦轍を一にせり。而して顧みれば、漢經が近代發展の俤を留むるの歷々たる、前旣に論するが如

につきては、其飜傳は勿論、存在を記するものあらず。故に此點より見ても、南本の古きを證し得るに似たり。

次に特に內容につきて之を檢せむに、前項に對比したる阿那含獲得の條件の如き、假令百步を讓りて、パーリの六種煩惱は、ある脫落缺損ありて其數少く、漢經の十二種卽正しきものなりと許し得るとするも、漢の積極的方法卽十念の存在は、其後代の追加增補の跡自ら歷然たるか若し。且つ漢經に於ては、三法品に編入すべきものと二法品に謬り收めたるものあり、卽二法品の第九、第十の兩經是也。是兩經は、其長行は成就二法と記して、本品に收むる正當なるが如しと雖、其頌文には明に「作三種惡行」若くは「作三種妙行」と記して、もと三法品に存したるを自白し居れり。パーリに於ては此二經明に第三集品跋渠壹の第四第五に存せり。此混亂より見るも亦漢經が、其の根本形體と、大に遠きものなるを推し得るが如し。

然も已上の論據のみを以て、毫もパーリ經典の何者たるやを檢察することなく、直に漢經の後代に屬するものなるを斷定し去らむことは、少く大早計の譏を免るゝ能はじ。今更に少しく南本に就きて、聖典史的に前後を評價せむ。

パーリの第四品集は、他の三品に比して其品數著く僅少に且つ其跋渠を設けざる、大に他品の體裁に異る。其收攝する所の諸經も其半はパーリ增一阿含諸經の全文を出したる者（2、6、7、9、11、12、13）、其一は卽、論部、逼伽羅坋那抵 Puggalapannatti IV 23. III 13. の文を襲用したり（5）。他品の中、亦增一を襲用したるものなきにあらずと雖、其數極めて少なく、本品の如く、品の半數已上、他經の全文を借るが如きは絕えて之な

vo pāṭibhogo anāgāmitāya. Katamam ekadhommamī? Lobham hikkbave ekadhammam pajahatha | Aham vo pāṭbhogo ā gāmitāyā'ti. Etam attham Bhagavā avo ca, tatthetam iti vuccati:

yena lobhena luddhāse
sattā gacchanti duggatim |
tam lobham sammad-aññāya
pajahanti vipassino |
pahāya na punāyanti
imam lokam kudācanau ti ||

Ayam pi attho vutto Bhagavevatā iti me Sutan ti || | ||

(2) I. 3. 4. (Windisch p. 18)

Ekass' ekena Kappena puggalass'aṭṭhi-sa-ñcayo |
siya pabbatasamano rāsi iti vuttam Mahesinā ||
So kho panāyam akkhāto Vepullo pabbato mahā |
uttaro Gijjhakutassa Magadhānam Giribbaje ||
yato ca ariyassaccāni somm ampaññāya passati ||

しとせば、則南北兩本の新古を斷定せむこと嗚乎又難哉。學者は更に幾多有力の第三證の出づるを待たざるを得ず。

但し大體に於て、若し後代添加の新品を除去し、直ちに彼此の三品に就きて、文理の出入する所を比較し來るときは、予は實行的保守的の上座部に傳誦せられし經典は、進步的哲學的一現有部に受持せられしものよりも、比較的其純正を維持して、原始の形體に近きものあるべきを信ぜんと欲す。

已上略本事經の比較研究に關する大要を概括せり。南北兩本と其四阿含諸經對法藏との關係に至りては、今少く研むる所あり。別に一論を草して、之を世に問はむ。若夫兩本全體の精細なる本文的比較に至りては、數紙の論稿之を能くすべきにあらず。他日病客幸に壽あらば、卽䨇三藏の芳躅に倣ふて、駑鈍幾月の功、パーリの原本を邦譯し、之に漢譯を對比する小功德あらむことを望み、今は玆に擱筆せむ。本經に曰く「尊重法樂法。欣法樂法行。於法常隨念」と勉めむ哉。

付錄パーリ原文

(1) I. 1. 1. (Windisch p. 1)

Vuttaṃ hetaṃ Bhagavotā Vattaṃ Arahatā, ti me sutaṃ: Ekadhammaṃ Bhikkave pajahatha ! Ahaṃ

古于闐及其珍貴の古物

（明治四〇、一〇新佛教第八卷一〇號）

（スタイン氏の大著を紹介し、其發見したる古寫經斷片の研究に及び、添へて獨逸現今の中央亞細亞研究に於ける活動を報ず。）

（一）于闐といへば、少しく佛教史を披いた人には、其教理史に於ける重要の位置や、教會史上最も必要の國であることなど、別段に書き立てるまでもあるまい。然し此國の歷史や其佛教時代の事蹟につきては吾國學書の間に、その研究は、先づ寥々の嘆があると申しても可からう。ドクトル荻原が、何處かの雜誌で、ロツクヒルの譯した「于闐未來記」のことを紹介し、次で二楞學人（小野玄妙氏）が、漢譯藏經や支那の史籍から、同國の歷史や佛教のことにつきて、盛に其研究の必要を呼號したことがあるのは、確に記憶して居るが、其他は海外に居りて、博く學徒の業蹟を見る便を缺いて居るので、雄大の研究がありても、玆に紹介する榮を得ることは出來ぬ。新刊の境野氏「支那佛教史」などにも、必らず面白い着眼點が同國に對してあつた事だろうが、之もまだ見ぬ事だから何とも致し方がない。

予は二楞氏が「宗粹」――「宗教界」の前身の――に、于闐に關する研究を公にしたのを讀むで、少しく注意したいこともあつたので、歐人が于闐に關する從來の研究成績や、目下の同國に對する熱心の探究などの大略を

dukkham dukknasamuppādam Iukkbaasa ca atikkamam |
arigam aṭṭhāng ; kam maggam dukkheepasamagāminam ||
sa sattakkhattum paramam sauphāvitvāna puggalo |
dukkhassandtakaro hoti sabbasamyojanakkhayā ti ||

(3) II. 1 2 (Windisch p. 24)

Cakkhu so!añca, ghānañce, jiuha, kayo, thatha mano |
etāni yassa dvārāni sāgattāni 'dha bhikhuino ||
Bhojanomhi ca matañññū indriyesu ca samvuto |
kāyasukbam cetosukham sukham so adhigacchate ||
Aḍayhamānena kāyeṇa adaybamārena cetase |
Divā yadi vā rattim suktam vībarati tād isorāti ||

(4) III. 2. 3. (Windisch p. 53)

Vuttam hetam Bhagavatā vuttam Arahatāti me sutam. Tīṇi 'māni bbikkbave indriyāni. Katamāni tiṇi? Anāññātaññassāmītindriyam' aññindriyam, aññātāindriyam, imnāi kho bhikkbave tīṇi indriyāuīti. Etāmaṭtham Bhagāvāavoca, tatthetam itivuccati.

Archaeological explanations on chinese Turkestan, Oxford 1907. といふものだ。馬翁の東方聖書全集を初め南條氏や高楠氏の好著を出版して、東洋學には非常に功のある、牛津大學印房 clarendon press の出版だから、印刷製本とも申分のない高雅なもので、大さは美濃紙大の上紙を用ひて居る。全部は上下二卷で、上卷には紀行古蹟發掘の報告、其材料の解說等を載せ、下卷には全卷渾て蒐集した材料の寫眞である。今順次に右の兩卷の內容を紹介しよう。

上卷は序文二十三頁、本文六百二十一頁の大册である。筆を迦濕彌羅よりパミール高原の旅記（第一章）に起し、玄奘其他旅行者の古記を參酌して、大分有力な考證をして居る。次でサリーコール（Sarikol）と喀什噶爾の路程で、玆にも作者が該博な學問と卓絕な識見は遺憾なく顯はれて居る。サリーコールは唐代の喝槃陀、漢陀、或は渇館檀のことだ（第二章）。之に次ぎて喀什噶爾の歷史的記述がある（第三章）。續きて同地及びヤールカンドにある古蹟と其漢史の記載が來る（第四章）。それからカルガリク（Karghalik）から于闐までの路程（第五章）、次に于闐の地理人種（第六章）、及び歷史的記述（第七章）が續くのだが、第七章はことに重要な研究が公にしてある。――恐く歐人從來の研究を大成したものと見てよからう。第八章は玄奘の記載に照して、于闐の城市の位置を確定したので有名な牛頭山のこともよく研究してある。已上八章は先づ大體からいへば、序論の樣なもので第九章已下が彌、同氏が發掘に從事した古寺院や古家屋の記載になるのだ。

第九章はダンダーン、ウリク（Dandan Ulic）の發掘で、玆處で氏は十三箇處の埋沒せる古寺院古家屋を掘り

記して、「宗粹」に投寄して置いた。此拙稿の中に、予は于闐研究に關して、エム・アウレル・スタイン氏の功績を略述し、姉崎荻原などの同好者と、漢堡の東洋學會で見た、同氏の蒐集した珍奇の材料や、それにつきて報告された、重要の演說のことなどもざつと記し、且つ當時既に出版となつた、同氏が材料蒐集に關する豫報 “Preliminary Report on a journey of archœological and topographical explanation in chinese Turkestan, London 1901” のことも、亦稍通俗に書かれた旅行記の “Sand-beried ruins of Khoten, London 1903” も一寸書いて置いたと思ふ。そこで同氏が完全の報告を載せた大著が現はれて、少なからず世界學壇の驚愕と讃美とを博し得た今日。どうしても、之を本邦の學者に、一寸紹介する義務がある樣に感ずるし、且つはこの拙き紹介も、多少は學徒にある新しき興味と刺激とを與へることゝもなるだろうと思ひ、最後には自分が少しくこの大著の中に存する珍奇な材料に對して、檢出し得た結果につきて、本邦學者の是正を仰がうといふ考もあつて、例の通り「新佛教」の一隅を拜借することにした。勿論一部の讀者には隨分迷惑のものでもあらう。然し是に一つ斷つて置きたいことは、痛快な敎理上の斷案や、興味深き敎會史の問題などは、こんな一面から見ると、骨董道樂な樣などうでもよい樣な硏究が大成して出て來るので、決して一足飛には價値のある斷案は出來得ぬものだといふ事だ。蜈蚣の足を敎へたり、蟋蟀の睾丸を調べたりする比較解剖學者の仕事は、そう必要でもない樣だが、之から進化論のような、雄大な眞理が建設せられるのではないか。

（二）スタイン氏の大著は題號を「古于闐」“Ancient Khoten” といふので、別稱して Detailed Report of

ヘルンルの爲に讀むだこともある。第二にバーネツトとフランケ（Barnett & Franke）の兩氏で、發見せられた西藏文書を讀むで居る。第三に最も面白いのは佛教文書の中に一つ猶太的波斯語の古文書があることで全く猶太的一神教の思想を書いて居る。之はマルゴリヲス（Margoliouth）氏がよく考證して書いて居る。第四に有名な古錢學者のラプソン（Rapson）氏が、發掘された支那及于闐地方の古錢を論定して居る。五珠錢、開元、乾元、元寳、大暦などの支那錢と共にバクトリヤ、アラビヤの古錢も交りて、中々趣味がある。第五はトーマス（Thomas）氏が書いた、牛頭山懸記。ロツクヒルの書と對照して精細の考證をやつたのだ。第六はチヤーチ（Church）氏が、古佛畫に用ひた色彩を化學的に調査し、第七はロスツイ（Lószy）教授が古于闐各所の土砂を地質學的に攻究したものだ。これ等何れ愚はない立派な論文だが、特に最後の二者は如何に著者が周到の注意をしたかゞ思はれて、如何にも本書の價値を層々大ならしめる。

已上の略述で、略本書の價値が判るだろうが、本書はこの外に更に六十餘葉の精密なる寫眞版を挿入して、古塔殘壘及びその發掘された現狀を寫し出し、其間趣味ある多くの寫眞で中央亞細亞の風物人情を眼のあたり讀者に知らせて居る。

下卷は一百十九葉の精巧なる美術寫眞版で一冊をなして居る。古佛像あり、古壁畫あり、各種の什具あり、古錢あり、寫經の斷片あり、古文書あり、書牘あり、實に考古學者をして、垂涎三千丈ならしむるといふてもよい。

されば本書は、佛教討究家は勿論のこと、一般東洋史を修むるものにも、考古家にも東洋美術史の研究家に

起して、壁畫、佛像、梵語西藏語支那語の古謄本、古記錄類、木製器具其他家屋の裝飾類、約三百點を得たのだ。第十章は前記の大成功を終りて、ニア河（R. Niya）の方面に進行した記事である。第十一章はニア河附近の古家屋發掘の叙述で、此處に種々の支那及印度方言の古文書を發見し、具法盧文字を以て書したる木製楔形の劵數種をも得、家具文房具の如きものすら出たのだ。第十二章は右の發掘後進むでエンデレ（R. Endere）河に至りて、新たに發掘に從事した記事で、玆處でも塔や堡砦の埋沒したるを掘り起して、頗る良好の結果を得た。稻蘇經の西藏譯の斷片も、玆處で發見したのだ。其他布帛絹布類や、許多の佛畫類も同時に出た。第十三章はカラドン（Kara-Dong）と玄弉の所謂媲摩の古地の發掘で此所では五十點許の金屬玻璃製の裝飾品及支那刻印の如きものゝ外、大した獲物もなかつたが、兎に角、昔時の盛大を想像するに充分の材料を得たのだ。第十四章はアクシビル及ラワク（Ak-Sipil & Rawak）の發掘で玆處でもエンデル河に於けると同樣の好成績を擧げた。特に後者の一塔からは非常に多くの佛像や壁畫や其他種々の珍貴の材料を收め得た。此境と之に付屬した精舍の彫刻は、實に佛教古物學上、巨大の價のあるものだ。第十五章は于闐よりの歸路を記して筆を收めた。其中にある于闐の土人で古寫經の贋造者があつて、歐洲の學者が、贋品を買ひ、之につきて種々佛論などもしたことがあつたが、この贋造者は、スタイン氏の前で、全然舊惡を自白したなどの面白い記載もある。

已上スタイン氏の叙述に次いで、世界著名の專門家の筆になつた附錄が添えてある。第一にシヤヴンヌ（E. Chavannes）の各地で出た支那文の公私の書牘の解說がある。この一部分は予がドクトル荻原と嘗てドクトル、

よく發揮して居る。

古寫經の中で、最も完全に近く保存されて出たのは、金剛經の原文である。これは一昨々年荻原氏の注意で今ヘルンル博士が研究中だ。此他に般若の一部であらうと思はるゝ一斷片（今机右に大般若がなければ之を檢出することは出來ぬ）と、他に未知の語で書かれた一經文がある。これは波斯語から轉訛した一種の方言で、多分于闐の俗語であつたらしいが、文字がブラフミー梵語でありて、語中に劫、大乘(マハーヤーナ)、一切勇菩薩(サルバシユオ)、などの語が間雜して居るので、夫が佛經であること丈は分つた。恩師ロイマン先生は、其得意の技倆で、文字の磨滅して奇古な奴を讀むこと丈は難なくやつて退けられたが、其中に一切勇とか一切勇菩薩とか云ふ語が度々出るので、恐くこの菩薩のことを書いた經文であろうといふ考がつき、予にそんな經文があるかとの問合せであつたが、讀者も知らるゝ通り、此菩薩の名は大乘莊嚴寶王經(カーランダビユーハ)の原本に一度出る位で其他には甚稀なものであるから、予も大に答辯に窮したが、兎に角右の斷片の原文を見ることとにした。すると其斷片の中に *Sanghata Sūtra* といふ字があつたので、漸く捜索の端緒が付き、漢譯の僧伽吒經の新舊兩譯を對校して見ると、玆處には一切勇菩薩が、全經の問者で、其名は殆ど毎紙に數十回も出るのだから、しめたと思ふて、恩師と其名の數や、劫や大乘などの語を目當にして、種々比較した結果、終にこの未知の國語で書かれた古經の斷片は漢譯僧伽吒經の一處と全然符合することを證し得た。尚大さと書體は少し差異するが、此經の斷片が他に二枚あることをも確め得て、それで恩師の該博な語學の力と、その語原研究に於ける鋭い腦力とで、未知の語を漢譯と精細に比較して行くと、十中の二三

も、是非とも一本を備へてよいと思ふが、上下で五磅五志（五十二圓五十錢）といふのだから、私人で藏するには、稍面倒でもあらう。然し公私の大學や、學會などには必ず一本を購はむことを是れも勸告する。これは自家に緊急的必要であるといふ理窟の外に、またかゝる大著を一部でも、多く日本に買ひ入るゝことは、多少スタイン氏に對し、又牛津大學の盛擧に對して、禮を盡すことゝもなるであろうと思ふから。

（三）發掘した古畫や古佛像に對して、一々說明することや、其公私の文書に對し、于闐の內治外交の詳なるを考證することは、また別に筆を起さねばなるまいが、兎に角、已上の新述で、于闐が丁度歐洲で夏季各國から瑞西の勝を問ふものは、一度は同國のメッカと稱せらるゝインターラーケンに集りて、こゝから各所に杖を曳く樣に、印度西藏波斯支那の文物が、唐時代には其相互に行動流注する砌、玆處于闐に一つの渦きを作りて特異の文物を產生し、特に其宗敎上と外交上には、非常に重要の地點であつて一時は當時の萬國的都會を形成して居つたことが歷々と知れ、其寫眞で宏壯古寺院や、城郭や宮殿なども發掘した古物から眼に見る如く、想像される。今では、于闐附近の河々では、金砂の流出するを集める爲に、土人がある時期には寢食を忘れるといふが、これが皆唐時代の佛殿や、宮城の裝飾から來るのだといふのだから、其宏大が察せられるではないか。

佛像はグリユンヴエーデルの所謂健駄羅式で、其褶襞などは特に美を極めて居り、顏面は一體に勇壯の相を示して居る。繪畫も筆力雄勁で、中々捨難き趣を具して居る。アヂヤンタあたりの壁畫支那の手法とを配合した跡も確に見えて居る。ダンダーン、ユリクの一壁畫に存する龍安の圖の如きは實によい出來で而も此の特點を最も

saṃklesa hetuḥ, ṣaḍ annusmṛtay vy 〔avadāna-hetuḥ, sapta asamyag dharaḥ saṃkle'sa-hettu, sopta bodhyangāni
是染因。　六　念　是淨因、　七　不淨　是染因　七　覺分是淨因。

vyavadānahetuḥ astan mithyatvā (3) ni saṃkleśā-hetuḥ, aṣṭan samyahtrānih vyavadāna-hetu 〔ḥnava Samy-
八邪法　是淨因　八　正　法　是淨因　九

ojanāni samkelśa hetur nav〕 ānupurvasamap-attaytḥ vyavadāna-ḥetuḥ, daśāda (4) śa'āhkarwapathāḥ, saṃ-
惱事　是　染　因。　九次第定　是　淨　因、　十不善　業道是染因。

keśa hetuḥ, daśa kuśālah karma 〔pahaḥ vyavadā-nahetuḥ, opica punaḥ survâ〕 kusala 〔manaskaraḥ samk〕 esa
十善業道　是　淨　因。　略說　一切　不善　念　是染

hetuḥ, 〔sarva kusala (5)
因。　一切善

裏　面

manaskaroḥ〕 vyavodana-hetuḥ, tatra va 〔saṃ〕 kle 〔śa-hetuh va vyavadana-hetur va sarvadharma-soob-
念　是淨因。　所　言　染因　淨　因。　彼一切法　自

havah śunyata aśāttvika ajivipā apośakā apudgarskāa〕 (1) svāmikā apargrahah nirvyāpara mayāpaeuāḥ as
性　空　（無衆生　無壽者、無養者、無補特伽羅、　無主宰、無攝受、　無所作、　如幻、

〔vabh-avoh upasamaḥ〕 ya upasamaḥ, sa praśamah, yaḥ praśamaḥ sa prakrtih, ya prahṛ (2) tiḥ so'nupala-
無相、　內寂靜。）　內寂靜者　卽是寂滅。　寂滅者　卽是自性情淨。　自性淸淨者　卽是不可

mbhaḥ, yo' nnpa'ambhaḥ so' rilaḥ yo 〔,nilaḥs' ākāśa-samaḥ' ākā〕 śasaman sarvo dharman prajanati sompleśa-
得。　不可得者　是　無處。　無處者…卽是虛空。　（當知染淨彼一　切　法　自性皆空。

vyavad averd (3) ca vyava harati na c'ākaśa dharwatam vijahāti. tat pa 〔smād dhetor nd hi pośid
然彼　空　亦　不　壞　法性。　何　以　故　妙吉祥。

dhasma〕 syotpod, va nirodho vābhavet. manjusrārāhā: (4) kad karthaṃca bhagavatā tathāgatend badhiḥ
是中無有少法可　得若生若滅。妙吉祥　白佛言。　世尊若爾者。　如來取證　菩提皆謂何乎。

prāpta? 〔bhagavān āha: mañjuśry anmlapraes. thanena〕 badhih praptāḥ mañjuśrir āha: tatra kata
佛言　妙吉祥　如來以無根本　無住故、得菩提。　妙吉祥　言　何　名……）

までは朦朧ながら語原も確正し得られた。この研究の結果は、恩師の筆で十月出版の獨逸東洋學會の雜誌に報告することにした。予はこの研究につき不完全な藏經が、少からず恩師の役に立つたことを窃に喜むだ。恩師も近來にない面白い結果を得たと大變滿足の樣であつた。

予は此他に今一つ希有な大乘經の原文斷片を檢出し得た。これは大乘入諸佛境界智光明花嚴經(大分長い題だ)の一小斷片だ。この經文は、あまり佛教研究者に知られて居らぬものだが、三種の飜譯まで現存し、經中に說かれてある教義は、維摩や楞嚴などに相似して居り、頗る趣味のある經文だ。スタイン氏の大著中古寫經の鑑定の方を擔任したドクトル・ヘルンルは、之を多分陀羅尼であらうと記したが、之は頗る見當違ひであつた。斷片は中央から二つに裂けて居り、中央の部分は、凡て缺てしまつて、字も大分磨滅剝落して居るが、漢譯に比べるとよく讀める。字は奇古のグプラ體の梵字で、六世紀前後の字體だ。蓋し煩雜な恐もあるが、珍らしい寫經ではあるし、予が少し檢出や判讀に苦心したのだから、左に全文を寫出して、漢譯と對照して見よう。方括弧の中の梵文は、予が漢譯の助で充塡したのだ。圓弧の中の數字は行數だ。

表　面

Vyavadāna-hetuḥ, Kāma-vyapāda-vihiṃsa-vitarpa saṃ 〔klesa-hetuḥ, mai-trtī-karuṇamaditaupepṣa-pra〕 tītya
淨　因　欲瞋恨害覺觀　是名染因。　慈悲喜捨入十二

dharmâvotaraḥ ksantir vyavanahetu, ca (1) tvāro viparyāsāh samkle-'sa-hetuḥ, catvāri smṛty-upasthā 〔nāni
因　緣　忍　名爲淨因。　四　顚　倒　是染因。　四　念處

vyavadanāhetuḥ pañca nivāranani som〕 kleśahetuḥ, pañsêndriyaṇi vyavadāna. hetuḥ, ṣaḍa-(2) yātanāni
是淨因。　五　蓋　是染因。　五根　是淨因。　六　入

店で卒中で歿した）其他、有爲の學者を派遣し、スタイン氏の功蹟に讓らぬ成熟をした。否寫經類でははるかにスタイン氏を凌駕する立派な收得があつた。古美術品も非常に立派なものがある。美術品の方ではグリユンヴエーデルが、孛國學士會院の公報として Bericht über Archäologische Arbeiten in Jdikutschri und Umgebung in Winter 1902—1903 München 1906 を昨年の冬出版した。氏が佛教美術に於ける一隻の眼光と、西藏佛像に於ける該博の智識とは、よく此報告書(ベリヒト)に顯はれて居る。これは一部二十圓ばかりの書だが、スタインの大著と共に、佛教美術家考古學者は缺くべからざるものである。古寫經の方は、伯林大學教授ピツシエル博士が主任者で其門下の少壯ドクトル連が、時々有益な業蹟を主として普國學士會の公報に發表して居る。此中尤も珍らしいのは雜阿含經の梵文(!)の斷片だ。其他百藏經文の斷片も夥しくある。ドクトル、ベツクや友人のドクトル、シユーブリングが今は重にこの部分の攻究をして居る。然しこれはどうしても滿足な佛敎々理の智識と聖典史に於ける該博の頭のあるものが居らぬと、良好の結果は擧らぬことは勿論だ。特に支那藏經を縱横に讀み得て、大體の旨を得て居る人でなれば、勞苦多くして結果は甚だ少ないことだろうか。予の如きものは、殆ど言ふにも足らないが、目下恩師からピツシエル博士に交涉して居るから、旨く行けば、右等紛然として亂麻のやうな材料中から、少しは面白い貢獻を學界に致し得ることが或は出來るかも知れぬ。然し伯林大學は學術上のモンロー主義をきめ込むで、居るのだから、贄をピツシエルの門に取ることゝせば、材料はとても得ることは出來ぬかもしれぬ。

佛教界の着實な學者が不必要といふならば別に言ふことはないが、若し佛教古學や佛敎々理史や聖典史の方面

漢譯は魏譯（曇摩流支）と宋譯（法護）とを合揉して對照したので、括弧内のは法護の譯である。二譯を對合するとどうやらこの半ば磨滅して中斷せられて居る斷片も元形も補綴し得ることが出來る。第一譯は僧伽婆羅の手で出來たのだが、其中には斷片前段の染淨因緣の文が全く缺けて居る。多分最古の形體にはこの部分がなかつたのかも知れぬ。この經文が寶積經中の菩薩藏會（縮藏地二、八十八、及地九、二十六已下）と本文上密接の關係のあることと「如來以無根本無住故得菩提」といふ思想は、維摩にも顯れて居ること（此部分が幸にも大乘集菩薩學論中に存して居る、同論原本二百六十四頁六行已下を參照せられたい）ことなど、研究して行くと、この一小斷片が教理史的にも聖典史的にも、非常に面白ひものになつて來るが、今はさう深入する必要もあるまいから、報告はこれ丈にして置かう。

已上二種の古寫經斷片の研究で、一つは佛經が古代于闐地方の方語で書かれてあつたといふ確證と、一つは僧伽陀經や、入一切佛境界經のような全く支那日本の大乘研究家に忘られて居る經文さへ出ることだから、他の楞嚴や維摩のような經文も、大日や蘇悉地のような、祕密聖典も、必らず出ないとは局らぬといふ一種の希望を得た。中央亞細亞、是實に佛敎聖語、佛敎々理の根本的研究につきては未知のアメリカ大陸のようなものといふてもよい。

（四）中央亞細亞がかゝる希望ある學術的の土地であるのだからかゝる事には拔目のない普國政府は數年前七萬ばかりの巨費を出して、有名なグリュンヴエーデルや、西藏學者のフート（此人は惜ひ哉去年伯林のカツフエー

現存漢譯祕密聖典の原本

（明治四一、新佛敎第九卷第一號）

試に區々の宗派感を一掃し、佛敎全敎系の上に於て、靜に金剛乘敎を觀察せよ。雄大崇嚴を極むる、誰か其右に出づるものあらむ。統攝包含の偉大なる、亦他に之と比肩すべきものあるを見ざるにあらずや。淨土敎は佛敎の宗敎的方面に於て、最も精熟に發達し、最も巧妙を極むるものと稱す。而も秘密大曼荼の上より見れば、唯大日妙觀察智の活用に過ぎずといふべく、其專念稱名の如き、亦神咒口密の一部として見るを得べし。禪は圓悟の捷、頓證の妙、高く敎內諸宗に拔きて、盛に別傳の深旨を誇る。而も密觀の事理を該羅し、六大を包含して、汪々として瀉潮の如くなるに比すれば、或は其單調にして孤峇なるの感を免るゝ能はざらむか。

然れども倘佛敎中に於て、最も厭ふべく最も忌むべき病弊の存するもの何なりやと問はゞ、誰か指を秘密敎に屈せざらむや。迷信の夥多なる、妖蠱魔術の毒氣鬱積する此の如きは他に殆其類を求むべからず。經軌諸部の護摩の中、魚肉魚膾を用ゆるものあり。犬肉犬骨を燒くあり。頭頸蛇骨より鼠狼猪鹿の毛皮に及び、蛇皮を香とし、毒藥犬脂を供とし、甚しきは人血死屍を用ゐて修法に供するものあり。博士ラージエンドラーラは一秘經を抄錄し其修法の淫猥醜穢を罵りて、前古未だ此の如き野蠻狂妄の宗敎あらざるを叫び、敎授ベンドールは大雲請雨經を刊して、其荒唐不稽の陀羅尼が、痴人狂漢の譫語に類するに喫驚し、僅に其一部を出版して止みぬ。而も此醜

では、少くとも世界に出して押のきく人物が要るといふ自覺があれば、是非とも財力に裕な宗派からは、二三の有爲な青年學者を、せめて歐洲に留學させて、學界の新研究に後れぬ丈には必ずしたいものだ。——中央亞細亞あたりに、遠征隊でも出して、材料を蒐めるなんてことは、言はぬ方が實際的だろう。それから吾國の富豪も、此等の學術上有益の擧には其一夕の豪奢を廢して、扶助を與ふる樣にありたいものだ。物質的學術の研究には、近時やゝ頭を傾けて、扶助を與へたり奬勵をする樣になつたようで、實に喜しい至りだが、精神的學術の方面にもどうか此の有望なる潮流を向けたいものだ。高楠氏が盡力されて居る東洋學會なども、今少し資力があつたら、露都の佛典出版會位の事業は出來ぬこともあるまいと常に憤慨して居ることだ。ヘルムホルツやガウスやウィルヒューなどばかりで獨逸今日の文明と活力があると思ふ愚人は固よりあるまい。矧むや、サーベルと烟筒では、とても一國雄大の文化は產み出せるものでは斷々焉としてないことだ。（千九百七年聖母昇天祭の日キルンハルデンに

あらずや。嗚呼敎家若此快事を試みんと欲せば、必らず先づ密教の明暗兩面を知悉させるべからず。卽ち密教の研究は、單に故紙癈葉の翫弄にあらず、單に古像迷信の骨董的遊戲にあらずして、實に遠大にして活動せる一の大目的を有せり。

今や歐洲大乘教の研究を以て、一家をなせるもの其人に乏しからず。ケルン漸く老ゐたりと雖、衣鉢を傳ふるに足るべきスパイエルの活動するあり。ヲルデンブルグはチェルバトスコイ、ミロノーフ等と露都佛教聖典出版會に據りて盛に攻究し、プサンはガンに其博大精邃の名を縦にし、レギは倘論部の研鑽に力めて、ヒュルヌーフ、セナール、フェル等古名將の盛名を恥しめず。ワレザー獨にあり、此等の碩學に對峙して、優に一方の驍將として立てり。此等の碩儒或は聖典批評に、或は大乘教理に、幾多の貢獻ありと雖、密乘の方面に至りては、ヲルデンブルグが中央亞細亞發見の密教斷片を公刊し、プサンが其大著「佛教」の中、少しく密教々典に觸れたる外、未だ詳密なる業績の學界に公表せられたるものを見ず。惜むべからずや。

吾國に於ても原文研究の必要漸く識者の認識する所となりし已來、南條氏が淨土法華兩聖典を精研せる、高楠氏の律藏に於ける、姉崎氏の四阿含に於ける、荻原氏の大小論議に精通せる、皆以て教界新研究の指導となすに足るべし。而も偉才弘法大師を有する吾國にして、未だ一人の起ちて祕經の原文を探るものなきはなむぞや。近時眞言諸派の俊才、多く印度に遊びて、吠陀の古文を讀み、カリダーサの妙辭を翫ふの人少きにあらず。而してカルカッタの文庫に存する、幾多の大乘祕典は、徒らに高閣に束ねられて、百年鳳凰を待つの憾あり。

穢なる病象は、便ち直ちに密教が最も發達したる大乘教なることを示す反證なることを忘れ、忽ち其全體を擲ち去りて一笑に附するが如きは、偶其識見の未だ透徹せざるを示すに過ぎざるのみ。人若し一夜伯林フリードリヒ街の百鬼跳梁して、淫猥の風甚しきを認め、直ちに獨逸現代の文藝を呪咀し、其科學哲學を罵倒し去らむとせば、其愚や及ぶべからざらむ。亦近時歐洲諸國民を喧噪せしめしモルトケ事件を聞きて、便ち獨逸の軍隊は用ゐるに足らずと斷ぜむには、人誰か其大早計を笑はざらむや。試みに之を病理學者に質せ。癩病の如き、痳疾梅毒の如き、最も厭ふべき惡性の病毒は、獨り人類に存して騾驢犢牛の屬、其毒に感受する能はず。近時パステールの研究所、僅に高等猿類に於て、之が接種の望あるを確めたりといふにあらずや。

若し佛教の健全なる方面を研究し、之を以て世道人心に益あらむと期せば、其病的方面も亦宜しく之を究めて、病源を塞ぎ病根を剿絶せむこと、教家の務にあらずや。醫學者に於ては、生理と病理は其研究上、兩輪兩翼をなせり。密教の研究は、單に其病的方面より見るも攻究の價實に十分なり。

飜て之を思ふに、現時吾國東亞文運の指導者たるの自覺を生じ、漸く鵬翼を亞細亞に搏たむとす。眼を轉じて蒙古を見、更に滿洲を見よ。密教の勢力、尙深く人民の精神に根基を有し、陪羅縛（ヴィラバ）を拜し、多羅（ターラー）を崇め、神咒修法の效驗を信ずるもの甚多く、喇嘛の勢威また侮るべからざるものあり。若し此等の諸僧をして、大教の本旨を了し、幾多の小宗咯巴（ツォンカーパ）（黄教開祖にして喇嘛教のルーテルなり）を滿蒙の野に出して、之を新しき文明の傳播者に轉ぜしめんには、其效果の大にして奏功の速なる、蓋し見るに難からず。而して之をなす、卽吾國教家の務に

他日何ぞ知らむや、更に重要にして卷幅大なる諸密經を確定し得るの倖なきにあらざるを。之を序とす。

* * *

凡例——已下記する所の略符中、Ḃは Bendall: Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library of Cambridge 1883. Ċは Cowell and Eggeling: Catalogue of Budoh. Skt. Mss. in the R. A. S. Ṙは Rajendralala Mitra; Nepalese Buddhist Literature 1882. にして數字は渾て謄本の番號を記す。此の三目錄は歐洲及印度に於ける現存大乘聖典錄の最も完きものと云ふべし。書中、間改削修補を要する所ありと雖、今に尙好著述たるを失はず。

ケムブリツヂには、ライト氏の蒐集したる謄本と之に加うるにベンドール教授の得たるを以てす。佛教梵本に於ては其豐富にして古代の珍品に富める世界に冠たり。ロンドン及カルカツタ（ミトラ博士の叙錄したるもの）はポツジソン氏蒐集の謄本を藏す。間珍品あり。ロンドンの四十花嚴及八千頌般若の如きは、一ありて二なき貴重のものなり。

予はリス、テヴイヅ教授、ベンドール教授、ジエンキンソン館長の厚意に依り、英國兩圖書館の珍本を自由に使用することを得。カルカツタ、は其遠隔の地なるに關らず、亦珍貴の古謄本を予に貸與せられたり。

Ṅは Nanjio's A Catalogue of the Baddhist tripiṭaka 1883. なり。予は本稿の中、往々此好著に缺けたるを補足し、或は其少許の過誤を訂正したり。蓋し同書出版の際は、ライト謄本未だ廣く學者に知れず。東洋學の

譾劣予の如く、迂魯余の如し。豈僣して而して箇の缺陷を補足するを以て任ぜむや。唯自ら嗜む所を研めて、之を江湖識者の是正に仰がむとするにあるのみ。其期する所は、一面密教聖典論の完成にして、之に祕教文學史及各部の本文批評を含み、他面は其教理論の研究にして其大綱の下には教理發達史及び組織的教系論を列ねたり。這般研究の基礎として、最重要なるものは即現存せる祕典の原文と其漢譯とを精細に比較するにありとす。蓋し此事業は、他の華嚴、般若、方等、法華諸部の對究に於ても、必要缺くべからざる基礎的勞働なりと雖、密教に於て特に其緊切なるを認む。何となれば諸部神咒の如き、原文の助を借るにあらずんば通ずる能はざるもの往々にして之あり。俗衆の輕侮を防がむが爲に、特に梵語を存し、隱語を用ゐたるの經軌、また少きにあらざればなり。

左に錄する所の祕密聖典の目次はケムブリッチ大學文庫、ロンドン皇立亞細亞協會圖書館及カルカツタに於ける亞細亞協會の書庫に存する祕典の原文を漢譯と對比したるもの。之に少しく比較に洩れたるパリ國民圖書館の所藏を加ふるときは、即ち歐洲に知られたる大乘祕教原文の全體を盡すことを得べく、ホツヂソン、ライト、ベンドールの蒐集したる祕密聖典にして其漢譯あるものは、悉く之を網羅して殘す所なし。

惜むべきは大日、金剛頂、蘇悉地等の諸大部、其原文未だ世に出でず、檢出し得たる所、唯二十三種に止り、而も其多くは小部の神咒にして、根本の研究には、尙隔靴搔痒の嘆あるを。顧れば、今や中央亞細亞の發掘、漸く其歩を進めて、幾多の古經斷片を得るに至りぬ。其中予は幸にも理趣分の如き重要なる祕典を檢出し得たり。

名同じきも、內容全く異れり。

(三) Bhūtaḍāmara tantra (C. 48. N. 1031)

金剛手菩薩降伏一切部多大敎王經　宋法天譯（成十一）

此經は後代發達せる祕敎の面目を知るには、極めて重要なる資料なり。漢本には全篇章段を設けず、隨て品名なし。梵本に於ては一經を十五品に分てり。而も其內容に於ては、全然同一なり。此經中に特異の點とすべきは、著く尸婆敎の性女崇拜の影響を受けたること是也。八大迦恒也野儞 Kātyāyanī 八大部多女 Bhūti 其他龍女 Nāgī. を調伏して、之を自家の用に使役することを記す。尸婆が部多鬼の首領たることは、印度宗教史を學びしものゝ皆知る所。Kātyāyanī は卽尸婆の配突伽女神 Dūrga の異名にして、此女神の崇拜盛なるは、各種の印度巡遊旅記など讀みたる人の記憶する所なるべし。

(四) Dhvajāgrakeyūrī Dhāraṇī (R. 283. C. 49. N. 795)

無能勝幡王如來莊嚴陀羅尼經　宋施護譯（成八）

(五) Ekaviṃśati stotra (C. 25. N. 1068*)

聖救度佛母二十一種禮讚經　宋安藏譯（成十三）

此讚前記(二)と共にブロネー氏に依りて刊行せられたり。極めてよく漢譯と符す。但梵本に於ては、漢に存する讚後の根本十字眞言を缺く。

研究、今の如く進捗したりしにあらず。即其介爾の脫落誤記は、以て甚しく同書の眞價を上下するに足らず。其ビール氏の三藏に關せる誤記を訂正して、大藏の眞面目を世界に知らしめたるの功は千古炳然たり。其依然として歐洲學者の龜鏡たる、毫も出版當時と異あるなし。唯予は益此好著の價を大にせむが爲に敢て無禮の補削を行へるのみ。玆に謹で罪を南條氏に謝す。稿中暈點を付せざる同書の番號は同氏が至元錄に依りて正しく梵名を檢出し得られたるもの也。

排列の順次はＡＢＣに依りたり。千字文の函號は、渾て縮刷藏經に由る。

(一) Aparimitāyur-dhāraṇī (R. 41. B. 38. 81 141. N 786,*)

佛說大乘聖無量壽決定光明王如來陀羅尼經　宋法天譯（成八）

全部漢譯と合す。淨土教と密教との交叉を知るに一種の資料とすべし。

(二) Ārya Tārā-bhaṭṭārikāyā Nāmastottara satakā (B 45. R 33. N 815.*)

讃揚聖德多羅菩薩一百八名經　宋天息災譯（成十三）

南條氏は至元錄の恒囉巴嘀喇迦牙、拏廝、阿失恒薩恒迦を Tārā bhadra Nāmāstaśatakā と記せられしも、其誤なるや論なし。此讃は佛人ブロネー G. de Blonay「佛教女神多羅の歷史に就きての資料」Metériaux p. s. à l'histoir de la déesse buddhi que Tārā, Paris 1895. の中に、他の多羅菩薩に關する諸讃と共に、主としてパリ國民文庫の藏本に依りて刊行したり。全部よく漢譯と一致す。法天譯の聖多羅一百八名陀羅尼經（成十一）は其

（九）Mahāmāyūrīvidyarājñī (R. 173. C. 42, B. 33, 48, 99, 105, 152, 153, 157, 162, 172, 1900. N. 306, 307, 308.)

1　佛母大孔雀明王經　唐不空譯（成六）

2　孔雀咒王經　梁僧伽婆羅譯（成七）

3　大孔雀咒王經　唐義淨譯（成七）

此經の原本は今單行本として存在せず。五大護祕軌 Pañcarakṣā の第三編として、次の十一、十三、十四、と共に寫傳せらる。單行本として僅に其一部分のみ今日に傳はり居るは、ヘルンル博士の刊行したる Bower Mss. バワー氏謄本の四十九葉已下六葉のみとす。此古寫經は中央亞細亞に出てたるものにして凡紀元六世紀の手寫と斷定せられたるもの也。

梵本は全部よく漢譯と合す。但し梵本には、時に後代に於て添加せられたる章段を見る。

此經は祕經の發達を討ぬるに極めて重要なるものなり。赤夜叉、龍神、天仙、山嶽、河川其他の名を列擧すること多きか故に、佛敎語彙の編纂には、缺くべからざる古典といふべし。枳橘易土集また數此經を引けり。予は此經に就きては、特に精細に研究する所あり。其結果は遠からずして公表せらるべき機會あるべし。皇立亞細亞協會雜誌の本年四月號には、其研究の一端を豫告しぬ。

（十）Mahāmegha-Sūtra (C. 45. B. 120, 176. N. 186—188, 970)

1、大方等大雲經請雨品六十四　宇文周闍那耶舍譯（成六）

（六）Grahāmātṛkā (R. 93. C. 43, 51. N. 811)

聖曜母陀羅尼經　宋法天譯（成七）

（七）Hevajraḍākinījālasambara-tantra (B. 58, 184. C. 31. N. 1060)

大悲空智金剛大教王儀軌經　宋法護譯（成四）

シルヴァン、レギ氏一時此梵本を漢譯と對比したることあり。氏が公刊せる論文中、二三回漢經を引用したることもありたりと覺ゆ。此經亦頗重要、卷帙亦稍大なり。精攻するの價あり。

（八）Kāraṇḍavyūha (B. 34, 38, 52, 77, 174. C. 20. R. 101. N. 782*)

大乘莊嚴寶王經　宋天息災譯（成十）

南條氏の Ghandvyūha は、至元錄の明かに阿唎亞迦蘭恒尾喩訶（結八、六三a）と音寫したるを誤譯せられたるものなり。訂正を要す。此經は全部詩體を以て書したるものと、散文にて記したるものとの二樣あり。漢譯は散文の本に合す。但し經中の偈頌には多少梵漢出入あるを免れず。且つ梵本には品目を設け漢譯には之あらざるが如き、差異ありと雖、大體に於ては全く吻合すと云はむも不可なし。此經は不思議にも、佛典の出版せられし最初のものにして、今より三十四年前（一千八百七十三年）Satyavrata Samasrami 氏カルカツタに於て印行したり。頗誤植多く貧弱なる刊本なれど、以て座右に置くに足るべし。此經が西藏に於ける最聖最重の經典なることは茲に贅せず。

2、佛頂大白傘蓋陀羅尼經　元沙囉巴譯（成六）

3、大白傘蓋總持陀羅尼經　元啣嚓銘得理連得羅磨寧及眞知譯（同上）

梵經の題が古代より現存寫本の經題の如くなりしことは、不空の「鉢羅底孕祇覽」（閏六、四六b十八行）及び沙囉巴の「此佛頂大白傘蓋無有能敵般羅當雞囉母陀羅尼」（成六、二〇b十四行）之を證すべし。不空及沙囉巴の譯は南條目錄に存せず。不空の本は全卷梵文にして漢字を以て音寫したるもの元、靑龍寺に有せし碑本なり。（閏六、五十b）。最も珍重すべし。予頃日中央亞細亞より發掘したる、本陀羅尼の一斷片を取りて、之を不空の音寫本に對するに、極めてよく符合するを見る。法天譯の一切如來烏瑟膩沙最勝總持經は、其名大に同じくして、其所說全く異なれり。

（十三）Mahāsahasrapramardanī (R. 166. B. C. は前記十を見よ N. 784.)

守護大千國土經　宋施護譯（成五）

五大護祕軌の第二位す。梵本よく漢本と符合す。

（十四）Mahāśītavatī (R. 161. B. C. 前項と等し N. 800*)

大寒林聖難拏陀尼經　宋法天譯（成十二）

五大護祕軌の第四編なり、咒文多くして本文極めて少し。南條氏は梵題を Mahādaṇḍadhāraṇī と記すれど現題の如くするを可とす。

2、大雲經請雨品第六十四　闍那崛多譯（成六）

3、大雲輪請雨經　隨那連提耶舍譯（成六）

4、大雲請雨經　唐不空譯（閏六）

ベンドール氏 Bendall: J. R. A. S. 1880 に英譯を添へて、其一部を出版したり。梵本には更に風輪品の第六十五を存せり。請雨品の結文 iti śatasahasrikāt Mahā megpān mahāyānasūtrāt Varṣāgamanaolo nāma catuḥṣaṣṭitamasamāptaḥ「大乘大雲經百千頌中行雨輪と名けし第六十四品畢ぬ」の次に、又風輪品の結文として iti Śrî-Mahāmeghān mahāyāna sūtrāt Valamaṇḍalo parivartāt pañcaṣaṣṭikatama samāptat 吉祥大雲大乘經中風輪品第六十五了の文あり。此六十五品は正に漢經に缺けたり。

大方等無想經亦大雲經の一分を形成するもの、蓋し大雲經全體の飜譯は漢土に於て、竟に其機なかりしが如し。

（十一）Mahāpratisarādhāraṇī (R. 164. N. 164. C. B. は（十）の項下を見よ）

普徧光明燄鬘清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼　唐不空譯（閏九）

前に擧げたる五大護祕軌の第一に位す。菩提流志の大隨求陀羅尼は、其名同じきも其内容頗る差異せり。

（十二）Mahāpratyaṅgirā dhāraṇī (R. 227. B. 63, 68, 118. C. 43. N. 1016.*)

1、大佛頂如來放光悉怛多鉢怛羅陀羅尼　唐不空譯（閏六）

一卷の第二部材料編 Матеріалы の第三に於て之を印刊に付したり。同氏は四種の異本と、一種の法疏とを校合に使用せり。極めて善美の刊本なり。此書今甚だ稀なり。予は多年搜索の末、去夏故西藏學者として著名なりしドクトル、フート（Huth）の遺書中より漸くにして一部を得、之を淨土宗宗教大學に委託し置きたり。篤學の人には喜むで之が使用の便を與へむ。

南條氏は四者の同本異譯なるを記するを略せられても、是は必らず記すべきもの也。同氏第二の定譯は正當なりと雖、第一第四は差へり。第三は南條目錄に缺けたり。明藏之を逸するに由る。

（十七）Parṇaśavari dhāraṇī (R. 176. N. 888*)

鉢蘭那賖嚩哩大陀羅尼　宋法賢譯（成八）

南條氏は此經文の梵題に疑を挿み置かれしが、實際は今錄する所の如し。

（十八）Tathāgataguhyaka or Guhyasamāja (R. 261. B. 15. 70. N. 1027)

一切如來金剛三業最上祕密大教王經　宋施護譯（成二三）

此經は尼波羅九大法寶の一にして、後代の祕密教を研究するには、缺くべからざる資料なりとす。漢本は原本に存する甚しき醜惡汙穢の部分を著しく删譯したるの痕跡歷々たり。

南條氏は正しく此經梵題を檢出せられしが、唯 Guhyasawaja は、現行寫本の如く、Sawāja に作るを穩なりとす。

(十五) Mārīci dhāraṇī (R. 177. C. 43, 50. N. 847.)

摩利支天陀羅尼咒經　失譯今附梁錄（成十二）

此經古譯を傳ふるを奇とす。經文の如何なるものたるやは左の一例に徵せよ。

Asti bhikṣavo Mārīcī devatā· Sā sūrya-candrama-sānā Purato' nugacchati. Sā na dṛṣyate, na gṛhyate, na bandhyate, na nirdhyate, na muhayate na daṇḍate, na daiṇyate, na śatruṇā upogocchate. 爾時世尊。告諸比丘。有天名。摩利支天。常行日月前。彼摩利支。天無人能見。無人能提。不爲人欺誑。不爲人縛。不爲人債。其財物。不爲怨家能得其便。吾國古來武人の間に、此女神の信仰盛にして、延て力士の間にも及びたること普く人の知る所。上に擧げたる文の如きも亦時々兵法家の引く所となれり。

(十六) Nāmasaṃgīti (C. 29. B. 29, 52, 77, 126, 204. N. 1032,* 1370, 1408*)

1 最勝妙吉祥根本智最上祕密一切名義三摩地分　宋施護譯（成六）

2 文殊所說最勝名義經　宋金總持譯（成十三）

3 文殊菩薩最勝眞實名義經　宋元沙囉巴譯（同上）

4 妙吉祥眞實名經　元智慧譯（同上）

此經は尼波羅に於ては極めて重要なるものゝ一にて、二三の疏釋存在す。全部よく梵本と合し、之に由りて漢本の紕謬を訂正し得るの箇所また之あり。露國ミナエーフ（Minaev）は「佛教」Буддизмъ Petersbug 1887 第

の二經を擧ぐるを得べし。

(二十二) Ardhaśatikā Prajñāpāramitā (Petersburg University. N, 18, 862, 1033, 1034)

1、金剛頂瑜珈理趣般若經　唐金剛智譯（閏八）

2、大乘金剛不空眞實三昧耶經　唐不空譯（同上）

3、實相般若波羅密經　唐菩提流志（成三）

4、徧照般若波羅密經　宋施護譯（同）

大般若經第十會に位する、玄弉の譯の理趣分は大體に於て相同じきも、祕呪及其他に頗る密部所傳と異るものあり。

此經の斷片は、中央亞細亞に於て發見せられたるものにして、今聖彼得堡大學圖書館に珍藏す。序分の大部分と流通分の散佚したる外、本文は幸にも存在し、よく金剛智の譯と合す、最も珍とするに足る。此經密家に於て、特に尊重する所、禪門また盛に讀誦を力む。乃ち全部の公刊と其本文批評とは、必らず缺くべからざるものたるべし。予は來春に入りて、此業に從はむをこと期す。

(二十三) Jñānolkā dhāraṇi (petersburg University, N. 496, 835.)

1、智炬陀羅尼經　唐提雲般若譯（成七）

2、智光滅一切業障陀羅尼經　宋施護譯（成七）

（十九）Uṣṇīsavidyā dhāraṇī (R. 269. C. 69. N. 871.*)

　一切如來烏瑟膩沙最勝總持經　法天（成六）

南條目錄には、此經が佛頂尊勝陀羅尼經（五譯あり）と同一本なる事を記すも、其同一なるは陀羅尼のみにして本文は全く相異れり。寧ろ別本と見るを可とす。隨て Sarvadurgatpariśodhana の梵題は本經に適せず。此經中に存する陀羅尼は夫の有名なる法隆寺貝葉經とともに「牛津記要」Anecdota Oxoniensia I. 3. Oxford 1884. に刊本せられ、南條氏の周到精密なる解說あり珍とすべし。

（二十）Vajravidāraṇā dhāraṇī (R. 269. C. 50. N. 1001.*)

　1、壞相金剛陀羅尼經　元沙囉巴譯（成十二）

　2、金剛碎摧陀羅尼　宋慈賢譯（同上）

　第二者は單に陀羅尼のみを抄出したるものなり。第一者は南條目錄に之を缺く。

（二十一）Vasudhārā dhāraṇī (C. 13, 43, 49, B. 65, 84, 164, 176 N. 492, 784, 809)

　1、持世陀羅尼經　唐玄奘（成八）

　2、大乘聖吉尼持世陀羅尼　宋施護（同上）

　3、聖持世陀羅尼經　宋施護（同上）

已上梵漢對校して、其相符せるを確定したる二十一經の外、一部散佚したる斷片の古寫本を數へなば更に左記

拙稿「現存祕密聖典の梵本」に就きて補遺

（明治四一、三、新佛教第九卷五號）

拙稿の公刊（本年一月の本誌）を接手する前、予は露國彼得堡大學教授兼同國學士院書記官長セルギウス、フオン、ヲルデンベルグ氏の書に依りて、孔雀王經が、今より凡十年前、卽一千八百九十八年、露都に於て其全體の公刊を同教授により完成したることを初めて知れり。公刊載せて Записки Восточнаго Отдѣленія Императорскаго Русскаго Археологическаго Общества Томъ XI. 1897—1899. 218—291.（露西亞帝國考古學會東洋部門學報第十一卷二百十八頁至二百六十一頁）に存す。予は當地大學圖書館より同書を携へ歸り、自家の謄本と比照して、裨益したる所甚鮮少にあらず。蓋し同教授の公刊は、一に大英印度局の藏本に依り、予は甲谷他と皇立亞細亞協會の藏本に依れる也。同教授は予が同卷研究につき、漢譯との對照及其他の點に於て、頗る鼓舞獎勵を予に與へたり。是予が光榮とする所也。

予は乃玆に拙稿の中孔雀王經梵本の條下に、謹で此數行を補添し、以て同教授が功勞を本邦の學徒に告げ、且つ其厚意に對して公然深謝を表す。

本文の部分は、于闐地方の方言にて書せらる。其中梵語を混ゆること多きを以て、漢譯と對照し研究するときは、或は解讀するを得ざるにあらざるべし。陀羅尼は最もよく提雲般若の本に合す。此外千轉陀羅尼、六字呪王經の如きも尼波羅本、陀羅尼集經 Dhāraṇīsaṃgraha の中に存す。其名佛頂尊勝陀羅尼に同じくして、內容大に增大せる Sarvadurgati Parśodhana の如きも、玆に付記するの必要あるべし。支那に於て未だ飜傳を見ざる大部の密軌例せば Candanahārocana tan'ra, Kṛṣṇayāmari-tantra, Mahākāla-tantra, Kālacakra-tantra の如き、精研檢索せば、其中或は漢譯密經に存する同一の文を發見し得るの望なしとせず。而も這般の葉は尙數月の日子を要するを以て、玆に之を省略せり。

已上錄する所、固より遺漏の補足すべきものあるべく、亦過誤の訂正を要すべきもの少なきにあらざるべし。大方の識者、幸に指摘示敎の勞を吝せざらむか、乃筆者の本懷や達せり。(明治四十年十一月二十七日ストラスブルグ)

句經斷片なども、稀世の珍品として持囃されて居る。

其處で此珍重な材料につきて、研究が始まつた。露國のヲルデンブルグ、英國のヘルンル、此の兩博士は實に此の研究に成功した陳勝呉廣であつた。兩博士の熱心からして、續々特志の研究家も出て、遂には萬國中央亞細亞研究會が成立して本部をペータースブルグに置き、各國から常置委員を擧げて、續々研究を繼續し、玆に漸く大仕掛の發掘が始まる樣になつた。

于闐の方に着眼したのは英國のスタイン博士であつた。此人は于闐を中心として、其附近の佛教故地を發掘して、非常の大成功をやつた。その費用は、大部分印度政府が支出したのだ。此大發掘の報告其他のことは、前年の拙稿で、一寸概略だけは報告して置いた。

他面でスタイン博士に讓らず、反對の側の高昌に全力を傾注したのは、佛教美術家として世界に知られたグリユンヴエーデル博士であつた。博士は第一回は普國の學士院から、莫大の費用を得て、一千九百二年から同三年まで高昌故地の發掘に從事し、偉大の効果を收て歸つたが、第二回に一千九百五年から六年まで、特志の探檢家ラコツクトと共に、再たび同地に出かけて、恰も空前的の大收獲を得て、伯林に引き上げた。博士が第一回の成績につきての略報のことは之も前年の拙稿に、一寸附記して置いた。

此の如く中央亞細亞が、世界新研究の焦點となつた時、右の如き兩大探險家が非常の大成功をした時に、恰も西本願寺法主大谷光瑞師の中央亞細亞横斷の壯擧があつた。「センチユリー、マガジン」の略報に依ると、蒐集さ

新に發見せられたる西域古語聖典の研究

（明治四一、二、新佛教第九巻四號）

一

慈恩傳で見ると、玄奘三藏が入竺の當時、久しく滯在して、大遠征の旅裝を整へた、高昌卽現時のツルフアンと、此絕世の大飜經家が、印度での大業を成就した曉、歸途暫く立ち寄りて、精密に國狀敎勢を西域記に書き殘した、コータン昔時の所謂于闐國――この二國は、盛唐時代から宋の始頃まで、中央亞細亞で、南北に對峙した、佛教文化の中心點であつた。

露國の雙頭鷲が、一たび黃龍の抑壓から蹶起して、鵬翼を東洋に張る樣になつてから、其爪牙を中央亞細亞に立てゝ盛に呑噬の經營を開始した。かく同地が軍事上外交上、頗る重要の地點となつたので、露英の材幹ある士官や外交官が、續々該地方を旅行することになり、佛國からも頗る有名な旅行者が入り込むだ。スベンヘディンなどの大旅行家も、また少からず露國の恩惠を被いて、その學術的の大成効をしたのであつた。而して此等の軍人や旅行者は、其本務たる地理や軍事的の調査の外に、また種々貴重な古經の斷片を、その本國の博物館に送致することを怠らなかつた。彼の有名なバヷアー、ウエーバーなどの集めた古寫本は、今でも東洋學者の間に名物として呼ばれて居るものである。また夫の佛國のデュトィル、ド、ランのパリとペータースブルグに分送した法

かゝる重要のものも出ぬではないが、大體は佛教の聖典であつて、而も之を記した國語が種々雜多である。實によく昔時中央亞細亞即ち西域地方が萬國的佛教文化を形成してゐたといふことを事實的に證明して居る。グリュンヴェーデルが、高昌一寺院の故趾から發掘した壁畫の中に、一大德が獅座に踞して經を講じて居ると、其座下に各國の僧侶が、梵筴を開きて研究して居る所を描き出してある。衆僧の皮膚や頭髮の色も、黑黃赭赤種々ちがつて居るし、眼睛の色も異つて居るから、其各國の國民を代表したものであることは問はずして分る。出て來る聖經の斷片も、之と同じく左の通り種々の國語から成立して居る、

(一)梵語(二)一種のプラクリット語(三)西藏語(四)支那語(五)回鶻語(六)亡滅した西域地方の古語、

此中梵語や支那語や西藏語の經文は、之が何の經文であると云ふ證定をするのと、葉號の磨滅した亂雜の斷片を整理するのは大困難であるが、讀む丈のことは固より至難の業ではない。回鶻語の經文は、元時代には隨分流行して居たので「佛祖通載」の中にも舍藍々八哈石尼の傳の下に『又以黃金繕寫蕃(チベット)字藏經。般若八千頌、五護陀羅尼十餘部。及漢字華嚴楞嚴。畏兀兒(ウイグル)字法華金光明等經二部』(通載第三十六)と記してある。此舍藍々は高昌國の女であつた。

此語も土耳古語の素養があれば之を解讀する丈は少しく力を勞するまでである。プラクリット語の分はあまり多くはないが、阿育王碑銘に類したものであるから、セナールやヲルデンブルグは先大體、謬なく解釋して仕舞つた。そこで唯一つ殘つたのは第六の亡滅した西域地方の國語だ。これを解讀するのは容易のことではない。而

れた珍奇の材料も少くない様である。實に世界に對して、傲るに足るべき快事と稱してよい。大谷法主は我國の學界と宗教界とを代表して、此最新研究の陣頭に馳驅した一雄將であるといふ榮冠を、確に戴いても、決して不可はあるまいと思ふ。

二

此等の旅行家や發掘者の蒐集した材料は、大別したら先づ二種類に分たれるだらう。第一は工藝及美術の物件で第二は宗教及政治の文書である。第一種中には、古佛像もある。壁畫もある。兵器や古錢や家具類、みな此種類中に含まれて居る。第二種の宗教文書は佛教經典の斷片を主として、摩尼教や猶太教の經文もある。政治文書の中には、命令狀の樣なものや、旅行券の如きもの、或は公私の金穀の借用證の如きものまで含まれて居る。

第一種類は東亞美術史及佛教藝術史の研究範圍に屬するのであるし、第二種類の中の政治文書は、外交史や政治史、若くは東亞中世の風俗習慣を研究する領分だから、今之を論ぜず。直ちに第一の宗教的文書の中に、どんなものがあるかを略述して、それから本題に入ることゝしよう。

前一寸略述した通り、宗教的文書といふと、重に佛教の聖典であるが、多少は他の宗教の聖書も之に雜りて出現して來る。今まで學者が最早出る希望はない。全く亡佚してしまつたと信じて居つた摩尼教大聖典の一つも、グリユンウエーデルに掘り出されて、ミユーラー博士が之を證定した。この證定は實に宗教史上極めて重要な事實で、之が爲ミユーラー氏は伯林大學から名譽教授に擧げられたほどである。

業であつたのだ。この成績の一端は、恩師の筆で「獨逸東洋學會々報」本年一月號に略報してある。

玆に於てか、恩師は右の結果を、中央亞細亞研究の二大元老、卽露のヲルデンブルグと、英のヘルンルに報告し、書を送つて、スタイン其他の梵文や、例の死語で書いたもので證定を要するものは、ストラスの大學に送附したらば如何との提議をした。學問に忠實で、公益の爲に吝ならざる兩碩學は、直に之を快諾し、十數日の後には、恩師の書齋は、ベーテルスブルグス大學、大英博物館其他から着した珍奇至寶の古寫本斷片で累々として机上に空地のない樣になつた。

其處で吾々は易きに從つて、先づ梵文から片附ることにして、業を二部に分ち、恩師は第一に熟練な言語學的、字象學的の方面から精確なる音譯を作成すること、卽斷片の全文を、羅馬字に改寫することに當り、予はこの精確な音譯に依り、間原本をも見て、教理的文學史的に之が何經なるを斷定し、且つ精確に其符合した箇所を、漢經の中から探し出すので、卽證定の事業に當つたのだ。

かくして、余は法華や、金光明や般若のような、極めて普通の古寫經斷片、十餘葉の外に、象腋、大白傘蓋、寶積迦葉會、緣起聖道經等、顯密の諸大乘經を證定し、更に離阿含月喩經及婆耆奢經、長阿含の大集法門經、阿吒那胝經等極めて珍奇な梵文も得、あまり佛學者の知らぬ、首迦長者所問經の樣な小乘經の原文も出、法句經の異本も多數の斷片を見出した。

この他、前に略報した、入諸佛境界經の斷裂腐蝕して葉號の磨滅したのが、五十餘葉あつたのを、漢譯の力で

も此語で書いた經典は梵語の斷片と同じく隨分澤山あるのだ。

ヲルデンブルグ、セナール、ピツシエル、ヘルンル、ラドルフなどといふ歐洲の碩學は石の材料につきて、隨分有益の貢獻を學界に捧げたが、彼の旣滅の國語につきては、吾が師のロイマン翁が、少しく論じた外には、誰も之に手をつけるものもなかつた。こは此の解決するに、非常な困難で、その手がかりも一寸ないからだらう。勿論、數年に亘り、非常に多數の材料を集め、彼此比較して專心之を研究したら、彼の埃及學成立の當時のやうな、存外面白い結果が出るかもしれぬが、今玆に、そんな迂回な手數のかゝつた途を取らずとも、容易に此大秘密の横つて居る奇怪の死語を解決すべき一大秘鍵が字在して居る。この秘鍵をうまく利用すれば、この奇古の秘藏は難なく打開せられて、その寶物をも人の目前に露呈するであらう。これは卽支那の一切經であるのだ。卽ち若しある方法で、出た斷片が支那譯の經文何々に符合し居るといふ證定さへつけば、支那譯を手蔓に之から死語を調べだすには、博大な言語學の頭腦のある人には、出來ぬ業でないからだ。

三

スタインの大著「古于闐」が出版されて、大に學界を振盪した當時であつた。予は幸にも恩師を助けて、初めて右の秘鍵を氏の寶藏に應用する機會を得た。卽ちこの大著の中の寫眞版になつて居る、旣滅の死語で書いてゐる二葉の斷片が、僧伽吒經であるといふことを證定して、この奇怪な死語の語格や字元などが少しく漢譯の力で明了になりかけた。是は此種の死語で書いてある經文を證定して經名や內容を精確に指示した、世界での最初の

漢譯の經文を見ると、漢文の間に、種々の梵語が時に現はれて來る。阿那含、阿羅漢、菩薩などから迦葉、文珠、須彌、韋紐などといふ國有名詞も常に出て來るのではないか。我々が研究すべき亡滅した古語の間にも、また此等に類似した梵語が常に出て來る。この梵語を目標に漢譯の符合したのを探し出すのだ。隨分根氣づくめの、面倒な仕事であるのだ。

先づ左に擧げる一例を見て、その一斑を知るべしだ。この斷片の文中點線の所は、何とも分らぬ語で書いてあるのだ。

"Himavanta Mucilinda Mahāmucilinda Gandhamādana Ratnākara Harivarṣagiri Cakranāda Mahācakravādagiri..........nakṣatra..........trisahasramahāsahasra..........Mahā.....nakṣatra............caturdvīpa.....koṭiśata............devanāga-asura-garuda-kiṃmara-mahorāga ....duṣkara añjali...................Ratnākara Licchavi,..........."

此外に薄伽梵といふ原語に相當する語が四五回出て居る。これ丈で、證定をするのだ。初めの寶山の名、雪山、目直憐陀、香山、寶山、黑山等は、方等や涅槃の諸部の經文にいつも出る名であるから、これ丈では證定の目標とはならぬ。唯一つ大必要なるは寶積(寶事、寶性など種々の譯がある)、離車子といふ固有名詞だ。この名も方等部の諸經によく出る名であるが、氏名と前の諸寶山の名とを合せ、また三千大千世界だの星宿だの四州だのといふ、散在して居る梵語を綜合して見て、左の文を見ると、之が實に維摩經であるといふことが證定せられ

悉く整理して順序をつけた。

四

梵文の斷片の證定が略濟むだ後、予は更に彼の至難な亡滅した死語で書かれた、經文の證定に取りかゝつた。一體、此種類の國語は大別二種あるので、ロイマン博士は、之を第壹類第貳類といふ名をつけて居る。蓋し未だ確然とどの國の言語であるかゞ、定められぬからだ。夫のミューラー教授はこの第壹類の方を、インゾーシ・アンの語卽月支語であると論じた。少し大早計のような論斷だが、先づ正當であるだらう。第二類の方は、何れの國の國語であるかゞまた確定せられぬけれど、要之、于闐を中心とした佛教諸國で公然聖文學語として使用した、古語である丈は確だ。假に西域佛教語といふ名でも付けて置くのが便利であらう。第壹類の方は資料が頗る僅少なのであるから、第貳類の方で證定を初めたのだ。この方は頗る材料が豐富である。

梵語で全葉悉く明了に通讀の出來る斷片であつても、僅に一葉丈丁數の記載もないものを引き出して、之が何であるかと來ると、假令其文體や語法から、是は般若であるといふことが判つても六百卷の中一會であるか、二會であるか、大品であるか勝天王であるかどこに符合するかといふことを斷定するのは一寸困難なことだ。夫の首迦長者經の文などを證定するのは、實に容易の業ではなかつたのだ。況むや、之が亡滅した未知の死語で書いてあるに於てをやだ。其困難は實に非常のものであるのだ。それをどうして證定したか、其方法丈を一寸並に記して置くのも、必らずしも無益ではあるまい。

(三) 首楞嚴三昧經　十葉餘

(四) 智矩陀羅尼經　二　葉

(五) 大般若理趣分　十一葉

(六) 瑜伽論菩薩地　一　葉

この外にまだ手許に十數葉の證定すべきものが殘つて居るが、何れまた精細に研究して、報告することゝしやう。此六種の中で、理趣分は全部殆ど梵文で書いてあるので、死語は梵文一段々々の讃嘆に用ゐてあるばかりだから直ちに證定することが出來たが、其他は隋分至難の業であつた。面白かつたのは智矩陀羅尼であつた。これは其の文の初めに兩三回“Urmazda”と云ふ字が出て居る。是語は波斯語のアウフラマツスダー宗教史を少し讀むだ人は誰れも知つて居る。彼の波斯二元教の惡神アリーマンと相對して居る、善神アウフラマツズダの轉した語であるから、多分波斯教か摩尼教の聖典であらうかとも考へたが、之は大早計でよく全文を讀むと陀羅尼もあり、其他二三の梵語もあるので、秘密聖典であるといふことが判定せられたのだ。そこで漢譯の助でこのウルマツズタは梵語の提婆卽諸天善神を、こゝでは呼むで居るといふことが明了になつた。

已上の說述で此種の國語で書かれた經典は、少くないといふことが略推せられるだらうが、其後吾々は、一葉の目錄樣の斷片を發見した。此目錄の中には、寶積大集諸部の諸大乘經の名が列記してある。稍轉訛した梵語卽右の死語に用ひられて居る、轉訛した梵語で記してある。之に依ると、其經典の豐富であつたことが一層明了と

るのだ。

「又此三千大千世界、所有大寶妙高山王、一切雪山、目眞憐陀山、摩訶目眞憐陀山、香山寶山、金山黑山、輪圍山大輪圍山、大海江河、陂泉池沼、及百拘胝四大洲渚、日月星辰　天宮龍宮、諸尊神宮、幷諸國邑、王都聚落、如是皆現、此寶蓋中、又十方界、諸佛如來、所說正法、皆如響應、於此蓋內、無不見聞、時諸大衆、覩佛神力、歡喜踊躍、歎未曾有、合掌禮佛、瞻仰尊顏、目不暫捨、默然而住、爾時寶性、卽於佛前、右膝着地、合掌恭敬、以妙伽陀、而讃佛曰、」(玄奘譯、淨名經黃七、四五迄)

此の如くして、證定した斷片を、漢譯の助で、彼の點線の部分、卽死語の文句を研究して行くと、博大の言語學の知識と手腕とのある人には、段々其語原も判り、其語格や文法も少しづゝ明了になつて來て、此死語は、アリアン系に屬する一種の國語であるといふ事丈は、恩師の精確な、而して不屈の研究で、略決定した。是に一二の例を出せば、之が明了となるであらうけれど、言語學上の證明ほど、普通の人に、無趣味のものはあるまいから、玆には略して置かう。

五

かくて予は右の樣な證定方法で、左記六種の經論を右の死語の諸斷片の中から檢出した。

(一) 僧伽吒經　前號記載の外更に　八　片

(二) 觀藥王藥上二菩薩經　一　葉

して容易に原物を貸借することは出來ぬとのことであつた。

凡そかゝる精微な字象學上の研究が、現物に臨むにあらざれば、往々所謂隔靴搔痒の點が多くて、完全なことは到底不可能のことは、此種のことに從事したものゝ、明かに經驗する所である。故に恩師は再度書を法主に呈して、寛大なる恩借を世界學術のために、懇談した。ペータースブルグの大學も、大英の博物館も、公共のため學術のためには喜むで前記巨大多數の珍品を頗る寛大に貸與して呉れたのであるから、吾が內務省も徒らに珍品を寶庫に秘藏するの愚をなさず、奮ふてこの新研究の爲め、萬國的學術の交際を開始せらるゝことは偏に予の信ずる所である。(明治四十一年二月十日稿了)

なる。卽此國語に書かれた聖典は恐く漢譯の一切經西藏の兩大藏にも匹敵すべき、尨然たる容量を有して居つたものであらうといふ想像も付く。否、或は漢蕃兩藏に存ぜね珍奇な聖典も、此中に存して居つたらうとの考も出て來る

吾等が、この奇怪な古語の研究は、まだ實は一歩この廣邈たる原野に踏み出したといふ丈で、瑞穀穰々、美果枝に滿つる好景を世界に公にせむ愉快の曉は、猶少しく堅忍不拔の苦を嘗めて後でなくては吾々には來るまい。然し、兎に角、此研究で二つの重大なる事實を證明し得た。卽第一には漢譯藏經の新研究に對する重大の價値と、第二は此奇古の國語で書いた聖典は頗る尨然たる容量を有してパリの三藏漢譯の一切經西藏の兩大藏已外、更に一種雄大なる佛敎聖文學の一大團として古西域に存在して居つたといふ事實だ。

佛敎の研究上、此死語の討究の必要なるは言ふまでもないが、此研究が進むだ曉は、彼の無數に發掘された政治的の文書も解讀が出來て來ることであるから、東亞の外交史や、政治史に、非常な貢獻をなし得ることであらう。

吾々は今この新研究につき實に多きが上にも多く、完きが上にも完き資料を要するのである。そこで恩師と余は、西本願寺法主に書を呈して、其蒐集せられた材料の中、この死語に關するもの丈、短期の恩借を申し出た。法王の返書は、極めて寛大で極めて感謝すべきものであつたが惜い哉、其珍奇の資料は、今や內務省の保管に屬

後に一歩、上らんか上るまいかと、逡巡躊躇するのも、固より無理もない話だ。

茲に起草した一篇の拙稿は、この大高山に押登りて、縦横踏破の快を盡した探險記を以て自任する不遜は固よりなさぬ。氣象萬千の絶景龍爆虎巖の奇勝、それ等を詳しく叙述し品評しようなどいふ僣越は、無論犯さぬのであるが、唯この一切經界の大アルプスに、一二三歩踏み込みて、稍其の奇絶をも解し、且つはこの大山嶽の探險は、思ひしほど決して困難のものでないといふ見込もついたので、或はインテルラーケン邊の汽車旅行で、アルプス通を振りまはす議はありとも、見し所だけの概觀を記述して、少しは般若本文研究の鼓吹にもしようといふのである。末段に添付した、五大部般若及大小兩品の對合表は、多少の時間と勞力を費して、忠實に作成したものだから、或は般若研究者に、幾分の便利を與へる小案内記ともならうかと信ずる。無論モンプランやユングフラウの絶巓を殘る隈なく踏み荒して、雄大の筆に雄大の景を天下に說示する一段となると、敎界幾多の明眼鐵脚の好漢に御任せ申さねばならぬ。

二　大般若の梵本

大部の大小乘經律論の中で、大般若ほど完全に近く原本の存在して居るのは殆ない。華嚴は僅に十地品と行願品が現存して居るだけ、瑜伽は近時荻原雲來氏が菩薩地の一部分丈發見した位で、其他の寶積や大集などゝなると、現存の梵本は、實に憐れむべき僅少の部分に留るのだ。

大般若諸分の梵本は、尼波羅に保存せられたのを、ホツヂソン氏が始めて歐洲に送り、次でライト博士ベンドール教授の蒐集があつて、今は英國の亞細亞協會書庫、印度局、ケムブリヂ大學、パリの國立圖書館、甲谷他の

大般若經概觀

（自由討究を精神とせる新佛教徒夏期講習會のために本稿を草す）

（明治四一、新佛教第九卷七號）

壹　大般若經の研究材料

一　緒言　大般若といへば全然佛教に趣味を有せぬ側でも、恐く知らぬものもない程、著名で且普通の經典である。邊陬の山寺にさへ時には、大磐若の轉讀といふことが行はれて、嚴重の法會となつて居る。宗祇が諸國雲遊の際、「摩訶般若孕女の奇特かな」といふ諧謔の一句で、難產を救ふたといふのも、頗る人口に膾炙した俳話である。

實際方面に於ける般若の勢力は、先此の如きものだが、教理方面の位置は更に一層重大である。こは特に茲で喋々するまでもないことであらう。然しかく普通に而も重要である聖典であるにも關らず、多少名を知られた教會の學匠でさへ、直接經文に就きて、或は教理の方面から其哲學や宗教を研究したり、又は聖典史的に本文批評などに心を碎いてる人があるかといふと、佛教研究の盛な今日、不思議にも、至りて寂莫の樣に感ぜられる。是には勿論種々の原因もあらうが、一つは般若が非常に廣大なる卷帙を有して居るので、一寸手が出し難いといふにも歸しはせぬかと思はれる。何しろ厖然たる六百卷の大帙だから、峨々たる萬仭の嶮山を望みて、前に一步、

第九分　Vajracchedikā Prajñāpāramitā…………金剛般若

第十分　Adhyardhaśatikā Prajñāpāramitā…………理趣般若

十六分ある中、七分まで梵本があつて、全體からいふと、漢譯六百卷の中五百十八卷に相當する。

400（第一分）+78（第二分）+18（第四分）+8（第六分）+2（第七分）+1（第九分）+1（第十分）=518

卽全體の十分の八・六强になる。而して此他に尙般若心經のような重要な般若部聖典の梵本も現存して居る。第一分の原文は一部分旣に印度で出版になつた。尤も牛の歩の頗遲々たる進行ではあるが、完成すべく着々前進はして居る。第四分は非常に多數の寫本が歐洲に來て居る。而も其中には、貴重の珍品さへあるのだが、博士ラーゼンドララーラミトラが校合して、一千八百八十八年（明治十四年）に甲谷他で出版を了つた。金剛般若はマツクスツス・ミユーラー教授の立派な公刊がある（一千八百八十一年ヲツクスフォード）英譯も東方聖書集の最後の卷に出て居る。

原本は此の如く豐富に殘存して、先資料として無類屈强のものだが、此他註疏にも貴重な原本が傳はつて居る。訶梨跋陀羅の現觀莊嚴論が卽是だ。これは小品般若を釋したもので、漢譯はないが、至て重要のものだ。パリのレギ教授が尼波羅から將來したのをドクトル荻原氏が引受けて、最早校訂も決了したのだ。（此論につきては荻原氏が確か「宗教界」に其一般を報告したと記憶する）

三　大般若の異譯　凡そ經論に異譯の多いほど研究には都合がよいものだが、大般若にも、各部に多數の異譯

亞細亞協會文庫の五箇所に分藏することゝなつた。此他に一二の私藏の寫本もある。ヘルンル氏珍藏の小品般若原本なども、其隨一だ。日本でも河口慧海氏が五十餘種の梵本を、尼波羅から將來したとの事だから、その中にも恐く般若の梵本もあることであらうと想像する。

近時于闐其他西域佛教古國の發掘が始つてから、般若古寫本の斷片も大分發見された。予が證定した丈でも、大品般若の寫本斷片が五種もある。何れも實に立派なもので、其一種の如きは堅三尺五寸、幅一尺もある大本である。金剛般若の如きも、最初は唯日本と支那丈に原本が傳つた限で、尼波羅には永く失はれて居たのが、于闐から四分の三ばかり原文が出て來た。第十分の理趣般若も同地から發掘されたのを、經名が判然せず永くペータースブルグの大學に珍藏して居たが、近時予は幸にも其證足を結了して、般若部の重要なる原文がまた一つ增加した。

今玆に大般若經十六分の中原文のあるものを列記しよう。

第一分　Śatasāhasrikā Prajñāpāramitā
第二分　Pañcariṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā…………大品般若
第四分　Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā…………小品般若
第六分　Suvikrāntarikrami prajñāpāramitā…………勝天王般若
第七分　Saptaśatikā Prajñāpāramitā…………文珠般若

第九分：六譯

1	羅什	金剛般若波羅密經	一	後秦弘始四至十二（四〇二―四一〇）
2	流支	金剛般若波羅密經	一	
3	眞諦	金剛般若波羅密經	一	陳光大元年（五六七）
4	笈多	金剛能斷波羅密經	一	隋大業元至十六（六〇五―六一六）
5	玄奘	能斷金剛般若波羅密經	一	唐貞觀二十年（六四六）
6	義淨	能斷金剛般若波羅密經	一	唐長安三年（七〇三）

第十分：四譯

1	金剛智	金剛頂瑜伽理趣般若經	一	唐開元二至二十年（七二三―七三二）
2	不空	大樂金剛不空三摩耶經	一	唐天寶五至大曆五（七四六―七七一）
3	菩提流支	實相般若波羅密經	一	唐長壽二年（六九二）
4	施護	偏照般若波羅密經	一	宋大平興國五已降（九八〇―）

第四分にはこの五譯の外に、佛朔が光和年中に出した一卷の道行、衛士度が晋惠帝の時譯した二卷の般若波羅密道行經が目錄に見えるが、今は存在して居らぬ。第八分にも翔公の外に、ずつと古く嚴佛調が後漢靈帝の中平五年に無上分衛經を譯出したが、惜いことには亡失してしまつた。第十分の四譯は、多少大般若の本文とは相違した點もあるが、大體は同一の聖典であるのだ。法賢の譯した最上根本大樂金剛不空三昧大敎王經は、この聖典頗増大されたものであるから、玆に書き添へて置く必要がある。

がある。而も中には、譯經史の原始時代に屬するものもあるので、非常に貴重の材料を研究者に供給する。今各部に就きて其異譯を列記しよう。

第二分…三譯
1 竺法護　光讃般若經　五卷　晋大康七年（西、二八六）
2 無叉羅　放光般若經　二七　晋元康元年（二九一）
3 羅什　摩訶般若波羅密經　三四　後秦弘始四年（四〇四）

第四分…五譯
1 支婁迦讖　道行般若經　一〇　後漢光和二年（一七九）
2 支謙　大明度無極經　六　呉黄武建興中（二二二―二三七）
3 曇摩蜱、佛念　摩訶般若波羅密多鈔經　三　晋大元八年（三八二）
4 羅什　摩訶般若波羅密經　一〇　後秦弘始十年（四〇八）
5 施護　佛母出生三法藏般若波羅密多經　二五　宋大平興國五年已後（九八〇―）

第六分…一譯
1 月婆首那　勝天王般若波羅密經　七　隋天嘉六年（五六五）

第七分…二譯
1 曼陀羅仙　文殊師利所説摩訶般若波羅密經　二　（寶積四十七會）梁天監二年（五〇三）
2 僧伽婆羅　文殊師利所説般若波羅密經　二　梁天監五年（五〇六）

第八分…一譯
1 翔公　濡首菩薩無上清淨分衞經　一　劉宋時代（四二〇―四七〇）

	西藏譯（正藏第二部）		漢譯	
I	十萬頌	I	第一分	大般若經
II	二萬五千頌	II	第二分	大般若經
III	一萬八千頌	III	第三分	大般若經
	一萬頌（大八千頌）	IV	第四分	大般若經
	八千頌（小八千頌）	V	第五分	大般若經
	雜部般若			
1	勝天王般若	VI	第六分	大般若經
2	七百頌	VII	第七分	大般若經
3	五百頌	VIII	第八分	大般若經
5	三百頌	XI	第九分	大般若經
6	一百五十頌	X	第十分	大般若經
	（缺）	XI—XVI	第十一至第十六分	大般若經

4 般若攝頌—— 佛母寶德藏般若經

7 般若一百八名經——｛般若一百八名眞實圓義陀羅尼經（成十二、南、九九九）

8 五十頌—— 五十頌般若波羅密經

9 一字般若——（未詳）

10 憍尸迦般若—— 帝釋般若波羅密經

11 小字般若——｛佛母小字般若波羅密經（成八、南、七九七）

12 般若二十五門——（未詳）

13 般若心經——般若心經

14 日藏——（缺）

15 月藏——（缺）

16 普賢——（缺）

17 金剛手——（缺）

18 金剛幢——（缺）

此中で第一の十萬頌般若の西藏本は、印度の甲谷他で出版になつた。出版者はプラタパチヤンドラ・コオシヤ

般若註疏類の印度で出來たものでは、智度論が傳はつて居る。これは第二分卽大品般若を釋したものだが、聖典史的研究には、非常に貴重の材料を含んで居る。般若研究に此の如き大論の存在するのは、實に研究者の幸福である。

支那日本ともに般若に就きては、幾多の註疏がある。ことに小部の般若にはこれが多い。然しかかるものを見るよりは、直接經文に就きて、研究する方が安全で且つ捷利でもある。

四　大般若の西藏譯　西藏譯の大般若經は、正藏カンジユールの第二大部である。漢譯大般若の大約全部を包含して、其他に漢藏に存せぬ四五の小部の般若を收めて居る。

パリにもロンドンにもペータースブルグにも、西藏一切經は備へられて居る。今又伯林では全部の寫本を手に入れたが、實に垂涎すべき立派な珍品だ。日本にも今は帝室寶庫の外に、東京帝國大學に一部、東本願寺大學に一部の西藏々經が珍藏されてあるのだから、特志の研究者には、般若の蕃漢比較を是非勸めたい。大體西藏譯は漢譯に比して梵語を忠實に直譯してあるし、且つ誤譯が少いといふことは、一般學者の認めて居る所だ。左に漢譯大般若經及び小部の般若諸經と、西藏般若との比較表を揭げる。

貳　大般若經の特點と分類

五　大般若經の三大特點　般若は勿論大小乘の三藏を通じての最大部の聖典である。大乘經で最大の卷帙を有するものは寶積の一百二十卷であるが、とても大般若とは比較にもならぬ。論部で智度瑜伽各一百卷、大毘婆沙は至大な論部で二百卷だが、唯般若三分の一に止るのだ。然しこの山嶽の樣な六百卷の大部も、其內容を精査し其文體を翫味して來ると、決して然く驚くべき程のものでもない。

般若は寶積や大集と同じく、種々の經典を編纂して一部となしたものだ。換言すれば、十六種の聖典を合せて一部の大般若を組成したのだ。然し其編纂の方法が、他の大集や寶積などの集經と全然相違して、明な特點を有してゐる。

第一に、例せば寶積では、無量壽經とか阿閦佛國經とか、護國尊者所問經とか、各種の異つた聖典を編纂したのだが、大般若では其重要なる部分は、同一の聖典を廣略大小長短種々の形式で書いたのを、至廣至大のものから至略至小に至るといふ順序で集めて居る。卽大般若第一分から第五分までの編纂方法が是だ。これは大藏中他に全く類のない特點である。第一分は三十二字一頌で算して十萬頌の大さ、三百二十萬字の大聖典だが、第五分はこれを約十二分の一、八千頌に說き縮めてある。尤も十萬というても、八千と稱しても、實際精算すると、それ丈はないので、唯大數に約して古來からかく呼んで居るのだ。それは兎に角、十萬頌でも八千頌でも、其內容は

氏で、一千八百八十八年から同九十年までに「印度文庫」の一編として公刊を結了した。

茲で話は少し餘事に亘るが、至元錄（詳題は至元法寶勘同惣錄）につき、一二の言を費す必要が出來た。この至元錄といふのは、元の世宗の勅命で、印度西藏回鶻支那の諸高僧が纂集したもので、漢蕃西藏を對照した一大聖典目錄である。南條博士の英譯明藏目錄は、一方ならず此書に感謝して居り、又吾々研究者が、永久に感謝すべき寶典でもあるが、中には隨分疑はしき點が少くはない。般若に就きても一言せねばならぬ點が二つばかりある。

第一に至元錄は漢譯大般若經の第十一會已下第十五會までに相當する蕃譯の一千八百頌が存在し、又第十六會の蕃本なる二千一百頌の般若があるといふことを書いて居るが、前表の如く、少くとも現存の蕃藏にはかゝる經文は見當らぬ。第二には帝釋般若が西藏に缺けて居るといふ記載だが、此は現に間違なく存してある。般若に限らず、同錄には他部にも頗る疑しき記事が多い。一例を擧げると、華嚴である。同錄では此經は支那から直譯したといふことになつて居るが、實際蕃藏中の同經は、品目の別け方からして全然漢譯と相違して居るから、直に此記事を信用することは出來ぬ。されば至元錄は、よほど注意して見ねばならぬ。少くとも現存の蕃藏と精細の比確をした上でなければ、使用することは先づ危險であらう。

何故かゝる相違が出來たかは、頗る研究すべき問題であるが、勿論かゝる疑點があればとて、直に至元錄に不信用を宣言することは、注意深き學者はせぬことであらう。

博士も、婆羅門哲學書の簡潔明晰なるに比して、この大乘哲學書の如何にも冗長散漫なのに一驚を喫して居る。然しこの繁縟冗漫は重複の文章も、讀み慣れるとさして苦にもならぬ。寧ろ或點では便利ともなる。一例を擧げると、空と無相と無願の三解脫門を說明するとして、第一にも五蘊十二處十八界四念處六波羅密十八不共法と御鄭寧に例を引き、第二にも第三にも同一の文句を入念にくりかへすのであるから、一つ初のを熟讀しさへすれば、他は一瞥して通れるといふことになる。若し此方法を心得たらば、十萬頌を讀むとしても決して驚く程のことはない。梵文を讀むのでも右の通りだから、楞伽や法華を讀むより、比較的容易である。

六　大般若の二大部分類

前項で述べた如く、大般若の第一分より第五分までは同一經典の、廣略大小種々の形式で說述されたのを集めたのである。然し第六分已下第十六分までは、第五分の般若と、教理上同一根抵に立つて、內容にも無論幾多の類似はある。本文批評の方面からいうたら、同一材料を變形ともいへよう。然し何れも別々の聖典である。故に大般若經全體は、當然左の如き本文批評的の分類が出來る。

第一大部——同一聖典の重纂——第一分至第五分——大部般若

第二大部——各種聖典の類纂——第六分至第十六分——小部般若—大般若經

第一大部は無論大般若の主要部分と稱してよい。大般若の主腦とも云ふべきは、此部分である。其形式からいふても、六百卷中、五百六十五卷丈を、此部分で占めて居るのだから、大般若の名を冠せても、決して不當ではあるまい。日本及支那の古註釋家中に、かゝる分類をした人があるか否やは、此等の註疏を見るに不便な此地に

同一のもので、引例や譬喩や問答其他の說述方法に、廣略の差異があるだけなのだ。

故に第一分四百卷の大部を讀まずとも、第二分の七十八卷を熟讀すれば、大體の要旨は之を體得するに差閊はない。或事を說明するに就き、後者は五蘊丈の引例で濟ませて置くのを、前者は十二所十八界と廣く布衍して例を臚列する位が相違の點である。されば實際六百卷というても、至廣至詳と至略至抄の中道を行くこととし、第二分一つ丈取り、第一分と第二分已下五分までを略去し、他の六分已下を算すると、大體寶積位の大さになつてしまう。

第二には般若には編纂方法に一定の論理的方針のあることだ。此が他の集經に對して明な特點になる。大集經でも寶積經でも、其中に編纂せられた諸經典は、唯大乘の聖書を集めたといふ丈で、教理上一定の特點のあるものを或は寶積部といひ、或は大集部としたのではない。論理的に觀察したら、寶積の中に實は般若に編入するべき經文も少くはない。又大集のある聖典を寶積に入れ、寶積のある部分を大集に移されもするのである。要之、此等は唯各種の聖書を便宜上纂集した丈のものである。然るに般若では一定の方針が立てゝある。般若波羅密を說いてある聖典に限りて類集して居る。諸法皆空の妙諦を說いたものを教理的に彙集して居る。卽他の便宜的のかき集め主義に對して、あくまでも論理的の編纂方法を取つて居る。

又その文體から見ても、般若は他部と大に面目を異にして居る。これも亦見逃すべからざる第三の特點である。大乘經多しと雖般若のように重複の句のある賤の小田卷繰りかへす、繁縟の文句の經文は一寸あるまい。ミトラ

て、他經の舞臺にはとんと顏を出さぬ善勇猛なども大役を勤め、秘密部の金剛手さへ躍り出るといふ風だ。この兩者役者の相違は聖典史的に頗趣味あることである。

參　大般若經の成立と發達

七　大般若の成立　論ずるまでもなく、現存の大般若經は、一部の集經であつて、初めからかゝる大部のものが存在してをらざりしことは、誰が見ても分る事實である。卽始には十六種の聖典が、各自獨立して存在して居たのを、ある時代に合集して六百卷の一部にまとめたのである。この成立の徑路は大集も寶積も差異はない。但し一時に十六種を集めたか、又は時代の經過と共に順次にまとまりたるかは、非常に困難な問題であるが、兎に角各種の聖典を集めたものであるといふ丈は、異論はあるまいと思ふ。

これに就きて、本文批評上から證明するのは、一寸といふ譯にも行かぬから、茲には唯顯著で明白な事實丈記して、この斷定の正當なることを示して置かう。

六百卷の大般若を見ると、第一分には常啼、法涌、囑累の三品があるが、第二分已下第五分までには、何れもこれが缺けてある。(下の五大部般若對合表を精査ありたし)。然るに、第二分の古譯無叉羅の放光般若、羅什の摩訶般若には、何れもこの三品が具備して居る。卽無叉羅には薩陀波倫、法上、囑累、羅什には常啼曇無竭(一本作法尙)囑累の三品である。法護の光讚經は、半部缺本だから何となりて居つたか分らぬが、多分他の二本と

居るから、何とも斷言することは出來ぬが。西藏の大般若は、前にも表示した如く、第一分から第五分までは漢譯の如く之を五分に分ち、漢譯第六分已下は（缺けてる部分もあるが）之を第六分とし、他の小部の般若諸經と合せて之を雜部般若と呼んで居る。されば已上の分類はあながち一家の私言でもあるまい。

此他に尙重要な相違が兩大部の間に存在して居る。第一に第一大部と第二大部とは、其文體が全然相違して居る。第一大部は前述の如く、重複繁縟であるが、第二大部は大に簡潔單純になつて居る。第一大部には頌文といふものは一つもない、全部散文で通して居るのだ。第二大部には時々頌文が出て來る。勝天王般若にも文殊般若にも、金剛般若にも、詩體の說述が少くない。夫の有名な「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」などいふ偈も、金剛般若に出るのだ。

第二には兩大部の舞臺に出る役者が、第一大部と第二大部とは全く違ふ。一方が舊派俳優なら、他は新舊兩派合同といふ風である。第一大部には其序文には大乘の諸菩薩觀音文珠等がずらりと顏みせをする。本文にも香象菩薩（カンタバスティ）などが出ぬでもないが活動する役者は、舍利弗、目連、須菩提、富樓那、阿難といふのが重な役で、之に帝釋が頗る働く、其上にほ勝軍梵士や洹河女神などが顏を出すに過ぎぬ。結文に常啼法上の二菩薩が說てあるが、これは本生經的の譚で、實際間曲に現はれて活動する菩薩といへば、唯一人彌勒菩薩限である。要之、第一大部の重な役者は、何れも大小兩乘共通のものである、否純小乘的の人であるといふてよい。所が第二大部となると、已上の役者の外に、純大乘的の千兩役者文珠師利が頗る其技を揮ふて居る。那伽室利などいふ新手も出

である。是は秘密佛教成立已後の聖典で、譯經史に現はれて來たのは、唐已後だが之を大品や小品の般若と比較すると、材料結構文體が全然面目を異にして居る。尙又大般若中の理趣分と、菩提流支、金剛智不空などの譯を精細に較べて見ると、秘敎の聖典を著く增補添加をして、般若の中に取り込むだ形跡も明である。また夫第七分卽文殊般若だ。この經は引く手あまたの美人のようなもので、寶積の方にも入籍して居る。是も一時獨立して居たのを、寶積般若の兩方から引張凧で、今日の樣な風になつたよい證據ではないか。少し別の談になるが、大體寶積は、餘程般若と深い關係のある點も少くない。同經第三十一會の洹河上優婆夷會も、羅什大品般若の第五十九河天品に出て來る（他の四大部の般若及玄奘譯に於ける此品に就きては、下の對合表を見よ）。其他にも種々面白い類似もあるが、別問題になるから、今は略しよう。

また第八の那伽室利分にも明かに後代の竄入が見える。此經は大體頗古代に屬するもので、首楞嚴三昧經など〻同系だが、大般若に編入する時に、金剛般若の「如露亦如電」の偈を添加してある。この偈は勿論、古譯には存して居らぬのだから、添加の跡はどうしても覆ふことが出來ない。

本文批評上、概觀したら先ざつと此の如くだが、玆に一つ右の事實を證明する强大な經證がある。それは仁王般若經の文である。

大尊世尊。前已爲我等大衆。二十九年。說摩訶般若波羅密。金剛般若波羅密。天王問波羅密。光讚般若波羅密。今日如來放大光明。斯作何事。（羅什譯、序品一、月九、四六左、同文不空譯閏七、一一右）

同く此三品があつた事と考へられる。また第四分は梵本の出版もあり四種の異譯（曇摩蜱佛念の合譯は缺本である）もあるが、何れにも右の三品が現存して居る。

支婁迦讖	道行般若經	二八　薩陀波倫	二九　曇無竭	三〇　囑累
支　謙	大明度經	二八　普慈開士	二九　法來開士	三〇　囑累阿難
羅　什	小品經	二七　薩陀波倫	二八　曇無竭	二九　囑累
施　護	佛母出生三法藏般若經	三四　常　啼	三五　法　上	三六　囑累
梵　本	Aṣṭasāhasrikā	三〇　Sadāpraruda	三一　Dharmadhata	三二　Parindanā

章段の分け方には出入があるが、何れも明かに右の三品を具備して居る。第三分と第五分には異譯が傳はらぬから何とも云へぬが、要之、大品でも小品でも大般若が缺けてるのを具へて居るのである。

何故大般若の第二分と第四分にはこの三品が缺けて居るか、これに對する解答は即明かに大般若が別々に獨立して居たものを集めた最强大の證據になるのだ。蓋し諸種の異譯や梵本を將いて大般若第一分に存する右の三品に比較すると、他の諸品のように、廣略の差異がない。殆ど同一である。其所で別々に存在して居つた五分――精密に言へば第一第二第四の三分――の般若を集める時に、重文になるので略去したのである。各自獨立に存立したのを集めた痕跡は、歷々と見ゆるではないか。

第二大部卽小部般若の方へ來るとこの痕跡が一層鮮明に顯はれる。其一例を擧げると、夫の第十分の理趣般若

のものが廣大になるといふのが普通である。十偈あつたのが、五六偈增加するとか、十品のものが十二三品になるとかいふ風に進化し發達して行くのである。一寸例を擧ぐれば、夫の普賢行願贊である。これは初四十二偈しかなかつたのを、後には六十二偈になつた。其上にまた長行が出來たといふ樣な譯だ。楞伽にもかゝる箇所が何箇もある。然し般若では廣大なものが漸次節略され、流動放漫なものが次第に凝集固結して行くといふ傾を有して居る。言を換へると二萬五千頌が一萬八千頌になり、一萬頌に節略せられ、八千頌まで縮められたといふ順序だ。他經の發達を假に擴大的性質といふ名をつければ、般若は方に緊縮的性質の發達なのだ。

何故般若は此の如き緊縮的の發達をしたのであるか。これは般若の傳道的性質から來たことである。大乘の諸經は概して傳道的性質、卽其經典自身に對する傳道的の性質を具へて居る。法華の如きは實に適切の例であるが、般若が聖典崇拜の傳道と來ると、實に盛なものだ。般若の書寫讀誦受持の功德は、到る處極力勸說されてある。第一分の校量功德品などは、數卷に亘りて重複鄭寧にこの傳道をして居るのだ。般若諸部の梵文が、今日尙多數に殘存して居るのも、實はこの熱心な傳道が與つて大に力があるのであらう。然るに書寫するにしても、讀誦するにしても、十萬頌とか二萬五千頌とかいふ大部のものでは容易に實行出來たものでない。其所で勢精要を撮略して、小部のものを作つて行くといふことになつたのだ。ウエブスターの大字典はあまり大册で、一寸學生などには不便である。其所で携帶にも購入にも便利な、中辭典小辭典が出來たと同じ理屈である。此傾向は次第に進みて、般若心經といふような至極煎じつめたエキスも出來、西藏にはたつた一字の阿字。不生不滅、本來皆空の

仁王經は唐已後秘密教の勃興と共に、非常に重要のものとなり、日本にても昔時仁王會は東寺三大法の一で、至て重要秘法となつて居つた。然し梁の時代には、疑經としてあまり信用はなかつた樣だ。梁武帝の注解大品の序には「唯仁王般若。具書各部、世既以爲疑經。金剛置而不論。」とまで書いてある。又西藏では之を疑經に屬して居るといふことが、至元錄に見ゆる。然し既に法護眞諦の古譯の存して居つたことも同錄にある、不空の譯もある。この經に關した種々の秘密儀軌の譯出もあつたのだから、印度での新しい作ではあらうが兎に角支那での僞作ではないことは明かである。餘談は先この位にして、此文で見ても、當時摩訶（第一分若くは第二分）金剛（第九分）天王問（第六分）光讃（第四分）の諸般若が、獨立に存在して、まだ一部の集經大般若は出來て居らなかつたことが見える。

また出三藏記の中に、僧叡や支道林が作つた、般若に關する序文があるが、此等の文中にも、別々に諸部の般若の存在したることは書いてあるが、大般若のこと卽各部を編集したるもの丶存在は何とも云うて居らぬ。されば目今吾々の有する六百卷の大般若は、その成立が比較的新しきものと考ふる外はない。

八　大般若の發達　前項の如く、大般若經の各分が、何れも初は獨立のものであつたとすれば、玆に其中何れが古くて何れが新しいかといふ問題が必然出て來る。第一大部と第二大部とは何れが先に出來たか。大品と小品とはどつちが先で原始の形體であらうかといふ問題は是非玆で解決を要する順序になる。

大體般若の發達は、全く他の大乘經と正反對の方向を取つて居る。他の諸經では、簡單より複雜に進み、短小

飜譯の出るまで、絕えて見えぬ。之に反して第四分は、非常に古代の譯があつて、漢の末に旣に支那に流布して居るから、或は第四分が先であらうといふ考も不當ではないが、然し初め二萬八千頌の大品があつて、それから一萬頌小品が撮略された跡で、中間の一萬八千頌の第三分を作るといふのは、まづないことであらうから、大抵は左の順序で出來たものと見てよからう。

第二分（二萬五千）→第三分（一萬八千）→第四分（一萬＝大八千）→第五分（八千＝小八千）

十　第一分と第二分の關係　玆で第一分と第二分との關係を論ずべき順序になつた。大體第一分は、印度には古代から存在して居つたので、僧叡の小品の序には左の文がある。

斯經正文。凡有四種。是佛異時適化廣略之說也。其多者云有十萬偈。少者六百偈。此之大品。乃是天竺之中品也。（出三藏記、結一、四二、右）

僧叡は羅什から此傳說を承繼したのであらうから、確實のものと信じてよい。四種といひ、六百偈と指してあるのは、どの般若を指したのかは、分明でないが、何れにしても、當時印度に、十萬偈卽第一分の般若が存在したのは、これで充分に證明される。また支道林も、大小品對比要抄の序に、

惜昔闕之。曰。夫大小品者。出於本品。本品之文有六十萬言。今遊天竺。未適於晉。今此二抄。亦與于大本。出者不同也。（出三藏記八、結一、四三左）

玆で本品といひ大本といふのは、十萬偈の般若を明かに指して居るのである。六十萬言といふ勘定は、稍少き

表徵たる阿字一つ丈說いた般若さへある位だ。是まで來ると隨分滑稽だが、然しなるたけ簡便にして、傳誦書寫に都合よくしようといふ般若本來の精神はよく現れて居るではないか。

九　大品と小品との關係　今一步進みて此發達の順序を證定して見よう。先づ第一に大品と小品だ、これは明に小品が大品を節略撮抄して出來たものといふことは、明に本文で見られる。下の對合表につきて、大品の第六品から二十四品までの文が、如何に巧に小品の第一品に撮抄縮小されたかを吟味すれば、眞に分明になる。然し此撮抄のために或點では小品ばかりでは、文段の連絡や、思想の順序が、隨分探るに困難な場合もある。道安法師も、道行經の序文に、この消息を洩して居る。

佛泥日後。外國高士。抄九十章。爲道行品。桓靈之世 。佛朔賚詣京師。譯爲漢本。因本順旨。…………然經既抄撮。合成章指。音特俗異。譯人口傳。自非三達。胡能得本緣故乎。由是道行。頗有首尾隱者。古賢論之。往々有滯。仕行（朱士行）耻之。尋求其本。到于闐。乃得送詣食垣。出爲放光品。（結一、三五、左）

右の文中九十章といふのは、第二分大品般若、卽放光經の九十品を指すので、之を印度で抄略して、道行品卽第四分小品にしたのである。古譯に第四分のことを、摩訶般若波羅密抄經と題してあるのも、亦道安の傳へた、古傳說の確實なるを證して居る。

第五分は、勿論第四分を更に抄略したものである。これも本文を對照すると、其痕跡がよく見える。第三分と第四分とは、何れが先に成立したかは解決すべき證據もないから斷言は出來ぬ。譯經史の上には第三分は玄奘の

で五六部般若の發達は、左の圖の樣になる。

第一分（一〇〇、〇〇〇）↓第二分↓（二五、〇〇〇）↓第三分（一八、〇〇〇）↓第四分（一〇、〇〇〇）↓第五分↓（八、〇〇〇）

十一　小部諸般若の發達

已上は大般若の主要部分である第一大部の發達を略述したのだが、今更に第二大部、卽第六分已下の諸小部般若に就きて、概略其發達を研究して見よう。

諸小部般若の中には、頗古代に屬するものと、比較的に新しいものとあるが、其多數は、何れも大小兩品の成立已後に出來たもので、種々の樣式で、般若の精髓を撮取して、一部をなしたものである。彼の前述の緊縮的凝集的の性質は、此處にも明かに看取することが出來る。但、前の場合は、同一の經典を撮略したのだが、今の場合は全く別の枠を持て來て之に般若の精要を籍め込んだのである。

諸小部の中で、大部般若に最も近い形式を有し、其內容からも非常によく撮略した痕跡の見ゆるのは、金剛般若卽第九分である。之は直系の小部般若というてよからう。經中に主として活動する役者は須菩提で、大部般若と全く其趣を一にして居る。

第十一分已下第十六分までは、順次に六波羅密を說いたものだ。寶積經菩薩藏會の中に六波羅密を說いた部分、秘密部に屬する大乘六波羅密經などゝ、全然同一の形式である。要之、此部分は、大部般若の應用とも亦補遺とも總結とも見るべきもので、大部の中の教旨で、詳く六波羅密を說いたに過ぎぬ。大部の中にも、般若波羅

に失するが、兎に角、大小兩品已外に一大部の般若が當時印度に存在した證據は玆にも明かに見える。

此他、尙一つ强大な證據が大智度論の中にある。卽ずつと溯りて、龍樹の時代にも第一分は印度にあつたのだ。

復次三藏。有三十萬偈。幷爲九百六十萬言。摩訶衍甚多。無重無限。如此中般若波羅密品。有二萬二千偈。大般若品有十萬偈……………小般若品。尙不能讀。何況多者。……又有不思議解脫經十萬偈。諸佛本起經。寶雲經、大雲經、各々十萬偈。法華經、華手經、大悲經、方便經、龍王問經、阿修羅王問經等諸大經。無量無邊。如大海中寶。（大智度論第一百、往五、一〇五右）

龍樹大論師は、此所で小乘の三藏に對して、大乘經の無量無邊なることを對辨したのであるが、當時印度には明に十萬偈の大般若品卽第一分が存在して居つて、之を大般若品と稱したものである。正に前の僧叡の序分にある記事と一致する。

旣に龍樹論師の時代に、十萬頌の大本が、二萬二千頌——龍樹は今の所謂二萬五千頌を稍精密に算定した——が並立して居たとすれば、前の軌轍で、後者は前者大本を抄略撮抄して、成立したものであらうといふ想像も決して無理ではあるまい。但、是は尙兩者の梵本及漢土各種の異譯をも精密に比較した上でなければ、輕々に速斷することは出來ぬが、然し、支道林も前に擧げた序文の中に「大小兩品者出於本品」と明記し、特に「今此二抄（大品及小品）亦興于大本」とまで書いてあるのだから、此想像は、大體正鵠を失したものでもあるまい。其處

は、確に見ゆる。然しこの兩分は、古代の方等聖典、例せば首楞嚴三昧經とか維摩經とかの樣に、文殊が主となりて經典が出來上つて居る。卽ち、其形成の上から見たら、當時の方等大乘諸聖典の影響を受けて居るのだ。これは、全く前の第十一分已下と相違した點だ。

第十分の理趣般若は、實に面白い聖典史的の位地を占めて居る。此經は言ふまでもなく、般若の經典崇拜が大乘佛敎徒の間に强大の根柢を有したのに乘じて、秘密敎徒が、密敎の敎理と般若の空理とを融合して作成した重要の聖典である。それが、後代になつて、再たび般若部として還本復歸して、大般若の中に收められたものである。故に其內容も外形も、著しく他の般若と相違してゐる。

已上の小部諸般若は、其發達の工合は、各相違するが、大部般若成立已後に出來たものである丈は、何れも立證出來る。然るに、第八分の那伽室利般若だ。これは頗古代に屬する經で、支婁迦讖の古譯小品が出た時代――後漢靈帝の中平五年（西曆紀元百八十八年）――に、早く旣に漢土に傳はつた。其內容は、般若と同じく、一切皆空を巧妙に說てある。然し其說明の方法が主として諸法如幻といふ思想に依つて居る。此思想は、勿論般若でも重要な說明方法の一で、諸所に散說されてある、故に第八分と大部般若とは思想上の親緣であることは論ずるまでもない。さりながら、單に此點ばかりでは、どうも那伽室利分が大品若くは小品から他の般若のように、發達したものとは、斷言出來ぬ。寧ろ般若成立の當時に、大乘佛敎一般の根本思想であつた、如幻論が一方大部般若に顯はれ、他には那伽室利分に出たものと見るが穩當であらう。而してこの般若と親緣の思想を有する聖典

密と他の五波羅密とを對辨した、箇所は少くはないが、一一の波羅密に就きて詳說した所はないから、寶積菩薩藏會などの說相に準じて、此部分が後代に成立したらしい。換言すれば微少の內容的影響を方等部の古經より受けたとも云へよう。此部分の文體は、他の小部般若に比して、比較的大部に近いが、譯經史には大般若の譯出までは、絕えて其名を見ぬから、恐く新しき時代に屬するものであらう。之には强大の證據もある。第十六分、卽此集團の最後の般若波羅密分を見るとこう結んである。

善勇猛。若於般若波羅密多。甚深法門。受持一句。尙獲無量無邊功德。況有於此大般若經。能受持轉讀。書寫供養流布。廣爲他說。彼所獲福。不可思議。…………善勇猛。我爲有情。斷疑惑故。說如是大般若經。(大般若第六百、第十八九表)

これは十六分を總じての大般若經といふ名を出したものであるから、其新しいことは前の研究で、別に吸々せぬでも明了であらう。他の部分では此經とか般若波羅密とか呼んで、其讀誦や受持などの効能書をならべ立てるのだが、未だ此結文のように明かに、「此大般若經」とか、「如是大般若經」とか十六分合した今日の六百卷の經文を指した所はない。これは此部分は恐く般若諸分中最新のものであらう。或は大般若編纂の當時に、補遺、總結の考で成立したのではなからうかといふ想像が無理でないことが分らう。善勇猛菩薩卽第十六分の對告者の名も、他にはあまり見ぬ菩薩である。

第六分と第七分、勝天王と文殊の兩般若も、金剛般若と同じく大部般若を撮略し其精要を取りて成立した跡

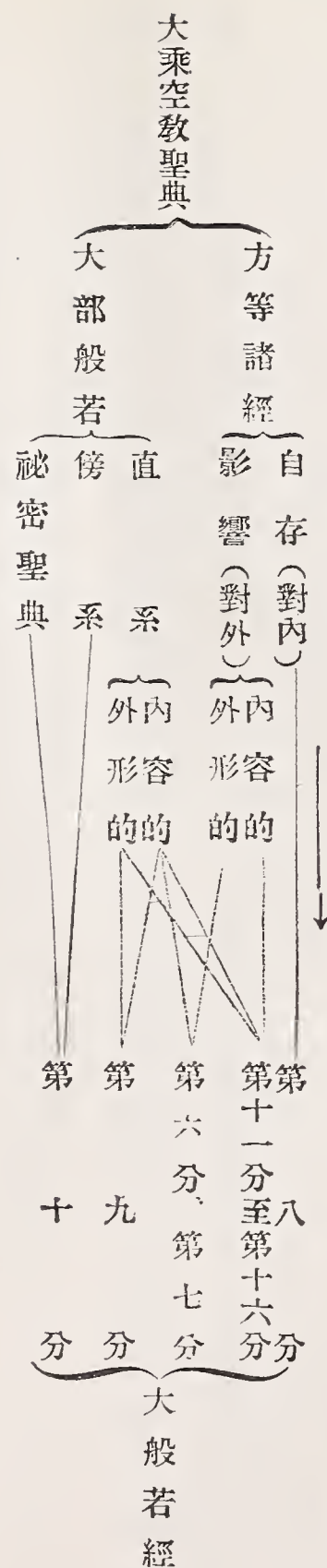
其實五者には、品目章段の出入開合頗る甚しく、事に當りて、一事に捜すら、實に容易の事ではない。閲藏知津の中にも、般若の條下に、少しく對照がしてあるけれども、勿論、精細のものではなし、或は說き或は略して頗粗雜のものであるから、實際の役には立たぬ。而して本文批評の上には、是非とも對合照比の切要があるので、是非一度、誰かゞ全部の對照を作成して、世に公表する義務が、とうの昔に既に佛教學者に殘て居たのだ。ヤコビ教授が、印度兩大史詩諸刊本の精細にして感謝すべき對合表。近時出來たブルームフヒルド教授の厖然として勞力實に多き吠陀の對合表。此等に比すれば、固より拙表は取るにも足らぬ小さきものであるが、出來得る限は忠實に作つたのだから活字に誤植さへなければ、多少は學者の便宜となる事は、公言するに憚らぬ。

五大部般若比較の外に、大小兩品異譯の對合表をも添付した。大品の方の梵漢比較はまだケムブリヂの寫本が全部來ぬので完了せぬから、梵本の方は略してある。

十三　對合表使用の注意　對合表は總じて三種ある。第一五大部般若の比較。第二大品の異譯比較。第三小品の梵漢及異譯の比較である。三表とも何れも縮刷藏經に依りて作成したのである。明藏などは縮刷の分卷と少しく異る點もあるから、特に一言して置く。

葉號の前の羅馬數字は縮藏の帙數である。第一分の I (I) I は第一卷第一品洪第一帙の意である。葉號の次のａｂは一葉の表裏兩面で、其次の數字は行數である。第一分の第十八品に相當する第二分の 23 (423) 119a18. は第四百二十三卷、第二十三品日二、九葉裏第十八行から始まるのを示したものだ。他は皆之に準ずる。第三表

は、後代大般若編纂の時、多少の增補の上、攝入されたものであらうといふ想像がつく。譯經史の上から見ても、此經の飜譯が、他の小部諸般若に先ちて存在して居たので此想像が、必しも根據のないものでないといふことが考へられるだらう。

前に叙述した所を總括すると、略左圖の如くなる。

肆　大般若の對合表

十二　對合表の必要　前に述べた如く、大般若の主要部分は、五種の同一なる聖典が廣略長短種々の形式で說述されてあるのだから、研究上是非とも五者の精細なる比較表を要する。第一分の或文句は、第二分の何處に出て居るか。第三分の某品は他分ではどうなつて居るか。凡此等の比較的搜索の必要は、始終起つて來る。故に五大部般若を、一目に比較し、隨意に好む所を搜索の出來る樣な、索引が入用となる。是が卽對合表である。

若し五大部の般若が、大體同一の分章がしてあり、其上搜索が簡單に出來れば、かゝる表も必要ではないが、

五大部般若（初分至第五分）對合表

第一分			第二分			第三分			第四分			第五分		
洪一至荒十			日一至四			日四至七			日七至八			日八至九		
品	卷	葉	品	卷	葉	品	卷	葉	品	卷	葉	品	卷	葉
1	(1) 1洪		1	(401) 1		1	(479) IV		—			—		
2	(3)		2	(402)		2			—			—		
2	(4)	28b 1	3			2	(480)	88a12	—			—		
3			3	(403)	11a17	2		89b 9	—	鈌		—	鈌	
4	(7)		3	(404)	15a 3	2	(481) V	b11	—			—		
5	(10)		4	(405)		—	鈌		—			—		
6			5			—			—			—		
7	(11)		6	(406)		3	(483)		1	(438) VII		1	(556) VIII	
8	(36) 11		7	(408)		3	(484)	14b 4	1		80b 9	1		73a20
9	(37)		8			3		16a19	1		80b	1		73b 3
10	(38)		8		40b 9	3	(485)	19b 2	1		81a20	1		74a 8
10		82b11	9	(409)		3		20a 2	1		81b10	1		74a16
11	(42) 111		10	(410)		3		22a11	1		82a20	1		75a 1
12	(45)		11	(411)		3	(486)	24a 4	1		82b12	1		75a10
13	(47)		11		49b13	3		26a17	1		82b13	1		75a11
13		31a11	12			3		27a10	1		82b14	1		75a12
13		33b15	13			3		27b15	1		83a 2	1		75a17
13	(49)	39a 7	14	(412)		3	(487)	30b19	1		83a 4	1		75a18
14			15	(413)		3		31b 3	1		11„	1		„
15	(51)		16			3	(488)	35a 9	1		83b 1	1		75b10
15	(52)	57a 1	17	(414)		3	(489)	39a15	1		11„	1		„
15	(53)	61b 5	18	(415)		3	(490)	43b17	1		83b 3	1		75b12
15	(55)	67a 2	19	(416)		3	(491)	49b15	1		83b 4	1		„
16	(56)		20	(417)		3	(493)	56b 1	1		83b 8	1		75b14
16	(57)	77b16	21	(418)		3		59a 1	1		83b 9	1		75b15
17	(61) IV		22	(420)		3	(495)	68a18	1		83b12	1		75b18
18			23			3	(496)	69b 1	1		83b14	1		75b18
19	(70)		23	(423) II	9b18	3	(497)	77b 3	1		84a 8	1		76a 9
19	(71)	49b12	24			3		77b19	1		84a14	1		76a13
20	(74)		24		13b12	3	(498)	78b12	1		84a15	1		„
21	(75)		24	(424)	15b 5	3		80a11	1		85a 6	1		76b11
22	(77)		25	(425)		4			2	(539)		2		
23	(81) V		25		22a 6	4	(499)	85b 9	2		86a14	2		77a18
23		4b16	26			4		86a14	2		86b 2	2		77a20
24	(82)		26	(426)	23a18	4		86b 2	2		86b11	2		77b 8
25	(84)		27			4	(500)	87b11	2		86b15	2		77b11
26	(85)		27		24b 1	4		88a 6	2		86b18	2		77b14
27	(89)		27		25b 3	4		89a 5	2		87a 9	2		78a 2
28	(98)		27		27a14	4		89b 6	2		87a16	2		78a 7
29	(99)		28	(427)		5			2		87b15	3	(557)	
29	(100)	83b 5	28		28b 4	5		90b16	3			3		78b 9
29		87a20	29			5		91b16	3		88a16	3		78b15
29	(102) VI	8a19	30	(428)		5	(501) VI	2b14	3	(540)	89a13	3		79a15
30	(103)		30		33a19	5		3b 8	3		89b14	3		79b 4
30	(104)	16b 7	31	(429)		6	(502)		3		91b17	3		80b 5
30	(105)	17b18	32			6		6b10	3		92a 3	4		
30		21b20	33			6		7b13	3		92b11	4		81a 8
30	(106)	22b 4	34			6		8b 3	3		93a 9	4		81b 4
30	(127) VII	28b18	35	(430)		7	(503)		4	(541) VIII		5	(558)	
30	(129)	36a 1	35		43b14	8			4		3b10	5		83b17
30		39b 4	35		44b 4	8		14a16	5			5		84a 4
30	(130)	40b11	36	(431)		8	(504)	15a 1	5		4a17	6		
31	(168) IX		37	(432)		9			6	(543)		7		
32	(172)		38	(434)		10	(505)		7			8	(559)	
33	(181) X		39	(435)		10	(506)	25b19	7		18a 5	8		88b 6
34	(182)		39		64b 1	10		27b18	8	(545)		8		89a19
35	(285) V荒		40	(436)		11			8		19b18	9		
36	(287)		40		69a 9	11	(507)	30a 3	8		20b 1	9		89b16
37	(292)		41			11		31a10	8		20b14	9		90a 9
37	(293)	52b10	41	(437)	72b 2	11		32b 2	9			9		90b10
37		66b10	41		73a18	12			9		21b12	9		90b15
38	(296)		42			12		34a 3	9		22a14	9		91a 7

の梵本の頁號の次の數字も同じく行數である。例せば羅什譯の小品第十四品は梵本では 14, 286, 10 第十四品二八六頁の第十行から始まるのだ。

予は此表を作成するにつきて、手許の縮藏の大般若が缺けて居たので、リエージュ大學圖書館所藏の本を借覽したのだ。同大學が寛大なる貸出につきては、厚く玆に謝意を表する。

大品般若(大般若第二分)異譯對合表

羅叉 (月一,二)	羅什 (月三,四)	法護 (月五)	玄奘 (日壹至四)	羅叉 (月一,二)	羅什 (月一,二)	法護 (月五)	玄奘 (月三至四)	羅叉 (月一,二)	羅什 (月三,四)	法護 (月五)	玄奘 (日壹至四)
品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉	品卷葉
1(1)1	1(1) III	1 (1) V	1 (401) I	31	30	—	28(427)	62	61	—	60
1 3a 3	1 3a16	1 3a 1	2 (402)	32	31	—	29	63	62(19)	—	61 (454)
2	2	2	2 9a10	33 (7)	32(10)	—	30(428)	64	63	—	62 (455)
2 4b16	2 5b 3	2 5b 1	3	34	33	—	31(429)	65(15)	64	—	63 (456)
3	3	3	3 9b15	35	34	—	32	66	65	—	64
4(2)	4(2)	3 (2)8b10	3 (404) 15a 4	36	35	—	33	67	66(20)	—	65 (457)
5	4 10b19	3 11b 4	3 18b19	37	36	—	34	68	67	—	66 (458)
6	4 11b11	3 12b 2	3 21b19	38	37(11)	—	35(430)	69	68	—	67 (459)
7	5	4	4 (405)	39 (8)	38	—	36(431)	70(16)	69(21)	—	68 (460)
8	6	5	5	40	39	—	37(432)	70 33a10	70	—	68 4a15
9	7	6	6 (406)	41 (9)	40	—	38(434)	71	71(22)	—	69 (463) IV
10	8 (3)	7 (3)	7 (408)	42	41	—	39(435)	72	72	—	70 (464)
11	9	8	8	43	42(12)	—	40(436)	73	73	—	71
12(3)	10	9 (4)	9 (409)	44	43	—	41	74(17)	73 48a20	—	71 15b11
13	11 (4)	10	10 (410)	45(10)	44	—	42(437)	74 36b12	74(23)	—	72
14	12	11 (5)	11 (411)	46	45(13)	—	43(438)	75	75	— 缺	73 (465)
14 16b 2	13	11 28b13	11 49b13	47	46	— 缺	44(440)	76	76	—	74
15	14	12	12	48(11) II	47(14) IV	—	45	77	77	—	75
16	15 (5)	13	13	49	48	—	46(441) III	78(18)	78(24)	—	76 (468)
17	16	14 (6)	14 (412)	50	49	—	47(442)	79	79	—	77 (471)
18	17	15	15 (413)	51	50(15)	—	48(444)	80	80(25)	—	78 (473)
19 (4)	18	16	16	52	51	—	49	81(19)	81	—	79 (474)
20	19	17 (7)	17 (414)	53(12)	52	—	50(445)	82	82 26)	—	80 (476)
21	20 (6)	18	18 (415)	54	53	—	51(446)	83	83	—	81 (477)
22	21	19	19 (416)	55	54(16)	—	52	84	84	—	82
23 (5)	22	20	20 (417)	56	55	—	53(448)	85	85	—	83 (478)
24	23	21	21 (418)	56 12a12	56(17)	—	54(449)	86 20)	86	—	84
25	24 (7)	22 (9)	22 (420)	57(13)	56 17b19	—	54 37a14	87	87	—	85
26	25	23	23	58	57	—	55	88	88(27)	—	—
27	26 (8)	24	24 (423) II	59	58	—	56(451)	89	89	—	— 缺
28 (6)	27	25(10)	25 (425)	59 15b17	58 22b 2	—	57	90	90	—	—
29	28	26	26	60	59(18)	—	58				
30	29	27	27 (426)	61(14)	60	—	59(452)	90 20	90 20	27 10	85 78

第一分			第二分			第三分			第四分			第五分		
洪一至荒十			日一至四			日四至七			日七至八			日八至九		
品	卷	葉	品	卷	葉	品	卷	葉	品	卷	葉	品	卷	葉
39 (297)			43 (438)			13 (508)			10			10		
40 (303)	VI		44 (440)			14 (509)			11 (546)			11 (560)		
40		13a20	45			14		42a12	11		28a 3	11		95a 4
40 (304)		17b 4	45 (441)	III	3a 9	14 (510)		44b 7	11		29b15	12		
41 (305)			46			15			12 (547)			12		
41 (306)		23b 1	47 (442)			15		47b 4	12		32a14	13 (561)		
42 (308)			47 (443)		13a 3	16 (511)			13			13	IX	1b13
43 (310)			48 (444)			17			14 (548)			13		2b15
44 (311)			48		16a12	17		51b 4	14		34a15	13		2b 8
44 (312)		49b 9	49			17 (512)		52a16	14		34b13	14		
45 (313)			50 (445)			18			15			15		
46 (316)			51 (446)			18		57b14	15		36b 5	15		4a 3
47 (318)			52			19 (513)			15		37a 3	15		4b 2
47 (321)	VII	2a 7	52		27a18	19		60a 1	16			15		4b 7
48 (324)			52 (448)		32b 1	19		63a11	16		39b 7	15		6a 7
49 (325)			53			20 (514)			17 (549)			16 (562)		
49 (326)		28a14	54 (449)			20 (515)		69a19	17		41a 2	16		7b 8
50 (328)			55			21			18			17		
50 (330)		44a 6	55 (450)		44a 8	21 (516)		76a 9	19 (550)			17		9a20
50		45a 5	56 (451)			21		77a 9	19		44b19	17 (563)		10a11
51			57			21		77b14	19		45b 8	17		10b12
52 (331)			58			22 (517)			20			18		
53			59 (452)			23			21			18		11b 4
53 (332)		54a29	60			23 (518)		84b 7	21 (551)		48b 1	19		
53 (333)		58a20	60 (453)		56a 7	23		87b 3	22			20		
54 (335)			60		59a 9	23 (519)		89b20	22		52b14	20		15a 6
55 (336)			61 (454)			23		91b17	23 (552)			20		15b 8
55 (337)		76b12	61		62b14	23 (520)		93a15	24			21		
55 (338)		79a10	62 (455)			24			25			21 (564)		17a 1
55 (341)	VIII	2b 6	62		66b 9	24		97a 2	25 (553)		58a 6	22		
56			63 (456)			25 (521)			26			22		17b 8
57 (342)			64			25	VII	3b 10	27			22 (565)		18b16
57 (346)		25a15	64		74a19	25 (522)		6b17	27		63a11	23		
58			65 (457)			25		7b 2	27 (554)		63b10	23		20a 5
58 (347)		27a 4	65 (458)		75b10	25		8a 7	28			23		20a13
58		30a11	65		77b19	25		9b19	28		65b19	24		
—			—			—			29 (555)			—		
59			66			26 (523)			28		66b 5	24		22a 5
60 (349)			67 (459)			26		11b18	—			—		
61 (351)			68 (460)			26 (524)		15b12	—			—		
61		83a 8	68	IV	2b20	26 (526)		21a16	28		67b14	24		22b 4
62 (363)	IX		69 (463)			26		28b17	—			—		
63 (365)			70 (464)			26		29b13	—			—		
63 (366)		24a20	71			27 (527)			—			—		
64			72			28 (528)			—			—		
65 (372)			73 (465)			28		39a 4	—			—		
66 (373)			74 (466)			28 (529)		42b18	—			—		
67 (378)			75			28 (530)		45b15	—			—		
68 (379)			76 (468)			29 (532)			—			—		
69 (388)	X		77 (471)			29 (533)		58a 7	—			—		
70 (386)			78 473)			29 (534)		63b14	—	缺		—	缺	
71 (390)			79 (474)			30 (535)			—			—		
72 (393)			80 (476)			31 (536)			—			—		
73 (394)			81 (477)			31		74b 4	—			—		
74 (395)			82			31		75b14	—			—		
74		66b 9	83 (478)			31		77a12	—			—		
75 (396)			84			31		79a12	—			—		
76 (397)			85			—			—			—		
77 (398)			—			—	缺		—			—		
78 (399)			—	缺		—			—			—		
79	400		—			—			—			—		
79	400		85	78		31	59		29	18		24	11	

大般若經概論を讀む

（明治、四二、新佛教第一〇卷四號）

去歲の夏なりき。予は大般若に就きて、一篇の蕪稿を草して本紙を煩はしたりき。されば、橋惠勝氏がこの二月に公表したる同經の「概論」に就きて、數行の辨を費すべき責任の、當然に我に存するを感ぜり。同氏の論未だ結了を告げたるにあらず、而も我が責を負ふべき部分と、言はむと欲する所は、方に此回の論中に存せり。之に次がむ氏が稿に至りては、他日また自ら拙評を試むる機會あるべし。予は贅を臚陳する前に、橋氏が去歲の拙稿に對して注意に吝ならざりしことを謝して置かむとす。この感謝の念は、我責任の感想をして、益重きものとなしつ。

橋氏が今回の稿、三段を以て成る。第一の「譯本の流通」に就きては、固から自明の事實（ゼルブストフエルステンドリヒ）にして、些も言を挿むの餘地なし、第三は「大經の大〔綱?〕」なり。是又多く異議なき所。我言はむとするは、實に第二の「成立の時處」に就きてなり。——この項下に、氏が試みたる數箇の論斷と材料の運用とに就きて、薄かその訂正を乞はむと思ふなり。

近時「新佛教」の誤植は、頗甚しきものあり。予は誤植のために、氏を累するに忍びず。而も何れの行が倒置

（三）　小品般若（第四分）梵漢異譯對合表

梵本（甲谷他板） 品	頁	施護（月七） 品卷葉	玄奘（日七，八） 品卷葉	支婁迦讖（月六） 品卷葉	羅什（月六） 品卷葉	支謙（月八） 品卷葉	曇卑佛念（月八） 品卷葉
1	1	1 (1)	1(538)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
2	33	2 (2)	2(539)	2	2	2(2)	2
2	48,1	2 7b15	2 87b15	3 2)	3(3)	3	3(2)
3	49	3	3	3 6b 3	3 50a14	3 13b 2	3 39a 4
3	72,5	3 (3) 11a 1	3(542)92a11	3 8a17	4	3 14a 5	3 40b12
4	79	4 (4)	4(541)	3 10a 7	5	4	3 42a 9
5	102	5 (5)	5	3 10b17	5	4 15a11	3 42b17
5	105,8	5 15a 7	5 VIII4a17	3 10b20	6(3)	4 15a13	3 43a 3
6	135	6 (6)	6(543)	4(3)	7	5	4(3)
7	170	7 (7)	7	5	8	6(3)	5
8	185	8 (8)	8(545)	5 15a 9	8 58a13	6 17a20	6
8	186,7	8 25b18	8 19b12	6	8 58a18	7 18	—
8	187,9	8 25b 4	8 19b18	6 15b 2	9(4)	7 17b 3	—
8	199,4	8 (9) 27a14	8 21b 2	7(4)	9 59b 4	7 18a 6	—
9	200	9	9	7 16b10	9 59b 4	7 18a 7	—
10	208	10	10	8	10	8	—
11	232	11(11)	11	9	11(5)	9	—
11	249,12	11(12) 34b18	11(546)29b15	10(5)	12	— }鈌	—
12	235	12	12(547)	10 21a 4	12 63b 4	—	— }鈌
12	255,18	12 35a19	12 30b18	10 21a 9	12 68b 5	10	—
12	272,18	12(13) 37b13	12 32a13	10 22a 6	13	10 20b 2	—
13	277	13	13	11	13 64b15	11(4)	—
13	281,1	13 38b19	14(548)	11 22b19	13 65a12	11 21a 1	—
14	284	14(14)	14 34a16	11 23a 8	13 65b 4	11 21a 8	—
14	286,10	14 39b19	14 34b13	12	14	12	—
15	292	15(15)	15	13	15(6)	13	—
16	306	16	16	14	15 67b10	14	7(4)
17	323	17(16)	17(549)	15 (6)	16	15	8
18	341	18(17)	18	16	17(7)	16	9
19	352	19	19(550)	16 28a 1	17 71b10	16 24a14	9 52b 7
19	365,7	20(18) 51a14	20	16 28b12	18	16 24a17	9 53b
20	370	20	21	17(7)	18 72b19	17	10(5)
20	380,18	20 53b 1	21(551)48b 1	18	19	18	11
21	385	21(19)	21	18 31a 9	19 74b 4	18 26a13	11 56a 1
22	396	22	22 49a 9	19	20(8)	19	12
23	410	23(20)	23(552)	20(8)	20 76a15	20(5)	13
24	416	24	24	21	21	21	—
25	324	25(21)	25	22	21 77a14	22	—
25	430,16	25 60a18	25(553)58a 6	22 34b14	22	22 28a 9	—
26	334	26	25	23	22 78a 7	23	—
26	440,14	26 61b19	26 60a16	23 35b12	23(9)	23 28b10	—
27	444	27(22)	26	24	23 79a 8	24	—
27	452,9	27 63b 2	27 63a11	24 36b20	24	24 29a13	—
28	459	28	27(554)	24 37b14	24 80a14	24 29b11	— }鈌
28	459,1	28 64a13	28 64a10	25(9)	24 80a18	25	—
28	465,7	28 65b 4	28 65b19	25 38a 4	25	25 29b15	—
28	467,12	28 66a 7	28 66b 5	26	25 82a17	26	—
39	475	39(23)	28※(555)	27	26	27	—
30	481	30	29	28	27	28(6)	—
31	512	31(25)		29	28	29	—
32	527	32		30	29	30	—
32		25	29 18 ※他譯に比して頗増大す	30	29 9	30 6	13 5

曰く、橘氏にして、若し此文中同經の存在の明記を佚せしならば、宜く之を補訂すべく、其誤植に依りて起れる混雜の如きも、明に之を訂正する責あり。

橘氏は予が般若の緊縮的發達を論じたるにつき、反對の思考を有するが如し。氏は正面より予が稿につき反駁したる所なれば、今呶々して宜矢を發するの要なしと雖、予は特に讀者に對し、氏が此部分(拾、二、一一區下段)と、拙稿參、八―十(九、八、六七一―六七九)とを參照せむことを望み。また橘氏に對しては、更に本文批評若くは原文比較の方面より、精密なる敎示を得むことを望む。

(二)橘氏は般若第二分東北方品の豫言を以て、般若成立の時處を斷定せむと試みぬ。こは氏に先ちて荻原雲來氏が既に「東洋哲學」上に公表したる思考なれば(東哲、十六、六)橘氏が着眼の警拔なるを讃すると共に、又荻原氏の功をも沒する能はず。而して荻原氏が精細なる地理的考證は、橘氏に優るものありしを公平に記し置く義務あり。而も予は此豫言を採用するにつきては、其必然的意義を有するものなるや、又慣用的偶發のものなるやを精密に吟味する要あるべしと思ふ。蓋此豫言は般若のみにあらで、涅槃にも現はれ(盈、五、四九左九已下盈、九、三五左一五已下)其他一二の經にも見ゆる思想なれば、更に此等との關係をも精究する必要あればなり。是尙可なり、而も氏は曰く

第一分難聞功德品(荒六、七)には大同小異の文句あれども(評者曰く卽如是般若波羅密多甚深經典我涅槃後從東南轉至南方已下の文が)羅什譯大品經には相似の文句だにあることなきなり。

にして、何れの文が錯板なるやは、氏が正誤あらずんば、我には之を判別すること全く不可能なり。されば今は唯、現刊に從ひ、其判明せる誤植の外は、假に之を氏の正文と看做し去りて批評を挿まんとす。

（一）橋氏は僧叡の小品序中に、四種の般若ある記事を把りて、羅什の譯に大小兩品と金剛あり。その他に十萬頌の大本、當時存在したれば、之なむめりと推せられし如し。こは當れるが如きも、梁代にも此四種に就きて、爭議ありしを、一應斷り置きての上ならでは、直に推斷するは不可なり右小品の序の數行前に、「出三藏記」中梁武の「注解大品序」に此疑を挿めり。同序には仁王般若に十萬、大品、勝天王、金剛の四部を擧げたるを疑似に付せしも、仁王が疑經ならざるは定論あり。また譯經史上、之を證し得るを以て、或は叡が序之を指したりと見むも、一說となし得べし。要するに、此點は甚しく云々するに足らざれども、橋氏は之に績きて、

然らば羅什當時には集經十六分の中にて、第一第二第三第四第八の四種あるに過ぎざりしなり（評者曰く。氏の說通計して五種となる。また第八は那伽師利分にして金剛般若にあらず。此間植字の錯誤あるべし）其他の十二分は比較的後代に成立したること明なり。

若し此文中、第八の二字が金剛般若を指さずして、那伽室利分を指したりと假定せば（勿論かくせば金剛般若を更に加ふるの要あるも）、言ふべきことあらざるも、前來の文に照らし之を第九の誤植と見ば、大に訂正を要すべきものたらざるを得ず。蓋、那伽室利分は遠く後漢の世に其譯あり。首楞嚴三昧經等の古經と至密の關係を有す。般若の研究に於ては、本文批評の上に於ても、敎理方面に於ても、特に注意すべき部分なればなり。故に

卽玄弉の譯は原形にあらざること、歴然として爭ふべからず。橘氏が唯玄弉の譯にのみ依りて、毫も古譯を參照せず、一一六頁上段の想像をなしたるは、稍輕忽の憾なきにあらず。

(三)橘氏謂らく、羅什は龜玆傳來の原本を譯し、玄弉は于闐國より傳來したる原本を譯せるならむと。羅什本に就きては一の證據をも有せず。然れども、玄弉所傳の本が那爛陀の大學に出しことは、疑を容るべからざる所なり。勿論、三藏は歸途、于闐にありて、尙其信度河を渡りし際に、流失したる經典を覓めしも、大體は信度已西、卽印度本部の原本にして、こは三藏が歸唐後同門の智光法師に寄せし書に徵するも歴々たり。(慈恩傳五及七)されば、予は今弉師所譯の原本は、其多數、印度ならむことを信じ置かむとす。那爛陀大乘佛敎の講究の盛大は、漢傳西藏共に歴々たる所。パークの敎會史、ニヤーヤサングテハにすら、其盛況を記して、寶積等の存在を確むるを見る。弉師が、中印より聖典を得たるを信ぜむは、寧學術的常識のみ。

(四)橘氏また謂らく、西域記の斫句迦(現時の karghalik なり。于闐と隣比す朱俱波、朱駒半、斫句槃等と對譯す。位置の確定は Steins' Ancient Khotan p. 89 seq. Watter's yuan Chwang. 11 p. 293 seq. を見よ。橘氏の文、此重要の古國の現位置を明言せず。卽之を付記す。)に十萬頌の大本數部を藏し、又「寄歸傳」に北六南海純ら小乘なりとの記事に據りて曰く、

玄弉義淨の旅行の當時の印度には、所謂大乘經弘通せざりしこと明白なり。近時尼波羅より、法華般若等の梵本發見せられ、學者は古來より中印度に大乘經の行はれたることを思惟するものあれども、西藏より傳來したる

と。而も羅什譯の大品經には明に其文嚴在するなり。

舍利弗。是深般若波羅蜜。佛般涅槃後。當至南方國土。……從南方當轉至西方。……從西方、當轉至北方。

……舍利弗。是深叉若彼羅蜜。是時北方當作佛時。(大品、第十三、間持品、——月三、八一、右)。

單に羅什のみならず無羅叉の古譯にも此文歷然たり。載せて放光の第十卷眞知識品四十六(月、一、六〇左)に出づ。第三、第四、第五の三分、同じく類文あり。こは余が作成して去歲の拙稿に付せる對合表につきて、檢出せば甚しく時間を要せざるべし。予は橋氏の此重要の文を什譯中に之なきを斷言し、加之無羅叉の古譯につき毫も檢出の勞を取らざりしを惜む。

蓋、此文は其性質豫言として趣味あるのみに止らで、叉本文批評し重要の暗示を、吾人に與ふ。讀者乞ふ左の比較を見て、如何に聖典本文の增大が行はるか一證に供せよ。

于闐斷片 (VIII19+VII I 17. Hoernle)	尼波羅梵 (Conle)	無羅叉放光	羅什大品	玄弉二分
1 南方 ← 2 北方 〔唯二方〕	1 南方 ← 2 北方 〔唯二方〕	1 南方 ← 2 北方 〔唯二方〕	1 南方 ← 2 西方 ← 2 北方 〔唯三方〕	1 東南方 2 南方 3 西南方 4 西方 5 西北方 6 東北方 〔六方〕
此斷片は古文字學上約五世紀乃至六世紀のものとす				

り。また西藏現在の大藏譯本は、二三支那譯より重飜したるものを除き、多數は印度傳道者の西藏の譯官が唐の末より宋に及び盛に飜傳したるものにして、支那の如く、石域地方の影響は極めて稀薄なり。是また印度に大乘經典の流通した事を立證するにあらずや。要するに、此段橋氏の論斷甚しく炳明を缺くものあるを哀まざるを得ず。

已上筆に任せて評し去る所、之を概括せむには――

1 橋氏が第一第二、第三、第四、金剛般若の外は、比較的後代に成れりといふは誤にて、其一那伽師利分は既に漢代に嚴存したる證あること。

2 橋氏は、般若東北方流通の文は、羅什譯に「相似の文だにあるなし」と斷じたるも、嚴に其文あり。而も聖典史研究上重要の文なること。

3 橋氏は羅什譯の般若原本は龜玆本にして玄奘の本は于闐本なりと、想像するも其證を得るに道なきこと。而して玄弉の本が、中印度本なることは、適當に推斷し得べきこと。

4 橋氏は玄弉義淨旅行の當時の印度に大乘經典弘通せざりしといふも、反對の事實、餘りに明白なること。學者が尼波羅に現存せる聖典に依りて、中印に大乘經典の流行したることを信ずるは、西藏の所傳に依るにあらで、歷史、字象學、聖典史に依りて、之を確信するものなること。

近代の事實なることを、思考せざる淺見ならざるなからむや。

此文を若し些の誤植なしとして、多少佛教文學の智識あるものに讀ましめば如何。渡邊海旭の獨逸にあるとき、ハウプトマンの「沈鐘」、ニイチエの「ツアラトストラ」、ワグネルの「ニーベルンゲン」が弘通せざりしといふ議論を反駁すると、一般のものなるべし。玄奘義淨は言はず、法顯も智猛も、華氏城(パータリプトラ)の一信徒の家にて大涅槃經の原本さへ得たるは、記錄の明かに示す所。「智度論」は今且く措くとするも、玄奘より少しく早く、支那に來りし中印度刹帝利族の傳道者光友(プラーバハミトラ)の譯せし「般若燈論」の中には、盛に般若を引き、而も其最も後代の添加と信ぜらるゝ最後十一分已下の文すら引きあるにあらずや（一例として論の第五を見よ）。烏荼國王が唐德宗に四十華嚴の原本を貢したるは更にも言はず。寂天の「集菩薩學論」には、殆ど都での大乘經を引けるなど、言ふまでもなきことなるべし。乞ひ問はむ、「法顯、義淨、玄奘等親聞目覩」したる記錄にして、果して當時の印度に大乘經の弘通せしを否定したる確證もあるにや。

氏が所謂「西藏より傳來したる近代の事實」とは何を意味するにや、救度主(ターラーナートハ)の「佛教史」に記載ある、聖典に就きての記事の如きを指すにや。將又他に氏の讀みたる書あるにや。若し假に解して、尼波羅の殘存の聖典が、西藏と何等かの關係ありとの意ならば、こは少しく玆に辨ずる要あり。抑現存せる尼波羅の聖典中、其の最古のものは宋代若くは唐末に溯り得べきものにして、往々にしてベナース付近にて書せられしもの存す。こは同地方の佛教徒が、婆教復興の壓迫に堪へず、經を護りて尼波羅に、其避難地を求めたる、興味ある史蹟を示すものな

大般若經の傳來に就きて

（橘惠勝氏に答ふ）

（明治四二、五、新佛教第一〇卷七號）

前に掲載した拙稿「大般若經概論を讀む」に對して橘氏は一文の答辯を出した。（新佛教拾、五、四二五頁下段至四二七頁下段）之に就いて學術上の責任から、また候、本誌に四五段拜借を願はねばならぬことになつた。爭議は橘氏と予との間だけの樣だが多少一般に向つても參考になる點がないでもあるまい。

橘氏は拙稿の（一）（＝橘氏が第一、第二、第三、第四、金剛般若の外は比較的後代に成れりといふは誤にて其一那伽師利分は、既に漢代に嚴存したる證あること。其他一二の錯誤」に答うることは、「他日に期すること」とされたから、「秋風の吹く頃」まで、此簡單至極な正誤を延すことゝし。（二）（＝橘氏は般若東北方流通の文は、羅什譯に「相似の文だにあることなきなり」と斷じたるも、嚴に其文あり、而も聖典史研究上、重要の文なること」に就きては、「羅什譯には北方より東北方といふことは云ふてない」との辯解だが、予は相似の文が存在する而も重要なパラレル、ハツセージが存在する、之が般若成立を論ずるには、玄弉譯からも原始的の形體である文、それだけ價があると申した丈のことだ。無羅叉の古譯も出し、尼波羅梵本や于闐發見の斷片まで比較する煩

獨人に惡癖あり。凡學術的の論文にして、少しく典據を放漫にし、稍其資料の取捨に怠るものあるときは、白璧の微瑕と雖、輙之を寛假せず。以て其全貌を葬り捨て、顧みざるに至る。予は橋氏の論が、其訂正―誤植にあらずとして―すべきもの、甚少からざるに關らず。氏が一隻の眼精と、不退の精進に對しては、尚此稿及未刊の續稿に、敬意を表するに躊躇するものにあらず。獨人の偏癖、豈之倣はむや。唯期する所は、論斷を後にして、研究に忠實なるにあり。妄に多草せむが爲に、輕忽書を抄し、文を羅ぬるにあらずして、克く鑽り、克く磨き、必らず書せざるべからずして書し、必らず發せざるべからずして發するにあるのみ。書し了りて、自ら戒め、又世の識者に問ふ。（三月五日稿）

問如契經說。菩薩經三劫阿蘇企耶。修業四波羅蜜多。方得圓滿。此是何等劫耶。（收八、七、右八行）

とあるを釋して四波羅蜜の名を擧げ（施、戒、進、慧―收八、八右、一七行）、一々の勤修に就き實例を提出し

外國師說。有六波羅蜜多。謂於前四。加忍靜慮。迦濕彌羅國諸論師言。後二波羅蜜多。卽四所攝。謂忍攝在戒中。靜慮攝在般若。……（收八、八、左八行）

と說き、更に異說を列べてある。この波羅蜜圓滿證得佛果の信仰は、十八異部ともに共同のもので、之に彼燃燈如來の譚を持ち出すことも、大抵紋切形になつて居る。唯波羅蜜の數が甲では四、乙では六といふ風に開會がある限のことだ。パーリ上座師は、十波羅蜜（六波羅蜜に誠諦、勝解、慈悲、捨を加へたのだ）に說きて、之を三十波羅蜜に廣開してる。有部の迦濕彌羅國師も、婆沙編輯當時は四波羅蜜成滿說が勢力があつたが、世親時代には明に六波羅蜜說である、勿論世親は有部から見たら異安心だが、正統論者の親玉ともいふべき、衆賢も六波羅蜜に不服を唱へず、世親倶舍業品本頌の、

但由悲普施　被折身無忿　讃嘆底沙佛　次無上菩提　六波羅蜜多　於如是四位　一二又一二　如次修圓滿

を顯宗（二四、冬八、一五、右初行）にも、正理（四四、冬五、一七左、六行）にも、おとなしく釋を加へて居る。加之有部律藏の一部「藥事」にも、三祇六度成滿の實例を擧げて、

修行滿六波羅蜜　慈心常有思念處……（寒四、六四、右三行、尙六三、左九行已下參照）

を取つたのは、この必要があつたからなのだ、尤橋氏は

「對校の疎漫である罪は、生の免るゝことの出來ないのは無論である」

とまで言ふて居られるから、此上は何も呶々の要もあるまい。(四)(=A橋氏は玄弉義淨旅行の當時の印度に、大乘經典弘通せざりしといふも、反對の事實餘りに明白なること。B學者が尼波羅に現存せる聖典に依りて、中印に大乘經典の流行したることを信ずるは、西藏の所傳に依るにあらで、歷史、字象學、聖典史に依りて、之を確信するものなること」に關しては

「兄は生の先達であるから(稿者曰く、そんなことは學術上どうでもよいことだ)、兄が指導(稿者曰く、元より敢て當らずだ)に反抗する樣なことはせぬ」

と言はれてある。甚だ恐縮の至りだが、この項も先濟むだと見てよからう。

殘餘の一項卽(三)だ。(=橋氏は羅什譯の般若原本は龜茲本にして、玄弉の本は于闐本なりと想像するも、其證を得るに道なきこと。而して玄弉の本が、中印本なることは適當に推斷し得べきこと」だ。之に對して橋氏は約三段計りを費して、答辯して居るが、今氏の辯護を、五項に分けて一々私議を挿むで見よう。

1　婆沙の證は當らず、橋氏は婆沙の文で、般若經典の印度已外の國から(橋氏がきめた)傳來したのを證明しようと試みた。然し、氏が援引した文は、其實般若經典には何等の關係も認めることは出來ぬ、全然他事を說明した文であるのだ。一體この文は、婆沙の第一百七十七に

ぬ。卽ネーベンザツヘである。大般若六百卷の中で、六度を並列して說いてあるのは、寶積などの影響を受けたと思はるゝ、第十一分已下極新しい部分に止まる。これとて寶積などとは、違つて第六を中心とした說き方である。だから、小部の精要だけ說いた般若には、丸で他度に觸れて居らぬものもある。文珠般若などがそれだ。更に手近いのは心經を見れば分る。「六波羅蜜多を說ける般若經類」では實際はないので、精密に云ふと般若波羅蜜を明かしたから、般若經類なのだ。然しこれはどうでもよいことだ。

2　般若大本が中印に盛行したる證　先づ積極の證明をして次に自家實驗の反證を擧げたら、大抵予が責任は濟むだらう。

第一は龍樹大論の記事だ。これは拙稿の中にも出して置いたし、大概の佛學者は知りて居る文だから、再抄はせぬ。この記載は、僧殿や支道林が强大なる助證もあることだから、先づ確實のものと見てよい。

第二には分別明の般若燈論である。論中所々に大般若第十一分已下の文が引いてある（論二、五一、六四、左一二△論五、署一、八一右九△論十一、暑一、一二左二〇等）。此部分は、大般若經の結論とも見べきもので、全體としての現形の大般若の存在を明言して居る程だから論理上、大般若が中印に盛行し、學者の翫索して居たといふ、强大な文獻的證據である。此論を飜譯した波羅頗密多羅は、記傳の明記のある通、勿論中印度の學僧である。

第三は西藏傳來の十萬頌般若だ（甘珠爾、第二大部一、フェーヤ氏甘珠爾解題、ギメー博物館年報所載、一九

と頌結してある。されば、薩婆多師と、婆沙已後、若くは迦國已外では、六度成滿が通説となつて居たことが明に判る、また曇無德部の聖書佛本行經（大衆部所傳の同經は幸に原文で傳はつてセナール教授が印行した）も、六度成滿説である。（其一例として本經降魔品、辰八、三六左一一行の文一つ見たら充分だらう）。大衆部も無論同説である。他の諸部はよく調べぬが、何れにしても三祇に波羅蜜を成滿するといふドグマは變るまい。

だから婆沙の本文はこの信條に就きて迦濕彌羅師は六度を四度に合せてあるが、他國の論師の中には、六度と開くのもあるといふ丈のことで、般若經典には毫も關係も緣故もない話だ。實際正直に此文を見たらこれ已上の意味を加へるのは、寧蛇足といふものだらう。

それから序だが、婆沙で外國師とあるのは、輕く迦國已外の國と見た方が、穩當ではあるまいか。婆沙では、迦國に對して常に外國師と並べ書くのが文例だ。前文も其一つである。迦濕彌羅國外師と書いた所さへある。理窟としても、前に擧げた通、六度成滿説は、婆沙編纂の當時既に曇無德や大衆部にあつたし。又有部の律文から推しても、一派の有部師は六度成滿説だつたらうと思ふから、無論さう見た方がよいと思ふ。更に政治史の方面から見ると、當時の印度は群雄割據、秦、楚、齊、燕、强を競ふといふ有樣であるし。迦國の地理的關係その民俗の鎖國的氣風から見ても、外國といふのを自國已外と見た方が面白い。

これも序で、どうでもよい事ではあるが、般若經はその名の示す如く、名詮自稱で、第六の智慧波羅蜜の深義を中心として闡明したものでこれが所謂ハウプトザツヘである。前五度は要するに引例に過ぎぬ。傍說に過ぎ

これでは十萬頌であるか、二萬五千頌であるか、明了ではないが、兎に角、涅槃の成立前に、中印にある大部の般若經が勢力があつたといふ强大牢固の證左である。

まだ證據調をすれば、ないでもないが、この位で切り上げて、反證の方を實驗の上から、一寸出して置かう。近時于闐を中心として、其附近の佛教古國から、豐富な古經典の梵文斷片が出るが、まだ十萬頌の斷片は一枚も出ぬ。二萬五千頌の方は予が證定した丈でも、五本ある位だ。足處で十萬頌が盛行して居たら、一枚位は出さうなものであるといふ考が浮ぶ。而して十萬頌の方は、二萬五千頌程同地で學習が盛でなかつたと云ふ假定も立てられる。奘師已前に于闐から十萬頌を支那に輸入した人のなかつたものも、茲で多少の解釋も付くことだ。それから十萬類の梵文に體から見ても、奘師入闐已前に、あれだけの梵文が、中央亞細亞で書ける筈がない。同地では、その國語の經文さへある位である、若同地でどし／＼般若のような經文の製造が出來れば、特別に自國語の飜譯は入らぬ譯ではないか。

尤當時斫勾迦に、十萬頌の諸大乘經が珍藏されてたのは確であらう。然し今增上寺に麗、宋、元の三大藏が珍藏せられて、之が世界的に評判のものであつても（丁度斫國の完備した珍藏が、當時佛教諸國の大評判であつた如く）、其根元地の宋や元や高麗で、一時この大藏が一部のみならず、多數の部數が諸大寺にあつたといふ事實には毫もさしつかへはない。寧ろ强大な存立證を提供するまでだ。珍藏したのと、「盛行」したのとは、少し筋道がちがふ。

九頁）。これは前稿にも出した通、印度傳來のものであるのは、西藏の史乘に明白である、管々しく茲にキヨツペンや、シユラギンドワイトなどを引張り出さなくてもよからう。

第四は現存の尼波羅梵本だ。尼波羅と中印との佛教史上の關係も、又何故獨り尼波羅丈に經典が殘つたかと云ふことも、略して前號で述べた筈だ。十萬頌の梵本には、公頌の様に古寫本がまだ出ない。卽八千頌のように、中印傳來の跋文があるのがまだ發見されないが、他の大乘經古寫本を類推して、中印傳來を證明出來やうと思ふ。

已上四條の外に、救度主の「印度佛教史」の中に、十萬頌の中印で盛に行はれたことが所々に見へる。これは西藏所傳の古傳說を蒐めたものだから、又一方の證據として、第五に數へて置かうか。――第一と第二の文獻的證據第三と第四の史的證據で大抵は充分だが。

今一つ、これは助證としてだが、第六證を提供しようか。これは彼の中印傳來の歷々とした、大涅槃經だ。此中に般若に關する非常に重要な文が一つある。

法顯譯（中印度本）

善男子。當憶念一切功德聚經。我說般若波羅蜜大經不二……（經卷五、盈九、二〇、右二行）

曇無讖譯（于闐本）

善男子。汝應當堅持憶念。如是經典。如我先於摩訶般若波羅蜜經中說。我無我无有二相。（經卷八、盈五、四〇右、二〇行）

合しない、寧ろ古譯と一致する點が多い若し玄奘の底本が、于闐傳來だつたら、五本ある中、どれか一つ位合ふのがなければならぬ筈ではないか。此處で一つ趣味のある假定が出來る。曰く。奘師は般若成立已後、那爛陀で發達した新本を將來し。于闐では、奘師訪問當時、否その後、于闐佛教の滅亡まで、尙成立當時そのまゝの、般若原本を維持して居たものであらう。こは印度では梵文に自由の増加添補も出來るが、于闐ではそれが不便であるといふ理由から來たのであらう。

4　奘師が智光に寄せたる報告には大乘經を含む

橘氏が引いた、玄奘答智光書は實際正直に本文には次の如く書いてあるのだ。橘氏の引き方が正しいか、否やを玆處で一つ讀者に客觀的試驗を乞はう。

△橘氏が引きたる文（本誌十、五、四二七上段）

已飜瑜伽師地論等。大小三十餘部。（陽二、三二——三二は三三の誤植なり評者）

△慈恩傳第七、陽二、三三、左五行

玄奘所將經論。已飜瑜伽師地論等大小三十餘部……

橘氏は肝要の「玄奘所得經論」六字を拔にして了つて此文を引き曰く「大乘經典に言及してない」と。好し。それならば、千萬歩讓つて、此六字は拔きにしてもかまはぬものと許して、「大小三十餘部」の中に、大乘經典がないかといふと實際含まれて居る。大に含まれて居る。約三分の一已上も含まれて居るのだ。之が『大乘經典に言及してない』と斷言出來るだらうか。

3　西域は印度をも意味す。慈恩傳の「於西域所得大乘經二百二十四部」の西域を橋氏は中央亞細亞と解して居るが、これは無理である。玄奘の西域といふ名詞は印度と中央亞細亞とを合併した名である。寧重きを印度に置いた名である。手近ひ證據は、「大唐西域記」の西域だ。この書が中央亞細亞限の旅行記でないのは誰でも知つてる通であらう。奘師は時に西域といふ字を印度に局限して使用した所さへある「玄奘往、以佛興西域、遺敎東傳」(陽二、二五、左一七行)などは、最適當の好例だらう。尙玄奘が、于闐滯在中の記事は、隨分詳しく慈恩傳に出て居るが、同地から經文を得たといふ記事は少しも見へぬ。一體玄奘三藏は、當時那爛陀出身の一大巨匠で、于闐では國師といふた樣な格で、其最新の學風を講義もする、之で學徒も提撕したといふ風である。勿論根本聖典ともいふべき、大般若の樣な大經を、此印度佛教の出店で、求めるなんて不見識なことは、奘師當年の意氣と、地位からしても、出來たことでなかつたらう。又若し于闐で萬事埒が明けば、其後智光法師に依賴する世話もなかつたらう。早い談が、本場の伯林とかライプチヒあたりで、獨逸文學の精華を研めた學者が、日本に歸るとして、歸途、獨逸文化の東漸した、山東あたりで、態々ワイマル藩版のゲーテ大集を捜したり、ハウプトマンの伯林新版全集を買ふ頓間な眞似はしまいと思ふ。常識は何にでも必要だが、學術上にも亦隨分入用だ。玆處でも一つ實驗上から反證を提供して、予が議論は無責任のものではないといふこと丈の證明をして置かう。

前項にも言ふた通、于闐から發見された五種の斷片を、玄奘譯の大般若第二分と精密に比較すると、少しも符

永徽元年（西、六五〇）
20 稱讃淨土經（一月）
21 分別緣起經（二月）
22 瑜伽釋（二月）
23 藥師經（五月）
24 百論本（六月）
25 無垢稱經（八月）
26 諸佛心陀羅尼（九月）
27 本事經（十一月）
28 百論釋（十二月）
二（西、六五一）
29 七佛名號經（一月）

30 十輪經（六月）
31 成業論（九月）
同三（西、六五二）
32 法住經（十月）
同四（西、六五三）
無譯
同五（西、六五四）
33 大乘功德經（六月）
34 順正理論（七月）
35 顯无邊佛土經（九月）
36 救濟苦難等三陀羅尼（九月）
37 持世陀羅尼（十月）

法師に出した報告の月は分らぬが、兎に角、この十年間の成蹟三十餘部の中には、大小と弉師が精密に斷はった通、深密もあれば 25 維摩もあり 30 十輪經もあれば 20 淨土の本經もあるし多數の祕密經さへある。それでも、果して「大乘經に言及してない」と言へれば、實に妙である。

弉三藏が智光法師に與へた書中、三十餘部とあるは、弉師が歸唐後貞觀十九年から初めて發信の年、卽ち永徽五年まで、十年間の譯經成績で、其詳細は次の如きものだ。之は少し面倒だが、開元錄第八から抄出して正的にクロノロジカル、ヲルダーにしたのだ。

貞觀一九（西、六四五）
1　佛地經（七月出）
2　六門陀羅尼（七月）
3　大菩薩藏經（九月）
同二〇（西、六四六）
4　顯揚聖敎論（一月）
5　大乘雜集論（三月）
同二一（西、六四七）
6　五蘊論（二月）
7　深密經（七月）
8　入正理門論（九月）
同二二（西、六四八）
9　天請問經（三月）
10　瑜伽論（五月）
11　唯識三十論（五月）
12　金剛般若經（十月）
13　百法門論（十一月）
同二三（西、六四九）
14　緣起聖道經（一月）
15　勝軍王經（二月）
16　般若心經（五月）
17　攝大乘論本及二釋（六月）
18　最無比經（七月）
19　佛地經論（十月）

は少々編輯者に氣の毒の樣な感があるのと、今一つの理由は、概論の四已下は丸で大般若の文を索引的に拔き出したもので、氏の文は此引文と比べると、五分の三若くは四に對する一二位のものであるといふ體裁だから、大般若の本文に當りて、一々其文脈や語句などを精細に正直に引文と比較せねばどうしても安心が出來ず、信用が置けぬことである。然るに今は大般若の全帙が手許にないから、この閑事業が一寸急には出來ぬことだ。歸りがけに「秋風」でも吹いたら、印度局か、ベルリン大學あたりで、一々本文に照らして見て、今少し組織的に批評的に分析的に引文を調べよう、實際の所、氏が文だけでは今手が付けられない。

付言——已上で予が學術的責任は終つたが、少し餘白があるから、一二項書いて置くことに仕らう。

第一に橘氏は荻原氏が大衆部に關する論は、「放漫」だと言はれるが、そんならば、其「放漫」の理由を批評するなり、攻擊するなりして吳れたら學徒の利益だらう。余は橘氏がこの責任を盡さぬ內は、荻原氏の論が何處が放漫なのか、少しも分らぬ。又橘氏が何の必要があつて予が論の答辭に、荻原氏に對する漫罵（氏が批評の出ぬ中は漫罵としてもよい）を持し出したか、其點も一向合點がまいらぬ。

第二、予は橘氏の文に對し（一）の項下で「典據放漫」も申さぬ積りだが橘氏が自分でそう極めるならば、別に辨解の必要もない。又予の「難詰」が「無謀」だが「輕忽」だが、それも橘氏一箇の御考だらうから、「返上する必要は余には少しもない。こんな感情上の談は畢竟どうでもよいのだ。

第三、橘氏は日本近時の學風が、予が出發當時と違ふから「忠告」するぞとの仰で、有難く頂戴する。然し

序に云ふが、この乾燥無味の表が、弉師の偉大な跡を仰ぐにつき、中々面白い資料となる。大抵一月一日に何か小部のものを譯したり、順正理の樣な大部のものを、起筆されたことなども、中々趣味のある事だ。

5　雜件二項　予は決して于闐と大乘經典との沒交渉のものであるとは何處でも言はぬ。言はぬのみならず、多少は此點に注意もし趣味を持つて、實際に同地から出る斷片の研究までして居るので、不完全ではあるが「新佛教」や「宗教界」に成績を常に出して居るのだ。迦織や朱士行の傳來も、去年の拙稿に書いて置いた。遮拘迦(橋氏の羅は衍字だ。そんな國はない)に、大乘の原文が現在して居たのは、大抵の學者が知つて居ることで、暫く見ぬから確な丁數は指せぬが、「義燈」だつたか「演秘」だつたか、唯識の末にも、この話が書いてあつたと記臆して居る。その「重大な史蹟」は今更言ふまでもないことだ。然し之が「重大の史蹟」であつても、予が前稿には何等の障害も影響しないことだ。

「一の法題の涅槃經を根據として、漫然其他の全體に論及する」ならば、無論「論理上の過誤」とか申すものに陷ゐるかもしれぬ。然し予は此項下に般若燈論も出し烏荼國王進獻の四十華嚴も出し、其上に幸原文のある寂天の集菩薩學論まで引張り出したのだから決して「一の法題の涅槃」限りではない筈である。それでも「漫然」たる論法で、「過誤」とか申すものを犯したとあれば、どうも致方もないこと〻諦める外はあるまい。尤「論理學者」ではない予には、一體何といふ「過誤」がか〻る場合に適用されるものか、一向存ぜぬことだ。

橋氏は氏が概論の四已下に拙評御希望の樣だが、この冗語で最早可なりの紙幅を濫費したから、此上といふの

于闐發見の大品般若斷片

（明治四五、六、宗教界第八卷第六號）

一

第十三萬國東洋學會が獨逸の漢堡（ハンブルグ）で開會された時、萬國中央亞細亞發掘調査會が殆ど世界學者一致の決議を以て成立して已來、中央亞細亞研究は玆に新しき一時期を劃して、頓に長足の進歩を遂げた。露國のペテロヴスキー蒐集にはどし／＼新しい珍奇な材料が加はる。英のスタインは更に第二回の探険を企てゝ于闐の大發掘に成功する。獨逸のグリユンヴエーデル、レ・コツクも次で二回の大旅行をなして高昌の故地から溢れむ計りの珍品寶什を伯林に持つて來る。佛のペリオは燉煌中心にこれも中々の獲物があると云ふ勢ひ、此學界の大潮勢は東方をも動かしたが、吾國でも西本願寺の探檢隊が龜玆や其他の故趾を訪ふて幾多の材料は少くとも吾國が各先進諸國に對し申譯の出來る程度には蒐集されて居るとのことだ。

スタインが前後二回の蒐集は既に幾多の報告も出て厖然たる大卷の出版さへ出來た、最近第三回の大成功で得た材料はまだ手が着かぬ様だが、これも遠からず續々報告が發表される事だらう、獨逸蒐集の資料はリユーデルス、ミユーラー等諸學者を先鋒として伯林學士會や大學の連中が鋭意の研究は報告毎に學界を驚かして居る、ペリオの集材はセナール門下の俊才やレギー派の學者が着々研究に從事中との事だから伯林アカデミーにまさか一

どう違ふのか、少しも書いてないから、「忠告」頂戴の仕方に困却する。また、今回の答辨に此の如き「忠告」が學術的にどれ丈の必要があるのか、夫れも余には少しも理解出來ぬが、兎に角、有難御禮丈は申し上げて置くことにしよう。尤日本に居る二三の同好者から、時々重要な研究成績――一週間ばかり前に嘲風老兄の四阿含南北對校に闘する雄大精細の成績を惠まれた――をもらうし、新留學の文科の連中からも、色々の談は怠らず聞いては居るが、何しろ五千里外の田舍に居る予だからどんな學風が日本に吹き廻はしてるか――㢜風か、戀風か、お多福風か將た又黑旋風か、然し何が吹いたとて、正直に精確に研究を續ければ一體よいではないか。

（五月二十六日）

出した。

二

高昌でも于闐でも其發掘された古經斷片を見ると何時でも般若の斷片が其多數を占める。かく般若の書寫が他經に比して卓絕して多數なのは、種々の原因もあらうが、一つは般若は他の大乘經に比して其讀誦書寫流傳を勸說することが强烈なのにも歸することだらう。大般若第一分の校量功德品の如きは數卷に亘りて鄭寧重復、讀誦受持書寫の功德を勸說する。此の勸說はやがて大乘佛敎徒の中に堅固な聖典崇拜の信念を與へて般若書寫が印度でも中央亞細亞でも盛大になつたのであらう。現に般若の原本が寶積や華嚴や大集の如き大乘集經の原文に比して殆ど完全に保全されて居るのは、實にこの般若の聖典崇拜の傳道が與つて大に力あることゝ考へる。而して今一つは般若は印度や中央亞細亞では大乘敎中最重要の經文の一つで大乘敎徒は先般若を學習するといふ風になつて居つた樣だ。卽般若は僧伽藍の敎科用書として必須的に用ゐられた樣に考へられる。こは單に各種の文獻によりて推斷されるのみならず高昌の古壁畫(グリユンヴエーデル所載を見よ)などでも此想像は確められる。

スタインが蒐集した般若斷片は金剛般若を除きて他は紙幅何れも濶大なもの計り、其大なるものは長邦尺の二尺五寸幅七八寸に至るものもある。而して文字は重に一寸四方位の立派な肉太なグプタで書いてある。而して其大部分は不思議にも皆大品般若卽二萬五千頌本である。予がスタイン蒐集中證定した十八枚の斷片は皆大品般若である。左に一寸證定表を出して置く。

着を輸する樣な不樣はあるまいと思ふ。而して吾國西本願寺の蒐集は未だに何とも世界の學壇に報告もなければ其研究の分擔さへも一向世に知られて居らぬ。一體折角集めた好資料だから寶の持腐れにせずに吾國で出來るのは力限り研究し、吾國で少し手の屆かぬと思ふものは英でも獨でも露でも相應な學者に遠慮なく使用させて學界の利益を計つたらよからう。英國でも露國でも現にそれを實行して居るではないか。兎に角西本願寺或は私人の大谷伯爵家では今少し其蒐集の材料を學術界に利用し世界的に文運開展の道を講ずる樣に願へぬものか。

少し記述が横に外れて聊か脱線の體とあるから已下本線に立かへり、扨已上申述べたグリユンヴエーデル蒐集の無數の珍品は敎授リユーデルスや博士ミユーレルの厚志とレ、コツク老爺の非常の親切で充分に見ることを得たが伯林滯在の時間が頗る短かつた爲に一つも手を着ける事が出來なかつた、ペテロヴスキーの蒐集とスタイン兩度の獲物は露國學士院の博士ザーレマンや大英印度局の博士ヘルンルの力で恩師ロイマン翁と共に其大部分は親く之を手にすることを得た。スタイン第二回蒐集の中入一切諸佛境界經斷片五十餘枚の如きは世界唯一無二の珍品であるが、大英博物館が些の惜氣もなく之をストラスブルグまで送達して自由に其使用を許す宏量と厚意とに至りては、流石は英國の英國たる故ある哉と思はしめた。

此等露國や英國から來た諸斷片は全體で約百五十枚はあらう。英國の方計でも中に阿含の諸經もあれば寶積大集に屬する諸大乘經もある。珍らしいものには大涅槃經の斷片や、母兒論師（マートリチエータ）が作つた一百五十讚佛偈や、同作の四百偈讚佛頌などもあつた、此等斷片證定に就きては在獨中時々通信をして『新佛教』や『宗教界』に小論文を

一寸此表を說明すると蒐集斷片は原と四種の寫本の散亂したるものなることが分る。此四本を研究上ＡＢＣＤと名づけた。斷片葉數は十七枚あつたのだが研究すると原一枚のが二片三片に分斷されたのが判つてＣ本の一葉は三片を一まとめにすることが出來、Ａ本Ｂ本ともに二葉の丸で色も換り狀態も頗る差異して居たのを、各一枚宛に合はすことが出來た。其で證定の結果十三枚に纒まつた。

卷頭（本書略之）に掲げた二枚の斷片は右の證定表中第貳位に位するＢ.²卽ち（二箇斷片の綴合）と及び第六位を占むるＣ.³にして前者は56×18cmにして邦尺長約一尺八寸四分、幅五寸二分の大本、後者は更に大にして57×20cm卽長一尺九寸幅六寸六分の大形紙にして原本の第三百三十三葉あることは丁付で分る。紙質堅牢彈力に富み、字畫甚だ鮮にして墨色も極めて良好だ。

三

Ｂ2の方は二片の斷片を合したもので最初發見した時は小片の方は著しく赭色强く且つ紙質も甚しく揉まれた爲に色合地質とも一見大片とは全く別樣の觀を呈して居た。これは寫眞でも略判ることゝ思ふ。大片は比較的に良好に保存せられて色合も小片に比し淡赭色である。字はブラフミー體で此體は主として高昌付近から出る經文に多く使はるゝが于闐でも頗る其使用が廣い。Ｃの方は完全な一葉で古文字學者の所謂グプタ眞體といふので書いてある。此體は中央亞細亞から出る古寫經には普通の字體で、嚴重な寫本は大體之で書いてあり版本にも此體を用ゆる。ブラフミーが行書若くは草書に當ればグプタは方に楷書でも當るだらう。字體から云ふと何れも唐已

于闐斷片（スタイン蒐集）			契合せる支那譯（玄奘譯を取る）			契合せる現存梵本（ケムブリッヂ）
蒐集番號	證定番號	狀態	品名	卷數	縮藏（日）	貝葉紙數
150 VII 8	B_1 (原132)	左半葉	第十七念住品	四一五	1.65b19	93a1—
150 VII 40 150 VII 14	B_2	約完	第十八—第十九 修地品	四一五及 四一六	1.73b3	101a10—
D III 7	D_1	完	第十九出住品	四一六	1.76b3	104a2—
150 VII 2 150 VII 25 150 VII 27	C_1 (原205)	完	第二十三無邊際品	四二一	2.3b14	115a4—
150 VI 14	C_2	右半葉	第三十七隨喜品	四三二	2.53a15	175a8—
150 VII 21	C_3 (原333)	完	同	四三三	2.55a13	177b7—
150 VII 27	A_1 (原357)	完	同	四三九	2.55b13	178a7—
150 VII 34	A_2	完	第四十三東北方品	四三九	2.82b1	206a8—
150 VII 28	A_3 (原307)	央部	同	四三九	2.83b4	207a8—
150 VII 3	A_4	約完	第五十二眞如品	四四六	3.26b15	238b12—
150 VII 19 150 VII 7	A_5	不完	第五十三不退轉品	四四八	3.35a3	250a9—
150 VII 35	D_2	央部	第七十二修學品	四六五	4.16a20	324b7—
150 VII 15	D_3	央部	同	同	4.19a1	325a8—
計十七葉	十三葉		九品			

(5) palabhyaté tyantaviśuddhitām upādāya. ……u 〔palabhyate. dharmadhātaur anupalabdher nôpalab-
hyate. tat kasmād dhetor na hi Sabhūte dharmadhātaḥ kenacid upalabdher nôpala

(6) labhyate……upalabhyate. peyālam…… 〔stathatā 'nupalabdher bhūtakoṭy anupalabdheḥ śūnyatā
'nupalabdheḥ prajñāpāramitā 'nupalabdher nôpalabhyate. tathā' dhyātma.

(7) śunyatānupālabdheḥ yavad abhāvasvabhāva śunyatā anupalabdher nôpalabhyate. evaṃ smṛtyupast-
hānānupalabdher nôpalabhyate. peyālaṃ-yāvad aṣṭadaśavedanikabuddhadharmānupa

(8) labdher napalabhyate. tathā śrotāpannânupalabdher nopalabhyate. peyā 〔laṃ. yāvatsammyaksaṃ-
buddhânupalabdhen nôpalabhyate. tatathā śrotāpattiphalânupalabdhernôpalabhyate peyālaṃ yava

(9) d anuttarāsamyak saṃbodhy anupalabdher nôpalabhyate…… 〔dânupalabdher nôpalab hyate. yāvad
a abhisaṃskārânupalabdher nôpalabhyate. tat kasmād dhetos tathā hi Subhūte na

(10) nabhisaṃskārôpalabhyate anupalabdher nôpalabhyate. prathamā bhūmy anupalabdher nôpalabhyate.
yāvad daśamā bhūmy anupalabdher nôpalabhyate atyantaviśudhitām upādayêti

(11) tatra katamā daśa bhumayas tadyathā suklavipaśyabhūmi gotra 〔va bhūmis aṣṭamakabhūmir darś-
anabhūmis tanuchūmir vbītarāgabhūmiḥ kṛtakṛtya bhūmiḥ pratyekabuddhabhūmir bodhisatvabhūmis〕

前のものである。

前者は證定表に出した通り大般若四百十六卷修地品の一文で、後者は同く四百三十三卷隨喜品の文である。無叉羅、竺法護、羅什の古譯では大品、分品の工合が大分差異するが何れにも其文が存在す。此等異譯と丼譯とに就ては嘗て『新佛教』に般若各品の對合表を出して置いたから、之に依ると容易に異譯の文を檢出することが出來る。

茲に今二斷片の音譯を出さう。イタリックで出て居るのは補足した箇所なのだ。括弧中の數字は行數を示し音譯中の〔は二斷片の分界である。

(1) patti phalaṃ nopalabhyaté tyantavi śuddhitam upādāya evam sakr 〔dāgāmiphalām anāgāmiphalam arhantvaṃ pratyekabodhir anuttarāsamyaksaṃbodhir nôpalabhyaté tyantaviśuddhitām upādāya

(2) Yā tathā sarvajña sarvakarajña…… 〔nôpalabhyaté tyantaviśuddhitām upādāya. tathā nirodha saṃkleśo vyavadānam anabhisaṃskōro nôpalabhyaté tyanta

(3) viśuddhitam upādāya. pūrvbanto nopalabhyate tyautaviśuddhitānupādā 〔ya. evam aparāntaḥ vart-tmāno nôpalabyaté tyantaviśuddhitām upādāya. pūrvbānto nôpalabhyaté tyantaviśuddhi

(4) tam upādāya. evam aparāntaḥ vartamaṇo nopalabhyaté tyanbaviśudhi 〔tām upādāya. tathāgatir-gatiḥ stitir upapattir nôpalabhyaté tyantaviśuddhitām upādāya. evaṃ hā nirvṛddhir nô

tasya rūpasya

(10) saṃbhavaḥ saṃvidyate. yasya ca saṃbhavo saṃvidyate sa khalv abhāvo na câbhāvaṃ abhāve śakate. pariṇāma

四

讀者は已上の音譯を讀みて試に之を無叉、羅什、法護の譯と較べ更に之を玄奘の新譯と對比すると其間に頗る出入する所多きを認むるだらう。更に順序上玆に現存梵本を出して比べると是にも大分差異した文句の多いことを發見する。然し梵文の對校は事稍繁雜にも亙るから今は之を省略することゝして、唯大品般若の于闐斷片は支那の諸譯及現存梵本に比して種々異點のある一本なることを申し置けばよからう。

大體大品般若は古來各教派若くは各論師が夫々異本を傳へたものと見へて、無羅叉は、九十品、羅什九十品玄奘八十五品といふ分品の異があり、羅叉と羅什は其分品の數が偶合して居ても其內容は種々差異して居る。法護は後半缺損の本であるが其前半現存の部分其他の諸譯と比べると分品の有樣が著く差異する。現在の尼波羅所傳梵本の八大部分の分卷法は比較的新しい方法であるが、全帙の小品を廢して八部に分つことは是又大に漢譯と異なる點だ。かく分卷の差異があると共に其文々句も各本とも著しい出入がある。或經で省略されたのが他經には詳しく、甲の品では縷々叙述したものを乙の品では一筆に方言的の「乃至」Peyālam などいふ便利な字を利用して節略して仕舞ふといふのは決して珍しくない。而してこは單に大般若計りでなく、金剛般若の樣な小部の般

(1) sarvākārajñatā. asaṃmoṣadharmatā. satatāupekṣaviharitā. aparyāpannā kamadhatau rūpadhātā

(2) vārūpadhātau yā cāpannā nāsāv atītānāgata-psatyutpannêti. tat kasmād dhetor athāpi tad apary-

āpannatvā-

(3) devêṣāṃ dharmāṇām evaṃ pariṇāmana py aparyāpanna yeṣu dharmeṣu pariṇāmayati. te pi dharm-

āhy aparyāpa-

(4) nna yo py asau pariṇāmayati. te py aparyāpannāḥ ste ca buddhā bhagavato paryāpannāḥ tāny

api kuśalamūlā

(5) ny aparyāpannāni. te pi śrāvaka-pratyekabudha aparyāpannāḥ tāny api teṣāṃ kuśalamūlany aparyā-

(6) pannāni. ye ca dharmā hy aparyāpannās te nuâtītā nānāgatan na pratyutpannā iti. sacet punaḥ

bodhisa-

(7) tvo mahāsatvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caranāṇa evaṃ jānīte, yed rūpam aparyāpanna kāmadhātau

rūpadhā-

(8) tav ārupyadhātau. na tad atītan nānāgatan na pratyutpanna na ca tac chakyaṃ nimitayogenā vā

upalambhayo-

(9) gena vā pariṇāmayituṃ m evaṃ vedanasaṃjñā-saṃskārā vijñānam iti. tat kasmād dhetor na hi

II. Yathābhūta　10　二　二　損

之で見ると于闐本は玄奘本と大體に於て合ふ樣で叉治地品 Bhūmiparivarta が第十八品であること（無羅叉は第二十一品、羅什は第二十品）も玄奘本と合ふ。それならば、于闐本は全く玄奘本と同じかといふとさうではない。（二）に東北方品の中に大般若經が佛滅後各地に宣傳せらるゝ豫言がある。于闐斷片では最初に南方に宣傳せられ次で北方に弘通せらるゝことを記してある。卽ち般若の流通區域は南北兩地のみである。然るに玄奘の譯では最初南方に次で北方に最後に東北方に弘傳することゝなり、羅什の譯では南、西、東、北といふ四方に豫言されて居り、獨り無羅叉の譯では于闐斷片の如く南北二方になつて居る。是れは于闐斷片が一面古譯と同じといふ證明になる。

玄奘譯と合つたのは例のブラフミー草體の斷片とスタイン著中に出て居るグプタ體の一斷片で、無羅叉譯と符合して居るのはA3の斷片これもグプタで書かれた大幅の斷片である。すると一方には于闐にも異種の大品があつたと云ふ假定も出來るが、更らに叉一部分新譯と合しある點では舊譯の俤を存する一の異本があることゝも言へる。此二假定は更に他の有力な證據が出るか、完本の大本が發見せられねば今は何れとも斷言することは勿論出來ぬが、于闐には古來諸種の大品を有して居たことは事實で弗若檀が將來した無叉羅譯の底本となつた梵本と、法護が譯した祇多羅所傳の底本とは其の本國が何れも于闐であるのに分品からして相違してゐるといふことは譯經史上明瞭なことだ。されば第一の假定が或は事實に近いものかも知れぬ。

若でも日本傳來の梵文と、于闐から出た古寫經と比べると大分其間に出入增減のあることが判る。この事は何時か金剛般若に就きて序がある時述べやう。今于闐の大品般若は漢譯に比して如何なる差異あるかを示す爲に二三の例を出して見る。

（一）治地品の中に苦集滅道等十一智を說いてある。之れを諸本と比べると左の表が出來る。

現在梵本	無羅叉	羅什	玄奘	于闐本
1. Duḥkhajñāna	1	1	5	┐
2. Samudāya°	2	2	6	缺
3. Nirodha°	3	3	7	
4. Mārga°	4	4	8	
5. cheda=〔Kṣaya〕	5	5	9	損
6. Anutpāda°	6	6	10	┘
7. Dharma°	7	7	1	1
8. Anvaya°	8	8	2	2
9. Saṃvṛtta	—	9	4	4
10. Parijaya〔Pa a.itta〕	9	10	3	3

加へるといふ、所謂文明――但し、或は白人どもの間だけの空約束かも知れぬが――の今日でもこんな體裁だから、昔時の亂暴は隨分であつたらう。佛教隆盛の時であつたが、關に入りて書を收むる蕭何の様な特志家は、先づなかつたと見える。斯く考へて來ると、支那で梵本を探すのは全然絶望である。

明治三十五年の秋であつた。河南(ハノイ)で東洋學大會が開催された。此時日本から南條文雄、高楠順次郎兩氏が出席したが、途に廣東の諸大寺院を訪うて、梵本搜索に大に心を勞した樣だ。併し何分にも學會の參列が主で、古經探求の方は、寧ろ附帶事業に屬した爲、此種の蒐集に必要なる諸準備、例せば日清兩國政府の保護斡旋といふ樣なことも、十分に行屆いて居らず、その爲、不幸にも再度の探求といふことに延期されて仕舞た。爾來國威の隆々として勃興すると共に、日清兩國の交通いよ〳〵頻繁となり、一二有力の宗派は、支那傳道に力を盡す樣な形勢になつたが、古經探求などゝいふ學術的事業は、まだ中々著手されさうもない。隨て支那漫遊の佛教家も少からざるに關らず、こんな方面に注意する人は、あまり多くない樣に見える。

然し歐洲では、夙に此方面に眼眸を向けた人がないでもない。千九百四年伯林大學の教授ピツシェル氏が伯林學士院(アカデミー)の公報で、梵文雜阿含經斷片につき一論文を發表したが、此中支那殘存の古梵本につきて、少しく論じてゐる。

自家の經驗から、彼(グロオト氏)は極めて普通なる佛典の外、少しく珍奇なるものを支那で求むるは、大困難である。否寧全然不可能であると明言した。此意見はよくビール氏の說と符節を合して居る。然るにヲツ

天臺山珍藏の古梵本につきて

（明治四一、一〇、東洋哲學第一五卷一〇號）

一

現時、古代西域の地方から續々珍奇な古書斷片が出る。梵文で書いた中阿含や雜阿含なども、其小部分が發見されるといふのだから、自然之と聯想して、支那にも恐くまだ古代の梵本が殘存してゐるだらうとの見込は誰にでも一寸附くことだ。後漢より已來元の始まで絕えず梵典の飜譯が行はれ、特に此中、近代に屬する宋時代の譯經事業は頗る大仕掛のものであつたのだから、四百餘州の何處にか、多少の古梵本は、尙殘存して居るだらうとの希望も、强ち無理ではあるまい。

然し一方から考へると、歷代革命が頻繁であつた支那の樣な國も澤山はない。佛敎渡來このかた幾朝、歷代の結尾と開卷とは、何時も大抵火と劍と慘酷な流血で書いてある。而して彼の飜經事業といふものは、概ね政府の所管で、其原本は、何れも帝室寶庫に秘藏された樣だから、革命の兵燹は、容赦もなくこの珍寶を劫灰に附して仕舞たのである。刊本の儒書すら、日本にのみ現存して、支那に亡失して居つたものが少なくはなかつた事實もある。まして古謄本類の滅盡に決して不思議はない。三四ケ月の前であつた。英國の某書店の目錄を見ると、大淸翰林院藏の永樂大典の端本が二三冊賣物に出て居る。學藝や、宗敎などの物件には、戰爭中にも適當の保護を

學の知識が毫もない人の手に就つたのだから、字體の錯誤は隨分ある。而も全體は寫してはないから、隨分判讀には骨が折れるが、然し前後對比して考へて讀めば、大體の意味は取れる。これで見ると右の寫眞は原本の第二十四葉目の裏面である。原本は通途の古寫經のように五仙米に四十仙米の長い形で、文は五行に書いてある。左右の兩側は一方ならず侵蝕され、上下の兩端も破損して、不正形をなして居る。他の一葉の臨模は本梵典最後の一葉である。この寫眞と臨模を製した人は、獨逸の一宣教師である。前記二十四葉の臨模の裏面に、此原本の表帙である木片上の記載した漢本の手寫と、此梵本につきて極めて重要な獨逸文の手記がある。中央に七字の梵字があるが、これは甚しい錯寫で到底讀むことは出來ぬ。全體の形は大略下圖のようだ。

破修造白　七
六祖眞進××××××　種
灌
数×評王　頂
拾

Holzdeckel

Mehrere Blatter
verkrummert.
jedes Blatt hat
5Reinen. Buckseite
beschriehen, bei 1,
2.4, 6—20,
mit 2½ bei 3,
garnicht bei 5.

20 Blatter, jedes auf
einen dunnen Brettchen
in welches nach die Form
des Pa'mblattes
eingeschnittenist. Blatt
5ist von anderer
Hand schlecht
geschrieben (von einer Chinesen ?)

との獨支の手記を邦文で譯すと「二十葉。各葉は貝多羅葉の形に截りたる木片なり。第五葉は他手に由り拙劣

トー、フランケ氏はグロォト氏の著書を紹介するに當りて、左の如くに確言した。『支那に於ける諸大寺に於ては、一の印度原本も發見されぬ。然し浙江省天臺山に保存する梵文古文書（？）だけは別である』ピッシェル氏が疑問點を附した如く、予も當時は實にフランケ氏の言を疑うた一人であることを自白する。然し幸にも氏の言は事實であつた。今や、予は鈴木大拙君の厚意で、この稀有な梵本の寫眞を見るの好運に會した。

鈴木君がまだロンドン滯在中のことであつた。ある人から此古寫本の寫眞を借覽したとの通信があり、次で該寫眞を手に入れたとの報を得た。同君がパリに遷つてから遂に此珍奇な材料の送致を受けて右に關する報告書を同君に書いた。此に揭ぐる一小篇は、右の報告書を多少變更增訂したものである。

二

先順序として、材料の記載から始めよう。材料といふても、縮寫の寫眞一枚それに原本大の鉛筆臨模が二枚ある限りだ。寫眞は原本を約九分の一位に縮少したものだが、非常に不完全不明暸の寫法で、とても、讀むことは出來ぬ。唯隱約模糊の字形で梵文であるといふことが判る位のものだ。擴大鏡火に照らすと、かゝる寫眞の常で、尙模糊曖昧になつて仕舞う。是だけでは、折角の材料も、少しも役に立たぬ。然し原本大の臨模の中、一枚は此の寫眞の副本なので、對照すると多少は解讀が出來る。尤此手寫は梵語學の素養が殆どなく、且つは古字象

の結文の葉を譯して題したものである。

梵文は左の通りである。

iti paramārthasevā nāmāḥ ṣaḍ-darśanāvagracirā （?） tatvāvalokora-sevā samāptā ||

kṛtir iyaṃ Śrī Puṇḍarīkapadānān ||

likhitam Rāmadatteva ||

Śubhaḥ ||

如是、眞諦修習と名くる六教（六派哲學）を斷破し（?）眞性觀照修習するもの竟る。是吉祥白蓮華の造る所。羅摩達多之を寫す。吉祥。

已上梵文の音寫は、前項記載した如く、實に不完全な手寫を基として作つたものであるから多少の過誤は免れぬことゝ思ふ。然しなるべく忠實に原寫に從うて、私意は少しも加へてない。其故正確な梵文法から見たら、隨分妙な所もあるだらう。それには一つは又此の如き反文法の文句は古寫經奥書の常で、日本古代僧徒の漢文の樣なものだから、其つもりで讀まねばならぬ。avagracirā という字は、固より梵語にはない。原寫通に讀むだのだ。實際は後句の顯正的の眞正觀照に對する。破邪的の文句だから原本には降伏とか斷破とかいふ、正しい字があつたのだらう。然し今は原本を見ぬことだから、何とも私考で字を變へることは出來ない。

著者の白蓮華論師の名は、漢譯藏經の中には見當らぬ。類似の名を有する人に蓮華戒（Padmaśīla 若くは Pu-

に書せらる（恐く支那人か？）多くの葉片は損壞せり。各葉は五行宛なり。裏面に書せられたるものは、一、二、四、及六より第二十葉に至る。二行半あるものは第三葉。全然文なきものは第五葉」漢文の方で修習の下に一字は頗錯誤して解讀出來ぬから、今疑を存して省いて置いた。

この手記の中で葉號のことを明言してあるが、これは恐く亂雜不順序に匣中に藏してあつたのを、そのまゝに番號を付けたらしい。何となれば、この裏面に二行半あるといふのは實は前記の臨模最後の葉で二十何葉といふものでなくてはならぬ。それから、第五葉といふのは、恐く第一葉であるかも知れぬ。梵文謄本の第一葉は大抵裏面から書き初めて、表面は空白を殘すのが常だから。

一つ此梵本で面白いことは、貝多羅葉を用ひず、木片を截切して造つたことだ。ずつと古代の寫經には、隨分樺皮を貝葉形に截つたのがないではない。然し此時代（後に詳說する）の寫經にかゝる類は至て稀だ。そこで此梵本は貝多羅の出來ぬ地方。卽中央亞細亞に出來たか。若くは印度僧が支那滯遊中に寫したものであらうといふ想像がつく。字體から見ると、どうも後の考の方に傾きたいが、現本の本質を見ねば明言は出來ぬ。

三

この梵本は正に大乘の論部に屬すべきものである。但し惜いことには漢譯が存在せぬ。前に記述した木製表帙上の『白蓮王造。眞諦修習。×破六敎』十二文字は實に梵本の著者と、題號とを示したものである。則前顯最後

のだから、其餘波で恐く支那に輸入されたものであらう。或は當時入宋の梵僧が支那で書いたものと考へられる。これは前にも申した通り木質や墨色を見ねば斷定することは出來ない。

五

本書は題號の如く、Ṣad-darśana 卽六派の哲學を論評擊破して大乘の妙理を宣顯するを主意としたものであるから、大乘研究者には非常な重要な書である。特に大乘論部の中で六派哲學を總括して、破斥を加へたのは全くないのであるから、益本書の切要なるを認める。要するに金剛針論、破外道小乘四宗論などゝ並べて對外教理上極めて必要な書であることは明かである。

第二十四葉の法數の驢列と、最後の葉の結文とは詩體で出來て居る。卽十一字の「帝釋杵」Indravajra といふ韻法で出來て居るのだ。

⏓–⏑|––⏑|⏑–⏑|–⏓

全體の音寫を、一寸玆に揭げて譯を加へて見よう。第一は第二十四葉である。橫線のある字は、原寫眞を苦讀したものだ。其餘は臨模と寫眞とで對照したのだ。寫眞は前に記した如く細微糢糊で讀めぬのだから、大體は臨摸の方で記したのだ。

〔第一〕THA PKA

ṇḍarīkaśīla）あれども、恐く別人だらう。寫手の暹摩達多は印度で極普通な名で鈴木、安藤、渡邊といつた様なものだ。ケムブリッヂに一千三百八十年（尼波羅紀元五〇〇）の日附ある古寫經に、同一の寫手の名が見えるが、字體から比較すると、別人らしい。書後の清淨の結語は清淨あれ、吉祥あれの略語だ。通途古寫經には Śubhan astu と具さに書いてある。

四

この古梵本の年代は古字象學の力で容易に判定することが出來る。卽ある特別な字體から、鑑定して直にその年代をきめることが出來る。その字體といふのは、古寫經學者の所謂鈎體の梵字といふので、十世紀の終からそろ〳〵始まり、十二世紀に至りて完全の發達をしたものだ。十三世紀になると、最早別體が出來て、この體は止むで仕舞つた。鈎體といふのは、梵字の右側上端に、鈎があるのだ。𑖝 ta 𑖨 ra 𑖎 ka といふ風だ、此種の梵本で、現存するものはロンドン亞細亞協會の華嚴行願梵本 Gaṇḍavyuha で、尼波羅紀元二百八十六年＝西暦千六百六十六年の手寫だ。ケンブリッヂにもカルカッタにも此時代の貝葉古梵本が數種ある。（Bühlers Indische Paleographies. 53 Bendalls cat. paleographical introduction P. XXII 及附圖を參照せよ）

故に天臺山古梵本は、西暦一千百年頃から同千二百年頃までの間に寫されたものと斷定することが出來る。此時代から少し前は支那では譯經事業非常に隆な宋初であつて、梵文の蒐集及其獻本といふ様なことが時々あつた

（第三行）……四所成の趣是生の義……（第四行）……六所成是吉祥五所成及四所成、色四所成、供養……三所成の德及三所成の信……

（第五行）歡喜識塵及淸淨の四所成大初に於ける七種姓及義、此故に最初有生五所成あるべし、玆に又最初六所成及四所成あり、作福……

〔第二〕（第一行）有の解脫は唯一、種々の因に由りて瑜伽の損失あり、自他の益の爲に前（?）勝願を作す、佛陀の神力に依りて死者の益に資す、見是……（?）及有情の、一切處に於ける種々道中の最勝者、佛陀の大慈悲心。如是眞諦修習と名くる六見を斷破し（?）眞性觀照を修習するの書竟る。是吉祥、白蓮華の所造なり。羅摩達多之を寫す。吉祥。

音譯も邦譯も、不完全なる手寫を基として作成したものだから、無論原本に照らすと、幾多の誤りがあるに相違ない。又自分でも之では安心して公表は出來ぬが、兎に角一時の間に合として、この梵本の如何なるものなるかを示さんが爲に、揭げたばかりだ。文中の法相に三所成の德とあるのは、恐く數論の三德らしい。其他も、吠檀多や勝論の法數で當らぬものもないが、本文を見ぬ間は、これだけにして註解を略した方が安全であると思ふ。

六

（第一行）……kābhira aprakāśya hi catuṣ……

（第二行）……namā……diśu……

（第三行）……niṣyati……pa……sama……catuṣkaṃ gati tat jarârtha……

（第四行）kameva ṣaṭkaṃ tat maṃgalā pañca tatnā catuṣkaṃ | rūpya-catuṣkaṃ pratibhāgam……guṇa-
trikaṃś ca trikam atra śradohaḥ | samd……

（第五行）to pi | ānanda.—vijñāna-rajas ca śubhāś catuṣka ādaukula sapta cârthaṃ ‖ asmādikaṃ bhūta-
japañcakaṃ syāt tatrâdi ṣaṭkañ ca tatas catuṣkaṃ | karonti puṇyā ◡ — ◡ ⏑̲ | ⏑̲ — ◡ —

〔第二〕

（第一行）—kaṃ bhava-mokṣam eka | anekanetor api yoganaṣṭāḥ karoṇti purvvaṃ（？）sva-parârtham
āśāṃ ‖ buddhârubhavena gatānām arthaṃ dṛṣṭiḥ yam ayam tu（？）tathā jaranā | anekamā-
rgâ-grayino sama—

（第二行）—tāt | cittā mahākarunikā ginasya ‖ iti paramarthasevā nāmaḥ ṣaḍ-darśanâvagracirā（？）
tatvâvolokanasevā samāpta ‖ kṛtir iaṃ

（第三行）śrī Puṇdarika pādāṃ ‖ likhitaṃ Rāmadatteneva ‖ śubhaḥ ‖

〔第一〕　第二十四（第一行）……不可表現……四……（第二行）……

天臺山珍藏の古梵本につきての補訂

（明治四二、三、東洋哲學第一六卷三號）

拙稿天臺山珍藏の古梵本（東洋哲學四十一年十月、第十五卷第十號）を送致して後、少しく補足もし、訂正もしようと思ふ點があつたので、再本誌の餘白を恩借する心算の矢先に、大宮孝潤氏の付記が拙稿と同時に公刊されたので、拙稿に補ふ所頗る多く、また誤解した點も訂正されて一方ならず、讀者と共に益を得たことである。依りて、茲には一面大宮氏の厚意に對して、感謝の意を表すると共に、四五項簡略に補訂して置かうと思ふ。

（一）鈴木大拙君が去冬此地に來遊された際、天臺山梵本に就きて種々談話もしたが、其中二つの重要なる事項は、是非茲に補足する必要がある。第一は拙稿起艸に使用した臨模と寫眞とを造つた、基督宣教師の名が知れたことだ。この人は前號に記したる如く、獨逸の傳道者で、名をハックマン（Hackmann）と呼び支那で功績を擧げた後、今は英京で支那古學の研究をして居る。多分後來はレッグやビールの後繼者として、大に東洋學壇に盡すだらう。去年の牛津の宗教史會にも出席した。第二には原物の一斷片を實見したことだ。これはハックマン牧師が、寫眞や臨模をした際に、天臺山の僧が贈つたとの事で、ハックマン氏は、之を鈴木氏に轉贈したのだ。何れも幅二分から三分長四分乃至六分の極めて小な斷片だが。字體も明了に見へ。書寫した原材——貝葉——の古きも判る。予は之を實見して、天臺山僧の亂暴なるに喫驚せざるを得なかつた。随て、基督牧師のよく人心を

已上は極めて不完全の叙述であるが、如何に此梵本が貴重のもので、且つその上、極めて切要のものであるといふことは、略明瞭になつたであらう。隨て其原本全體を得ることは實に吾々研究者の切望である。

聞く所に依れば、天臺縣中學堂に那人の教師が招聘され、今又大宮孝潤氏の盡力で、天臺山の一學僧は、本邦に留學し、將に斷えなんとする四明荊溪の學燈を再華頂に輝さんとするとのことだ。さすれば大宮君其他同山と親交ある人々の盡力で、該原本を一時研究上、帝國大學か其他適當の學校に借りることも出來ぬとは限るまい。ましで其全體の鮮明良好の寫眞を得ることは、さして難事でもあるまいと思ふ。

拙稿は、結論として、かゝる實行的勸誘の性質を有して居るのだから、之を天臺宗所屬の雜誌で公表して、先づ天臺山と古來關係の深い同宗諸大德の勞を仰ぎたい考でもあつたが、「東洋哲學」の方が、其性質が普偏であり、且此件につきて當然一臂の力を煩したいと思ふ。大宮氏は鏘々たる東洋大學出身者でもあるので、遂に安藤弘氏を通じて本誌の一隅を拜借することにしたのである。（明治四十一年八月九日稿）

（四）大宮氏は天臺山梵本が、其價値予が期せし程でないといふ疑であり。又其內容を外にして、古文書としての――卽パレヲグラフキーやフキロロギーの方面から――の本貝葉の探求は、寧ろ滑稽であるといふ御考らしく見へるが、予は此點は全く同氏と反對の考である。この貝葉が、今支那に於て知れて居る唯一の貝葉であるといふ點だけでも、探究の價は梵學者に取りては確にある。況やこれが、また漢譯中に其名を見ない白蓮華論主の著であつて、其內容がまた六派の見解を破斥したといふものであれば、其探求の熱心一層を加へねばなるまいかと思ふ。梵學者でもなく佛敎徒でもないハックマン牧師が寫眞も撮り手寫もし其零碎の斷片まで得た、學術的熱心と眞摯の態度には、吾々は斷じて劣つてはなるまいと予は確信して居る。（一月十三日稿）

收攬するの妙なるのも感心した。大宮氏がこの梵本を借り出すのは、大困難であるとの考を公表されたが、斯る事情なのだから、少し腕のある佛教徒が行つたら、存外容易に原物を借り得ることも出來ぬではあるまいかと更に考へた。

（二）　ハツクマン牧師の斷片と、大宮氏の實見記で、原本臨模の獨逸文付記が曖昧簡潔な自分限の手控であつた爲、不安心に誤解したのが、訂正されたのは何より喜しい。茲で拙稿（一八頁）を左の如く訂正する、「二十葉各葉は貝多羅葉の形に裁りたる木片の上に〔安置せらる〕」括弧の中の字を入れると本文が明了になるのだ。然し之は大宮氏の注意がなかつたら、未だに判らずに居つたのである。事がかく極れば、一九頁の第一行已下は、不必要の穿鑿であることになるから、この一段は削除する。而して予が斷定した、本貝葉の年代はこれでます〳〵明確になつた。

（三）　大宮氏は第二十四葉（こは予が所謂第二十四葉にあらずして、明記ある第二十四葉なり）を別物であるといふ注意であつたが、これは承服することは出來ぬ。この部分は寫眞があつて字體も明に判つて居る。第一、此部分と、最後の葉との韻法が同一の帝釋杵（インドラヴジラ） ⏓–⏑｜––⏑｜⏑–⏑｜–⏓ であること。其字體が同く鉤體であることなど多少古謄本に經驗のある人には斷じて疑ふべからざる證據である。大宮氏は多分、他の葉（ハツクマン牧師が第五葉とした拙劣の寫法の）と、之とを混同されたのではあるまいか。此等は其内原物さへ見ることが出來れば、明了になることだ。

原文が、如何なるものなりやの疑問は、依然として存しぬ。唯雜含の梵文に例同して其梵文ならざるべからざるを類推するを得るのみなりき。

去歳予は大英印度局のヘルンル博士の囑に依つて恩師ロイマン翁と共に、主として于闐古經斷片の解讀及證定に從へり。此證定中、幸にして阿含諸部の梵文斷片を發見することを得たり。此等諸斷片は、其量に於ては伯林公刊のものに比して、甚しく遜色あるを免れず。而も其性質に於ては、優に之に勝りしものなるを喜ぶ。何となれば、この新に證定せられし諸斷片は、單に雜含の諸小經を含むのみならでまた中含及長含の諸經をも包含すればなり。讀者乞ふ、左に列擧する所を見よ。

（一）長阿含經に屬するもの

（1）阿吒那胝經 Aṭānaṭiya Sūtra——此經はパーリ長含第三十二に納めらる。漢藏に於ては闕如せり。其別譯は、唐龍朔三年（西曆六六三）福生三藏、慈恩寺に於て譯出せるも、今其本を失へり。開元錄の九之を記す（縮結、四、七六、右）。但秘密部に納めたる、毘沙門天王經は正に此經と、大集月藏分及孔雀王經の一部を雜採して、成れる密經なれば、今經の如何なるものなるかは、同經に依りて見るに難からず。毘沙門天王經の研究につきては、拙稿「眞言秘經の起源及發達の實例」略之を盡せり。稿「哲學雜誌」明治三十九年、五月號已下に出づ。

（2）衆集經 Saṃgīti Sūtra——本經は、長含第八卷に納む。また施護の別譯あり。パーリに於ては、其位置

新發見の阿含諸經の梵文

（明治四二、二、新佛教第十卷二號）

漢傳四阿含の原文は、果して如何なる國語にて書かれしか。是學界に於ける重要なる一問題なりき。然るに西域古佛教國の發掘に、今や漸くにして此宿題の解決を下さむとす。

阿含の原文が、其一部は少くとも梵文なりしことを證明した事は、伯林大學教授故ピッシュル博士なりき。博士は一千九百四年、普魯西學士院の會報、第二十五、八〇七頁已下八二七頁に亘る一論文に於て、高昌の故地より發見せられたる、版本新阿含の斷片十八葉を公にしたり。此刊本は、其一端に漢字を以て、明に「新阿含五卷」云々の文を記せり。

博士の論文の中には、パーリとの比較甚精細を極めたるも、漢譯との比較に至りては全く之を缺きたり。予乃ち之を漢譯の二本と比較せしに、其吻合、符節相契ふが如きものあり。文は、實に別譯雜含第十一卷、縮藏辰帙五卷第六十八葉左第六行よりして同七十葉左第十五葉に亘るの諸經を含む。新譯の雜含に於ては、第三十四卷より第三十五卷を通じて、其契同含せる文を見る。縮藏にありては、辰帙三、第一百三葉の左九行より一百六葉の右九行に此の諸小經を納めたり。

此發見は佛教聖典史の討究者に對して、實に最感謝すべき貽なりき。而も唯是雜含の一部にして、他の諸含の

證して餘りありといふべし。この重要なる文は、十誦律の第二十四卷（張四、五三右）に見ゆ。有部が于闐に盛なりしことも古記の明に載する所也。

（二）中阿含に屬すべきもの

（3）優波離經 Upāli Sūtra——パーリと漢傳と、この經實質に於ては、全然一致す。但其偈頌の順序、彼此錯落して、異を示すを認むるのみ。新に發見したる梵文斷片は、全然漢譯と符合す。パーリの原文は、ロイマン氏中阿含全部の譯中、之を獨逸に飜し。フェール氏は一千八百八十七年、之を佛蘭西に譯して、「ジュルナルアシアテック」を公にしたり。參照頗る便なり。

中含に屬すべきものには、此他に猶鸚鵡經あり、轉化增大して大乘經の形を取りたり。

（4）首迦長者說業報差別經 Sukhagṛthaspati Ilśita karw avipāka sūtra——を玆に數へ置くを便宜とすべきが如し。この經、宋天息災の別譯あり（南條博士明藏目錄英譯に、この經を、兜調經及鸚鵡經の異譯とせるは誤なり）前半は全く中含の鸚鵡經と同じ、其後半に於て、類似の業報因緣を枚擧して增大布衍したるを異とするのみ。此經舊來の目錄家、皆小乘藏に攝す。經文中に發菩提心の句あり。天息災の譯には、十萬淨土の語さへ見ゆ。乃ち知るべし。大乘敎育家が、中含鸚鵡經の文を增廣して、以て自家傳道の用に供せし經なることを目錄諸家、後半を熟讀せず、輒前半の鸚鵡經と全同なるを見て之を小乘經に編入したるなるべし。

（三）雜阿含に屬すべきもの

阿吒那胝經に次ぎて第三十三を占む。暹羅國王陛下御刊の長含第三卷の外、歐洲に於ては、未だ公刊せられず。今リスデキド翁孜々として、その校訂に力むるを聞くのみ。斷片は二葉あり。一は三法を臚列するの一部、他は四法を枚擧するの小分なり。この梵文を將りて、之を漢巴兩含に比するに、著しくパーリに近似するを見る。是頗る研究を要すべき事項なりとす。

已上長含二小部斷片の證定よりして、確定したる事實は、于闐に於ては、漢傳及南方所傳の長含已外に、別に一部の長含を有したること是なり。蓋しパーリの阿吒那胝經は、于闐發見の同經に比し、大に異なる所あり。而して漢經は全く之に缺きたり。漢は衆集經を有するも、之を新發見の梵文に比するに、著く法數の出入あることを認め、又之をパーリに較ぶるに、全く契同するを見るを得ざれば也。

パーリの長含が上座部一派所傳のものなるは、略學者の認むる所。漢傳の長含が何れの部に屬するかは、載籍の明記なしと雖、曇無德部所誦のものなるべきは、略推し得べきが如し。何となれば、同經を譯出したる佛陀耶舍は、其十誦に通ずるにも關らず、曇無德律を支那に弘傳したる人なるを以てなり。事は出三藏記其他の記載に照して朧げながら之を窺ふを得べし。于闐所傳の長含は、之に對して有部所誦のものなるべき乎、有部に於ては、其の律の正文に、病僧慰藉の方規として、讀誦すべき諸經（主として長含の）を定め、中に第五に梵網經を擧げ第六に大會經、第七に阿吒那胝經を示したり。この經の讀誦を勸めるは、卽正に同經を含める長含の存在を

るべし。長含漢本の梵本は、未だ出でず。而も其一種の梵本の西域に現存したりしことは、今や明瞭となれり。獨り增一に至りては、未だ其原本を得ずと雖。中央亞細亞古學の漸次進步するに隨ひ、其一部を發見し得むこと必ずしも空望にあらずと信ず。

已上は固より匆卒稿を走らしたる豫報のみ。記する所、唯諸經名題の臚列に止りて、之とパーリ及漢本との精細なる比較、之に依りて論定し得たる、漢巴兩傳阿含の新舊。其教理上及言語學上の討究の如き、一切玆には之れを略しぬ。他日幸に身閑に、健稍復せむとき、大英印度局に報じたる、全篇を訂正して、本邦大方の識者が是正に訴ふる日あるべきを望む。今は唯讀者が、此の如き缺陷不備の蕪文に依りて、幸にも阿含諸經の原文が、梵文なりしことを、少くとも默會し得たらむには、稿者の願や足れり。故に一切例を擧げ、證を列するの煩を避けぬ。讀者希くは諒せよ。

（明治四十二年一月三日、この無艸を以て故山識と未識の師友に對する新春の賀辭に代ふ）

（5）月喩經 Candrapana Sūtra——古譯雜含に於ては此經辰帙五、三十七紙左に出で、新譯にては辰帙四、三十七葉左に收めらる。施護の別譯ありパーリ文と大同なり。梵文斷片は精密に漢譯と合す。

（6）慈悲を說ける小經 Maitracitta Sūtra——此短小の一經は、唯新譯雜含の第四十七卷第十五番に出づ（辰帙四、七十五葉右、十行至十四行）。パーリ之を缺き、別譯の漢本亦之を見るを得ず。

（7）自恣經 Pravāroa Sūtra——この經名は、漢譯經には題せられざるも、別譯の攝頌(ウツダーナ)に、明に其名を見る（別譯卷十三、辰五、八二、右一行）。古譯に於ては、第十二卷（辰五、七六左）新譯に於ては第四十五卷に、此經を見るべし（辰四、六四、左）。法賢譯の解夏經は、その別飜なり。竺法護の新受歲經は、前段少しく序頌を加へし外、全く本經と合す。パーリ雜含の pavārona Sūtra また大同なり、但頌文漢文に比して少なし。漢は七頌あり。巴は唯四頌あるのみ。法護の譯のみ、パーリと同じきを異とす。梵本斷片は、精確に漢本と合す。

（8）隨勇尊者經 Upasena Sūtra——パーリにありて、此經律及增一に出づ。其內容漢と大同なるも、取材頗殊に、偈頌又大に差異す。漢本は新譯雜含第九卷（辰二、四九、左）に出づ。別譯には此部分佚せり。施護の別譯あり。又根本說一切有部毘奈耶の卷七に此經を見る。

此經は孔雀王經の起源をなしたる、パーリ增一、第四法の Pattakamma vagga の第六十七經と聖典發達の上に、至密の關係あり。密經發達の研究上、至つて重要のものなり。

中雜二含諸經の梵文は、漢と最よく符合す。漢本がこの梵本から飜せられしことは寸毫も疑を挿むの地あらざ

め、ウエーバー、バワー等の材料は勿論。近時の大仕掛のスタイン、グリュンヴエーデル、ラコツク等の持ち歸つた貴重の珍品は、今や東洋學者に新學問の創立をさへ要求して居るが、此中、佛教梵文は、實に其主位を占めて居る。勿論、この方面から出た聖典は、何れも斷片で、稍滿足に近く存在したのは、ケルン教授の法華經、ヘルンル博士の金剛經及び予が發見した理趣分、入諸佛境界經位のものであるが、其珍たるに至りては、遙に尼波羅を凌駕して居る、例せば譯經史で古代に屬する首楞嚴三昧經の斷片の如きものさへ、中央亞細亞から出て來た。

此等の梵文を、今便宜上、天臺の五時の判教を借りて類別して見ると、先づ華嚴には十地品と行願品の全部が現存し、賢首品は其大部分、大乘集菩薩學論の原書に引かれてある。阿含は從來南傳パーリの原文のみと想像されて居たのが、ピツシエル教授が伯林アカデミーの會報で、雜阿含の梵文を發表し、予もまた長含、中含の梵文の存せることを近時證明し得た。この略報は、本稿を書く十日計前に『新佛教』を借りて公表して貰うことにした。多分本稿出版と先後して、讀者の是正を乞ふことゝなるだらう。方等部には金光明、楞伽の樣な有名な經文の完全に殘存するのを首とし、此頃大集や寶積の斷片が續々出て來る。般若は五時中で最も完全に近く原本の保存せられたもので大般若約十分の九は原本がある。それにまた夥しい斷片が近頃于闐から出て來る。

それから法華だが、これはビュルヌーフの佛譯が、大乘佛教研究の劈頭に出たゞけありて、學者にはよく知られた原文の一つだ。最近、ケルン翁と南條老師同版の原文の第一冊が、露都から出た。

大般涅槃經の梵文斷片

（明治四二、三、宗教界第五卷三號）

（一）

ブリヤン、ホートン、ホツデソン氏が、大英の敏腕無比の事務官として、尼波羅に滯留中、英雄の胸間自ら箇の閑日月を藏めて、地學に動植に、少なからぬ貢獻を學界に致したが、就中佛教研究の方面に於ては、確に一新紀元を開拓せる恩人の榮冠を捧げても差問はあるまいと思ふ。氏が苦心蒐集した大乘佛敎の梵本が、歐洲に知れて已來、ビユルヌーフの大著が出でゝ、宗教學界の學壇を驚かし、ウエーバー、ミユーラーなどの碩學が、之に呼應して、梵文佛教文學の研究漸く熾になり、ライト博士のカトマンヅーに於ける再度の聖典蒐集となり。三たびベンドール教授の遠征と爲つて、同氏の有名な佛教梵經目錄が公刊され、大乘佛敎の原書の現存せるものは、大抵學者に知らるゝ樣になつた。ペータースブルグ大學の、佛教聖典出版會では、此等の聖典を孜々として今公刊して居る。かくて印度に於ける法寶貯藏所の一大龍宮――尼波羅固有の聖典スヴヤンブープラーナで、龍と因緣の悧しは、今やその珍寶を惜氣もなく槪ね學界に獻じてしまつた。

之に對して一方、古西域の祕密の鐵塔――于闐と高昌を南北の中心としたその廢滅した佛塔――零落荒殘の古殿堂の跡――が、今や打開されて、珍貴の資料が、少からず學界を驚して來た。露國のペトロヴスキー蒐集を初

がら出來ぬ。卽、これ丈では涅槃四十卷の全體に亘りて、聖典史上の新材料を仰ぐといふことは出來ぬが、然し、少くとも之で、涅槃大經の文體や、語法の一般は知れる。佛教聖語や、聖典史の討究家に取りては、決して趣味のない斷片であるまいと思ふ。

（二）

證定された斷片は、大分腐蝕剝落した一枚の紙である。字體は西域北方、主に高昌を中心として行はれた、奇古のブラフミー文字である。時代は凡そ盛唐の前後に亘りて盛に書かれたものだが、紙に符號で第一百六十二葉といふ丁付がある。法顯の六卷涅槃では、縮藏で盈九、三十葉の左十五行から同三十六葉右第三行に至る文を收め、曇無讖の譯に照らすと、盈五、四十九葉左、四行より五十葉右四行に相當する文となる。內容は豐富多趣な涅槃に特有の譬喩で、大涅槃の流行及滅盡を說明し、次で四乘の同一性を解說した頗る面白ひ文である。

斷片は前に敍述した通、隨分斷裂したもので、字體も往々明了を缺いて居つたのを、師が卓越した字象學と梵語の力で、大體は先づ通讀し、之に余が微弱な漢譯よりの對照で、兎に角左に揭ぐるまでの文を得たのだ。原文の寫法は、隨分正雅の梵語に乖いた所もある。中央亞細亞寫經家に特有の點も備へて居るが、これ等は今一切略して、なるべく普通梵文に從ふこととした。卽中央亞細亞の梵經では、Sarva（古梨本や印度の刊本では Sarv-va と書くが）を、Sarvba と書くを常例として居る。loke を loki とプラクリット詩體に書いたり、涅槃點（ヸサルガ）や

かく列べて見て、涅槃に來ると、哀い哉、此本四十卷の大冊中、其原文としては、一葉の斷片すら世に知られて居らなかつた。前に擧げた、大乘集菩薩學論の中には、大乘諸經の文を夥しく引用してあるが、之にも涅槃の文は見へない。卽この悉有佛性の妙義を說いた最重要な大乘聖書原文の文體や語法は、丸で知られて居なかつたのだ。恐くペータースブルグや伯林の豐富な集材中に、多少其斷片があるかも知れぬが、誰も今まで證定して發表した人がなかつたのだ。然るに今や、幸にも其の一つの斷片が、意外にも發見された。

去年の秋であつた。ヲツクスフオードのヘルンレ博士から、大英印度局のトオマス氏が、研究した、西域古文書の斷片十數葉を、恩師ロイマン先生宛に送致して來た。トオマス氏は英國で今敏腕の西藏學者で、該研究の中に、金光明や法華などは證定が立派に出來、特に驚くべきは、西藏譯の寶積から、寶梁聚會の一斷片を確定したなど、頗るの技倆であつたが、尙見當がつかぬものが、數枚あつたので、言語學上の是正を恩師に請ふと共に、證定の方面では、予が取るに足らぬ助言を乞ふとの事であつたのだ。玆に於てこの未定の斷片を調べて見ると、大集部に屬するものが四枚――賢護分のが一つ、賢幢分のが一つ、日藏月藏各一枚宛――と、舍利弗陀羅尼經(或は無邊門陀羅尼、九種と異譯が、藏中に存在して居る)のが一葉。何れも珍品であるが珍中の珍であつた。それが卽大涅槃經の一斷片であつた。

この斷片は、宛も雲間に蹤跡を沒した金龍の鱗片が、僅に一枚地上に落ちた樣なもので、是れで騰雲駕霧の雄姿全體を見ることは固より無理な注文であらう。天地を震撼し、六合を動搖する大活用も得て伺ふことは遺憾な

annegha-nirgan:ānavad dak ṇapathe praviṣya mahāparinirvāṇaṃ sarbe sandhāvacaradharme……
dakṣiṇapathakāṇāṃ bodhisattvaṇam mahāsattvāṇaṃ saddharmavināśam ājñaya āsanna-hemauts-vṛtta-
meghavat Kāsmirāṃ praviṣya pṛthivyāṃ antardhāsyate : sarva-nahāyāna-sūtravaipulya-paramâmṛta-
saddharmântardhānāni bhavisyantîti.Tad idānīṃ ayaṃ sūtra-lābhaḥ tathāgat' ājñêyaṃ āgatā saddhar-
mântardhānā iti bodhavyam bodhisattvair mahāsattvair narakujñaraiḥ.

8. Âha sma : akhyatu Bhagavans tathagata-pratyekabuddha-sravaka-bodhisattva-dhatu-nirnana-karanam
visa am vispastarshan sarva-sattvanam sukha-vijnanaya.

9. Bhagavān avocat : tad yathā kulaputra gṛhaspair vā gṛhaspatiputro vā bhūtasya vrajasya nānāvarṇ-
ānām gavām svāmi syāt : tatra nilā gāvaḥ syuḥ : tā gā eho gopaḥ pālayet ; ataḥ sa gṛhaspatiḥ
kadācit ātmano devatāṅimittaṃ [tā gāv duhyāt

（梵文邦譯）

（1）大般涅槃經、この經の主題なる如來藏を熱烈なる心もて速に學得せむと欲する善男子若くは善女人に依りてぞ如來藏に於ける精勤爲さるべきなれ。

（2）申さく。是の如し薄伽梵、是の如し薄伽梵。我は如來藏の修習よりして大丈夫の性に通入し、得證し及び現覺しぬ。

（3）宣ひぬ。善哉善哉善男子如是當に世間隨順と見るべき也。

空點（アヌスワラ）を略去したりしてあるのを、今は普通の書き方に改めてある。

1. 〔Mahāparinirvānam〕 mahāsūtram tathāgatagarbhaṃ saṃdīpakatvāt kṣipraṃ Sūtrasthānam adhigantukamena kulaputreṇa vā kuladuhitrāya vā tathāgatagarbhe 'bhiyogaḥ karaṇīyaḥ

2. Āha sma : evam etad Bhagavan ! evam etad Bhagavan ! Tathāgatagarbha'bhavitaṃ yādy ahaṃ pauruṣaṃ praveśitā p abhāvitā pratibodhitāś câsmi.

3. Āha sma : Sādhu ! Sādhu ! kulaputra ! Evam eva draṣṭavyaṃ lokânuvrttyā.

4. Āha sma : no hîdaṃ BhagaΛan lokânuvartanā.

5. Āha sma : Sādhu ! Sādhu ! kulaputra ! Evam gambhīrena vṛkṣa-puṣp' āhara-bhramaravat dharm' āharena bhavitavyaṃ.

6. Punar aparam kulaputra yathā maśaka-mūtrena mahāpṛthivī aniva tṛpṣyate atisvalpatvāt ; evaṃ maśakamūtravat svalpam idam mahāsūtram loke pracariṣyti : anāgate loke saddharma-vināśa-parame mahāpṛthivī-gataṃ maśaka-mūtravat kṣayam yāsyati. Idaṃ saptamaṃ nimittam : saddharmântardhânasyāśeṣāni santi sa-nimittānîti jñātavyaṃ kuśalena

7. Punar aparam kulaputra yathā vasāsu dhvastāsu prathamo hemanta-māsaḥ śarad ity ucyate : tasyā śaradyupāvṛttāyā meghā tvarita-tvaritaṃ abhivrsyâpagacchanti……mahāsūtram tvarita varṣaṇaśar-

(1) 若善男子。善女人。欲得疾成如來性者。應勤方便。修習此經。

(2) 迦葉菩薩白佛言。善哉世尊。我今修習般泥洹經。始知自身有如來性。今乃決定男子也。

〔缺譯〕

〔缺譯〕

(3) 佛告迦葉。善哉善哉。善男子。當勤方便。學此深法。如蜂采華。盡深法味。

(4) 譬如迦葉。蚊蟲津液。不能令此大地沾洽。如是善男子。當來之世。衆惡比丘。亂壞經法。無量無數。如高旱地。非此大乘涅槃經。所能津潤。所以者何。正法滅盡相現故。

(5) 復次。善男子。譬如夏末冬初。秋雨連澍。溫澤潛伏。如是善男子。此摩訶般泥洹經。我泥洹後。正法衰滅。于時此經法布南方。爲彼衆邪異說。非法雲雨之所漂沒。時彼南方護法菩薩。當時此契經。來諸罽賓。潛伏地中。及諸菩薩。及諸一切摩訶衍方等契經。於此而沒。哀哉。是時法滅盡相。非法雲雨盈滿世間。修習如來恩澤法雨。護法菩薩。人中之雄。皆悉潛隱。

〔缺〕

〔缺〕

〔缺〕

(6) 爾時迦葉菩薩。白佛言。世尊諸佛如來聲聞緣覺性無差別。唯願廣說。令一切衆生。皆得開解。

(7) 佛告迦葉。譬如人多養乳牛。青黃赤白。各別爲群。欲祠天時。集一切牛。盡穀其乳。……

(曇無讖譯)

(1) 是故善男子善女人。若欲速知。如來密藏。應當方便。勤修此經。

（4）申さく。吾薄伽梵。吾實に世間に隨順せず。

（5）宣ひぬ。善哉善哉。善男子、樹花の（味）を攝取する蜜蜂の如く。甚深なる法（味）を攝取せざるべからず。

（6）復次に善男子。蚊子の尿が、其極少量なるよりして、決して大地を濕潤し能はざるが如く、此大經又蚊子の尿の極少量なるに似て、世に行はれむ。而して未來の我妙法滅盡の最初に、蚊子の尿の如く、大地に沒入せむ。是を第七の相となす。妙法滅盡して餘りなし、是等諸相當、能く知悉すべし。

（7）復次に善男子例せば逝く年の中第一の冬の月を秋と名く。此秋近接したる時、雲急々に雨を注ぎつゝ行進す。……大般涅槃の大經、急に雨を注ぐ秋雲の如く南方に入りて、一切契語方……住南方の諸菩薩摩訶薩の……妙法の滅盡を知りて、近冬時に起る雲の如くに、迦濕密羅に入りて地中に隱沒せむ。（而して）一切大乘經典、方等無上甘露の妙法隱沒し去らむ。諸菩薩摩訶薩人中の大象今此經を得たる時、便如來の宣し給へる妙法の滅盡來れりと覺るべし。

〔缺〕

〔缺〕

〔缺〕

（8）申さく。願くは薄伽梵。如來緣覺聲聞菩薩法界の不異なる理、其明了の義を、明かに解說し玉へ。一切衆生の安樂を受けむがために。

（9）薄伽梵宣はく。善男子、例せば一の長者、若くは長者子の、種々の色の牛の一群に牧主たるものありとせよ。茲に諸の靑牛ありとせよ。此等諸牛を一の牧者ありて、牧すとせよ。ある時、彼長者、ある自家の神事のために、彼の諸牛の乳を搾取すとせよ。……

（法顯譯）

（三）

頗拙劣な譯ではあるが、已上の比較で、新に發見された涅槃の梵文が、如何なる性質のものか、其聖典史上の地位は如何であらうかといふことなど、大略思考がつくことゝ信ずる。

一面梵文は、著しく曇譯に合ふ様な點もある。梵の6は特に之を示して居る。此他梵の3、4、もよく曇譯と合ふが、法顯には缺けて居る。然し、曇譯の8 9 10卽文殊師利と世尊との問答が、梵本には法顯の譯と同じく存在して居らぬ。この文殊師利の現はれて來たのは、文段の前後から見ると、如何にも突然で、其後代に挿入された跡は、確に認められる。茲で梵本は、多少の相違はあるが、大體に於ては、寧ろ法顯譯に近いものであるといふことが認められる。

今斷片の葉數と、法曇二譯との大小を比較すると、この考は一層明了になる。この斷片は前にも記した通り、第一百六十二葉目であるから、之を第一葉から數へ、各葉を前掲の對譯の結果から、漢譯縮藏の行數に改算し、一葉が平均八行半に當るとして、二譯の開卷から當文までの行數と比較すると、

曇譯　46葉數×2表裏×20一葉の行數＝1.840行

法顯　34葉數×2表裏×20一葉の行數＝1.360行

梵本　8½×162＝1.377

（2）迦葉菩薩白佛言。如是如是如佛所說。我今旣有丈夫之相。得入如來密藏故。如來今日始覺悟我。因是卽得決定通達。

（3）佛言。善哉善哉。汝今隨順世間之法。而作是說。

（4）迦葉復言。我不隨順世間也。

（5）佛讚迦葉。善哉善哉。汝今所知。無上法味。甚深難知。而能得知。如蜂采味。汝亦如是。

（6）復次善男子。如蚊子尿。不能令此大地沾洽。當來之世。是經流布。亦復如是。如彼蚊尿。正法欲滅。是經先當沒於此地。當知卽是。正法衰相。

（7）復次善男子。譬如過夏初月名秋。秋雨連注。此大乘經典。大涅槃經。亦復如是。爲於南方諸菩薩故。當廣流布。降注法雨。彌滿其處。正法欲滅。當至罽賓。具足無缺。潜沒地中。或有信者。或不信者。如是大乘方等經典甘露法味。悉沒於地。是經沒已。一切諸餘。大乘經典。皆悉滅沒。若得是經。具足无缺。人中象王諸菩薩等。當知如來無上正法將滅不久。

（8）爾時文殊師利白佛言。世尊今此純陀。猶有疑心。唯願如來。重爲分別。令得除斷。

（9）佛言善男子。云何疑心。乃至爾時世尊卽說偈言。本有今無。本無今有。三世有法。無有是處。善男子。以是義故。諸佛菩薩聲聞緣覺。亦無差別。亦有差別。

（10）文殊師利讚言。善哉善哉。誠如聖敎。我今始解。諸佛菩薩聲聞緣覺。亦有差別。亦無差別。

（11）迦葉菩薩。白佛言。世尊。如來所說。諸佛如來菩薩聲聞緣覺性無差別。唯願如來。分別廣說。利益安樂一切衆生。

（12）佛言。善男子。諦聽諦聽。當爲汝說。譬如長者。若長者子。多畜乳牛。有種々色。當令一人。守護將養。是人有時。爲祠祀故。盡構諸牛。……

摩竭提國。巴連弗邑。阿育王塔。天王精舍。優婆塞伽羅。先見普道人釋法顯。遠遊此土。爲求法故。深感其人。即爲寫之大般涅槃經。如來祕藏。願令此經流布晉土。一切衆生。悉成平等如來法身。義熙十三年（西、四一七）十月一日。於謝司空石所立道寺（建業の）出此方等大般泥洹經。至十四年（西、四一八）正月一日校定盡訖。禪師佛大跋陀。手執胡本。寶雲傳譯。于時座有二百五十人。（出三此記第八、結一、四七右）

この事實は法顯傳にも見へて居る。

是以遠涉乃至中天竺。於此摩訶衍僧伽藍。得一部律。是摩訶僧祇律……又得一卷方等般泥洹經。可五千偈（法顯傳、致六七、右）

法顯の後に、智猛が再度この婆羅門の家を訪ふて、同梵本を得て、之を凉土で飜譯して、二十卷とした。智猛は宋文帝の元嘉十四年（西曆四三七）に蜀に入つたので、注文も隨て內地に流行することゝなつたのだから、飜譯は凉の亡ぶる四五年前、永和の初めに出來たのであらう。この譯は貞元編輯の時、既に亡失して了つた。卷數から見ても、恐く法顯の譯に比して完本であつたらうと推察される。智猛の事蹟は、出三藏記、其他の聖典目錄に出て居る。

曇無讖所譯涅槃は、其原本が于闐から出て居て之を凉で錄譯したのだ。これ曇讖の傳に明記してある通りである。

讖以涅槃經本品數未定。還國尋求。値其母亡。遂留歲餘。後於于闐更得經本。復過姑藏。譯之。續爲三十六卷

此得商の中、漢譯の方では、開卷と閉卷とに、多少の空白を存し、又譯號卷數などの行數を控除せねばなるまいから、第一から四十行、第二から二十行差引き、梵本の方でも、少くとも品目の初めの空白で二十行は除去すると見ると、

曇讖　1.840—40=1.800

法顯　1.360—20=1.340

梵本　1.377—20=1.357

已上は固より概算ではあるが、法顯譯と梵本は少くとも斷片の部分に至るまでは其形體には大差がない。否大約全同であると云ふてもよい。之に反して曇讖の譯は、四百五十行計多い。換言すると、この斷片の大きさの梵筴で、百枚ばかり多くなつて居る。以て其增廣の非常なるを知るべしだ。單にこの文殊師利問答の一段計りでなく、他にも幾多の增加があつて一目に知ることが出來よう。

勿論、梵本にも、大分漢本と異つた點がある。法滅盡の相を、特に第七相と標したことなどは、全く法、曇二譯に知れて居らぬことだ。故に梵本は、大體法顯譯と其大さは同じいが、內容には多少の出入のある一の異本であることは言ふまでもない。

玆で少し、法顯と曇讖の將來した梵本の根源地を調べる必要を感じて來た。法顯の梵本は中印度で獲たので、經の後記に明記してある。

は、直に般若の中にある豫言を想ひ起させる。般若では滅後に大般若經が先づ南方に傳播し、次第に各方に傳はりて、東北方に盛行するといふことになつて居る。涅槃の方は、大體嚴肅悲愴の音を帶びて傳播といふよりも、隱沒といふ方を主にして說いてあるが、考へは同一らしい。大集の賢護分にも同樣の懸記が見へる。特に迦濕彌羅を擧げてあるのは頗注意すべき點であるが、迦膩色迦王の歿後間もなく行はれた、訖利多族の滅法を指したものか。または蓮華面經に出て居る大族王（西域記にもラージャータランギニにも暴虐の惡王として出て居る）の佛法破壞を意味したものか。尙大に研究を要すべき所だ。道朗の大涅槃經序にもこの文を基礎として、

佛涅槃後。初四十年。此經於閻浮提。宣通流布。大明於世。四十年後。隱沒於地。至正法欲滅餘八十年乃得行世。雨大法雨。自是以後。尋復隱沒。至于千載像敎之末。雖有此經。人情薄淡。無心敬信。遂使群邪競辨。曠塞玄路。當知遺法將滅之相。

と書いてある。多分印度三藏の傳說を叙したのであらう。本文の注釋として、大に面白ひ所がある。涅槃大經が佛滅後四十年後に、俄然隱沒して、正法千年の終に、再たび世に現はれるなどいふことは、聖典史家の輕々に看過すべからざる傳說であらう。

二つには西域地方には漢文の涅槃も存在して居つたことだ。千四百四年に、ペータースブルグアカデミーのザーレマン教授が摩尼教聖典の一斷片を高昌の故地に得て、之を刊行したが、この斷片は、ある支那文を書いた故？紙の背面を利用して寫されたものだつた。右の漢文につき今まで誰も注意するものもなかつたが、實は之が

焉（出三藏記十四、結一、八四右等）

玄始三年（西、四一四）にこの譯經事業が始まつて、七年の星霜を閱し、同十年（西、四二一）に大成した。これが所謂北本の涅槃である。出三藏記の第八に見へる作者未詳の大涅槃經記に依ると、曇讖三藏は、智猛の將來した本を河西王の命で、飜譯し、之に自ら探求した梵本を合糅した樣に見へるが、この記事は前記の紀錄類に照らすと、少しく年代が齟齬する樣だから、今は取らぬこととする。

之を要するに、法顯譯は中印度本が底本で、曇讖は于闐本を用ゐたのである。玆で涅槃の梵本が印度から西域に流傳する間に、種々の增加や、布衍が行はれて二者の間に、大小廣略の相違が出來たことが、直に見當が付かう。而して新發見の梵本は、方に此增加や布衍の行はれんとする初期に屬するものであるといふことを具體的に示して居るではないか。第七相などの小さき挿入文は、實によい證據であらう。他語で言ふと、新發見の梵本斷片は曇譯に比べると、比較的原始的の形體に近ひものであるといふことが判斷出來る。

（四）

言語學や字象學の方面から、此斷片につき言ふべきことも、まだ殘つて居るが、それは一切略して、これで先づ大體の報告は了つたのだが、餘談として、一つ二つ書き添へたいことがある。

一つは斷片記載の內容に就きてだが、涅槃經が佛滅の後、先づ南方に傳播し、次で迦濕彌羅で滅すると云豫言

することゝ思ふ。而してこの新研究につきて、最も有力の利器は、卽漢譯の藏經である。予はこの稿を終るに臨みて、漢藏を講究するに最有利有益の地位にある日本佛教徒に、今一段の奮起と勉勵とを切望するの情、太だ切である。古代の諸三藏が千辛萬苦、骨を粉にし身を碎いて歷訪探求した古西域の聖典は今や雲の如く學人の前に其研究を要求して居るのではないか。

大涅槃經第十九卷梵行品の一文で、阿闍世王の臣、實德（或は實得）が、詭辯を弄し、删闍耶毘羅胝子の邪義で王が殺父の大逆を辯護するを記載したものだ。字體は盛唐時代の立派な行書で、最謹嚴にかゝれてある。摩尼教徒は、この經典を横に中央から切斷して、一部の裏面に自教の聖教の聖典を書寫したのである。

かゝる宗教史上一種の趣のある斷片を見ると先づ摩尼教の中央亞細亞に於ける勢力が考へられよう。佛教の寺院を占領して、その經文を奪ひ、自家の聖典を書寫する材料に利用したものだらうとは誰でも考へよう。然し實際、摩尼教は中央亞細亞に對して、こんな勢力のあつたことは嘗てなかつた。同教徒が、西域諸藩王の醫官として、佛教徒の寛容により、自家の範圍で靜に其宗教を信奉することが出來たことは、グリュンヴェーデル博士、其他が證明する所である。されば、西域に存在した溢るゝ計りの許多の佛教聖典が、現時、バイブルが夜店に暴されるが如く、端本となり反故となつて、坊間に出たのだ。摩尼教の連中、其節約主義より、或は、之を買ひ入れ、或は之を佛教徒の友人から賚つて、自家の聖典を寫すに用ゐたと考へる方が穩當であらう。兎に角、西域には梵本の外に、支那譯も頗る多く存在したことは、この一枚の斷片でも明了であらう。古西域は實に古代佛教文明の一大ステーションであつたのだ。

西域古聖典學は、今や漸く呱々の聲を擧げた計りで、之が成人の曉までは、まだ幾多の星霜を要する事であらうが、この折研究が佛教全體に及ぼす影響の大なることは、已上の涅槃梵文の斷片一つでも、識者は必らず首肯

る成功に依りて、遺憾なく充足することを得たり。博士が今回の成績は、蓋し空前の偉業にして、之に次ぐの功動の如きも恐くは亦望む能はざるべく、假に之を中央亞細亞研究に於ける一段落と見做し、結末の光彩ある大業と稱讃せむも、また或は大早計にあらじ。

下に報する所は、博士がこの雄大の探檢を終りて後、ロンドンに歸り、ロイテルの通信員に直話したる所。載せてデーリーテレグラフ本年一月二十三日の紙上にあり。今讀むに從ふて之を譯述し、讀者と共に博士の雄圖を景仰せむと欲す。博士一千九百六年の夏印度政廳、中央亞細亞探檢隊の長として世界に於ける最荒凉不毛の惡地に踏査すること三年。足跡の及ぶ所一萬哩に達しぬ。豈偉ならずとせむや、聞く邦人盛にスベン、ヘディン博士の來遊を歡迎して、其偉大を稱する嘖々たるものありと、乃亦スタイン博士に對しても、實に同樣の敬意を表する義務あるにあらずや、スタイン氏踏破するの山川は、ヘディン氏に比して稍局限する所あり。其地理學の功績に至りては、或はヘディン氏に一籌を輸するものあるべし、而も富饒なる古物學上の至寶を蒐集し、佛敎學上至珍の古典を獲、天下無二の古繪畫を收めたる巨大なるは、到底ヘディン氏の匹敵する所にあらず。讀者希くは譯述の文に徵して之を了知せよ。

探檢最後の日、博士は崑崙二萬呎の高峰を攀ぢて、氷河の上を行くこと約九時間。以て此連峰の雄景を撮影するに力めたり。而して之が爲に猛烈なる霜傷を起して、足指を害し、直ちに醫療に從ふの要ありき。而も博士は之に屈せず、苦痛を忍びて豫定の計畫を斷行し、十有八日の後、初めて醫家の手術を、受けたり。足指の大部分

漢代佛教古經典の發見

（明治四二、二、宗教界第五卷四號）

スタイン博士の古物學及地理學的の大成功

輓近中央亞細亞の研究開始せられて已來、學術上偉大なる恩人は誰ぞと問はゞ、誰か先、指をスタインとグリユンヴエーデルの兩博士に屈せざらむや。二碩學の前に、ペトロヴスキーあり。デユーテイル、ドランあり。バワアーあり、ウエーバーあり。各珍奇の材料を、西域の故國に蒐集して、新研究の機運を促せしと雖もスタイン博士于闐の發掘に收めし雄大なる成効と、グリユンヴエーテル氏が、高昌の古國に獲たる富饒の資料とは截然として中央亞細亞古學に、自ら一新紀元をなせり。爾來佛教聖語學に於ても、聖典學に於ても、美術史に於ても、幾多の新研究雲の如く起りぬ。此等雄大なる探檢の成績及研究の趨勢に就きては、予は絕へず之を本邦の學界に報じぬ。文多くは載せて、新佛教の諸號に存す。

于闐より出でたる佛教原文は、主として盛唐時代より宋初に至るもの。希に晋末に溯り得る古經斷片あるを認む。高昌發見の聖典に至りては、其時代稍後代に屬す。而して此等原本の多くは零碎の斷片にして、巨鵬僅に一毛を示し、金龍唯片鱗を殘せしにも似たり。故に聖典史を修め、聖語學を研むる人にありては、更に古代の材料を得、更に完璧の原本を見むことの望頗切なるものありき。而してこの希望はスタイン博士第三回探檢の偉大な

理史及教會史の上にも、必らず新解決を提供し來らざるを得ず。世の佛教學に志すの徒よ。願くは此快報を等閑に付するなく、左の譯文を讀むで、奮起勵精大に之に備ふる所ありて可なり。

予が旅行の目的とする所は、東土耳機斯坦に於けるタリム（Tarim）の谷地を通じて、古代の地點及遺跡を發掘するありき。這般發掘の區域は、支那本部の西極端と、土耳機斯坦との間に横る諸沙漠なりとす。之に加ふるに地理學的探究も、亦今回事業の重要なる部分を占めたり。卽中央亞細亞に於て有史時代に起りたる地火起動の歷程に原因する、物理學的變化の諸問題を研究することゝ、及び崑崙及南山の兩高山々脈の測定事業これ也。

予が事業の最初の部分に於ては、予は亞非業土耳機斯坦の一部を形成して、葱嶺（パミール）を境する最趣味ある地方を旅行せり。是此地の境界確定委員會已來歐人の未だ嘗て至らざりし所なり。

予が最初の冬（千九百六年）は、タクラマカン（Takramakan）沙漠の西方に於ける、荒凉寂寞の一地點に過しぬ。此地は古代に於て、文化の恩澤に浴したる最極限の所なり。玆に予は沙磧の中に埋沒したる村落及都市を發掘して、吾人年代の第一世紀（後漢時代）の古記錄を發見したり。

一千九百六年の終には余は、蒲菖（ロブノル）深沙漠の裡にありき。此地はタクラマカン地方に比して一層忍耐を要するの地なりき。困難の重なるものは、飮水の缺乏にありき。之に加ふるに氣候の峻嚴苛酷なると、猛風の利刀銳鋒もて斬刺するが如きを以てす。此風は東方よりしてタリム谷地を吹斷するものなり困難の一例を擧げなば、久しく

は之に依りて全く失はれ。足亦跛へんとするに至りぬ。其意志の强烈にして、學術の爲に、一身を顧みざるの精神、眞に後學の龜鑑となすに足る。

地學上に於ては、崑崙南山兩高山脈の測定を始とし、于闐河の水源を定めて、其功永く百世に垂るべく、文明史上、漢代の古文書を獲て、史上の暗黑之が爲に炳明なるを得べし。而も博士が佛敎上に於ける今回の貢獻に至りては、研究上優に新紀元を開くべきもの、其大勳の赫々たる世の等く崇仰する所たり。何を以てか之を言ふ。

（一）今回發見したる佛敎古寫經の中。漢時代に屬するもの少からず。是蓋摩騰法蘭が白馬經を載せて支那に至れる當時の古本にして、其聖典史上の價値の如きは、固より呶々の要なし。

（二）發見したる古寫經は、其質頗淸鮮にして、且つ悉く完本なり。其研究上の價値亦言ふを要せず。

（三）發見したる古寫經は、漢より晋を歷て、六朝に及び、唐宋に亘て其數四千に超ゆといふ。蓋し全藏の原文を網羅すといむはも誣言にあらじ。また珍ならずや。また偉ならずや。

（四）發見したる寫經を記する所は、約七種の國語なりといふ。その聖語學上無二の珍材たる。誰か之を疑はむ。

（五）發見したる古經典の中より、漢土に飜傳せざる經文を得るの望あるべく。亦佛敎史の研究に資すべき、傳記記錄の類必らずなしとせず。古代佛敎史の暗點、或は之に依りて消除するの希望あり。

之を要するに此一大發見は、佛敎聖典史及聖語學の研究上一大革命を起すべきものにして、之に依りてその敎

ありしより來りし結果にて、今日之に依りて測定上、吾人の事業に頗便益を與へたり。此望樓の側に於て、二千歳の昔此の畏怖すべき邊疆の地方を守備したる、支那番兵の殘留したる諸種の遺物を發見したり。こは基督紀元前一世紀よりして、紀元後、一世紀の半、卽此堡砦守備線の、全く廢棄せられ時代に跨りしものにて、木片若くは竹材に書したる古文書の類を主要なるものとす。此他守備營の事務室中に、古物數百點を發見し、又室外に於て支那兵卒の遺棄したる廣大なる雜品の堆積をも蒐集することを得たり當時邊境守備隊の分布、組織及軍令の傳達、其他は右に發見せし公文書にて明に之を知了することを得。又他の古文書に徵して此慘憺凄寂なる邊疆守備中に於ける多くの慘絕奇絕なる、生活の狀態を二千載の今日、瞭々として知ることを得るなり。

吾人が諸發見中最利益あるものは、古代の寫經、繪畫及其他の佛敎遺物を以て密塞充塡したる一大寶崛の發掘にありき。此等は一大佛敎聖崛の一祕室に於て最も密に護藏せられしものにして、祕密なる萬壁固く封鎖せり。此處に予は一大佛寺文庫の全藏書と及その珍奇なる什寶とを蒐集し得たり。是吾人紀元十世紀の終に、祕藏せられしものなり。蓋當時野蠻狂暴なる侵入者（卽回敎徒）に對して、法寶佛具を保護せむが、爲めに此擧に出てしは、推するに難からず。而して祕藏已來此等狂暴の民族及慘烈なる沙漠の破壞に對し、人鳥天然より離れて、兩ながら絕對に安全たるを得て、以て今日まで嚴存したる也。

此等數十世紀の密閉の後に發見せられし寫本には其中實に基督紀元の初世紀に溯り得る珍品少からず。但し其他は其量の饒大なるよりして一々其記錄奧書を明言せむことは今頗困難なり。此等の珍書は何れも結束のものに

廢道となれる支那よりタクラマカンの北方に通ずる古代の隊商街道に傍ひし、一地點を發掘するにありたりき。三週間五十人の人夫を要し、而も此地點よりして飲水を求めむには最近の水源にして、尚八長驛を進行するの必要ありき。

當時は、困難の極點に達したる時期なりき。切るが如き猛風の恐怖すべきは、筆舌のよく記述し得る所にあらず。而して寒暖計は實に零下四十八度の下に低落したり。吾人一行の數通過したる古代の河身は、枯死したる殘樹に依りて、辛くも之を認識し得るのみ。是同地方を通じて、一般に起りし、驚くべき蒸發枯渇の爲なるを證せり。一地點に於ては、同地の不器時代の遺物を發見しぬ。こはかの桑滄の變によりて、鹹水若くは淡水の底より出でしものにて、有史已前の時代に湖畔に棲みたる民族ありしを吾人に明示せり。

古物學的事業の中にて、最人目を惹くべき部分は一千九百七年の春、及初夏を通じて蒲菖海（ロプノル）畔の鹹沼及ツンハウアン（Tun Huang）綠地の中間、即支那甘肅の最西端に存する沙漠の研究にありき。此處に於て、予は約三百哩の距離を連結する古代の境界堡砦を發見することを得たり。

是基督紀元前の二世紀の終に於て、西方に對して新に拓殖せる道路を防備する目的を以て、古代支那人の築造したる所なり。若此地方が基督紀元二世紀の古代にあつて、既に荒蕪せること今日と同じく、且城壁と最近き水源すら、其距離の頗大なるを考へれば、當時支那建築技師の勞力困難は實に非常なるものありしなるべし。此の城壁の全線を監視すべき爲に造られし、幾多の望樓は、各望の距離多少不規則なり。これ當時沙磧に多少の高低

こは前兩回の探檢に於てある事情より、予が計畫を畫餅に歸せしめしものなりしが、今回は前回と全然異れる新方面を取て遂に探檢を成功し得たり。但しその困難は實に非常なりき。此恐怖すべき二萬呎已上の嶙峋なる高山脈其行く所は、險惡言語に絕し。而も多くは通過すべからざる深谷幽谿の險ありき。

かくの如くして數十頭の動物を失ひしにも關らず、崑崙高山脈の探檢は成功を以て終りしかば、西藏高原の最北西に位する、最不毛の地を通過せむことを企てぬ。而してカラカシュ（Kara Kash）河に達したる後、吾人は大雪千歲に亘る山脈の南方測定を、北方のと結合することを得たり。然れども此目的の爲に、二萬呎より二萬千呎の間の高にある分水嶺を、カラカシュ谷より押登るの必要ありき。

て其清鮮なること祕藏の當時と毫も異るを見ず。寫本の數は四千を超過す。而して學者の語る所に依るに少くとも七種の異れる國語にて記載せられたり。

一千九百七年の夏には、南山々脈の高地に於て、二萬方哩の地方を測定しぬ。此の地方にはタンクード山賊の横行するあり。又嚮導者之あらざりし爲に、其苦慮實に非常なりき。而も此困難と悪鬪して、タリム谷地の北方に歸着したる後、一千九百七年より八年に亘る冬期中、潤大なる一隊商行路の間に、種々なる地點を探究し發掘し其報酬空しからで、巨多の壁畫及古代の彫刻物を獲得しぬ。

其後タクラマカンを通じて、北方から南方に至る、最危險なる行進を斷行したり。此間の忍耐困難は、實に慘憺峻酷のものなりき。予が引率したる數頭の駱駝は、二週間の久しき飲水もなく食餌も取る能はずして、行進せざるを得ざりき。而も此の如くして得たる所は、唯カリム（Karim）河が砂磧の中に死沒したる地點に達したるに過ぎざりき。この諸水路が悉く死滅したる荒凉たる一大地域は、予が嘗て尋訪したる諸所の中、最闇鬱悽絶のものなりき。想像せよ、數百方哩の地、目に觸るゝ所に、全然死滅したる、累々たる枯枝、大楊及其他諸樹の殘骸、無常轉變の水路が、古代汨々滔々の盛觀を、僅にこの殘樹に留めて今日に至りし大寂寞の風景を。嗚呼是實に死に封鎖せられし熱帶の三角洲なりき。死及び片蒼だもなき死林、駱駝の足跡を除きては、全然生活の痕なき所、この風光は、予が終生忘るゝ能はざる所なり。

同年（千九百八年）七月の一日。予は前人が嘗て測定せざりしコータン河の水源を探究せむが爲に出發しぬ。

に共最古代の形を傳へ。寶積の護國尊者所問會（梵文存在しフキノー教授之を公刊したり）の中に簡單に事例として引用せらる。梵文には夫本生鬘論の第三十二章（ケルム翁原文を出版し、其高足スパイエル教授英譯を出せり）と賢劫譬喩經（漢本なし）の第三十四章に出づ。

巴利にては本生第五三七番 Mahāsutasomajātaka 是漢譯の普明王經の増廣したるものなり。ファウスボエールの刊本にて、約六十頁あり。以て其大を見るべし。英譯フランシス氏の手に依りて就る。Cariyā-Pitaka 三、一二はこれを六頌に撮略したり。また本生經集大序 Nidāna-kathā 一、二六五頌、極めて簡單にこの本生の要を括れり。本生第五一三番 Jayaddisa-jātaka は、實に右蘇多蘇摩本生の一變體なり。此本生はまたチャリヤーピタカの中に撮略せらる。

婆羅門教文學の中にては、大史詩摩訶婆羅多の第一書の最初品第一百七十六章已下に此譚を見るべし。但し婆教文學に於ては主として班足王を說話し、蘇多蘇摩は其存在を見ず。韋紐、薄伽梵の兩富羅那にも、また此譚あり。羅摩衍那、訶梨洹婆、諸部の富羅那、其日種王系の條下に、何れも班足の名を羅ねて、其說話の一片を暗示す。

此等婆教文學に於ける譚は、研究の結果其源遠く梨倶吠陀に存するものなるを確定し得たり。

此等の印度古典と佛教本生及譬喩との關係は極めて多趣多益なること言ふまでもなけれど一二紙のよく盡す所にあらざれば一切之を他日の邦譯に讓り。茲には唯南北佛典中に於ける普明本生の分類表を掲ぐるに止めむとす

普明王本生に就きて

（明治四二、五、宗教界第五卷第六號）

班足王譚

二楞學人が西竺佛教古美術と漢譯佛典との對合研究に力むる學界の爲に多とすべき價ありといふべし。之に依りて漢譯本生譬喩の史的價値を闡發し得ればや也。從て、本生譚の發達研究につきて、一隅の資料を供給し得ればや也。

普明王本生とアジャンタ壁畫の一が、果して一致するや否やは、勿論予が輒斷言するを得ざる所也。而も該本生につきて、該羅博綜、藏海を涉獵したる稿者の勞は、輕々しく沒し去るべきにあらず。

余二年前、普明本生につき少く研究する所あり。一獨逸文の稿を成し時に出して之を補刪しぬ。今年一月偶りスデギッ夫人一文を巴里聖典出版會の報告に寄せむことを囑せらる。乃之を英文に改め、繁を刪り要を添へ、全く章段篇目を更新して、之を夫人に送りぬ。普明本生に關する文を讀みて、數言を『宗教界』に寄せむと欲する思考は、かくて自ら起れり。

普明王――蘇多蘇摩本生――は南北兩傳中尤異形に富める譚の一つなり二楞氏の記載の外、北傳には舊譬喩經

蓋此一表は一面に於て、本生譚が其原始的の形體よりして、如何に複雜多面の一大譚に發達したる乎を內容比較と本文研究の結果より提示したるものなり。換言せば、第一の舊譬喩經は最原始簡單の本生にして第十九賢愚經はその極度に發達したるもの、而して其中間の十七經は步々高處に達する階段と見るべし。

普明出生の主人公は南北兩傳とも概して Sutasoma (蘇陀蘇摩等) に作る。唯第四と第七には普明となす。是 Samantaprābha 若は Subhāsa の譯字なるべし。師子素駄娑斷肉經には聞月となれり。是 Srutasoma の譯にして、Sutasoma が古寫經にて訛寫されしを、そのまゝに直譯したるに過ぎず。सुと श्रुとが、古寫經にて轉訛するは常のことなり。現にウヰルソン氏譯の韋紐古記にも、此誤あり。彼得堡梵語大字典の第七卷सुの條下に、其例を擧げあるを見る。

敵役の名は Kalmāsapāda 也。種々の對譯字あり。前記、諸經につき見べし。譯して班足、鹿足、駮足などとす。此王また Saudāsa 素駄娑の名を有す、父方の名なり。史詩古記には多く此名を用ゐ居れり。斷肉經の師子素駄娑は、師子は母方の名を加へて其生緣を示したるのみ。

要するに普明王譚(班足物語)は、諸本生中、最重要なるものゝ一にして、佛典と婆敎文學との關鎖、及南北兩傳本生の發達に就き、甚有益なる斷案を與ふ。謂ふに尸毘月光等の諸本生も、精査し來らば、又同樣の結果を得る望なしとせず。本生經の精攻は、聖典史上最緊要の一課なる哉。

因に言ふ南條氏英譯明藏目錄第四六〇番師子素駄娑斷肉經梵漢二譯共に誤れることいふまでもなし。左の如

第壹大部
第一形體
第二形體
北傳
南傳
第貳大部
第一發達
第二發達
1 舊譬喩經
2 僧伽羅刹所集經
3 大智度論
4 六度集經
5 雜譬喩經
6 菩薩本行經
7 護國尊者經（梵漢）
8 仁王般若經（兩譯）
9 Sutasoma J.
10 Cariyāpiṭaka III 12
11 Nidānakāthā; 265
12 Jayaddisa J.
13 Cariyāpiṭaka 19.
14 師子素馱斷肉經
15 Jātakamālā
16 Bhadrakalpa,
17 楞伽第一譯
18 賢愚經（漢藏）
20 楞伽第二三譯及梵本

佛遺教經は馬鳴の作歟

（明治四二、新佛教第十卷六號）

唐の太宗詔勅を發して、佛遺教經の宣布を令し、天下僧尼の淸規、一に此經に依準せしめし已來、流傳の速なる、急湍の低谷に注ぎ、烈火の枯草を燎くが如きあり、後代孤山の疏出で、眞悟の註現はれ、淨源の節要行はれて、玄旨を輔翼し幽理を闡發して、傳持愈盛なり。吾國に於ては、各宗概力めて此經を誦し、賛揚弘通の至れる、固より玆に贅するを要せず。

世人終りに臨むや、語必らず切要を極む。況や四生の慈父、垂滅の遺教をや。末弟の傳持に懈らざる、固より怪むに足らず。而も本經の宣傳は、單に其切實親切の教旨のみならで、亦實に其文辭の壯嚴、叙述の巧妙たるに歸するもの多きを忘るべからず。蓋羅什の飜傳する所、概其文辭瑰麗雄渾、諸譯に卓絕す。玄奘の譯は、周到緻密、文理の透徹明晰なる古今獨步と稱す。而も其理路の條然たる餘りありて、文品の高逸、神韻の橫溢に至りては、什に比して夐然數步を讓らざるを得ず。法華や楞嚴や維摩や、什公の譯少からずと雖、遺教は實に其文品當に此等諸教中の白眉を以て居るべき價あるべし。

予久しく皇漢の文集を手にせず、今唯朦朧として、賴山陽が此經の文を賞したるを記す。山陽元來古文に偏す。歷代譯經の文に對する唾棄尙足らざるが若し。而も此經に於て推賞此の如し。以て其至妙の文たるを知るに

く訂すべし。

Siṃhasaudāsa-rāja-māṃsabhakṣanivṛtti-Sūra ;

Sūtra on the king Siṃhasaudāsa abstaining from flesh.

4 節食(蜜蜂牛力)	5 同 53—56½ (74 b 2)	5 同 50—52 (38 b 8)	5 p. 298
5 斷眠(黑蚖鐵鈎)	6 同 56½—62 (75 a 20)	6 同 53—58 (38 b 10)	6 p. 298
6 呵瞋(冷雲中火)	7 同 63—67 (75 a 6)	7 同 59—63 (38 b 13)	7 p. 299
7 滅 慢	8 同 68—71 (75 a 8)	8 同 64—65 (38 b 15)	8 p. 300
8 質 直	9 同 72—73½ (75 a 11)	9 同 65— (33 b 17)	9 p. 301
9 少 欲	10 同 73½—76 (75 a 12)	10 同 67— (38 b 17)	10 p. 301
10 知 足	11 同 76½—81½ (75 a 13)	11 同 68—69 (38 b 18)	11 p. 302
11 閑居(集鳥、老象)	12 同 81½—84½75 a 16(75a18)	12 同 70—71 (38 b 19)	12 p. 302
12 精進(少水、穿石)	13 同 84½—86 (75 a 20)	13 同 72—74 (38 b 20)	13 p. 302
13 攝念(著鎧、治塘)	14 同 87—91½ (75 a 2)	14 同 75—78 (39 a 2)	14 p. 303
14 智 慧	15 同 91½96½ (75 a 5)	15 同 79—81 (39 a 4)	15 p. 304
15 遠離亂心戲論	16 同 96½—98	16 同 82—83 (39 a 6)	16 p. 304
16 不放逸	17 同 99—104 (75 b7)	17 同 83—88 (39 a 6)	17 p. 304
17 阿㝹樓駄請問	18 同 105—111 (75 b 10)	18 同 89—95 (39 a 10)	18 p. 305
18 結	19 同 112—119½ (75 b 14)	19 同 96—102½ (39 a 14)	19 p. 306
缺	20 同 119½-13(75 b 18-76 b 5)	20 同 102½-126(39 a 16.39 b 11)	20 p. 307—308

佛所行讚の1第一頌より第三十二頌半に至るは、須跋陀羅の得度を歌ひ、20第百十九頌より第百三十一頌に至る、世尊入滅の修定を賛じ、次で滅後天地の異變を詠ず。此前後の兩段は遺教經に缺く、其他の十八段より19に至る、約八十頌は經の十八大段と相符合す。今左に一二の實例を擧げて相符の如何に密なるかを示さむ。

難からず。予每に謂らく、遺敎の文之を支那美文學史の架中に置かむに、敢て柳蘇の下にあるものにあらじと。遺敎文辭の妙、旣に此の如く、其切要の敎旨、また彼が如きあり。獨怪む、漢より元に至る歷代の諸三藏、之を譯傳したる、前後唯什公一人のみ。夫大小乘の聖典、般若雜華の大を首とし。法華の如き楞嚴の如き、金光明、無量壽の如き、少きも三譯、多きは七八譯を重ぬるものあり。切要遺敎の如くして、單に一譯にして止む。豈理由なからざらむや。因りて謂ふ、是什公が諸經の精を集め粹を抜きて、抄略誦出したるに非ざるなきを得むや。其譯文の妙また夫之に基せざらむやと。

然るに今や漸くにして此宿疑を消すことを得たり。遺敎經は謂ふに大士馬鳴の作なるなからむや。抑此經は佛所行讚第二十六品大涅槃品と首尾の文段全然吻合す。唯異る所は、讚は詩體にして稍廣衍に傾き、經は散體に作りて、極めて緊縮簡潔なるにあるのみ。讀者乞ふ詳に左の比較表を檢せよ。

佛遺敎經	曇無讖佛所行讚大涅槃品二十六〔藏七・七四・左九〕	寶雲譯佛本行經大滅品二十九〔藏七・三七・左一九〕	ビール氏佛所行讚英譯〔東方聖書集第十九卷二九〇〕
缺	1 頌 1—32½ (74 a 11)	1 頌 1—30 (37 b 19)	1 p. 290
1 中夜寂然爲弟子說法	2 同 32½—34 (74 b 9)	2 同 31— (38 a 17)	2 p. 295
2 持戒讚戒	3 同 35—44 (74 b 10)	3 同 32—42 (38 a 17)	3 p. 296
3 制心(牧牛狂象猿猴)	4 同 45—52 (74b16)	4 同 43—49 (38 b 4)	4 p. 297

佛所行讃

大　段3（頌第三十五、六）

汝等當恭敬　波羅提木叉　即是汝大師　巨夜之明燈　貧人之大寶　當所敎誡者　汝等當隨順

如事我無異……

大　段13（頌第八十四至八十六）

若人勤精進　無利而獲　是故當晝夜　精勤不懈怠　山谷徹流水　常流故決石　鑽火不徹進

勞而不獲　是故當精進　如壯夫鑽火

大　段15（頌九十三、四）

生老死大海　智慧爲輕舟　無明大闇冥　智慧爲明燈　諸纏結垢病　智慧爲良藥　煩惱棘刺林

智慧爲利斧

大　・段19（頌百十二至十七）

正使經劫住　終歸當別離　異體而和合　理自不常俱　自他利已畢　空住何所爲　天人應度者

悉已得解脫　汝等諸弟子　展轉維正法　知有必磨滅　勿復生憂悲　當自勤方便　到不別離處

我已然智燈　照除世闇冥　世皆不牢固　汝等當隨喜　如親遭重病　療治脫苦患　已捨於苦患

逆生死海流　永離衆苦患　是亦應隨喜

遺教經

大　段2

汝等比丘、於我滅後、當尊重珍敬、波羅提木叉、如闇遇明、貧人得寶、當知、此則汝大師、若我住世、無異此也、……

大　段12

汝等比丘、若勤精進、則事無難者、是故汝等、當勤精進、譬如小水常流、則能穿石、若行者之心、最々懈廢、譬如鑽火、未熱而息、雖欲得火火難可得、是名精進、

大　段14

……實知慧者、則是度老病死海、堅牢船也、亦是無明黑闇大明燈也、一切病者之良藥也、代煩惱樹利斧也、……

大　段18

汝等比丘、勿懷憂惱（若我住世一劫、會亦當滅會而不離、終不可得、自利利人法、皆具足、若我久住、更無所益、應可度者、若天上人間、皆悉已度、其未度者、皆亦已作、得度因緣、自今已後、我諸弟子、展轉行之、則是如來法身常在而不滅也、是故、當知、世皆無常、會者必有離勿懷憂也、世相如是、當勤精進、早求解脫、以智慧明、滅諸疑暗、世實危脆、無牢强者、我今得滅、如除惡病、比是應捨罪惡之物、假名爲身沒在生老病死大海、何有智者、得除滅之、如殺怨賊、而不歡喜、

爾時阿㝹樓駄　觀察衆心、而白佛言、世尊、月可令熱、日可令冷、佛說四諦、不可令異、…………若有初入法者、聞佛所說、卽皆得度、譬如夜見電光、卽得見道、若所作已耕、已度苦海者、但作是念、世尊滅度、一何疾哉、

佛所行讃大段18(頌百〇六至十)

時阿那律陀　觀察諸大衆　默然所無疑　合掌而白佛　月溫日光冷　風靜地性動　如是四種感
世間悉已無　苦集滅道諦　眞實未曾違　…………　…………　正使新出究　情未深解者
聞今懇勤教　疑惑悉除解　已度生死海　無欲無所求　今皆生悲戀　歎佛滅何速

本行經大段18(頌八十九半至九十四)

阿那律知念　於大衆中言　日可令涼冷　月可使炎熱　是四諦眞正　終不可違故　…………
…………　初入道老少　佛粗說羅漢　如冥電照道　其已得解脫　度於生死者　衆共懷悲恨
師逝一何速

此一段は寶雲の譯著しく經に合す。曇譯には風靜地動の譬あり、月溫日冷の外に存し、合して四喩となる。寶譯には經の如く、日冷月溫の二譬あるのみ。また曇には暗夜電光の譬を缺く。而も曇譯には明に之あり。玆に於て、梵本を參照するの必要あれども、原文は其最初の十三品のみ現存し、餘は悉く散佚せり。現刊十七品の原文は、十四品下尼波羅學僧甘露喜の補ふ所なり(東方聖書集四十九カウエル教授佛行讚英譯序文五已下を見よ)。是最も憾むべしとす。之を西藏譯に照さば、或は曇雲兩譯の差異する所を斷定するに難からざるべきも、今は之を

佛本行經

大　段3（頌六十二）

卿等敬具戒　如尊師炬曜　吾去世之後　順從莫違犯……

大　段13（頌第七十二、七十三）

志意勇精者　衆事無疑難　水性徹柔弱　漸滴能穿石　鑽火數休息　不能得致火　勤鑽尋致火

精進者諸偶

大　段15（頌八十）

……………鎧良藥利品　舟船度流江　智慧度生死

大　段19（頌九十六至百）

假今有劫壽　必當終歸盡　吾以具施善　何用長壽爲　世間及天上　吾所應爲者　生度半示道

轉教法得住　汝等當覺制　不足迫念吾　但勤說方便　莫遭離別痛　以慧燈除冥　覺世無牢强

乖終心懷悦　猶如重患除　慧者脫凶衰　遠離弊惡人　得捨是二患　何緣得懷憂

曇無讖の譯頌は極めてよく經文と符合す。寶雲の頌は共譯間省略を行ひ晦澁にして文義槪して通徹を缺くの觀あり。而も或點に於ては、却て遺教經の原形を示すものあり。讀者乞ふ更に左の一表を檢するの勞を厭はざれ。

遺教經大段17

へ、許容せらるべければなり。

遺敎經論が眞諦譯として、明記せられたるは、費長房の開皇三寶紀（第六九左）の記載を初めとす。此書撰定の前四年卽開皇十四年（西五九四）に就れる法經の衆經目錄第五には此論を疑訝して、遺敎論一卷、人云眞諦譯勘眞諦錄。無此論、故入疑（結二一三右）と記せり。開皇記の著者は、其第十二卷（致六、八三、右）に衆經目錄に對する批評を掲げて「但法華等。旣未盡見三國經本。校驗同異」と貶し居るも、實際長房が盡く信ずるに足らざるは貞元錄の第十八に評するが如し。

余檢長房入藏錄中事實雜謬其闕本疑僞皆編入藏、竊爲不可（已下十誤を擧げて之を證す）――（結七七一一左）

開元、貞元の二錄は、長房が雜謬を認むるに闘らず。遺敎經論は長房の記載に從ひて、之を眞諦譯條下に出したるも、此論が古來より疑はしきものたりしことは、衆經目錄に依りて明なり。內典錄は一面之を眞諦譯となせしにも闘らず（卷五、結二、七七左）。他には之を疑僞經論錄に之を納めたり（第十、結二一、一七右）以て其論が頗疑ふべき價あるものなるを知るべし。

今論文を檢するに、經文は悉く羅什の譯を用ゆ。釋文は義理極めて明晰にして、分段の犀利整齊なる、眞に大論師の作たるに愧ぢず。其口吻また漢人の氣なり、依りて思ふ。是或は眞諦が述作なるなからむや。諦が造疏に力めたるは、古記の明記する所、起信を釋し、仁王に注し、中論を疏したる、三寶紀明に之を錄せり（記十一、致六、七六左）。卽何ぞ知らむや、學徒の請に應じて、什譯に就きて通疏を作りたるにあらざるなきを。首尾悉く

檢するの機會なきを以て、業を他日に讓る。

遺教第十八段の法身常在の結勸は、曇寶共に之を見ず。曇には維正法と叙し、寶は法得住と歌ひ、唯法の傳持を說きて、法身常在の語見へず。是教理史上、頗注意すべき點なり。蓋遺教の法身は、所謂五分法身の常住、佛世と異るなきを示したるものにて、法華、金光明に說く所の、常在靈山の思想とは全く、異るものある論なしと雖、讃に之を缺きて經に獨之あるは、學人の討究を須ゆべき所なりといふべし。

之を要するに、前に揭げし諸比較に依りて、遺教經と佛所讃大涅槃品とは、韻散兩體の差あるも、其實質は全然同一なるを證し得たり。茲に於てか、一の假定は必然に生ぜざるを得ず。曰く羅什其博大の記臆裡より、馬鳴雄篇大滅品の要旨を叙し、筆するに散體を以てせしにあらずや。言を換ゆれば、遺教經は馬鳴の原作にあらざるなきを得むやと。事稍シエークスピーヤの諸傑作と、ラムの釋本とに似たるものあり。遺教の文材、他經を秀でゝ詩趣に富み、修辭の要素、豐饒にして他に其比を見ざる。其飄傳の才に什公の一本に止まれる。此假定ありて、初めて通釋することを得べし。法身常在の語の如きも、此假定にして正鵠を失せずんば、之を什公が大乘教理に密通せる思想を將ち來りて、結尾の文を潤色したる、畫龍點睛の一大活手腕と看做すことを得べきのみ。

但、此假定を成立するに、必らず通過せざるべからざる一大難關あり、そは遺教經論の存在なり。此論は現存の藏經には世親の所造眞諦の譯とせり。若此論果して世親の作ならむには、遺教は旣に西竺に存せる、行讃拔萃の書として、什公の誦出にあらざること勿論のことゝなるべく、或は又之が行讃涅槃品の原型なるべきの想像さ

回訖語佛教聖典に就きて

（明治四三、一〇、宗教界六卷十一號）

西本願寺法主が今回光榮ある大旅行を終つて歸朝され、回訖語の佛教聖典を發見して、之を吾國に將來されたといふ評判は、既に各種の新聞に掲載され、少からず學界を震駭した樣だ。

此經文に就きては、一般新聞誌は稀世の珍品だ天下無二の至寶だと報じたが、ある一二のものは僅に此語で書いた經典は、强ち本願寺法主將來のもののみでなく、二三歐洲にも存在するから無二の寶ではない位のことを報道した丈で、實際此語の聖典に就きて明確なる智識を與へる學者はまだなかつた樣だ。隨て現今に於ける此語の佛教聖典の研究が、歐州でどの位進むで居るかといふ樣なことはまだ一向判つて居ぬ樣だ。

其處で少しく自家の見聞から、此一語の聖典につき「宗教界」に數行を費して見るといふことにした。

元來ウイグール語の佛教聖典の存在したことは、明に支那典籍に記錄が殘つて居るので、佛祖通載第三十六に妙善寺比丘尼舍藍々八哈石の傳を載せて、其中に、

仁宗之世、師（八哈石）以桑楡晩景、自謂出入宮掖數十餘年、凡歷四朝事三後、寵榮兼至、志願足矣、數請靜退、居於宮外、求至道以酬罔極、大後弗聽、力辭不已、詔居妙善寺、以時入見賜與之物、不可勝記、師以其物、刱寺於京師、曰妙善、又建寺於臺山、曰普明、各置佛經一藏、恒業有差、又以黃金、繕寫蕃字（西藏語）

經文に什譯を用ゐたるの理は、玆に於てか說明し得べし。

其作者の世親なりといふの記錄は、藕益の智律に見ゆ。謂ふに明藏に於ては論本、譯者と共に論主の名を記したるなるべし。而も床代淨源の節要には、之を馬鳴の作とせり。

推微解釋。開誘行業。莫深於馬鳴論。然則論主發揮遺敎。亦猶龍樹啓明大品歟（調九、四一、左）

開卷先づ此贊辭を見、疏中時々馬鳴の名を擧げて、論文を抄出せり。故に知る。古來此論は又馬鳴作として傳はりしものなるを。

此の如く作者が、一時代には馬鳴となり、他の時代には世親に歸せしことは、疑もなく作者の名が後代の添加に出でしを證するに足るべし。卽作者未詳の一書を或は之を馬鳴に屬せしめ時に之を世親の造としたるに過ぎず。而して此論が、恐く眞諦の撰述なるべき想像は、玆に强大の保障を得べき也。

遺敎經論に關する想像にして誤なしとせば、前記の假定は確固たる地盤を得て其價約斷案に等しきに至る。—佛遺敎經は夫馬鳴の作にあらざるなき歟。經文首尾を通じて、馬鳴雄大の詩篇の一部の散體的抄譯に過ぎざるを以て。

界を駭して居るのは露國のラドルフ Radolf 博士である。此人は歐洲ウイグール語學研究の元老と稱してよい。回訖語を以て書かれた佛教は英國でも露國でも隨分少くはない、然し其研究が續々發表されて立派な材料が多數あるのはどうしても伯林を推さねばなるまい。而してその研究者の驍將として、今學界に重むぜられて居るのは實に、古物人類學博物館の東洋部長をして居る、博士ニフ、ヴエー、カー、ミユーレル F. A. K. Muller である。博士は從來湮滅に歸して到底此世に存在せぬと信ぜれた摩尼教の（聖典をツルフアンから發見して實に空前の大功績を學界に貢獻し、之が爲に伯林大學は特に名譽教授の榮譽を同氏に與へたのであるが、ウイグール語佛教聖典の研究に就きても、必らず偉大なる成功を仕遂げるに相違ない。これは博士がアラビヤ、トルコ所謂伊蘭族語學に精通した上に、梵學の素要が充分あり且つ特に他人の希及することの出來ぬ、漢學の力が可なりあるからだ。

ミユーレル博士がウイグール佛典の研究の第一矢として、弦を發したものは一昨年「ウイグール語研究集」と Uigrica と題し、同語で書いた基督教及拜火教聖書の斷片を紹介した中に實に同語の金光明經——即ち前の佛祖通載に明に共存在を示して居る——の一部を義淨の漢譯と對照して之に獨逸譯とウイグールの音譯とを添つて伯林學士會の會報に公表したのがある。此經典はミユーレル博士の報告に依ると、明に、其結尾に義淨の支那譯から、重譯したことが書いてある。

歸朝前伯林に出たとき、博物館の一室にミユーレル氏を訪問したら、氏は其肥滿した偉大の軀幹を擧げて歡び

藏經、般若八千頌（Aṣṭasāhasrikā 小品般若）五護陀羅尼（Pañcarakṣā 孔雀王等五部の祕典）十餘部、及漢字華嚴楞嚴、畏兀字法華金光明二部下略（致一一、六四b）

此八哈石は、高昌卽現時のツルファンの人で此地は玄奘の時代から元の始まで佛教が、非常に隆盛であつた所だ、獨のグリュンヴェーデル博士が早くも玆に着眼し、前後三回の大發掘を實行して、壁畫佛像經卷文書等山の如き、許多の珍什を伯林の古物及人類學博物館に持ち歸つたのであるが、八哈石の時代卽元朝の始には旃檀寺といふものが佛教寺院の首であつたらしく且つ佛教の外に摩尼教も頗る隆盛であつたし、波斯の拜火教も可成勢があつたのである。

此高昌の故地が卽ウイグール語を話した所で其人種をウイグール人と稱したのだ、元史譯文隆補の第二十六上に、

畏吾兒、亦作畏兀兒、所謂高昌國王、亦都護是也、畏吾兒卽唐之回紇、元祕史作委兀兒又作委吾邸

とある通である、高昌人の八哈石が特に畏兀字の金光明や法華を寫したのも玆で明になる、元史の第二十九卷にも畏兀字を以て蕃字（西藏語）藏經を譯せしむるの事あり、ウイグール字を以て書したる經文は、同人種が未だ散滅せず其地が回教の爲に蹂躪せられざる已前には非常に多く流傳したるものなることは想像するに難くはあるまい。因みに云ふが歐洲に於てウイグールに就ての研究は大分古くから行はれて三十年にバムベリーの傑作が出、次でショットの有名な「ウイグール問題」が出版になつたが、此時代より現在まで尙研究を繼續して時に學

祕密聖典と摩訶婆羅多の關係に就きての一二

（明治四十四年、新佛教第十二卷七號五九六頁）

一　大史詩と佛典

大史詩摩訶婆羅多と佛教聖典との關係が淺くないことは今更茲に多言を要せぬことである。フアウスボエールが法句經中に二十餘首大史詩に出て居る偈頌を檢出したことや、馬鳴論師が其優麗な大作に史詩を材料にしたことなどは論ずるまでもなく、尸毘王の譚斑足王の談など面白ひ本生經が大史詩と離るべからざる連鎖があることも現に研究された。

然し一方では五千餘卷といふ頗る浩澣の佛教聖典であるし他面にはホメロスの二大史詩を八倍したといふ十萬頌の巨人書である。而して一方キンテルニソツやホルツマンや若くはダルマンなど大史詩の精通家は佛典特に大乘佛典の智識が皆無であるし、片方では可なり閲藏した吾國の教家でも史詩の極めて概略の內容すら知らぬ人が多い、此の如くであるから大史詩と佛典との關係は今猶開拓せれぬ豐饒の大原野として居然として學人の前に橫りつゝある、金銀珠玉、珍玩奇寶に充ち溢れたる壯麗なる大寶庫は、其門を、八字に打開して盛に研究家が擇り取り、見採りを待つて居る。

其處で、今此廣漠の大原野に薰高く開いた紅紫の一莖二莖、此大寶庫中に燦然として一隅を飾る片玉の半顆兩

迎へ、所有る珍奇豐富の材料を示し、且つ研究中のウイグール語金光明經全部の實物も又其原稿として整理した漢獨對譯付の寫眞をも見せて呉れた。多分全體の研究も遠からず、伯林アカデミーの事業として公刊のことゝなるだらう。

この金光明經は殆ど完本であるが、他に同語聖典の斷片類は實に夥しく伯林にある。長く卷いた軸物に美はしく書いた漢譯華嚴賢首品があつたが裏面にはウイグール語で滿紙を埋めて居る、一二句ミユーレル博士が讀むだが、どうも表面の經文の飜譯らしく思はれた。

西本願寺法主の將來された經文は何であるか、まだ判然せぬ樣だが、兎に角、それがウイグール語と極まつたら、ラドルフ教授やミユーレル博士の如き同語の專門研究家に委托して學界に資料を與へるやうにしたらどうだらうか、日本で充分研究が出來れば無論結構だが、さもないと寶の持腐となつて仕舞はう。

歐洲では何事によらず、專門家には慳惜なく材料を供給しその大業をなさしめて學界を裨益する方進を取つて居る、于闐から出た梵文法華の斷片などは何處の梵學者にでも手が付く好材料だつたが、ペータースブルグの大學は惜しげもなく之を目下南條博士と共に法華梵文の公刊に從事してる和蘭の考碩學ケルン博士に寄贈して公刊の大成を期してるといふ有樣だ。學者が相互にかゝる風に力むる樣にならぬと學問の進歩は覺束なからう。

西本願寺でも其將來したウイグール聖典をラドルフ博士ミユーレル教授に委托したらどうだらうか。

て後代の印度教に根基を與へて居る大史詩を看過することは到底出來ぬ譯である。

それから特殊の研究に入り込むと大史詩の智識が益必要となつて來て、之がなければ到底滿足の研究が出來ぬことになる、早い例が密教祕典の第一期に屬して殆ど當時の崇拜を大成し其雜然たるパンセヲンを纒めたと思はるゝ孔雀王經の如き、其中に出る龍や鬼神や夜叉、などの名に大史詩の研究から痛快に解釋が出來るものが頗多い、一二の例を擧げると、龍王馱地母珂（Dadhimukha）の如き羅刹女熈沈婆（Hidimbā）の如きがそれである、後者の如き他の佛教聖典には殆ど出ぬ、然し大史詩では第一品に出る頗興味ある羅刹女である。

此一小篇は此特殊研究の方面に多少の資料を貢獻しようといふのである、一つは護諸童子經に就き、他は卽金光明經辯才天女品に關する資料である、二つともに史詩に於ける自在天崇拜と頗る察着の關係を有して居る。

三　護諸童子經と守護大千國土經

護諸童子經は經名の示す如く、神咒の力を以て小兒を救護し、其病難を攘ふ祕法を說き小兒が種々の發病の原因として十五鬼神の名を擧げ、各鬼神の形と、此等鬼神が小兒に魅着した時の症狀を詳しく說してある。密家には此經に依りて行する修法、「童子經法」若くは「十五童子法」あり、覺禪抄や圖像抄の中には修法本尊の圖を出して、本尊の周圍に十五鬼神の圖を經に依りて描いて居る。近刊の富田氏の祕密辭林七九七頁にも、大分詳しく童子經法に就きて記載してある。

類、それを摘み來りて吾が祕密の苑に姿美はしき一輪二輪の名花と較べ、そが輝ける珠の光と瑜伽藏中に深く祕したる寶珠のあるものと其成分や結晶などにどの位關係があるかを見ようと思ふ。勿論今發表する所は單に名花や明玉のジーナス、スペシースなどが或は同じであらう。其系統組織に相互關係する所が恐らくあうと云ふ、云はゞ一種の暗示であつて、確實なる斷案に達するまでには、尙少し時間を要すること丶、今一つは此一小篇は材料提供といふ點に重きを置いたので、考證の方面や、研究方法の方面には更に多くの餘地を有するものであることは、豫め一寸御斷り申す必要がある。

二　大史詩と祕密聖典

材料提供の前に、一寸大史詩と祕密聖典との關係に就き一言して置くのも強ち無用であるまいと思ふ。先づ總じて之を見るに多尊森然星宿の如くに羅布する大曼荼羅祕密教の大パンセヲンは史詩神話の智識がなければ其歴史や系統を詳論することは到底不可能である。大體祕密佛教は印度の所有る方面の文化を融合して之に深奧の意義を寓し、彼の輪圓具足の一大法壇を築き上げたものであるから、印度古代文化の結晶でもあり寶庫でもあり又は一大百科字彙である所の大史詩の研究は、どうしても最近の關門であると言はねばならぬ。特に自在天崇拜とは切ても切れぬ緣がある祕教の一面——青頸觀音一尊、大黑天一神の名號丈でも直く此關係の知れる祕密教の一面には、濕婆崇拜の源泉、この崇拜が三神說と共に其萠芽方に成長し、芬馥たる美花を開き、蓊欝たる若葉茂り

3 騫　陀	3 塞健那	Skanda
4 阿波悉魔羅	4 阿波娑麼羅	Apamārā
5 牟致迦	5 母瑟致迦	Muṣṭikā
6 摩致迦	6 摩怛哩迦	Mātṛkā
7 閻彌迦	7 惹彌迦	Jāmikā
8 迦彌尼	8 迦彌濘	Kāmini
9 梨婆坻	9 黎𩕳帝	Revati
10 富多那	10 布單那	Pūtanā
11 曼多難提	11 麼怛哩難那	Matṛnāndā
12 舍究尼	12 煤倶𩕳	Śakuni
13 揵吒波尼尼	13 捷婉播底𩕳	Kaṇṭhapāṇikā
14 目佉曼茶	14 目佉滿抳	Mukhamaṇḍī
15 藍　婆	15 阿藍麼	Ālambhā

次に鬼神の形狀と其執り魅いた時に發る症狀だが、之には兩經著しい差異がある。序に又一表を加へて置かう。

此經は極めて簡短な祕典で縮刷では僅に一枚半ばかりの小經であるが、後代密典に屬する守護大千國土經（Mahāsāhasrapramardanī の中に殆ど其全文を見ることが出來る、此大千國土經は餘程後代の作で隨求陀羅尼や孔雀王經などを巧に按排して一經を形成して居る、護諸童子經も亦右等の諸經と同じく大千國土經の筆者に資料として採られたものである、此大國土經は尼波羅で最も神聖な祕典(五護陀尼卽（Pañcarakṣā）の一部で梵本は歐洲印度各國の圖書館に存在し、日本にも東京（高楠氏保管）と西京（大學所藏）とに一部宛あるから、現在の研究上餘程都合がよい。

序に言ふが支那譯の大千國土經の譯は隨分粗雜の所も見へる。多分譯場で使用した謄本があまり正確なのでなかつたのかも知れぬ。且つ梵本は大部分首路迦の流麗な詩體で書いてあるのを、支那譯では大部分散體に直してある、護諸童子經を借り來つた部分卽十五鬼を說き形狀を述べ病狀を明にする一段も原文は明に首路迦で書いてある。

大千國土經は童子經から材料を仰ぎて居るのであるから無論其鬼神の列名は同一のものであるが、詳論すると兩者の間に多少の差異のあるを免れぬ。今左に一表を掲げて、二經を梵本との比較をして見よう。

童子經（餘五、七六）	大千國土經（成五、一六）	梵本（カルカツタ本 F77 (g)）
1 彌酬迦	1 曼　祖	Mañjuka
2 彌伽王	2 鹿　王	Mrgarāja

14 獝狐……………………………熱病下痢	14 獝狐……………………………口頻感縮
15 蛇……………………………數々噫噦	15 雉……………………………咳噦

形狀や症狀に頗る相違のあるものは、元魏時代の譯に成る童子經が、宋初時代に屬する國土經の譯出に至るまでに受けた變化、換言せば國土經の材料として童子經が採用せらるゝ迄に自然に起つた時間經過上の變化であるとも想像出來るし、又國土經筆者故意の轉換とも見られやうが、兎に角大分の變化が認められる。

大千經の譯者は第一鬼と第二鬼が合同して一症を發する樣にしてある、『若曼祖及鹿王魅者令惡吐逆』としてあるが、梵文は明かに二鬼の作用を各別に說きて第一鬼は童子經と同じく、

Mañjukena gṛhitas tu Cakṣuṣi Parivartate

曼祖に魅せらるゝものは其兩眼廻轉す。

としてある、大體此國土經の Mañjuka といふ名は、其初は童子經の彌酬迦『瞬く』'Miṣ' といふ動詞から出た Miṣaka 或は類似の字が展轉寫傳の際に變化したものらしい、是は鬼神の作用から考へても又字象學の方から見ても出來得べき假定である。

此他二經列名の中で面白く感ずるのは童子經第二の彌伽王である是對譯字は梵語の Mṛgarājā 方言的の形で Migarāya 或は Migarāja であつたことを示して居る、卽童子經は或は一種の俗語で書いてあつたのではあるまいかといふ想像が、此字から浮むで來る、また Mṛga 或は Miga は鹿といふ意味と獸類の意義とを有して有つ

◎童子經

	形	症狀
1	牛	小兒眼睛廻轉
2	獅子	數々嘔吐
3	鳩摩羅天	兩肩動
4	野狐	口中沫出
5	獼猴	把捲不展
6	羅刹女	自齧其舌
7	馬	憙啼憙笑
8	婦女	樂着女人
9	狗	具種々雜相
10	猪	眠中驚怖啼哭
11	猫兒	憙啼憙笑
12	烏	不肯飲乳
13	雉	咽喉閉塞

◎大千經

	形	症狀
1	牛	惡吐逆
2	鹿	惡吐逆
3	童子	搖頭
4	豺狗	口吐涎沫
5	烏	牛指拳縮
6	殺羊	長而喘笑
7	馬	不飲其乳
8	驢	睡驚悟啼
9	狗	常咬其舌
10	鸚鵡	噎氣咳嗽
11	猫兒	作種々色
12	飛鳥	穢諸臭穢
13	鷄	咽喉閉塞

此等鬼神の執魅を離るゝ唯一の法は、女鬼共の欲する祭祀を行ひ密語を唱へて攘災するにあるのみだ、而して此等の祭法は實に不思議千萬のもので、其修法に魚肉生熟肉酒等を用ゆる外に、野狐猫兒羖羊等の糞、人骨蛇皮屍髮虎爪などを燒きて香薰となすべき事をも敎へて後代呾特羅の病的持色を思ひ切つて發揮して居る、此經の十二鬼女を童子經の十五鬼神と比較すると、

童子經	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
救療經	―	―	12	―	―	―	―	―	3	7	1	6	―	4	―

童子經の九鬼神は全く救療經に缺けて居り、而して救療經の半數(2、5、8、9、10、11)は童子經に於て見ることが出來ぬ、卽救療經は幾分童子經を資料として居るが又他方面からも異分子を入れて經文を造つたのだ、此事は次に少し解釋を試みて見よう。

五　大史詩と童子經及救療經

印度の醫學に八分醫方 Aṣṭāṅga といふ事がある、卽ち醫學全體を八科に分ちてある金光明經の除病品の偈頌にも一寸之を說いてある。

復應知八術　總攝諸醫方　於此若明閑　可療衆生病　謂針刺・傷破　身疾・及鬼神　惡毒・及鬼童　延年・增氣力（黃九、三七）

て普通 Mṛgarāja は獸王卽獅子や虎を指して居る、童子經に其形を獅子としたのは是から來たのだ、國土經の方では鹿王の意味に取りて其形を鹿に換へてある、此等も一寸面白い點だ。

四　囉縛拏說救療小兒疾病經

童子經を大史詩と比較する前に順序として必らず一瞥すべき祕典が一つある、其は囉嚩拏說救療小兒疾病經である、此經の內容は經文の起首に、

爾時囉嚩拏 Rāvaṇa 觀於世間、一切小兒、從其初生、至十二歲、並在幼稚孩騃之位、神氣未足、鬼魅得便、有十二曜母鬼 Graha mātṛkā 遊行世間、於晝夜分、常伺其便。

とある通りに此十二女鬼が種々の異相を現して小兒を怖鬼せしめて精氣を奪ひて夭殤の慘を見せしめる、卽ち第一鬼女は小兒の初生日初生月初生年に其毒手を揮ひ乃至第十二鬼女は第十二月第十二年に其慘害を逞うするのである、而して其症狀は、實に千差萬別の怖畏すべき惡徵候惡經過を呈する、此等鬼女の名は童子經と大分異なる。

一、摩怛哩難陀 (Mātṛnadā) 二、蘇難陀 (Sunāndā) 三、哩婆帝 (Revati) 四、目佉曼尼迦 (Mukhamaṇḍikā) 五、毘拏隸迦 (Vidārikā) 六、設俱爾 (Śakuni) 七、布多那 (Pūtanā) 八、輸瑟迦 (Śuṣkā) 九、阿哩也迦 (Āryakā) 十、染婆迦 (jambhakā) 十一、必隸氷砌迦 (?) 十二、塞健駄 (Skandā)

じたる惡精にしてよく胎內の兒童を奪ふ、更に動物の王、Surabhi あり、又 Sakuni は地上の小兒を呑噬す、（三三）諸犬の母 Sarana あり常に胎內に存する小兒を殺す、（三五）

此大史詩の抄錄を讀む人は必らず前の童子經の說く所と大關係のあるのを認めずには居られまい、卽ち十五鬼神の中の重なるものは實に大史詩に出て居るもので、第三と第四は實に大史詩の Skanda-apasmara を兩鬼に分ちたもの、第九、第十、第十二、第十四、何れも大史詩の惡鬼女そのまゝを使用し其小兒に對する慘酷なる惡性を直に發展さして居る、また十五鬼神の形相が牛となり獅子となり馬となり婦女となり猫兒となつてるのは卽大史詩に、惡鬼が種々の相を現して小兒を害するといふ觀念が發展したと見たい、特に大史詩の惡鬼中には動物の母、犬の母などがあるのは一層童子經の編纂者に有效な暗示を與へたに相違ない、かくして童子經は大史詩中に存する六鬼を中心として他の諸鬼を集め以て其十五鬼神を完成したるのである、十五鬼神の中大史詩の一鬼神を二鬼神に分つたことが頗注意すべき點なので、パーリ大會經に出る Cittasena Gandhava 犍達婆、質多羅細那を後に出來た阿吒那底經が之を Cittasena と Gandhava との二夜叉に分けたのとよく經路が類似して居る。

救療經の方は大史詩の鬼女が十六年間小兒を苦しむるといふ思想から轉化して夫の十二年に十二鬼母を當歆めた思想が出來たと考へられる、而して諸鬼母は大體之を童子經に取り他は梁婆迦の樣な醫書で有名な惡精、毘拏隷迦の如き富蘭那の鬼女を拉し來つて其後代のものである證據を明示した、而して此經が羖羊猫兒の糞蛇皮など好むで動物の排泄物や骨肉を燒いて香薰とするを說くのは、夫の童子經に說いた十五鬼神の形相が其因をなした

八科の中で鬼神科卽人類に執魅して病を起す鬼神に對する療法と兒童科卽小兒科は別立して居るが其實兩科密接の關係があるので、概言すると一般の惡疫及熱病瘧などが鬼神科の所屬だが、小兒病は一般に執魅に依りて來るとしてある、此考は古代より存在するので、大史詩の中是に關して面白い神話が第三篇森林品 Vana Parvan の第二百二十九に出る。

七仙の妻なる六婦人は鳩摩羅（尸婆の子塞健陀）が天大將軍となりたるを聞き其威德福祿の巍々たるを仰ぎて來りたり蓋此六婦人は其貞淑の德あるに拘はらず、貞操上の寃罪を得て其夫より捨てられしものなり、彼等鳩摩羅に詣りて寃を訴へ其養母となりて福德を得むことを乞ふ、天大將軍之を諾す、諸母玆に於て曰く諸神女今や世界の母として尊敬せられ一切衆生皆彼等に屬す、願くば彼等に代ゆるに我等を以てし、一切衆生をして我等を尊敬せしめ彼等が奪ひ去りたる吾等の子孫を復せよと、將軍曰く事不可なり、されど予は諸母に新しき約束をなさん、諸母曰く我等將軍と共にあらむ間種々の形相を變じて彼等諸神母の子孫を噉はむ之を容すや、將軍之を聞き難色あり彼等子孫に慈悲を垂れむことを乞ふ、其極終に人間の兒童少女十六歲に達する迄は諸母が種々の形相を現して之に苦惱を與ふべきを以てし諸母に授くるに怖畏兇暴の一靈を以てす Ahañ ca van pradāsyami raudram ātmānam avyayam)。此時大暴惡靈天大將軍の身より出で、將軍の命令に應じて大怖畏の形を現す、卽 Skanda-apasmāra 是也、（第二十六頌）此他、羅刹女 Revatī を現す是流產を起す鬼女なり（二七、二八）、更に又 Putanā あり大に小兒を苦しむ、（二九）又魔母 Muknamundika あり小兒の肉を好む、此等は天大將軍の生

已上は全體として品目丈の比較ではあるが讀者は略是丈でも義淨譯が如何に增補され如何に增大したかを見るに充分であらう、而して更に其品々に就きて細密に論ずるに、獨り義淨譯にのみ存して他本には全然缺如せるが頗る多い。

義淨で第十五の辯才天女品も此一つで、特に他本に比して後手の攙入が多く辨才天の信仰が一時佛敎徒に依りて隨分盛むであつた——今では生辯天の信仰が盛大などゝ茶化さずに——證據を留めて居る此中憍陳如婆羅門が此天女を讚嘆した「敬禮天女那羅延、於世界中得自在」已下二十二頌の偈文は一部辯天の信仰家には實に崇嚴に微妙に聞ゆる美しき頌文であるが、此頌文と頗る似た文句が大史詩の中に一箇所あるから、今之を一寸比較することにする。大體義淨譯中の此頌文は他の漢譯に闕けてあるのみならず、梵文にも存在せず而して他の經中にも之を同一源泉の句がないから比較的研究上頗る困難だ。

七　辯才天品と大史詩

辯才天を讚した二十二頌はあくまで印度宗敎の特點を發揮した所、マックス、ミユラーの所謂交換一神敎（Henotheism）の性格を鮮に示す。辯才天は此處で諸神の上首である最勝無過者である大地中の第一である那羅延であると讚嘆される。今此偈文と恰も同じ內容で、其詩や敍述の方法は相違して居るが意味の全然同じき文が大史詩の中にあるのを看出した。卽大史詩第四、毘羅吒品（Virata Parvan）の第六章がそれである。

ものと想像される。

尙此兩經と史詩に就きて今少し論じたいが、先大體にして進むので第二の材料に急行しよう。

六　金光明經の新古

金光明經は吾國では祕密敎上歷史的に頗る重要の經文で且つ其ある方面は確に祕典として見るべき經文であるが、此經は人の知る如く現時漢藏では三譯を傳へ、又梵文も現存して一部分は極めて不完全に誤謬だらけ乍ら兎に角印度で出版になつて居る、梵文と漢譯とを比較すると大體に於て曇無讖の譯は間〻不完全の所あるも全體に於て最古の俤を留め、眞諦譯と梵本は之に次ぎて少しく增加の痕跡が見へる、義淨譯に至りては其攙入の多大なる增補の繁き、他本とは全然面目を異にしてゐる今序だから經文全體品目の比較をして置かう。

品	義淨	眞諦	曇讖	梵本
	1	1	1	1
	2	2	2	2
	3	3	—	—
	4	4	3	3—4
	5	5	—	—
	6	6	—	—
	7	7	4	5
	8	—	—	—
	9	8	5	6
	10	9	—	—
	11	10	6	7
	12	〃	〃	〃
	13	11	—	—
	14	—	—	—
	15	12	7	8
	16	13	8	9
	17	〃	〃	10
	18	14	9	11
	19	15	10	12
	20	16	11	13
	21	17	12	14
	22	18	13	15
	23	19	14	16
	24	20	15	17
	25	21	16	18
	26	22	17	19
	27	23	18	20
	28	〃	〃	〃
	29	〃	〃	21
	30	—	—	—
	31	—	—	—
合計	31	23	18	21

pavitam tvaya (V. 15)（童貞の誓を受けて爾は三種の天を淨めたり）Svarupam brahmacaryan ca visadamsve cari (V. 9)（爾の色身と梵行とは雨ながら穢なし）といふが如きも明に漢譯と符節と合して居る。

辯天の危難災厄を救ふ大功能は、義淨の第二十と第二十一頌に美しく譯されてあるが、大史詩の二十一、二十二頌は同じく突伽の大效用を讃す。

若於戰陣恐怖處、或見墮在火坑中、河津險難賊盜時、悉能令彼除怖畏（頌二〇）

成被王法所枷縛、或爲怨讎行殺害、若能專注心不移、決定解脫諸夏苦（頌二一）

笛は曠野に住する人々、大海を渡る人々、怨賊に囚はれたる人の大避難處なり（史詩二一）

大神女、水を渡り、森林曠野を過ぐる人、一たび爾を專念せば決定して再たび災厄に逢ふことあらじ（史詩二二）

此專念の思想は實に注意すべき點で漢の念者皆與爲洲諸と、梵の Ye smaranti mahadevi na ca sidanti te narah とは同意味である、尙又漢譯第二頌の「吉祥成就心安穩、聰明慙愧有名聞」を史侍第二十三頌後半の "tvamkirtih srir dhrtih Siddnir hrir vidya santatir matih と眞によく相合して居る。漢第六頌の孔雀羽旗の事、第七頌頻陀山の讃も史詩の第十四と第十八に出て來る。

已上の比較で義淨譯の辯才天讃は、其藍本が大史詩毘羅吒品第六章であつたことは、略想像がつく。卽實伽女神讃嘆の十段を取り來りて、之を新形式の辯天讃歌に轉用したのである。漢譯讃歌の序文に、

此章は般陀婆の五王子が流浪の生活を續けて其名を變じ、將に毘羅吒の美はしき都府の域門に入らむとするとき、其中の長者、王ユディシュティラ (Yudhisthira) が自在天妃突伽 (Durga) を讃嘆して其恩寵を被りしことを記し、全章が三十六頌ある。全體を割つて見ると

1　第一頌至第六頌……序（突伽の德相、王の禮拜）
2　第七頌至第二十六頌……王宗（王の女神讃の偈頌）
3　第二十七頌至三十六頌……流通（女神の感應と恩惠）

先づ史詩序文の方から見て行くに、此中旣に辯天品の或部分と同じき內容の存することを認める。

權現牧牛歡喜女（頌一〇）——Nandagopa-kule jatam (V. 2)
或現婆蘇大天妹（頌　九）——Vasndevasya bhagitim (V. 3)

正宗の讃文に入りて、突伽の德相と辯天の德相とは、其の文句まで似て居るのがある。

面貌猶如盛滿月（頌一四）——Purna-cardra bharane (V. 8)
於軍陳中戰怕勝（頌　三）——Sangrane ca jayaprada (V. 17)
於王住處如蓮華（頌一三）——Bhasidevi yatha padma (V. 9)

それから辯天が加特力教の童貞マリヤの如く全く清淨純潔の處女で、如少女天常離欲（頌十八）、於諸女中最梵行（頌一三）も明かに史詩に出で、而も此德を餘程特點にして讃して居る Kaumaram vratam ashaya tridivam

馬鳴菩薩造の佛教脚本

（明治四四、新佛教第十二巻第十二號）

去年の一月、霜風寒きスプレイの河邊を後に和蘭に出る前の半日、古物人類學博物館でミユーラー、ラコツクなど西域研究では日の出の勢の諸先生と快談し、高昌の故地から新に蒐集した巨大蒼古の壁畫や、珍奇な佛像佛具、また豐富なる梵漢回訖の古寫經を觀て、懷古の想を別天地に馳せ、流涎萬斛、殆ど歸るを忘るゝ情があつたが、當時伯林大學の新教授ドクトル、リユーデルスは一室で孜々屹々一つの貝葉斷片を研究して居つた。滿身渾て精力といふ樣な方面大耳の獨眼龍は、烱々たる其片眼を光らして、獵夫が巨大の獲物に遇つた樣に、如何にも熱心、如何にも希望と喜とに充ちた態度であつた。却後一年有半教授の豫想は事實となりて驚くべき成績は俄然として學界を驚かした。それは馬鳴菩薩造の佛教脚本である。

教授が其の成績を發表したのは、詳くは本年の普國學士院の會報に前後兩回出で、その通俗に抄記したのが萬國學藝週報の第二十二號に公表されて居る。今已上二者に依りて此佛教史及び一般印度文學史上極めて重要な一發見を略して紹介して置かう。

カーリダーサや、ブハワブフーチの雄麗琦瑋の諸傑作は、印度は確にシニークスピーヤやゲヨエテに恥ぢざる誇を持つ。然しその歷史上の位置からいふと、文獻の中には隨分古いことが推測出來ても、作物の上から見ると

我今更欲依世諦法讃彼勝妙辯才天女

とある。世諦法の意義は種々に考へられやう。其中大史詩――佛教徒の見たる世俗文學に依りて辯天を讃したといふ意味にも取れはせまいか。

已上提供した、極めて粗雜不完全の材料に依りてすら、吾等は少くとも佛教聖典史上に一種の暗示を得たことゝ信ずる。而して之は人文史や宗教上の上に密教に關して一二重要なる問題の解決が此中に含まれて居うと思ふ。護諸童子經の原材と思はるゝ大史詩森林品の天大將軍神話では、自在天教の一面を代表すべき魔精や神母の信仰が如何に巧に祕密教に注入し來たといふ點に少からぬ興味が起らうし、毘羅吒の第六章は女神崇拜が祕教とは常に離るべからざる連鎖であることを說明する一の證據にならう。

此篇は、本月上旬、梵語學會に於て講演したる大要を、二週の後、追想筆錄したもので、學會で述たので落ちた點もあるし、又新に加つた所も少くない。時間極めて乏しき今の私には、淨書して文を練ることが出來ず、極めてザツト書流しのまゝ剞劂に付した。參考書なども無論今度一切擧げることを略した。極めて粗雜不完全の所は終に臨みて深く識者の海恕を乞はずばなるまい。(六月二十日)

た。卽ち馬鳴は單に印度文藝史の上から見ても、多方面なる不朽の一大偉人として現れて來た。

リューデルス教授が調べた貝葉は、凡そ百十枚ばかり何れも半ば潰壞腐蝕して、葉數などは大抵分らぬ。書寫の文字はクシヤナ（Kuṣana）王朝の文字で、此の文字で書かれた寫本は從來まだ一つもない。王朝の年代は歷史家に尙異論があるが、大抵紀元前五十七年から紀元後約百五十年頃迄に至るとしてある。卽ち古寫經としても世界最古のもので、今まで意張て居つたバワー發見の樺皮寫經などはずつと後になる。

此亂雜困難の斷片をリューデルス教授は其夫人と共に苦心整理した、英國のリス、デギツ先生が其夫人の助力で、今は研究の發表も、パーリ出版會の事業も、着々として成功して居る樣に、リューデルス教授も此美しき內助者ある點は確に學者の幸福と羨まねばならぬ所であらう。さて此斷片を整理した結果、之がある佛敎叢書の一部であるといふことが知れた。大方、何か全集ものか、叢書樣のものが古代にもあつたのであらう。丁度、夫の「賢愚經」や、「デギヤ、アベダーナ」が佛敎の訓話や譚の一大叢書であるやうに。

此叢書の中に佛敎的の戲曲が三種ある。第一は外題が湮滅して分らぬが一種の表徵劇である。「智惠」と「確實」と「名譽」との三天女が——多分色彩に滿ちた林の中か何かで——飛翔しつゝ佛德に關して問答する。一寸ワグネルのニイベルンゲン最後の幕で、過古未來現在を標示して居る三地神女（ノルフナン）の問答を思はせる。此人間の精神作用を表徵した戲曲の最も發達したのは、十一世紀頃の作、「智月昇登」（Prabodhacandrôdaya）で、天啓、意志、理性などを人格化して毘紐派の信仰を鼓吹して居るが、佛敎劇に早く旣に此藝術的の企があつたのは、餘程

希臘に比べて遙かに後代のものとなる。アリストフアーネスと、カーリダーサの間には非常の長い時間の距離がある。其爲、印度戯曲は希臘の影響を受けて始めて發達したとする論者も可なりにあつて、學界で隨分優勢を占めて居る。「マハーブハーシヤ」の中に一二の戯曲は擧げてあつても、それは今現存せぬので、實際の所は千古の詩聖カーリダーサを以て印度戯曲文學の開祖として見ねばならぬ。而して此の詩聖は世親と殆ど同時、ある說に依れば因明の大達者たる陳那論師と筆戰の陣頭に立つたことがある。

佛教戯曲となると尙新しい。博士高楠順次郎氏が、よほど已前の「反省雜誌」に美はしく和譯した、彼の『龍王の喜』(Nāgānanda) が今の所唯一の完全なもので、之は義淨が南海寄歸傳の中にも記した如く、戒日大王の作である。大王は玄奘と同時の英主で、文藝を非常に奬勵した詩の大保護者で、また有名な戀愛劇、『寶瓔珞』を書いた。玆處で從前の文學史の見方からすれば、佛教劇はどうしても世俗劇の模倣で、シヤクンターラー、やムルチヤカチカを粉本として、之を佛教宣傳の一助に驅使したもの、佛德讃嘆の善巧に應用したものと斷ずるより外、道はなかつた。

然し、此等の假定は馬鳴造佛教劇の發見で根本から破壞されて了まつた。第一に印度劇は遠く紀元前一世紀迦膩色迦王の時代に既に存在したこと、第二に其劇が佛教劇であつたことと云ふ動かすべからざる事實は、實に印度劇史上の一大革命と云ふてよい。而して之と共に馬鳴論師の性格と功業とが益鮮かに發揮されて來た。佛所行讃、大莊嚴論の上で見た其雄渾放膽な史詩的若くは叙情詩的の大手腕は、その作の戯曲で愈その大を加へて來

るが、新發見の佛教劇には此方言の最も古い所、卽ち紀元一世紀時代のプラークリツトで書いてあるので、言語學上非常の珍材であり、また大に價値の存する所だ。卽ち此れ等舞臺に現はるる無教育者の言語は、摩竭陀方面若くはスラセーナ方言の初期に屬するもので書いてあつて、夫のジャイナ教徒が、古典に使用した摩竭陀方言と、其古さに於て伯仲の間にある。これは言語學上極めて重要な發見である。（十月十九日夜）

注意すべき現象といはねばなるまい。第二は一種の社會劇で、一人の比丘を中心にして、英雄も出れば奸惡のしれものも躍る。マガドハヴティなど云ふ妓女も現れ、舍利子も顏を出し、苦行者あり、婆羅門あり、随分賑かな芝居であるが、佛教信仰の直接的問答などはない。全部ないから一篇の大旨も結末も判らねが、兎に角餘程巧なものであることは爭はれぬ。第三は、舍利弗譚（Śāriputra-prakaraṇa）といふ外題もあり、作者の名を明に記して「金眼の子馬鳴」と銘打つてある。文體語法其他から見ると前二者と同一で、特に佛所行讃などと、同一筆法の存する所を、かのクシャナ王朝の寫傳といふに照らすと、疑ひもなく馬鳴の作で、作後直に佛敎徒の間に喧傳して、中央亞細亞までも將來されたことゝ推せられる。此劇の大要は大阿羅漢舍利弗が歸正入道を材料としたもので、劇としても實に好材料を撰むだものと云はれる。舍利弗が其友人目連に會して大に論辯し、遂に歸正するの一齣は、リユーデルスの報告に依ると最も雄麗を極めたものだ。

印度最古の劇詩——馬鳴造の佛敎劇は此他に尙幾多の面白い事實と材料とを吾人に供給する。一つは印度劇には重要缺くべからざる特點の一つである道化役 Vidūṣaka（之は「シヤクンターラー」や「龍王の喜」の譯書を讀めば直ぐ其巧妙な反映的な舞臺上の妙用と價値とが判るが）が既に馬鳴の戯曲に充分に使用されて巧妙を極めて居ることで、之は一般劇史の上にも看過すべからざる重要の事實である。今一つは印度方言研究の方面にあるので、大體印度劇は二種の語を使用し、王侯僧侶學者などは梵語で科白を云ふが、婦人奴隷などの無敎育なるものゝ言語としては方言を使用してる。之はカーリダーサを始めとして、印度劇特點の一つとなつて居る原則であ

密教の發展に就きては今まで別に時期の分類などした學者もなく、勿論其宗の專門家が果して今論ずる様な發展歴程を認許するや否やは別問題であるが、兎に角聖典史の方から見ると次の三期に分けることが便利の樣だ。聖典史上の分類は別の意味でまた教理史上の發展にも應用されやう。

(一) 初期の密教

密教發達の歴程を考ふるに其初めは極めて簡朴幼稚のものであつて、小乘教阿含部の經典から發芽して一種の變色の花を開いたことが歴々と眺められる。

所謂原始佛教に於ても既に諸天善神への讃嘆や感謝といふことはあつた。隨て之を佛教守護の神明として祈願した形跡も見へる。例せば印度吠陀時代の神の帝釋(因陀羅)や梵天(ブラフマ)や、婆羅末那時代の護世天の信仰即四王天や、吉祥天などは常に讃嘆の對象となり、又夜叉羅刹鬼神、龍神などいふ種類も護教の神明として崇敬された。この形跡を最もよく後代に示して居るものは長阿含の大會經(Mahasamayasutta)で、當時の佛弟子が印度の古神明古鬼神に對する信仰が美しい偈文の上に鮮明に映じ出て居る。

此經は天龍夜叉健闥婆等の諸神諸鬼が四方より雲集して、如來說法の會座に參じ佛教を守護するといふことを叙述したもので、大會といふ名は之から來て居る。此大會經と同種類の聖典で一層詳密なるものが阿吒那胝經(Atanatiya sutta)である。此經は大會經を基礎として一層諸神諸鬼の網羅を力め、且つ之に對する崇拜の態度

密教の發展及其原文

（明治四五、一、東洋哲學第十九編第一號）

輓近佛教研究家が密教の方面にも注意を向け來り、三密四曼の研究は次第に隆昌に赴き、四十四年學海の一大潮流として見ることの出來る程、目立つた著書――秘密大辭典の樣な――も出來、密教研究會の樣な運動も開始された。こは佛教界の爲に先々慶賀すべき現象といふてよからう。其處で此潮勢に立ちて密教發展に關する一二の事項につき講演することも強ち徒勞であるまいと思ふ。

元來この密教といふものは教理史上餘程面白い位置にあると共に、教會史の方面でも頗勢力を有して居るもので、現に日本の如きは勿論、印度教系密教のニポール、喇嘛教系の西藏蒙古滿洲等に於て深く民心を支配して居る。唯支那本部は昔日の隆盛に引きかへて明以後は全く傳統を失し、研究もなく信仰もあまり盛でない樣だが、其光輝ある過ぎし昔の盛大は、漢譯大藏經中厖然たる卷帙が嚴存して居るのを見ても判る。

今日の講演は主として聖典史――更に適當に云へば聖典批評(テュストクリチック)の方面から密教の發展を見、次で其經文の原文はどんなものだらうかを一寸講述する積りである。

一　密教の發展

遊樂に耽溺して守護呪を誦することを忘れた爲獵師の手に落ちたといふ話を記して居る。此等の原始的佛教中の二大秘密教要素――多神崇拜と神咒とを湊合し之に孔雀本生其他を脚色に加へて出來たのが卽孔雀王經で、此經が日本密教史上に重要なものであることは一寸日本佛教史を讀むだ人の首肯する所であらう。而して秘密教發達上には此經は實に重要のものである。孔雀王經と同系の密教、灌頂經中に含まれた數部の秘教、持世陀羅尼などいふ者が卽第一期の密教を代表するものである。此期の特色を云ふと。

1　大小兩乘の區劃極めて曖昧なること

義淨三藏は孔雀王經が大小兩乘の教徒何れも之を崇拜讀誦することを記し遺したが、全く共通、孔雀王經は大小兩乘何れへも使へる。明瞭な大乘的特色は毫も此經に見へぬ。佛菩薩では七佛、彌勒、神明では梵天帝釋四天王天龍夜叉等槪ね大小共通のものである。勿論ある點では著く魘鬼崇拜が發達した形跡を見出さぬでもないが、槪して大小兩乘の區劃は甚しく曖昧である。

2　諸佛諸神の系統なきこと

第一期に於ては諸佛諸神が唯雜然紛然として陳列されて居る。孔雀王經を見ると、丸で一種の佛神龍鬼の亂雜な姓名簿を見る感がある。中心もなければ無論系統もない。丸で一種の古佛像の八百屋を見る様なものだ。雜集といふ考はあつても彙類といふ點にはまだ達して居らぬ。後來發展した密教から見ると單に材料蒐集の時代とも云はれやう。

が更に深くなつたもので守護呪（Paritta）などの考へさへある。漢譯の長阿含には此經がなく、且つ單行本が支那に一時あつたのだが、今は亡佚して、僅に此經から發展した毘沙門天王經に其俤を留めるのみだ（此事は數年前の哲學雜誌に研究を發表した）。此二經は密教發展には忘るべからざる二大根元である。卽後代密教の包含的曼陀羅思想、諸神崇拜の多神教的傾向が此二經に胚胎して居る。次に前に一寸云ふた守護呪の考へだが、之も原始佛教聖典の中に認めらるるので、夫の律の Cullavagga や增一阿含の中に出る新學比丘が蛇に螫されて死むだ時の佛の說法である。此話は漢譯の律部にも出て居るから其中比較的古色を存する四分律を引かう。

爾時佛在王舍城、諸比丘破浴室薪、空木中蛇出螫殺比丘、時世尊慈念告諸比丘、彼比丘不生慈心彼八龍王蛇是故爲蛇所殺何等八毗樓勒叉龍王……次名提頭賴吒龍王、比丘若慈心於彼八龍王蛇者不爲螫……、聽作自護慈念呪毗樓勒叉慈、伽寗慈……今作慈心除滅諸毒惡從是得平復斷毒滅毒除毒、南無婆伽婆、

此同一の談は五分律二十六（張二、五二）、大衆律二十（列九、三八）チュラヴガ一、一〇九（東方聖書二十、七五）、パーリ增一、六七、パーリ本生經第二百三番（二卷一一四頁、英譯第二卷百頁已下）に出るが、此中で注意すべきことは毗樓勒叉龍王に慈心を起す云々の守護呪で、一切衆生に對して慈心あるものは儒教に所謂仁者に敵なしで（法句經にも此至文がある）自ら暴惡獰猛のものも降伏するといふ佛教博愛の大精神を說いたものが、轉じて其文句自身が價値あるものとなつたのだ。本生經中にも守護呪のことはよく出る。孔雀本生などは其適確の一例で、雪山のある孔雀王が朝暮二回太陽に對して三寶歸命の守護呪をかゝさず誦して常に安穩に過ぎたが、ある時彼は孔雀の牝どもと

密教は先づ大日教であらう。勿論、第一期と第二期との間に屬する過渡期の諸秘經も玆處で一寸論じて置く必要があるがそれは今ぬきにして直に本期の特色を少し臚列して見よう。

1　截然たる大乘的特色

第二期の祕經には般若や華嚴あたりの教理を採つたのが歴々と見え、語句は勿論其內容に劃然とした大乘の輪廓を具へて居る。菩提心を說くこと、眞如を談ずること、事々無碍の極致を明にしたこと、教理行果の四、何れも小乘に混同することの出來ぬ立派な區劃がついて居る。

2　諸尊の系統的排列

第一期の密教諸尊は全然無秩序の排列であつたが第二期には整然たる排列が出來、組織系統も立派に見らるゝ樣になつた。金光明經其他假に云ふ過渡期の密經に見らるゝ五佛は、大日を中心として全パンセヲンの首腦となりて玆に一切のものが輪圓具足の一大曼陀羅に收められ攝せられて了まつた。亦三部や五部などの系統も生じ、諸神諸尊も夫々其配當が定まる樣なことゝなつた。此點を詳しく論じて密教々理の完成といふことも他面から言へる。

3　密教的特有の諸尊

第一期に於ては密教特有の諸尊が殆ど見ることが出來ず、多くは大小共通の諸尊に留まつたので、此期には不動や大威德や其他葉衣や靑頸の樣な觀音諸尊、一字金輪、不空羂索の樣な純密教的諸尊が崇拜の對象となつて來

3　供養儀式の不完全なること

第一期には後代所謂身口意三密の中、口意兩密はあるとしても身密中の肝心な印相といふものが殆ど說かれてない。隨て供養儀式は極めて不完全、諸尊の秘呪も一定せぬ。

4　純密教諸尊の缺乏せること

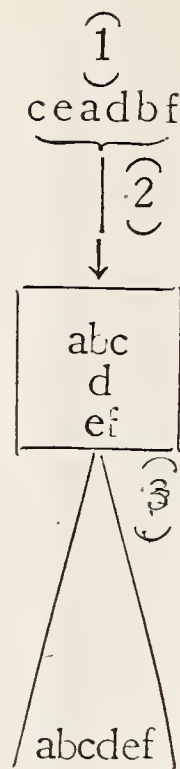
これは第一の項下で論じてもよいのだが、第一期の密教には大日や大威德明王や大隨求などいふ純密教的の代表尊が全くない。且つドラビダ人から影響を受けたシーバの猛惡の諸形の魔鬼崇拜は僅に存し、諸神女諸神母の崇拜も丁度摩訶婆羅多の初期を見る樣に極めて一般的に其可畏可怖の形相を供養するまで、之が經中の主要なる位置を占むるとか若くは之が代表的のものであるとかいふ――例せば不動や摩阿迦羅天が後代密教に幅を利かして大分好い面になつて居る樣なのとは一寸趣がちがふ。

（二）第二期の密教

第二期の密教は一面實際方面から見ると婆羅門教の信仰卽ちウパニシヤツトや摩訶婆羅多に顯はるる俗信を採用し融合した點が著く、特に儀式方面で大分吠陀已來の修法を繼承し、またドラビダ人の摩鬼崇拜が著しく影響して居る。そして純密教的の代表的諸尊が出來た。又他面には第一期に全然見ることの出來ぬ理論方面が著しく發展して諸尊の系統的排列が出來た。第一期の材料蒐集に對して此期は材料整理の時代であらう此期を代表する

之は勿論前第二項に一寸申した通り教理の完成、パンセヲンの系統的排列、第五の儀式供養の完全から必然起るべき結果であらう。

（三）　第三期の密教――分科的發達

第一期は混雜せる群集のパンセヲン、第二期は之に整然たる系統が出來た時代だが、第三期は第二期で系統的に秩序整然たる曼陀羅から一々の諸尊が各別に分科的の發達を遂げた時代である。圖示すると、

といふことゝならう。換言すると第二期で綜合された諸尊が一々其特色を發揮し來りて分解的に發達し各分科的のものとなつたのである。一寸例を取ると、第一期で紛雜なる群團中の毘沙門天は第二期で曼陀羅中に系統的に排列せられ、第三期に至れば其供養式も出來特別に毘沙門天王經の様な經文も誦出された。其他毘那夜迦にしろ荼衣にしろ此期に至りて特別に精細の供養法などが出來て居る。單に諸尊ばかりではない般若とか法華とかいふ大乘經も此期で特別な供養式が說かれて來た。

第三期は一面かくの如く分科的發達をして居ると共に、他面には極端なる表徵主義若くは圓融主義の理窟を說

た。

4　包含攝入の廣濶

第三に聯關して一寸申して置かねばならぬのは第二期に於ける包含攝入の雄大なることで、摩訶婆羅多に顯はれた俗信は大抵密教に混入し來り、其已後の富蘭那文學の諸神話も盛に秘經秘軌の中に見らる。其中一つ有名なのは夫の聖天で、馬頭觀音や不動の如きも亦此類に屬する。それから此項下で一寸記して置きたいことは大小乘混同時代の諸尊は著しく勢力を失墜し特に小乘教に代表的の諸尊は其地位を新來の婆羅門諸神に讓る樣になつた事である。卽ち第一期密經には頗重要であつた過去七佛の如きは其勢力が全く失墜し去られて、焰鬘得迦や不空羂索の樣な婆羅門教的色彩のものが大勢力を得、また婆羅門的の金剛手などが一躍して至要の地位に昇つたことである。之は研究すると中々趣味のある問題である。

5　儀式及供養の完全

第二期密教は著しく婆羅門教、主に婆羅摩那（ブラフマーナ）や家經（グルハスートラ）の修法を大に活用し、供養や儀式が頗る完全複雜になつて來た。それから印契の應用が必然的の要件となつて、咒と印と必らず並立せねばならぬことゝ定つて了つた。

6　大部密典の編輯

第一期の密教聖典は極めて小部のものであつたが、第二期の聖典は卷帙廣大、章段の組織整然たるものとなり、隨つて本經と儀軌、卽ち大體の教義を述べたものと供養法を專門に記したものとの區別も生ずることゝなつた。

印度の二大革新教

佛教及びジヤイナ教興廢の白描

（明治四五、五東洋哲學、第十九編第五、六號）

カーライルが雄渾の氣魄と、火焔の樣な筆勢で記された、夫のルーテルがヴォルムス會議の一章を讀むものは、誰れでも血湧き肉躍りて奮然として蹶起せずには居られまい。此絶大な天地を貫く快事のあつたライン河畔の古い都市には、今や昔時の傲りを留むる大改革の紀念像が雲を突かむ計りに屹立して居る。――大ルーテルを中心にして其四面には當時の革新運動を極力保護した敬虔勇猛な獨逸の侯伯や、同時の宗敎改革者、フツスを先驅にカルビン、メランヒトン、サヴナロオラ迄もぐるりと雄偉な姿を見せて、明かに鮮かに其時代の大勢を語つて居る。

ルーテルの時代には、此巨大な一恒星を中心に幾多大小の遊星や或は彗星が漲り來り溢れ來る。革命の雲氣に乘じて競ふて爛々の光を放射した。が、然し斯る雄麗な現象は決してワルトブルヒの森林の中ばかりではなかつた。コンスタンツの湖の側ばかりでも斷じてなかつた。何時でも、春風一たび到れば桃紅李白薔薇紫、二十四番の名花、嫌でも應でも咲く樣に、吾が中世の鎌倉でも實に歐洲中世の通りであつたのだ。否、歐洲や日本の新しい事實や歷史ばかりではない。遠い遠い神話の樣な大昔、ガンジスの長江が滔々と流れてヒマラヤに千古の雪の

いた哲學的文學が出來て印度に於ける密教否佛教滅亡前の最後に奇異なる色彩を縱にして居る。即ち極端なる肉慾主義と至眞神聖の妙理とを同一にし若くは不淨臭穢の物件を供養に使用する等驚くべき奇怪不思議の修法を說く、此の末期の代表とすべきは實に一切如來金剛三業最上祕密大教王經 Tathagata Guhyaka である。

如來三業祕密經の中には日本にあつた立川派の邪法なことが書いてある（漢譯には流石此部分は缺譯してあるが梵本には現存する）汚物を食物とし人畜の骨などを護摩の中に焚くなど云ふことも、他の第三期の秘經中には別に珍らしくもないが、此經は特に詳密に此等醜怪なる修法が說かれる。密教も玆に至りては方に病的狀態に陷つた。この病的狀態は西藏喇嘛教の紅衣派があくまで極端に實行して惡毒を流したが、今尙此種の教義は、ニポール、西藏あたりでは決して珍らしいことではないのだ。

第三期の特點はかゝる病的現象があると共に、女性崇拜魔鬼崇拜が極端まで發達して頗る奇怪猛烈な神像を崇拜し、また起屍鬼法などを行つて、死人の屍を捨てる尸陀林に行き、新死骸に修法し、之に起尸鬼(ベータラ)といふ死屍に魅(ツ)く鬼を呼びて、死骸を直立せしめて種々の願望を成就するなどいふ奇怪至極のことが麗々と說かれ、亦實行された。これは現に漢譯の祕密經中に見ゆるのみならず、印度の有名な譚の大集カータサリツトサーガラや、起屍鬼譚など云ふ文學上の書物にも見へる。

戰の布告である。卽ち一面には毘舍、首陀羅族の自覺と他面には刹帝利が婆羅門に反對して奮起した陳勝呉廣の呼號である。ウパニシヤツトを見ると、夫の何事も婆羅門に唯命惟從ふた刹帝利——マハーブハーラタの班足王の譚などでよく判るが、ヘンリー四世が、羅馬法王の憤怒を和むる爲に、三日三夜跣で雪中に立つて罪を謝した中世歐洲法王の權威と、印度吠陀末期の婆羅門族の威力とは同一であつた。而して彼三重の法冠の下に屈服した歐洲中世の王公と同じ屈辱壓制を印度の刹帝利族は忍ぶべき運命であつたのだ。ウパニシヤツトの中に見える奮起と努力とは恰もルーテルの出る前のフツスや其他の革命運動と步調が一つだと解釋される。而してルーテルの革新宗敎が一面自由思想の開拓を思想史上に意味すると共に、政治史上、法王政治から歐洲諸國の獨立したことの功績は誰れでも知つて居る。此知られた事實が、實に昔印度にもあつたのだ。

ウパニシヤツトの中に出る、縱橫の機辯、深遠の學識、堂々として萬象卽一の妙諦を說き去り說き來る大哲人、ヤージユナヴルキヤ、幾多の婆羅門學僧を生殺與奪思ふ存分鋭き機鋒に翫弄して、悠然として我卽梵の玄旨を敎ゆる大王ジヤナカ、此二大偉人は實に前述二大方面の代表者であるが、此時代幾多の小ヤジユナヴルキヤ、幾多の小ジヤナカ王が雲の如くに起り、潮の樣に群り立つたのだ。而して來るべき大革命の準備をしたのである。印度哲學史上若し雄大痛快の時代如何と問ふたなら恐らく此ウパニシヤツトの時代であらう。——今玆に述べ樣とする二大革新敎卽佛敎とジヤイナ敎は實に此大氣運が生み出した二大結晶である。幾多の陳勝呉廣を先驅として顯はれた漢高と項王とである。

冠美しい、あの夢の様な印度でも實にそうだつた。

祭火の焔は朝な夕な敬虔の至情と共に、雲の如くに天に沖し、蘇摩の芳烈な香は、力强い讃歌と共に泉の如く漂つた。吠陀諸神全盛の時代も、人性に萠す不斷の進步と自由の討究に、何時かは其神威を失し、丁度希臘オリムポスの諸神がクセノファーネスが、大獅子吼の一聲で脆くも哲學史上全滅に歸して了つたと同じく、流石のインドラ（帝釋）もアグニ（火神）も、ヴルナ（穹窿の神）も、偉大なるスーリヤ（日神）も美しきウシヤスもアシュギンも憐れむべし、懷疑、無信、嘲笑の中に其權威を葬られて、渾て是、單に『無限』――アディチイーの一部分、不可見至上者の發現（マニフエスタチィン）に過ぎぬものとなり、遂に一種の傀儡となつて仕舞つた。玆に於てか民間信仰は轉じて神學となり、神話の夢は破れて哲學の覺醒が來た。この覺醒は步一步に明確に進步して遂に『我卽梵也』Aham Brahma asmi『如是實相卽是爾』tat taom asi といふ樣な偉大な汎神論に到達した、是が卽婆羅末那の儀式文學を通じて發展したウパニシヤツトの哲學だ。

（二）

ウパニシヤツトの哲學は、二つの方面から舊思想に對する革命の嫩芽を認むる事が出來る。第一は卽ち舊敎權に反抗する自由思想の旗揚げで、第二は舊制度、舊社會を破壞する、新組織の努力である。第一は思想史上の革命で、吠陀の敎權、儀式神話に對する强烈の打破である。第二は政治史上の改新で、階級制度の破壞、心靈上全く奴隷の憐むべき狀態に陷つた賤族の自覺と、特に政治上非常の抑壓を忍むで居つた武人族が僧侶閥に對する宣

善神偉人を地上に下さんとして、先づ靈を婆羅門族の一貴女に托胎せしめたが、天帝釋之を聞きて以ての外と立腹し一體婆羅門族からは決して救世の大聖は生れたことはないと氣張り出し、折角落着いたマハーギーラの靈はドッコイソウはいかぬと刹帝利種の貴女トリシャーラー卽ち悉達陀王の妃の胎內に轉居せしめたことになつて居る。是などは政治的の意義から見て實に面白い。且つ婆羅門族に對しては隨分皮肉な傳說といふてよかろう。

（三）

佛教の經典に依るとジャイナ教の方が少し前に出來た樣だ。開祖マハーギーラの傳記に就きては佛教との歷史的關係上隨分調べねばならぬ點が澤山ある。其一つ二つを擧げると、ジャイナ教祖の父の名は釋尊の俗名であり、釋尊の妃は耶輸陀羅で、マハーギーラの夫人は耶輸陀である。此等は偶合と云へば夫れ切りだが然しまたこんな點は二教の實際の歷史から調べると何れかに混合か模倣があつたらしく考へられぬでもない。然しそれは今略すとして釋尊出世の當時佛教の宣傳に方りて其勁敵たりしものは舊來の宗教は固よりであつたらうが、實際手强い敵對をしたのは尼犍子の一派ジャイナ徒であつたのだ。而して是が政治上に幾多の波瀾を生じて居る。頻婆娑羅王の悲劇などに佛教聖典では阿闍世の簒奪事件が佛教內から出た新派の提婆との關係である樣になつて居る。無論これも事實であつたらう。然し王舍大城には此當時に佛教對ジャイナ教の暗鬪があつたのがどうやら事實らしい。之が少くとも悲劇の大原因の一つになつて居つたらしい。是はジャイナ文書の方からヤコビ教授などが眼をつけた點だが、恐く正鵠を得て居るだらう。頻婆娑羅の佛教保護に對し、母方摩竭提の韋提希家はジャイナ教祖

（二）

ウパニシヤツトの末期に幾多の哲學者思想家が出たことは、佛教の聖典にもジャイナ教の經書にも見へる。佛教では通途九十六種と數へて居るが、古い所では之を六十二見にしてある卽ち六十二種の哲學である。之は梵網六十二見經の中に詳しく說かれてあるが、佛陀が終始議論をしたのは其中の重な大師である。此大師は中には富蘭那迦葉の樣な婆羅門族の純粹な人もあるが多くは刹帝利種である。大師の事は漢譯の佛典にも出るから今其見解などは玆に縷述することは略することゝして、ジャイナ敎の方では諸經の中に四種に分ちて三百六十三の異義を擧げて居る。第一種はジャイナ學語で Kriya vāda といふので意志の自由、道德上靈魂の責任、轉生の三箇條を認むる學派を指すので概して云ふと常見之が百八十に分れる。第二種は Akriya vāda で之は前の三ヶ條の中一部若くは全部否定するもので之に八十四種ある。斷見に屬して物質論で大概はある。第三種は Vinaya-vada 卽實踐學派で智力を第二として實行を重要視する一派で孝順信仰等を敎へ苦行戒律を說く學說である。之に三十二種を擧げてある。第四種は Ajñāna-vāda 不可智論若くは懷疑學派で六十七種ある。此の如くに多數の哲學說が出で其當時は互に論難して居るが、然し此等諸派の中に殘存して偉大の勢力となつたものは唯二つ、其一つは世界的の宗敎と發展した佛敎で、他の一つは卽ち猶一部印度の民族に慰安を與へて鞏固の勢力を其母國に維持しつゝあるジャイナ敎である。佛敎の開祖釋迦牟尼は迦毘羅城主淨飯王の王子で刹帝利の錚々たるものだ。ジャイナ敎の祖マハーギーラは同じく刹帝利族で、摩竭陀の一王悉達陀の子である。而もカルバ經の聖傳に依ると諸天

天の有樣となつた時であつたのは、無論佛陀人格の偉大な感化もあらう。二王が崇高純潔の信念の外別に論ずべき餘地もなからうが、然し一回政治的意義から兩教の性質を考へて見ると餘程面白ひ考察が出來る。

佛教とジヤイナ教はともに印度革新宗教の代表者、言はゞ東西の兩大關と見立てるべきものではあるが、然し二教の性質上餘程相違した點がある。第一は教理の點であるが、佛教はウパニシヤツトの我論に對して何處までも無我說を立てゝ之を鮮明な大旆の標として居る。ジヤイナ教も五諦の法門、上轉下轉の說に隨分思ひ切つた新說を立てゝは居るが命者(ジーク)を立てゝ我を建立することは婆羅門哲學を其まゝに使用したものと見てよい。少くともジヤイナ教は佛教に比してウパニシヤツトの根本思想に近い點がある。第二には實行上其苦行主義が婆羅門教と餘程親しいものであつて、此點から見ると佛教の非苦行主義は全然新しい形式であると言はねばならぬ。此の如くにジヤイナ教は新運動ではあるが、佛教に比べると餘程舊式の色彩を留めて居る。幾分古い酒瓶に新酒を盛つた佛が見へぬでもない。玆に於てか根本的の革新運動を欲する。人心の傾向にはどうも少し物足らぬ點がある。ジヤイナ教の佛教に比して勢力を得ることの出來なかつた點は確に此處である。新氣運に乘じ新勢力を振作し樣といふ烱眼の經世家は早くも此思想上重要の點に着眼せぬ筈はなかつたらう。

次にジヤイナ教徒は佛教ほど思切つた階級打破をやらぬ。佛陀の聖弟子として活動した中には賤族出身の人が頗る多い。律藏傳持の大德優波離の如きも正に其一人である。女弟子の中には蓮華色の樣な佛教式のマグダレーナも居る。然しジヤイナには此の如き人がなかつた。其爲教國の純潔を保ちて佛教の樣に佛滅早々分派が彼方に

の母の出た家だから、隨つて內部にはジャイナ敎が可なりに根を張つて阿闍世は政略上どうしても此等の歡心を買はねば自分の野心を遂行することの出來ぬ狀勢であつたらしい。此の如くに佛世尊の在世にも佛敎とジャイナ敎とは單に敎會に起る宗義上の論爭ばかりではなく、又政治上に種々の暗鬪があつて之が兩敎の興廢に影響した痕跡が朧げながら窺はれる。

かの佛敎のコンスタンチイン大帝は、其三寶を信じ、幾多の勅碑や磨崖の告文で、不朽の事業を殘した前には、實にジャイナ敎の信者であつた。佛敎の阿育傳說に依ると三寶歸依前の大帝は非常な暴虐慘忍の惡王であつた。改宗後の大帝と其前半生を比較すると善に强ければ惡にも强い反映法を應用した佛敎文學者の戲曲的才能もさることではあるが、亦一面大帝が尼犍子信仰家であつたといふ事實をも暴露したとも見られる。而して大帝が印度の統一と共に佛敎の基礎は前に鞏固になり、その傳道的宗敎としての萬國的性質は大帝の時代に最も鮮かに實現されたのだ。寛容にして且つ遠大の機略を有して居た育王は、勿論ジャイナ敎徒に對しても婆羅門敎徒同樣之を保護して彼等に信仰上不便利を與へる樣な愚擧は勿論なかつたのであるが、然し若し育王が佛敎に改宗せずして、元のまゝジャイナ敎徒で居たらばどうであらうか、佛敎の發展も餘程違つたものになり、ジャイナ敎も宗敎史上今とは大分色の異つたものとなつて居つたに相違ない。此所は頗る趣味ある問題ではあるまいか。

（四）

覇氣滿々たる阿闍世が佛滅の當時には旣に熱心な信者となつて居り、阿育王の轉宗が卽位の後其勢力の漸く冲

サレムとなつて居るではないか。ジャイナ教徒は之に反して崇嚴な殿堂は南部印度到る所に存し、其信徒には實業家や富豪が多く、舊來の信仰と儀式とを守りて、動物病院――而も鼠や昆虫の様な有害のもの〻――など云ふものも世界の珍として盛に其門戸を張つて居る。兩教興廢の原因茲に於てかそもさむか。

佛教滅亡の原因に就きてはシヤンカラ、デク、ギジヤヤの様な古書に依りて婆羅門教の復興と同時に非常の大迫害があつて、南はデカンよりヒマラヤの麓まで屠殺焦類なしといふ様な傳說もあるが、今の學者は大抵か〻る一度に全體を剿滅したといふ様な事は信せず、其原因を內部の頽廢から來る自然の老衰的滅亡となして居る。之は寧ろ穩當の見解であらう。佛教を滅亡せしめた大原因は概括して內部の頽廢と申したが、此中には信仰方面の狀態も實際教會の狀況もあるが、一つ其大きな原因は其長處が直に短處となつた盲目的な適合性及極端な寛容主義で、八世紀あたりの祕密佛教は確かに之を代表して居る。卽不健全な思想、謎信、背理、不道德、奸穢、雜亂之が此時代の密教の特點で之が確に佛教の致命傷となつたのである。而して又、教團の不統一其緩漫不規律の狀態は到底外部から來る時代の壓抑民心の離散に對して之を防壓することが出來なかつたのだ。此處も亦長處が直に短處となつて水に遊ぶもの水に溺れ、劍を善くするもの劍に死す底で、其實際上の融合性寛容主義は揣らずも手も付けられぬ混亂の狀態になつて、遂に佛教を永く印度に葬り去つて仕舞つたのだ。

一面ジヤイナ教にありては其佛教に比しての短處が直に長處となつて命脈を今日に維持して居る。ジヤイナ教が國民教の一種となつたこと、其婆羅門の哲學や修行の方法に佛教よりも緣の近いことなどは婆羅門教の復興に

も此方にも興る樣な醜態はなかつたが、其敎勢の普及は實に云ふに足らなかつた。而して其萬國的の性質（これは階級打破から必然に來るべき結果である）の如きは到底佛敎と比較することは出來ぬ。嚴重な苦行と戒律とで敎團の組織は鞏固で信仰は純潔ではあつたが、この極端な禁欲主義形式主義の爲に縛されて自家敎團已外に地步を開拓し、異つた地方、異つた種族には夫々其に相應じた方法で傳道するなどいふ融通はとても利くべき敎義ではなかつた。此點は佛敎の非常に特色のある點で、之が爲に贏ち得た弊害も尠少ではなかつたが、全體としては雄大發展を遂ぐることが出來た。此世界的性質、傳道主義の有無は烱眼にして遠大の膽略ある爲政者の必らず注意を怠るべき所ではなかつたであらう。

此處まで考へて來ると阿闍世や阿育の轉宗の意義を印度の文化史、若くは政治史からも面白く觀察することが出來よう。

（五）

阿育王の時代に殆んど命運の定まつた兩敎――一は世界敎として其光輝を四方に發し、他は自己の敎團を益固めて一種の國民敎のように定まつた佛敎及ジャイナ敎は印度に於て其最後の運命を如何したであらう。今之を論じて拙稿を終るべき順序になつた。

基督敎が其故鄕に全く滅亡した樣に、佛敎も全く印度內地に痕跡を絕つて仕舞うた。七八世期の頃までは學徒雲の如くに集つた那爛陀大學の跡今何處、佛陀伽耶の靈場さへ今現に猶婆羅門マハントの爲に十字軍なきキエル

三十二讃詠之礼

摩咥哩制吒讃佛頌の原文

（明治四五、八、宗教界第八卷第八號）

佛教文學史上、佛所行讃と同じく頗る重要の地位を占むる摩咥哩制吒讃佛頌の原文斷片が、幸にもスタイン博士蒐集の于闐發掘の珍品中にあつた。今之を證定した結果を大略左に報告する。

摩咥哩制吒と其著作

摩咥哩制吒 Mātṛceta 及其製作に就きては義淨三藏の南海寄歸傳中に重要なる記載がある。傳文に曰く、「且らく尊者摩咥哩制吒の如きは、乃西方の宏才碩德にして秀群英に冠たるの人也、傳にいふ昔佛在せしとき、佛親しく親衆を領し人間に遊行し玉ふ、時に鶯鳥あり、佛の相好、儼として金山の如きを見て、乃ち林間に於て、和雅の音を發す、讃詠に似たり、佛乃諸弟子を顧て曰く、此鳥我を見て歡喜し覺えず哀鳴す、此福に緣るが故に、代に沒する後、人身を獲得し摩咥哩制吒と名づけ、廣く稱歎して我が實德を讃せむ、其人初め外道に依り出家し、大自在天に事ゆ、既に是尊ぶ所なれば具に讃詠を伸べぬ、後に乃〔佛陀に〕記せらるゝ所の名を見て、心を飜して佛を奉じ衣を染めて俗を出で、廣く讃嘆を興し、前非の既に往きたるを悔ひて、勝轍に將來に遵ふ、自ら悲む、大師に遇ひたてまつらずして但遺像のみに逢ふことを、遂に盛藻を抽で、仰で授記に符し、佛の功德を讃す、初四百讃を造り、次に一百五十讃を造る、總て六度を陳べ、佛世尊所有の勝德を明す、斯文情婉麗天葩と共

對して佛教ほどの影響はなかつた。而して其嚴重なる訓練と教團の鞏固なる一致とは内部からして外侮に當るに充分の實力を有して居つた。而して其融合性や適應性の發達せざる結果はあくまで純潔に其教風を維持して迷信の雜亂に陷らず、毅然として永く其命脈を傳ふることが出來たのである。

此外に今一つ面白い現象がある。そは印度佛教諸論師が文學の方面で印度の文化史を飾つて居るが、ジャイナ教の學者は天文、數學、語學の樣な摯實な科學の方面に非常に貢獻して居ることである。馬鳴や寂天の樣な大詩人はないがヘムチャンドラの樣な科學者は頭角を顯して居る。これは一方偶然の結果の樣だが又二教の性質を見るべき面白い對象である。而して文學的の想像に富むだ佛教に密教の樣な雜亂極まる迷信が興り、科學的嚴肅なジャイナ教はかゝる迷信に陷らず、婆羅門教徒が後代密教の影響を大分受けて今尙それに苦むで居るに反し、ジャイナ教徒は少しも其の弊を受けず超然存在して居るのは寧ろ自然の結果といふてよい。

已上は印度の二大革新教興廢に就きてほんのざつとした白描（スケッチ）ではあるが、此間自ら我々の注意すべき問題が必らず存在することゝ思ふ。ジャイナ教は今や米國あたりにボツ／＼傳道者を送り、市俄古宗教大會已來熱烈な雄辯で一時歐洲の教會を騷がした教會の總書記ギルチャンド、カンドイーの遺業を繼承することに力めて居るが、然し大した効果もない樣だ。唯此際一二偉大な人材があれば着々として世界教として立つべき運命に向うであらう。然しそれにしても今一度教會内に改革者が出ねば駄目である。

佛教の現在に就きて改革が必要か否か、それは別に論ずる必要もあるまい。

あつたこと、外道時代には盛んに佛教徒を打擊して厳たる一敵國であつた事、歸佛後懺謝のために一百五十頌の讚佛偈を製作したことなど、善く義淨の所傳と合う。陳那論師が一百五十讚佛偈に補註的の增頌をしたことも亦、同史の第二十三章に出で、是又義淨の說と符合する。西藏藏經丹殊(ターンジュール)の中に一百五十頌の飜譯もあり、又其註釋もある。至元錄に蕃本缺としてあるのは無論當時調査の不備で、南條目錄の之を襲用したのも固より現存の蕃藏から見れば盡さぬ所がある。

馬鳴と摩咥哩制吒

馬鳴―佛所行讚を製作した馬鳴と一百五十讚佛偈の作者とは同一であるといふ西蕃の所傳は今直に信ずることは出來ぬ。第一に多羅那吒の記載にても馬鳴を提婆の後にして、同じく三論の祖師である羅護羅と同時の那爛陀大學の有力者にしてあるから、無論迦膩色迦王時代の馬鳴とは同一には出來ぬ。第二には佛所行讚と一百五十讚佛偈とは其思想に頗る相違のあることで文體も大分趣を異して居る。佛所行讚は莊嚴論經と同じく特別の大乘的色彩を認むることが出來ぬが、讚佛偈の方には大乘空宗の玄理が隨所に歌はるゝのみならず、又二乘に對して痛酷な貶黜を宣言する。

聲聞知法者。於尊恒奉事。設使證涅槃。終名爲負債。彼等諸惡衆。爲己而修學。由捨利生心。不名還債者(頌、一三五、一三六)

而して通篇二利圓滿を極筆詠歎して、如來の大慈悲を稱揚し、淨土教の極致とも見るべき

に芳を斉しくし、理致清高、地獄と峻を争ふ、西方讃頌を造る者、咸同く祖習せざるはなし、無著世親菩薩、悉く皆趾を仰ぎ故に五天の地、初めて出家するもの亦既に五戒十戒を誦得すれば、卽須らく先此二讃を教誦すべし、大乘小乘を問ふなく咸な同じく此に遵ふ、…………此を誦得して方に餘經を學ぶ、然るに斯美未だ東夏に傳はらざるも、造釋家故なり亦多く、之を和する者誠に一算にあらず、陳那菩薩親く自ら和を爲し、頌毎に各共一を加へ名けて雜讃といふ、頌三百あり、又鹿苑に僧釋迦提婆と號するあり、復陳那頌前に各一頌を加へ糅雜讃と各く總じて四百五十頌あり、但製作の流あれば、皆以て龜鏡となす」。（縮刷、致七、八六左、高楠氏英譯第一五七頁）

摩咥哩制吒が印度諸大論師の間に賞賛崇敬せられて、其製作の讃文の價値が非常に偉大なる者であつたことは、已上の引文で明白である。然し此偉大な佛教詩人に就ては、前記義淨の記載の外には漢土の佛典中、記事殆ど絶無といふてよい。隨て其傳統學説などは頗る明了を缺いて居る。唯幸にも義淨が前に出した傳文中の「一百五十讃佛頌」を印度留學中に那爛陀の大學で譯傳したのが藏中（縮藏は藏九、七十紙に始まり、七十三紙に終る）に殘つて居るので大體此偉人の妙想と美文とを窺ふことが出來る。

西藏の所傳では摩咥哩制吒は卽ち馬鳴菩薩の別名であるといふことになつて居る。卽ち多羅那他の「佛教史」第十八章に詳しく其傳記を出し、馬鳴には、一、首羅 Śūra 二、摩咥哩制吒 Mātrceta 三、比咥哩制吒 Pitrceta 四、難見 Durdaśana 五、曇密迦須菩提 Dharmika subbuti 等の異名があると記載してある。其初自在天外道で

(23) ⏑⏑⏑⏑⏑— —va | nânugṛhṇāti tat sukhaṃ ‖

尊雖遭極苦。於樂不希求。

praṇītam api sad-ʌṛtta | yad asādhu-raṇamparair ‖

妙智諸功德。殊勝無能共。

(34) Sarva-dvinām agamyāṇāṃ | dhurvāṇāṃ anivartināṃ ‖

遠離諸過患。湛然安不動。

anuttaraṇāṃ kā tarhi | guṇānām upaā ⏑— ‖

最勝諸善根。無能爲譬喩。

(35) ⏑⏑⏑⏑⏑— — | gaṃbhīryam lavaṇabhasa ‖

如來智深遠。無底無邊際。

yadā te budhi-gambhīryam | agādhāparam ṛkṣyate ‖

世事喩佛身。牛跡方大海。

(38) Malinatvam iv' āyanti | śarac-candrāṃ basām tava ‖

如來三業淨。秋月皓空池。

śuddhiṃ vāg-budhi-dehānāṃ | pra ⏑⏑⏑⏑—⏑⏑ ‖

況於極惡者。純行最上悲。

といふ樣な永劫不磨の大福音を說く。此點が大に佛行讃と相違する所で、どうしても思想上二者を同一視することは出來ぬ。文體から云ふと佛所行讃は富贍華麗、其韻脚の法は複雜巧妙を極めた所謂カギヤ式のものだが、一百五十偈は幽玄警拔といふ點が其特色で、韻法は次に出す斷片でも明かに分るが首路迦の極めて簡潔のものだ。若し古來釋家の傳ふる如く六馬鳴といふ樣に幾人かの同名の偉人がありとせば、摩咥哩制吒は起信論の著者と同じく何れかの後馬鳴に當るのであらう。

一百五十讃佛偈原文の斷片

支那譯の讃佛偈卽ち一百五十讃佛偈は五言の本頌一百四十八偈、流通頌五偈、通じて一百五十三頌ある。于闐から出た斷片は僅に一枚、それも約半分は破損剝落した憐れの狀態だ。斷片は一面六行づゝ、表裏合計十二行の小さき寫本で本偈の第二十三頌から三十八頌まで都合十六頌書いてあるが、紙片の左右が裂けて無なつた爲に、滿足の頌文は惜い哉一つもない。各頌には一々第何頌といふ番號があつて其が漢譯と悉くぴつたり吻合する。然し大體は前述の如く全然符合するが、各偈の文々句々に當りて詳く見ると義淨の譯は稍意譯に傾きて比較的自由な筆であつたこと、其使用した底本は、于闐で發見された原文と多少文句の出入のあつた異本であつたことは次の比較で分る。

十六頌を悉く梵漢對照するのも稍繁雜の嫌もあらうから其中から二三の頌文を玆に比較して見よう。

かつたならば、到底之を快讀することの出來ぬ程に斷片は破損して居つた。

二枚の斷片から考へると四百偈讚佛頌は全體が幾章かに分れて一章毎に若干の頌文を收めたものである。第三十一葉にはある章—不幸にも章名は切斷されて分らぬが Varṇārtha-varṇa-buddha-store といふ文字丈は殘つて居るから此次に章名が來るのは直に推斷出來る。此章は四十頌の一章で斷片は三十三から四十迄收めてある。奧附のある最後の章の名も亦惜哉剝離して分らぬが此章は十五頌の短き一章であること丈は分る。

百五十頌の斷片に比して一層甚しく破損した故紙だから全體の頌文は僅に三分の一位しか分らない。然しこの金龍の片鱗、彩鳳の一毛でどうやら全體の想像がつく。

斷片の部分は悉く首路迦で書いてある。百五十讚佛頌も此詩形を用ゐてあるから、多分四百頌全部は首路迦で出來て居るかとも想像される。思想も同性經や維摩經あたりの大乘空敎の思想で此種經文に喜むで使用する字面を讚中に大分採つて居る。此點も一百五十讚佛頌と同じで、其姉妹詩たることが實に鮮かだ。

玆には唯此傑作の片影を示して置かう。括弧のある部分は、前文と照らして補足したのだ。

∪ ∪ ∪ ∪ ∪— —∪　　na śudhā-pūtimuktayor
vidurаṃ antaraṃ—∪　　[tvad-vāda-paravādayor 32]
∪ ∪ ∪ ∪ ∪— —∪　　∪ ∪ ∪ ∪ ∪—∪ ∪
vyākhyātaṃ antaraṃ tena　　tvad-vāda-paravādayor 33.

世潔比佛身。倶成塵濁性。

單に一句或は二句のみを存する中第二十六頌の iti tribhir asaṃkhyair | evaṃ ⏑⏑——⏑ ‖ は「三僧祇數量」の一句に能く合ひ、三十七頌の Ajñāna-timiro-ghnasya | jñānālokasya te muner ‖ 『愚癡暗已除、牟尼光普照』と的確に合ふ。

已上で百五十讚佛偈原文の如何なるものであるか、其文體韻法等は果してどうであつたかといふことは略見當が付くことゝ思ふ。

四百偈讚佛偈原文斷片

四百偈讚佛頌は義淨の記錄には前に揭げた通、一百五十頌の姊妹詩として其名が見ゆるが、漢譯もなければ西藏にも其飜傳がなかつた。多羅那吒も其佛敎史に此讚に就きては一言も言はぬ。然るに偶然にも此讚の原文が發見されたのは假令斷片と雖、義淨の傳說を確實にすべき重要無二の證據である。此點から見て四百偈讚佛頌の斷片は餘程價のあるものと稱すべきであらう。

斷片は二枚ある。一枚は第三十一葉の丁附がある。他は其第三十五葉で本讚最後の一葉で此處に非常な貴重の奧附がある。曰く

Catuśśatakaṃ kṛtir Ārya-bhadanta-Mā 〔trceṭena〕

即聖尊摩咥哩制吒造四百偈の文字である。咥哩制吒の四字は磨滅剝落辛うじて讀める計、若し義淨の記事がな

違を此一章で反映せしめて佛德を讃したのであらう。各頌とも全體の存するのは一つもなく、僅に單語が一つ二つ殘留して居る計、但し此零殘の遺文中第三十二頌の、「清淨解脫の間にもあらず、遠離特異のもの」なるを讃する、三十五頌の「不可思量」三十六頌の生滅染淨（の不二）を論ずる、第三十七頌の「獨り意欲の法あり、何ぞ他の種々相あらむ」と歌ふが如きは其思想及字面が全く一百五十讃佛偈と同じく大乘空敎の妙理に基きて居ることが斷言出來る。

佛敎文學史上には馬鳴の佛所行讃と同じく、非常に大切な讃文の原文は今發見された所では唯已上に述べた斷片に過ぎぬ。スタイン博士が第三回の蒐集には非常に多くの完本があるとの事だから、此中からでも全部の原文が出れば、非常に喜ばしきことである。義淨譯と百五十偈全體の比較も、四百頌の新譯もこの曉には立派に出來やう。あゝ其は何時だらう。

U U U U U— —U　　U U U U U— —U
U U U U U tvena　　〔tvad-vāda-para-vāda〕 yor 34.
Asampradhāryam e—U　　U U U U U—U U
U U U U U— —U　　tvad-vāda-parāvadayor 35.
Yat prvṛtti-nirvṛtyor　　yat saṃkleśa-vyavādana
U U U U U— —U　　tvad-vāda paravāayor 36.
U U U U U— —U　　āśa-dharmaḥ sa kevalaḥ
Kiṃ ānyad astu nānatvaṃ　　〔tvad-vāda-para-vādayor 37〕
U U U U U— —U　　U U U U U—U U
U matratāśtn ko tonya　　tvad-pada-para-vādayor 38
U U U U U— —U　　U U U U U—U
U U U U U　rātā'tha　　tvad vāda pravādayor 39
Asat prālā U— —U　　U U U U U—U U
U U U U U— —U　　〔tvad-vāda-para-vādayor 40〕

何れも「汝が說と他說との間に」といふ句尾覆誦詞(レフレーン)がある。恐らく佛陀の思想と凡下の思想との天地雲泥の相

寺傳此梵筴を「智證大師將來」とす。是又直に承用し難き所、抑大師の將來梵筴に就きては請來錄(四)に二種あるを記す。卽一は中天竺大那爛陀寺三藏曼索恚怛羅梵筴にして、他は大那爛陀寺佛殿前樹皮梵筴是なり。共に經題を記せず。現在殘存の諸山什寶中之に確符すべきもの之なきも、阿叉羅帖(五)に擧ぐる所の紙本般若多羅三藏書といふもの前者に當るが如く、高楠教授が探索撮影したる四葉の來迎寺所藏貝葉梵文は或は夫の樹皮梵筴卽貝葉を假稱せる樹皮梵筴といふものにあらざるか。此二者は智證大師所傳のものたる極めて明確にして共に大師の自筆あり。特に來迎寺貝葉は剝落殘蝕の間、隱々として蒼勁なる「珍」字の讀むべきを認む。蓋し大師の法諱圓珍の下字なり。此二者旣に大師の將來たること明にして、請來錄中列擧二種の外に別の記載なしとせば、卽百萬遍梵筴が智證所傳といふは甚だ疑なきを得ざるなり。而して他の本邦所傳の諸梵筴、卽(六)弘法大師の三口、圓(七)行の二口、常(八)曉の一口中、本貝葉が其何れに屬すべきやも、是等梵本の標題及內容の徵すべきもの毫も之なきを以て、精査の望殆ど之なし。但し本貝葉の所傳は斯の如く不明にして文獻の證すべきものを缺くと雖、之が印度の古經斷片にして、而も本邦所傳の梵文古貝葉中最古に位すべき貴重の絕品たることは、乞ふ下に述ぶる所に就き之を檢せよ。

本多羅葉は橫一寸二分七厘、長一尺一寸七分、一面橫書四行、各行五十一字乃至五十六字を收む。上面の左端に符字を以て壹佰壹拾貳の三字を竪記す。此部分は葉片の最端にあり、現品出入の際摩擦を受くること多きを以て、字體剝落し、其明晰なるものは唯最後符字の「貳」のみ。餘の二字は苦心檢索して漸くに之を認め得るに過

京都百萬遍知恩寺什寶多羅葉梵筴斷片に就きて

(大正六、四、宗教研究第一卷第四號)

(一) 傳來・形狀

宗教研究第一號の卷頭に影寫揭出したる、一枚兩面の多羅葉古寫斷片は、淨土宗大本山の一なる京都百萬遍知恩寺の什寶に屬す。傳に曰く、同山第二十五世千蓮社傳譽慶秀上人[一](永祿二年九月寂、年八十四)が[二]天文年間比叡山興隆のために盡す所ありしに對し、延曆寺より元祖(圓光大師)眞影と共に之を贈與したるものなりと。[三]同寺誌要第六什寶の下に記す、

貝多羅葉一葉　智證大師傳來

卽是なり。但し寺誌には元祖眞影贈致のことを明記するも、一言も此梵筴に及ぶなし。故に果して山徒の寄贈なりや否や、尙確證を要すべきものあり。且つ假に智證所傳とせば、之を叡山に得たること更に研究の餘地なきにあらず。蓋し慶秀上人は知恩寺再興の高德として大永年間禁中に大原談義を進講し、知恩寺勅額紫袍等御賜のことあり。後奈良帝は特に上人を寵遇し、知恩寺退隱後に於ても叡旨淺からず時々御物の恩賜ありき。其隆然たる聲望の致す所、常に名公鉅卿と往復談笑し、曠世の珍玩奇什を獲るの機會極めて多かりしも想見し難からず。卽此梵筴の如きも或は叡山所傳にあらずして、實は意外の事情、意外の邊より之を感得したるやも未だ知るべからず。

べき古品は唯僅に故ベンドール教授が尼波羅の首府カーツマンドに於けるダルバール文庫に發見したる十地經斷[一一]片之あるのみ。他に本葉と比肩し得べき逸品は現在全く之なし。眞に是帝國の至寳とすべきのみならず、また世界梵學界の什寳と稱すべきなり。姉妹片の高貴斷片が祝融の災餘、辛うじて全きを得たる爲か、一部甚く磨滅殘蝕を受け、字體往々にして消失し、頗る學人をして痛嘆せしむるものあるに對し、此貝葉は保存極めて周到良好にして千五百年の古文書、字々炳明、筆畫恰も新書の鮮麗を呈し、一點の損蝕なし。是亦本片の幸福といふべきなり。

高貴寺貝葉に就きては今印度留學中の岡[一二]教邃氏が荻原ドクトルの援助を得て、之を解讀し、其字體をビュ[一三]ーラー氏の印度古文字表に照らして、西暦紀元第四世紀より第五世紀に亙るものなることを推定したり。載せて『密教』第三卷第四號（四四―四九）にあり。論ずる所、印度古文字學に觀て、更に精密の講究を試むべき空地を剩すと雖、以て本葉が古貝葉中の位置如何を概觀するに足れりとせずや。

（三） 音譯・譯文・解釋

本葉の音寫下の如し、圓弧中の數字は行數を示し、原文中に施したる方弧は、重寫の誤を訂したるもの、文下に引きたる横線は經偈の部分を表す。餘文は皆其釋文なり。伊太利字は脫文脫字の補塡を明にす。語格及連聲の誤脫は、一に本文に從ひて之を訂正せず。其甚しきものは稿後に註記したり。

ぎず。

（二）　三藏中の所屬、古梵本寫經上の位置

此梵筴は實に夫の阿叉羅帖第一卷に載する所の、高貴寺所傳の梵文斷片と元同一帙に存したるが、物換り星移りて分散したるものにして、本貝葉が第百十二葉なるに對し、高貴寺斷片は僅に十數葉を前に隔てゝ第九十七葉なり。是阿叉羅帖の原本模寫に照らし明なるのみならず。高楠教授が親く同寺に就きて撮影せしめたる原葉の寫眞と對檢して、字體書法葉幅等一見殆ど疑を挿むを得ざる所なり。內容に就きて云はゞ、彼は世界の壞滅を說き、劫火炎々として萬象灰燼に歸するを叙し、此は卽十六遊增地獄に關する經偈を解釋して古文慘凄の氣滿つ。今其所說相を案じて之が俱舍論等に類する阿毘達磨藏に屬するや直に斷言し得べし。唯遍く之を漢譯大藏に覔むるも、未だ之に符合する漢本を發見する能はざるを憾とす。

此梵筴斷片は本邦所傳貝葉經中最古に位するものにして、字體よりして之を論ぜば夫の御物法隆寺多羅葉の上に出づる數等、近時漸く世人の知る所となりし(九)來迎寺及海龍王寺の多羅葉に比しても更に古きを誇り得べく、(一〇)高楠教授が最近高野に於て發見したる夫の珍貴の大涅槃經梵文と比較しても二三の點に於て本葉の時代に於て優れたるを示すべきものあり。中央亞細亞に於て發掘せられたるバワアー、スタイン、ペトロヴスキー、レコック等諸家蒐集の古樺皮多羅葉若くは古紙片の西域所傳梵文は之を別とし、印度所傳の古多羅葉にして本葉を凌駕し得

譯　文　方弧は脫文を挿入したるもの。枠は重複の贅文にして略去すべきを示す。

無間(アヴィーチ)大地獄の東方に於て、南方に於て西方北方に於て〔塘煨、屍糞〕鐵棘林、韓多剌尼河(ヴイタラーニー)あり。此の如く乃至等活(サンジーブ)も然り。故に曰く『各十六增あり』と『四面』とは[四門とは曰く無間大地獄の四地獄門、東門南面]東面南西北面なり。無間の如く此の如く乃至等活も然り。故に曰く四面[四面]と。『四門』とは曰く無間大地獄の四地獄門なり。東門南門西門北門なり。無間の如く此の如く乃至等活も然り。故に曰く『四門』と。『〔量に〕比例し分たれたり』とは曰く、無間大地獄は其長さと廣さとに於て應に隨ひて[不]分たれたり。無間大地獄の如く等活も然り。故に曰く『量に比例して分たれたり』と。『鐵墻周匝限界』とは曰く、無間大地獄は墻を以て周匝圍繞す。無間大地獄の如く乃至等活も然り。故に曰く『鐵墻周匝限界』と。『鐵を以て覆閉す』とは無間大地獄は鐵刺を以て遍く覆閉す。[無間大地獄の如く鐵刺を以て遍く覆閉す。]無間大地獄の如く乃至等活も然り。故に曰く『鐵を以て覆閉す』と『熱鐵所成の地、燄光多百踰繕那、周遍して存在す。

解　釋

此文は天使經偈頌の解釋にして、其類文は之を漢譯(一三)倶舍論に見るべし。同論に於ては此文と同一の經偈を引きて地獄の十六增を釋せり、玄奘譯を見るに、

此八捺落迦　我說甚難越　以熱鐵爲地　周匝有鐵牆　四面有四門　關閉以鐵扇　巧安分量
各有十六增　多百踰繕那　滿中造惡者　周遍燄交徹　猛火恒洞然

表　面

ayas-śālmalī-vanaḥ nabī Vaitaranī yathā pūrveṇa evaṁ bakṣiṇena paṣcimôttareṇa yathā 'vīcir mahā-narakasya evaṁ yavāt Saṁjīvasya ten'āha pratyeka ṣodaśôtsa (1) daiti catuskaṁdhā iti 〔catur-dvārā iti āha Avīcer mahānarakasya catvāri narakadvārāni purva-dvāraṁ dakṣiṇaṁ skaṁdha〕 pūrva 〔va〕—skamdha dakṣiṇa-paścima-uttra-skaṁ (2) dha yathā Avīeer evaṁ yavat Saṁjīvasya ten'āha catuskaṁdhā iti 〔catuskaṁdhā iti〕 caturdvārā iti āha Avīcer mahānarakasya catvāri naraka-dvārāṇi (3) purvaṁ dvāraṁ dakṣiṇaṁ paścimaṁ uttaraṁ yathā Avīcer evaṁ yāvat Saṁjīvasya ten'āha caturdvārā iti vibhaktā bhāgaśo mita itiāha Avīcer mahānarakaḥ 〔a〕 (4) 112

裏　面

vibhaktā yāvad 〔ād〕 āyāmena tāvad viṣkaṁbheṇa yathā 'vīcir māhā-naraka evaṁ yāvat Saṁjīva ten'aha vibhaktā bhāgaśo mitā iti・ayas-prākāraparyantā i (1) ti āha・Avīcer mahā-narakaḥ prākārair anuparikṣipta yathā'vīcer mahā-narkaḥ evaṁ yavāt Samjīva ten'āha ayas-prākarāir paryantā iti ayasā prati (2) bujjita iti Avīcir mahā-naraka・āyasena śalena paryavanaddhā 〔yatha Avīcir mahā-nara (3) kaḥ āyasena śalena paryavanaddhā〕 yathā Avīcer mahā-narakaḥ evaṁ yavat Saṁjīva ten'āha ayasā pratibujjitā iti・tapta ayasmayī bhūmi jvālitā tejasāyutā aneka yo-jana-śatā sphuṭā tiṣthaṁti ha (4).

河は佛教のみならず、婆羅門文書に於てもまた之を見、其語義は源「可渡」の義にして、佛教文學に見ゆる大江烈河の如きは其意義に取れるに似たり。故に其原語を存するを忠實となすべきか。

(四) 聖典史的に見たる本貝葉の價値

前に擧げたる倶舍の引文は阿含天使經の偈にして漢本に於ては長阿含十九(昃九、一〇二b)增一阿含三十六(昃三、一一b)雜阿含四十七(辰四、七二a)及中阿含十二(昃五七二a)に出で、別譯として曇無蘭の鐵城泥犂經、慧簡の閻羅王五天使者經(昃八、十四―十六)あるも文義簡朴に失し、而も本偈頌を缺く、樓炭經(辰一、九a)の中に亦此偈あり。起世經は地獄を說くこと諸經論中最も精細を極むるも亦偈あるなし。

パーリ天使經に於ては此偈文 Majjhima-nikāya の天使經 111. 180.(ノイマン氏獨譯第三卷三五二)及び Anguttara の天使品中に出づ(刊本 1. 141)。

梵文聖典の中には大衆部傳誦の佛本行經卽夫の「大事」Mahāvatu 111 451 に類文あり、漢本之を缺く。荻原雲來氏校寫の稱友倶舍釋(Yas'omitra's Abhidharmako'sa-vyākyā. Calcutta Ms. 1646)に於ても本偈に關する解釋あり、但釋文本頌を略す、故に經偈の全體を檢し得ざるを憾とす。

今此等諸文を本貝葉と對照し、以て聖典史上本葉の價値を明にせん。

十六增者、八捺落迦、四面門外、各有四所、一煻煨增、謂此增內煻煨沒膝、有情遊彼纔下足時、皮肉與血、俱燋爛墮、擧足還生、五復如本。二屍糞增謂此增內屍糞泥滿於中、多有娘矩吒蟲（Nyaṭhūṭa）觜利如針……三鋒刄路、謂此增內復有三種一刀刄路……二劍葉林……三鐵刺林……刀刄等路、三種雖殊、而鐵杖同故一增攝。四烈河增、謂此增、量廣滿中熱醎水、有情入中、或浮或沒、……被蒸被煮骨肉靡爛、如大鑊中滿盛灰汁、置麻等。（下略）

此文を出し來れば別に他の解釋を要せざるべし。卽等活 Sañjīva よりして乃至無間 Avīci を數ふる八大熱地獄は、各四大地獄門を有し、一門每に左の四增(一四) Utsada 若くは四園を有す、卽俱舍に說く如く、

一、煻　煨 Kukūla
二、屍　糞 Kuṇapa
三、刀　刄 Kṣuradhāra（一、劍　刄　路 Asidhāra／二、刀　葉　林 Asipattravana／三、鐵　刺　林 Ayaśśalmalī-vana）
四、烈　河 Vaitaraṇī

卽是なり。本貝葉の文は第三と第四より讀み初む。但し第三增は鋒刄增にして鐵刺林は此一部分なるも、三種何れも相類して何れを以てするも第三增を代表せしむるに足れるを以て便に隨ひて之を擧げたるか。

眞諦譯の舊俱舍も其譯略新譯と同じ、唯鐵刺林を原語のまゝに出して『復有鐵鉆摩利林』となし、烈河の如きも意譯となさずして『四烈灰汁江園名鞞多利尼』と音譯を施せるは原文の俤を見るに甚便なりとす。蓋し此地獄

之を一見するに北傳本行梵文は、南傳の天使經偈に比して其句次稍轉換し、且つ增廣の痕跡あるを認めざるを得ず。蓋し天使經に於ける地獄の簡朴なる說明は、教義の發展と共に隨て詳密精細を加へ來り、之と共に偈頌の如きも原始の二偈を中心とし之に二三若くは數偈を添加するに至りたるが如し。卽夫の十六增の說の如きはパーリ天使經に未だ之を見ざる所にして北傳の諸經論に於てのみ、之を見るべし。旣に此說起れりとせば、偈頌に於ても、之を明言するの要あり。是特に注意すべき點とす。

漢譯天使經偈は　增一と長含に於けるは、概して梵本本行經の一部と吻合す。俱舍論に引く所は卽直に此北傳の頌文を用ゐたるのみ。是下に引く所と前に擧げたる俱舍の文と對照せば一見更に縷說を須ゐざるべし。本行經の文は此北傳の經偈を布演し前後に數偈を添加したるを推斷し得べし。

三、是八大地獄　極苦難可過　惡業種々故　各別十六處
四、四周開四門　中間量悉等　鐵爲四周板　四門扇亦鐵
五、鐵地盛火燃　其燄普周遍　縱廣百由旬　焰炎无間息

（雜含十偈中三偈）

二、此名八地獄　其中不可處　皆由惡行本　十六隔子圍
三、然彼鐵獄上　爲火之所燒　遍一由旬內　熾火極熱盛
四、四城四門戶　其閒甚平整　又以鐵作城　鐵板覆其上

パーリ經偈

Catukaṇṇo catudvāro vi-bhatto
bhāgaso mito
ayopākāra pariyanto ayasā paṭi-
kujjito ||
tassa ayoma bhūmi
jalitā tejasāyutā
samanta yojanasataṁ
phari-tvā tiṭṭhati sabbadā ||

梵文本行經偈

（四十四頌中、第九、十、十一）

ity ete aṣṭā mahānarakā
ākkhyatā duratikrantā
ākirṇa raudra-sattvehi
pratyekaṁ ṣoḍaśotsadā 119
catu-karnā catur-dvārā
vibhaktā bha-gaśo mitā udgata-
yojanaśatiṁ samanthayojanaśata
ṁ || 10
atha ye naraka-
prakṣiptā ayasā pratikubjitā
tesāṁ
ayomayā bhūmi prajvalitā tejas-
āyuta || 11

本貝葉所引偈

pratyeka ṣoḍaśotsadā ||
catuskaṁdhā caturdvāra vibhaktā
bhāgaśo mitā
ayas-prākāra-paryantā
ayasā pratibujjitā ||
taptā ayasmayī bhumi
jva-litā tejasāyutā
aneka. ojana-śata
saphuṭa ti-sthanti
hā……

第二偈に後句を缺き且譯語暗昧の點なきにあらざるも、パーリの原形を窺ふに於て絶好の文たりと云ふべし。

今原頌發展の狀を見るに、先づ其頌數に就きて見よ、

パーリ樓炭經	長含	增一、中含	雜含	本行經梵本
二	三	四	一〇	四四

更に各頌に就きて、パーリを他の六本と比較し來れば增廣の痕跡は自ら明晰掌果を見るが如けん。左に之が爲一表を掲ぐ。表中星(アステリスク)標あるは頌文大體意義を一にする語句稍々差異するを示す。ａｂは一頌の前半及後半を表す。

パーリ	漢樓炭	漢長含	漢中含	漢僧一	漢雜含	梵本行
ー	ー	ー	ー	ー	ー	一ー六
ー	ー	ー	ー	ー	一	七*
ー	ー	ー	ー	一	二	八

（增壹四偈中三偈）

一、四方有四門　巷陌皆相當　以鐵爲獄牆　上覆鐵羅網
二、以鐵爲下地　自然火炎出　縱廣百由旬　安住不傾動
三、黑炎熢㶿起　赫烈唯可覩　小獄有十六　火熾由行惡

（長含中三偈全出）

各經に於ける頌數多少は明かに原始二頌を基礎としての開展を見るべし。夫の十六增（十六處、十六隔子、小獄十六）の説が、最もパーリと近き、長含の偈に於ては最後の第三頌に置かれ、全く雜含及增一の經偈と其順序を轉倒するが如きは、卽ち本頌發展の最善の證左と云ふべし。中含は四偈を有すること增一に同じ。但し其順序稍之に異り四方四門の頌第一に位す。

四柱有四門。壁方十二楞。以鐵爲垣墻。其上鐵覆蓋。地獄內鐵地。熾然鐵地布。深無量由延。乃至地底住。極惡不可受。火色難可視。見已身毛竪。恐懼怖甚苦。彼墮生地獄。脚上頭在下。誹謗諸聖人。調御善淸善。

他經十六增說の十二楞となり居るを一部とす。中含現本にして此所寫誤謬刷なしとせば、十六增說發展の歷程中頗る注意に價すべきもの、其一頌が長含と同じく原頌と序と一にするが如きも甚興味あり、而して漢本中また本頌の原始形態を傳へてパーリ二頌の明かに古きを證するものあり。樓炭經所出の一偈半卽是也。

四方有四門。諸角治甚堅。垣壁以鐵作。上以用鐵覆。其他悉布鐵。火悉自然出。

深き所にして、本貝葉の聖典批評上の價値は隨て頗大なるものあり。卽本頌は梵本本行の頌序錯置已前に誦傳せられしものにして、パーリ原頌と本行經頌發展の中間に立ち漢譯諸阿含の原文と時代を同じうするものたるを推し得べきなり。

本貝葉の頌文は極めて簡單にして斷簡零墨一見何の價なきが如きも、此の如き聖典史研究上重要の資料たる點に於て、片鱗も龍にありては尙靈に、寸羽之を鳳に得て百世に傳ふべき寶什たらずんばあらず。特に本行經の梵文已外に此重要なる偈頌の大半を原文に見得ることは佛教研究家の欣喜措く能はざる所なり。本貝葉の內容豈之を等閑視することを得んや。

（五） 言語學上の價値

佛教聖語學上、本貝葉の極めて趣味あるは佛教文書中の單語は或は音韻上より、或は字象上より種々の變化を來すを的證すること是也。本貝葉は頌序に於ても每頌各句に於ても著しく原頌の面目を維持するには前に言ふ所の如きも、其語々に就きて之を見れば、俗語を雅語に改むる際、或は誦傳書寫の際、全然別語と變じたるもの一二を指點すべく、之を本行經梵文に照らして其出入差降を見る極めて興趣あり。

1 パーリの Catu-kaṇṇo は本行梵本には正しく Caṇṇa としたるも、本貝葉は音韻上 Khandho と傳へて Skandhā となしたり。何れにしても意義は同一に歸するも原語と全く異れり。倶舍の釋家稱友（ヤショミトラ）もまた Skand-

—	—	三	三*	二	三	九
一	一	一	一*	四	四	一〇a十一一a
二	二a	二	二	三	五	一〇b十一一d
—	—	—	(雜含第七第九に當)四	—	六—一—	一二—一六*
—	—	—	—	—	—	一七—四四

本貝葉中の偈頌は前の原文對比の表に見るが如く、二頌と四分の一を有し、正に北方系に屬す。其頌の順序は漢譯雜含の偈と同じ。

本貝葉偈	n'd	n''	n'''
雜含中偈	2d	4	5

其幾頌なりしやは、前後の文を見る能はざるを以て之を判定すること難し。之を本行經梵本の偈と對照するに、其頌序パーリの原頌に近く、本行の頌序が發展の經過中、稍移動し且つ其句に就きても第十一頌第一句が全く異なれる文字となりしに較べて、本貝葉の偈が頌序の錯綜なく、また明に原句を維持しつゝあるは、研究上最趣味

大體に就きて之を觀れば、本貝葉の書體と最親き關係にあるものは、バワアー(一七)の西域樺皮經及尼波羅十地經貝葉並に近時于闐燉煌高昌等に於て發掘し得たる西域の貝葉紙本の斷片の梵書とす。樺皮經及十地貝葉並西域艸體(カーシーヴ)の書風は大體に於て圓潤にして字畫の末端概鈍重なり。之に比して本貝葉は書風一般に尖儁の態を帶び、筆端頗銳利明快を極む。是古體の笈多(グプタ)字體よりして所謂悉曇(一八)體に移行する徑路を示するものなり。西域の眞體(アップライト)梵書は其字體は異ならざるも其菱形の書風は特殊の發展にして印度梵書中に之を見るを得ず。隨て本梵書と書風の關係に至りては全く之なしと云ふべし。

次に細かに文中の字に就き、鑑識上の解說を試みん。先之を十地經斷片に比するに同貝葉に於ては(一九)ka字及びna字の如き最古梵書の體を存すると西域古梵文と同じきも、本貝葉は此二字旣に新形を見る。是れ本貝葉が其大體の書風のみならず、細處に於て、亦十地經斷片の下にあるを示すものなり。バワァー樺皮經はka字に於ては尙古體を留むるもna字は全く新體に移れり。是バワァーが本貝葉に次第に近接し來れるを示すものにあらずや。

本貝葉は此兩古寫經に比し時代に於て稍遜色あるも、他の印度古寫經に對しては殆ど之に匹敵するものを見ず。本邦所傳の他の古寫經中之と角逐し得るもの一も之あるなし。今此點に就きて左に數條を列擧せん。

一、母音中Aは十地經貝葉に比し稍新し。而も法隆寺貝葉に較するに其右側直線下端の鈎(二〇)に著しき差異を見るべし。而して此點はバワァー樺皮本に對しても本貝葉は寧古體を維持す。

二、母音のIは最も古體を傳ふ、即ち所謂伊字の三點∵にして、(二一)現に西域發掘の古經斷片中此古形を存す。

hā として釋を作れり。蓋し北方系の誦傳に於ては大抵此字に據れるならん。

2　パーリの Tassa（其の）を Tatta に轉誦し、本貝葉は此字の雅語 Tapta に改めたり。原始の代名詞は一轉して「熱する」の過去分詞と變じたり。本行梵文には明かに代名詞として誦習し、而も單數の Tassa を複數同格の Tesāṁ に改めたり。

3　本貝葉中佛教言語學上、韻韻變化の特例として趣味深く、且重要なるものには本誌前號[一六]に荻原雲來氏が精論せられたる夫の Pratikubujjita 卽是なり。此重要の佛教語に就きては同君得意の壇場、充分周到の解說を彼に讓る。

4　波羅門文書に見ざるにあらざるも佛教徒の喜び用ゆる anuparyavanaddha, anuparikṣipta の如き字も注意し置く要あらんか。

（六）　古文字學上より見たる價値

本貝葉が佛教聖典史の研究に於ても、亦言語學の調査に於ても貴重の資料たるは前に說く如くなるも、特に古文字學にありては更に其價値の一層重きものあるを認む。今この點につき、特に重要と認むる二三を列擧せん。此重要の諸點は卽本貝葉書寫の時代を確定すべき鑑識上の一大左劵なるを以て、事稍煩に亘るを避けずして縷述を試みんと欲す。

字	出典
迦	十 / 西 / 百 / 法
那	十 / 西 / 百 / 法
阿	十 / 百 / 西 / 法
伊	百、西域諸經 / 西域眞體 / 西 / 法
耶	十西域諸經 / 百、西 / 百、西 / 百 / 法
	西、西域諸經 / 百 / 高楠涅槃經

法隆寺貝葉に比して稍後代に屬するものとしては、夫の故ベンドールの發見したる[二四]毘那耶斷片及荻原ドクトル

此點に於てはバワァー樺皮も稍新形を取らんとする過渡字を示し、本貝葉の寧ろ此細點に就きては古色あるを誇り得べし。

三、準母音中字は最も本貝葉の古代に屬するを定むる標準となる。其形はバワァー十地經及西域古經に見るが如し。但し本斷片は一二新體に推移する歷程を見るべきものを交書し、漸く新形耶字の流行を來すを示すに似たり。バワァー樺皮經中また此過渡時代の梵書あり。來迎寺貝葉寺貝葉中にも亦之を見るべし。

四、ś s二字は往々混同し、且つ西域古寫經に見る西藏式[illegible] s字をも交用ゆ。

五、A T.は頗奇異の字體Zを示す。ビュー古文字表にも未だ此の如き特殊の體を見ず。

六、數字2の符號は漢字二の如き古形を示す。此支那字に似たる一二三の數字を用ゆるは寫本に於てはビュー（二三）ラーの唯之をバワァーにのみ見て例となしたるが如く最古の記數法となす。但し石刻文に於ては其例乏しからず。本貝葉の記數は實に此古代の式に依れり。西域寫經は後代に至るも尙此書法を襲用するを見る。高楠教授の發見せられたる夫の大涅槃經紙本には其綴孔の右方唯一ある點（普通印度寫本は必らず左右にあり）及其書體の或部分に於て明に西域所傳を示す。其文字は比較的に新字（二三）を書するも而も數字に於ては明に古式に依りて三字を書するを見る。

七、他のE △A [illegible]の如きは普通古文字學者の古經鑑識の特點となす常套に屬するを以て特に論ぜず。

已上の說明として玆に一表を掲げんとす。

十は十地經梵文、西はバワアー寫經、百は本貝葉、法は法隆寺の略符とす。

五世紀上半…………パワァー樺皮經及西域本寫紙本
五世紀下半…………本貝葉
六世紀上半…………海龍王寺來迎寺貝葉高楠涅槃紙本
六世紀下半…………法隆寺貝葉其他

已上略して本貝葉の解說を作る。塵事匆忙、精巧博綜の暇を缺く。其粗笨なる所、遺漏誤錯ある所、自ら愧づるや深し。冀くは大方の是正を煩はして此無二の什寶をして永く學界の珍となさんことを。稿を終るに臨み、本貝葉を研究の爲、長期貸與を許容せられたる、大本山知恩寺の寛大なる好意は實に感銘措く能はざる所。高楠教授が珍材を贈與せられたる、荻原ドクトルが一二重要の助言を賜ひたる共に稿者の光榮として謹で茲に拜謝の意を公表する所なり。

註

（一）百萬遍知恩寺誌要（淨土宗全書二〇、三一四——三一五）

（二）天文年中山徒日吉社の修造のため當寺に於て、山門の靈寶を京師の衆人に拜せしむ。上人請に應じて知識を唱へ、說法勸進三十餘日に及ぶ。衆人歸敬の志を起して造營を助く。山徒之を德とし、元祖の眞影を送りて其功を謝す。是卽顯眞座主の望に依りて描寫し給ひし所にして座主念持の尊像なりしといふ誌要、全書二〇、三一五。

の證定整理したる瑜伽[二五]師地論菩薩地原文等之に屬し、字體法隆寺と伯仲の間にあり。海龍王寺及來迎寺貝葉は之に比して少しく古代に溯り得べし。即伊字耶字等の書法、古代より法隆寺悉曇に至る過渡期を示すもの多きを以てなり。兩字貝葉の撮影今參照に供するものなきを以て玆に字體を提出すること能はずと雖、其本貝葉よりも後代に屬することは、兩三回の展覽の結果、安全に之を斷言し得べし。

已上の研究に由りて本貝葉の書寫の年代は略之を推定し得べし。即本貝葉はバワァー樺皮經よりも新しく法隆寺貝葉よりも上代にあることは前記の事實に依りて明なるを以て、今ビューラーの斷定を公平とし、[二六]バワァー樺皮經を西暦五世紀に屬し、而して法隆寺貝葉は西暦六世紀の後半よりも遲からずとして、更に此上に海龍王寺及來迎寺等の古寫葉を數へ來らば、本貝葉の時代は更に上方に限定せられ、五世紀後半のものとなすの略當れるを見るべし。

[二七]故ベンドール教授は其發見したる十地經貝葉の時代を西暦四世紀より七世紀の間に限定し、其書風の西域記に出づる尼波羅の英主光冑(アンシユヴルマン)王の刻文と似たるを見て、必らず六世紀を下らざるべきを斷定するも、是寧ろ愼重に失するの說にして、實は進みて更に其古代に屬するを確定し得べく、教授が定めたる最上限の四世紀の中央若くは後半を以て此貴重の寫經の時代と看做すべきに似たり。是本貝葉及バワァー寫經との關係に照らし自ら推斷し得べき所ならずや。今假に一年表を作る。本貝葉の價値以て知るべし。

四世紀後半…………十地經貝葉及西域所傳貝葉

(一六) 宗教研究第一巻第三號、五六五。

(一七) Bower manuscripts, edited by Hoernle 1890. 近くは Rhys Davids: Buddhist India p. 124 已下を見よ。

(二〇) Rühler: Tafel V に出づる字の變遷を參照せよ。

(二一) Hoernle: Manuscripts remains of Buddhist Literature found in E. Turkistan 1916. p. XXII-XXIII.

(二二) ビューラー表第九、

(二三) ya及母音のiは、此例となる。

(二四) Album Kern p. 373 bb.

(二五) Bendall: Catalogue of Buddhist Manuscripts in the University Library Cambridge 1883. p. 191, Wogihara: Asaṅga's Bodhisattvabhūmi (Dissertation.)

(二六) Bühler paleographie p. 48. 法隆寺貝葉に關しては p. 50.

(二七) Sikṣāsamuccaya: Introduction XXVII

貝葉梵文原寫訂正

本貝葉の梵文は剩寫甚だ多し。是本文に就きて見る所の如し。且つ佛敎寫經の常として速聲、語格等に於て甚しく注意を拂はざるに似たり。今此等に就き、粗訂正を施さんと欲す。(表面第一行)(1)°vanaḥ 普通にては無論vono に作らざるべからず。(2)Avicir の體格は屬格 Avicer となすを正とす。(第四行)最後の Avicer は、體格に正さゞるべからず。

（三）淨土宗全書二〇、二四五。

（四）智證大師請來目錄（佛敎全書本九二）

（五）阿叉羅帖第一。

（六）御請來目錄（佛敎全書本、二八）

梵筴三口。右般若三藏曰。吾生緣。罽賓國也。少年入道。經曆五天。常誓傳燈。來遊此間。今欲乘桴東海無緣。志願不遂、我所譯新華嚴經及此梵筴。將去供養、伏願結緣彼國。拔濟元々。……

（七）靈巖寺和尙請來法門道具等目錄（佛敎全書本四四）

（八）常曉和尙請來目錄（同上本三十九）——多羅梵筴口一。

（九）此等珍貴の貝葉寫眞は第三回東京大藏會に展出せられたり、同會目錄に奧書を記す。

（一〇）同上。

（一一）Bendall: Śikṣāsamuccaya (Bib. Buddh I) の卷頭に寫眞を出す。

（一二）Bühler; Indische Paleographie p. 48 49 note.

（一三）倶舍第十一舊倶舍第八（冬一、四七a）正理第三十一（冬四、五十二a）顯宗第十六（冬七、六八a）

（一四）荻原氏 Mahāvyutpati ccxv (p. 138)

（一五）Neumann: Majjhimanikāya p. 352.

Die Erzh-olle aber, ihr Mönche, hat vier Winkel und vier Thore. genau nach den Seiten verteilt, ist mit eisernem Walle umschlossen, mit Eisen überwölbt. Ihr Boden, aus Eisen bestanden, von glühender Röthe durchdrungen, erstreckt sich rings umher dreihundert Meilenweit überall hin.

維摩詰所說經解題

（大正六、七、國民文庫刊行會「國譯大藏經」中に收む。國譯本文は揭出を略す）

【一、本經の名義】 本經はその原語に題して、毗末羅詰利帝涅提舍 Vimalakirti-nirdeśa といふ。毗末羅詰利帝は無垢稱若くは淨名と漢譯す。卽微瑕なき白玉の如き名聲を有し、內德充溢して、淸譽外に發するの謂にして、此一經の主人公。印度の古時、學問思辨を以て名ありし、毘舍利國 Vaiśāli 梨呫毗 Licchvi 共和市の一富紳の名。元是法身の大士、跡を塵界に現して、廣大不測の妙用を顯示す。事本經の序分に讃述するが如し。維摩詰は是この對譯を約言したるものなり。涅提舍は詳說・叙述等の義あり。今之を所說と譯す。此語を用ふるの聖典其例乏しからず、無盡意菩薩所說經 Akṣayamati nirdeśa の如き、本經と同例とすべく、更に首楞嚴三昧經 Śūraṅgamasamādhi-nirdeśa 大悲經 Tathāgatamahākaruṇa-nirdeśa の如き、皆涅提舍の語を用ひたり。

浩瀚の佛教聖典、若古譯家に從へば其說者よりして之を五種に分つを得べし。卽ち佛說・聖弟子說・諸天說・神仙說・變化說なり。佛說は佛陀親ら獅子吼して大敎を宣揚したるもの、大小乘の諸經多くは是なり。聖弟子說已下は菩薩・羅漢・天神・龍・鬼等、佛力の加被を得て、大道を宣傳し、其說く所佛意に順じ至理に契ひて、能く上求菩提・下化衆生の樞要を握り、轉迷開悟・眞空妙有の眞詮を顯すもの、是佛陀の自說にあらざるも、佛意に契合し眞諦に合一するを以て直に之を佛說と同じと認めらる。大小乘聖典の中此類また乏しからず、本經亦實

(第四行)――(裏面第一行) avibhaktā 此字にては意義通ぜず、故にa字を剩寫と認め〔a〕 vibhakta として譯を試みたるも、重大の變更なるを以て校正中荻原氏の意見に問へり。同氏の意見はa字をsu字の誤寫と見んとす。其説は稿者の説に比し、更に精透にして深遠の造詣を見るべきものあり、同氏の書に曰く

a字は古體のsuと能く似て其混用したる例を他處にも發見したることあれば、aはsuの寫誤か、若くはaと見えても實はsu字なるべし。

Avicir mahānarakaḥ Suvibhakto……(十一月二十二日書簡)

荻原氏の説は mahānarakaḥ の涅槃點(ヸサルガ)なること、釋義として「善く分たれたり」といふ注解的語義が頗る其精透なるを感ぜしむ。a字を剩寫とせば mahānarakaḥ を。narako と正さゞるを得ざるべし。

(裏面第一行)(1) vibhaktā は無間の單數に應じ vibhakto を可とす。

(2) Saṃjīva tena は普通 Saṃjīvas teṇa を正とす。第二行第四行に於ける文同じ。已下速聲の規則に従はざるもの少しとせず、必らずしも煩しく一々改めず、佛教寫本の特色を存す(第二行) Avicer は主格 Avicir を正とす。

8　論最後第十八品に佛道品の頌第十六より第四十一に至る全文を引く
今參考の爲に前記引文の對照表を付せん

	ベンドール氏集菩薩學論刊本	縮藏維摩（羅什譯）黃七
1	P.6.10—11	24a2—3
2	P.145.11—15	22b10—12
3	P.153.20—22	26b15
4	P.264.6—9	22b12—13
5	P.269.11—1213—270.3	23a10—12.26a13—15
6	P.270.4—8	27a18—19
7	P.273.6—7	21a15—16
8	P.324.6—327.4	24a12—26

【三、本經の飜譯】　本經最古の支那譯は、後漢靈帝の中平五年（西一八八）嚴佛調の雒陽に於て譯したる所、經錄稱して古維摩といふ。二卷あり、早く佚して傳はらざるを遺憾とす。吳の黃武二年（西二二三）より初めて建興年間に至る終始三十餘年、優婆塞支謙、武昌に於て頗る譯經の事業に力め、出す所、十八部あり。此中本經の第二譯あり。題して維摩詰經といひ、或は佛法普入道門三昧經又は維摩詰所說不思議法門經の題を掲ぐ、二卷あり現に存在す。次で竺叔蘭、西晋惠帝の元康元年(西二九一)毘摩羅詰經三卷の譯あり、是第三譯なり。竺法護の一卷の維摩詰所說法門經續きて出づ。之を第四譯とす。法護は叔蘭に先ちて支那に來り譯經事業を始めしも維

に此第二類聖弟子説に屬す。蓋し下に示すが如く、本經三會の中、初會は佛陀の自説、終會は佛陀維摩の合説と雖、其大宗本分たる中部の第二會は、純ら維摩の説を敍述するを以てなり。故に之に題して、維摩詰所説經といふ。

【三、本經の原文】 本經の原文は惜い哉、散佚して傳らず。法華・楞伽・般若・金光明等の梵本嚴存に對して研究家の特に痛嘆する所なり。但し西暦紀元八世紀の頃、那爛陀大學の法將寂天論 Śāntideva 師の著はしたる大乘集菩薩學論 Śikṣāsamuccaya の中、本經を引用して文證に具ふる頗る多く、中に引文數紙に亙るものあり。本經原文の一部分はこの論中の引證に於て今に嚴存し、金鱗珠爪、以て全龍の偉形雄姿を推し得べきものあり。眞に至重の珍材とすべし。引く所の經文左の如し。

1　論第一集布施學品に本經佛道品の一節を引く
2　論第七護受用福品に本經觀衆生品の一節を引く
3　論同品に本經香積品の文一節を引く
4　論第十四自性清淨品に同く觀衆生品の一節を引く
5　論第十五正命受用品に觀衆生品及香積品の各一節を引用す
6　論同品に本經菩薩行品の一部を引用す
7　論同品に問疾品の一小節を引く

同 三、弟子品	同 三、弟子品	第二 三、聲聞品
同 四、菩薩品	同 四、菩薩品	同 四、菩薩品
同 五、諸法言品	卷中 五、文殊師利問疾品	卷三 五、問疾品
同 六、不思議品	同 六、不思議品	同 六、不思議品
卷下 七、觀人物品	同 七、觀衆生品	卷四 七、觀有情品
同 八、如來種品	同 八、佛道品	同 八、菩提分品
同 九、不二入品	同 九、入不二法門品	同 九、不二法門品
同 十、香積佛品	卷下 十、香積品	卷五 十、香臺佛品
同 十一、菩薩行品	同 十一、菩薩行品	同 十一、菩薩行品
同 十二、見阿閦佛品	同 十二、見阿閦佛品	卷六 十二、觀如來品
同 十三、法供養品	同 十三、法供養品	同 十三、法供養品
同 十四、囑累彌勒品	同 十四、囑累品	同 十四、囑累品

三譯を比較するに文義の精粗巧拙異なりと雖、羅什の譯は文理の許す所謙譯を採用し、玄奘の新譯も多く羅什の舊譯文を參酌してその全文を襲踏したるもの少からず、以て其愼重苟くもせざることを見るべし。但し細處に至りては舊傳の梵本必ずしも新渡のものと同じからず、時代の推移と共に經文の上に多少の增補删定を見たるは譯文に照らして之を證すべし。卽ち第一品の讚佛偈の如きも最古譯は十頌、最古譯は十八頌、最新譯は十九頌半にして其增廣の痕跡自ら明なるものあり。左圖に見て其出入を知るべし。

摩の譯は大安二年（西三〇三）にして十年の後にあり。此譯出でゝ後支敏度、支謙叔蘭法護の三本を合糅して一部とし五卷の合維摩詰經を編し、『偏に一經を執しては兼通の功を失ひ、廣く三經を披けば則ち文煩はしくて究め難き』を救はんが爲に支謙譯を底本とし、彼此相對通讀に便したり。この合部經前の第三第四の譯本と皆湮滅して存せず、甚だ惜むべしとす。東晉の代に至り西域の沙門祇多密 Gitamitra あり、維摩詰經四卷を譯出す、是第五譯なり、又今傳はらず。後秦の弘始八年（西四〇六）鳩摩羅什 Kumārajiva 常安大寺に於て義學の沙門千二百人の集會の前に於て重ねて三卷の本經を譯成す。是を第六譯とす。唐の玄奘、貞觀年間長安の大慈恩寺に於て六卷の説無垢稱經を譯す。是最終の第七譯たり。

已上七譯の中今存するものは支謙羅什及び玄奘の三本のみ。此中古來最も盛に行はるゝは羅什本にして、玄奘の新譯の如き、其詳密精確諸譯に超出するに關らず、學者多く羅什本を本として註疏を製し、慈恩の註已外殆ど之を依用するものなし、今回の國譯また羅什の譯を取れり。

此等諸譯の原本は如何なるものなりしや、今全く對校の便を缺くを以て、確言するを得ずと雖、大體同一の底本に依れるが如し。是三經品目の同一なるに徴して推し難からず。

支謙	羅什	玄奘
卷上　一、佛國品	卷上　一、佛國品	卷一　一、序品
同　二、善權品	同　二、方便品	同　二、顯不思議方便善巧品

ananta-jñāna-sampannā	智慧無邊際	無邊智圓滿
ananta-paāṇimocakāḥ 140	度脫無數衆	度脫無邊衆
na teśāṃ kalpa-koṭibhiḥ	假令一切佛	假令一切佛
kalpa-koṭiśatair api	於無量億劫	住百千劫中
bguddhair api vadadbhis tu	讚嘆其功德	讚述其功德
nuṇāntaḥ svaco bhaved 141	猶尚不能盡	猶尚不能盡

但し特に注意すべきは、玄奘の用ひたる梵本は那爛陀に於ける瑜伽教系の學者の傳承したるものにして、羅什は寧ろ三論教系の古本に依れる痕跡あること是なり。

羅什（國譯一一四）	玄奘　縮藏黃七、六十五左
無所歸を觀じて而も趣きて善法に歸し、無生を觀じて而も生法を以て一切を荷負し	樂うて阿賴耶を觀察すと雖、而も淸白の法藏を捨てず。諸法畢竟無生なるを觀ずと雖、而も常に荷負して衆生の事を利す

此中重要なるは羅什譯は無所歸 Alaya の原本を用ひ、新譯は Ālaya とあるに依れる事にして、單に阿字一字の長短音の差に過ぎざるも、古譯は諸大乘經に屢見る、無住無所依等の眞空の異名を取り新譯は之を夫の第八識の名に用ひて、法相宗義の八識論の根底に立てるを證したるを示せり。蓋し教理史及び聖典史上少からざる趣味あるを見る也。

支謙	羅什	玄奘	考備
1	1	1 2	▲數字は偈數、ａｂは一偈の前半と後半。小數字１２３４は一偈中の四句を代表す
2	2	3	
3a	3a	4a	
—	3b	4b	
3b	4a	5a	
4a	4b	5b	
4b	5a	6a	
5a	5b	6b	
5b	6a	7a	
6a	6b	7b	
6b	7a	8a	
7a	7b	8b	
7b	8a	9a	
8a	8b	9b	
8b	9a	10a	
9a	9b	10b	
9b	10a	11a	
10a	10b	11b	
10b	11a	12a	
—	11b	12b	
—	12	13	
—	13	14	
—	14	15	
—	15	16	
—	16	17	
—	17	18	
—	18.1	19.2	
—	18.2	19.1	
—	18.3	16.3	
—	18.4	20.1	
—	—	19.1	
—	—	20.2	

第八品の偈頌支謙譯は四十頌、什奘兩譯共に四十二頌にして、この中四十一二の兩頌は古譯に於て之を見るを得ず。

已上は唯偈頌に就きての比較なるも、本文の所々に於ても亦之に類する出入あるを免れず、今煩を恐れて一々之れを指摘するを省く。

羅什と玄奘との兩譯に於ては、前に一言したる如く文理の許す限りは什譯の文字を用ひ、奘が平素大小經論を譯するに當り、語毎に舊譯家を非難し之を更正するが如き態度なし。試に左の比較を見よ。

梵文（集菩薩學論所引）	羅什	玄奘
yeśām anantā ṣiksaā hi anantaś câpi gocaraḥ	如是道無量 所行無有涯	如是無邊行 及無邊所行

す。解脱は卽この至理の體得と本具とを示す。而してこの不思議教は卽ち不二の法門なり。空有・生滅・因果・迷悟、本體と顯象と、主觀と客觀と、目的と方法と二にして一、一にして二、且く有無の相對に就き其一邊を說かんに、花紅柳綠、萬象歷歷として而も本來空寂なり、非空にして空なり、之を眞空とす。夢幻泡沫宇宙何物か定相あらん。而も萩露楓霜、秋光自ら目に滿つ、非有にして有、之を妙有とす。實在論と虛無說と其偏せるを捨て執せるを袪けて、無執の大道、無著の至理、大公にして大平、大自由大光明の乾坤自ら存す。本經この大道至理を說くや徹底痛快、夐然他經と別樣の機軸を出だし、雄大の奇想、警拔の妙句、聖經中比類を見る稀なり。故に古來の賢哲特に此經を尊重し、援引以て文理を莊嚴し、造疏作註、盛に眞詮を硏尋毘贊したり。印度の大論師龍樹が大品般若の釋論一百卷の大作あるや、大小諸聖典一百餘部を博引廣證する中本經と法華とを引證する最も多く、其文十數に上る。下りて靑目・月稱・法稱等那爛陀大學の諸學匠雲の如く起りて中論硏究の盛なるや、其釋論の中好みて本經を引けり。一例として漢譯の般若燈論を擧ぐべきか。前旣に記したる寂天論師の大乘集菩薩學論またこの適例たり。支那に於ては此經の硏鑽特に盛なるを見る。經錄を案ずるに其最古は西晉廬山慧遠の高弟曇詵の維摩詰子註經五卷あり。前齊の蕭子良亦維摩義略五卷抄維摩詰經二十六卷の大作あるも共に亡佚して傳ふるなし。羅什の飜譯を了るや自ら疏を造り、其門下道生僧肇をして輯錄せしむ。是註維摩經十卷にして今に學者必需の書なり。淨影の慧遠之に義記八卷を加へて更に其精妙を發揮せり。天臺諸祖の註疏、また美を百代に擅にす、卽智顗の玄疏六卷廣疏二十八卷を大宗とし、湛然の略疏十卷疏記三卷あり、道暹の疏記抄之に次ぐ。三論家

支那譯の外、現に西藏の大藏經佛說部の經集(Mdo)中に維摩の譯本あり。Dri· ma· med· par· grags pa· bs-tan· pa 是なり。經集第十四頌字 Pha 函に收め、大本一百零八紙に亙る。大體漢本と同じ。滿蒙譯はこの藏譯を底本とせり。

古代西域佛教の盛なるや、本經西域古語の譯本ありき。余嘗て恩師ロイマン教授を助け、其斷片二葉を證定したることあり。是實に本經佛國品寶積奉蓋の文なりき。この報告は載せて獨逸東洋學會報第四十二卷（千九百八年）にあり。よく羅什の漢譯と合す。この斷片はかの西域探險家スタイン氏の于闐の故趾に於て蒐集したる所にして、今英國オックスフォードの東洋學老匠ヘルンル博士の手に保管せらる。

此等各國の古譯を記するに當り、特に最後に錄すべきは英譯の維摩經存すること是也。是明治三十一年より同じく二年に亙りて、英文反省雜誌に於て十一回を重ねて、大原嘉吉氏の公表したる所なり。大原氏篤く佛教を信じ、大德櫻井敬德阿闍梨に就き深旨を究め、聖典の英譯を以て其大誓願となし、大乘諸經の譯本少からず、其譯必らずしも善美と稱すべからざるも、摯實弘敎の大志、拮据倦まざるの精進、眞に欽仰すべし。維摩英譯は卽この至難事業中の優秀なるものなりき。惜い哉天年をこの人に藉さず、壯歲白玉樓中の客となりしより旣に十有餘年、この國譯を刊するに當り、自ら限りなき感慨あり。

【四、本經の敎理史的置位】 本經は不思議解脫を以て大宗となす。至理は言詮を絕し、思慮を超え、蕩蕩乎として能く名づくるなし。古釋家假に之を實在・認識・論理の三方面に觀て、不思議境、不思議智、不思議敎とな

騰・行賀・神英・勢範・最澄・道銓等の碩學疏を製し註を作ると雖殆ど亡佚して存せず。唯寶池房證眞の玄略鈔私記を傳ふるに過ぎず。而も之を御疏に比するに月前の螢火のみ。支那の註脚に就き、更に註を作るは、由來本邦佛學者の常習、發明を缺き、獨創の見なきの憾は、何れの方面に於ても邦人の病弊と雖、また其比較評隲の鋭利なるもの之なきにあらず。其最古のものは淨名玄論を釋したる大安寺智光の略述なり。古籍幸にして存し日本大藏經中に收む。上宮御疏を細釋するもの東大寺凝然の菴羅記四十卷あり。先に日本佛敎全書此南都の祕書を公刊したり。近代に於ては華嚴の鳳潭註維摩に發朦抄五卷を作り、光隆寺智空註維摩日講左券十卷を選み、善久與隆義心錄十二卷を製す。天臺の末疏には安樂院本純の玄義籤錄五卷、垂裕記を主とせるもの同作籤錄十卷あり。最近故島地・織田諸師の講義出で、又加藤咄堂居士の楊起元の評註を合璧せる和譯一卷及講話二卷あり。通俗平明、最も入門の研究者に適す。其他諸家の講錄一にして足らず。今追次之を枚擧するの煩を避く。

【五、本經の敎會史的位置】 印度支那に於ける本經研究の盛なるは前既に記する所の如し。但し信仰上の持誦崇奉に至りては法華・金光明・金剛諸經に比して甚振はざるの觀なき能はず。三寶感通錄の中、宋の孝建中沙門普明・法華と本經とを持し、其本經を誦するや空中に倡樂の聲を聞くを記し、梁の天監の末年釋道琳本經讀誦の功に依りて魔事を除くことを錄するも、之を法華の効驗に較ぶれば十の一に過ぎず。文藝敎化に至りては、本經の結構文辭諸經に卓出するが故に、自ら他と異なるもの存す。隋の王胄病に閩海の僻地に臥すや、親友顒法師の勸に由りて、本經を以て身心を調伏し、詩を作りて之を法師に致せり。曰く。

にありては吉藏の淨名玄論八卷義疏六卷略疏五卷遊意一卷あり、又學人の祕珍たり。唐代に於ける傑出の註釋は慈恩大師窺基の說無垢稱賛六卷にして、玄奘新譯の本經註解に於ける唯一の依憑とす。宋より明に至り孤山智圓の略疏垂裕記十卷、明の傳燈の無我疏十二卷今人の好みて依用する所。明の楊起元の評註、淸の淨挺の饒舌の如き、白衣俗士の者と雖、亦捨つべからざるものあり。是等の疏釋は今幸にして現存するもの、日本續藏經の第二十七已下の四套之を纂集し、學界の便極めて多し。若し其散佚したる註疏を數ふれば唐已前旣に三十部に上る。書目載せて義天錄、東域傳燈目錄等の古書に出づ。此等逸書の中、燉煌石窟祕龕の中より再び世に出でしもの、僅に道液の集解關中疏の如きあるも、餘は今之を見るを得ず。眞に嘆ずべき也。

吾が國に於ては聖德太子天縱の睿智、絕倫の神材を以て、國基を恢宏し文物を扴開し、帝道を隆昌にし民福を增進し、特に大敎を共歸宗とし、親ら疏を製して範を百世に垂る。卽ち所謂御註三經疏にして、實に法華勝鬘及本經の御疏とす。此中本經義疏御製は推古帝二十年の正月神筆を起し翌二十一年九月に至り稿を了り給へり。是勝鬘御疏製作の後一年法華義疏下筆の前二年にありとす。實に太子四十二歲の大作なり。太子御疏の敎理史上の價値に至りては、近世の碩學普寂律師が勝鬘の顯宗鈔を編するに當り、御疏を嘉祥大師の勝鬘寶嵎に對して體義を究め幽賾を探る聖皇の義疏獨り其美を擅にすとなし、之を勝鬘至高の指南として聖智の自得なりと賛ぜり。本經の義疏亦律師の評語を遷して其妙解を賛揚すべきか。近時支那に金陵刻經處あり。淸信の士令法久住の赤誠を以て聖典を公刊するに甚力む。此中特に太子御疏を梓行して讃嘆措かず。盛德誰か欽仰せざらんや。御疏の後常

百町を興福寺に施入して講會を興復し、大織冠の祥忌十月十六日を結願とし、十日より初めて一週間之を行ひたり。是藤原氏は外戚の尊貴、功勳の家格を以て特に皇家藩屏の至上たりしを以て、最初藤原氏の家祖追資の爲の私講法會は、皇室の寵遇に依り、次第に勅會の嚴儀として毎年の例となるに至り、其講師及參列の淨侶は僧綱嚴に之を簡定し藤原氏長者の認可を得て、勅裁を仰ぎ、辨官下向して儀式嚴重を極め、講師の銓考の如き、頗嚴峻を極め、承和六年已後維摩會講師を以て宮中最勝會の講師となすの恒例を開けり。之より先き維摩會は其講場必らずしも興福寺と一定せず、或は法華寺其他に於ても開會せしも延暦二十年已後宣下ありて之を興福寺の專修講會となし他所に移すべからざるを嚴勅したり。爾來永祿七年に至り綿綿絶えず古式を傳へ、其講師を初め研學・探題・宣聽・會參等の役者の列名載せて三會定一記に存す。最近光格帝の天明年就また此會の記事舊記に見え、明治維新に至るまで、盛儀古に比すべからずと雖、猶古格を存して本經贊嘆の盛なる他に全く其例を見ず。この嚴儀の一斑は寛永年間の記録に就る大會日記、天正年間の維摩會竪儀日記等の古文書之を詳にす。此等古記録は大日本佛教全書中、興福寺叢書に之を纂輯公刊したり。

【六、本經の分文】 本經全體の解剖科段に至りては、古來學者の說一定せず。蓋本經卷帙甚大ならずと雖、構造頗複雜巧妙を極め、峯巒重疊、烟霞互に映じ、容易に渾然たる雄景を分つに難きを以てのみ。佛國の一品先づ菴羅園の說法、寶積居士の讃佛を以て其序幕を開き、次で維摩室內の神變說法絶大雄偉の局面を演出し來り、還た菴羅園の一場に復して經を畢る。十有四品明珠連貫、陸離の色彩互に映發し、奇正相承けて變幻端倪すべから

客行萬餘里。渺然滄海上。五嶺常炎鬱。百越多山瘴。兼以勞神形。遂此嬰疲恙。桐雷邈已遠。砭石良難訪。抱影私自怜。霑襟獨惆悵。毗城有長者。生平夙所尙。復藉大因緣。勉以深廻向。心路資調伏。於焉念實相。水沫本難摩。乾城空有狀。是生非至理。是我皆虛妄。求之不可得。誰其受業障。信矣大醫王。玆力誠無量。

と。唐の王維詩を以て鳴り、本經を渴仰する深く、自ら字して摩詰といへり。王摩詰の好尙は實に支那一部藝術に遊ぶものを代表す。宋より元明に逮びて本經を題材とせる詞賦繪畫少からず。熾盛なる教義の研究と相待ちて、本經の流傳を洽くしたり。

吾國に於ては上宮の御疏、先づ本經崇奉の端を發せし已來、其講傳奠供の嚴肅殷盛なりしこと、實に佛教國中第一に推すべし。卽ち興福寺の維摩會は藥師寺の最勝會、大極殿の御齋會と鼎立し、本朝三大勅會の、隨一として、保元年間興福寺僧綱の上表したる如く、『年化を計るもの五百一歲、凡そ大命嚴重にして齋莚の儀式昔より今に至り增あるも減ずるなし。是本朝佛法の濫觴我國希代の齋會なり。自宗餘宗の碩學斯が爲め帙を披き、專寺他寺の英賢、此に因りて燈を揭ぐ。誠に鎭護國家の鴻基にして興隆佛法の勝躅なり。況や齋會鄭重、聲名を異域に傳へ、唐朝の聖哲、遙に難義を此場に問ふ。眞に當寺の光華、大會の面目なるもの歟』。而してこの創建は大織冠鎌足が百濟の尼僧法明の勸說に依り、維摩講說の功德に由りて痼疾快癒したるに感激して、其山城陶原の別業を寺院として元興寺の福亮法師を請じて齊明帝の四年本經の講莚を開きしを濫觴とし、公の薨後、其忌辰に當り、淡海公不比等等、遺志を奉じ講說を續け、爾來一時中絕せしも、天平寶字元年藤原仲麿の奏に依り、功田一

序分（菴羅會）

- 通序……佛國品
- 別序
  - 原起序……佛國品
  - 述德序……方便品
  - 顯德序……弟子品・菩薩品

正宗分

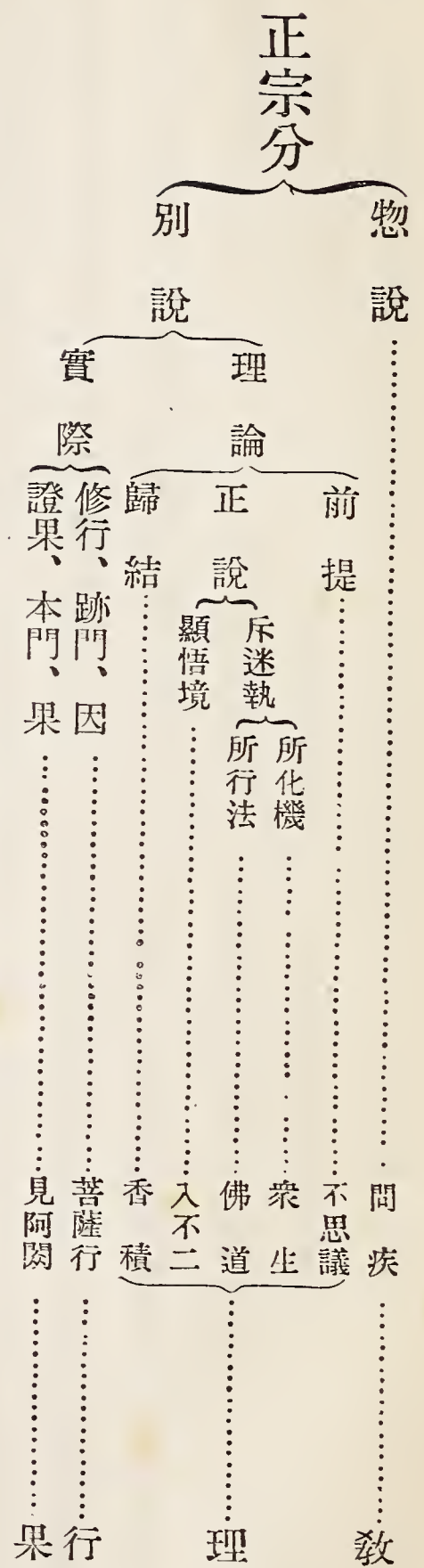
- 方丈會
  - 化上根……問疾品・不思議品
  - 化中根……觀衆生萬・佛道品
  - 化下根……入不二法門品・香積品
- 菴羅會
  - 維摩來詣……菩薩行品
  - 維摩正說……見阿閦佛品

流通分（菴羅會）

- 流通因緣……見阿閦佛品・法供養品
- 正勸流通……囑累品

通序は諸經共通の叙景にして、經首の菩薩羅漢天人等の列名の部分即是也。別序は寶積の奉蓋讃佛よりして佛國因果の說法に了る。是維摩を起し來るの伏線にして卽所謂原起序なり。述德は經文廣く本經主人公の大德偉行を叙述し、顯德は菩薩大弟子の口を藉りて其難測の妙用、無碍の妙辯大智を讃說す、而も主人公未だ場に上らず、是猶序幕として之を序分に攝する所以也。次の七品半正しく維摩を起し來り、縱横の大獅子吼不可思議の神變、宇宙の至快至妙を極む、是を正宗分とす。流通分は卽第十一品の末尾、佛陀と舍利子との問答より初めて卷を終

ず。嘉祥大師は之を夫の華嚴の七處八會の說法に例して二所四會の經說といへり。既に此の如し。諸師の科を分ち段を取る、同じからざる共の所のみ。

羅什道生の兩賢及び當時の古釋家は概ね科段を開かず、直ちに文を帖して解釋に從ふ。天臺の疏に依るに僧肇は明かに分科を言はずと雖、初品の寶積大士發問の前を序文とし已下第十三品に至る之を正宗となし最後の一品之を流通とす。靈味法師は方便品已後を正宗とす、餘は前と同じ。開善法師は段を設くる稍詳なり。即ち佛國・方便・弟子・菩薩の前四品之を序說となし、維摩室內の六品を正說とし、菩薩行・阿閦佛の二品を證定とし、後二品を流通となす。嘉祥大師等三論の諸師また此分科を依用せり。莊嚴・光宅の諸師また略之に同ず、唯後の四品を流通となすこと稍異なる。蓋し本經既に維摩詰所說といふ。那維摩出場に至るまでは、畢竟本經の準備弄引の序幕たるに過ぎざればなり。天臺は開卷如是我聞より寶積大士讃佛偈を說くに至る之を序分とし、通別の二に分つ、寶積請問より佛國の因果開示已後見阿閦佛品に了る十有二品半是正宗分なり。法供養・囑累の二品流通たる前の如し。慈恩は新經に由りて疏を製し註する所新意に富む。而も科文に至りては簡明なりと雖稍平凡を免れず。即ち『初一品說法緣起。分次十一品正陳本宗分。後二品讃授流通分』となしたり。我が上宮聖皇の御疏を製し給ふや、大體嘉祥に依り給へり。是三論家の教を承け給へるに由る。而も睿智天縱必ずしも、古說に盲從せず。精確明快、古今に超出す。是太子勝鬘の分科が挺然として諸家を拔き、高妙獨り美を擅にすると同轍なり。今謹みて之を圖示して本經の全局を大觀せん。

流通分は本經の廣宣流布の功德を勸說し、慇懃聖懷を累して、之を聖弟子に附囑す。文相甚明なり。特に箋繹を要せず。

【七、本經內容概說】

一　佛國品　如來毘耶離菴羅樹園に在りて、諸大菩薩大弟子天神等の禮敬を受くる時、毘耶離の長者子寶積其五百の同族と共に佛所に來詣し、各七寶莊嚴の寶蓋を獻ず、佛陀神力を以て此五百の寶蓋を合して一大蓋となし、三千大千界を覆ひ、佛國土清淨の相を其中に映現せしむ。寶積卽偈を說きて佛陀を讃嘆し、清淨佛土の因を請問す。佛之に答へて萬善悉く淨土の因なるを教へ、要結して一心の清淨卽淨國の因なりと斷ず。曰く『其心淨きに隨ひて卽佛土淨し』と。舍利子時に謂へらく、佛心旣に至淨至潔なり、何ぞ此地に荊棘泥土ありて、醜穢斯の如くなるやと。佛之を洞鑑して、日月光あるも、盲者は見る能はず、國土純淨なるも、之を見る能はざるは實

ふ。文相知り易し。唯太子の疏特に此末尾に著眼したるの精確は古來釋家に嶄然として一頭地を拔く所以とす。

太子の分科謂ふに一毫も加ふるなく一絲も減ずべきなし。而も其正宗分につき、蛇足其妙解を莊嚴せば、太子の疏、問疾、不思議二品は上根の機を化するを示し、衆生・佛道は中根攝化の爲とし、入不二・香積の二品は下根の機を開導すとなす。而も是素より一應の配當、實は品品相承け、章相應じて唯一乘の上機成熟の爲のみ。第五の問疾は事に卽して理を起し、惣じて本經の大猷を示す。是正宗中の惣論たり。不思議品は事を起して理を談ず。寶座を燈王に借りて不測の神通を顯示す。是惣提なり。この客觀の大用、之を主觀に一言して不思議 Acintya といふ。衆生品は所化の衆生に付きて共空寂を說き大慈の妙用を敎へ、男女相の差別なきを斷ず、正に次の佛道品の邪正別なきを演べて所行の大法を述ぶると照合して迷執を拂ひ、巧妙の相反論理の批判、辛辣の逆說を用ひて、否定遮詮の銳機を現ず。入不二法門は衆生佛道の二品に說く所の悟境を說き、前の逆語に對する包容融會の綜說として實に本經の主要部分たり。此悟境之を客觀に名づけて不二 Advaita といふ。香積品はこの悟境の自由應用を示したるもの。惣論の寶座を燈王に借るに對して、香飯を香稱世界に覓め、受用の不盡を示して方丈會を結び菴羅會を起する素地となす。結構の絕巧、意義の湛深、鑽りて彌堅く仰ぎて益高し。菩薩行品は卽ち實地跡門の修行を說き、見阿閦佛品は本門證果の德を示したるもの、兩品自ら因果の關係をなす。今試に此私見を圖示せば略左の如し。

白して、問疾の大任に堪へざるを陳述し、一座茫然殆ど爲すなきの狀を敍して品を了る。

五 問疾品　大士文殊師利終に起ちぬ。彼維摩の偉器、甚だ酬對し難きを知るも、聖旨を奉じて往きて疾を訪はんとす。方に是龍虎相撲ち、鯤鵬力を角するの壯觀、滿座の聖賢神仙悉く文殊を圍繞して、摩詰の室に到る。維摩この珍客の至るを知り、洞然その矮小の四方唯一丈の室を空くし、悉く僮僕婢媵を退け單に一臥牀を安きて之に靜臥し、應接一番、不來不去の大問題を提起し、先づ滿座の心膽を寒からしめ、話頭一轉、病惱の起因と除滅につき、菩薩の病は大慈悲を以て起り、一切衆生病むが故に、大哲隨ひて病むを辯じ、病相の空寂虛妄を敎へ、疾苦の慰安と調伏とを極論し、痛快徹底を極む。其論ずる所は無執無著の大道、般若實相の至理、本經正說の總論として見るべし。

六 不思議品　時に舍利子文殊に隨ひてこの矮小の病室にあり、病牀已外空曠にして一の牀座なきを覩て心甚だ滿たず、維摩其意を察知し、之に告げて、法の爲に來るや牀座の爲に來るやを詰り、法の爲に來るもの軀命を惜まず、況んや牀座をやと大喝し、顧みて文殊に何處の佛土に上妙の師子座あるやを問ひ、其答に由りて東方須彌燈王如來より高廣八萬四千由旬の寶座三萬二千を借りて、この方丈の室に入る。小室依然として而もこの巨大山嶽の如き多數の師子座を包容して毫も障礙する所なし。方に是不思議解脫の實現、須彌の大山、之を芥子の中に納め、四大海水寸滴を餘さず一毛孔中に注ぎ、綽綽餘裕あり。大乘活殺自在の妙境力用說き來りて餘蘊なし。品末大迦葉の讃嘆を以て已る。

に衆生罪垢の致す所なりと説破し、遂に螺髻梵王と舍利子との問答となり、丘陵坑坎、荊棘沙礫、悉く凡心の高下差別に由ることを論じ、佛陀が足指を以て地を按じ、此土の本來清淨を實現し給ふを以て品を閉づ。蓋し是本經一卷の大序にして、歸結阿閦佛品の説相と、首尾照應し、雄大の結構、凡慮の及ぶ所にあらず。

二　方便品　此品に至り、初めて維摩居士の性格道德を敍述し、筆を極めて、其無盡の妙慧、無碍の辨才、無際の盛德を賛し、俗塵市井の間に身を置きて、大乘究竟の大用を具し、攝化自在、適く所として化せざるなく、觸る所悉く春を生ず。夐然として夫の小乘聲聞の徒の、獨善自濟、山居澗飮徒らに高うして、頑石朽林、利物の妙機を缺くと反す。此達人今や病惱を示し、疾苦を現じて、人の訪ふある毎に、悉く開導攝化して、益を被らざるなし。本品この無上勝方便の力を賛説す、卽方便品の名ある所以なり。

三　弟子品　佛陀維摩の病蓐にあるを知り、弟子を遣はし之を慰問せしめんとし、先づ之を智慧第一の舍利子に命ず。舍利子嘗て居士の爲に難詰せられたる屈辱を申べて、詣りて病を問ふに堪へざるを訴ふ。佛陀更に之を目連に命ず。亦其屈を受けたる甚しきを白して、之くことを固辭す。斯の如くして迦葉・須菩提・富樓那・迦旃延・阿那律・優波利・羅睺羅・阿難等の十大弟子順次に其往昔の打擊を自白し、恐れて一も往くを肯ずるものなし。

四　菩薩品　佛陀大弟子の往訪に堪ふるものなきを憫れみ、更に之を大乘の菩薩に命じ、先づ佛嗣彌勒に旨を告ぐ、大士彼が若きも其昔時難詰の辱を説きて行くを難しとし、光嚴・持世・善德の諸大菩薩、亦皆其失敗を告

是不二の一面にして全體にあらず、卽各自ら其說く所に安ぜずして却つて文殊に質す。文殊曰く『一切の法に於て言もなく說もなく示もなく識もなく、諸の問答を離るる』是也と斷ず。此至道言詮超越する所。最後に維摩は、實を以て證し、默然として言なし、この一默大千に震ひ、盡天盡地大獅子吼の雷轟を聞がざるなし。本經は玆に至りて最高調に達す。最後に文殊の贊說を以て此品を終ふ。曰く、善哉、善哉、乃至文字語言あることなし、是眞に不二法門に入ると。

十 香積品　本經の敎說至高處に達し、午時方に至る。舍利子念へらく、大衆何をか食せんと。維摩其意を知り、大神變を現し、香飯を衆香國に取り、大衆をして如來甘露味の食を受用せしめ、身心の大安樂を與ふ。次で來會の衆香國菩薩と維摩との問答あり。穢土と淨土との修行の差別を說き品已る。此品維摩方丈内の說法の最後に位し、不二法門の實修を敎へて前を結び、次の菴羅園に於ける說法を起し來る。卽室內と室外の關鎖連絡にして釋家の所謂結前生後なり。

十一 菩薩行品　菴羅園說法の大會忽然として金色の瑞祥を呈し、文殊大士維摩居士を伴ひて佛處に詣す。阿難衆香國菩薩の身香國菩薩の身香に感じて問を起すより佛陀の說法となり、香飯佛事をなすより初めて、諸佛一切の威儀進止諸の施爲する所、皆佛事にあらざるなきを敎へ、一切諸佛の法門と盡無盡無閡の法門に就き廣く菩薩の因行を明かす。

十二 見阿閦佛品　如來と維摩との佛身に就きての問答に起り、如來の身は一切超越の眞身なるを述ぶ。舍利

七　觀衆生品　開品直に文殊と維摩の衆生を觀ずるに就きての問答あり。菩薩の衆生を見るや水月鏡像呼響泡沫の如し、而も此幻虚の上に寂滅無諍無邊平等の大慈悲を起して饒益濟度常に止む時なく、無住の大本に立ちて一切衆生を度するを說く。此妙理開闡の際、至難の理路窮まる所、忽ちにして、窈窕の一天女を現じ來り、娉婷羅綾を飜して妙華を大衆の上に散ず。夫何等の情趣ぞや。この華菩薩の身に著かずして、却て之を不如法と執する聲聞弟子の衣上に著く。舍利子之を去らんとするも能はず、天女玆に於てか嫣然として分別差別の結習是不如法なりと喝破し、嬌舌滔滔として一切諸法は是解脫の相、婬欲瞋怒愚痴直に解脫なるを論じ、大乘の妙理、男女を別たざるを痛言し、其實證を示して品を結ぶ。

八　佛道品　非道卽是道、非道を行じて佛道に通達するを說く。通品辛辣の言、警拔の語、峻峰の劍を植ゑて攅立するが如く、前品の婬怒痴是解脫なる所以を詳說し、一切の煩惱皆佛種なるを論じ、人をして身毛竪立するの思あらしむ。時に會中普現色身と名くる菩薩あり。維摩に對し、父母妻子等の眷屬、奴婢僮僕象馬車乘等何れにあるやを問ふ。維摩卽ち偈頌を以て般若是母にして方便是父、法喜は妻にして慈悲は是女、誠實卽ち男、空寂直ちに舍宅、乃至大乘は車にして解脫法は飲食なるを明かにし、其攝化無碍の大用を提示す。頌文瑰麗、眞に方等聖經中の魁たるに恥ぢず。

九　入不二法門品　理を談じ、妙を語る、益佳境に入れり。維摩衆菩薩に謂つて、各樂む所に隨ひ、不二法門に入るを說かんことを請ふ。法自在等の三十一菩薩各其見る所に隨ひて生滅垢淨罪福等の不二を說き來る。而も

金光明最勝王經解題

國民文庫刊行會「國譯大藏經」中に收む。國譯本文は掲出を略す。尙右解題の前半と略同文の「義淨譯金光明最勝王經解題」、宗教界第十四卷第一〇號（大正七、一〇）に掲載あるも、本全集には採錄を略す）

一、本經の名義　金光明最勝王經は梵語に蘇跋那婆羅婆娑欝多摩囉闍蘇怛覽（スヴルナプラバーサウッタマラージャスートラム） Suvarṇaprabhāsottamarāja-sūtram といふ。或は囉闍即ち王字の前に、更に帝（因陀羅（インドラ） Indra）の一字を加へ、金光明最勝帝王經と題する本あり。支那に於ては此經北涼より唐に至りて數譯あり。今回の國譯は流通の廣くして文義の最も備はれるに依り、其中最新の譯本たる唐代義淨三藏の十卷本を取れり。經題の解釋に就きては古來眞諦・天台等。諸名匠詳細の說あり。特に天台はその金光明玄義の中數紙に亙りて、之を反覆審釋せり。今其概要を擧ぐれば、金光明の三字は、本經明かす所の大宗眼目たる佛陀の三身及三德を表示するものにして、金體の本有即ち本來淸淨尊貴なるは法身を示し、其燦爛の光は以て報身の慈光遍照と大智普照とを語るに足り、其萬人に與ふる寶貨鏹釧、所有彰明の鴻益は以て化身が類に應じて、普く億兆を利樂する大活用と其解脫の勝德とを說くものなり。帝王の二字は更に此の黃金の尊貴最勝なるを强めんが爲に添へたる譬喩にして、此經の最上を表徵す。即ち王者統治の大權を假り來りて、本經が諸經貫通の主經なることを示す。曰く、法身を詳說することは是れ華嚴の精要を攝するなり。智慧

子次で維摩に對し、その何れより沒して此に生ぜるやを問ひ、居士の一棒を喫す。佛陀卽ち居士は阿閦の淨土妙喜國の本地より跡を此地に垂れたるを明かにし、維摩をして神力を以て妙喜國土を大衆の前に現ぜしむ。是卽ち佛國品地の淨果を顯はしたるもの。大序の佛國品と照應して一經正宗の總結たり。

十三　法供養品　前品末尾の本經受持の 勝益を說きたるに續き、天帝釋に對し 本經受持讀誦供養の 大利を擧げ、藥王如來と月蓋王の舊緣を提起し來り、本經の了解は實に最上の法供養なるを勸說す。

十四　囑累品　佛陀彌勒に告げて慇懃に本經の廣宣流布を附囑し、更に阿難に命じて其受持流傳に當らしむ。佛勅の至重佛意の至深實に見るべし。

る頗る繁く、經中擧ぐる所の佛陀聖者の如き、多く金光明に關係ある名號を具せり。二三の例を摘出せば光輝幢(妙幢)といひ、師子相無礙光といひ、金寶山王、金幢光諸如來といひ、銀幢銀光兩大士といひ、悉く金光に關せざるなし。卽ち知る、本經は終始金光明を以て理義を說き、金光明を以て事例を設け、字字句句、唯金光明の煌煌爛爛として全篇を貫きて、十方を照耀するを見るのみ。滔滔たる世俗、黃金を渴愛するの人、何ぞ一度頭を廻らし來りて、本經に就き、この本來淸淨無垢の眞金の光輝に接せざる。

二、本經の原文　本經の原文は、他の諸大乘經の梵本と共に、幸にも尼波羅國(ニポール)に保存せられ、現に九大法寶(般若・法華・楞伽・十地・華嚴行願品・普曜・悲華・如來三業祕密・金光明)の一として同國佛敎徒の崇奉極めて厚く、寫經の殘存せる多し。ホツヂソン、ライト、ベンドール諸氏が此等古聖典を蒐集せる已來、本經の古寫本は現に歐洲諸大都の圖書館に藏せられ、巴里(パリ)に二部、倫敦の皇立亞細亞協會、印度局に各一部、ケムブリツヂに二部、ペトログラードに數部、印度カルカツタに一部を珍藏し、吾國に於ては、東京帝大は河口慧海師の將來に依り、京都帝大は榊敎授の蒐集に依り、各一部乃至二部の梵筴を寶什となすに至れり。

以上各國祕藏の諸梵本中、ケムブリツヂ及び亞細亞(アジヤ)協會所藏の二部を除きては、何れも西曆十九世紀前後の紙本新寫に屬し、古寫經として價あるもの少し。獨り除外としたるケムブリツヂ本は尼波羅(ニポール)紀元九百十四年(西曆一千七百九十四年)に書せられたる紺紙金泥の逸品なり。亞細亞(アジヤ)協會本は時代更に古く溯り、凡十三世紀を示すべき貝葉寫經なり。唯だその完璧ならざるを惜むべしとなす。

の不可思議を縱橫獅子吼するは、方に般若一經の大旨を貫けり。而して涅槃の妙諦を敎ふる、慇懃懇切にして、其の四德を闡顯することの雄大なる、實に涅槃大經の眞髓を收むるにあらずや。今案ずるに經に曰く『金光明妙法。諸經最勝王。』と、十字經題を解し得て餘蘊なし。

唐の慧沼は更に敎・理・行・果の四點よりして、頗る周到の經題解釋をその大著、金光明最勝王經疏の中に試みぬ。敎義の點より觀れば、本經の最勝・難得・本來尊貴淸淨にして王者の表示たる金輪に等しき、方に金光明の三字之を示すべく、之に大權大能至尊なる王字を加へ來りて、本經の面目益躍動すべし。理義の側より論ずれば、本經黃金の譬喩を以て佛陀三身の深義を說き（三身品を見よ）、黃金の本性淸淨と鎔銷冶錬を以て、巧に法報化の妙義を開闡し、而して其妙義の中心たる眞如の理、尊勝なるを以て之を王に譬へたり。修行の邊に就きて見んか、本經演ぶる所の斷惑證理は、一に眞金の鎔銷せられ、冶錬せられて、本來無垢の大光明を發するを譬とす。其菩薩の佛位繼承を說き、又王子を以て譬喩を說く。是れ金光明最勝王の名ある所以なり。更に之を最後の大果に當てて考へんに、三身三德妙理之を金光明の三字に當てて巧に其解釋を得る、實に眞諦・天台等諸大師の說く所の如し。

本經經題は斯の如く經中の深理よりして名けたるも、又た經中示す所の諸般の事例に依りて、其命名を得たるが如し。第四品中、金光明赫奕たる一大鼓、妙音聲を發して、遍く滅罪救苦・廣宣佛敎の大能をなすを說き、授記品中には、銀光大士、未來金光明世界に於て成佛し、金光明如來と號するを明し、其の他譬喩事例金光を用ふ

一）曇無讖（Dharmarakṣa）の金光明經四卷本とす。次で梁の承聖元年（西暦五五二）に至り眞諦三藏（Paramartha）の七卷二十二品本出で、續いて、北周武帝の代（西暦五六一—五七八）、耶舍崛多（Yaśagupta）の金光明更廣大辯才陀羅尼經五卷二十品就れり。隋の開皇十七年（西暦五九七）沙門寶貴本經の諸譯を合揉して、完璧となさんと欲し、大集等諸大乘の合部に準じ、沙門彥琮、學士費長房等と力を協せ、古譯を統合して合部金光明經七卷を成し、曇無讖の古譯缺く所は眞諦・耶舍の兩譯に照らし、主として眞諦の譯より之を補ひたり。眞諦譯の現に存するものは、唯この補綴の部分に於て之を見るのみ。全體として今傳らざるは甚だ惜むべし。また印度の三藏闍那崛多（Janagupta）あり、寶貴等が、金光明合部の纂輯事業に關與し、梵本對照に就き頗る功あり、且つ銀主、囑累の二品を譯出して之に添加し、二十四品を成す。百年を隔てて、唐の則天長安三年（西暦七〇三）義淨親く將來したる新梵本に依りて、十卷の金光明最勝王經を譯す。是れ實に今回の國譯に用ひし所なり。

支那譯の外、最重要なるは西藏譯とす。西藏大藏經部甘殊の第七、祕密部（Rgyud-sde）の第十二那 Na 字函中、二部の金光明經 Hphags-pa· gser-hod-dam-pa· mdo-sdehi-dvang-pohi-rgyal-po·jes. byava· theg-pa. chen-pohi. mdo を收む。一は尊者チョールブ（Bande Chos-grub）の飜ずる所にして、義淨の支那譯を重譯したるもの、大本二百〇八紙あり。他の勝友（Jinamitra）、戒帝覺（Silaindra-bodhi）の兩印度僧、西藏尊者エーセーデー（Bande Ye-śes-sde）と共に譯出する所百七十七紙に亙る。現在の梵本と全く別本に依れることは、其の品數著く異れるに依りて之を知るべし。滿洲及び蒙古語の金光明經は、この西藏語の譯經を底本となせり。

現存梵語佛典中、本經原文の引用を見るは、大乘集菩薩學論 Śikṣā-samuccaya の第八章とす。懺悔を論ずるに當り、本經第四品の頌文二十七頌を引き、又第十二章は慈悲を說き、同品の偈二十三頌を證とせり。本書は西暦八世紀頃、印度那爛陀(ナーランダ)の大學匠を以て鳴りし、寂天 Śantideva の著す所、現在梵本と照合して、研究上頗る重要の資料たり。

輓近、于闐(コータン)及び、高昌の故地より發掘せられたる古經中には、往往にして晉唐時代に屬すべき本經古寫經の斷片を發見す。亦た唐時の版本梵文斷片を出だすことあり。此等の斷簡零墨、僅かに鳳翼の片羽に過ぎずと雖も、本經研究の上に於ては、實に悉く至貴至重の資料たらざるはなし。

印度佛典出版會は、十數年前カルカツタの藏本に依りて、本經梵本約三分の二を公刊したり。第十五鬼神品に終る。此刊本は惜むべし、對校極めて粗雜にして、脫文錯置實に少からず、且つ異本の對照及び批評的の校訂全く之を缺くを以て、研究資料として、安んじて之に依るを得ず。學人をして甚しく不便多きを感ぜしむ。

現在の梵本は、大體に於て曇無讖の古譯と合す。但し經文の起首、讃文・散文交錯紛雜して、整齊を缺くものあり、末尾亦た脫落あるが如し。中間の各品に於ても往往にして、原體を失へるものあるを思はしむ。蓋し寫傳の久しき、散脫錯亂免るる能はざるに依らんか。その各品の漢譯諸本との比較は、次節の梵漢品目比較表に徵して、其大概を見よ。

三、本經の飜譯　本經の支那に於ける最初の飜譯は、北涼の元始元年より同十年に至る間（西暦四一二―四二

梵本		曇識四巻本		合部八巻本		義淨十巻本	
	parivarta.		品		品		品
1	Nidāna.	1	序	1	序	1	序
2	Tathāgatāyuṣpramāṇanirdeśa.	2	壽量	2	壽量	2	如來壽量
	—		—	3	三身分別	3	分別三身
3	Svapna.—4 Deṣana.	3	懺悔	4	懺悔	4	夢見金鼓懺悔
	—		—	5	業障滅	5	滅業障
	—		—	6	陀羅尼最淨地	6	淨地陀羅尼
5	Kamalākra.	4	讚歎	7	讚歎	7	蓮華喩讚
	—		—		—	8	金勝陀羅尼
6	Sūnyatā.	5	空	8	空	9	重顯空性
	—		—	9	依空滿願	10	依空滿願
7	Catur-mahārāja.	6	四天王	10	四天王	11	四天王觀察人天
"	"	"	"		"	12	四天王護國
	—		—	〔11	銀主〕	13	無染著陀羅尼
	—		—		—	14	如意寶珠
8	Śarasvatī-devī.	7	大辯天		—	15	大辯才天女
9	Sri-mahādevī.	8	功德天	12	大辯天	16	大吉祥天女
10	Sarvabuddha-bodhisattva-saṃdhāraṇī.	"		13	功德天	17	大吉祥天女增長財物
11	Dhḍā-pṛthivī-devatā.	9	堅牢地神	14	堅牢地神	18	堅牢地神
12	Sañjaya.	10	散脂鬼神	15	散脂鬼神	19	僧愼爾耶藥叉大將
13	Devendra-samaya.	11	正論	16	正論	20	王法正論
14	Susaṃbuava.	12	善集	17	善集	21	善生王
15	Yakṣa.	13	鬼神	18	鬼神	22	諸天藥叉護持
16	Vyākaraṇa.	14	授記	19	授記	23	授記
17	Vyādhipraśamana	15	除病	20	除病	24	除病
18	Mātsya-vaineya.	16	流水長者子	21	流水長者子	25	長者子流水
19	Vyāghrī.	17	捨身	22	捨身	26	捨身
20	Sarva-tathāgatastava.	18	讚佛	23	讚佛	27	十方菩薩讚歎
"		"		"		28	妙幢菩薩讚歎
21	品目なし。	"		"		29	菩提樹神讚歎
	—		—		—	30	大辯才天女讚歎
	—	〔19	囑累〕	〔24	付囑〕	31	付囑
21		18〔19〕		24		31	

西域に於て近時發見せられし諸種の古典逸書の中、本經の回鶻語の譯本、高昌の遺趾より出で、伯林のミューラー(F. W. K. Müller) 博士、之を研究公刊したり。此譯本は、西藏譯と同じく義淨の漢譯を重譯したるもの也。回鶻語の諸經、特に本經が、一時高昌を中心として盛に行はれしことは、支那佛教史傳の記載する所なりと雖も、其之あるを現證したるは、實にミューラー博士の功を推さざるを得ず。回鶻語の外、于闐を中心とせる西域古語の本經譯本ありしことは、予、ストラスブルグ大學教授ロイマン博士と共に、ペトログラード大學所藏の于闐發掘古斷斷片を證定したる際之を確めたり。斷片は、唯だ除病品と流水長者品の一部なりと雖も、之に依りて本經の西域の流傳は、推して全豹を窺ふに足れり。本譯又頗る義淨の新譯に近きを見る。

下に支那諸譯と現在梵本との品目對照を掲ぐ。

も夫の寶塔涌出は、彼の寶塔品と此の捨身品と雙鳳聯飛の同工をなし。彼に龍女成男の一齣あれば（提婆品）、此に天女轉丈夫の出場あり（依空滿願品）。彼の陀羅尼の一品はこの第十一品已下八品の廣說と對す。法華と本經と酷似斯の如し。その廣宣流布を勸むるの慇懃を極むる二者亦相類す。矧んや其の豐麗爛絢の詩句、雄大瑰麗の記述、辭を極め、想を盡くして、佛壽の難思議を歌ひ、涅槃常住の妙理を詠歎するは、自ら本經の特色、明快比すべきなく、深廣例すべきなきをや。次で廣說する所の涅槃の眞詮、三身の妙諦の如きも、精細詳密、實に諸經中の宏範として推すべく、懺悔の法を說くの懇切周到、菩薩十地の修行を教ふるの徹底せる、他に之が類例を求むること甚だ易からず。

本經は、既に此の如く大乘諸聖典の模範として、大乘教理闡顯の上極めて重要なる教旨に富む。故に、古來疏を製し釋を造りて、玄義を開暢し、幽旨を發揮せるもの少からず。梁の眞諦三藏は、其の譯經の後、大淸三年、十五卷の疏を製したり。惜むらくは今傳はらず。僅に諸家の釋中に於て、其引文を見るのみ。隋の吉藏法師の疏一卷、現に行はる。天台大師の玄義兩卷、及び文句六卷は、相傳へて學者の研究を怠らざる所、宋に至り四明の知禮は、玄義に拾遺記五卷を製し、文句に記六卷を作り、永嘉の從義は、前者に順正記三卷、後者に文句新記七卷を述作したり。この天台の本疏及び知禮の註疏を合璧とせる明の明得の分科及び會本は最も研究に便也。宋の四明沙門宗曉の照解二卷は簡にして要を得、最も力を音訓の是正に用ひたり。是等皆舊譯經を釋せり。義淨新譯の註解に至りては、唐の慧沼の金光明最勝王經疏十卷最も指南となすに足る。日本に於ける撰述は

曇無讖譯の第十九囑累品は、高麗本に之あり、縮刷藏經之に從ふも、明本には全く之を缺けり。古序に依るに、曇譯は唯十八品あるを明記せるを以て、之なきを正しとすべし。今現本に就き精査するに、後人合部中の同品を持ち來りて添加したるの跡歴歴たり、故に明本を正しとす。表中の第十九品括弧は之を示せり。

合部の中、眞諦譯に缺くる所は第十一銀主と第二十四囑累にして、此二品は闍耶崛多の譯し加ふる所、故に眞諦譯は二十二品あるのみ、表中の括孤せる二品は之を示す。

梵本の內容概說に就きてはビユルヌーフ「印度佛敎史緒論」ラージエントラミトラ「尼波羅佛敎文學」其他を見よ。

西藏譯底本の梵經は、全く漢譯と異り、品數二十卷を具へ、一瞥著く義淨譯と大同なるを認む。但し宗敎大學藏本、此部分將來の際、濕潤浸蝕を受くる甚しく、後半部は紙紙密著、字字磨滅して殆ど讀むべからず。善本を借り得て、之が對照を公にする閑暇なかりしは、切に遺憾とする所也。

四、本經が敎理史上の位置　本經は開卷直ちに、佛陀法身の常住不滅を獅子吼し、如來の滅度は唯だ是れ愚劣の衆生の誤り見る所、如來の壽量は無邊際を盡し、無量劫を極むるも、之を數へ知るを得ざるを極說し、佛陀永遠に靈鷲山に在りて、大法を宣傳すを示す。深義、實に法華と符を合するが若し。經に曰く、

我常住靈山。宣說此經寶。成就衆生故。示現般涅槃。凡夫起邪見。不信我所說。爲成就彼故。示現般涅槃。

又は曰く、

佛不般涅槃。正法亦不滅。爲利衆生故。示現有滅盡。世尊不思議。妙體無異相。爲利衆生故。現種種莊嚴。

と。之を夫の法華壽量品の自我偈二十餘頌と照らし來れ。誰か其の間に軒輊を認むるを得んや。造構の上に於て

の元首に對する教訓、及び國家が被るべき特別の冥益が、大に佛教諸國に歡迎せらるべき性質を有するに依り、且つ散脂大將・辯才天・吉祥天女等の禳災致福の利益は、一般佛徒に甚大の慰藉と信頼とを與へたるが爲なり、斯の如くして本經は、國家的にも、宗教的にも、個人的にも、中世佛教徒の切實なる實際の要求に應じ得たる最上最大のものなりき。此の經が、實際信仰界の覇權を握れるもの、決して偶爾ならざるなり。

唐代の記錄に依れば、佛教を初めて漢土に傳へたる、摩騰三藏の傳中、印度に於て本經が護國安民の要法として、既に盛に行はれしを見るべし。摩騰が印度にあるや、一小國本經を講宣したるが爲めに、その護國安民の功力に依りて、敵國の侵迫、自ら止みたるを傳ふ。支那に流傳するや、天台は懺法を製して、此の經讀誦を勸說し、且つ經中の流水長者品に依りて、放生の淸規を始め、後代に至るまで盛に行はれたり。宋代に至り、補助儀・最勝懺儀の如き、金光明讀誦に關する方則書編述せられ、本經が廣く僧俗の間に行はれしを證す。宗曉の金光明照解に曰く、「斯の經、部は方等に屬し、醍醐の比にあらずと雖も、而も受持するものの衆きは乃ち法華と侔し」と。以て當時流傳の旺昌を見るべし。又た曰く、「此經北涼より始めて、今に至る千有餘載、披誦の盛なる、感驗惟れ多し」と。元の時代に於ても、勅旨を以て金光明を書寫せしめしこと、誌傳に見ゆ。明代に於ても此經の誦持益々盛にして、以て淸朝に及べり。

西域諸國に於ては、四天王、特に毘沙門天王の信仰と共に、本經の熾に行はれしは近時發掘の資料に徵して、之を窺ふに難からず。于闐（コータン）・高昌諸地に於て、前に述べたるが如く、現に西域諸國語の本經斷片を發見する多く、

今略す。

本經の諸大乘經中、樞要の位置を占むる上の如く、後代註經述作の諸家、此の經を依用尊重する、盛ならざるにあらずと雖、而も教理史に於ては、法華・般若・華嚴・涅槃に比して、甚しく振はざるの觀あり。又た勝鬘・維摩・楞伽諸經の如き特殊の地歩を占むるを見ず。蓋し一奇といふべきなり。謂ふに、斯の如きは本經が下に述ぶるが如く、教會史上の勢力、甚だ隆昌を極め、鎭護國家・滅罪禳災の實際信仰としての崇奉、熾盛を盡くしたるの極、其の高遠深妙の理論方面は、自ら高閣に束ねられ、祕龕に藏せられて、儀式供養、禮懺呪法の前に、偶其の闡明開發の機を逸したるにあらざるなきか。

諸家本經の大乘教理上の位置を判ずる中、天台は之を第三の方等部に屬し、別圓二教を兼ねる通教の攝となせり。蓋し本經の玄旨法華と同じと雖も、彼が唯有一乘を力說するに對し、本經が猶三乘同懺を許し、人天四果の果報を示すを以てなり。而も是台門一家の私釋、嚴格の聖典批評と教理剖判より見ば、更に大に論ずべき餘地なきにあらざるべし。三論の吉藏は之を大乘菩薩藏頓教の攝屬とす。若し夫れ眞諦が本經說時を、法華已後涅槃以前と釋せるを斥けて、玄義の疏主が、大に論辯を費したるが如きは、今甚しく切要ならざるを認む。

五、本經が教會史上の位置　本經の教理史に於ける勢威は、法華に遜り華嚴に下るの觀あるも、實際信仰に至りては、經の流布する所、至深至大の感化を與へ、其の崇奉の隆盛は、自ら諸經に冠たるの狀あり。是れ經中に說く所の懺悔滅罪の淸軌が、大乘教徒の實修要求上切要なるものありしと共に、其の王法正論品に說ける、一國

鑿等と響を同うす。應用方面に入り、諸天善神の護持九品は、祕密諸經の初門を代表すべし、此間、第十三の無染著陀羅尼品を、四天王と他の諸天神女との間に挿めるものは、空性・滿願の二品を、修行方面の强力なる殿軍となしたると同一筆法にして、神呪が方處を超え、時間を離れ、一切の事理緣行を越踰せる、諸佛の祕意般若なるを說き、之に名くるに無染著の名を以てせり。謂ふに此一品の中堅ありて、四王・辯才・地神・藥叉等諸品の呪法、悉く正見・正思の大用たるを明にするを得べし。若しこの畫龍點睛あらずんば、或は恐る、諸品の祕呪巫蠱左道の毒蛇たるの弊に陷らざるなきを。經意甚だ深重、讀者輕忽に看過し去る勿れ。

王法正論の一品は、本經の國家に對する深義の應用を說けるもの、緣由護持相待ちて、治國の要、唯だ大敎興隆にあるを論ずる實に至れり。第二十三品已下の三品は、妙幢及ぶ其の二子の授記を主とする雖も、兼て十千の天子得道果の因緣を明す。是れ實に國體として、社會として、本經の受持を說くもの、其の因緣として、疾病の救療と生物の救濟との二編を出だし、一面印度古醫學の綱要を說きて、疾疫窮苦の民衆に濟生の恩を與へ、以て救療慈善の本旨を明にすると共に、他面には、生物愛護の仁慈を開演して、大慈方便十千の窮魚を、涸渴の池に救ふの實例を擧ぐ。是れ實に救濟事業の模範にして、現今急を訴ふる社會問題の解決、實に此の經の奉持に依りて、其の光明を認むべきを示せり。最後に、個人の本經奉持の實例として、佛陀親ら其の本生を開示し、玆に餓虎の爲に身を捨つる難行苦行を說述し來り、文辭亦た雄大・富贍を極め、詩偈光彩燦爛として、一場の大悲劇は、覺えず讀者をして身毛竪立・嗚咽啼泣せしむ。而して此の最後の捨身は前の救療・濟生と相應じ、淺深次第

其の梵語の刊本すら、唐時既に同地に存したるを見れば、其の流布の廣くして、且つ昌なるを推斷すべきなり。且つ西藏(チベット)及び回鶻(ウイグル)の諸族、大抵支那の譯本を重譯したる、本經が國家民族鎭護の至寶として、如何に諸民族の間に重きをなしたるを證するに足れり。

吾國は佛教諸國中、恐く最も此の經の崇奉を極めたる所ならんか。佛教渡來の當時、聖德太子の四天王寺は本經に依りて創建せられ、爾來鎭護國家三部大經の隨一として、特に尊重せられたり。天武朝に於て本經の講說漸く盛に、護法善神の信仰、及び吉祥天女の崇拜は、益本教の讀誦を以て國家安泰の至要となすに至り、國家平安の祈禱として、諸國に於て之が讀誦を奬勵し、爾來恒例となれり。聖武帝卽位するや、舊譯を改めて、義淨新譯の十卷本を用ひ、之を勅寫して諸國に頒布すると共に、諸國に國分寺を造り、法華滅罪寺と對して、特に金光明護國寺を立て、必ず一部の最勝王經を備へしめ、宮中及び諸寺に於て、盛に本經の講說を行へり。稱德の朝、衆僧を宮中に入れ、大極殿に於て一七日間、晝は最勝王經を講じて國家の平安を祈り、夜は吉祥懺悔を修して五穀の豐登を禱れり。是れ卽ち宮中御齋會の始にして、延いて桓武帝の朝に至りて恒例となれり。下りて淳和帝の天長年年間藥師寺の最勝會始まり、後代三會の一として、講說莊嚴を極む。其の後圓宗寺に於ても亦最勝會行はる。一條院の御宇、東大・興福・延曆・園城四大寺の學僧を簡撰して、講師を命じ、淸涼殿に於て、最勝王經を講ず。之を最勝講と稱し、南北朝時代に於ても猶其の嚴儀を見たり。後野山に於ても、弘法大師親筆の本經を以て講經となし、天下安全のために、十回十講の論場を開きたり。

古代に於ける本經の崇奉は、實に此の如く至盛至大を極め、凡そ佛教法會の重大なるものは、實に本經講說を以て、第一となせり。故に現時殘存の古寫經中、金光明は特に其の優秀なるものを留め、名山大刹・縉紳富豪にして、現に千年の古筆を祕藏するもの少からず。

民間に於ても、鎭國護法の諸天善神、就中、毘沙門天及び辯才天女の信仰は、本經の讀誦を普及せしめ、特に後の女神の崇敬は、德川幕政の時代より今日に至るまで、猶ほ一方に勢力を占め、本經の尊奉、また隨つて頗る深きものあるを見る。

六、本經の分科 義淨新譯の經典は三十一品より就る。各品の分類に就きては、古來の釋家通途大小乘諸經の解剖に用ふる序・正・流通の三分法を適用す。眞諦の意に依るに、同譯二十二品中、初の一品は序分、中の十九品は正宗分とし、後の二品を流通分とす。天台等の諸家之に反す。且つ新譯本に就いて云はゞ、第一品の序分たるや古今同じ。第二壽量品より、第十の依空滿願品に至るを正宗分となし、第十一の四天王觀察人天品已下、悉く之を流通分となす。舊經之に例して知るべし、蓋し本經の正說たる、菩提涅槃の因果・斷惡修善・得道證果の精要は、第十品に至りて旣に盡く。第十一品已下は、唯本經の持續流通・守護利益を勸說するを主となすに過ぎざればなり。

今是等諸家の判釋を基礎と爲し、試に私見に依りて、左に本經の分科表を作る、必しも古師に依らず、唯だ大體に於て通解し易きを主とす。

に進み、一巒は一巒より靑く、一谿は一谿より幽なる、重層の法をなす所、文辭意匠の妙、崇高雄大の信念と相待ちて、實に天下聖典の奇觀を極む。

六、本經の內容概說　一　序品　佛陀、王舍城の靈鷲山にありて、諸大菩薩・羅漢衆・天龍八部・神仙・諸大國王・淨信善男女の禮敬を受け、哺時に禪定より起ちて、金光明の妙法・最勝の諸經王を宣說し、又た吉祥懺悔の要法を演べて諸の罪業を淨除せんとす。四方の四佛來りて證明加護す。佛陀また本經の威力を說き、護世四天王、大辯才天女等、天神地祇の衞護あるべきを敎ふ。

二　如來壽量品、妙幢菩薩、佛陀が不殺施食の福德に依り、其の他の獻身慈惠の果報の爲めに、壽命長遠なるべきに、短促、唯だ八十年なるやを疑ふ、佛陀其の念を知り、神力を以て莊嚴の妙土を現じ、四方の四佛、光明を放ちて來り臨み、妙幢に對して佛壽の齊限なきを敎へ、頌を說きて海水滴數を知り、高山塵量を數ふべくも、佛壽到底測り知るべからざるを說き、更に妙幢が何故に釋尊が短促の壽命を示現するやとの問に對して、信解微薄、善根下劣の衆生、惡見邪思の外道のための故に短促の壽を示して、難遭別離の想を生ぜしめ、之を化導することを述ぶ。時に會中に法師授記婆羅門あり。世尊滅度の近きを哀泣して佛舍利を得んことを請ふ、一切衆生喜見童子之を聞き、天地轉覆するも佛の遺身得べからざるを說きて巧妙の頌を歌ふ。佛陀終に妙幢其他の爲に三種の十法及び十如來希有行を說述して、重重に涅槃の深義を說く。文義廣大、精細に研尋すべし。

三　三身品　佛陀虛空藏菩薩の請に應じ、法應化の三身を詳說す。蓋し前品菩提・涅槃の二果を說き如來常住

法身寂靜の玄旨を說くと雖も、菩提智果の大用に至りては未だ之を說くこと明ならず。即ち本章ある所以なり。此品あり如來の大悲方便利樂有情の本懷方めて顯はる。

四、夢見懺悔品　妙幢菩薩夢中に一人大金鼓を打ちて妙響十方に至りて懺悔の法を說くを見、佛前に至りて之を說く。自己罪業の告白發露の至痛至切にして、悔過懺罪最も殷重を極む。

五、滅業障品　前品の悔過と關連し、正しく懺悔の要法を說く。中に事理の兩懺あり、事懺は晝夜六時十方諸佛に至心禮敬して誠實に造罪を懺悔し、理懺は一切諸法の皆空なるを觀じ、生滅因緣の不可說なるを了知する時、所有業障悉く除滅するをいふ。次で大乘菩薩の通法たる隨喜・勸請・廻向を明せり、禮佛・懺悔と合せ之を大乘の五悔といふ。

六、淨地陀羅尼品　前來の二品は地前凡夫二乘の淺行を明かし、今品は菩薩十地の深行を示す。大體十波羅蜜に依りて十地の行を說き、次で十障の斷除を細釋す。

七、蓮華喩品　金龍王常に蓮華喩を以て諸佛を讚ずるを明かし、佛身の微妙嚴淨を讚歎す。是一面には佛果讚美と共に他面には此咏歎の勝善よく懺悔の大法を聞くを得るを示す。即ち昔日の金龍王は會上の妙幢にして、佛身の美より入れる信念、詩に現はれし宗教味は遂に彼岸に達すべき勝善なるを示す。本經中味甚だ深し。

八、金勝陀羅尼品　滅罪除障淨地修行の助業として持咒禮敬の法を說く。蓋し表徵と祕密とは宗教信念に於て必らず附隨すべきものなり。

本經の大觀略ぼ斯の如し。其の哲學方面は、實に法華・涅槃、究竟圓頓の大宗を說く。道德方面は、般若の妙慧を根柢とし、方等諸經修行の精要を敎ふ。最後に其の空性と、依空滿願の二品を說く所以は、實に正行正修の基礎にして、平等の行、斷常の二邊を離れしむ。大乘の修行、此の空法ありて始めて完し。蓋し維摩・首楞嚴・勝

十四、如意寶珠品　四方電王離怖の呪、觀音・執金剛・梵天・帝釋等の諸咒を擧げ、其威力を說く。

十五、大辯才天女品　天女が本經讀誦講說の行者に對し、聰慧を增長し、聰明大智・博綜の奇才・自在辯才を與ふるを說き。また咒藥洗浴の法を明し、以て病疫鬪諍蠱毒等の障難を除滅す。品末に讚文あり、天女の威德功力を讚ず。

十六、大吉祥天女品　前品辯才天が主として智慧辯才を賦與するに對し、本品の女神は飲食・衣服・臥具・醫藥其他の資財を本大奉持の行者に授て乏少する所なく、五穀百果をして滋榮せしめ、所有苗稼悉く長育するを得しむ。謂ふに佛道の修行、本經の傳持流通に就ては、福智の二者具備せざれば功を收むること難し。前品主として智慧才藝の冥助を述べ、今品と次品とは專ら福德富榮の天祐を示す。

十七、大吉祥天女增上財物品　吉祥天女、常に毘沙門居城の庭苑中に、七寶所成の宮殿を構へて、之に住む。若し人諸佛の名號及び本經の名號を稱揚して、天女を供養請召せば、財穀を增長せしめ、希求の諸願皆成就せん。

十八、堅牢地神品　本經奉持者に對する地神の守護利益を說く。神呪數篇あり。

十九、僧愼爾耶大將品　僧愼爾耶は夜叉鬼神の統領なり。二十八部の夜叉諸神と共に、本經奉持者を擁護救攝し、一切の災橫厄難なからしめ、福德智慧を授く、神呪及び壇法あり。

二十、正法正論品　世尊堅牢地神の請に應じ、王法正論治國の要を演說し、國憲國法の嚴正、造惡遮止の大本よりして、自利利他、偏黨なく、正法を以て民衆を統御し、純善億兆に臨み、正法法寶を尊重すべき王道を說

九、重顯空性品　大乘諸經の眞髓一空字にあり、前來懺悔淨地等の諸品中に於て、其の根柢空にあるを說かざるにあらず。而も行に專なるの極、有に滯り事に執して我法二執除き難きを恐れて、重ねて此品を說き、四大五蘊體性倶に空にして、六根六境妄に繫縛を生ずるを了達せしむ。

十、依空滿願品　前品の空を明かすや、唯所觀の境として、空果を說けり、今二空修行の空因を示し如意寶光耀天女を拉し來りて、菩提の正行は平等の行なり、是れ生滅相を離れ、有無二邊に著せず、一異の二數に墮せず、法界卽ち五蘊と觀じ、終始寂靜、本來自ら空なる上に、萬善を修め、萬德を行ずるを云ふ。末段天女と大梵天王との問答の間、天女の轉成男子の一場あり。諸法の平等・眞如の不異を論じ得て甚だ痛快を極む。理路窮まる所一點の紅を添へて、間曲情趣饒き、また本經の文藝に於ける餘技の生動を見るべし。

十一、四天王觀察人天品　四天王人天を觀察し、正法の修行卽ち本經奉持の國王及び人民僧俗等あるときは、二十八部の神將を率ゐて之を護衞し、恭敬尊重を受けしめ、安隱豐樂にして、諸の災患を離れしむべきを說く。

十二、四天王護國品　特に四大天王の正法護持を力說し、本經傳持の國王を守護して、其國民福民安を得しむるを述ぶ。本經の流通奉持を勸說する甚だ至れり。四大天王の咒出づ。

十三、無染著陀羅尼品　陀羅尼は方處非方處・法非法・三世・事緣・生滅を超絕せるを本義とし、菩薩利益のために假にその功用正道勢力を安立するを說く。之を大乘の信解となし、尊重となす。此品の重要は、前項旣に一言を費せり、また贅せず。

た僧をして大乘經典を讀誦し佛名を聞かしめて解脫の結緣をなし、財法の二施を行ひ、十千の魚此勝緣に依り、死後生天の因緣を說き、當時の流水は卽ち釋尊にして、其父は妙幢、其二字は銀幢、銀光の兩子、十千の天子は夫の池魚の後身なりと結ぶ。

二十六、捨身品　佛陀往昔大車王の愛子摩訶薩埵王子として生れ、大慈大悲、餓虎の爲に一身を犧牲として菩薩の難行を修せるを說く。此說話は六度集經・修行本起經・菩薩本行經・賢愚經等に出で、又寶積諸經に散見するも、本經最も詳密を極め、且つ文辭光彩に富む。後代印度論師の諸著亦之を援引し、法顯玄奘の遊竺旅行記共靈跡を記し、中世佛敎徒の最も感激せる說話の一なり。現に國寶法隆寺の玉蟲厨子また此畫圖あり。

二十七、十方菩薩讚歎品　十方來集の諸菩薩妙偈を以て佛陀を讚ず。

二十八、妙幢菩薩讚歎品　妙幢續きて麗辭を以て如來の德相を讚ず。

二十九、菩提樹神讚歎品　來會の菩提樹神また伽陀を以て如來を讚美す。

三十、大辯才天女讚歎品　最後に大辯才天女の讚歎あり、修辭詩歌の女神として必らず此一事なかるべからず。

三十一、付囑品　世尊旣に大法を說き了りて、無量の菩薩一切の人天に對して、懇に此經寶を付囑し、其廣宣流布、久住長留を命じ、凡聖悉く身命を惜まず佛勅に從ふべきを誓ひ、妙偈を說きて讚歎し、天帝釋等また伽陀を結びて擁護を約し、魔王魔子すら降伏信敬を表して、經寶奉持を妨げざるべきを盟ひ、一切來會の大衆の歡喜信受を以て、本經を終ふ。

き。其非法惡政を行ひ、正法を遵奉する能はざる國君の被るべき災横厄難、國家の喪亂滅亡を痛言する剴切深酷を極む。心地觀經報恩品及び薩遮尼乾子經等と對比して王道の至訓、眞に範を千載に垂る。この王道を行ひ正法に依り、一切の民衆をして十善を行ぜしむる、君主の享くべき國土の昌平豐樂、諸天善神の尊重守護に至りては、惡政亡國の痛誡と反映し、本品特に力を極めて之を述べたり。

二十一、善生王品　前の王法正論の實例として、世尊往昔善生轉輪聖王として、惠施・仁愛・正法を以て民を治め、特に金光明最勝の寶典を聽受護持して、其說法者を尊敬するの因緣を擧ぐ。

二十二、諸天藥叉護持品　普く天界の諸神夜叉鬼神の名を列擧し、此等が本經奉持者を擁護するを說き、特に國土の安寧・國賊怨敵の退散を明かす。

二十三、授記品　佛陀、妙幢菩薩及び其兩子銀幢、銀光に當來成佛の記別を授くると共に、來會せる最勝光明已下十千の天子の爲に未來大菩提の妙果を獲得すべき證明を與ふ。

二十四、除病品　今品後品と共に前品に當來得佛の授記を得たる、妙幢父子及び十千の天子、往昔の淨因を述ぶ。此品先づ流水長者子、其父持水よりして醫術の奥妙を學び、疾疫に惱める無量の衆生を救療して、大力醫王の名稱遠近に遍きを說く。持水長者其の愛子の爲に古仙療病の祕法を授くる所、印度古醫學の大要を擧げ、古醫學史資料として頗る珍となすに足る。

二十五、長者子流水品　流水長者子救療濟生の後、更に池水の涸渇の爲に死に瀕せる十千の魚の命を救ひ、ま

四天王の呪を說いた詳密のものは此經の外に何處にある。辯才天の呪法供養を敎へたる此經已外には殆ど求むべきものはあるまい。堅牢地神や散脂大將の呪法は勿論、大吉祥天の供養法は此經が實に本據であるといふてよい。加之、印度の修法家が神秘とする三十二味の香藥法も此經に明示する外、他に求める事は出來ない。

此經の秘經としての價値は、これ丈で充分であらう。飛鳥より平安の王朝に於ては此經は實に鎭護國家の隨一の聖典として金光明護國寺の建立、諸國に甍を列べ、宮中初め諸寺に於ける御齋會、最勝會、吉祥懺など盛に此經を國家平安、萬民豐樂の寶典として崇奉至らざるなきの盛大を極めた。而して是實に顯敎の理論敎義の硏究問題若くは觀心修行の實行問題から此經に對するのではなく、全く神秘の憧憬と瑜伽の冥助を祈願祝禱する密敎的の態度に外ならぬのである。卽ち此經は學者が之を顯敎に屬したにも關らず、其國家と民衆とに感勢を與へた點は、その四大天王、辨才天、吉祥天等の密敎的崇拜にあつたと云ふてよい。高野山に於て、ある時代から弘法大師眞筆の金光明經を以て講經として十回十講の論場を開いたことのあつたことなど史的に考察すると實に津々として止むべからざる趣味がある。

二

此經は古來學者が之を方等部に攝屬してあるが、實際の硏究の結果は殆ど法華と同一の內容と表出とを有し、聖典史的に考察すると恐くは法華を粉本として其精要を發揮したものではあるまいかとまでも斷定を下される、

純密經としての金光明經

（大正一〇、八、祕鍵第二卷第一號）

一

法華や楞伽は言ふに及ばず、叢書的大聖典の寶積でも大集でも、苟くも大乘聖典である已上は多少とも秘密佛教の色彩を帶びぬものは甚だ少い。どの經文でも陀羅尼のない經文は殆どなく、假令密呪はなくとも百千の總持を得るとか、陀羅尼門に達するとか說いてあり。佛陀の外に守護神の上揚せぬ聖典は先づないといふてよからう、華嚴には密呪は一首もない。然し菩薩が總持を得ることは各品到る處に說かれ、特に、守夜神 Rātridevatā や地神 Pṛthivī-devatā が重要なる說法者として多數に出て來る。

金光明經も大乘聖典の隨一として此例に漏れず、其經中には秘密佛教の色彩が極めて鮮かだ。否、此經は金剛頂經や大日經の樣な大部な組織的の秘密大經と架を同うせず、また隨求や孔雀王の如き所謂雜密諸小部と類を異にして、學者は單に之を顯教の方等部に收めて居るが、少しく此經の內容に觸れて見ると其密教的部分は頗る濃厚にして、且つ深遠なるもの存し、之を雜密諸小部に比するに、之を純然たる秘密經として見做して毫も遜色なきのみならず、寧ろ遙に小部の密經に勝るものがある。

大乘諸經の中、胎藏の四佛を明かに證誠の主尊として擧げてある經は外に何であるか。何れの修法にも重要な

國の二王十羅刹鬼子母の呪で都合五首の呪があつて、此等は何れも短ひものであるが本經では、秘經的部分に屬する八品で通計二十三首の陀羅尼が說かれ其中には相當に長いものもある。

更に此經の基礎的理論方面に於ても菩薩の深行を明す、淨地陀羅尼品に於て初地より十地に至る十首の密呪を說き、滅罪除障淨地修行の助行として金勝陀羅尼品を說き、胎藏四佛を主として十方佛諸菩薩の名號を禮敬し、一首の呪が說かれてある。而して亦道德實行の模範として、放生救生を敎ゆる流水長者品には十二緣起の陀羅尼を說いてあるから、全體に於て實に三十五首の大小の神呪が本經に存在する。此豐富の陀羅尼丈でも此經は純粹の秘經として、實に立派なものといふてよい。況んや東方阿閦、南方寶生、西方无量壽、北方天鼓音の胎藏四佛を證明として、釋迦が中央法身の毘盧遮那身の意氣で說いた大乘經典は他に餘り多くはない。本經を秘經と仰ぐべき價値は既に十分であらう。

三

金光明經は今梵本を存し曇無讖と合部本と義淨との三種の漢譯がある。梵本は著く古譯と合し、合部本は品目稍增し、義淨の新譯は最も發達した形を持つ。而して義淨の此全體の外形の發達は、また內容の秘經的方面に於ても他に比して、呪文に於ても讃歌に於ても最も進步し、且つ豐富である。是蓋し時代の要求が此經の密敎的の色彩をして、益濃厚にしたのであらう。今梵本と二譯との比較表を左に出す。敎理的部分に於て著く發展して居

二三の點を擧げると

一　壽量品の常在靈山の思想と本經壽量品の『我常住靈山、常說此經法、成就衆生故、示現般涅槃』『佛不般涅槃、正法亦不滅、爲利衆生故、示現有滅度』の思想との符合

二　法華の寶塔品の寶塔涌出と此經捨身品の寶塔涌出との脚色の一致

三　法華提婆品の誇りとする龍女成男と、本經依空滿願品の天女轉丈夫の同工、

であるが、第四に法華に陀羅尼品の一品があつて秘經的の燦爛たる色彩を見せて居るに對し、此經では義淨の新譯に依ると此一品が第十一品已下八品の廣說となつて說かれてある。法華では藥王、勇施の二菩薩、毘沙門持

品目	內容	呪數
第十二四天王護國品	多聞護身	1
	同請召	1
	如意摩尼	1
	現身	1
第十三無染着陀羅尼	無染着陀羅尼	1
第十四如意寶珠品	避雷電呪	4
	執金剛	1
	梵天	1
	帝釋	1
	四王	1
	諸龍王	1
第十五大辯才天女品	香藥呪	1
	洗浴呪	1
	護身	1
	本呪	1
第十六大吉祥天女品	請召	1
第十八堅宇地神品	請召	1
	現身	1
	護身	1
第十九僧愼爾耶藥叉大將品	本呪	1

度の古聖河サラスワテー Sarasvatī の神格化せられたもので、此聖河は婆羅門教徒の稱する聖浴處 Tīrtha 中に於ても最新聖なるものゝ一つとせられてある。佛教で外道と呼ぶ字の原の意味には聖浴をなす徒苦行の徒 Tīrthaka といふのを見ても、古代吠陀を信ずる婆羅門の徒がどの位聖浴を修行中の重要のものとしたのが判らう。

サラスワテー聖浴處の譚は大史詩摩訶婆羅多の中に頗る多く散見するが、有名なのはシャルヤ品の第三十七章以下に記する、仙人ナイミシヤの話の如き其一である。此譚に依ると、此聖河の洗浴は修行の最上のものとされて居る。此聖河が波羅門殺しの大虐罪さへも洗除する最神聖の力を有し、諸神の王インドラさへ之を敬禮し、アトリやワラデヴの如き大仙も此聖河で大力を得、カルチケヤ天大將軍も此聖河の洗浴で彼が如き大威神力を具足するに至つたことが、筆を極めて書いてある。

吾々は茲で密教の包容力の偉大を思ひ、同時に吾が金光明經の洗浴方法は著く、聖河洗浴尙今でも盛に行はれつゝある彼のテイルタの影響が一方ならず影響して居ることを見逃すことは出來ぬ。

五

辯財天女の讃嘆は義淨の新譯に於て著く新しき材料を取り入れてある。其中左の讃偈は獨り淨譯に存し最も特色を有するものである。

ることは一見して直ぐ判る。

義淨譯十卷本が其品數に於ても、最も發達して居ることは、右の表の通りであるが、秘經的部分の著して發達に就きては次の二三の例を示して置かう。

四

古譯には缺けて居るが、合部で其大要が說かれ、義淨の新譯に於て完全に譯傳せられたのは、大辯才女供養の洗浴に關する壇場作法で左の如く說いてある。

（編輯者曰く、此の所に揭ぐべき表は、前揭論文「金光明最勝王經解題」にあるものと全同につきこゝには略す）

若欲如法洗浴時　應作壇場方八肘　可於寂却安隱處。念所求事不離心　應塗牛黃作其壇　於上普散諸花彩　當以淨潔金銀器　盛美味幷乳蜜　於彼壇場四門處　四人守護法如常　令四童子好嚴身　各於一角持瓶水　於此常燒安息香　五音之樂聞不絕　幡蓋莊嚴懸繒綵　安在壇場之四邊　復於場内置明鏡　利刀兼箭各四枚　於壇中心埋大盆　應以漏板安其上　用前香末以和湯　亦復安在於壇內　既作如斯布置已　然後誦呪結其壇

と、是は實に純密教式の結壇法である。否純密の經典でも此位精細なのは少い。此莊嚴の壇内に入りて洗浴するのである。

何故に辯財天女品が特に洗浴の法を重ずるのであるか、これには少く理由がなくてはならぬ。一體辯財天は印

19 普見世間差別類　乃至欲界諸天宮　唯有天女獨稱尊　不見有情能勝者
20 若於戰陣恐怖處　或見墮在火坑中　河津險難賊盜時　悉能令彼除怖畏
21 或被王法所枷縛　或爲怨讎行殺害　若能專注心不移　決定解脫諸憂苦
22 於善惡人皆擁護　慈悲愍念常現前　是故我以至誠心　稽首歸依大天女

此讚頌は經文にも「世諦の法に依りて讚ず」とある通り世間流布の文書から材料を取りて讚嘆したことを明言して居るから、古代の婆羅門の典籍に依つたことに相違ないが、之は正しく大史詩摩訶婆羅多の姉妹編である。ハリヴンシヤの第二毘紐天品第三章（異本五十八章、ダツト氏英譯二五一頁）の毘紐天后の讚嘆文をそのまゝに應用したのである。義淨の譯は時に意義の明了を期する爲に意譯に流れて居るが、大體は次に譯して掲げたハリヴンシヤの文を比較すると明了に其根元が判明する。

大體ハリヴンシヤの此讚嘆文は全體が三十四頌ありて、義淨の譯に比すると餘程長い、辨財天品ではあまり佛教と緣の遠ひ寧ろ教義に反對する所は之を用ゐなかつた、例せば、十二頌の前半に『爾は酒と肉とを好む』といふ讚がある。これは婆羅門文學から見て重要のものだが、辯財天品に略してある。尙其他ワルミキ、ワイシヤンパヤナなどの名の出る所、吠陀文學に專門的の名辭、例せばアグニホトラなどの事は繁雜に亘るを恐れてか除いてある。

ハリヴンシヤの讚嘆文は其原型を摩訶婆羅多第四ギラタ品の五王子入城章第六に英雄ユドヒステラが旅行して

1 敬禮天女那羅延 於世界中得自在 我今讚嘆彼尊者 皆如往昔仙人說
2 吉祥成就心安隱 聰明慚愧有名聞 爲母能生於世間 勇猛常行大精進
3 於軍陣處戰恒勝 長養調伏心慈忍 現爲閻羅之長姉 常着青色野蠶衣
4 好醜容儀皆具有 眼目能令見者怖 無量勝行超世間 歸信之人咸攝受
5 或在山巖深嶮處 或居坎窟及河邊 或在大樹諸叢林 天女多依此中住
6 假使山林野人輩 亦常供養於天女 以孔雀羽作幡旗 於一切時常護世
7 師子虎狼恒圍繞 牛羊雞等亦相依 振大鈴鐸出音聲 頻陀山衆皆聞響
8 或執三戟頭圓髻 在右恒持日月旗 黑月九日十一日 於此時中當供養
9 或現婆蘇大天女 見有鬪戰心常愍 觀察一切有情中 天女最勝無過者
10 權現牧牛歡喜女 與夫應時常得勝 能久安住於世間 亦爲和忍及暴惡
11 大婆羅門四明法 幻化呪等忠皆通 於天仙中得自在 能爲種子及大地
12 諸天女等集會時 如大海潮必來應 於諸龍神樂叉衆 咸爲上首能調伏
13 於諸女中最梵行 出言猶如世間主 於王住處如蓮華 若在河津喩橋梁
14 面貌猶如盛滿月 具足多聞作依處 辯才勝出若高峰 念者皆與爲洲渚
15 阿蘇羅等諸天衆 咸共稱讚具功德 乃至千眼帝釋主 以殷重心而觀察
16 衆生若有怖求事 悉能令彼速得成 亦令聰辯具聞持 於大地中爲第一
17 於此十方世界中 如大燈明常普照 乃至神鬼諸禽獸 咸皆遂彼所求心
18 於諸女中若山峰 同昔仙人久住世 如少女天常離欲 實語猶如大世主

爾は種々の形相を有す、怖畏すべき大なる眼を有し、爾の歸信者の保護者なり（五）
オー大女神よ、畏るべき諸山の頂峰に住し諸河にも洞窟にも深林にも住してサバラ、バルバラ、プリンダ等の諸蠻族に敬禮せられつゝ、孔雀の羽を以て造られたる幢旗を飜して遍く世界を通過し玉ふ、（六—七）
雞、山羊、小羊、獅子、虎の群に圍繞せられ、盛に鈴を鳴らして、常に類陀山の山中に住し玉ふ（八）
三叉の戟を執りパッチシャ其他の武器を手にす、大陽と月は爾の旗なり、爾は黑月の九日と白月の十一日なり（九）
爾は婆羅大天の妹ラージヤニーなり、渾ての生類の歸依處なり、一切生類の死と最勝の緫なり（一〇）
爾は牧牛者歡喜 Nauda の女と現はれ、諸神に勝利を與ふ（一一前半）
爾はラクシユミーの美しき形相なるも時に鬼族ダナワを降伏せんが爲に猛惡の相を現し玉ふ（一二後半）
爾は吠陀のサーキトル咒也、諸咒の母也、處女の童貞、婦人の幸福、犧牲の神壇、淨行者の布施、耕耘者の鋤犁、一切生類の大地、大海に航する商客の成効、大洋の賽岸、夜叉スラサ、諸龍女中の最勝女、婆羅門の知識に貫通し大なる美と創始とを有す、光輝ある天體の放光の元、諸星中の昴宿、宮廷と要塞とに於ける繁榮の主、諸河と滿月の大元なり（一三—一七）
オ、女神は爾は諸神の王千眼帝釋をも魅する美を有す（一八前半）
疑もなく爾は戰陣、燃ゆる火炎、河津の險難、盜賊、洞穴、異國、宮廷の大救濟者なり、敵に襲はれ、身を枉

ギラタの城市に入らんとするとき自在天妃ヅルガー天女に捧げた讃嘆文と、第六ギシュマ品の薄伽梵歌章第二十三第四節已下十六節に至る、アルジュナが戰勝の神助を乞ふためにヅルガー天女に祈禱した讃文の兩者につて居る。此兩讃とハリヴンシャの文とを比較することは婆羅門文學史上極めて重要のことだが今且く略すこととし、ハリヴンシャは自在天后の讃を毘紐天妃に應用し、金光明經は更に之を辯財天に應用したといふ、文學史的關係が極めて面白い。

辨財天と此等の婆羅門文學の關係の出來るのは寧ろ當然である、此等諸讃の中摩訶婆羅多第六のアルジュナの讃歌にも「爾ヅルガーは神秘の呪莎訶、薩陀として、時(カーラー)として、カシュタとして、辨財天として、聖頌サービトリとして歌はる丶」とあるのでも判らう。

左にハリヴンシャの讃文を譯出して、金光明經の密教的傾向が如何に大に且つ廣く、其綜合包容融化の大作用のあるのを證して、本編を終らう。

三界の女王なる天后那羅延尼(ナーラーヤニー)を敬禮し奉り古仙等の歌ひたる讃頌を誦せん（一）

オー女神よ爾は救なり智慧なり光榮なり慚愧なり學藝なり、渾ての世界の進展と希望となり、爾は黎明と夜と光となり、眠と及び死の夜なり（二）

オー女神よ爾は勝利者大勝利者（闍耶(シャヤー)と毘闍耶(ヰシャヤー)大陽の擬神なり胎藏曼荼に列位す）満足、營養、寛容、慈惠なり、爾は靑色の絹衣を着し燄摩(ヤーマ)の長姉なり（四）

原始的秘密聖典

（大正九、六、祕鍵第一卷第二號）

一

唐代譯傳の大日金剛頂諸經を一瞥して、その雄大莊嚴の組織と、深遠幽玄の教義とを味ひ、漸次、眼眸を轉じて、宋代誦出の諸秘經を見るものは、誰とて其復雜怪奇の發展に一驚を喫せざるものはあるまい。一度びは整然として綜合せられ統一せられた、曼陀羅海會の諸尊の分科的別尊の發展と共に、その教義に於ては、六大無碍の思想が、婬欲是道、恚痴亦然の極端に走せて、理智冥合の深義を、那囉那哩の婬樂に相卽する、一種の過激的左道の弊害をさへ釀成し來つた、歷史の變遷に嘆聲を發しつつ、夫の金剛三業（ヴシヤヤサマジヤ）秘密經や空智金剛（ヘイワシユラタントヲ）經等を繙く人は、溯りて此等複雜なる教義の源流に掉さし、進みては浩瀚なる瑜伽聖典の根本を討究する必要を感ぜずには居られまい。吾等の秘密佛教の研究には玆にこの歷史的の考察の極めて重要なるを認める。特に聖典史的の討究の切實に重要なるを認める。

完成した唐代密教も。發達の極、頽廢怪奇に陷ゐつた宋代密教も、その源泉は實に簡單素朴のものであつた。日本密教の根底をなした深遠の大日經も、後代通俗的になつて、現に西藏蒙古の喇嘛教の中心信仰である莊嚴寶（カーランダビ）王（ユーハ）經も、其蘗芽は既に四阿含の中に發見さるゝ。恰も法華や般若の妙有眞空の深理が、立派に阿含諸經に含まる

械に縛せらるゝ時の救護者なり（二五―二六）

我が心、我が思考の力、渾てを以て爾に歸依す、爾は一切の罪より我を救ふて、吾に恩寵を與へ王へ、（二七）

大體の見當がつけばよいといふ方針で、漢本との比較上極めて明了の所だけ譯し、大部分を略した。詳密の比較研究及梵文の釋義などは其內、時機を見て再び江湖の敎に與かることゝする。

剛瑜伽の上乘を理解すべき第一の秘鑰として先づこの原始的根元的の考査を怠ることは出來ぬ。吾々は玆に於てか、今パーリ聖典に就きて、この秘鑰の一片を提示して見よう。

三

パーリ聖典、特に後代に屬する聖典中には教理的にも儀式的にも秘教的要素は可成に豐富である。然し、今は唯、聖典史の資料を提供するに止めて、教理方面の交渉は他日に讓ることゝする。

聖典史的に見た原始密教の資料も決して乏しくはないが、但し今は其最も重要と認むるもの三箇を擧げたいと思ふ、一は原始的の呪法を說いた律藏及增一阿含の文と、二は長含中の大會經、三は同じ阿含に屬する阿吒那智經である。第一は孔雀經の根本資料をなすもので、原始密教經典の資料として最も貴重のものである。第二の大會經は四天王及其眷屬夜叉龍鬼等の守護を說いたもので、是又原始的曼陀羅の古態を傳ふるに足る。第三の阿吒那智經は第二から發達したもので特に毘沙門天王を中心とし四天王の德相と其眷屬とを描寫して、佛道修行者の守護を說く。此等の密教要素の多い聖典に、古代から南方佛教に於ても、特別に之を取扱つて、之に Paritta 若くは Parittam の名を與へて別して尊敬する。パリツタは梵語の Paritra で擁護豫防等の義があるが、漢澤では「明護」と譯してある。卽ち明呪擁護の義である。これは古經にも本生經も出る頗る古い名であるが、現今では此等特殊の經典を特に經藏から拔萃してパリツタ全集が（丁度陀羅尼集經と云ふた工合に）が出來て居て、盛に

るの如く、秘密莊嚴の爛熳と咲き出た大曼陀羅の花は、業に既に增一や長含に其不可思議の金剛の種子を萠しておつた。吾々はこの點に關して玆に原始的の秘密聖典として阿含諸經につきその原形を撿討したいと思ふ。學壇是非の批判喧しき大村西崖居士の『密教發達志』も、この方面につきては、尙研究の餘地を存してある様に思ふから、

二

吾々は歐米多數の佛教學者、若くはその糟粕に甘ずる一部の本邦學者を學びて、パーリ聖典の盲信論者を以て得々たるのではない。現在の南傳パーリ三藏が最純最古最眞のもので、何事も之に規準を置かんとするほど御芽度ひ考は持つ必要は毛頭ない。否、寧ろ之と反對に現存の南傳三藏の中には、確に漢譯藏經のあるものに比して、遙かに新しきものあるを證明すべき幾多の材料を有する。夫の有名な那先比丘經(ミリンダパンハ)の如き、長阿含の如き、大體から見ると、漢本の方にその古態を存することは、爭ふべからざる事實である。

故に絶待無批判に法華や無量壽經は、パーリの增一や雜阿含よりは新しいものである、密教などは無論夫よりは更に新しいなどといふ議論は、要するに皮相の獨斷たるに過ぎぬ。但し大體上の聖典史的發達から觀察して觀ると、天台の教理史的發展觀のように、內容の點も形式の點も、佛教發展の第一階段として阿含を認むべきことは殆ど議論の餘地のないことだ。換言せば顯密禪淨の諸要素は、悉く素朴の阿含の中に包含されて居る。故に金

護全集には之が Khanda-Pritta の名で收められてある。

漢本では之に相當する類文が、諸部の律藏に散見する。文相に多少の出入はあり相違も少くないが明かに同一の根元を示して居る卽ち、

十誦律卷二十六（縮藏　張二、五二表）

僧祇律卷二十（縮藏　列九、三八裏）

四分律卷四十二（縮藏　列五七、三表）

の他にも檢索したら尙あることゝ信ずる。

今此等の類文を詳細に比較することは他日に讓り、此實例として最も原始的と考へらるゝパーリの律文を一瞥しよう。

爾の時。一比丘あり蛇に嚙まれて死しぬ。比丘衆、此事件を世尊に白しぬ。

（世尊曰はく）比丘衆よその比丘は碓に四龍王族に對して慈心を起さざりしならん。若彼然かなせしならんには、蛇に嚙まれて死することは是あらざりしならん。四龍王族とは何ぞ。毘樓博叉 Virupakkha 龍王族、醫羅波多 Erapatha 龍王族、舍婆子 Chabyāputta 龍王族、黑瞿曇、Kanhag otamaka 龍王族是なり。彼比丘は實に此等四龍王族に對して慈心を起さざりしならん。若彼しかなせしならんには蛇に嚙まれて死せざりしや必せり。比丘衆よ、四種龍王族に對し慈心を起すに由りて、爾等の安全と保護との爲に、護身咒 Atrapatita を持すこと許す。

毘盧博文我慈念　醫羅畔拏常起慈

錫蘭や緬甸で祈禱のために使用されつゝある。フランクフルテルのパーリ文法は練習用の付錄としてこの明護集全部を出版してある。

實を云ふと所謂原始佛教では、呪法占星その他の秘密の教式行儀に對して、嚴重に之を禁止してある。律の中には佛陀が之を彈訶されて、畜生の智識 Tiracchana-vijjā とまで斥けられてある（小品、第三十三、二）日本で云へば先下劣の猿智靈とでも云ふべき所であらう。漢本四分律の『世俗の呪術を誦習するものは波逸提』の犯戒になるといふ、明了の法規も學人の知る所だ。然るに其律藏の一方にはパリツタの持咒が嚴然として說かれて居る。經中にも神明擁護が盛に僧團の信仰を集めて來る。これは人間宗教情性の中に打消すことの出來ぬ。秘密的意識が潜在して、時に應じて不可抗に發現するを示したに過ぎぬ。開發進展した大乘佛教から密教要素を取り去ると、頗る落莫萬條たる殺風景のものと化する樣子、原始形態の阿含諸經に於てもこの人性本然の要求、本具の性德は、牢として拔くことの出來ぬ强い根底を持つて居る。

四

第一に擧げんとする資料は南本毘那耶小品第五の六（刊本小品、一〇九頁、英譯東方聖書大集第二十、七五頁）と、之と同文の增一阿含の四法品第七 Patta-Kamma-vagga 第六十七經のそれである。本生經大集の第二百三番にも之を採りて本生譚の形式にしてある（刊本第二卷、一四四頁、英譯第二卷一〇〇頁已下）。後代の明

明了な一つは龍王の列名の變化である、パーリ原形の四龍王（多分四方護國に象つた）が八龍王と增し、遂に孔雀王經の四十餘に增した跡が左の表で分る。

パーリ律文	4
僧德律	4
十誦律	8
四分律	3
漢本雜含*	8
古本孔雀王經	8
新本孔雀王經	40

此最中も面白いのは星點を付した漢本の雜念卷九の文である。（辰二、五十）之はパーリ雜含の忩四部第一分六十九の Upasena Sutta と、前に擧げてパーリ律文の蛇咬說呪とを合一して出來たものだ、即ちパーリでは優波先那（ウパセイナ）といふ比丘が蛇に螫され死せんとするとき、舍利子の慰藉を受け、同尊者から六根六識の我我所なきを聽聞して得果した事が書いてある。漢本は之に前の律文の說呪を加へてある。而して其上に御丁寧に『呪術章句』まで說いてあつて、優波先那がこの偈と說呪とを知らなかつた爲に、不幸に陷つたと說いてある。その『呪術章句』は左の通の陀羅尼である。

塢躭婆隷　躭婆隷躭陸　波羅躭陸　捺滯　肅捺滯　枳跋滯　文那滯　三摩移檀諦　尼羅枳施　婆羅拘閇塢隷
塢娛隷　悉波訶

この陀羅尼に就きての討究は今略するが、兎に角立派な秘密聖典である。この經は宋代に單本として施護が

我慈念舍婆弗多　黑喬苔摩我慈念
無足衆生我慈念　二足衆生亦我慈
四足衆生亦復念　多足衆生我慈念
二足衆生莫害我　二足衆生莫害我
四足衆生莫害我　多足衆生莫害我
常令一功德衆生　及餘一切合生類
常見一切養徵祥　勿覩違惰罪惡事

佛陀無邊、達磨無邊、僧伽無有邊、爬行類邊、蛇蠍、百足、蛛蜘、蜴、鼠は有邊、吾が擁護をなせ、我が守護をなせ、一切衆生をして退かしめよ。我茲に七佛世尊を敬禮す。

頌文の部分は故らに不空譯の孔雀王經の字面を取つた。中に全く譯文を借用した部分もある。讀者はこれ丈の律文を見て直に濃厚な密教的の色彩を感ぜずに居られまい。この文が卽ち一面は南傳の本生經となり、他面には北傳孔雀王經の骨子となつた。密教の研究家には寛空寛朝已來、仁和寺諸法將の名を擧げずとも此有名な而もフアミリアルな秘典に對して、別に本文比較などの贅事をなさずとも、直に其根原につき默會せらるゝことゝ信ずる。

尤も此律文が孔雀王經の原材として純粹密經となるまでには、幾多の迂餘曲折を經て勿論耶柔や阿闥婆史詩などの、婆羅門要素の外的影響も受け、變化增廣が誦傳の際に至はれたこと丈は一寸記してよからう、この痕跡の

大會經の內容は、佛陀迦毘羅城大林に住し玉ひし時、四淨居天來りて偈を說き、佛德を讚嘆するに初まり、十方の諸天神善神の來集を舒述する。大會經の名ある所以だ。世尊は此等來集の天神鬼將の名を、莊嚴の三十三頌の偈文で說かれた、長含漢本は此部分の澤、甚だ明を缺いて拙劣であるが、法天の重譯單本大三摩惹經（昃十、八五已下）は文極めて簡なるも、比較的に要領を得て居る。

佛陀大法宣說の爲に、天神龍鬼悉く集り來り、佛陀は之に大法を受持して、勇獲決定無畏なること獅子の如くならんことを敎へ玉ひ、次で夜叉の代表的列名が始まる。雪山、娑多山、婆須密、金毘羅、等が各數千の鬼衆を領して來集するを說き、其德相を擧げる、次で東方の持國天王を首として、南西北方の神王を擧げ、更に佉闥婆、龍族、金翅鳥、阿修羅諸天及び幾多の天女梵天の名を擧げてある。

大會經の說相は斯の如きものだ、是が護法諸天夜叉龍鬼の大曼荼羅、パーリ聖典の世尊大三昧裡の曼荼羅、雄大な釋迦曼荼羅でなくて何であらう。大日經で完美に展開した胎藏曼荼を驚嘆するものは、先づこの釋迦院と外金剛部丈の原始の曼陀羅に、高く眼睛を集めて硏究し來る必要がある。

大會經は期の如くして、第一資料が、秘密聖典の原型たるに對し、綜合大成された、雄大なパンテヲンの原本であるが、同時にこの大會經の偈文が、原始秘典に及ぼした影響は頗る大きなものであつた吾々は繁冗を避くる爲に、たつた一つの實例文を出して、擧一明三の賢明の讀者の類推を占はう。

『隨勇尊者經』の名で譯して居る、大體は古譯と差異せぬが、陀羅尼は著しく變つて、殆ど別物である。玆處にも一つ面白い秘密聖典史的の發展が暗示される。即ち陀羅尼の變化性（フレキシビリテー）といふことだ。

パーリ律文の說呪の後に、三寶と七佛との敬禮が說いてあるが、これはパーリ聖典を通した、秘教的聖典の根源である。本生經中の孔雀本生、即ち、後代明護集の Mora-paritta 其他の呪文は、この三寶七佛で出來上りて居る、密教の原始時代にこれが中心本尊であつたのは言ふまでもない。『七佛諸世尊、威光滅諸毒』の思想は、孔雀王經を主として、原始秘密經典の中心觀念であつた。

五

吾々は今第二材料に遷る、これは諸天善神中心の信仰である。主觀的行者の觀心として、大慈悲 Metta を客觀的本尊の對象として、七佛三寶を中心とした、原始の秘密思想に次ぎて、佛法擁護、行者守護の爲に四王其他諸天善神の信仰が發展するに至つた。佛教の藝術研究家はバルフート其他の古代彫刻に毘沙門心吉祥天等の像を見るが、この佛法守護諸天善神の崇拜はずつと前の經典で證明出來る。それの最も完全に發展したものが即ちパーリ長含中の大會經、Mahāsmaya-Sutta である。此の經文は漢本長含の中にも存じ、グラムボオーリの九經での公刊、フランクフルテルの文法の付錄、吾が高楠教授の巴利語講本での漢本との對校等で、相應に學界に知られて居る經典である。

は一切有部に近ひ上座部系の誦傳であつて、漢本は曇無德所傳のものであつたからである。蓋し漢本長含の譯者は、曇無律を飜した佛陀耶舍であるから、多分曇無德部では此經を傳へなかつたのであらうといふ想像はつく。然し有部では明かに此經を聖典として尊重して居る。有部律の文に持誦すべき經文の例として、多く長含に屬する經名十八種を擧げてある中に、明かに摩訶娑摩嗇劔 Mahāsamayakam（大會經）と阿吒耶吒劔 Aṭānāṭikam の兩者が見られる（律卷二十四、張四、五八）。又一切有部の盛に行はれた中央亞細亞に近時本經の斷片が出た。此等の事實に徵すると、本經は有部其他の上座系には盛に用ゐられたものと見へる。善見律の中には明に病者の爲めに、本經を讀みて祈禱すべきことが規定してある。

若國王及聚落大檀越有病者、遠人至等、請比丘、爲說呪、比丘爲說阿吒那吒。

が之は今で錫蘭や緬甸で信者の家庭に盛に行はれて、秘密修法の一面を示しつゝある。この重要な本經の內容は概說すると左の通りであるが。

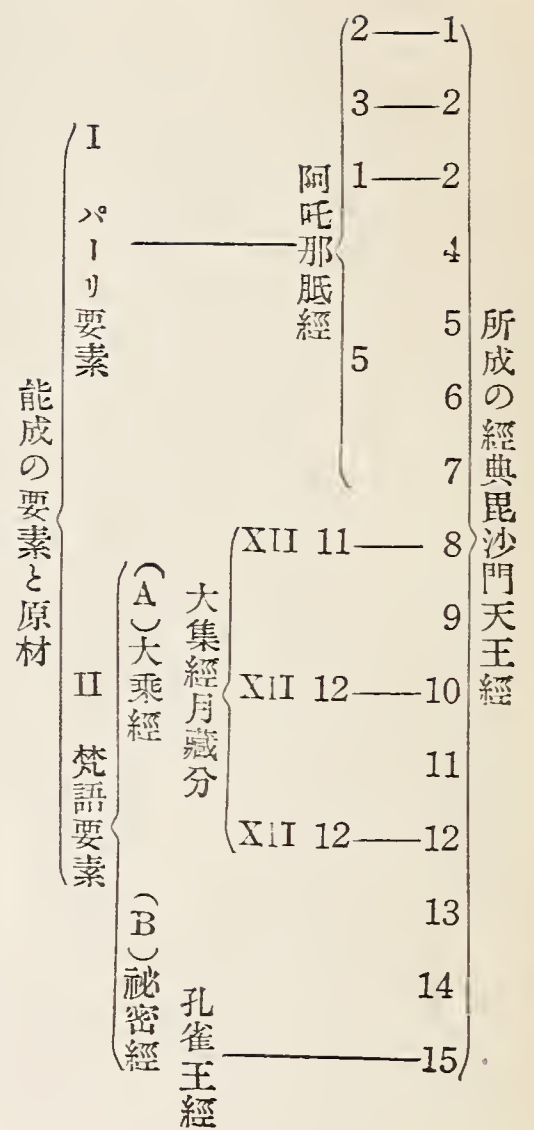
世尊一夜靈鷲山に在しゝとき四天王其眷屬を引率して來詣し、四隅に其座を占む、此等引率せる鬼神等が佛陀に對する態度は、種々にして或は佛を禮するあり、或は默して禮を施こさゞるあり、時に毘沙門天王世尊に白さく、大力及劣勢の鬼神等或は歸佛正信のものあり、又頗る佛陀に反戻する不逞の徒あり、蓋し彼等が佛陀に反抗する所以は、世尊が禁戒を制し玉ひしに不滿なるに由れり、彼等不滿の惡鬼等、佛弟子が林間曠野人なき所に於て修行するとき、常に之を亂惱せんと欲す、故に僧俗男女は阿吒那胝の明護を受持する必要あり是を以て今世尊の聽許を、得てこの明護を說くを得んと、世尊默然として之を許し給ひしかば彼卽詩體を以て阿吒那胝經を說き初めぬ。其頌五十五偈あり。

パーリ大會經	孔雀王經梵文	不空譯孔雀王經中
Kumbhīro Pajagahiko	Kumbhīraraksa Rāyagrhe	金毘羅夜叉、住經王舍城
Vepullassa niavesanam	Vipulesmin nioasikat	常在　富羅有大軍大力
Bhiyo satashassam	Bhuyah satasahasrena	萬俱胝夜叉
Yakkāhnam paryirapasati	Ya' sanām paryupasyate	而爲其眷屬

今一つ前に付加へて置きたいことは、漢本長含の大會經は、前略說した鬼神夜叉天女等の名を。悉く『兕』となしたことである。密敎的思想は、玆に濃厚を加へて居ることを示して居る。

六

吾々は第三の最後の材料に急がう。是卽ち長含の阿吒那智 Ātānatiya 經である。この經はパーリ長含の第三十二に收められてあるが、漢本には全然之を缺如して居る。但し支那に此秘密敎典史上極めて重要なる經典が知られぬかと云ふのと、實は此經は單本として一度飜譯されたことがあつた。開元錄の第九卷に福生三藏が阿胝那智經一卷を龍朗三年（西曆六六三）に譯したことが載せてあるが今惜哉傳はつて居らぬ。然し此經の後身とも云ふべき、後代密敎の一秘典が最有して居るから、漢譯で其彿は窺ふことが出來る。

何故漢譯長含に此經がないかと云ふと、それは恐らく宗派的の誦傳關係の不同に歸しよう。卽ち現存のパーリ

七

吾々は已上三箇の重要な材料で、兎に角、パーリに於ける秘教傾向及其萠芽を見ることを得た。密教に於ける根本觀念として、第一資料から大慈悲と大恭敬、卽ち、大慈攝取の理觀と禮散諸佛、供養三寶の敬虔の事相を見た、後世複雜極まる教相事相の源泉は、正にこの平正にして而も簡明なる大道に之を覓め得る。第二の釋尊中心の諸天龍鬼の大會は、卽ち後代大曼荼羅の原本で、特に胎藏系の動かすべからざる綜合精神の初歩を認める。第三は事相發展、別尊開出の後代密教の萠芽をなすもので、別尊曼陀羅の先を爲すものである。第一資料を孔雀經其他原始的の小部雜密の先驅とすれば、第二は朧げながら後代に花を開いた大日經あたりの綜合大經の紛本を玆に窺ひ得るのである。第三は卽ち、宋代密教の曼球師利や焰曼德迦や摩訶迦羅や多羅や不空羂索などの別尊供養

此經が實に前の大會經から轉化したことは、種々の點から明かに證明される、又曇無德部所傳の長含に之を缺いて居るのを見ても、其餘程後代の誦出であることが明了であるが、大會經で天神龍鬼の統攝融合に對して、玆では毘沙門天王を中心として四王丈の特別の守護が說かれてあが、大會經で天神龍鬼の統攝融合に對して、玆では毘沙門天王を中心として四王丈の特別の守護が說かれてある。之は後代密敎の別尊分科發達の本源と示すものであつて、特に注意すべき原始的の秘經である、此經は無論原始の諸秘經に聖典的の材料を與へて居るのは言ふまでもないが、後代密敎の代表秘典の一として擧ぐべき、法天譯の毘沙門天王經が、殆ど全部阿吒那胝經を襲用し、之に他の顯密諸經を配合したことが特に重要だ。同經の成立要素を圖示して見ると左圖の通りである。圖は毘沙門經を十五小段に分科して其相當の部分を捻じ正結果を示したものである。

阿吒那胝經が、毘沙經に於ける別尊發展の基礎となつて、其主要部分を占めつゝあることは、此圖で明であらう。

〔附錄〕 歐文著書論文目錄

(1) Der gegenwärtige Stand der Japanischen Religion. (*Résumé*)
(Verhandlungen des II. Kongress für allgemeine Religionsgeschichte, SS. 102—107)
—— in Basel 30. August bis 2. Sep. 1904 ——

現代日本宗教の立場（摘要）
（第二回一般宗教史會議錄 102—107頁）
——於バーゼル1904年8月30日より9月2日に至る——

(2) A Chinese collection of Itivuttakas.
(J. P. T. S. 1906—7, pp. 44—49)

本事の支那集錄（巴利佛典出版協會報 1906—7年 44—49頁）

(3) The oldest record of the Rāmāyana in a chinese Buddhist writing (*Mahāvibhāsā*)
(J. R. A. S. 1907, pp. 99—103)

漢譯佛典〔大毗婆沙論〕に於ける羅摩衍那の最古の記錄
（英國亞細亞學會誌 1907年 99—103頁）

(4) A Chinese text corresponding to parts of the Bower Manuscript.
(J. R. A. S. 1907 pp. 261—266)

バワー氏採集古寫本の一部に適合する漢譯書
（英國亞細亞學會誌 1907年 261—266頁）

(5) The Nepalese Nava Dharmas and Their Chinese translation.
(J. R. A. S. 1907, pp. 663—664)

法の純地を與へたものといふてよい。時代から云へば三資料中第一は最も古く、第二は稍新く、第三は最も新しい別はあるが、勿論互に錯綜交絡して、原始的の秘密經典を組立て織り出した。然しその特色が又密教の聖典曼陀羅事相の三方面を代表して居る所に不盡の味がある。吾々は之に關し尙論ずべき種々の點もある。更に密教發展の時期分界に關しても、進みて大に論ずべきだが、次回筆を改めて教を讀者に乞ふことゝしよう。尙本稿は主として原始密經の內面要素たるパーリ方面卽內因を研究したのだが、之が外的要件卽外緣たる、吠陀及其附屬文學、並に史詩特に摩訶婆羅多の影響も實は、同時に論ずべきだが、餘り錯雜するから、之丈切り離して置いた。この部分も時期を待ちて公表したいと思ふ。

大正九年五月二十九日、大村西崖君學士院受賞式に臨む前夜急に此稿を纏めて、同君に對する祝賀の一端とする。

昭和八年四月廿五日印刷
昭和八年五月一日發行

壺月全集 上卷
定價金參圓
（上・下兩卷にて金五圓五拾錢）

編輯兼發行者　壺月全集刊行會
東京市芝區芝公園地七ノ一〇
右代表者　岩野眞雄

印刷者　荻原芳雄

印刷所　荻原印刷所
東京市牛込區山吹町一九八

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番（大東出版社內）
壺月全集刊行會
電話芝二一一六番
振替東京三四二六七番

（兩角製本所）

ネパールの九法と其支那譯　(英國亞細亞學會誌 1907年 663—664頁)

(6)　Aśvaghoṣa and the great Epics
(J. R. A. S., 1907, p. 664)
馬鳴菩薩と大史詩　(英國亞細亞學會誌 1907年 664頁)

(7)　The story of Kalmāsapāda and its evolution in Indian Literature.
——A study in the Mahābhārata and the Jātaka—— (1909, pp. 236—310)
印度文學中に於ける斑足王物語と其發達
——マハーブハーラタと本生經の研究——
(巴利佛典出版協會報 1909年 236—231頁)

(8)　Two Notes on the Buddha-Carita.
(J. P. T. S. 1910. pp. 108—111)
佛所行讃中二つの覺え書
(巴里佛典協會報 1910年 108 - 111頁)

(9)　Die Bhadracari, eine Probe buddhistische-religiöser Lyrik untersucht und herausgegeben, von Kaikyoku Watanade. (Leipzig 1912.)
普賢行願讃——佛教抒情詩の調査
(1912年ライプチッヒ市ハラソーキッツ出版)

(10)　Studien über die Mahāmayūri.
大孔雀王經の研究　(明治四十五年一月一日宗教大學校友會發行・𦷷葉集)

(11)　大乘佛教と兒童教化序　(大正九年十月佛教少年聯合團發行. The Mahayana Buddists And Their Work For Children. 1—14頁)